高知空港拡張整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田村遺跡群

第10分冊

1986

高知県教育委員会

田村遺跡群

第10分冊

本文X

例　言

1．本書は、高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財―田村遺跡群―の発掘調査報告書15分冊の内、第10分冊である。

2．調査は、運輸省第三港湾建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。調査期間は、昭和54～58年に発掘調査、昭和58～60年度に整理作業及び報告書作成を行い、7年間にわたった。

3．遺跡の名称としては、調査対象地の大部分から各時代の遺構や遺物を検出しており、調査区も多いため、これを一括して田村遺跡と呼ぶこととした。また、各調査区はLoc. 1～48と呼称した。

4．本書の作成にあたっては、本文執筆、図版作成、写真撮影等の作業を各調査区を担当した調査員が行い、各時期、時代についても担当者を決め、これをまとめた。編集は高知県教育委員会である。

5．発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、顧問岡本健児教授（高知女子大学）には、御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。

6．図中の方位はすべて磁北であり、標高は海抜高である。遺構図の縮尺は、竪穴住居址、掘立柱建物址、柵列を1/80、その他の遺構、断面図及びセクション図を1/60とした。遺物実測図の縮尺は、原則として土器については、縄文・弥生時代を1/4、古墳時代以降を1/3、石器、金属器を1/2、木器を1/3とした。写真図版は約1/2～1/3であるが縮尺不同である。

7．遺構の略号は、竪穴住居址－ＳＴ、掘立柱建物址－ＳＢ、土坑－ＳＫ、溝－ＳＤ、井戸－ＳＥ、柵列－ＳＡ、水留り状遺構－ＳＰ、性格不明遺構－ＳＸ、ピット－Ｐ、自然流路－ＳＲとした。

8．調査期間を通じて多くの方々、諸機関に御協力、御援助をいただいた。各々の名称はあげないが、記して感謝する次第である。

9．出土遺物その他の資料については、高知県教育委員会が保管の任にあたっている。

本 文 目 次

1．Loc. 40 …… 1

2．Loc. 41 …… 117

3．Loc. 42 …… 161

4．Loc. 43 …… 335

5．Loc. 48 …… 363

6．中～近世小結 …… 419

7．総括Ⅱ …… 459

8．人骨鑑定 …… 467

挿 図 目 次

1．Loc. 40

第 1 図　調査区設定図

第 2 図　ＳＢ 1 ・ 2

第 3 図　ＳＢ 3 ・ 4

第 4 図　ＳＢ 5 ・ 6

第 5 図　ＳＢ 7 ・ 8

第 6 図　ＳＢ 9 ・10

第 7 図　ＳＢ11・12

第 8 図　ＳＢ13・14

第 9 図　ＳＢ15・16

第10図　ＳＢ17・18

第11図　ＳＢ19・20

第12図　ＳＢ21・22

第13図　ＳＢ23・25

第14図　ＳＢ24・26

第15図　ＳＢ27・28

第16図　ＳＢ29

第17図　ＳＢ30・31

第18図　ＳＢ32・33

第19図　ＳＢ34・35

第20図　ＳＢ36・37

第21図　ＳＢ38・39

第22図　ＳＢ40・41

第23図　ＳＢ42・45

第24図　ＳＢ43

第25図　ＳＢ44

第26図　ＳＢ46

第27図　ＳＢ47・48

第28図　ＳＢ49・50

第29図　ＳＫ 1 ～ 6

第30図　ＳＫ11・15～19

第31図　ＳＫ20～24

第32図　ＳＫ25～28

第33図　ＳＫ29～31

第34図　ＳＫ32～37

第35図　ＳＫ38～42・44・46・47・50

第36図　ＳＫ51～55・57

第37図　ＳＫ56・58～60・62・63

第38図　ＳＫ64～69

第39図　ＳＫ70～72・74～76

第40図　ＳＫ73・77～81

第41図　ＳＫ82～85

第42図　ＳＫ86～91

第43図　ＳＫ92～98・100・101

第44図　ＳＫ102～106・108

第45図　ＳＫ110～116

第46図　ＳＤ 1 ・ 2

第47図　ＳＤ 3 ～ 6

第48図　第Ⅰ～Ⅲ層、ＳＢ11・13・14・24・26・29・31・42出土遺物

第49図　ＳＫ14・21・30・38・51・58・70・89・124出土遺物

第50図　ＳＫ89・92・93出土遺物

第51図　ＳＫ93・99・101・105・106・109・110・121出土遺物

第52図　ＳＤ 1 出土遺物

第53図　ＳＤ 1 ・ 2 出土遺物

第54図　ＳＤ 3 ・ 5 ・ 6 出土遺物

第55図　ＳＰ 1、Ｐ 1 ・ 2 ・ 4 ・ 9 ～16出土遺物

第56図　ＳＫ55、ＳＤ 1、ＳＰ 1、Ｐ 2 ・13出土遺物

第57図　ＳＫ108、ＳＰ 1、Ｐ 1 出土遺物

2．Loc. 41

第58図　調査区設定図
第59図　調査区セクション
第60図　ＳＢ１・２
第61図　ＳＢ３・４
第62図　ＳＢ５・６
第63図　ＳＢ７
第64図　ＳＢ８・９
第65図　ＳＢ10・11
第66図　ＳＫ１～７
第67図　ＳＫ８～13
第68図　ＳＫ14～19
第69図　ＳＫ20～24
第70図　ＳＫ25～29
第71図　ＳＫ30～32
第72図　ＳＫ33～36
第73図　ＳＫ37～42
第74図　ＳＫ43・44、ＳＤ２～５・７～10
第75図　第Ⅱ層、ＳＢ６・７、ＳＫ５・７出土遺物
第76図　ＳＫ20・27・33、ＳＤ２出土遺物
第77図　ＳＤ２・７、Ｐ１・２出土遺物
第78図　ＳＤ２出土遺物
第79図　ＳＫ５・24出土遺物
３．Loc. 42
第80図　調査区設定図
第81図　調査区セクション
第82図　〃
第83図　〃
第84図　〃
第85図　ＳＢ１・２・４
第86図　ＳＢ３・５
第87図　ＳＢ６・８
第88図　ＳＢ７・９
第89図　ＳＢ10・11
第90図　ＳＫ１～５・８
第91図　ＳＫ９～15
第92図　ＳＫ16～19
第93図　ＳＫ20～23
第94図　ＳＫ24～29
第95図　ＳＫ30～34・37・38
第96図　ＳＫ36・39～42
第97図　ＳＫ43～45
第98図　ＳＫ46～49
第99図　ＳＫ50～52
第100図　ＳＫ53～57
第101図　ＳＫ58・60～62
第102図　ＳＫ63～67
第103図　ＳＫ68～72・74
第104図　ＳＫ73・75・76
第105図　ＳＫ77～79
第106図　ＳＫ80・83～87
第107図　ＳＫ81・82
第108図　ＳＫ88～92
第109図　ＳＫ93～95・97・99
第110図　ＳＫ98・100～102
第111図　ＳＫ96
第112図　ＳＤ１～８
第113図　ＳＫ30・32、ＳＤ３～５・７・９・10・12～14
第114図　ＳＥ１
第115図　第Ⅲ層、ＳＢ10出土遺物
第116図　ＳＫ１・３・４・11・20～22・25・26出土遺物
第117図　ＳＫ27・33～35・37・52出土遺物
第118図　ＳＫ58～60・68・73・75出土遺物
第119図　ＳＫ75・77・80・81出土遺物
第120図　ＳＫ96出土遺物
第121図　〃

第122図　ＳＫ96出土遺物
第123図　ＳＫ96・97・99、ＳＤ１出土遺物
第124図　ＳＤ２出土遺物
第125図　〃
第126図　〃
第127図　〃
第128図　〃
第129図　〃
第130図　〃
第131図　〃
第132図　〃
第133図　〃
第134図　〃
第135図　ＳＤ２～４出土遺物
第136図　ＳＤ７出土遺物
第137図　〃
第138図　〃
第139図　〃
第140図　〃
第141図　〃
第142図　〃
第143図　〃
第144図　ＳＤ７・９出土遺物
第145図　ＳＤ９・13出土遺物
第146図　ＳＤ13出土遺物
第147図　〃
第148図　ＳＤ13～15出土遺物
第149図　ＳＤ15・16、ＳＥ１、Ｐ１出土遺物
第150図　ＳＫ58・81、ＳＤ２・７出土遺物
第151図　ＳＫ52、ＳＤ７出土遺物
第152図　ＳＤ７・９出土遺物
第153図　ＳＤ７・９・13出土遺物
第154図　ＳＫ81、ＳＤ７出土遺物
第155図　ＳＫ81、ＳＤ12出土遺物
第156図　ＳＫ17・25・81、ＳＤ２・７出土遺物
第157図　ＳＫ60、ＳＤ15、ＳＥ１出土遺物
第158図　ＳＤ15出土遺物
第159図　ＳＤ15、ＳＥ１出土遺物
第160図　ＳＥ１出土遺物
第161図　ＳＫ60、ＳＥ１出土遺物
第162図　ＳＫ20～22・37・62・122出土遺物
４．Loc. 43
第163図　調査区設定図
第164図　ＳＫ１～４
第165図　ＳＫ５～９
第166図　ＳＤ１セクション
第167図　〃
第168図　ＳＤ１
第169図　ＳＤ１出土遺物状態、ＳＤ２～９
第170図　ＳＫ１・２出土遺物
第171図　ＳＫ５・８～10、ＳＤ１出土遺物
第172図　ＳＫ10、ＳＤ１・３出土遺物
第173図　ＳＤ１出土遺物
５．Loc. 48
第174図　調査区設定図
第175図　ＳＢ１・２
第176図　ＳＢ３・４
第177図　ＳＢ５・６
第178図　ＳＢ７・８
第179図　ＳＫ１～４
第180図　ＳＫ５～９
第181図　ＳＫ10～15
第182図　ＳＫ16～21
第183図　ＳＫ22～26
第184図　ＳＫ27～31

第185図　ＳＫ32～37
第186図　ＳＫ38・39
第187図　ＳＫ40・41
第188図　ＳＫ42・43
第189図　ＳＫ44・45
第190図　ＳＤ１～５
第191図　ＳＤ６～12・14～16
第192図　第Ⅲ層出土遺物
第193図　ＳＢ４・８、ＳＫ１・３・４出土遺物
第194図　ＳＫ11・22・23出土遺物
第195図　ＳＫ26～28・31・38出土遺物
第196図　ＳＫ41・44、ＳＤ１・４・６・７・９出土遺物
第197図　ＳＤ14・15、Ｐ１～４出土遺物
第198図　ＳＫ６・22・24・26出土遺物
第199図　ＳＫ24・28出土遺物
第200図　ＳＫ27・28・34出土遺物
第201図　ＳＤ１出土遺物
第202図　〃
６．中～近世小結
第203図　土師質土器小皿分類表
第204図　土師質土器皿分類表
第205図　土師質土器杯分類表
第206図　土師質土器鍋分類表
第207図　瓦質土器鍋分類表
第208図　ＳＨ分布図
第209図　ＳＨ１・２
第210図　ＳＨ３～５
第211図　ＳＨ６～９
第212図　ＳＨ10～12
第213図　ＳＨ13・14
第214図　ＳＨ15～17
第215図　ＳＨ18～21
第216図　ＳＨ22～25
第217図　ＳＨ26・27
第218図　ＳＨ28・29
第219図　ＳＨ30・31

表 目 次

1．Loc. 40
第1表　掘立柱建物址計測表
第2表　土坑計測表
第3表　包含層出土土器観察表
第4表　遺構出土土器観察表
第5表　遺構出土石器観察表
2．Loc. 41
第6表　掘立柱建物址計測表
第7表　土坑計測表
第8表　包含層出土土器観察表
第9表　遺構出土土器観察表
第10表　遺構出土石器観察表
3．Loc. 42
第11表　掘立柱建物址計測表
第12表　土坑計測表
第13表　包含層出土土器観察表
第14表　遺構出土土器観察表
第15表　遺構出土石器観察表
第16表　遺構出土金属器観察表
第17表　遺構出土木器観察表
第18表　遺構出土古銭観察表
4．Loc. 43
第19表　土坑計測表
第20表　遺構出土土器観察表
第21表　遺構出土石器観察表
第22表　遺構出土木器観察表
5．Loc. 48
第23表　掘立柱建物址計測表
第24表　土坑計測表
第25表　包含層出土土器観察表
第26表　遺構出土土器観察表
第27表　遺構出土石器観察表
第28表　遺構出土木器観察表
6．中～近世小結
第29表　Loc. 42 SD 2 出土土師質土器法量
第30表　Loc. 42 SD 7 出土土師質土器法量
第31表　Loc. 42 SK96出土土師質土器法量
第32表　SH 1 ～31の概略
第33表　掘立柱建物址の面積別棟数
8．人 骨 鑑 定
第34表　出土骨片一覧表

写 真 目 次

写真1　No. 1～10
写真2　No. 11～35
写真3　No. 36～42

1. Loc. 40

Loc. 40

1．位置と調査経過

Loc. 40は、田村遺跡群の中央部のやや北西寄りに位置しており、小字は桑ノ本（クワノモト）である。当調査区は、昭和56年度に実施された試掘調査により、16～18世紀の多数のピット群や土坑群、及び溝等の遺構の存在が確認されたが、土地買収等の手続きの関係で、調査は３次にわたり実施せざるを得なかった。

第１次の調査は、調査区の西半部を対象として実施し、調査期間は、昭和56年６月30日～８月４日の約30日間であり、調査面積は960㎡であった。

第２次の調査は、調査区の北東部を対象として実施し、調査期間は、昭和57年２月１日～２月22日の約20日間であり、調査面積は1,630㎡であった。

第３次の調査は、調査区の南東部を対象として実施し、調査期間は、昭和58年２月21日～２月24日の４日間であり、調査面積は1,580㎡であった。

当調査区の調査期間の延べ日数は、約60日間であり、最終的な調査面積は、約4,170㎡であった。

2．調査概要

Loc. 40は、前記の通り、３次にわたり調査が実施され、調査区の西半部と北東部で、３区画の溝に囲まれた屋敷跡が検出された。

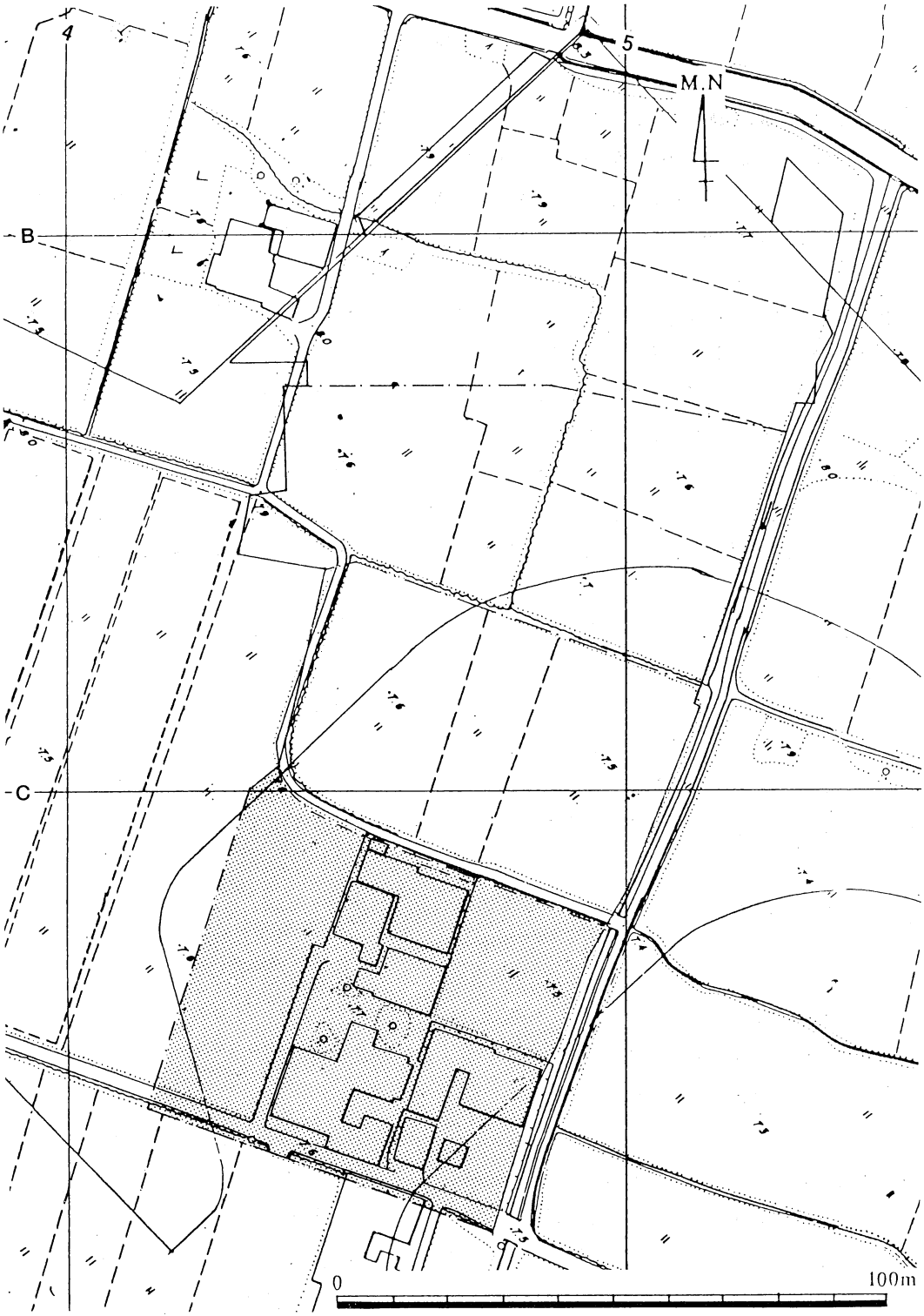
掘立柱建物址は、調査区の西半部と北東部に集中して存在する傾向がみられ、全て溝の区画内に存在した。土坑群は、調査区に散在して分布するが、性格不明のものが大半を占めた。

3．層序と出土遺物

Loc. 40の基本的な層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　灰褐色粘質土層
第Ⅳ層　黄褐色粘質土層

第Ⅰ層は耕作土で、ほぼ水平な堆積をしており、伊万里系ぐい呑み（２）等の遺物が出土した。第Ⅱ層は床土で、調査区全域にはみられず、土師質土器杯（１）等の遺物が出土した。第Ⅲ層は灰褐色粘質土層で、中世の遺物包含層であるが、全域には堆積していなかった。第Ⅲ層からは土師質土器鍋（４）、備前擂鉢（５）、青磁碗（３）等の遺物が出土した。第Ⅳ層の黄褐色粘質土層は、中世の遺構検出面で、無遺物層であるが、全域に堆積がみられた。



第1図　調査区設定図

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－72°－Ｗであるが、北辺西部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.46ｍを測り、柱間距離は1.64～1.82ｍである。桁行は4.76ｍを測り、柱間距離は1.28～1.78ｍである。柱穴は、直径22～30㎝、深さ15～44㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－74°－Ｗであるが、南辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は1.60ｍを測り、柱間距離は1.33～1.60ｍである。桁行は3.42ｍを測り、柱間距離は1.67～1.75ｍである。柱穴は、直径16～28㎝、深さ12～20㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ２は、南部でＳＢ３を切っており、ＳＢ３より新しい時期の建物址である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－76°－Ｗであるが、南辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.05ｍを測り、柱間距離は1.02～1.98ｍである。桁行は4.64ｍを測り、柱間距離は2.31～2.33ｍである。柱穴は、直径24～36㎝、深さ７～28㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ３は、北部でＳＢ２に切られており、ＳＢ４・５と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－13°－Ｅであるが、西辺中央部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.47ｍを測り、柱間距離は1.02～2.45ｍである。桁行は4.60ｍを測り、柱間距離は1.18～1.72ｍである。柱穴は、直径20～32㎝、深さ６～33㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。ＳＢ４は、ＳＢ３・５と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－82°－Ｗであるが、西辺及び東辺中央部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.88ｍを測り、柱間距離は不明である。桁行は4.98ｍを測り、柱間距離は2.28～2.63ｍである。柱穴は、直径20～28㎝、深さ８～34㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片及び炭化物が出土した。ＳＢ５は、ＳＢ３・４と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－16°－Ｅである。梁間は1.44ｍを測り、柱間距離は1.37～1.44ｍである。桁行は3.57ｍを測り、柱間距離は1.53～1.97ｍである。柱穴は、直径22～32㎝、深さ12～28㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は３×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗであるが、西辺中央部と南辺東部の柱穴３個は検出されなかった。梁間は4.18ｍを測り、柱間距離は1.01～1.50ｍである。桁行は3.59ｍを測り、柱間距離は0.95～1.81ｍである。柱穴は、直径20～31㎝、深さ12～24㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＢ７は、ＳＢ８と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－16°－Ｅであるが、南東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.74ｍを測り、柱間距離は1.76～1.98ｍである。桁行は6.10ｍを測り、柱間距離は1.80～2.28ｍである。柱穴は、直径30～44㎝、深さ14～36㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ８は、ＳＤ１東辺を切っており、ＳＢ７・９と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ９

ＳＢ９は、調査区中央部のやや北寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－18°－Ｅであるが、東辺南部の柱穴１個は検出

されなかった。梁間は3.83ｍを測り、柱間距離は1.78～2.05ｍである。桁行は7.08ｍを測り、柱間距離は1.80～2.70ｍである。柱穴は、直径28～52㎝、深さ９～52㎝を測り、不整円形及び方形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＢ９は、北東部でＳＢ８と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－70°－Ｗであるが、南辺西部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.57ｍを測り、柱間距離は1.59～2.05ｍである。桁行は5.96ｍを測り、柱間距離は1.28～3.00ｍである。柱穴は、直径24～32㎝、深さ10～30㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片や炭化物が出土した。ＳＢ10は、ＳＫ21、ＳＤ２西辺を切っており、ＳＢ11、ＳＫ20と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ11

ＳＢ11は、調査区中央部の西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－71°－Ｗである。梁間は4.59ｍを測り、柱間距離は2.21～2.38ｍである。桁行は6.86ｍを測り、柱間距離は1.44～2.77ｍである。柱穴は、直径24～34㎝、深さ14～38㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器鍋（15）や青磁片が出土した。ＳＢ11は、ＳＢ10・12、ＳＫ19・21～23と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ12

ＳＢ12は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－72°－Ｗであり、北辺西部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.61ｍを測り、柱間距離は1.75～1.86ｍである。桁行は7.06ｍを測り、柱間距離は1.82～3.36ｍである。柱穴は、直径20～52㎝、深さ８～52㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ12は、ＳＢ11・14・15・19・20、ＳＫ19と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ13

ＳＢ13は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－70°－Ｗであるが、北東隅、西辺中央部及び南西隅の柱穴３個は検出されなかった。梁間は4.85ｍを測り、柱間距離は2.16～2.64ｍである。桁行は

5.09ｍを測り、柱間距離は1.96ｍである。柱穴は、直径22～32㎝、深さ12～40㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（10、11）等の遺物が出土した。ＳＢ13は、ＳＫ43を切っており、ＳＫ44～47と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ14

ＳＢ14は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－18°－Ｅである。梁間は3.90ｍを測り、柱間距離は1.32～2.58ｍである。桁行は5.52ｍを測り、柱間距離は2.70～2.78ｍである。柱穴は、直径20～41㎝、深さ20～64㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗（９）等の遺物が出土した。ＳＢ14は、ＳＢ12・15・19～21、ＳＫ28と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ15

ＳＢ15は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅである。梁間は3.66ｍを測り、柱間距離は1.50～2.10ｍである。桁行は4.65ｍを測り、柱間距離は2.31～2.33ｍである。柱穴は、直径20～32㎝、深さ12～45㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ15は、ＳＢ12・14・19～21、ＳＫ36と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ16

ＳＢ16は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－21°－Ｅであるが、南東隅、西辺及び東辺の柱穴４個は検出されなかった。梁間は3.64ｍを測り、柱間距離は1.74～1.90ｍである。桁行は7.75ｍを測り、柱間距離は1.57～2.28ｍである。柱穴は、直径20～36㎝、深さ19～56㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ16は、ＳＫ30を切っており、ＳＢ17～19・21～24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ17

ＳＢ17は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－22°－Ｅであるが、北東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.46ｍを測り、柱間距離は1.64～1.82ｍである。桁行は6.48ｍを測り、柱間距離は1.60～3.02ｍである。柱穴は、直径24～48㎝、深さ20～44㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ17は、ＳＫ25を切っており、ＳＢ16・18、ＳＫ14と重複している。ＳＢ17は、出土遺物等からＳＫ14・25より新しい時期の建物址であるが、ＳＢ16・18との新旧関係は不明である。

ＳＢ18

ＳＢ18は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の南北棟の総柱の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅである。梁間は3.15ｍを測り、柱間距離は1.38～1.77ｍである。桁行は5.85ｍを測り、柱間距離は1.39～1.53ｍである。柱穴は、直径21～30㎝、深さ12～53㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片及び青磁片が出土した。ＳＢ18は、ＳＫ30を切っており、ＳＢ16・17・21～24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ19

ＳＢ19は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－17°－Ｅであるが、南西隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は5.12ｍを測り、柱間距離は2.14～2.78ｍである。桁行は5.60ｍを測り、柱間距離は2.50～3.10ｍである。柱穴は、直径22～33㎝、深さ16～45㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ19は、ＳＢ12・14～16・20～24、ＳＫ27・28・30・34～39と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ20

ＳＢ20は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－16°－Ｅである。梁間は3.88ｍを測り、柱間距離は1.69～2.17ｍである。桁行は3.94ｍを測り、柱間距離は1.58～2.28ｍである。柱穴は、直径18～34㎝、深さ18～48㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。ＳＢ20は、ＳＫ36を切っており、ＳＢ12・14・15・19・21、ＳＫ27・28・34・35と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ21

ＳＢ21は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－75°－Ｗであるが、南辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.24ｍを測り、柱間距離は1.38～1.86ｍである。桁行は4.11ｍを測り、柱間距離は1.95～2.16ｍである。柱穴は、直径22～32㎝、深さ10～48㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ21は、ＳＢ14～16・18～20・22・23、ＳＫ27・28・30・34・35と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ22

ＳＢ22は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘

立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗであるが、南西隅と西辺中央部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.40ｍを測り、柱間距離は1.55～1.85ｍである。桁行は5.20ｍを測り、柱間距離は2.35～2.85ｍである。柱穴は、直径21～32㎝、深さ13～44㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ22は、ＳＢ16・18・19・21・23～25、ＳＫ30～32と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ23

ＳＢ23は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－72°－Ｗであるが、西辺及び東辺中央部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は5.14ｍを測り、柱間距離は2.24～2.70ｍである。桁行は5.60ｍを測り、柱間距離は1.50～2.12ｍである。柱穴は、直径24～48㎝、深さ11～41㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ23は、ＳＫ51を切っており、ＳＢ16・18・19・21・22・24・25、ＳＫ30～33・38・39・57と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ24

ＳＢ24は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は４×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗであるが、北辺西部と西辺南部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は5.48ｍを測り、柱間距離は1.32～1.82ｍである。桁行は6.18ｍを測り、柱間距離は1.74～2.40ｍである。柱穴は、直径25～36㎝、深さ17～40㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗（８）等の遺物が出土した。ＳＢ24は、ＳＫ38・39・57を切っており、ＳＢ16・18・19・22・23・25、ＳＫ30～33・37・51と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ25

ＳＢ25は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅであるが、東辺及び南辺中央部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は4.74ｍを測り、柱間距離は1.84～2.90ｍである。桁行は5.26ｍを測り、柱間距離は2.58～2.68ｍである。柱穴は、直径24～32㎝、深さ８～44㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。ＳＢ25は、ＳＢ22～24、ＳＫ37・57と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ26

ＳＢ26は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の南北棟の掘

立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅである。梁間は3.69ｍを測り、柱間距離は1.64～1.98ｍである。桁行は5.23ｍを測り、柱間距離は2.58～2.62ｍである。柱穴は、直径18～34㎝、深さ14～52㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、白磁皿（12）等の遺物が出土した。ＳＢ26は、ＳＫ64を切っており、ＳＢ27・28と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ27

ＳＢ27は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－14°－Ｅであるが、東辺の柱穴２個は検出されなかった。梁間は5.20ｍを測り、柱間距離は2.39～2.82ｍである。桁行は6.26ｍを測り、柱間距離は1.25～2.53ｍである。柱穴は、直径22～40㎝、深さ12～38㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。ＳＢ27は、ＳＢ26・28～30、ＳＫ64と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ28

ＳＢ28は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－77°－Ｗである。梁間は4.00ｍを測り、柱間距離は1.98～2.02ｍである。桁行は7.13ｍを測り、柱間距離は1.04～2.52ｍである。柱穴は、直径26～35㎝、深さ20～42㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＢ28は、ＳＫ62を切っており、ＳＢ26・27・29・30、ＳＫ64と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ29

ＳＢ29は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は３×４間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－67°－Ｗであるが、南西隅及び東辺の柱穴３個は検出されなかった。梁間は5.16ｍを測り、柱間距離は1.50～1.58ｍである。桁行は7.53ｍを測り、柱間距離は1.23～2.78ｍである。柱穴は、直径21～64㎝、深さ18～61㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（13）等の遺物が出土した。ＳＢ29は、ＳＢ27・28・30・31、ＳＫ62・73・75と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ30

ＳＢ30は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－68°－Ｗである。梁間は4.49ｍを測り、柱間距離は2.08～2.35ｍである。桁行は4.51ｍを測り、柱間距離は1.11～1.75ｍである。柱穴は、直径20～33㎝、

深さ12～61cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。ＳＢ30は、ＳＢ27～29・31、ＳＫ73と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ31

ＳＢ31は、調査区南西端に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－25°－Ｅであるが、南辺及び東辺の柱穴３個は検出されなかった。梁間は3.88ｍを測り、柱間距離は1.90～1.98ｍである。桁行は6.00ｍを測り、柱間距離は1.10～1.78ｍである。柱穴は、直径17～44cm、深さ12～56cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（14）等の遺物が出土した。ＳＢ31は、ＳＫ75を切っており、ＳＢ29・30、ＳＫ76・79と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ32

ＳＢ32は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗであるが、東辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は3.25ｍを測り、柱間距離は1.43～1.82ｍである。桁行は3.39ｍを測り、柱間距離は1.16～2.23ｍである。柱穴は、直径22～28cm、深さ14～52cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。ＳＢ32は、ＳＫ74を切っており、ＳＫ77と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ33

ＳＢ33は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×１間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗである。梁間は2.70ｍを測り、柱間距離は2.63～2.70ｍである。桁行は3.68ｍを測り、柱間距離は3.62～3.68ｍである。柱穴は、直径24～32cm、深さ20～52cmを測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器片等の遺物が出土した。ＳＢ33は、ＳＢ34～36、ＳＫ66と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ34

ＳＢ34は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は３×４間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－67°－Ｗであるが、東辺の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.98ｍを測り、柱間距離は1.28～1.40ｍである。桁行は6.67ｍを測り、柱間距離は1.20～2.38ｍである。柱穴は、直径23～36cm、深さ11～49cmを測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＢ34は、ＳＫ70を切っており、ＳＢ33・35・36、ＳＫ66・69と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ35

ＳＢ35は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－77°－Ｗであるが、南東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は1.90ｍを測り、柱間距離は1.90ｍである。桁行は5.73ｍを測り、柱間距離は2.65～3.08ｍである。柱穴は、直径22～30㎝、深さ12～29㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ35は、ＳＢ33・34・36、ＳＫ66・69と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ36

ＳＢ36は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－20°－Ｅであるが、南東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は2.12ｍを測り、柱間距離は2.12ｍである。桁行は2.93ｍを測り、柱間距離は1.14～1.78ｍである。柱穴は、直径26～33㎝、深さ19～34㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＢ36は、ＳＢ33～35、ＳＫ69・70と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ37

ＳＢ37は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－14°－Ｅであるが、南東隅と東辺北部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は4.84ｍを測り、柱間距離は2.30～2.60ｍである。桁行は5.82ｍを測り、柱間距離は1.56～2.44ｍである。柱穴は、直径22～30㎝、深さ８～25㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ37は、ＳＢ38と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ38

ＳＢ38は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－27°－Ｅであるが、北東隅の柱穴１個は検出されなかった。梁間は5.51ｍを測り、柱間距離は2.69～2.78ｍである。桁行は5.56ｍを測り、柱間距離は2.48～3.03ｍである。柱穴は、直径25～29㎝、深さ８～36㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。ＳＢ38は、ＳＢ37と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ39

ＳＢ39は、調査区南端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の東西棟の掘

立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗである。梁間は2.23ｍを測り、柱間距離は2.16～2.23ｍである。桁行は3.00ｍを測り、柱間距離は0.90～2.04ｍである。柱穴は、直径23～28㎝、深さ12～36㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＢ40

ＳＢ40は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅであるが、南西隅と東辺の柱穴４個は検出されなかった。梁間は3.63ｍを測り、柱間距離は1.67～1.97ｍである。桁行は7.33ｍを測り、柱間距離は1.79～2.16ｍである。柱穴は、直径20～28㎝、深さ８～56㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ40は、ＳＢ41、ＳＫ86・88・90、ＳＤ３西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ41

ＳＢ41は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×４間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－72°－Ｗであるが、西辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は5.29ｍを測り、柱間距離は1.66～1.84ｍである。桁行は6.33ｍを測り、柱間距離は1.32～1.86ｍである。柱穴は、直径22～49㎝、深さ11～32㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＢ41は、ＳＢ40、ＳＫ86～88・90、ＳＤ３西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ42

ＳＢ42は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－71°－Ｗであり、北西隅及び北辺西部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.38ｍを測り、柱間距離は1.68～1.76ｍである。桁行は5.92ｍを測り、柱間距離は1.95～2.12ｍである。柱穴は、直径25～41㎝、深さ７～45㎝を測り、円形及び不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（６、７）等の遺物が出土した。ＳＢ42は、ＳＢ43・48、ＳＤ３西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ43

ＳＢ43は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－73°－Ｗである。梁間は6.27ｍを測り、柱間距離は2.77～3.34ｍである。桁行は6.82ｍを測り、柱間距離は0.84～3.20ｍである。柱穴は、直径28～36㎝、深さ17～33㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片及び青磁

片が出土した。ＳＢ43は、２×２間の母屋の西面に廂を有した建物址と考えられる。ＳＢ43は、ＳＢ42・44～46、ＳＤ４と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ44

ＳＢ44は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は３×５間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－20°－Ｅであるが、北辺西部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は7.80ｍを測り、柱間距離は2.36～2.78ｍである。桁行は8.78ｍを測り、柱間距離は1.53～1.89ｍである。柱穴は、直径21～40㎝、深さ10～40㎝を測り、埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯・鍋の小破片が出土した。ＳＢ44は、ＳＢ43・45・46、ＳＫ97～99、ＳＤ４と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ45

ＳＢ45は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は３×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－75°－Ｗである。梁間は4.74ｍを測り、柱間距離は1.20～1.78ｍである。桁行は5.44ｍを測り、柱間距離は0.72～1.82ｍである。柱穴は、直径20～38㎝、深さ９～40㎝を測り、不整円形及び楕円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＢ45は、３×３間の母屋の西面に廂を有した建物址と考えられる。ＳＢ45は、ＳＫ97・98を切っており、ＳＢ43・44・46、ＳＫ99、ＳＤ４と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ46

ＳＢ46は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×５間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－19°－Ｅであるが、東辺南部及び南東隅の柱穴２個は検出されなかった。梁間は3.53ｍを測り、柱間距離は2.03ｍである。桁行は9.10ｍを測り、柱間距離は1.60～2.33ｍである。柱穴は、直径26～37㎝、深さ11～49㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＢ46は、ＳＤ４を切っており、ＳＢ43～45、ＳＫ96～100・105と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ47

ＳＢ47は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×２間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－71°－Ｗである。梁間は2.70ｍを測り、柱間距離は1.04～1.62ｍである。桁行は4.37ｍを測り、柱間距離は1.81～2.55ｍである。柱穴は、直径24～30㎝、深さ11～23㎝を測り、埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ47は、ＳＢ48・49、ＳＤ３西辺と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ48

ＳＢ48は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は１×２間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－15°－Ｅであるが、東辺中央部の柱穴１個は検出されなかった。梁間は2.16ｍを測り、柱間距離は2.07～2.16ｍである。桁行は3.19ｍを測り、柱間距離は1.37～1.80ｍである。柱穴は、直径23～28㎝、深さ８～43㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＢ48は、ＳＢ42・47と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ49

ＳＢ49は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の南北棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－20°－Ｅである。梁間は2.72ｍを測り、柱間距離は1.32～1.40ｍである。桁行は5.52ｍを測り、柱間距離は1.49～2.20ｍである。柱穴は、直径33～51㎝、深さ13～41㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＢ49は、ＳＫ102を切っており、ＳＢ47・50、ＳＫ103と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ50

ＳＢ50は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。規模は２×３間の東西棟の掘立柱建物址であり、棟方向はＮ－68°－Ｗであるが、北東隅及び南辺東部の柱穴２個は検出されなかった。梁間は4.19ｍを測り、柱間距離は1.84～2.35ｍである。桁行は4.99ｍを測り、柱間距離は1.60～1.86ｍである。柱穴は、直径24～36㎝、深さ12～40㎝を測り、不整円形を呈す。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。ＳＢ50は、ＳＫ104、ＳＤ３の西辺を切っており、ＳＢ49、ＳＫ102・103と重複しているが、新旧関係は不明である。

土拡

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.49ｍ、短径0.39ｍ、深さ0.10ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－65°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.38ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－70°－Ｅ

である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK3

ＳＫ３は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.33m、短径0.72m、深さ0.42mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－85°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ３は、西部に小段を有している。

SK4

ＳＫ４は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.96m、短径の残存長0.84m、深さ0.24mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－68°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

SK5

ＳＫ５は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.00m、短径0.77m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－65°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。

SK6

ＳＫ６は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.82m、短径0.71m、深さ0.15mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－５°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK7

ＳＫ７は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.30m、短径0.80m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－56°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ７は、東部に小段を有する。

SK8

ＳＫ８は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.57m、短径0.90m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－62°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

SK9

ＳＫ９は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径

0.96m、短径0.79m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－17°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ９の南端部は、中世のピットに切られている。

ＳＫ10

ＳＫ10は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.84m、短径0.77m、深さ0.16mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－17°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径2.20m、短径1.16m、深さ0.12mである。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－21°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ11は、ＳＤ１の北東隅を切っており、ＳＤ１より新しい時期の土坑である。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.81m、短径0.71m、深さ0.23mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－４°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ12は、ＳＫ13の北部を切っており、ＳＫ13より新しい時期の土坑である。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径の残存長0.73m、短径0.56m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－53°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ13は、北部がＳＫ12に切られており、ＳＫ12より古い時期の土坑である。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径2.84m、短径2.65m、深さ0.23mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－20°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、須恵器蓋（21）等の遺物が出土した。ＳＫ14は、出土遺物等からＳＢ17、ＳＤ１西辺に切られていることが判明した。

SK15

SK15は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.16m、短径0.83m、深さ0.10mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－64°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器及び瓦質土器片が出土した。

SK16

SK16は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.40m、深さ0.24mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－61°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK16は、東西の両端部に小段を有している。

SK17

SK17は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形を呈し、長径2.35m、短径1.94m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－52°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器Ⅲ・杯の小破片が出土した。SK17の北部は、中世のピットに切られている。

SK18

SK18は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.05m、短径0.61m、深さ0.45mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－14°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。SK18の西部は、中世のピットに切られている。

SK19

SK19は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.81m、短径1.50m、深さ0.20mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－35°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK19は、底面に拳大程度の自然礫数個が堆積していた。SK19は、SB11・12と重複しているが、新旧関係は不明である。

SK20

SK20は、調査区中央部の西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.25m、短径0.69m、深さ0.27mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－18°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK20は、北

部に小段を有している。

ＳＫ21

ＳＫ21は、調査区中央部の西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.09ｍ、短径0.58ｍ、深さ0.17ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－21°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（17）等の遺物が出土した。ＳＫ21は、ＳＢ10に切られており、ＳＢ11と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区中央部の西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.65ｍ、短径0.55ｍ、深さ0.10ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－45°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ22は、ＳＢ11と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区中央部の西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.87ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.20ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－65°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ23の東部は、中世のピットに切られており、ＳＢ11と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.21ｍ、短径1.13ｍ、深さ0.21ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－88°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径2.43ｍ、短径1.97ｍ、深さ0.55ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－76°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ25は、北東部に小段を有し、底面には、人頭大の自然礫８個が堆積していた。ＳＫ25は、ＳＤ１西辺を切っており、ＳＢ17に切られている。ＳＫ25は、ＳＢ17より古いが、ＳＤ１より新しい時期の土坑である。

ＳＫ26

ＳＫ26は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、

長径1.28m、短径0.75m、深さ9cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－26°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK27

SK27は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.70m、深さ7cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－20°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK27は、SB19～21と重複しているが、新旧関係は不明である。

SK28

SK28は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.62m、深さ0.16mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－74°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK28は、SB14・15・19～21と重複しているが、新旧関係は不明である。

SK29

SK29は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径5.25m、短径4.02m、深さ0.76mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－31°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK29は、東部に大きな段部を有し、SK49、SD1西辺を切っている。

SK30

SK30は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.99m、短径1.04m、深さ0.58mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－49°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗（19）、白磁小皿（18）等の遺物が出土した。SK30は、SB16・18に切られており、SB19・21～24と重複しているが、新旧関係は不明である。

SK31

SK31は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.90m、短径0.77m、深さ0.19mを測る。断面形は浅い箱形を呈し、長軸方向はN－16°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。SK31は、SB22に切られており、SB23・24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.18ｍ、短径0.44ｍ、深さ0.59ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－82°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ32は、ＳＢ22～24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.99ｍ、短径0.58ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ33は、ＳＢ23・24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.42ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－７°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＫ34は、ＳＢ19～21と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ35

ＳＫ35は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.14ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－４°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径1.32ｍ、短径0.91ｍ、深さ0.17ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－６°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＫ36は、ＳＢ20に切られており、ＳＢ15・19と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ37

ＳＫ37は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.18ｍ、短径0.41ｍ、深さ0.18ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－10°－Ｗである。埋土は、灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ37は、ＳＢ19・23～25と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ38

ＳＫ38は、調査区西部に位置し、第Ⅳ上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.71ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.15ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－45°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（20）等の遺物が出土した。ＳＫ38は、ＳＢ19・23・24に切られており、ＳＢ19・23・24より新しい時期の土坑である。

ＳＫ39

ＳＫ39は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.78ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.25ｍを測る。断面形は浅い箱形を呈し、長軸方向はＮ－５°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ39は、ＳＢ24に切られており、ＳＢ19と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ40

ＳＫ40は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.80ｍ、短径0.52ｍ、深さ0.25ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ40は、東部を中世のピットに切られている。

ＳＫ41

ＳＫ41は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.67ｍ、短径0.62ｍ、深さ0.35ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－５°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＫ41は、ＳＫ42を切っており、ＳＫ42より新しい時期の土坑である。

ＳＫ42

ＳＫ42は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.13ｍ、短径の残存長0.90ｍ、深さ0.49ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－85°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ42は、北部と東部に段部を有しており、南部は最近の撹乱を受けている。ＳＫ42は、北部をＳＫ41に切られており、ＳＫ41より古い時期の土坑である。

ＳＫ43

ＳＫ43は、調査区中央部西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径の残存長0.78ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.45ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向

はＮ－５°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＫ43は、ＳＢ13に切られており、南部は最近の撹乱を受けている。

ＳＫ44

ＳＫ44は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.75ｍ、短径0.66ｍ、深さ７㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－77°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ44は、ＳＢ13と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ45

ＳＫ45は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長0.81ｍ、短径の残存長0.40ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－77°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ45は、ＳＢ13と重複しており、北東部は最近の撹乱を受けている。

ＳＫ46

ＳＫ46は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.78ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－８°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ46は、ＳＫ47を切っており、ＳＢ13と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ47

ＳＫ47は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.17ｍ、短径の残存長0.66ｍ、深さ４㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－77°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。ＳＫ47は、ＳＫ46に切られており、ＳＢ13と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ48

ＳＫ48は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.10ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.39ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－80°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ48は、ＳＤ１西辺を切っており、ＳＤ１より新しい時期の土坑である。

ＳＫ49

ＳＫ49は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.91ｍ、短径1.19ｍ、深さ0.40ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－6°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ49は、ＳＫ29に切られており、ＳＫ29より古い時期の土坑である。

ＳＫ50

ＳＫ50は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長2.53ｍ、短径の残存長1.38ｍ、深さ0.38ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－29°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯の小破片が出土した。ＳＫ50は、ＳＤ１西辺と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

ＳＫ51

ＳＫ51は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は細長い長楕円形を呈し、長径2.13ｍ、短径0.25ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は浅い逆台形を呈し、長軸方向はＮ－71°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁皿（23）等の遺物が出土した。ＳＫ51は、ＳＢ23に切られており、ＳＢ24と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ52

ＳＫ52は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径の残存長0.59ｍ、短径0.63ｍ、深さ７㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－41°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ52は、ＳＫ53に切られており、ＳＫ53より古い時期の土坑である。

ＳＫ53

ＳＫ53は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.71ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.18ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－35°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ53は、ＳＫ52を切っており、ＳＫ52より新しい時期の土坑である。

ＳＫ54

ＳＫ54は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.30ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－74°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

ＳＫ55

ＳＫ55は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.75ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.11ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－81°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片、石硯（129）等が出土した。

ＳＫ56

ＳＫ56は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸台形を呈し、長径0.65ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.14ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－67°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ57

ＳＫ57は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、長径4.97ｍ、短径0.77ｍ、深さ0.36ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－70°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、多量の土師質土器皿・杯の小片及び青磁片等の遺物が出土した。ＳＫ57は、ＳＢ24に切られており、ＳＢ23・25と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ58

ＳＫ58は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.08ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.32ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－15°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（22）等の遺物が出土した。ＳＫ58は、底面が北部から南部に向かって深まっている。

ＳＫ59

ＳＫ59は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.90ｍ、短径0.45ｍ、深さ0.14ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－77°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ60

ＳＫ60は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.82ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－９°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ61

ＳＫ61は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径の残存長3.38ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.15ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－76°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ61は、東部がＳＤ１東辺に切られており、ＳＤ１より古い時期の土坑である。

ＳＫ62

ＳＫ62は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.75ｍ、短径0.63ｍ、深さ0.54ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－88°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ62は、ＳＢ28に切られており、ＳＢ29と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ63

ＳＫ63は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.74ｍ、短径0.54ｍ、深さ９㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－85°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ63の東端部は、中世のピットに切られている。

ＳＫ64

ＳＫ64は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.94ｍ、短径0.82ｍ、深さ0.15ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－20°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＫ64は、ＳＢ26に切られており、ＳＢ27・28と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ65

ＳＫ65は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.50ｍ、深さ９㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－39°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ66

ＳＫ66は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.75ｍ、短径0.58ｍ、深さ0.14ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－23°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ66は、ＳＢ34・35と重複するが、新旧関係は不明である。

ＳＫ67

ＳＫ67は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.78ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.11ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－41°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ67の南部は、中世のピットに切られており、ＳＢ37と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ68

ＳＫ68は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.09ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.29ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－50°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ68は、北部に小段を有している。

ＳＫ69

ＳＫ69は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.26ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.26ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－28°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片が出土した。ＳＫ69は、ＳＢ33～36と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ70

ＳＫ70は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.54ｍ、短径1.19ｍ、深さ0.43ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－69°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁皿（24）等の遺物が出土した。ＳＫ70は、ＳＢ34に切られており、ＳＢ36と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ71

ＳＫ71は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.18ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.11ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－38°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。

ＳＫ72

ＳＫ72は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.77ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.26ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－１°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ73

ＳＫ73は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径1.00ｍ、短径0.30ｍ、深さ９㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－52°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ73は、ＳＢ29・30と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ74

ＳＫ74は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整方形を呈し、長径1.44ｍ、短径0.96ｍ、深さ0.17ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－65°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ74は、ＳＢ32に切られており、ＳＢ32より古い時期の土坑である。

ＳＫ75

ＳＫ75は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径2.64ｍ、短径1.35ｍ、深さ0.10ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－44°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。ＳＫ75は、ＳＢ31に切られており、ＳＢ29と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ76

ＳＫ76は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径0.74ｍ、短径0.73ｍ、深さ0.21ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－59°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ76は、ＳＢ31と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ77

ＳＫ77は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.07ｍ、短径0.91ｍ、深さ0.16ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－50°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ77は、ＳＢ32と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ78

ＳＫ78は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径2.30ｍ、短径0.71ｍ、深さ0.28ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－69°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片等の遺物が出土した。ＳＫ78は、

南部が最近の撹乱を受けている。

ＳＫ79

ＳＫ79は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.03ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.11ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－25°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ79は、ＳＢ31と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ80

ＳＫ80は、調査区南西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.21ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.27ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿の小破片等の遺物が出土した。

ＳＫ81

ＳＫ81は、調査区南西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.76ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.24ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－20°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿・杯の小破片が出土した。

ＳＫ82

ＳＫ82は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.48ｍ、短径0.97ｍ、深さ0.24ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ82は、底面に拳大～人頭大の自然礫７個が堆積していた。

ＳＫ83

ＳＫ83は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.87ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.21ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－15°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の土師質土器片が出土した。ＳＫ83の南端部は、中世のピットに切られている。

ＳＫ84

ＳＫ84は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.39ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.30ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯及び青磁の小破片等の遺物が出土した。

ＳＫ85

ＳＫ85は、調査区南部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径の残存長2.68ｍ、短径2.20ｍ、深さ0.49ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－87°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土した。自然礫の集石がみられ、底面にも一部堆積していた。ＳＫ85の東部は、ＳＤ１と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

ＳＫ86

ＳＫ86は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.24ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.49ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－58°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ86は、東西の両端部に小段を有している。ＳＫ86は、ＳＢ40・41と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ87

ＳＫ87は、調査区北端部で検出された土坑で、ＳＫ86の南西側に位置している。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.14ｍ、短径0.64ｍ、深さ９㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－20°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ87は、ＳＢ41と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ88

ＳＫ88は、調査区北端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.88ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.12ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－73°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ88は、ＳＢ40・41と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ89

ＳＫ89は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.44ｍ、短径0.75ｍ、深さ1.20ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－64°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器大皿（25）・釜（26）・鍋（28）、備前徳利（27）、瀬戸・美濃系小皿（29）、伊万里系碗（30～32、34～37、39～43）・蓋（38）・瓶（44、45）・徳利（46）、奈半利碗（33）等の遺物が出土した。

ＳＫ90

ＳＫ90は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、

長径0.83m、短径0.74m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－68°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK91

SK91は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.99m、短径0.62m、深さ0.22mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－7°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK92

SK92は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.78m、短径0.96m、深さ0.33mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－75°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器小皿（47）等の遺物が出土した。SK92は、SK93に切られており、SK93より古い時期の土坑である。

SK93

SK93は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整方形を呈し、長径1.45m、短径1.30m、深さ0.44mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－15°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器釜（48）、伊万里系碗（49、50、53～56）・蓋（51）等の遺物が出土した。SK93は、SK92を切っており、SK92より新しい時期の土坑である。

SK94

SK94は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.91m、短径0.73m、深さ0.42mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－70°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK95

SK95は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不定形で、長径の残存長1.64m、短径0.89m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－70°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK96

SK96は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径0.86m、短径0.63m、深さ0.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－10°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK96は、SK97を切って

おり、ＳＢ46と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ97

ＳＫ97は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.80ｍ、短径0.66ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－80°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ97は、ＳＢ45、ＳＫ96に切られており、ＳＢ45、ＳＫ96より古い時期の土坑である。また、ＳＫ97は、ＳＢ44・46と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ98

ＳＫ98は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長1.02ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.10ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－10°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ98は、北西部がＳＫ97に切られており、ＳＢ46と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ99

ＳＫ99は、調査区北東部で検出された土坑で、ＳＫ98の東側に位置している。平面形は隅丸方形を呈し、長径0.83ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.24ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－３°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里紅猪口（57）が出土した。ＳＫ99には拳大程度の自然礫の集石がみられた。ＳＫ99は、ＳＢ44～46と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ100

ＳＫ100は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は鉤形を呈し、長径1.83ｍ、短径0.11ｍ、深さ８㎝を測る。断面形はＵ字形を呈し、長軸方向はＮ－46°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ101

ＳＫ101は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.71ｍ、短径の残存長1.25ｍ、深さ0.31ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はＮ－28°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里系碗（58）等の遺物が出土した。ＳＫ101は、ＳＤ３東辺を切っており、ＳＤ３より新しい時期の土坑である。

ＳＫ102

ＳＫ102は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.84ｍ、短径0.59ｍ、深さ0.33ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－73°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ102は、ＳＫ103を切っているが、ＳＢ49に切られている。また、ＳＫ102は、ＳＢ50と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ103

ＳＫ103は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.16ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.32ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－72°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ103は、ＳＫ102に切られており、ＳＢ49・50と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ104

ＳＫ104は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は細長い長楕円形を呈し、長径4.35ｍ、短径0.40ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はＮ－18°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＫ104は、ＳＢ50に切られており、ＳＢ50より新しい時期の土坑である。

ＳＫ105

ＳＫ105は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.36ｍ、短径1.19ｍ、深さ0.41ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－67°－Ｗである。埋土は灰褐色粘質土であり、瀬戸・美濃系碗（59）等の遺物が出土した。ＳＫ105は、ＳＢ46と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＫ106

ＳＫ106は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸三角形を呈し、長径の残存長1.69ｍ、短径1.16ｍ、深さ0.51ｍを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はＮ－19°－Ｅである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器釜（60）、唐津系碗（62、63）、伊万里系碗（64）・瓶（65）、能茶山皿（61）等の遺物が出土した。ＳＫ106は、ＳＤ３東辺を切っており、ＳＤ３より新しい時期の土坑である。

ＳＫ107

ＳＫ107は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、

長径の残存長1.82m、短径1.22m、深さ0.19mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－22°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK107は、SD5と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

SK108

SK108は、調査区東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.43m、短径の残存長1.01m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－80°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、砥石（132）等が出土した。SK108は、SD2に切られており、SD2より古い時期の土坑である。

SK109

SK109は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、長径の残存長1.90m、短径0.90m、深さ0.92mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－14°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、備前擂鉢（66）、伊万里皿（67）等の遺物が出土した。SK109は、南部が最近の撹乱を受けていた。

SK110

SK110は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.34m、短径1.05m、深さ0.90mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－17°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里碗（70）、瀬戸・美濃系碗（69）等が出土した。

SK111

SK111は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整方形を呈し、長径1.16m、短径0.95m、深さ0.33mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－73°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK111は、SK112を切っており、SK112より新しい時期の土坑である。

SK112

SK112は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整方形を呈し、長径の残存長0.86m、短径1.09m、深さ0.29mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－73°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK112は、SK111に切られており、SK111より古い時期の土坑である。

SK113

SK113は、調査区東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.95m、短径1.84m、深さ0.42mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－76°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK113は、周辺部に小段を有しており、SD2南辺の東端を切っている。

SK114

SK114は、調査区東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、長径1.52m、短径1.50m、深さ0.62mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－82°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK115

SK115は、調査区東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径の残存長0.68m、短径0.83m、深さ1.03mを測る。断面形は箱形を呈し、長軸方向はN－25°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。SK115の南部は、現代の撹乱を受けている。

SK116

SK116は、調査区中央部のやや東寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.42m、短径0.98m、深さ0.18mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－17°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK117

SK117は、調査区中央部の南寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.68m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－29°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK118

SK118は、調査区中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.96m、短径0.64m、深さ0.14mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－14°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK119

SK119は、調査区中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は隅丸長方形

を呈し、長径1.05m、短径0.71m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－22°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK120

SK120は、調査区中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.05m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－86°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK121

SK121は、調査区南東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.31m、短径0.90m、深さ0.21mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－8°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（72）等の遺物が出土した。SK121は、南部に小段を有している。

SK122

SK122は、調査区南東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、長径1.97m、短径1.28m、深さ0.34mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－38°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK123

SK123は、調査区南東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.43m、深さ0.12mを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN－43°－Eである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

SK124

SK124は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.84m、短径0.80m、深さ0.38mを測る。断面形は擂鉢形を呈し、長軸方向はN－57°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、伊万里碗（16）等の遺物が出土した。SK124は、SD6の西部を切っており、SD6より新しい時期の土坑である。

溝

SD1

SD1は、調査区西半部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、長方形状の区画を形成している

が、南辺は8.82ｍほど途切れている。北辺の全長は36.80ｍ、幅0.72ｍ、深さ0.33ｍを測る。東辺の全長は55.20ｍ、幅0.64ｍ、深さ0.36ｍを測る。西辺の全長は57.44ｍ、幅0.96ｍ、深さ0.35ｍを測る。また、西辺南端部は、南部から南西側に1.92ｍほど延びた箇所があり、排水施設と考えられる。南辺西部の全長14.80ｍ、幅1.12ｍ、深さ0.36ｍを測る。南辺西部の東端部は北部に24.40ｍほど延びている。南辺東部の全長は13.68ｍ、幅0.32ｍ、深さ0.12ｍを測る。埋土は２層に分層され、かなり多量の遺物が出土した。第Ⅰ層は灰色粘質土であり、少量の遺物を包含していた。第Ⅱ層は暗灰色粘質土であり、かなり多量の遺物を包含していた。

ＳＤ１からは、土師質土器杯（73、74）・鍋（75～77）、瓦質土器鍋脚部（78）、備前擂鉢（79～83）、青磁碗（84、85）、白磁皿（86）、染付碗（87）、伊万里系碗（88）等の遺物が出土した。ＳＤ１は、ＳＫ14を切っており、ＳＫ11・25・29・48、ＳＤ２南辺に切られている。ＳＤ１の底面から、備前擂鉢（79、80）及び青磁碗（85）等の遺物が出土したことを考えると、ＳＤ１は16世紀後半に機能し、廃絶したと考えられる。

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、Ｌ字状を呈している。南辺の全長は33.60ｍ、幅1.32ｍ、深さ0.36ｍを測る。西辺の全長は20.40ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.10ｍを測る。ＳＤ２からは、瓦質土器擂鉢（91）、備前擂鉢（92）等の遺物が出土した。ＳＤ２の南辺は、ＳＤ１の東辺を切っているが、ＳＫ113及びＳＤ３に切られている。ＳＤ２の西辺は、ＳＢ10に切られている。ＳＤ２は、ＳＤ１より新しいが、ＳＫ113及びＳＤ３より古い時期の溝である。ＳＤ２は、出土遺物等より、16世紀後半に機能し、廃絶した溝と考えられる。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、門構様に囲繞している。北辺の全長は16.00ｍ、幅0.46ｍ、深さ0.15ｍを測る。東辺の全長は21.60ｍ、幅0.64ｍ、深さ0.19ｍを測る。西辺の全長は23.28ｍ、幅0.32ｍ、深さ0.10ｍを測る。ＳＤ３は、東辺南部から東側に溝が1.20ｍほど延びた箇所があり、排水施設と考えられる。埋土は灰色粘質土であり、土師質土器釜（93）、備前擂鉢（94）・徳利（95）等の遺物が出土した。

ＳＤ３は、ＳＤ２南辺を切っているが、ＳＢ50、ＳＫ101・106に切られている。また、ＳＤ３の西辺は、ＳＢ40～42・47と重複しているが、新旧関係は不明である。ＳＤ３は、ＳＤ２より新しいが、ＳＢ50、ＳＫ101・106より古い時期の溝であり、出土遺物等から、17世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、北北東から南南西に向かって縦

走している。全長は7.28m、幅0.18m、深さ6cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。ＳＤ４は、ＳＢ45・46に切られ、ＳＢ43・44と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区北東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、Ｌ字状に鋭く屈曲している。全長7.28m、幅0.96m、深さ0.19mを測る。ＳＤ５の北部には、拳大程度の自然礫の集石がみられた。埋土は灰色粘質土であり、瓦質土器鉢（96）、伊万里系碗（97）、能茶山蓋（98）等の遺物が出土した。ＳＤ５の南辺は、ＳＤ３の東辺と切り合っているが、切り合い関係は不明である。ＳＤ５は、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、北西から南東に向かって、横走している。全長10.80m、幅0.88m、深さ0.32mを測る。埋土は灰色粘質土であり、蓋（99、106）、京焼き碗（101）、奈半利碗（103）、香炉（105）等の遺物が出土した。ＳＤ６は西端で２条に分岐し、ＳＫ124に切られており、ＳＫ124より古い時期の溝である。ＳＤ６は、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した溝と考えられる。

水溜り状遺構

ＳＰ１

ＳＰ１は、調査区東部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された水溜り状遺構である。長径3.20m、短径1.68m、深さ0.83mを測る。埋土は灰色粘質土であり、伊万里仏飯器（107）、石硯（130、131）等の遺物が出土した。ＳＰ１は、拳大から人頭大程度の自然礫の集石が逆Ｌ字状に配置されていた。ＳＰ１は、ＳＫ108、ＳＤ２南辺及びＳＤ３東辺の南端部を切っており、出土遺物等から、18世紀に機能し、廃絶した遺構と考えられる。

ピット

Ｐ１

Ｐ１は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。Ｐ１は、不整方形を呈し、直径90cm前後、深さ51cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器蓋（108、109）・杯身（110、111）・皿（112）、砥石（133、134）等の遺物が出土した。

P 2

P 2は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 2は、不整方形を呈し、直径96cm前後、深さ26cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器杯身（113)、石硯（128）等の遺物が出土した。

P 3

P 3は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 3は、不整方形を呈し、直径92cm前後、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び土師器の細片が出土した。

P 4

P 4は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、柱痕を有している。P 4は、方形を呈し、直径98cm前後、深さ29cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器杯身（114）等の遺物が出土した。

P 5

P 5は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層で検出され、柱痕を有している。P 5は、方形を呈し、直径112cm前後、深さ32cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び、土師器の細片が出土した。

P 6

P 6は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 6は、不整方形を呈し、直径80cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。P 6の東部は中世のピットに切られている。

P 7

P 7は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 7は不整方形を呈し、直径92cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

P 8

P 8は、調査区北西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 8は、隅丸方形を呈し、直径98cm前後、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、須恵器及び土師器の細片が出土した。

P 9

P 9 は、調査区北西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P 9 は、不整円形を呈し、直径76cm前後、深さ 9 cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、土師質土器皿（115）等の遺物が出土した。

P10

P10は、調査区北部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P10は円形を呈し、直径27cm前後、深さ17.1cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、唐津系碗（117）等の遺物が出土した。

P11

P11は、調査区西部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P11は円形を呈し、直径26cm前後、深さ38cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（116）等の遺物が出土した。

P12

P12は、調査区中央部のやや西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P12は円形を呈し、直径25cm前後、深さ15cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（118、119）等の遺物が出土した。

P13

P13は、調査区中央部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、柱痕を有している。P13は不整円形を呈し、直径38cm前後、深さ19cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器杯（124）、叩石（127）等の遺物が出土した。

P14

P14は、調査区北東端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P14は、円形を呈し、直径34cm前後、深さ35cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、尾戸碗（123）等の遺物が出土した。

P15

P15は、調査区西端部に位置し、第Ⅳ層上面で検出され、柱痕を有している。P15は円形を呈し、直径42cm前後、深さ32cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、土師質土器皿（120、121）等の遺物が出土した。

P16

P16は、調査区中央部南西寄りに位置し、第Ⅳ層上面で検出された。P16は、円形を呈し、

直径38cm前後、深さ25cmを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、青磁碗（125）等の遺物が出土した。

5．まとめ

Loc.40では、９世紀、16世紀後半、17世紀、18世紀の４時期の屋敷跡群の存在を確認することができた。

９世紀の建物址は、調査区北西部で検出されたが、調査区の北側に延びているため、規模や性格等は不明である。ＳＫ14は須恵器蓋（21）等の遺物が出土しており、この時期の土坑と考えられるが、性格等は不明である。

16世紀後半の屋敷跡群は、ＳＤ１・２により囲まれた範囲が考えられる。ＳＤ１により、門構様に囲まれた範囲の長辺は57.27ｍ、短辺は36.30ｍを測る。この中には、ＳＢ１～７・９～39の38棟の建物址群及び、ＳＫ５～10・12・13・15～85の80基の土坑が存在した。ＳＤ１南辺の西部は、東へ14.80ｍほど延び、そのあと北へ24.40ｍ程向い、コの字形を呈している。この北へ向かったＳＤ１の東側約2.50ｍは、遺構が全く存在せず、溝に沿って通路が存在した可能性が強い。

また、調査区の北東部には、ＳＤ２によりＬ字形に区画された範囲があり、長辺は33.40ｍ、短辺は20.00ｍを測る。この中には、ＳＢ８・40～42・47・48・50の７棟の建物址群及び、ＳＫ11・86～108の25基の土坑群が存在した。ＳＤ２は、南辺がＳＤ１の東辺を切っており、ＳＤ１より新しい時期の溝と考えられる。この範囲で検出された屋敷跡群は、北側のLoc.41の屋敷跡群に連続するものである。

17世紀の屋敷跡群は、ＳＤ３により、門構様に囲まれた長方形の範囲が考えられ、長辺は22.90ｍ、短辺は16.10ｍを測る。この中には、ＳＢ43～46・49・50の６棟の建物址群及び、ＳＫ90・95～108の15基の土坑群が存在した。

18世紀前半の遺構は、調査区東半部に分布していた。出土遺物等を考えると、ＳＫ89・93・99・101・105・106・109・110・121・124、ＳＤ５・６が18世紀前半の土坑及び、溝である。以上の土坑及び、溝の分布状況を考えると、調査区東半部に18世紀の屋敷跡が存在したが、それに伴う建物址群は検出されなかった。

当調査区で検出した建物址群は、全て溝で囲まれた範囲に存在し、東西棟の建物址の棟方向はＮ－67°－Ｗ～Ｎ－77°－Ｗ、南北棟の建物址の棟方向はＮ－14°－Ｅ～Ｎ－24°－Ｅのものが多く、井戸址は全く検出されなかった。

また、調査区の北東部では、16～18世紀の建物址群や土坑群が混在しており、複雑な様相を呈していた。

第1表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第 2 図	S B 1	2 × 3	3.46 × 4.76	1.28 ～ 1.82	N－72°－W	16.5	
〃	S B 2	1 × 2	1.60 × 3.42	1.33 ～ 1.75	N－74°－W	5.5	
第 3 図	S B 3	2 × 2	3.05 × 4.64	1.02 ～ 2.33	N－76°－W	14.2	
〃	S B 4	2 × 3	3.47 × 4.60	1.02 ～ 2.45	N－13°－E	16.0	
第 4 図	S B 5	2 × 2	3.88 × 4.98	2.28 ～ 2.63	N－82°－W	19.3	
〃	S B 6	1 × 2	1.44 × 3.57	1.37 ～ 1.97	N－16°－E	5.1	
第 5 図	S B 7	3 × 3	4.18 × 3.59	0.95 ～ 1.81	N－73°－W	15.0	
〃	S B 8	2 × 3	3.74 × 6.10	1.76 ～ 2.28	N－16°－E	22.8	
第 6 図	S B 9	2 × 3	3.83 × 7.08	1.78 ～ 2.70	N－18°－E	27.1	
〃	S B 10	2 × 3	3.57 × 5.96	1.28 ～ 3.00	N－70°－W	21.3	
第 7 図	S B 11	2 × 3	4.59 × 6.86	1.44 ～ 2.77	N－71°－W	31.5	
〃	S B 12	2 × 3	3.61 × 7.06	1.75 ～ 3.36	N－72°－W	25.5	
第 8 図	S B 13	2 × 2	4.85 × 5.09	1.96 ～ 2.64	N－70°－W	24.7	
〃	S B 14	2 × 2	3.90 × 5.52	1.32 ～ 2.78	N－18°－E	21.5	
第 9 図	S B 15	2 × 2	3.66 × 4.65	1.50 ～ 2.33	N－15°－E	17.0	
〃	S B 16	2 × 4	3.64 × 7.75	1.57 ～ 2.28	N－21°－E	28.2	
第 10 図	S B 17	2 × 3	3.46 × 6.48	1.60 ～ 3.02	N－22°－E	22.4	
〃	S B 18	2 × 4	3.15 × 5.85	1.38 ～ 1.77	N－15°－E	18.4	
第 11 図	S B 19	2 × 2	5.12 × 5.60	2.14 ～ 3.10	N－17°－E	28.7	
〃	S B 20	2 × 2	3.88 × 3.94	1.58 ～ 2.28	N－16°－E	15.3	
第 12 図	S B 21	2 × 2	3.24 × 4.11	1.38 ～ 2.16	N－75°－W	13.3	
〃	S B 22	2 × 2	3.40 × 5.20	1.55 ～ 2.85	N－73°－W	17.7	
第 13 図	S B 23	2 × 3	5.14 × 5.60	1.50 ～ 2.12	N－72°－W	28.8	
第 14 図	S B 24	4 × 3	5.48 × 6.18	1.32 ～ 2.40	N－73°－W	33.9	
第 13 図	S B 25	2 × 2	4.74 × 5.26	1.84 ～ 2.90	N－15°－E	24.9	
第 14 図	S B 26	2 × 2	3.69 × 5.23	1.64 ～ 2.62	N－15°－E	19.3	
第 15 図	S B 27	2 × 3	5.20 × 6.26	1.25 ～ 2.82	N－14°－E	32.6	
〃	S B 28	2 × 4	4.00 × 7.13	1.04 ～ 2.52	N－77°－W	28.5	
第 16 図	S B 29	3 × 4	5.16 × 7.53	1.23 ～ 2.78	N－67°－W	38.9	
第 17 図	S B 30	2 × 3	4.49 × 4.51	1.11 ～ 2.35	N－68°－W	20.2	

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第 17 図	S B 31	2 × 4	3.88 × 6.00	1.10 ～ 1.98	N－25°－E	23.3	
第 18 図	S B 32	2 × 2	3.25 × 3.39	1.16 ～ 2.23	N－73°－W	11.0	
〃	S B 33	1 × 1	2.70 × 3.68	2.63 ～ 3.68	N－73°－W	9.9	
第 19 図	S B 34	3 × 4	3.98 × 6.67	1.20 ～ 2.38	N－67°－W	26.5	
〃	S B 35	1 × 2	1.90 × 5.73	1.90 ～ 3.08	N－77°－W	10.9	
第 20 図	S B 36	1 × 2	2.12 × 2.93	1.14 ～ 2.12	N－20°－E	6.2	
〃	S B 37	2 × 3	4.84 × 5.82	1.56 ～ 2.60	N－14°－E	28.2	
第 21 図	S B 38	2 × 2	5.51 × 5.56	2.48 ～ 3.03	N－27°－E	30.6	
〃	S B 39	1 × 2	2.23 × 3.00	0.90 ～ 2.23	N－73°－W	6.7	
第 22 図	S B 40	2 × 4	3.63 × 7.33	1.67 ～ 2.16	N－15°－E	26.6	
〃	S B 41	2 × 4	5.29 × 6.33	1.32 ～ 1.86	N－72°－W	33.5	
第 23 図	S B 42	2 × 3	3.38 × 5.92	1.68 ～ 2.12	N－71°－W	20.0	
第 24 図	S B 43	2 × 2	6.27 × 6.82	0.84 ～ 3.34	N－73°－W	42.8	
第 25 図	S B 44	3 × 5	7.80 × 8.78	1.53 ～ 2.78	N－20°－E	68.5	
第 23 図	S B 45	3 × 3	4.74 × 5.44	0.72 ～ 1.82	N－75°－W	25.8	
第 26 図	S B 46	2 × 5	3.53 × 9.10	1.60 ～ 2.33	N－19°－E	32.1	
第 27 図	S B 47	2 × 2	2.70 × 4.37	1.04 ～ 2.55	N－71°－W	11.8	
〃	S B 48	1 × 2	2.16 × 3.19	1.37 ～ 2.16	N－15°－E	6.9	
第 28 図	S B 49	2 × 3	2.72 × 5.52	1.32 ～ 2.20	N－20°－E	15.0	
〃	S B 50	2 × 3	4.19 × 4.99	1.60 ～ 2.35	N－68°－W	20.9	

第2表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模（m）			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第29図	SK 1	長楕円形	1.49	0.39	0.10	N－65°－W	逆台形	
〃	SK 2	不整円形	0.76	0.64	0.38	N－70°－E	箱形	
〃	SK 3	楕円形	1.33	0.72	0.42	N－85°－W	〃	
〃	SK 4	隅丸方形	1.96	(0.84)	0.24	N－68°－W	逆台形	
〃	SK 5	楕円形	1.00	0.77	0.33	N－65°－W	箱形	
〃	SK 6	不整円形	0.82	0.71	0.15	N－5°－W	逆台形	
———	SK 7	不定形	1.30	0.80	0.19	N－56°－W	〃	
———	SK 8	楕円形	1.57	0.90	0.14	N－62°－W	〃	
———	SK 9	〃	0.96	0.79	0.14	N－17°－E	〃	
———	SK 10	不整円形	0.84	0.77	0.16	N－17°－E	〃	
第30図	SK 11	隅丸長方形	2.20	1.16	0.12	N－21°－E	〃	
———	SK 12	不整円形	0.81	0.71	0.23	N－4°－W	〃	
———	SK 13	隅丸三角形	(0.73)	0.56	0.18	N－53°－E	〃	
———	SK 14	円形	2.84	2.65	0.23	N－20°－E	擂鉢形	
第30図	SK 15	楕円形	1.16	0.83	0.10	N－64°－W	逆台形	
〃	SK 16	長楕円形	1.12	0.40	0.24	N－61°－W	擂鉢形	
〃	SK 17	不定形	2.35	1.94	0.19	N－52°－W	逆台形	
〃	SK 18	楕円形	1.05	0.61	0.45	N－14°－E	擂鉢形	
〃	SK 19	不整楕円形	1.81	1.50	0.20	N－35°－W	逆台形	
第31図	SK 20	〃	1.25	0.69	0.27	N－18°－E	箱形	
〃	SK 21	隅丸長方形	1.09	0.58	0.17	N－21°－E	逆台形	
〃	SK 22	不整円形	0.65	0.55	0.10	N－45°－W	〃	
〃	SK 23	〃	0.87	0.76	0.20	N－65°－W	箱形	
〃	SK 24	円形	1.21	1.13	0.21	N－88°－E	逆台形	
第32図	SK 25	隅丸台形	2.43	1.97	0.55	N－76°－E	箱形	
〃	SK 26	不整楕円形	1.28	0.75	0.09	N－26°－W	逆台形	
〃	SK 27	楕円形	0.91	0.70	0.07	N－20°－W	〃	
〃	SK 28	〃	0.80	0.62	0.16	N－74°－E	擂鉢形	
第33図	SK 29	隅丸三角形	5.25	4.02	0.76	N－31°－E	〃	
〃	SK 30	不整楕円形	1.99	1.04	0.58	N－49°－E	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 33 図	SK 31	不整円形	0.90	0.77	0.19	N－16°－W	浅い箱形	
第 34 図	SK 32	不定形	1.18	0.44	0.59	N－82°－W	擂鉢形	
〃	SK 33	楕円形	0.99	0.58	0.12	N－17°－E	逆台形	
〃	SK 34	不整円形	0.76	0.68	0.42	N－ 7°－W	擂鉢形	
〃	SK 35	円形	0.76	0.74	0.14	N－ 4°－W	逆台形	
〃	SK 36	隅丸三角形	1.32	0.91	0.17	N－ 6°－W	〃	
〃	SK 37	不定形	1.18	0.41	0.18	N－10°－W	箱形	
第 35 図	SK 38	不整円形	0.71	0.64	0.15	N－45°－E	逆台形	
〃	SK 39	〃	0.78	0.70	0.25	N－ 5°－W	浅い箱形	
〃	SK 40	不整楕円形	0.80	0.52	0.25	N－17°－E	擂鉢形	
〃	SK 41	不整円形	0.67	0.62	0.35	N－ 5°－E	〃	
〃	SK 42	〃	1.13	(0.90)	0.49	N－85°－W	箱形	
———	SK 43	〃	(0.78)	0.76	0.45	N－ 5°－W	擂鉢形	
第 35 図	SK 44	〃	0.75	0.66	0.07	N－77°－E	逆台形	
———	SK 45	不定形	(0.81)	(0.40)	0.13	N－77°－E	〃	
第 35 図	SK 46	不整円形	0.78	0.64	0.13	N－ 8°－E	〃	
〃	SK 47	楕円形	1.17	(0.66)	0.04	N－77°－E	〃	
———	SK 48	〃	1.10	0.70	0.39	N－80°－W	擂鉢形	
———	SK 49	〃	(0.91)	1.19	0.40	N－ 6°－W	〃	
第 35 図	SK 50	不定形	(2.53)	(1.38)	0.38	N－29°－E	〃	
第 36 図	SK 51	長楕円形	2.13	0.25	0.12	N－71°－W	浅い逆台形	
〃	SK 52	不整円形	(0.59)	0.63	0.07	N－41°－W	逆台形	
〃	SK 53	円形	0.71	0.70	0.18	N－35°－E	〃	
〃	SK 54	楕円形	1.30	0.74	0.12	N－74°－W	〃	
〃	SK 55	〃	0.75	0.53	0.11	N－81°－W	〃	
第 37 図	SK 56	隅丸台形	0.65	0.53	0.14	N－67°－E	〃	
第 36 図	SK 57	長楕円形	4.97	0.77	0.36	N－70°－W	擂鉢形	
第 37 図	SK 58	不整楕円形	1.08	0.50	0.32	N－15°－E	箱形	
〃	SK 59	楕円形	0.90	0.45	0.14	N－77°－W	擂鉢形	
〃	SK 60	不整円形	0.82	0.76	0.12	N－ 9°－E	逆台形	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
———	SK 61	隅丸長方形	(3.38)	0.64	0.15	N－76°－W	逆台形	
第 37 図	SK 62	不整円形	0.75	0.63	0.54	N－88°－W	擂鉢形	
〃	SK 63	〃	0.74	0.54	0.09	N－85°－E	逆台形	
第 38 図	SK 64	隅丸方形	0.94	0.82	0.15	N－20°－E	〃	
〃	SK 65	楕円形	0.76	0.50	0.09	N－39°－W	〃	
〃	SK 66	〃	0.75	0.58	0.14	N－23°－E	〃	
〃	SK 67	円形	0.78	0.68	0.11	N－41°－W	〃	
〃	SK 68	楕円形	1.09	0.76	0.29	N－50°－W	擂鉢形	
〃	SK 69	〃	1.26	1.00	0.26	N－28°－E	箱形	
第 39 図	SK 70	不整円形	1.54	1.19	0.43	N－69°－W	擂鉢形	
〃	SK 71	楕円形	1.18	0.68	0.11	N－38°－E	逆台形	
〃	SK 72	円形	0.77	0.75	0.26	N－1°－W	擂鉢形	
第 40 図	SK 73	不定形	1.00	0.30	0.09	N－52°－W	逆台形	
第 39 図	SK 74	不整方形	1.44	0.96	0.17	N－65°－W	〃	
〃	SK 75	不整楕円形	2.64	1.35	0.10	N－44°－E	〃	
〃	SK 76	円形	0.74	0.73	0.21	N－59°－W	擂鉢形	
第 40 図	SK 77	不整円形	1.07	0.91	0.16	N－50°－W	逆台形	
〃	SK 78	不定形	2.30	0.71	0.28	N－69°－W	〃	
〃	SK 79	不整楕円形	1.03	0.70	0.11	N－25°－W	〃	
〃	SK 80	長方形	1.21	0.76	0.27	N－17°－E	箱形	
〃	SK 81	隅丸長方形	0.76	0.50	0.24	N－20°－E	擂鉢形	
第 41 図	SK 82	楕円形	1.48	0.97	0.24	N－17°－E	逆台形	
〃	SK 83	隅丸長方形	1.87	0.80	0.21	N－15°－E	箱形	
〃	SK 84	〃	1.39	1.10	0.30	N－17°－E	〃	
〃	SK 85	不整円形	(2.68)	2.20	0.49	N－87°－W	逆台形	
第 42 図	SK 86	〃	1.24	1.10	0.49	N－58°－W	擂鉢形	
〃	SK 87	隅丸長方形	1.14	0.64	0.09	N－20°－E	逆台形	
〃	SK 88	不整円形	0.88	0.78	0.12	N－73°－W	〃	
〃	SK 89	隅丸長方形	1.44	0.75	1.20	N－64°－W	箱形	
〃	SK 90	不整円形	0.83	0.74	0.33	N－68°－W	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 42 図	SK 91	不整楕円形	0.99	0.62	0.22	N－ 7°－E	逆台形	
第 43 図	SK 92	楕円形	(0.78)	0.96	0.33	N－75°－W	擂鉢形	
〃	SK 93	不整方形	1.45	1.30	0.44	N－15°－E	逆台形	
〃	SK 94	隅丸長方形	0.91	0.73	0.42	N－70°－W	箱形	
〃	SK 95	不定形	(1.64)	0.89	0.14	N－70°－W	逆台形	
〃	SK 96	不整円形	0.86	0.63	0.45	N－10°－E	〃	
〃	SK 97	楕円形	(0.80)	0.66	0.13	N－80°－W	〃	
〃	SK 98	〃	(1.02)	0.76	0.10	N－10°－E	〃	
―――	SK 99	隅丸方形	0.83	0.74	0.24	N－ 3°－E	〃	
第 43 図	SK100	鉤形	(1.83)	0.11	0.08	N－46°－W	U字形	
〃	SK101	楕円形	1.71	(1.25)	0.31	N－28°－E	擂鉢形	
第 44 図	SK102	隅丸長方形	0.84	0.59	0.33	N－73°－W	箱形	
〃	SK103	〃	1.16	0.72	0.32	N－72°－W	〃	
〃	SK104	長楕円形	4.35	0.40	0.13	N－18°－E	逆台形	
〃	SK105	隅丸方形	1.36	1.19	0.41	N－67°－W	箱形	
〃	SK106	隅丸三角形	(1.69)	1.16	0.51	N－19°－E	〃	
―――	SK107	隅丸長方形	(1.82)	1.22	0.19	N－22°－E	逆台形	
第 44 図	SK108	隅丸方形	1.43	(1.01)	0.33	N－80°－W	箱形	
―――	SK109	不整楕円形	(1.90)	0.90	0.92	N－14°－E	〃	
第 45 図	SK110	隅丸長方形	1.34	1.05	0.90	N－17°－E	〃	
〃	SK111	不整方形	1.16	0.95	0.33	N－73°－W	〃	
〃	SK112	〃	(0.86)	1.09	0.29	N－73°－W	〃	
〃	SK113	円形	1.95	1.84	0.42	N－76°－E	擂鉢形	
〃	SK114	〃	1.52	1.50	0.62	N－82°－W	箱形	
〃	SK115	楕円形	(0.68)	0.83	1.03	N－25°－E	〃	
〃	SK116	〃	1.42	0.98	0.18	N－17°－E	逆台形	
―――	SK117	〃	1.68	0.90	0.13	N－29°－E	〃	
―――	SK118	〃	0.96	0.64	0.14	N－14°－E	〃	
―――	SK119	隅丸長方形	1.05	0.71	0.12	N－22°－E	〃	
―――	SK120	不整円形	1.05	0.90	0.13	N－86°－W	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
———	SK121	楕円形	1.31	0.90	0.21	N－8°－E	擂鉢形	
———	SK122	不整円形	1.97	1.28	0.34	N－38°－E	〃	
———	SK123	楕円形	0.80	0.43	0.12	N－43°－E	逆台形	
———	SK124	〃	1.84	0.80	0.38	N－57°－W	擂鉢形	

第3表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅱ層	土師質土器 杯	—— (2.9) —— 6.6	平底。	内外面ともロクロナデ。	胎土、茶色。
2	第Ⅰ層	ぐい呑み	6.5 2.3 —— 2.4	口縁端、つまみ上げ、低い高台を有する。	全面に施釉。	伊万里系。
3	第Ⅲ層	青磁 碗	—— (2.5) —— 6.2	高台内の削りが深い。	見込に印花文がある。	濃緑色釉。
4	〃	土師質土器 鍋	26.6 (5.7) —— ——	口縁部に粘土帯を貼付。	体部外面に指頭圧痕。 内面ナデ調整。	胎土、黄橙色。
5	〃	擂鉢	28.2 (8.3) —— ——	片口がみられる。	内外面ともロクロナデ。 条線10条1単位。	備前。

第4表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
6	SB 42	土師質土器 杯	—— (3.3) —— 5.0	平底。	ロクロ目痕が残る。 内外面ともロクロナデ。	胎土、淡黄橙色。
7	〃	〃	11.5 3.3 —— 4.4	体部は、外反ぎみに立ち上がる。 平底。	〃	〃
8	SB 24	青磁 碗	13.6 (2.1) —— ——	口縁端は丸味がかる。	内面に印花文。 内外面、貫入あり。	緑色釉。 胎土、灰白色。
9	SB 14	〃	18.0 (2.5) —— ——	口縁端は丸味がかる。 体部は内湾して立ち上がる。	口縁部外面に雷文を施す。 内面に、1条の界線。 内外面、貫入あり。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。
10	SB 13	土師質土器 皿	10.5 2.2 —— 6.1	口縁端は、やや外側へ折り返す。 体部は、外反ぎみに立ち上がる。	内外面ともナデ調整。	胎土、黄橙色。
11	〃	〃	11.6 2.5 —— 5.0	体部は，平坦な底部から内湾して外上方に立ち上がる。	〃	〃
12	SB 26	白磁 皿	8.8 (1.5) —— ——	体部は、やや内湾ぎみに立ち上がる。	内外面、貫入あり。	白色釉。 胎土、灰白色。
13	SB 29	土師質土器 皿	13.4 (2.6) —— ——	体部は、外反ぎみに立ち上がる。	口縁部は、ヨコナデ調整。	胎土、淡赤褐色。 胎土中に砂粒多し。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
14	SB 31	土師質土器 皿	9.8 2.8 —— 3.2	体部は、外反気味に立ち上がる。	口縁部は，ヨコナデ調整。	胎土、淡赤褐色。
15	SB 11	土師質土器 鍋	24.0 (5.5) 28.0 ——	ほぼ直立に立ち上がる。体部から内湾気味に続く口縁部を有する。	内外面ともナデ調整。	胎土、黒灰色。両面に煤状の炭化物付着。
16	SK124	碗	10.4 6.2 —— 4.8	高台内の削りが深い。	外面に唐草文。 内面口縁部に2条の界線。	全面に透明釉。伊万里。
17	SK 21	土師質土器 皿	12.2 (2.6) —— ——	体部は、外反気味に立ち上がる。	口縁部は、ヨコナデで仕上げる。体部にナデ調整。	胎土、淡赤褐色。
18	SK 30	白磁 小皿	9.8 (2.0) —— ——	口縁端は丸く終る。	内外面ロクロナデ調整。	胎土、乳白色。透明釉。
19	〃	青磁 碗	15.0 (1.5) —— ——	〃	口縁部外面に、剣先状の細蓮弁が入る。貫入あり。	胎土、灰白色。淡青緑色釉。
20	SK 38	土師質土器 皿	10.7 (2.3) —— ——	口縁端は、やや尖り気味。	口縁部をヨコナデ調整。	胎土、淡赤褐色。
21	SK 14	須恵器 蓋	12.8 1.4 —— 7.6	口縁端部は丸く終る。	口縁部、ロクロナデ調整。	胎土、灰色。
22	SK 58	土師質土器 杯	—— (2.2) —— 5.0	平坦な底部から、外反気味に立ち上がる底部を有する。	内外面、ロクロナデ調整。ロクロ目が残る。	胎土、淡赤褐色。
23	SK 51	青磁 皿	12.3 (1.4) —— ——	口縁端部は丸味をもつ。稜花皿である。	口縁部内面に、3条の界線。全面に貫入が入る。	胎土、灰白色。淡青緑色釉。
24	SK 70	〃	12.4 (1.6) —— ——	〃	〃	胎土、淡灰色。淡青緑色釉。
25	SK 89	土師質土器 大皿	47.8 (4.6) —— ——	口縁部と体部間に稜をもつ。	内外面ナデ調整。	胎土、淡赤褐色。
26	〃	土師質土器 釜	12.7 (7.9) 13.4 ——	口縁は直立して立ち上がる。ツバはやや下方気味。	〃	胎土、暗灰色。
27	〃	徳利	—— (11.2) 9.9 6.0	胴部下半に稜を有する。	内外面ロクロナデ調整。	備前。
28	〃	土師質土器 鍋	15.4 (8.6) —— ——	口縁部は、外側に折り曲げ突帯となる。	口縁部、ヨコナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
29	SK 89	小皿	10.4 2.2 —— 4.2	平底。	内面施釉。	瀬戸・美濃系。 内面に重ね焼痕あり。
30	〃	碗	6.9 3.6 —— 2.7	外反する体部を有し、口縁端はつまみあげている。	高台の外面に2条の界線。	見込に「寿」銘。 伊万里系。
31	〃	〃	8.4 4.4 —— 2.4	ハの字状の高台で、削り出しは浅い。	口縁端ロクロナデ。	伊万里。
32	〃	〃	9.4 4.9 —— 3.4	高台の先端はやや尖り気味。	内面口縁部に1条の界線。 外面草花文。	〃
33	〃	〃	12.6 5.1 —— 4.8	高台内の削りが深い。	外面口縁部に1本の沈線。	奈半利。 磁器。
34	〃	〃	7.8 4.3 —— 3.1	体部は、外方へ直線的に立ち上がる。	内面口縁端に1条の界線。	伊万里系。
35	〃	〃	9.3 5.2 —— 3.6	口縁部を外側へ折り返す。	見込に「白鷺」。 内面口縁端2条の界線。	〃
36	〃	〃	11.2 6.2 —— 3.9	高台内の削りが深い。	高台外面に2条の界線。	〃
37	〃	〃	10.4 6.8 —— 5.4	体部は厚く，口縁端はつまみ上げ。	内面口縁端に2条、底部に1条の界線。	〃
38	〃	蓋	9.2 2.7 —— 3.7	体部は直線的である。	内面、見込に雲文。外面、染付。	〃
39	〃	碗	—— (4.5) —— 5.9	高台内の削りが深い。	外面，体部と高台の境に2条の界線。	〃
40	〃	〃	15.4 6.0 —— 6.4	口縁は外開き。 高台の先端は尖り気味。	口縁部を外側へ折り返す。	伊万里。
41	〃	〃	9.2 5.2 —— 4.1	体部は内湾ぎみに立ち上がる。	内面に3条の界線。 外面、綾杉文。	〃
42	〃	〃	17.0 (5.6) —— ——	体部は外開き。	内外面を染付。	〃
43	〃	〃	8.0 5.4 —— 3.4	口縁端を丸くおさめる。	外面、綾杉文。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
44	SK 89	瓶	1.3 (7.4) —— ——	体部は丸味をもつ。 口縁部は直線的に立ち上がる。	外面全体に、タコ唐草文が施される。	伊万里。
45	〃	〃	1.4 13.0 6.0 4.0	〃	〃	〃
46	〃	徳利	—— (19.8) 8.3 ——	体部は直線的に立ち上がる。	外面に梅花文。	〃
47	SK 92	土師質土器 小皿	5.8 1.0 —— 3.6	平底の底部に続く口縁部は外上方に立ち上がる。口唇部は尖り気味である。	口縁端はつまみ上げる。 全体をナデ調整。	
48	SK 93	土師質土器 釜	10.8 6.9 11.8 6.2	口縁部は直接的に立ち上がり、先端は丸味をもつ。 鍔は、下方へさがる。	内外面とも、ナデ調整。	
49	〃	碗	7.0 3.6 —— 3.1	口縁端は丸味をもつ。	外面に染付。	伊万里系。
50	〃	〃	—— (1.6) —— 2.6	高台はハの字状を呈し、先端は尖り気味。	見込に染付。	〃
51	〃	蓋	5.2 1.8 —— 2.2	天井部は丸味をもち、つまみを有する。	天井部外面に染付。	〃
52	〃	碗	6.2 2.8 —— 2.2	高台内の削りが深い。	口縁端をつまみ上げる。	
53	〃	〃	—— (2.8) —— 3.4	底部にくらべて、体部の器壁は薄い。	外面に染付。 見込に※印。	伊万里系。
54	〃	〃	10.2 6.4 —— 4.2	高台は、ハの字状で厚みは薄い。	内外面に染付。	〃
55	〃	〃	10.2 (4.5) —— ——	体部に続く口縁部は直線状に外上方へ開く。	口縁部内面に2条の界線がある。体部外面に染付。	〃
56	〃	〃	—— (4.0) —— 5.6	高い高台をもち、内湾気味に体部がのびる。	高台外面に2条の界線が施される。	〃
57	SK 99	紅猪口	4.6 1.2 —— 1.4	口縁端は縁取りをして平坦にしている。	内外面に白色釉がみられる。	伊万里。
58	SK101	碗	10.0 5.7 —— 4.2	丸味を持った体部に続く口縁部は直線状に外上方に開くが、わずかに外反する。	体部外面及び見込に染付。	伊万里系。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　　態	文　様　・　手　法	備　　考
59	ＳＫ105	碗	11.4 7.0 —— 4.3	高台内の削りが深い。	外面に染付。	瀬戸・美濃系。
60	ＳＫ106	土師質土器 釜	10.4 (3.2) 10.7 ——	口縁部は直線状に立ち上がる。 鍔は下方気味。	全体をナデ調整。	
61	〃	皿	9.6 2.9 —— 5.2	高台の幅は広い。	外面に染付。	能茶山。
62	〃	碗	8.4 3.3 —— 3.2	底部にくらべて、体部は厚みをもつ。	高台部を除き、施釉。	唐津系碗か？
63	〃	〃	12.4 5.0 —— 4.3	高台内の削りが深い。	見込の釉を、蛇目状にかき取る。	〃
64	〃	〃	9.4 4.8 —— 3.3	口縁端を外方へやや折り返す。	外面に染付。	伊万里。
65	〃	瓶	—— (6.9) 9.1 4.2	球形の体部をもつ。	外面上部に染付。	〃
66	ＳＫ109	擂　鉢	2.7 (4.5) —— ——	口縁部は丸味をおびる。	口縁部に２本の沈線。 ロクロナデ調整。	備前。
67	〃	皿	14.2 3.2 —— 8.4	高台の高さは低い。	口縁内面に染付。	伊万里。
68	ＳＫ110	碗	10.8 (4.4) —— ——	体部の器壁は薄い。	外面に唐草文を、内面口縁部に帯状の菱形文を染付。	
69	〃	〃	10.0 7.0 —— 5.8	体部は直線的にのびる。	外面に蝶を染付。	瀬戸・美濃系。
70	〃	〃	10.7 (5.1) —— ——	体部は、直線的に外方へのびる。	外面に絵付。	伊万里。
71	〃	〃	8.4 4.0 —— 2.8	高台内の削りが深い。	外面、高台内に染付。	
72	ＳＫ 121	土師質土器 杯	—— (2.0) —— 3.6	平底。	内面にロクロ目が残る。	胎土、淡黄褐色。
73	ＳＤ　1	〃	13.7 (2.5) —— ——	体部は直線的である。	口縁部内外面をナデ調整する。	胎土、褐色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
74	SD 1	土師質土器 杯	13.0 3.8 —— 5.6	平坦な平底をもち、体部は直線的。	両面共に、ロクロナデ調整。 内面にロクロ目が残る。 底部は、回転糸切り。	
75	〃	土師質土器 鍋	35.8 (10.7) —— ——	口縁部が外側へ屈曲している。	外面、縦方向のハケ調整。	
76	〃	〃	52.6 (7.3) —— ——	〃	外面、ハケ調整。	
77	〃	〃	34.4 (5.5) —— ——	口縁部は内湾する。	口縁端面をヘラ切り調整。	
78	〃	瓦質土器 鍋	全長(5.4) 径 1.7	棒状の脚部である。	端部を指ナデする。	色調、淡黒灰色。
79	〃	擂鉢	24.8 11.7 —— 10.4	口縁部は内湾する。	内面に、8条1単位の条線。	備前。
80	〃	〃	28.4 (8.8) —— ——	口縁は内湾ぎみ。	内面に、8条1単位の条線。 内外面とも、ロクロナデ調整。	〃
81	〃	〃	30.0 (7.8) —— ——	口縁部は、やや内湾して立ち上がる。	口縁部、ヨコナデ調整。体部、ロクロナデ調整。	〃
82	〃	〃	31.2 (6.1) —— ——	口縁端は丸味をもつ。	体部、内面に5条の条線。	〃
83	〃	〃	—— (5.4) —— 10.0	底部の破片。体部は厚みをもつ。	内面に10条1単位の条線。	〃
84	〃	青磁 碗	15.4 (4.8) —— ——	口縁部を軽く外側へ折り返す。	口縁端を外方へ折り返す。	胎土、灰白色。 淡緑色釉。
85	〃	〃	—— (2.3) —— 5.0	高台内の削りが浅い。	畳付にも施釉。 全面に貫入が入る。	胎土、淡赤灰色。 淡青緑色釉。
86	〃	白磁 皿	10.0 2.1 —— 4.3	高台端をヘラ切り。	内面口縁部から、外面高台部まで施釉。 貫入が入る。	胎土、灰白色。 白色釉。 口はげ。
87	〃	染付 碗	15.0 (4.5) —— ——	器壁は薄い。	口縁部内面に2条の界線。 外面には、波とう文とアラベスク文が染付される。	胎土、灰白色。 白色釉。
88	〃	碗	—— (1.9) —— 5.4	高台内の削りが深い。	高台外面に3条の界線。 体部に雀と笹を施文。	胎土、灰白色。 伊万里系。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
89	SD 1	碗	10.6 (3.8) —— ——	体部は丸味をもつ。	体部外面に絵付。	胎土、灰白色。
90	〃	皿	—— (1.4) —— 7.0	高台内の削り出しが浅い。	砂止め。 見込に絵付。	〃
91	SD 2	瓦質土器 擂鉢	26.6 (9.5) —— ——	口縁端部を面取り。	内面、ヨコナデ調整。 細い条線。	外面に指頭圧痕。
92	〃	擂鉢	31.0 (6.5) —— ——	口縁端は丸味をもつ。	内面に細い条線。	備前。
93	SD 3	土師質土器 釜	14.8 (5.7) —— ——	口縁端を折り返す。	内外面ともヨコナデ調整。	
94	〃	擂鉢	25.8 9.0 —— ——	口縁端は、直線的に立ち上がる。	内面に細い条線。	備前。
95	〃	徳利	2.5 15.2 8.3 5.9	体部下方で、押え込みによる器形成形。	全体をロクロナデ調整。	〃
96	SD 5	瓦質土器 鉢	16.5 8.2 18.0 16.6	底部に3個の脚がつく。	内面に指頭圧痕。	
97	〃	碗	10.7 5.0 —— 4.2	口縁部は、つまみ上げ。	体部下半に稿葉蓮弁。 内面口縁部に雷文を染付。	伊万里系か？
98	〃	蓋	9.5 2.8 —— 3.5	天井部は丸味をもつ。	外面及び見込に絵付。	能茶山。
99	SD 6	〃	4.3 1.4 —— 2.6	天井部につまみを有する。 口縁端に返りが付く。	天井部外面に施釉。	
100	〃	碗	—— (2.5) —— 3.1	高台先端は尖る。	高台外面に2条の界線。	
101	〃	〃	9.2 (4.3) —— ——	体部は内湾する。	外面に笹の陶胎上絵。	京焼。
102	〃	皿	12.2 3.3 —— 4.2	高台内への削りは浅い。	底部外面に墨書。 見込、蛇ノ目釉ハギ。	
103	〃	碗	12.4 4.6 —— 4.8	高台内の削りが深い。	ロクロナデ調整。	奈半利。 陶器。

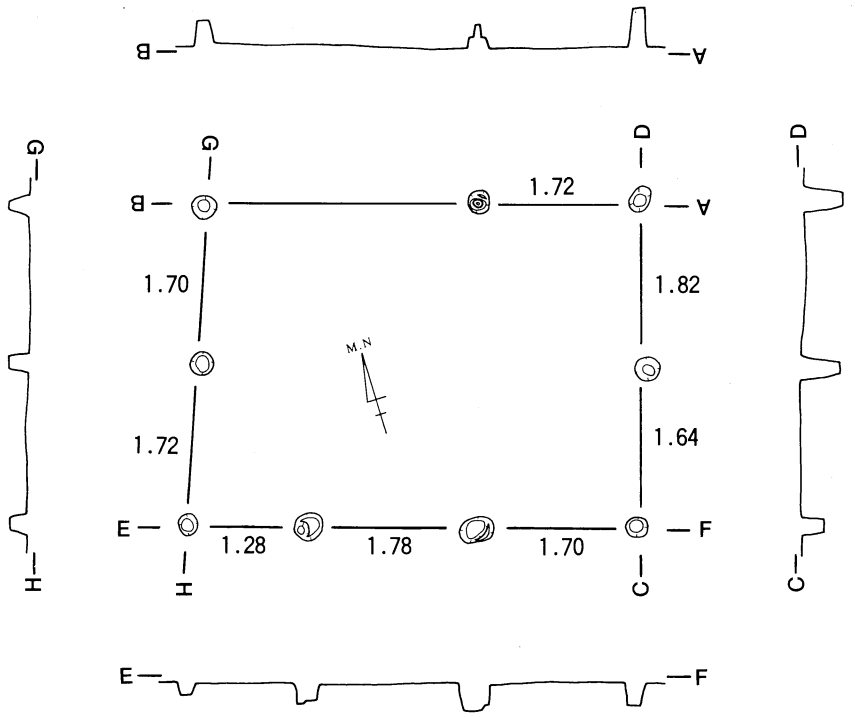
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
104	SD 6	碗	—— (3.1) —— 5.8	体部は内湾ぎみ。	高台外面に3条の界線。	磁器。
105	〃	香炉	—— (3.2) 9.5 3.6	腰部に3ケ所の突起をもつ。	見込に、細かい砂粒が窯着している。	〃
106	〃	蓋	10.0 3.0 —— 5.0	天井部は平坦である。	天井部に染付。	
107	SP 1	仏飯器	—— (3.7) —— 3.7	体部は、直線状に立ち上がる。	高台端は、面取りを施す。	伊万里系。
108	P 1	須恵器 蓋	12.9 (1.9) —— ——	口縁部を内側へ折り返す。	内外面ともロクロナデ調整。	胎土、灰白色。
109	〃	〃	13.6 (1.2) —— ——	〃	〃	胎土、灰色。
110	〃	須恵器 杯	—— (1.3) —— 8.1	低い高台を貼付する。	内外面ともロクロナデ調整。 底部内面は、ナデ調整。	
111	〃	〃	—— (2.0) —— 10.2	平底の底部から、外方へ直線的に立ち上がる。	不明。	磨耗が著しい。
112	〃	須恵器 皿	13.8 2.3 —— 13.0	口縁端は丸くおさめる。	口縁部をロクロナデ調整。	
113	P 2	須恵器 杯	—— (2.1) —— 9.0	ハの字状の高台を貼付する。	体部を、ロクロナデ調整。	
114	P 4	〃	—— (2.6) —— 9.4	〃	〃	
115	P 9	土師質土器 皿	17.4 2.2 —— 9.0	体部は、外方へ直線的にのびる。	口縁部はヨコナデ調整。	胎土、褐色。
116	P 11	〃	10.2 (2.4) —— ——	体部はやや内湾気味である。	〃	
117	P 10	碗	—— (2.1) —— 5.6	高台端面を面取りする。	体部は薄く仕上げる。	陶器。
118	P 12	土師質土器 杯	11.6 3.9 —— 4.6	体部は、直線的に立ち上がり、口縁端は面取り。	内面にロクロ目が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
119	P 12	土師質土器 杯	10.9 3.8 —— 4.7	平底。	体部はナデ調整。	
120	P 15	土師質土器 皿	12.2 2.4 —— 7.6	体部は厚みをもつ。	口縁部はヨコナデ調整。 体部はナデ調整。	
121	〃	〃	11.8 (2.4) —— ——	体部は外反する。	口縁部、ヨコナデ調整。	
122	P 14	碗	13.2 (3.9) —— ——	口縁端は丸味をもつ。	外面に染付。	
123	〃	〃	—— (6.0) —— 4.0	体部は丸味をもち、内湾する。		尾戸。
124	P 13	土師質土器 杯	—— (4.5) —— 4.5	平底。	内外面にロクロ目痕をもつ。	
125	P 16	青磁 碗	12.7 (3.2) —— ——	体部は、内湾気味に立ち上がる。	体部外面に、剣先状の蓮弁。	胎土、淡赤褐色。 緑色釉。

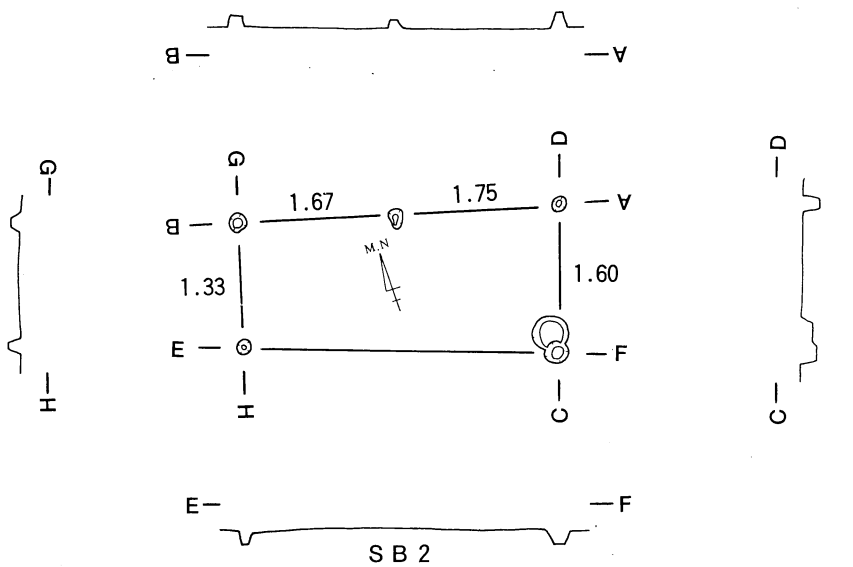
第5表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
126	SD 1	石斧	10.9 1.4 1.3 25.6	粘板岩	磨製の柱状片刃石斧。	混入である。
127	P 13	叩石	14.9 5.2 2.8 315.0	砂岩	楕円状の敲打痕をもつ。	
128	P 2	石硯	(4.6) (3.0) 0.9 11.0	粘板岩	方硯である。 擦痕を有する。	
129	SK 55	〃	(4.0) (2.7) (7.0) 5.0	〃	〃	
130	SP 1	〃	(10.0) 5.9 1.9 145.6	〃	よく研磨された方硯で使用痕が残る。	
131	〃	〃	(15.7) 6.0 1.6 230.0	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器　種	計測値 (cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　　徴	備　考
132	S K108	砥　石	8.8 (6.2) 3.9 365.4	砂　岩	1面は剝離面であるが、その他は研磨面で擦痕を有す。	
133	P　1	〃	(5.6) (4.9) 0.9 31.0	〃	1面のみが、研磨面。その他は剝離面。擦痕を有す。	
134	〃	〃	10.4 4.5 2.4 145.4	〃	3面が研磨面。	



SB1

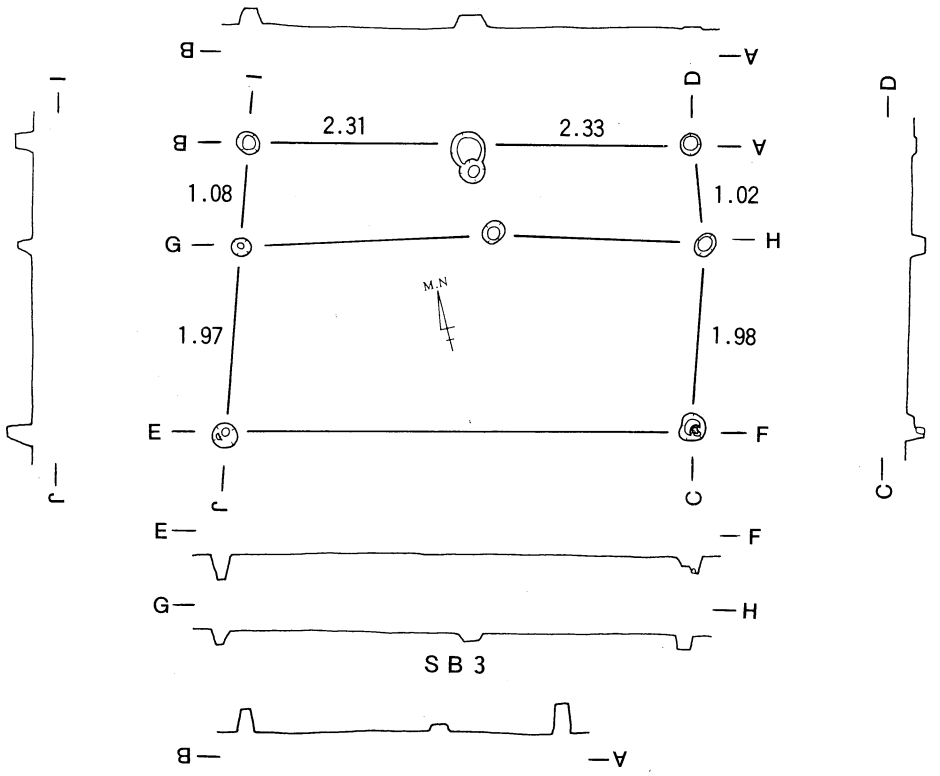


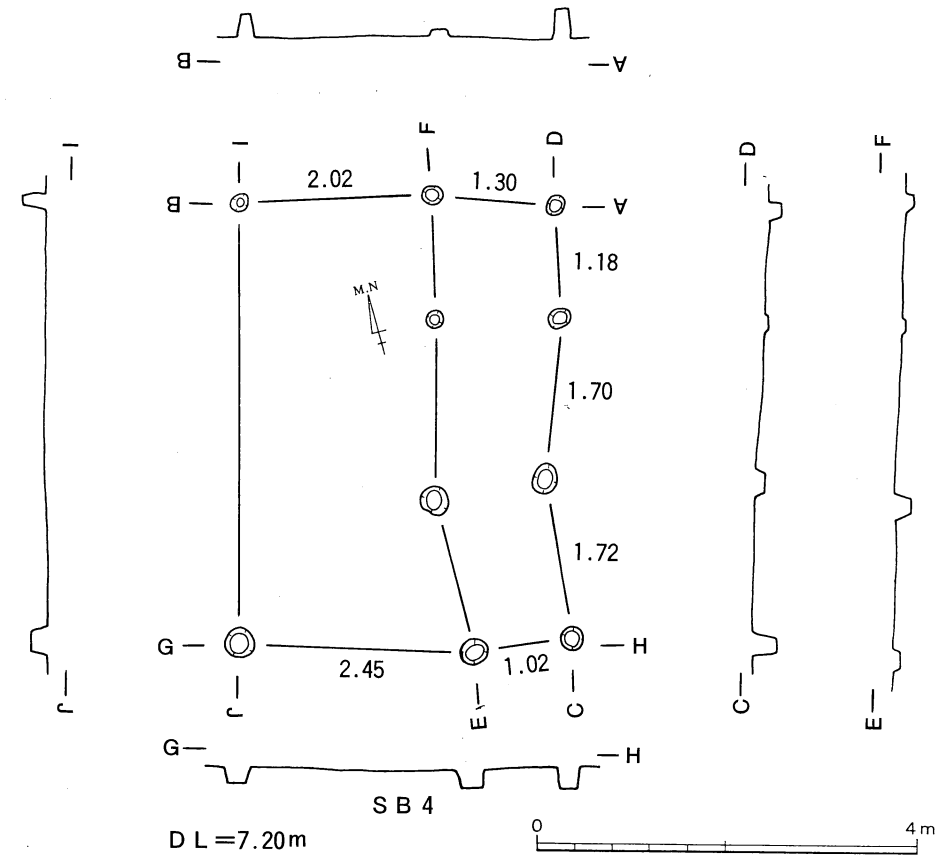
SB2

DL=7.20m

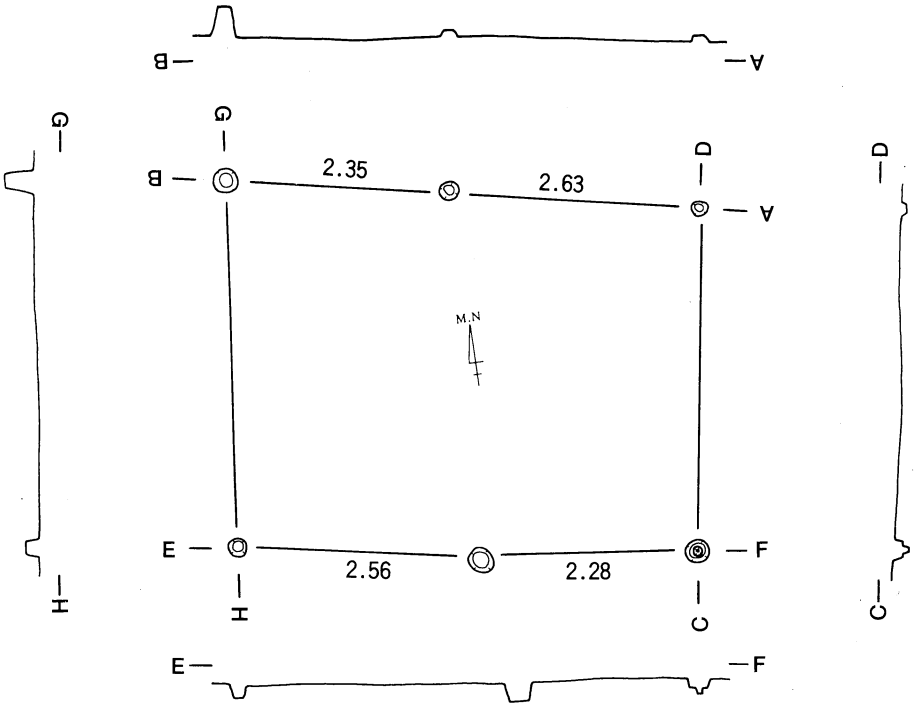
0 4m

第2図　SB1・2

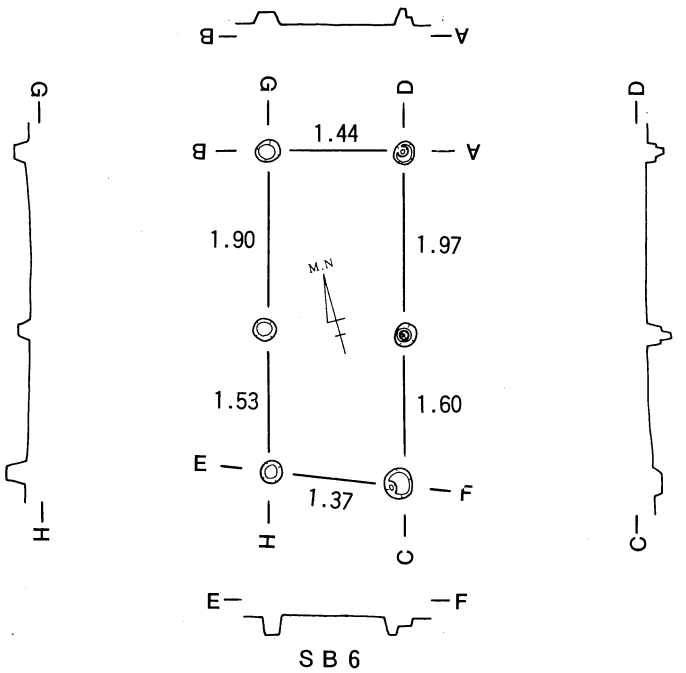

B
A
I
D
2.31
2.33
1.08
1.02
G
H
M.N
1.97
1.98
E
F
J
C
SB 3


B
A
I
F
D
2.02
1.30
1.18
M.N
1.70
1.72
G
H
2.45
1.02
J
E
C
SB 4
DL=7.20m
0
4m

第3図　SB 3・4



SB 5

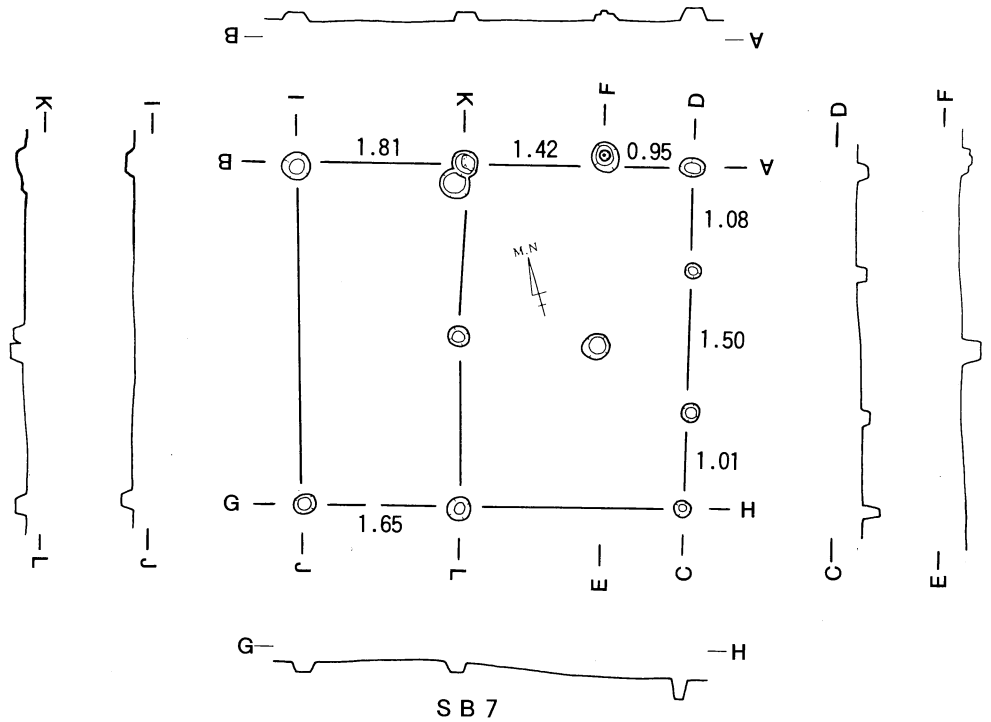


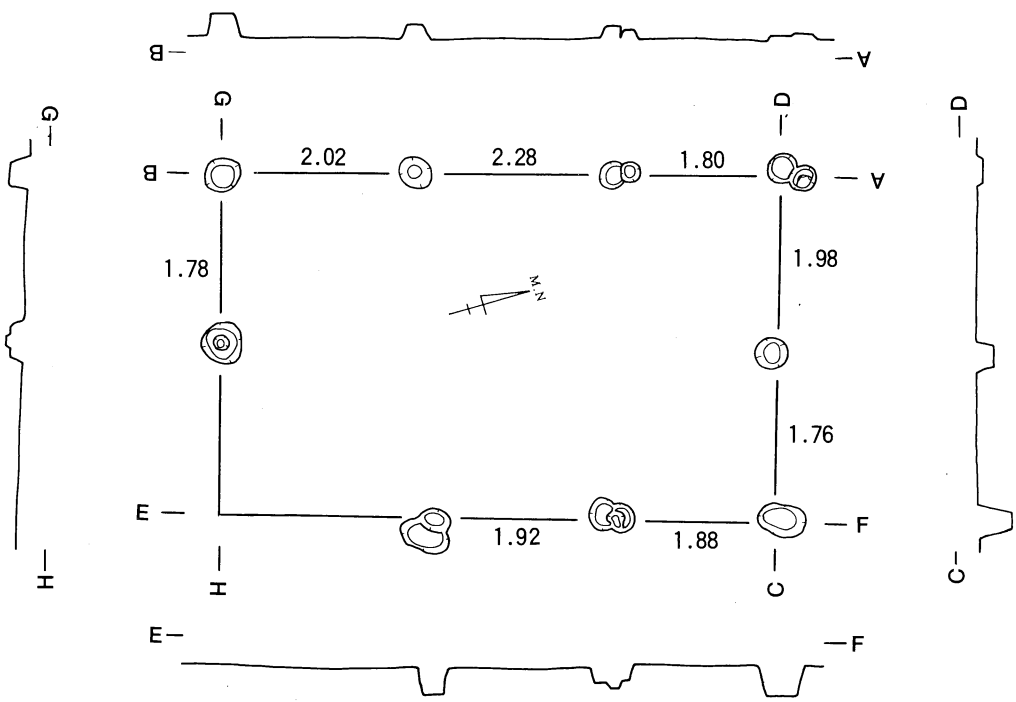
SB 6

DL=7.20m

0 4m

第4図　SB 5・6

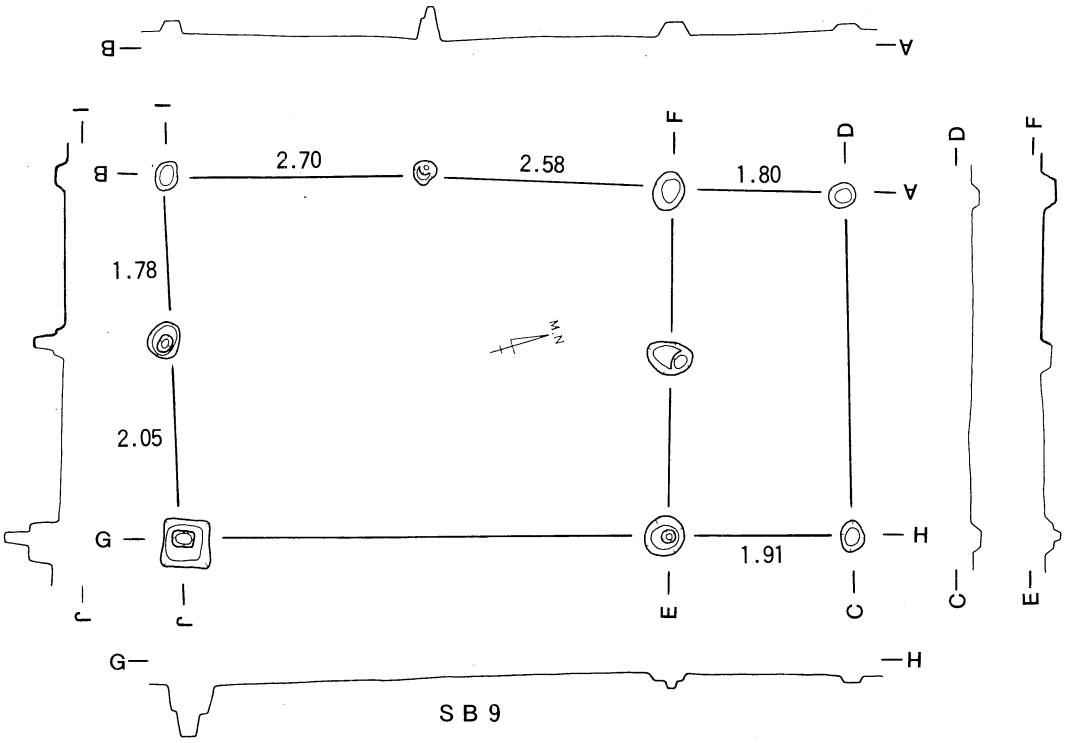


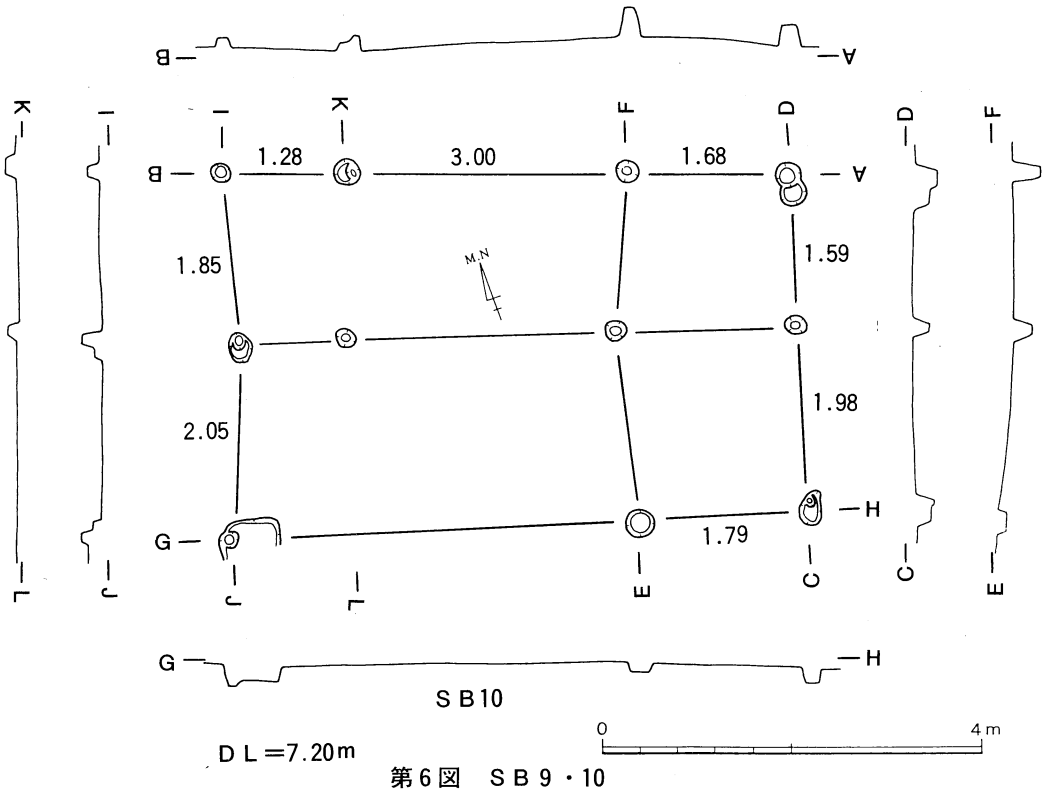


DL=7.20m

0 4m

第5図　SB 7・8

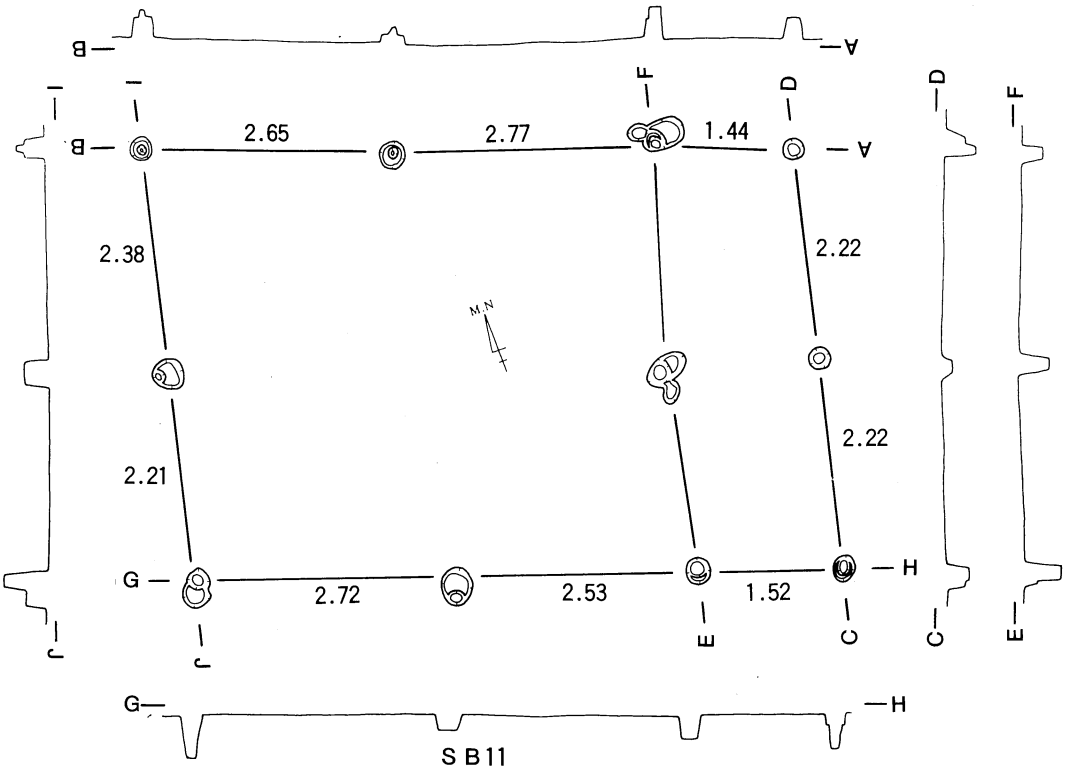


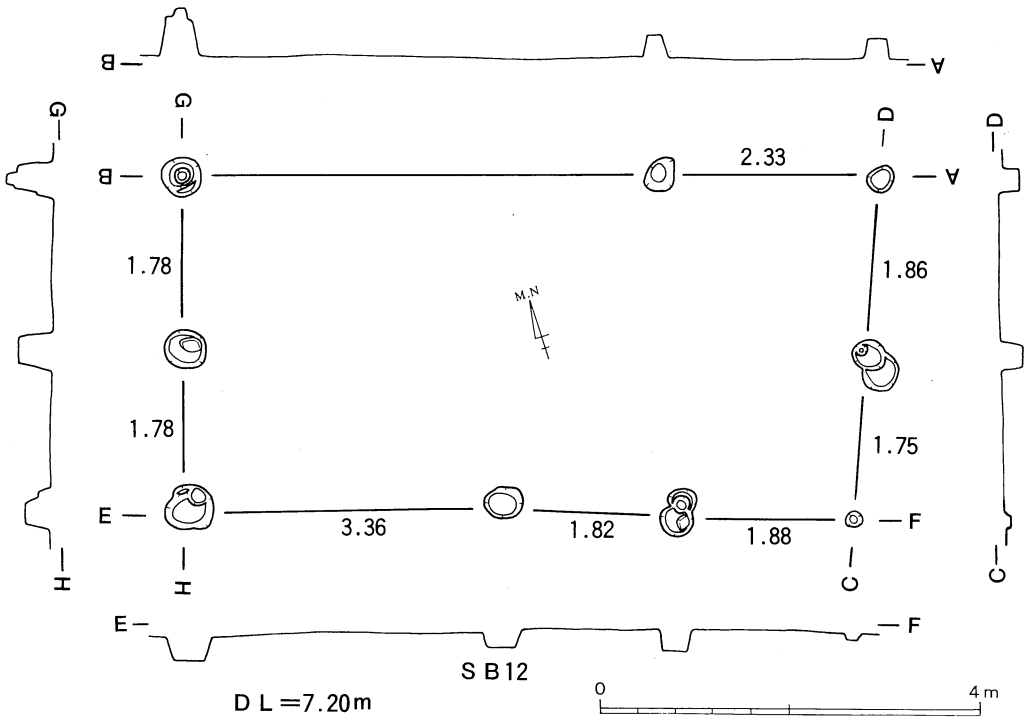


DL=7.20m

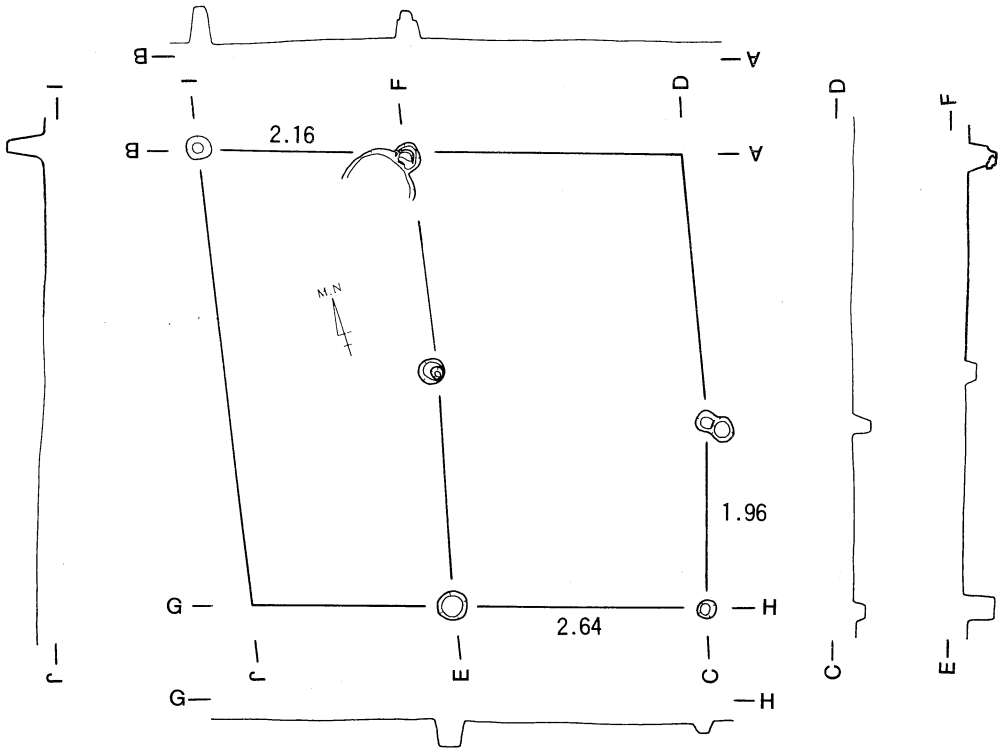
0 4m

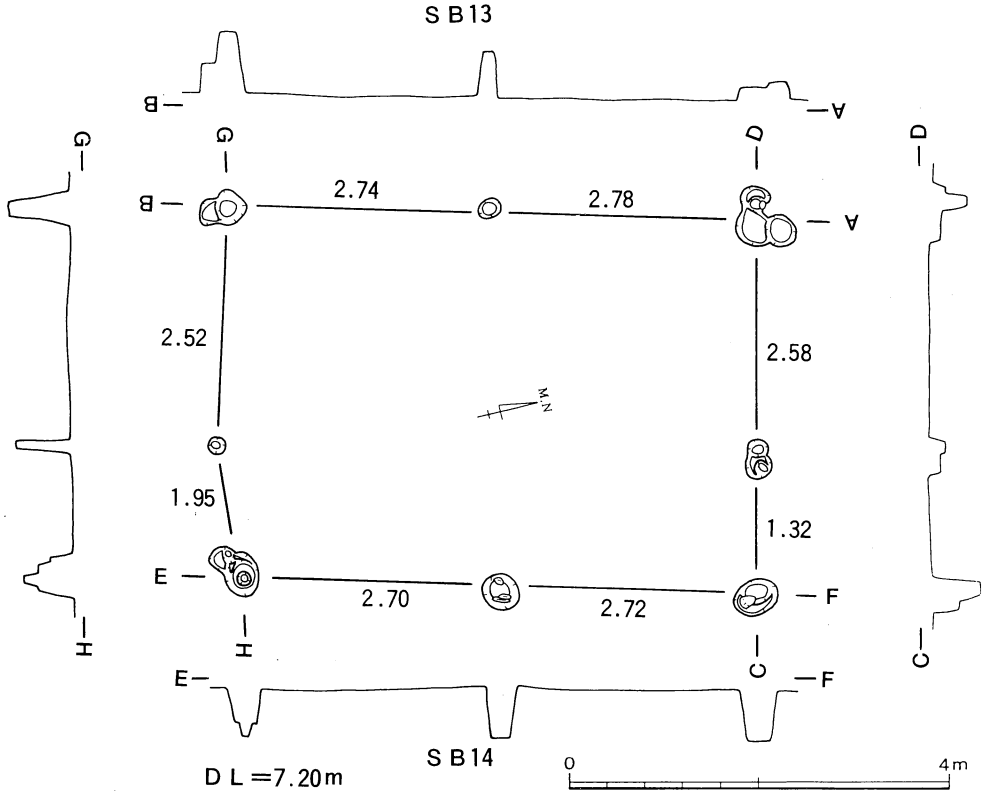
第6図　SB 9・10


2.65
2.77
1.44
2.38
2.22
2.21
2.22
2.72
2.53
1.52
SB11

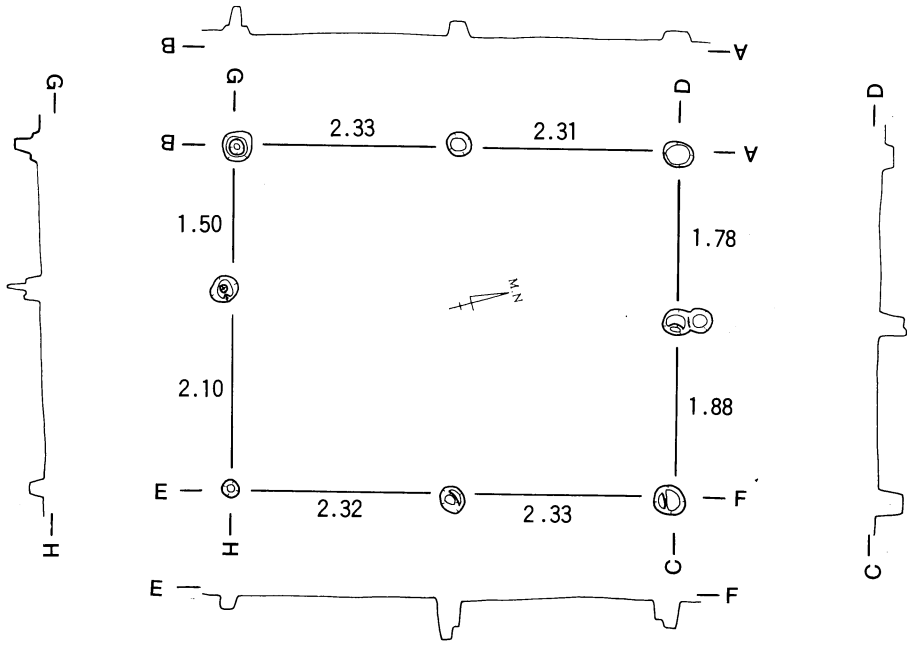

2.33
1.78
1.86
1.78
1.75
3.36
1.82
1.88
SB12
DL=7.20m
0
4m

第7図　SB11・12

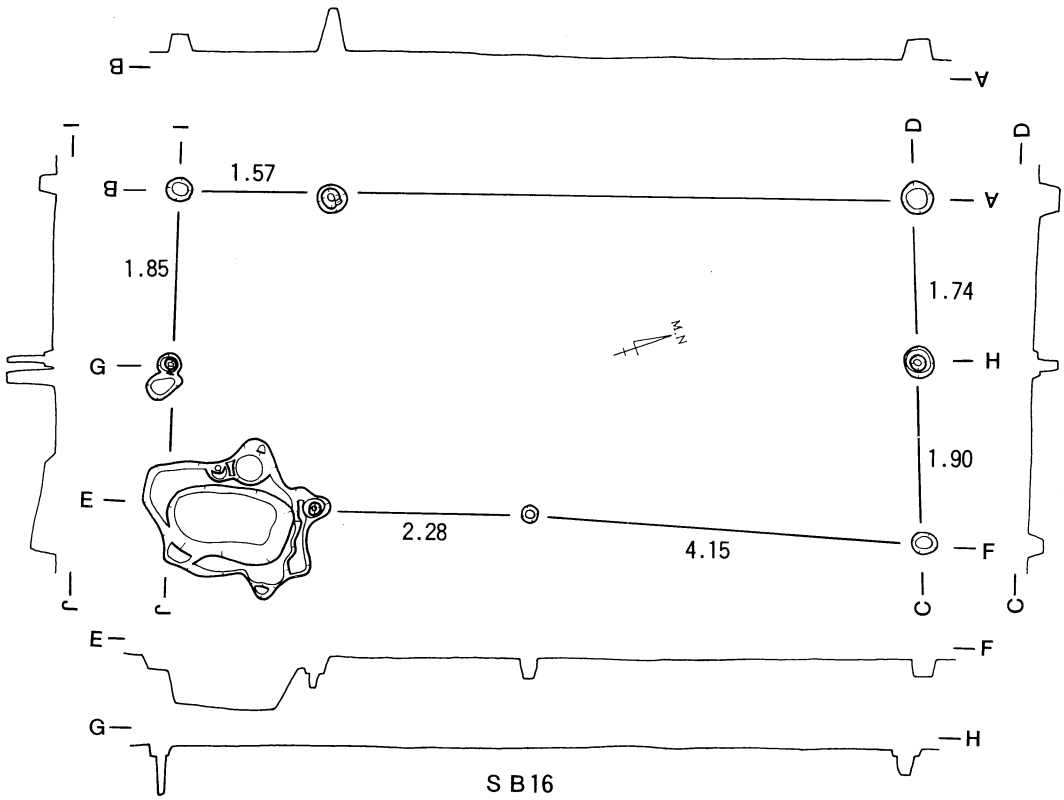

B
A
I
F
D
2.16
M.N
1.96
G
H
2.64
J
E
C
SB13


B
A
G
D
2.74
2.78
2.52
2.58
M.N
1.95
1.32
E
F
2.70
2.72
H
C
SB14
DL=7.20m
0
4m

第8図　SB13・14



SB15

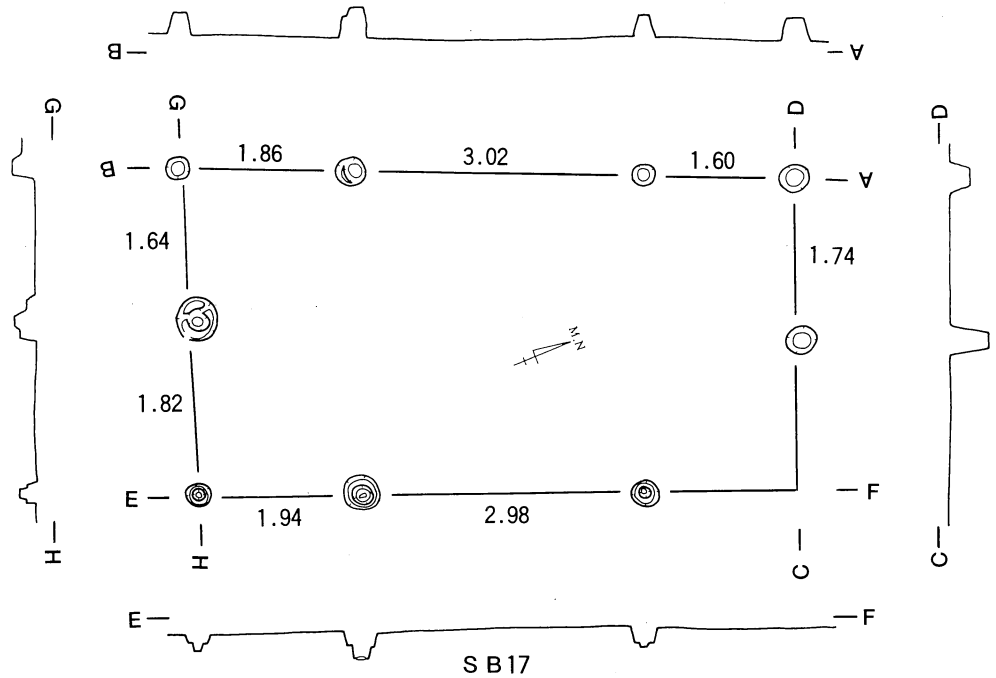


SB16

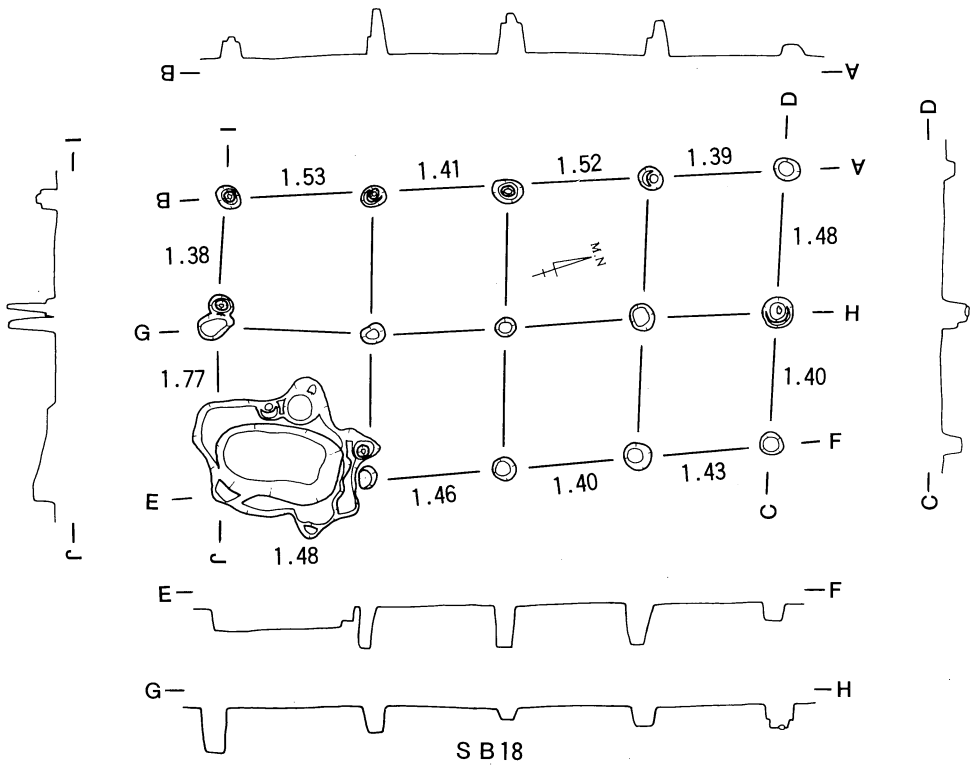
DL=7.20m

0 4m

第9図　SB15・16



SB17

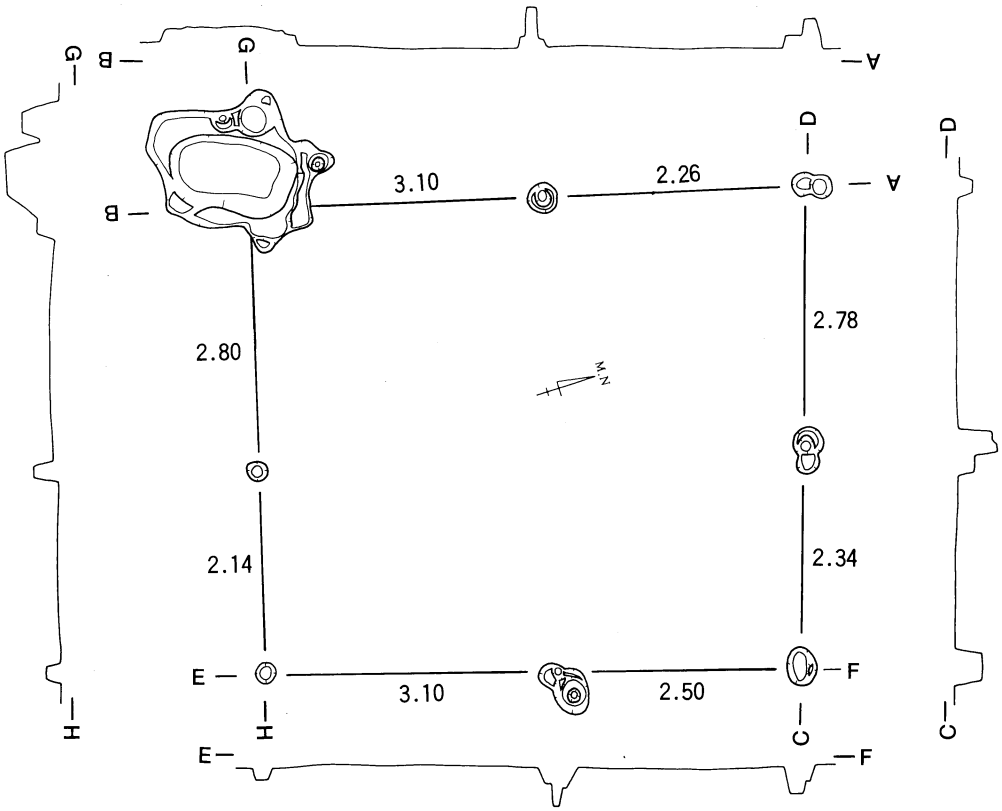


SB18

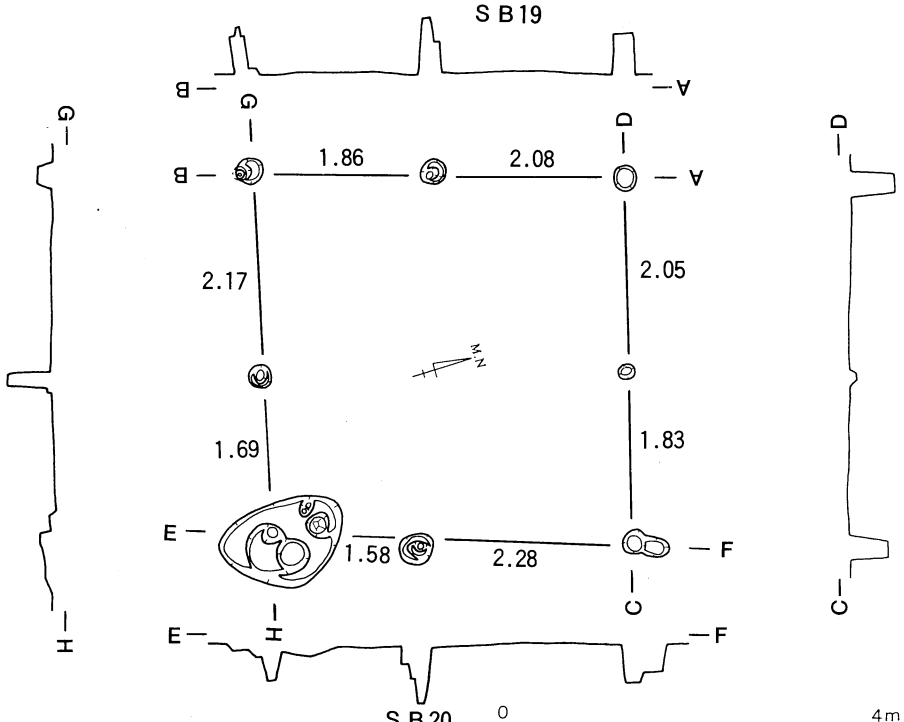
DL=7.20m

0 4m

第10図　SB17・18



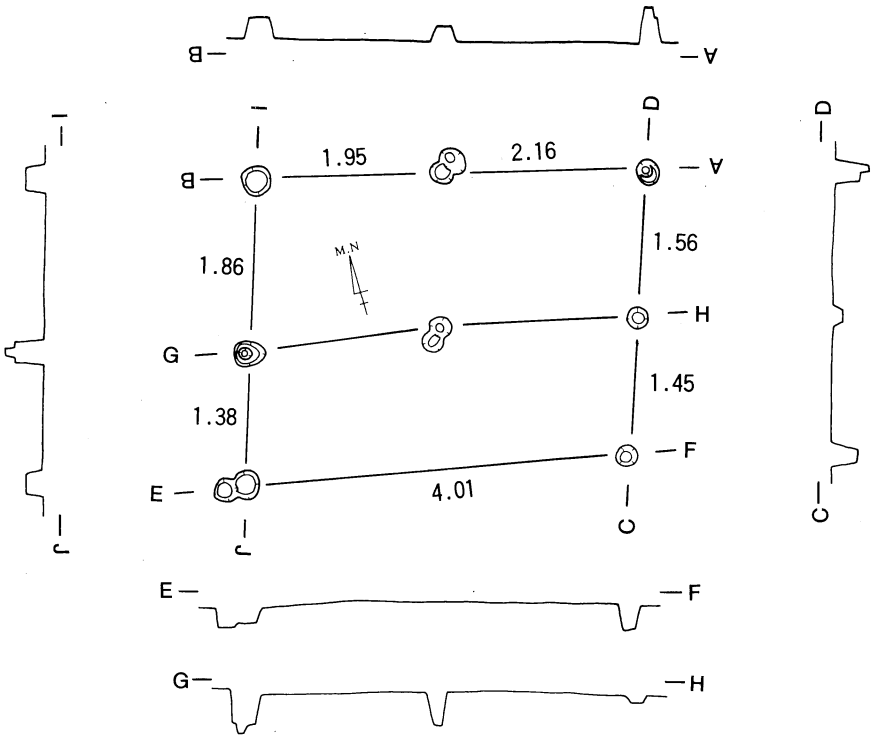
SB19



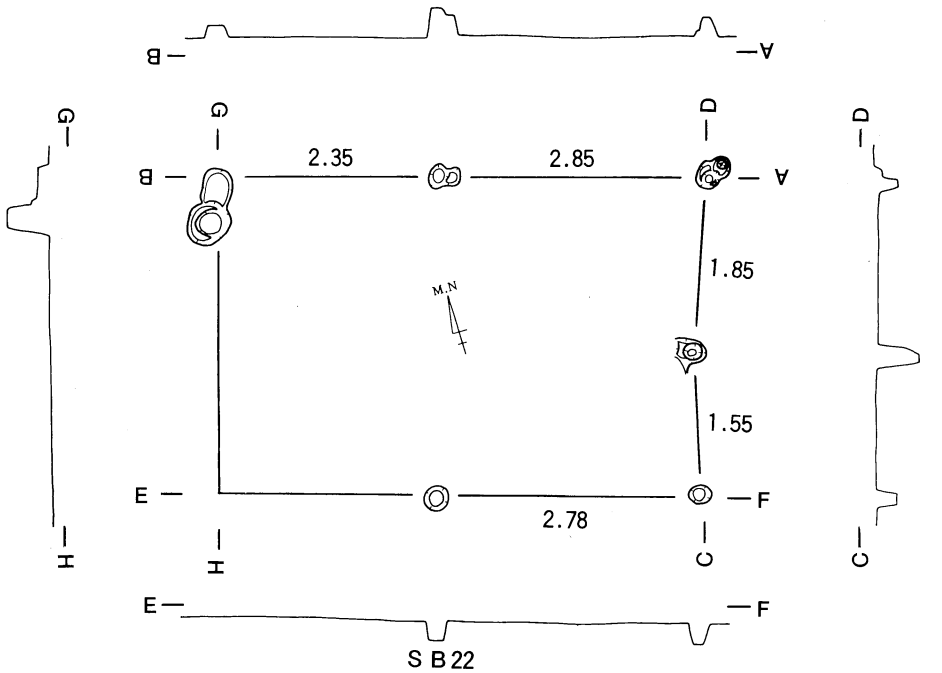
SB20

DL=7.20m

第11図　SB19・20



S B 21

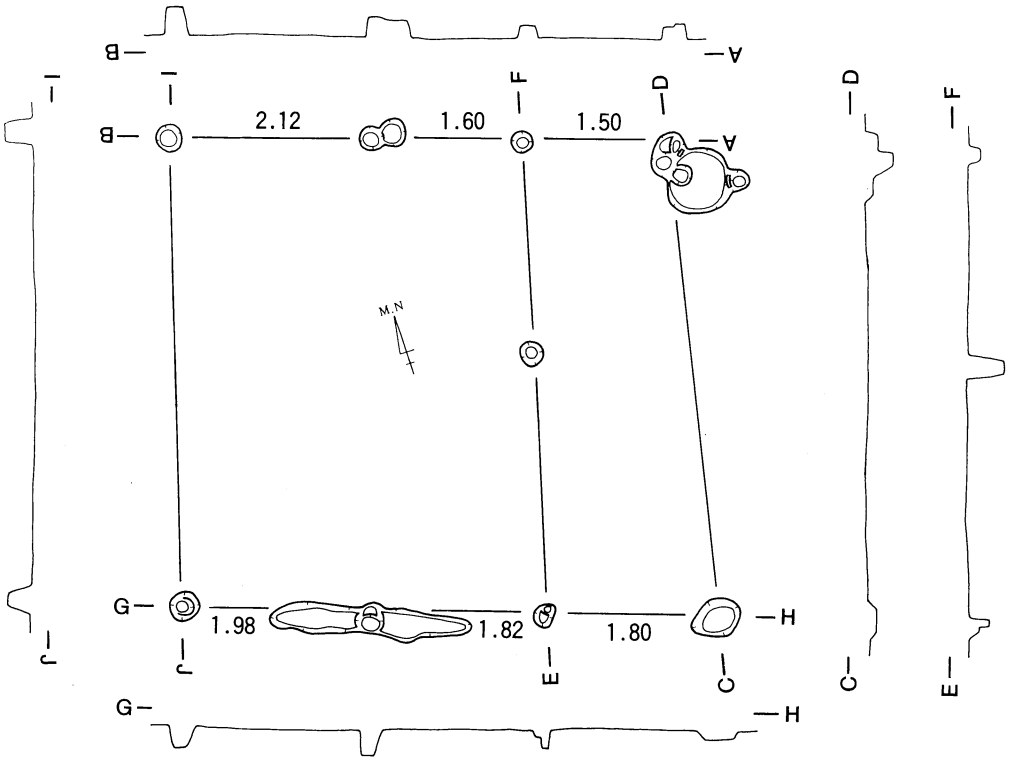


S B 22

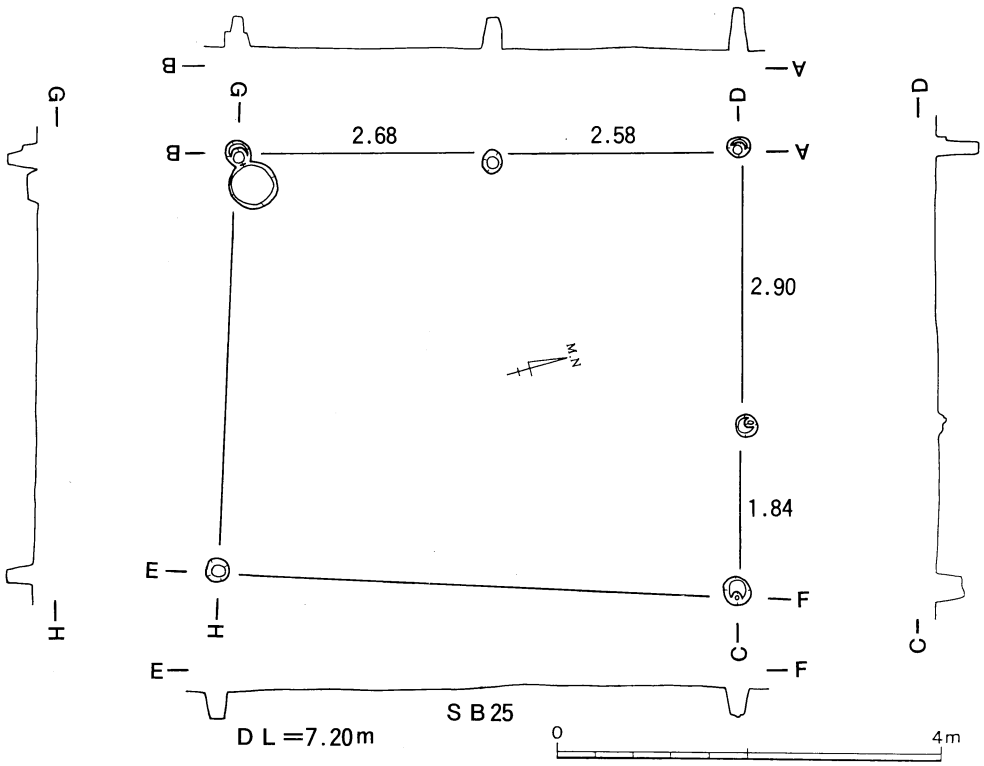
D L =7.20m

0 4m

第12図　S B 21・22



SB23

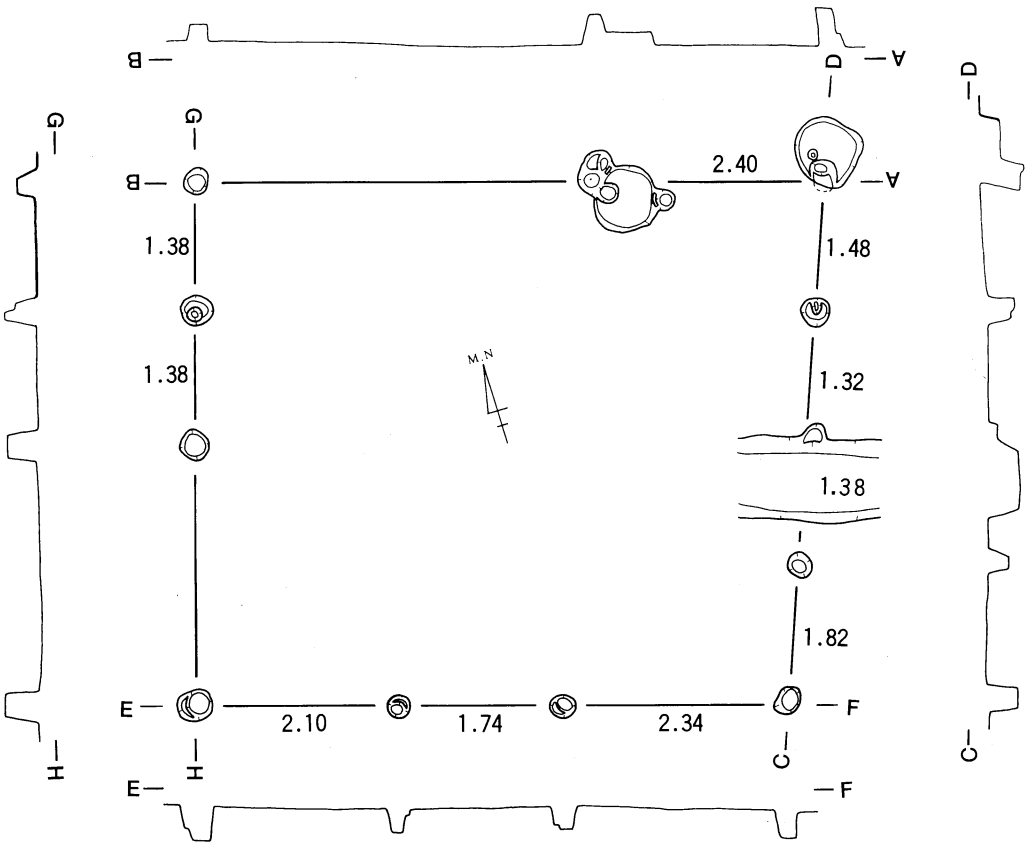


SB25

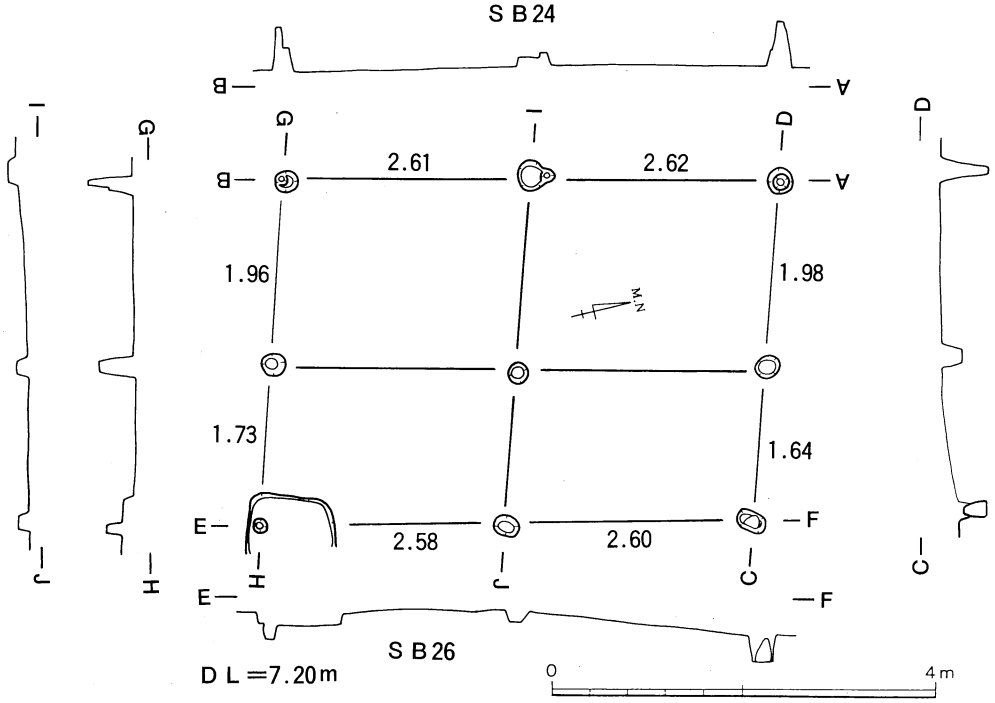
DL=7.20m

0 4m

第13図　SB23・25



S B 24

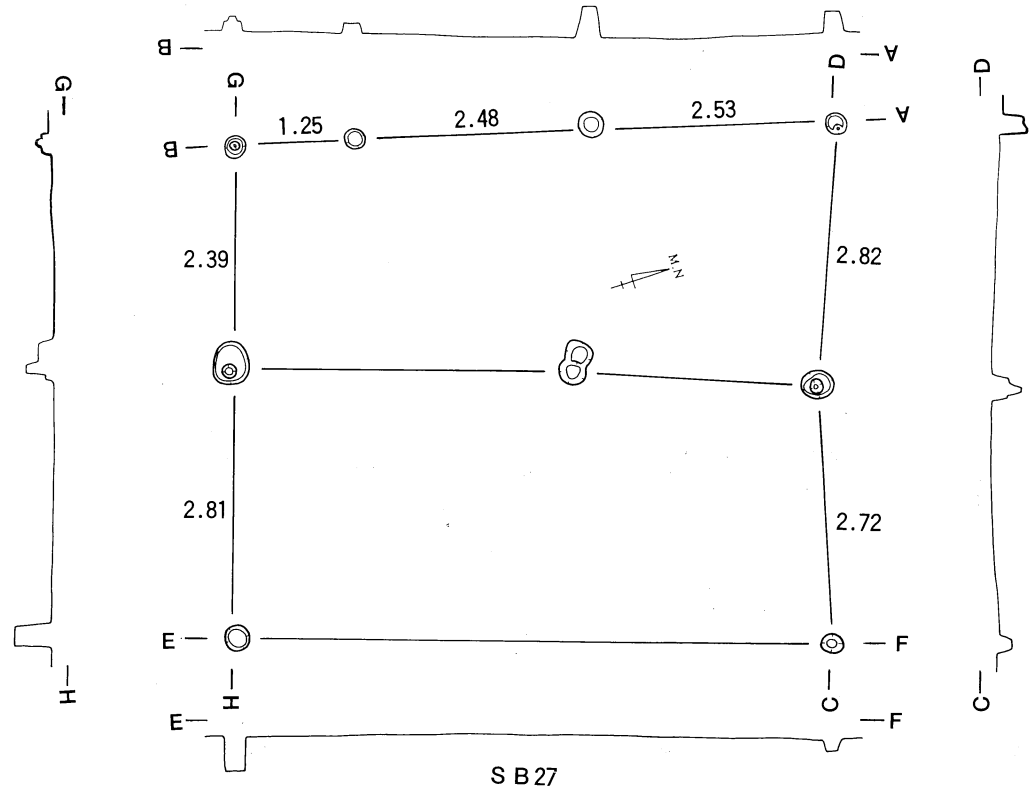


S B 26

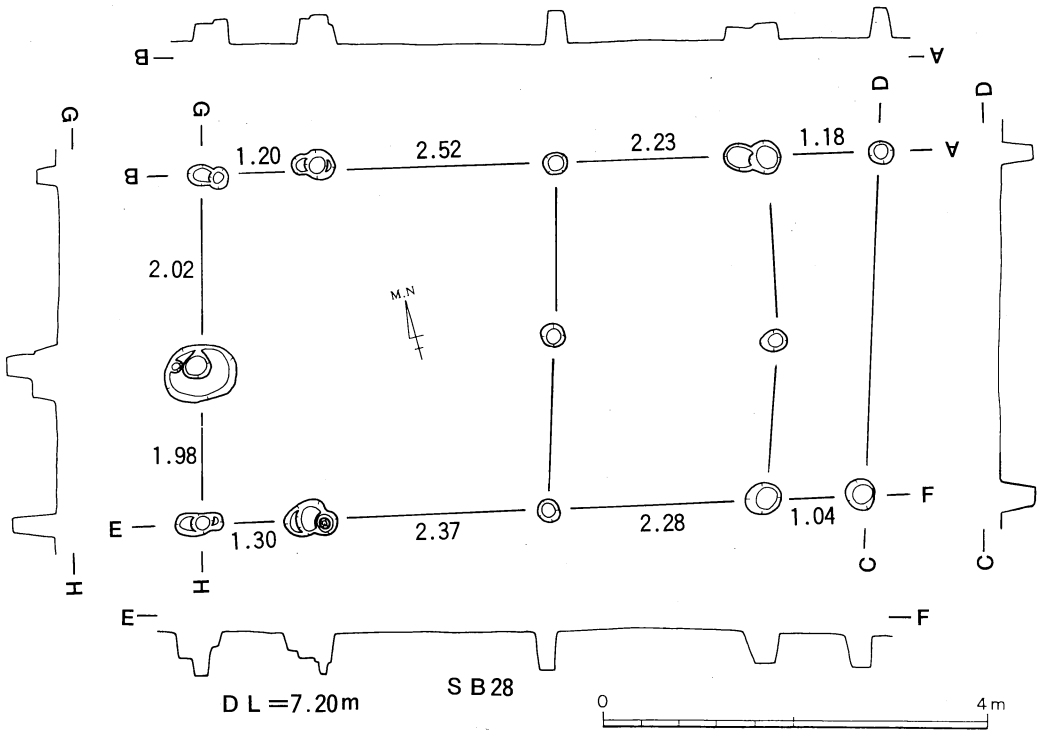
D L＝7.20m

0 4m

第14図　S B 24・26



S B 27

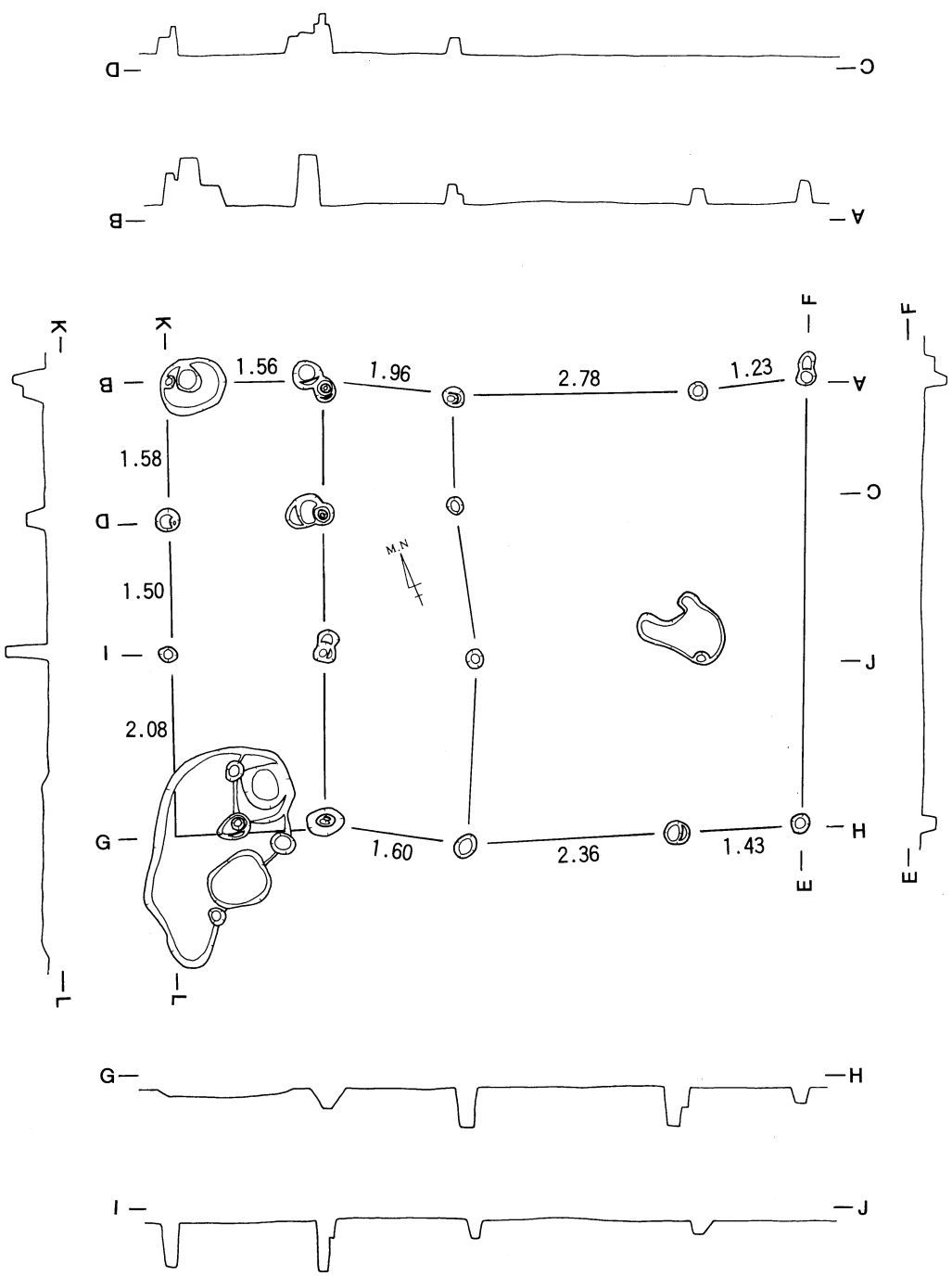


S B 28

D L =7.20m

0 4m

第15図　S B 27・28

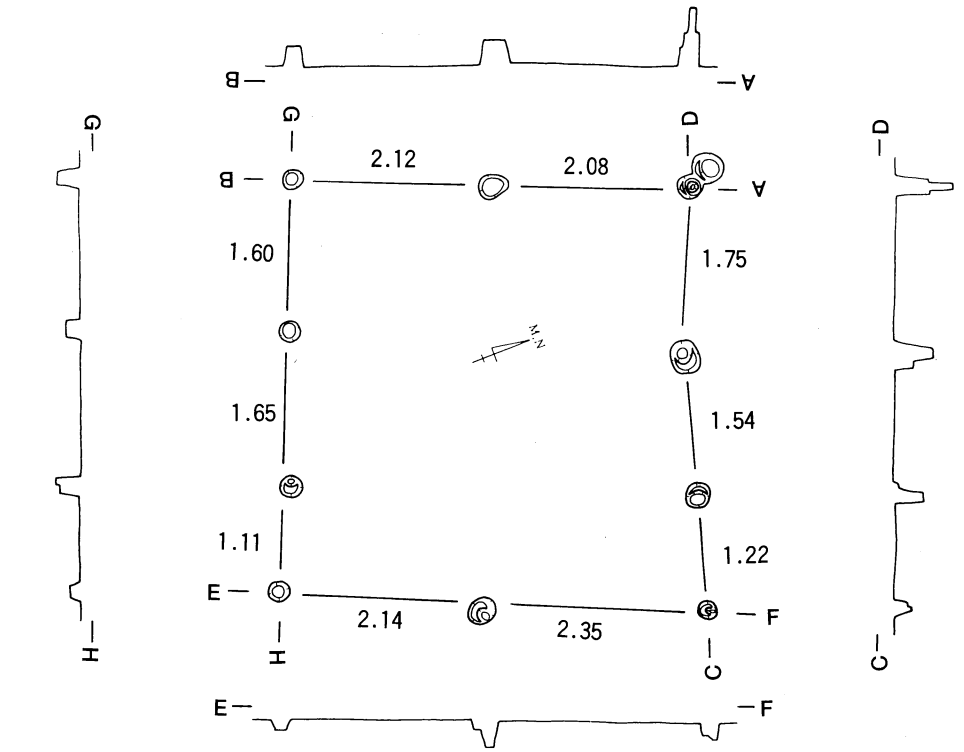


S B29

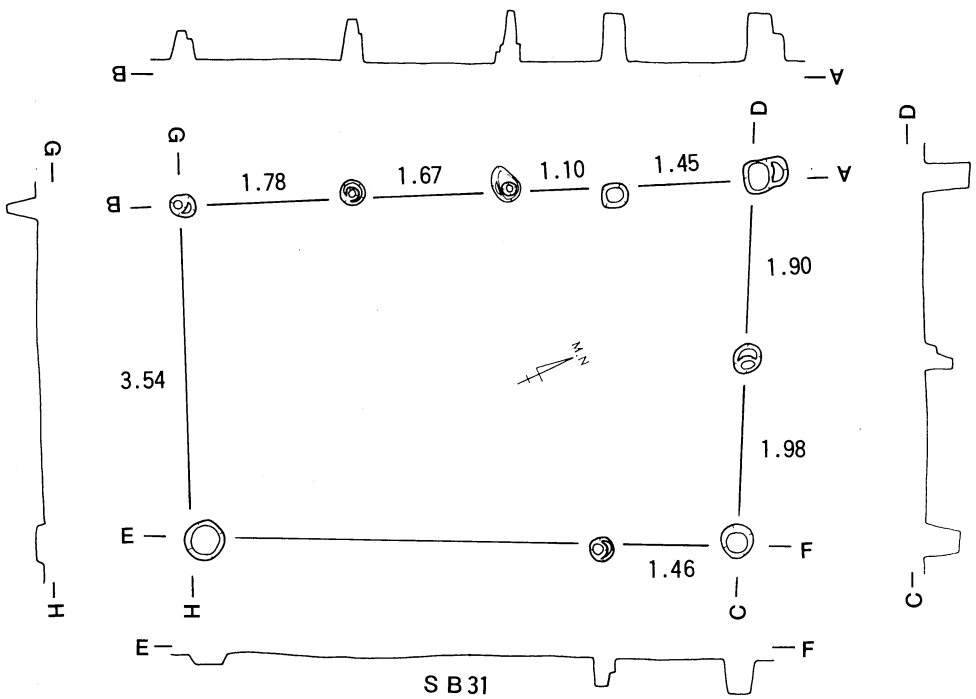
D L =7.20m

0 4m

第16図　S B29



S B 30

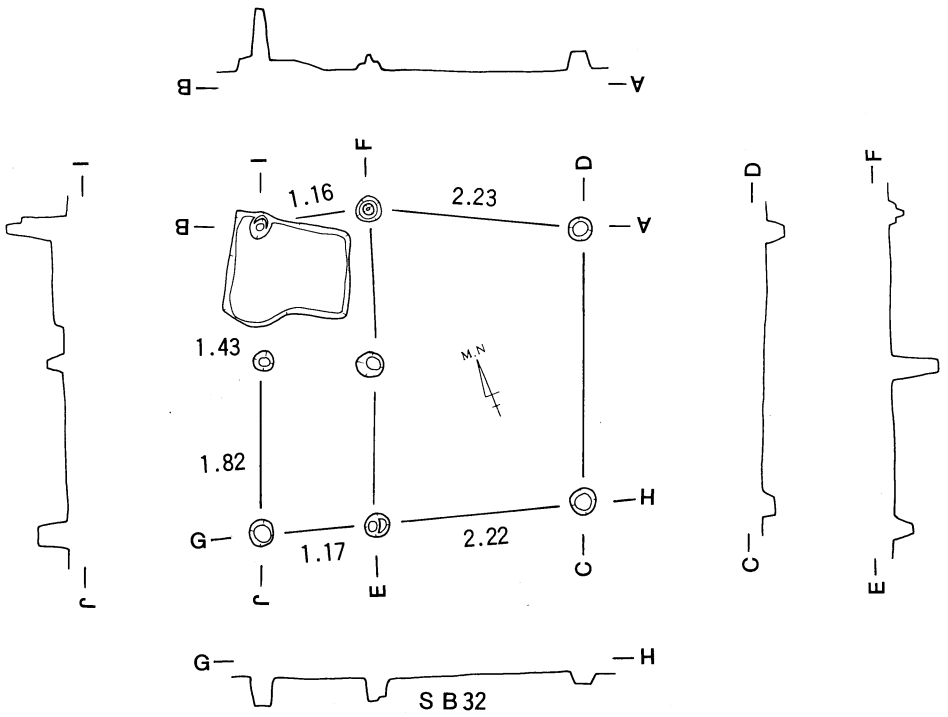


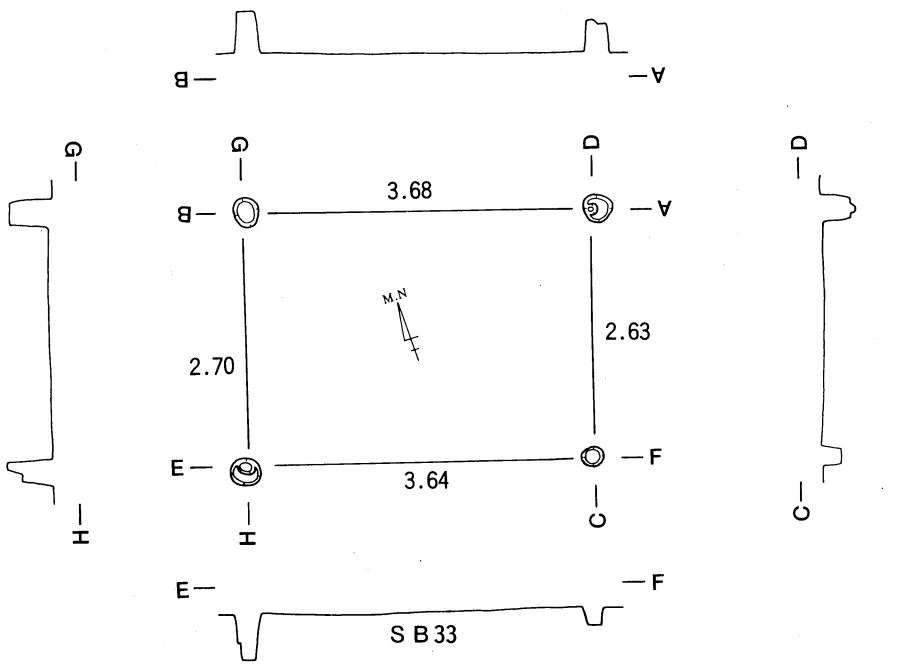
S B 31

D L =7.20m

0 4m

第17図　S B 30・31

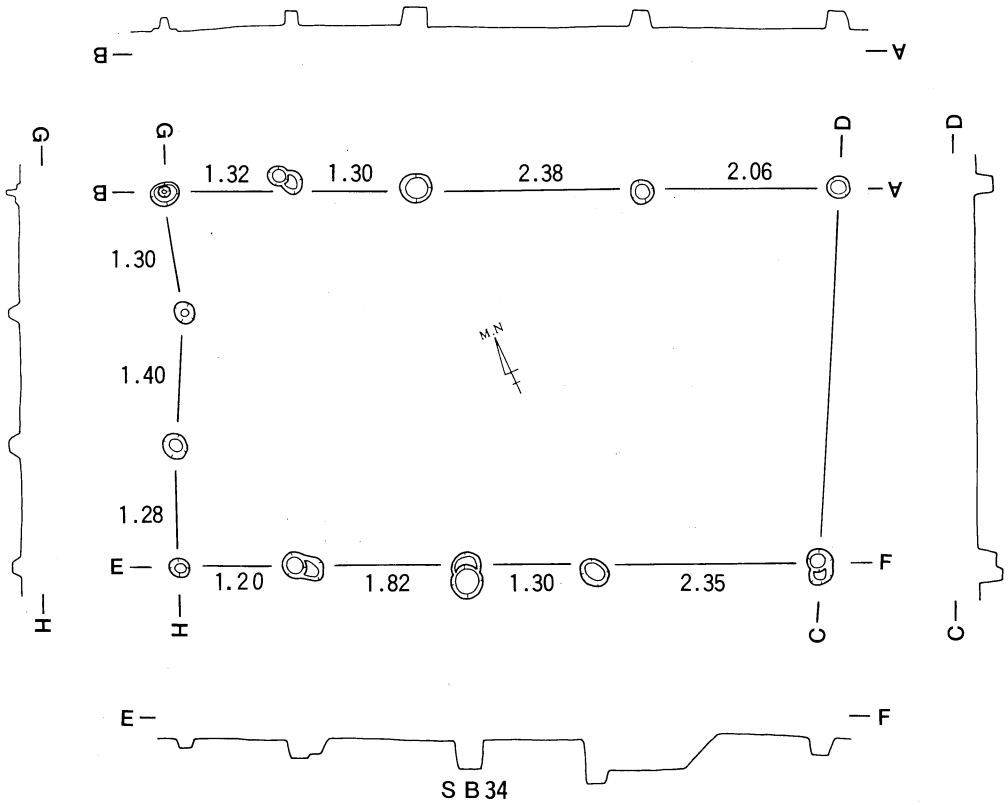




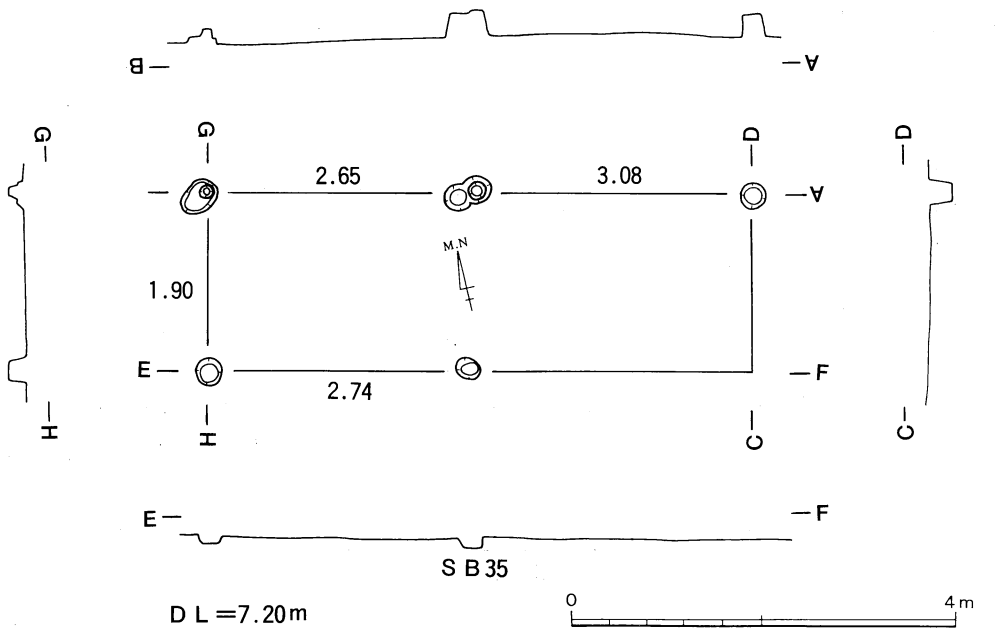
D L＝7.20m

0 4m

第18図　S B 32・33



SB34

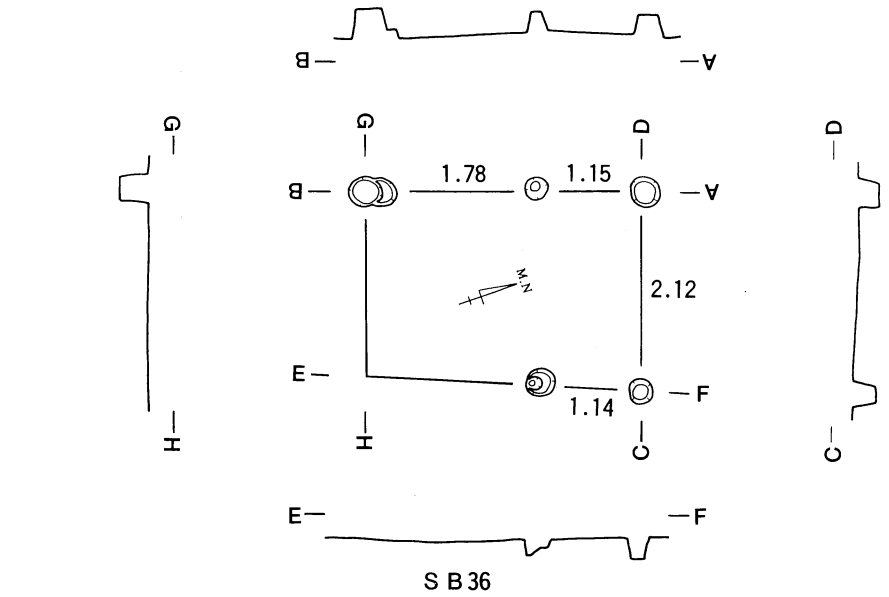


SB35

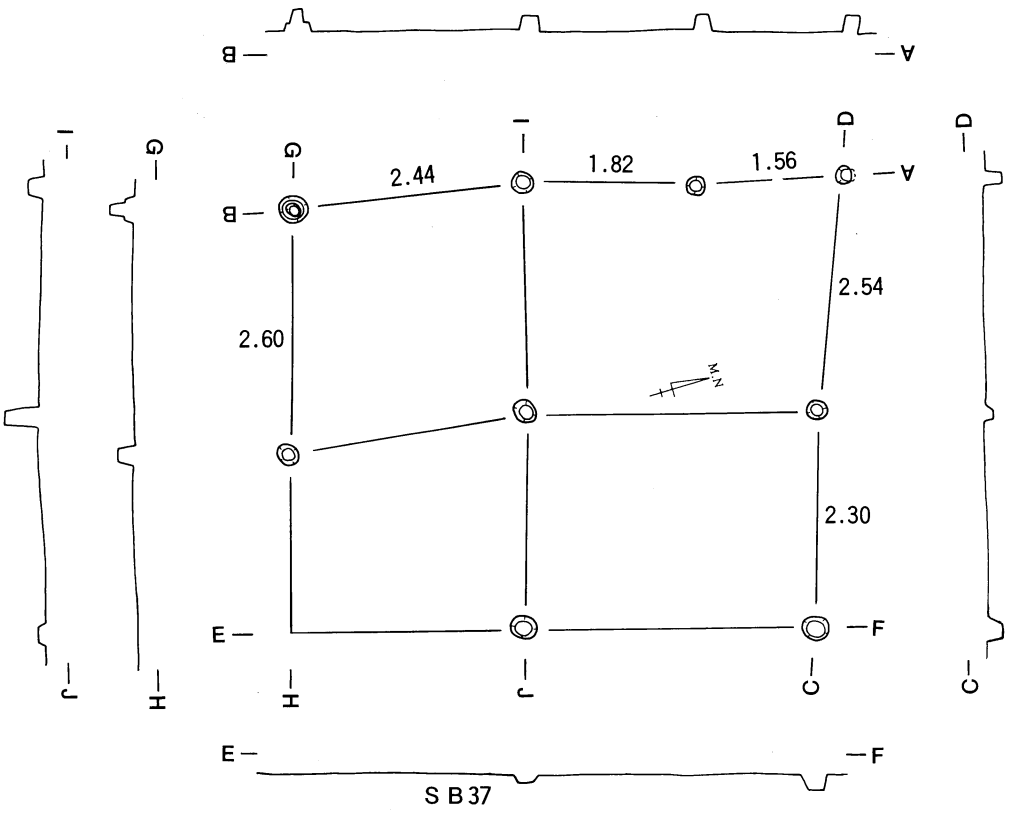
DL=7.20m

0 4m

第19図　SB34・35



S B36

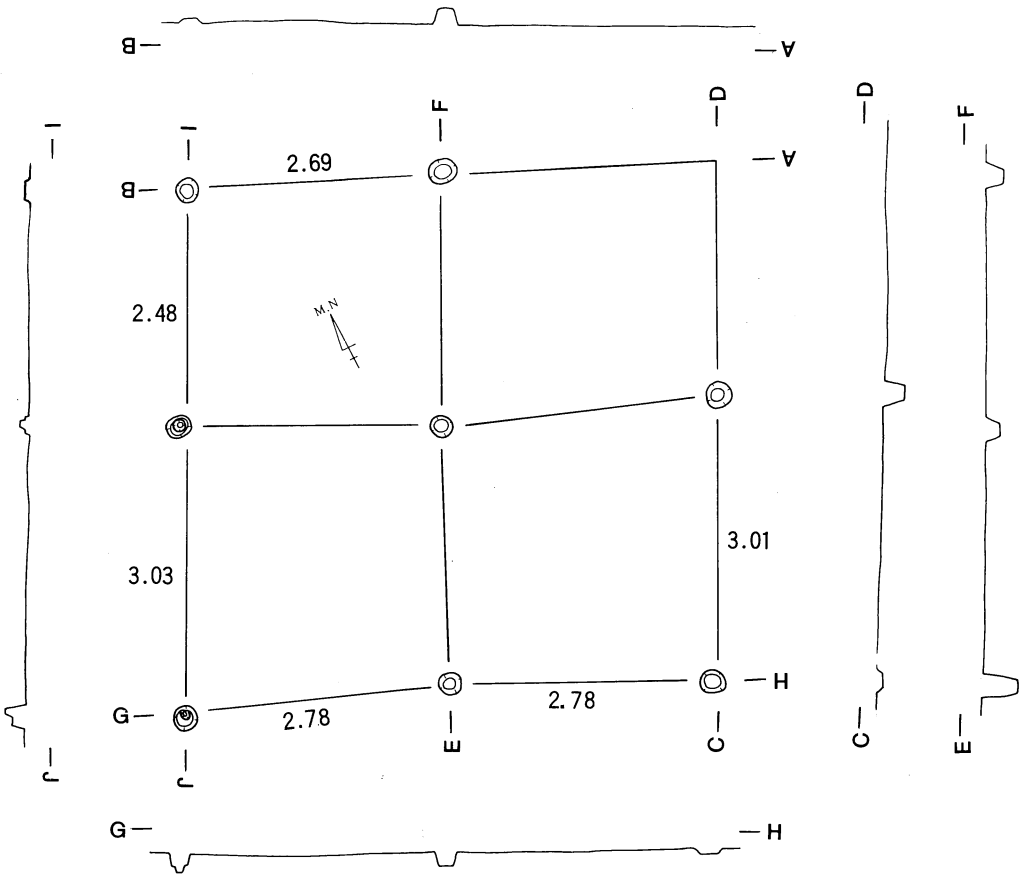


S B37

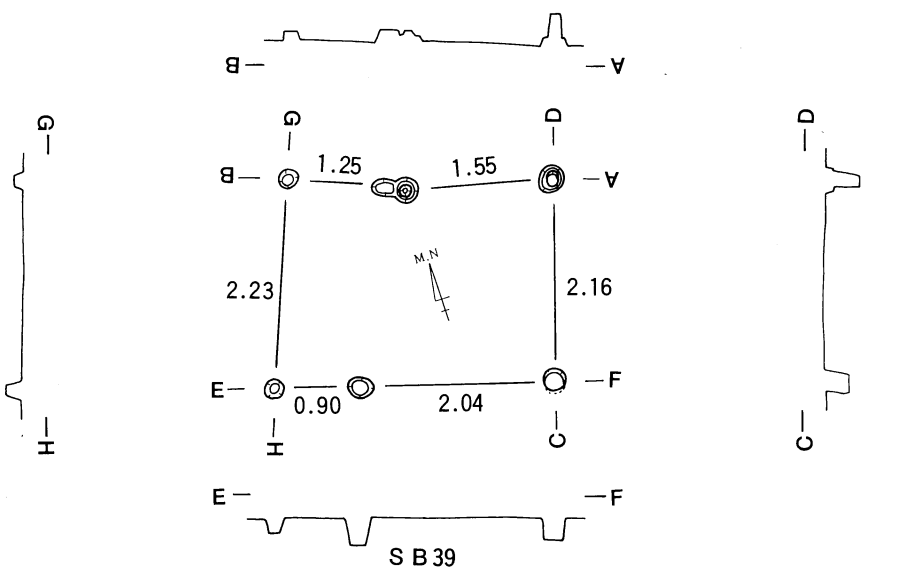
D L =7.20m

0 4m

第20図　S B36・37



SB38

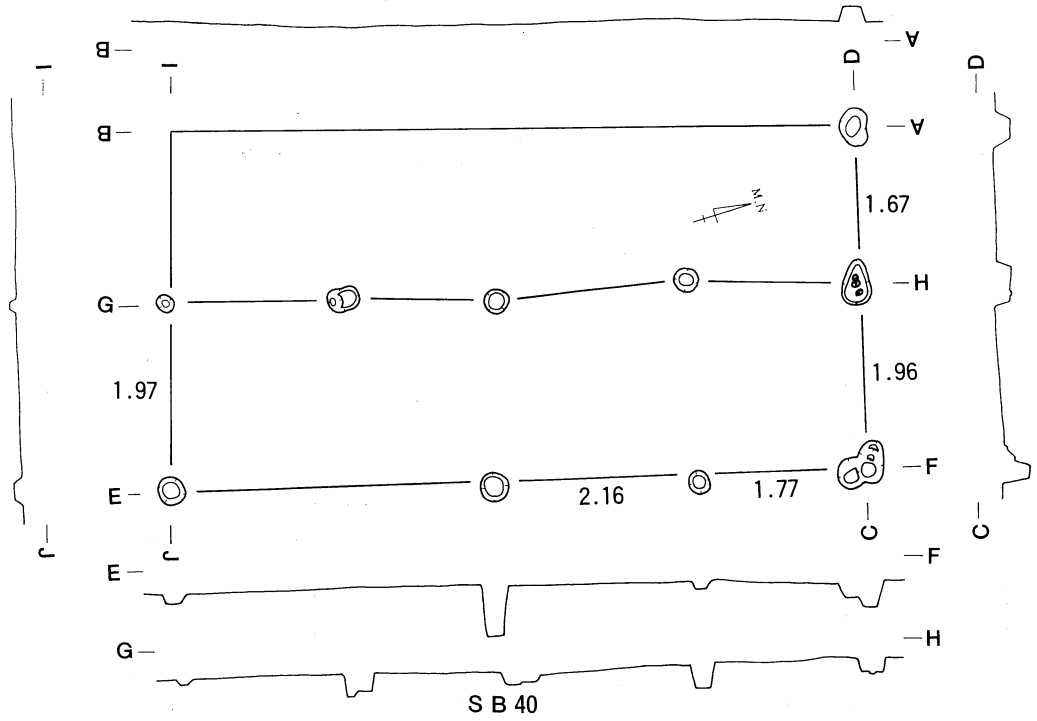


SB39

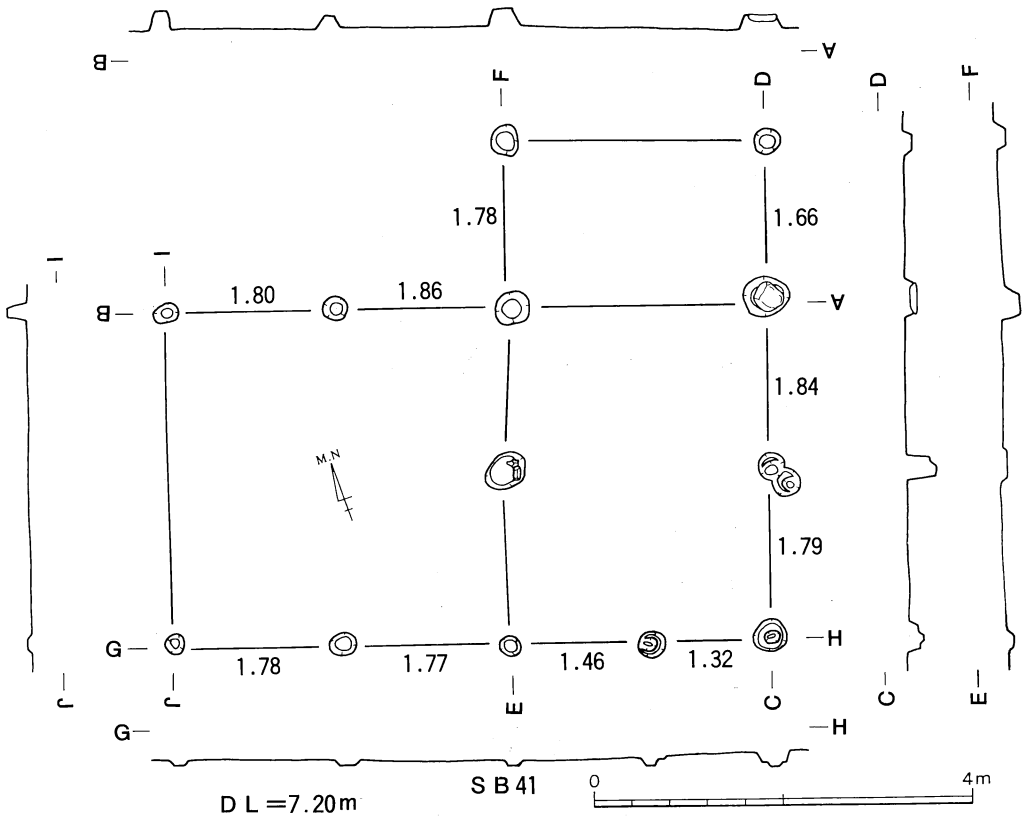
DL=7.20m

0 4m

第21図　SB38・39



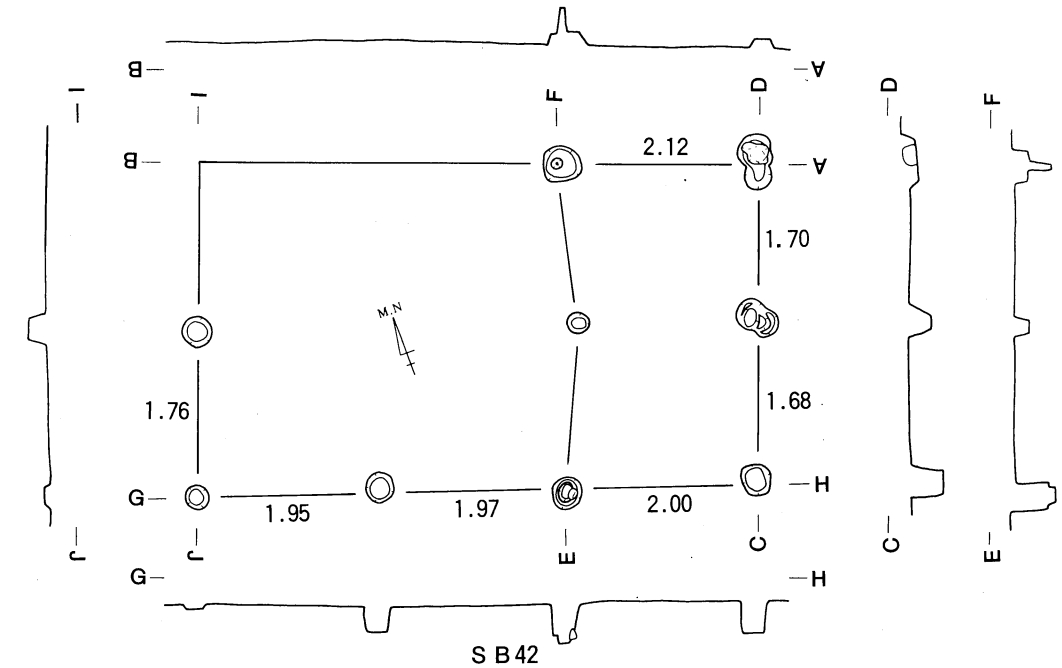
SB40



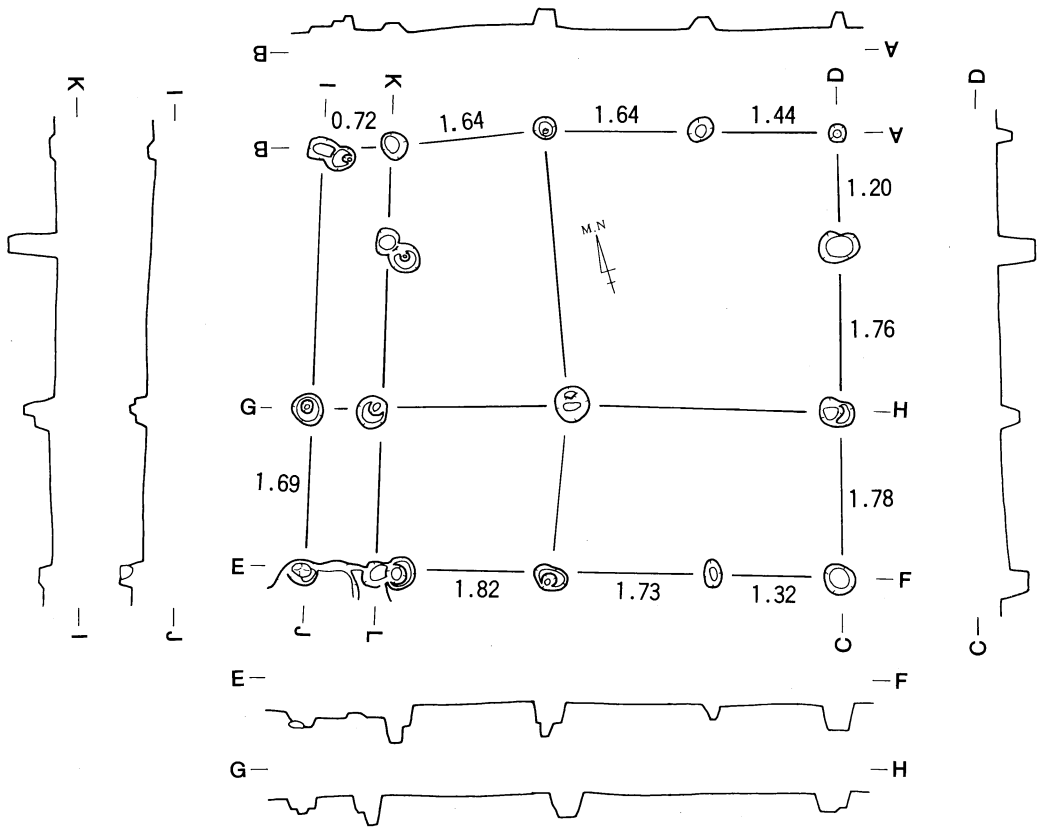
SB41

DL=7.20m

第22図　SB40・41



S B 42

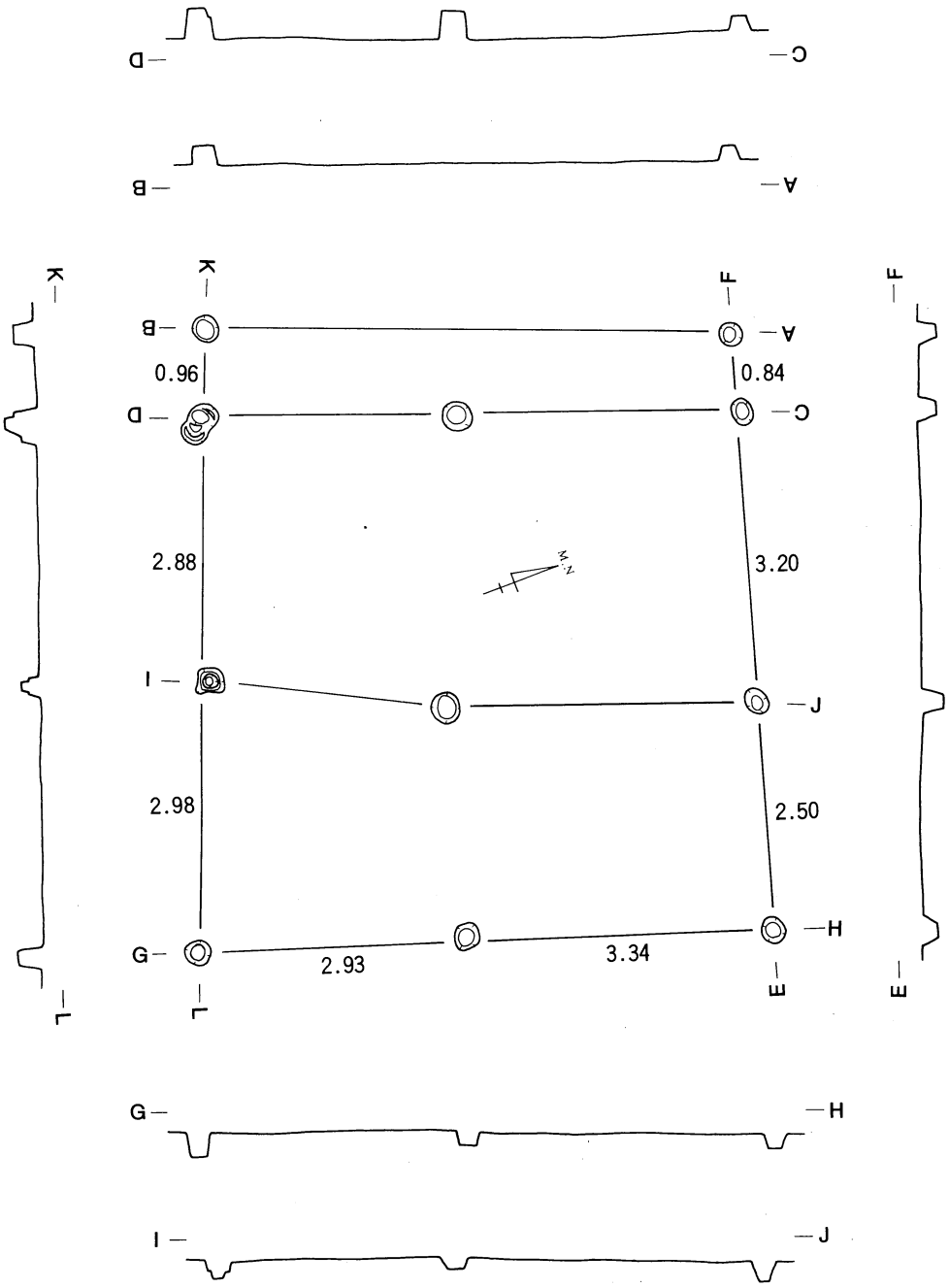


D L =7.20m

S B 45

0 4m

第23図　S B 42・45

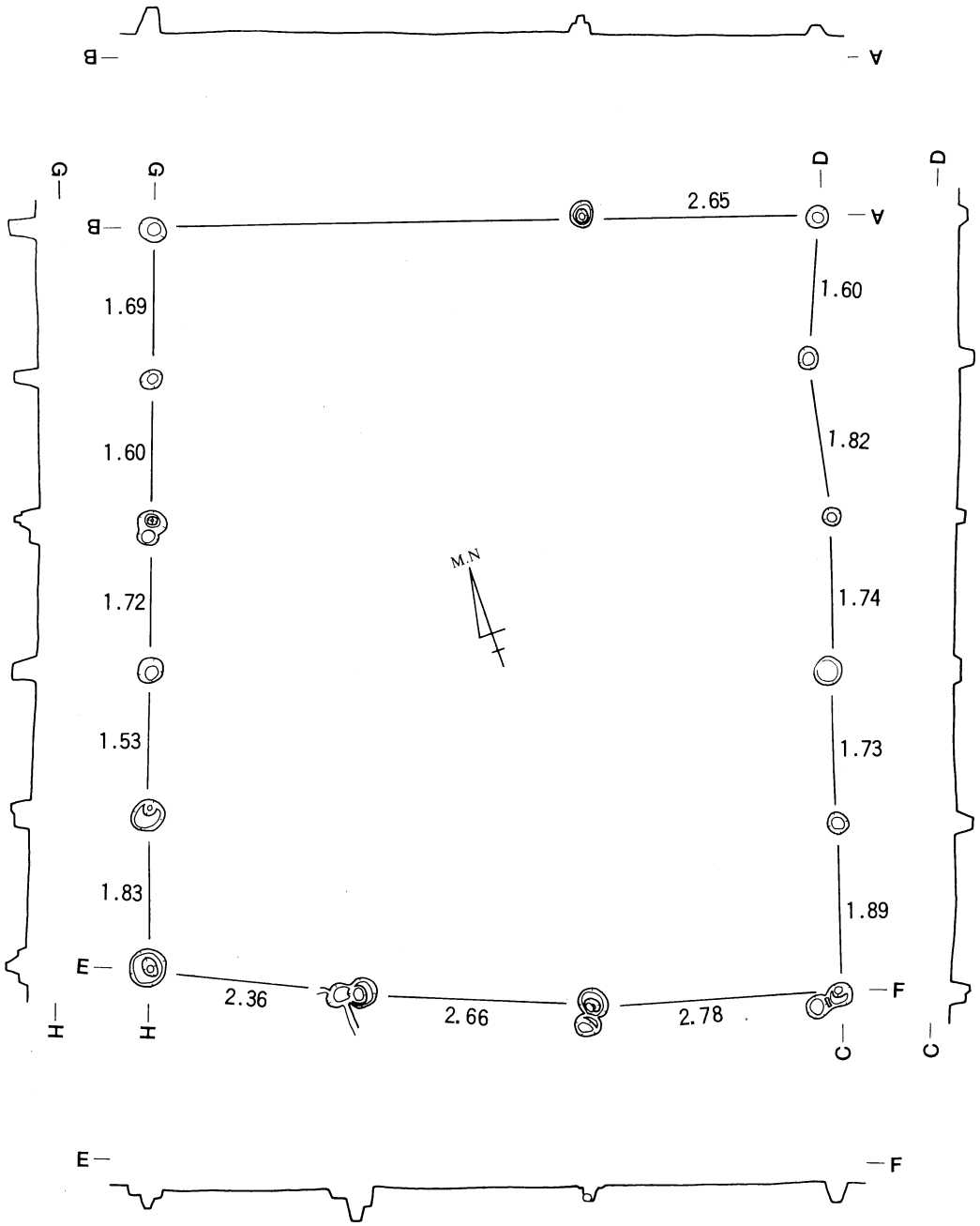


S B 43

D L ＝7.20m

0 4m

第24図　S B 43

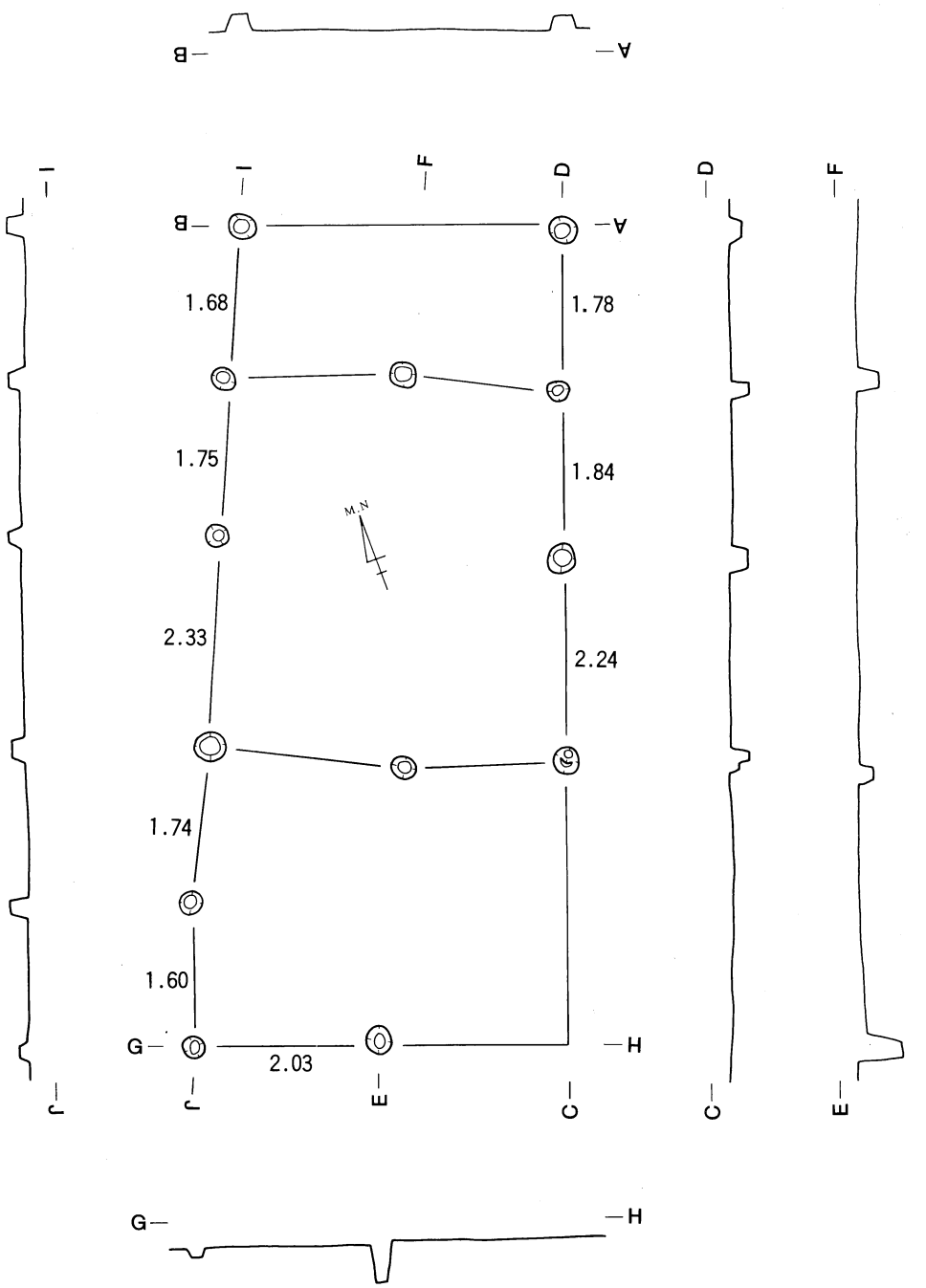


S B 44

D L =7.20m

0 4m

第25図　S B 44

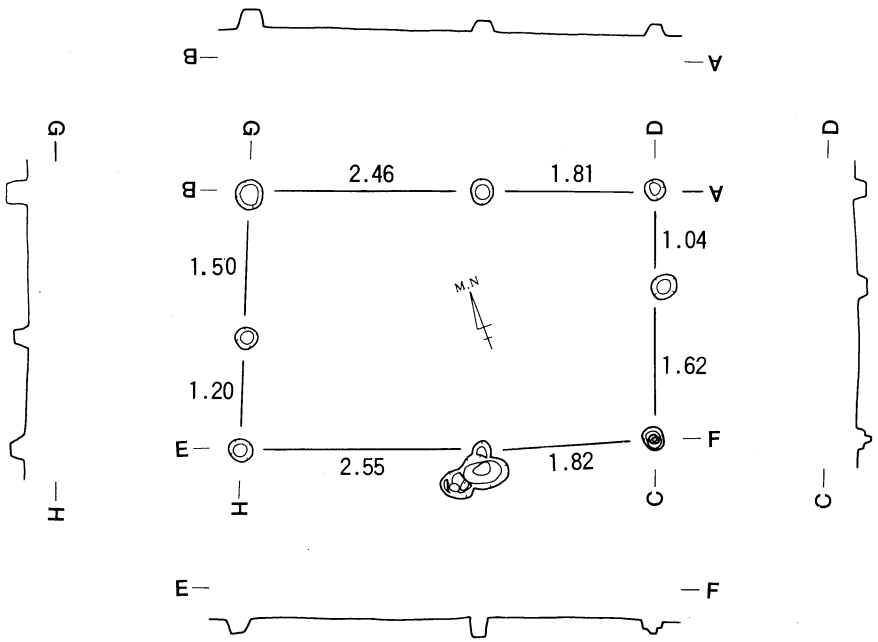


S B 46

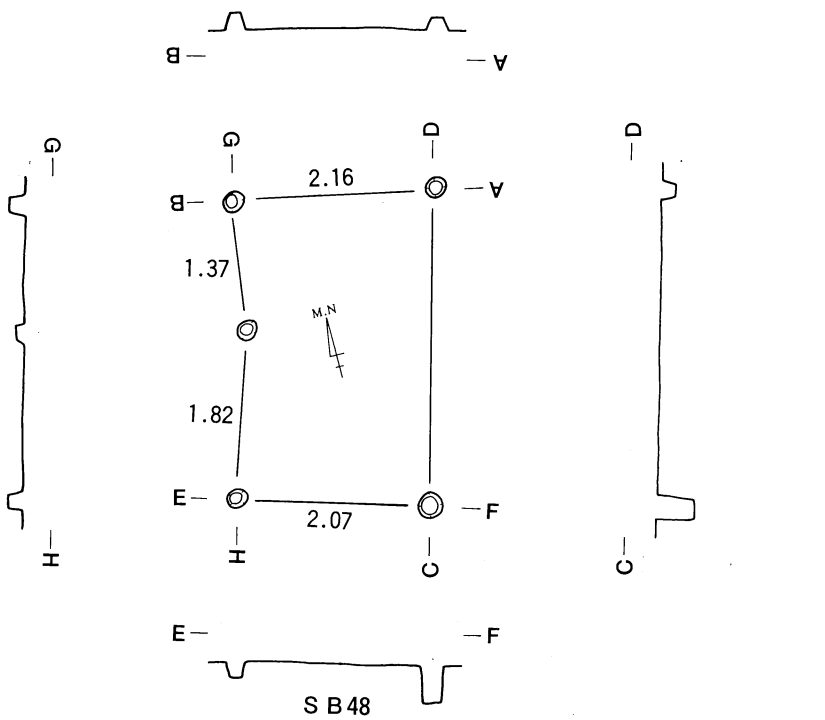
D L＝7.20m

0 4m

第26図　S B 46



S B47

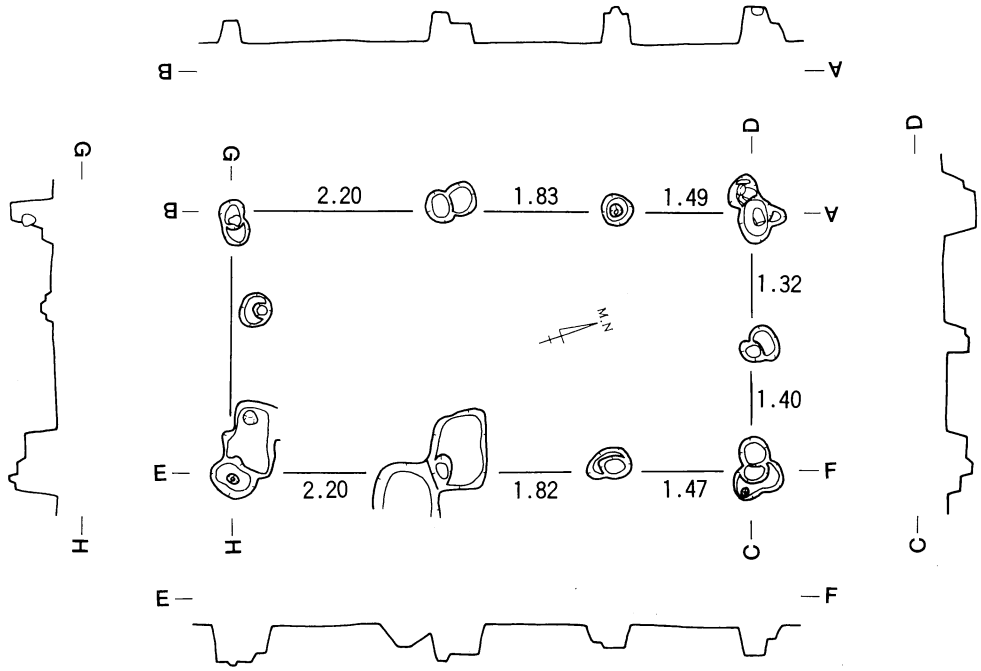


S B48

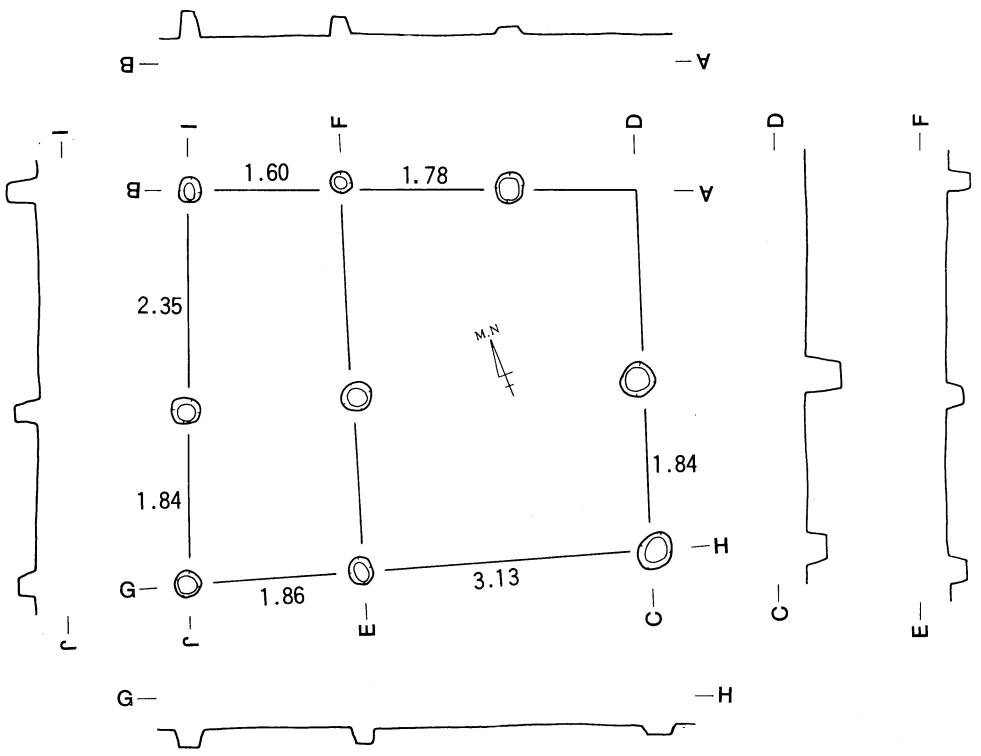
D L＝7.20m

0 4m

第27図　S B47・48



S B49

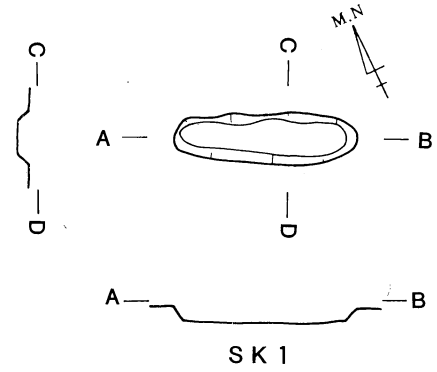


S B50

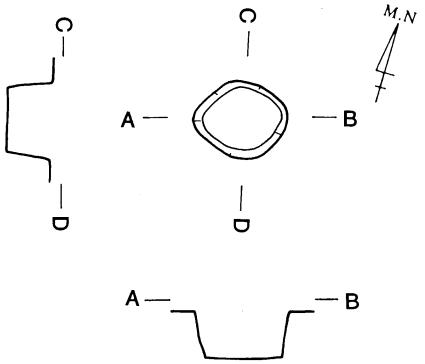
D L＝7.20m

0 4m

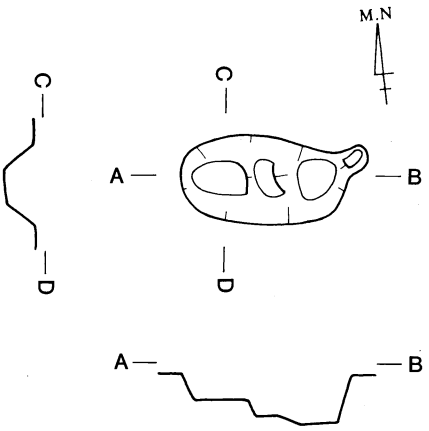
第28図　S B49・50



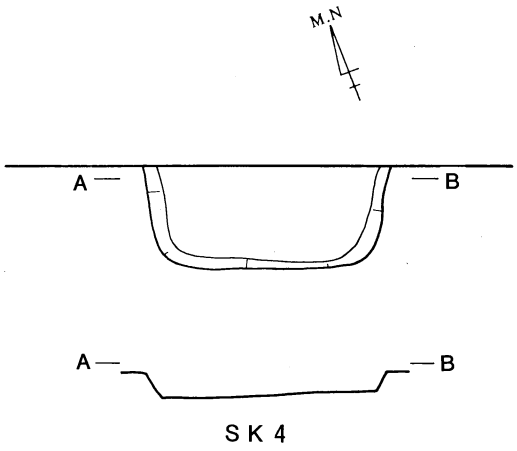
SK 1



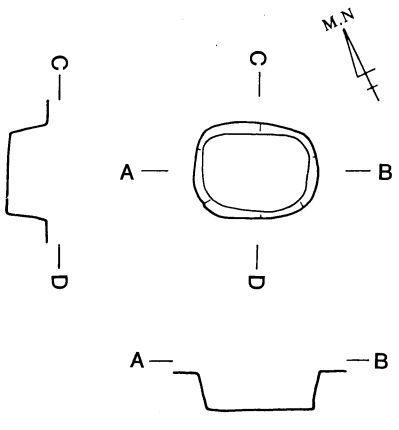
SK 2



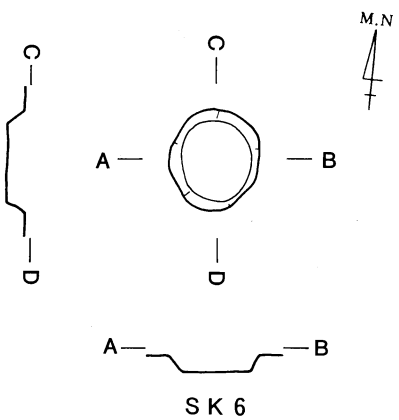
SK 3



SK 4

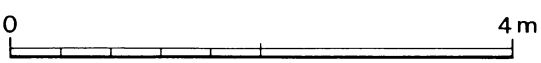


SK 5

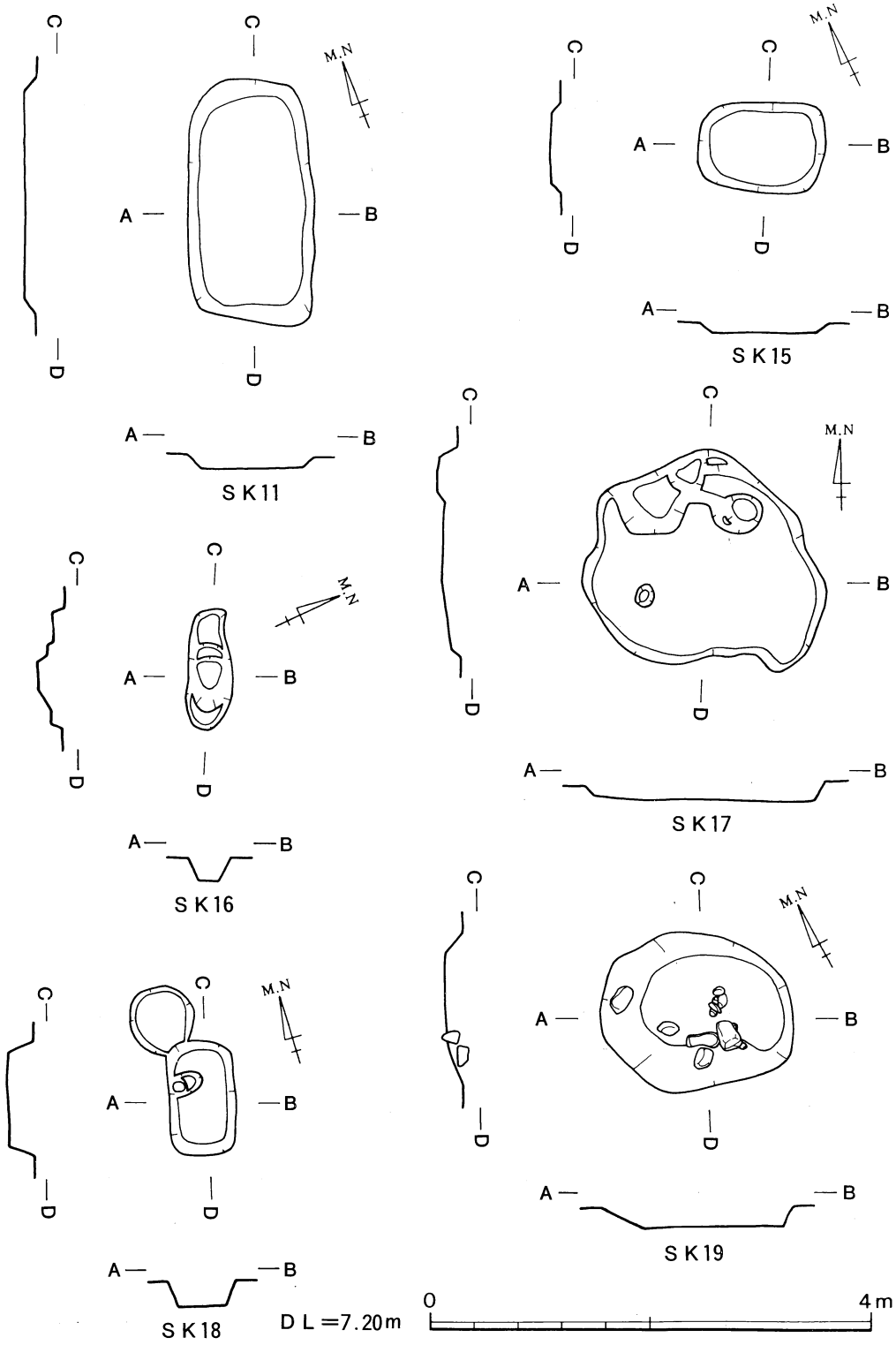


SK 6

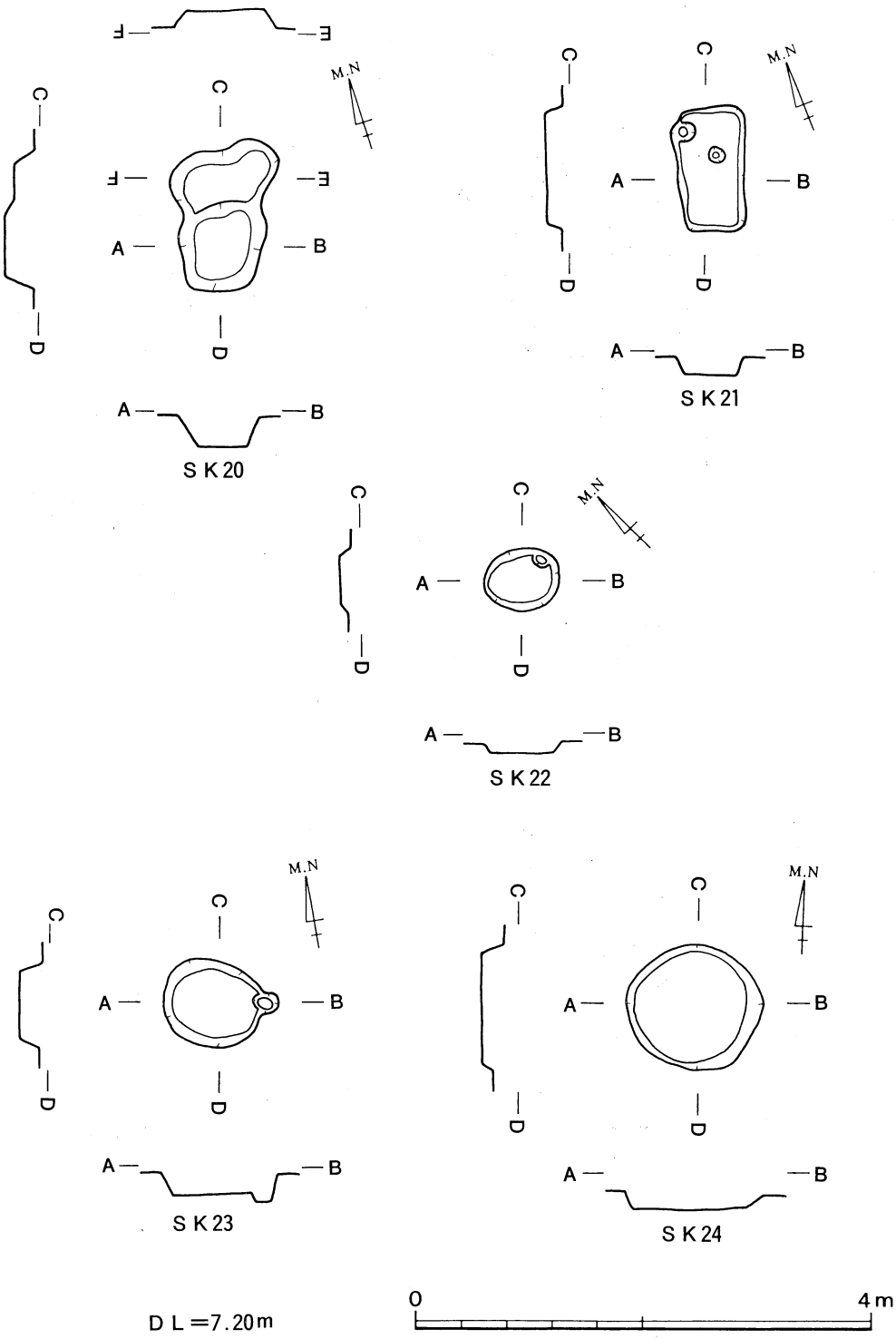
DL＝7.20m



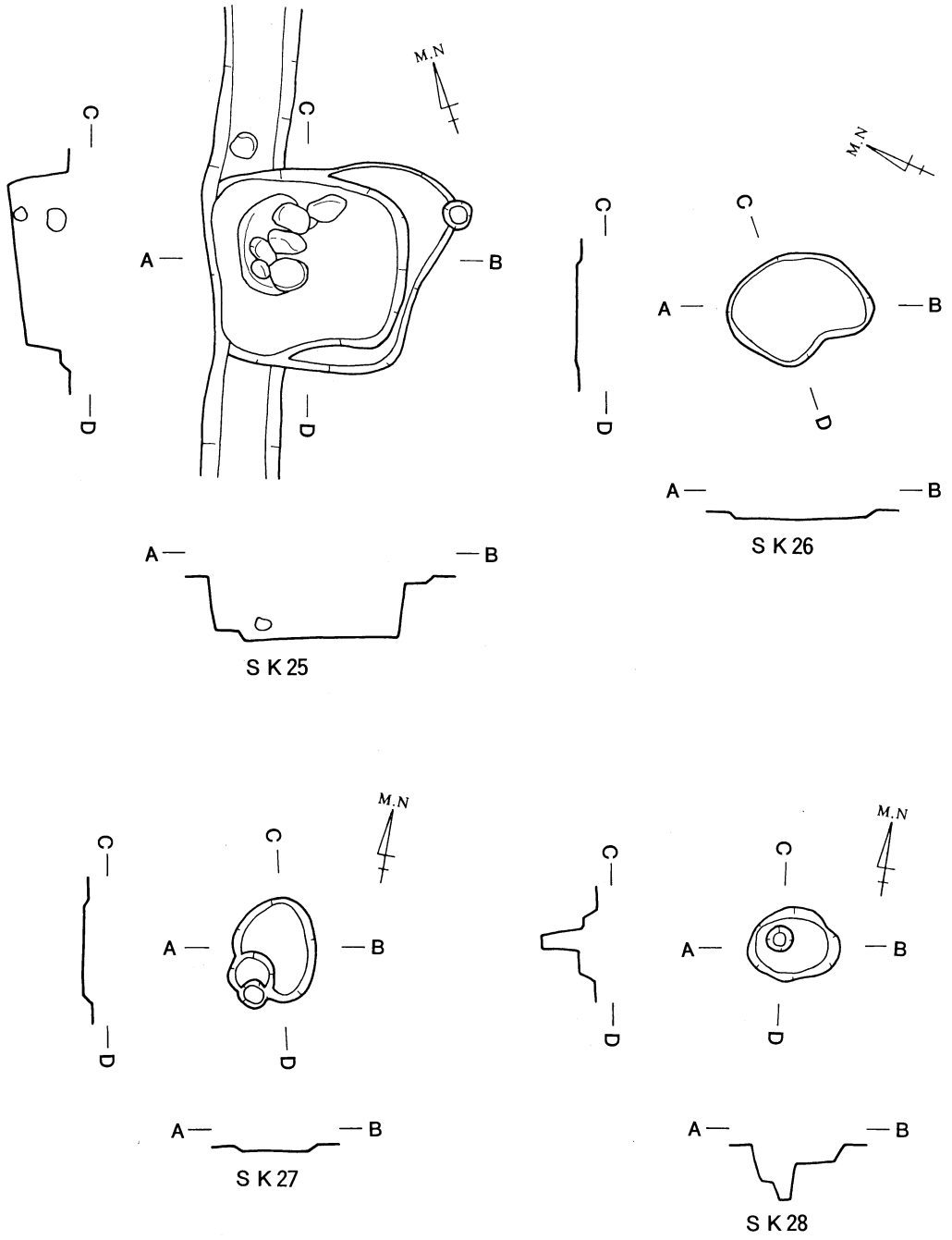
第29図　SK 1～6



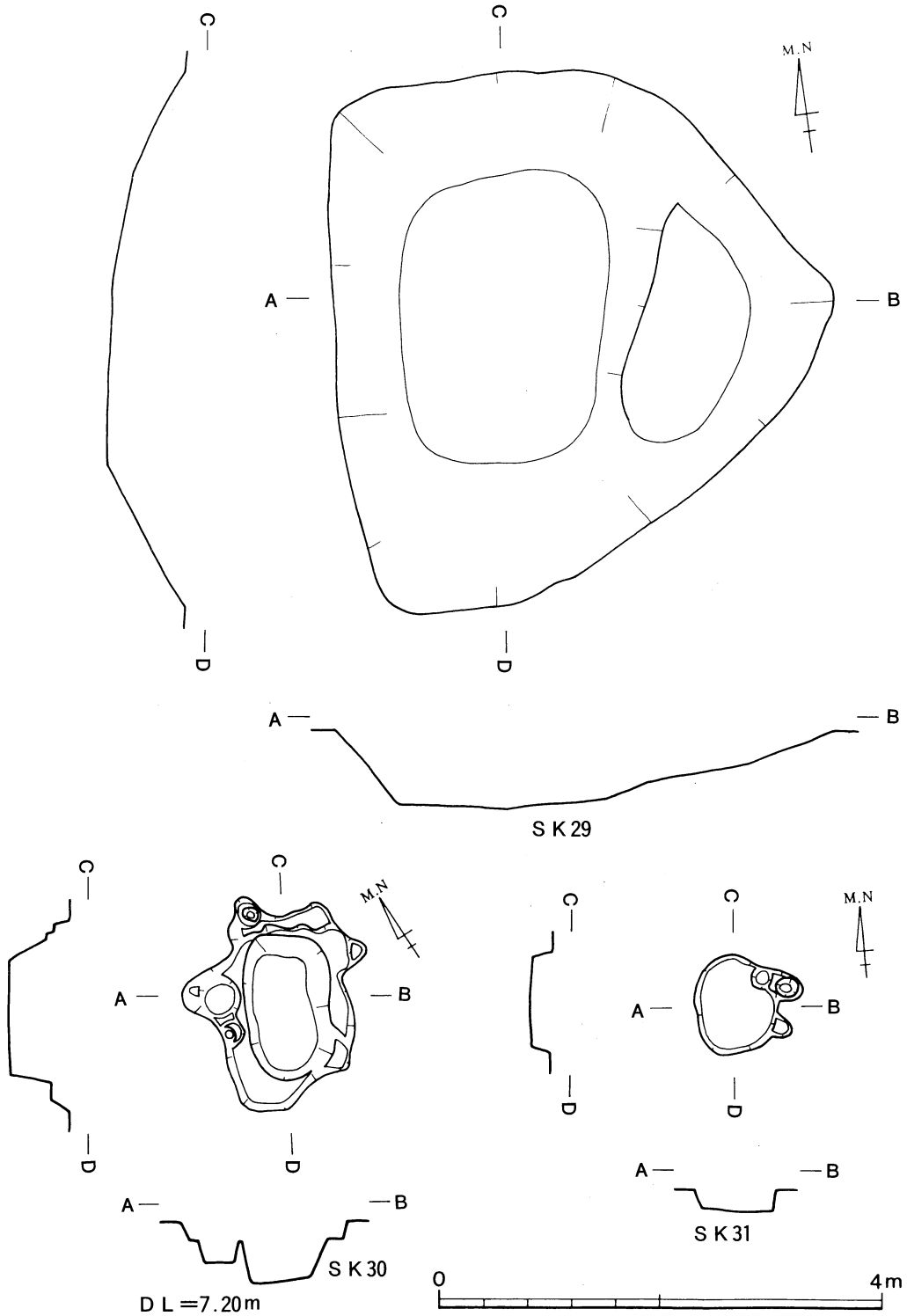
第30図　SK11・15～19



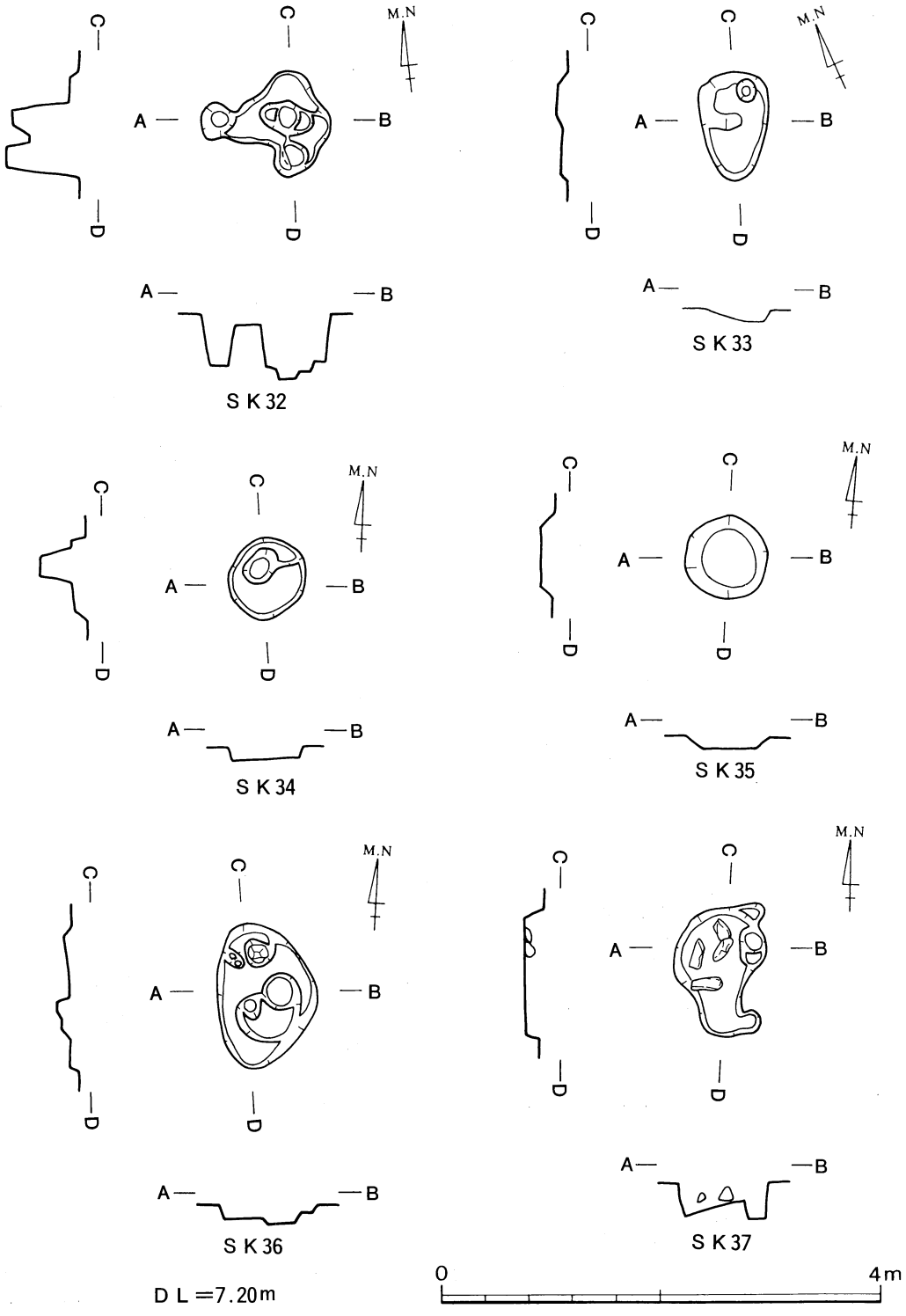
第31図　SK20～24



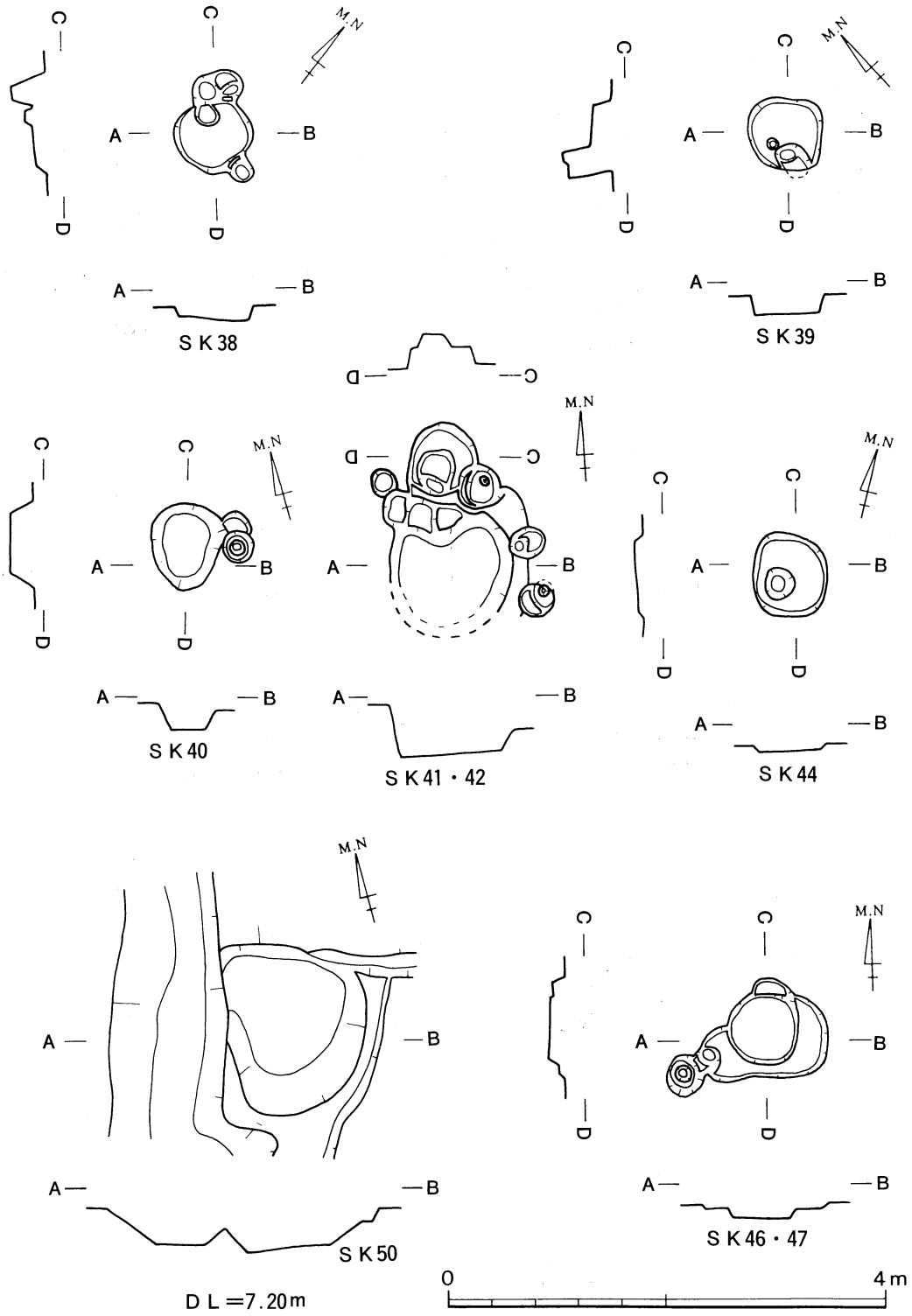
第32図　S K 25～28



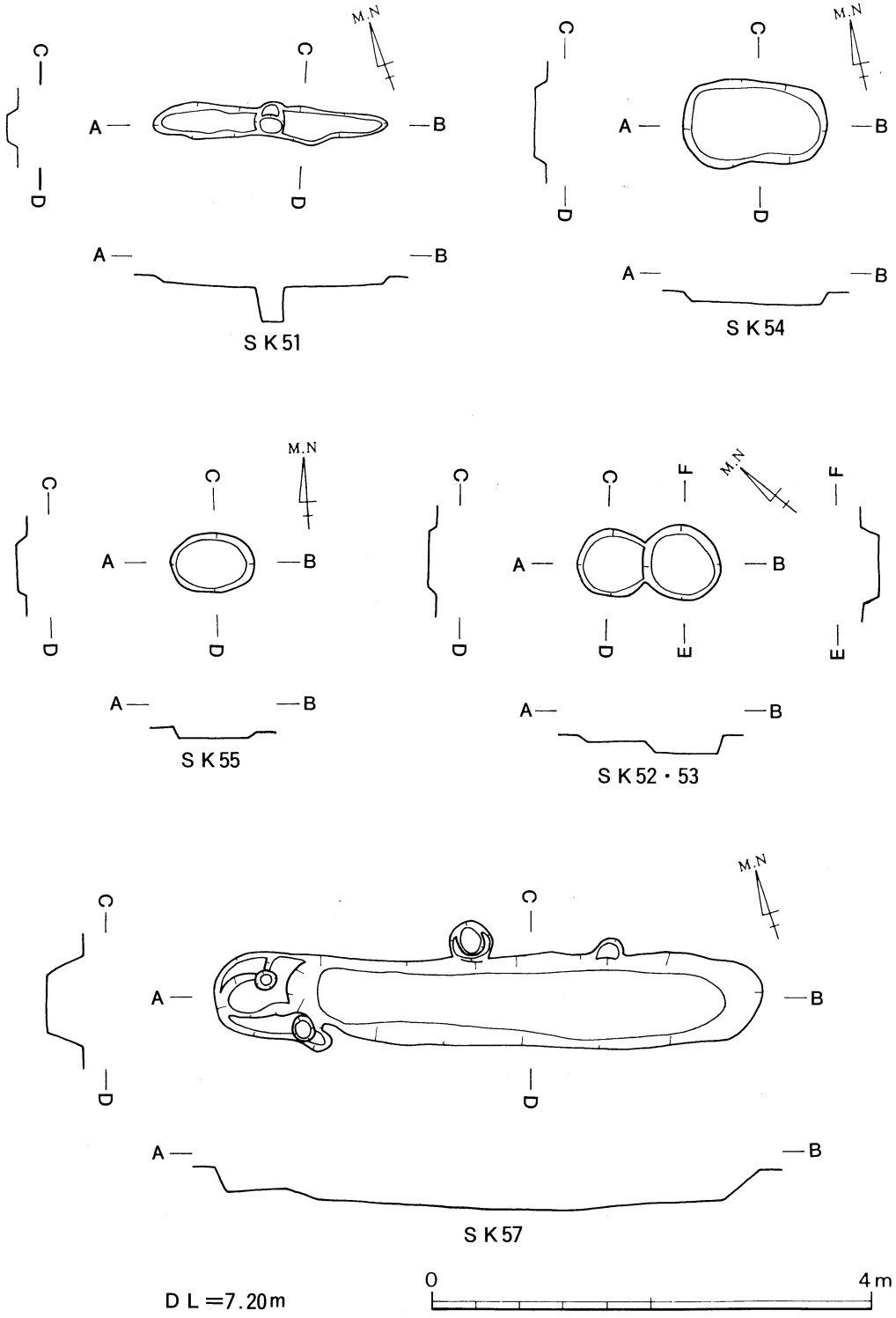
第33図　S K 29～31



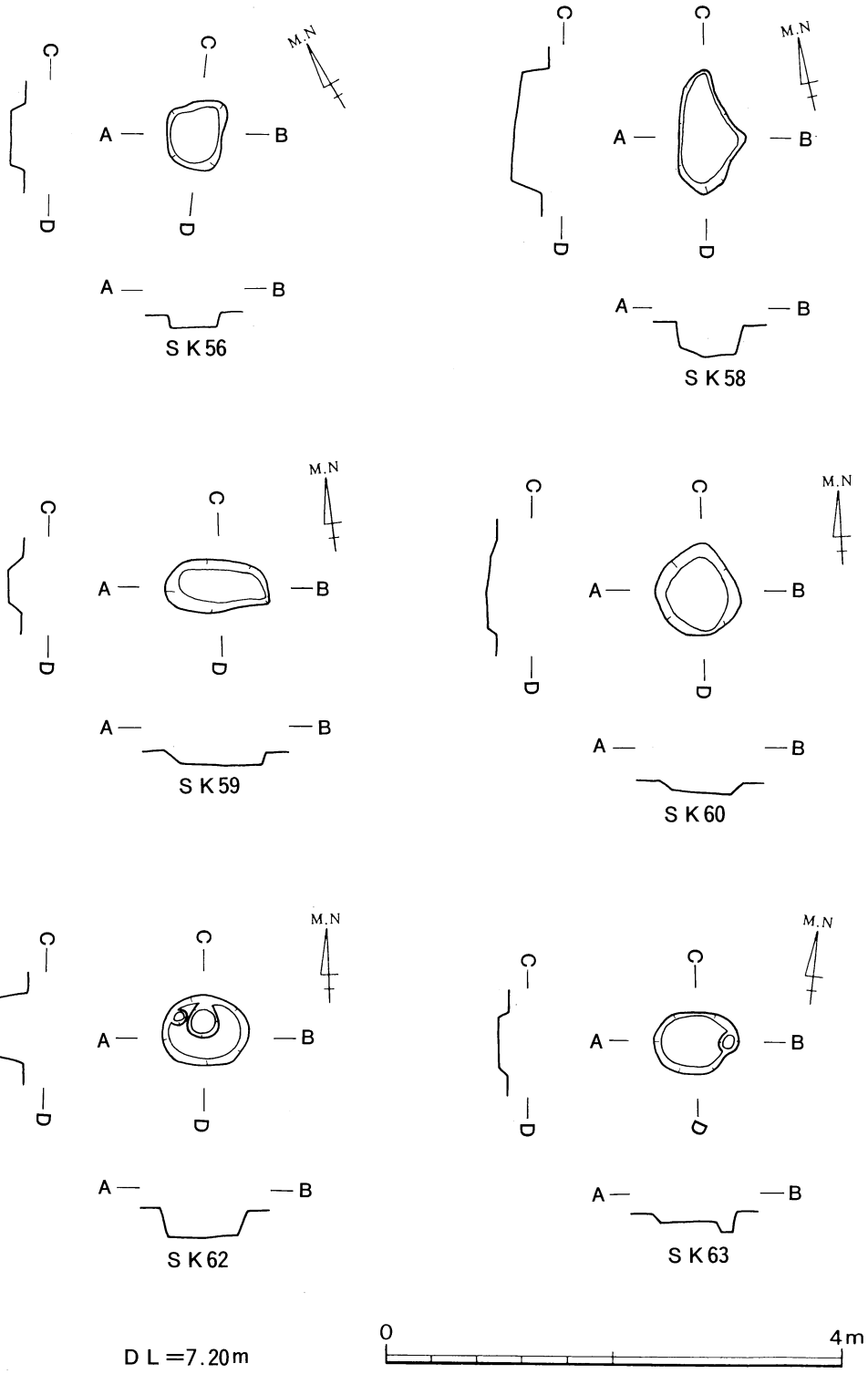
第34図　S K 32～37



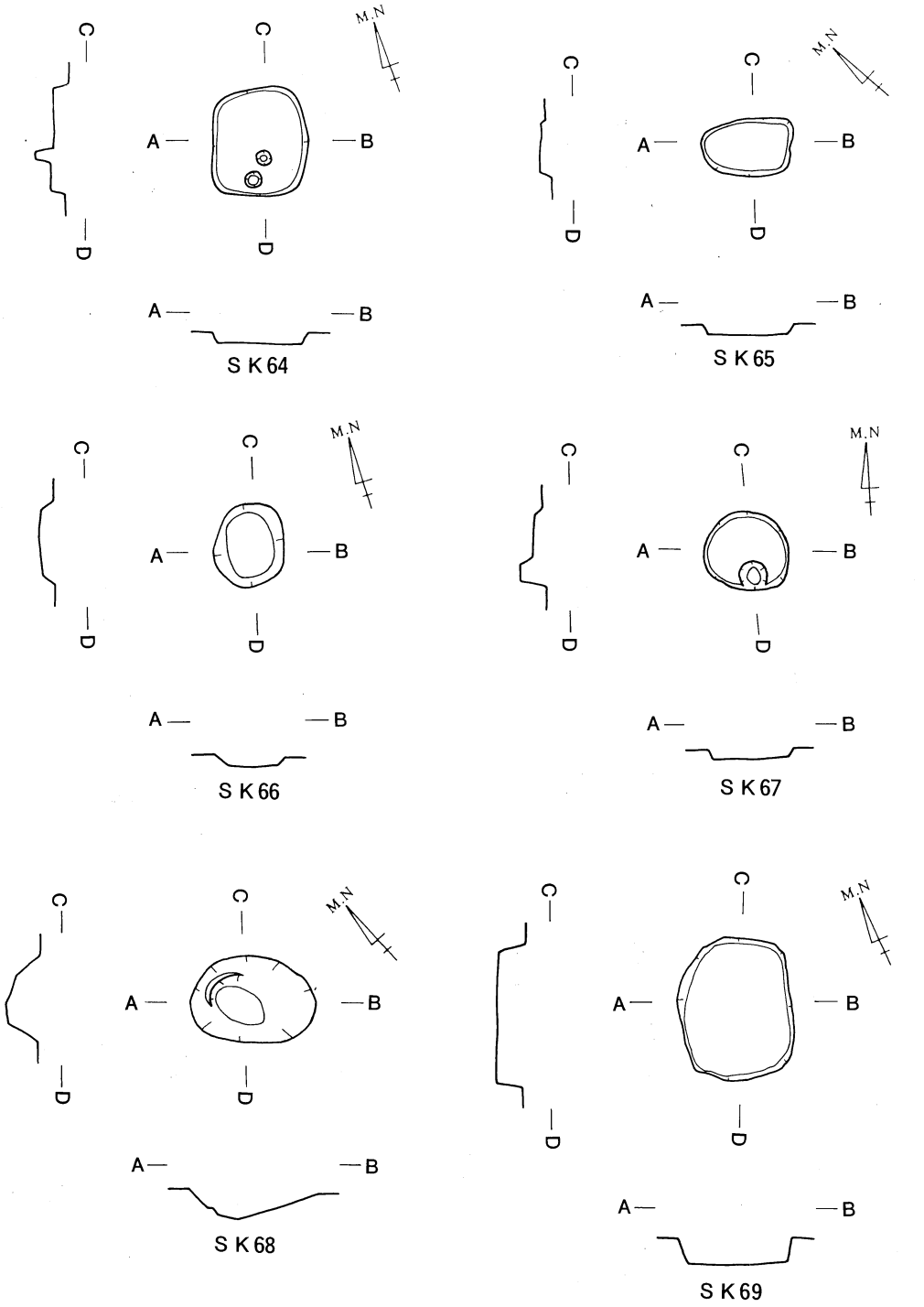
第35図　S K 38～42・44・46・47・50



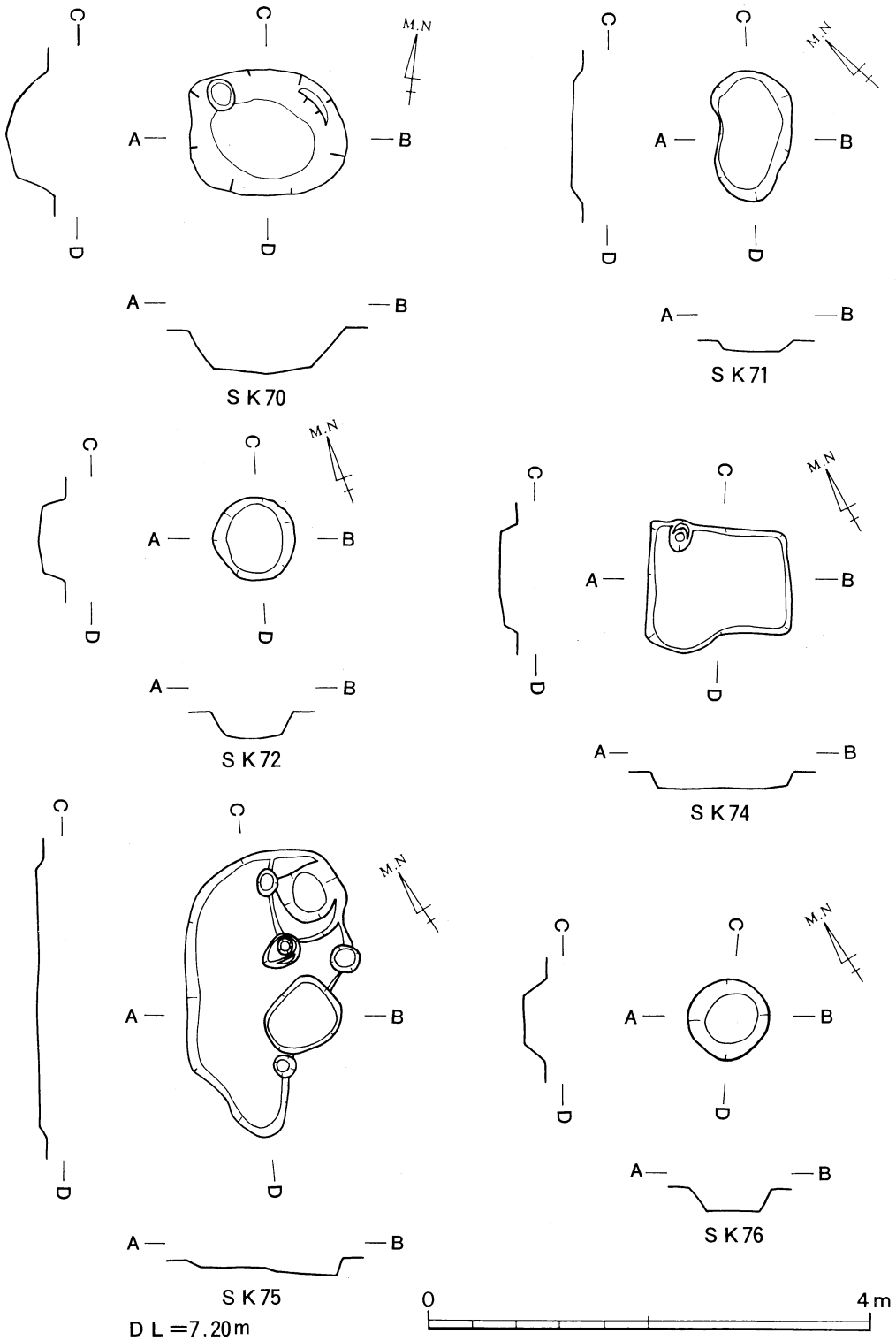
第36図　SK51～55・57



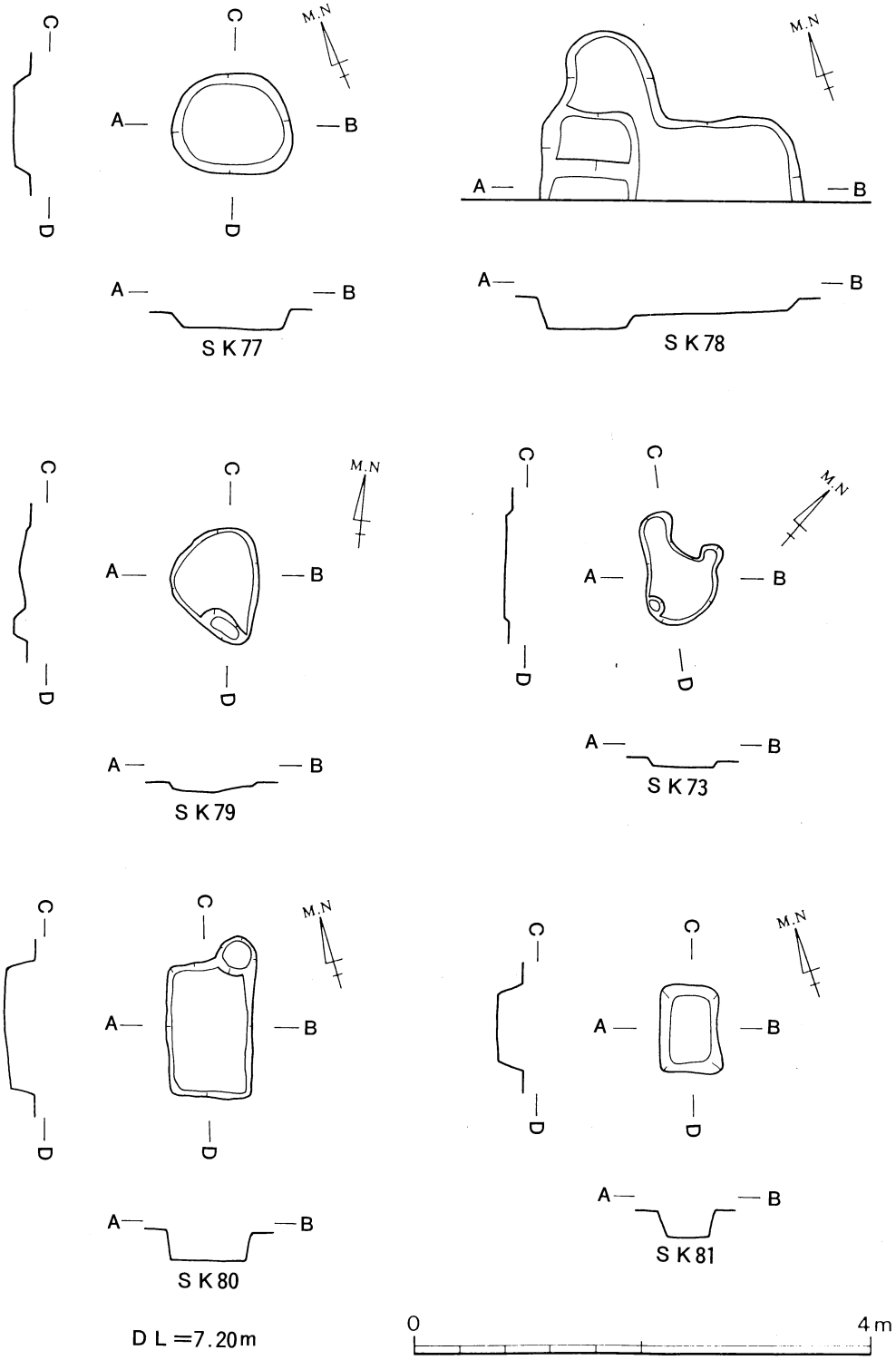
第37図　S K 56・58～60・62・63



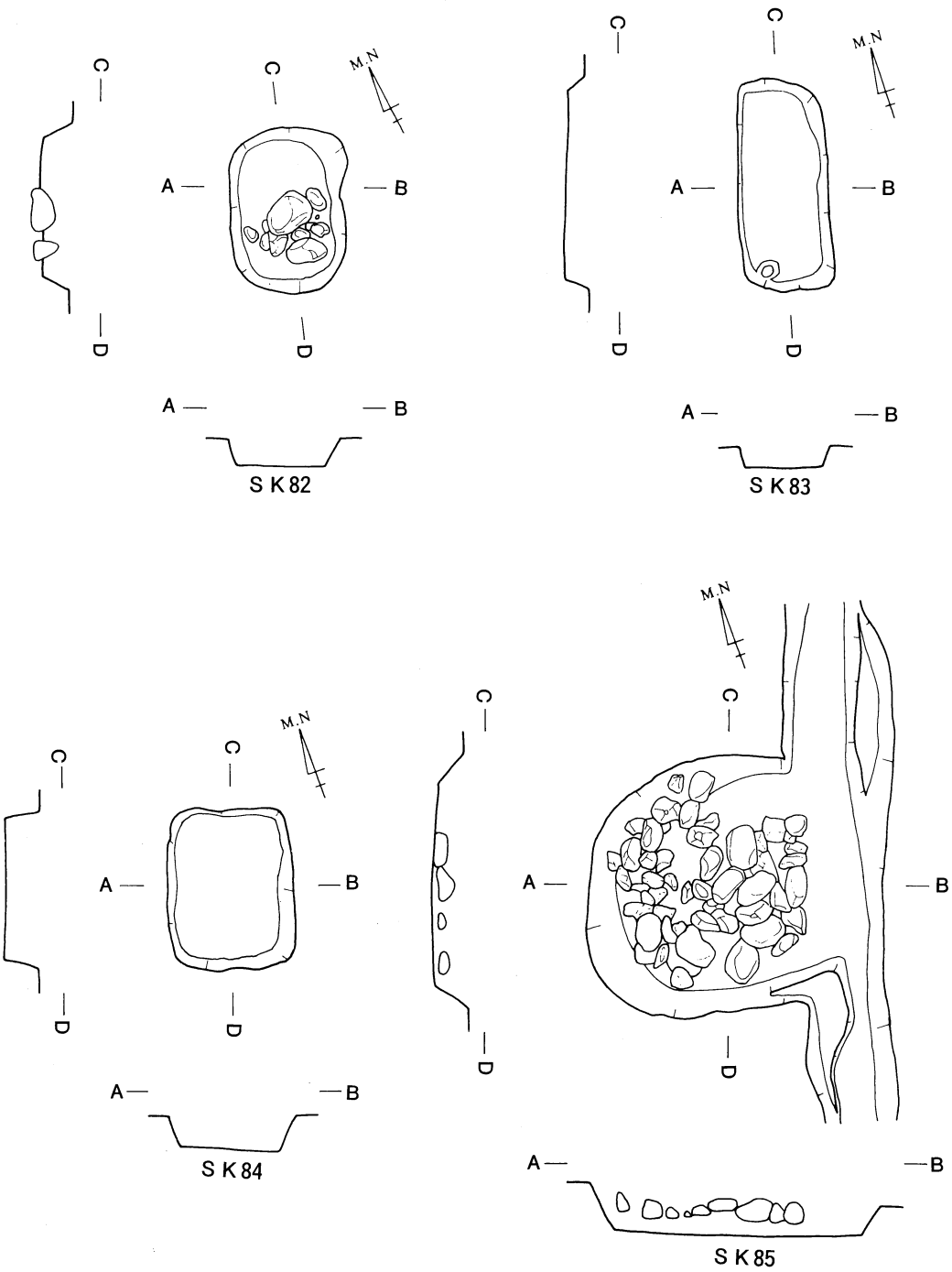
第38図　S K 64～69



第39図　SK70～72・74～76



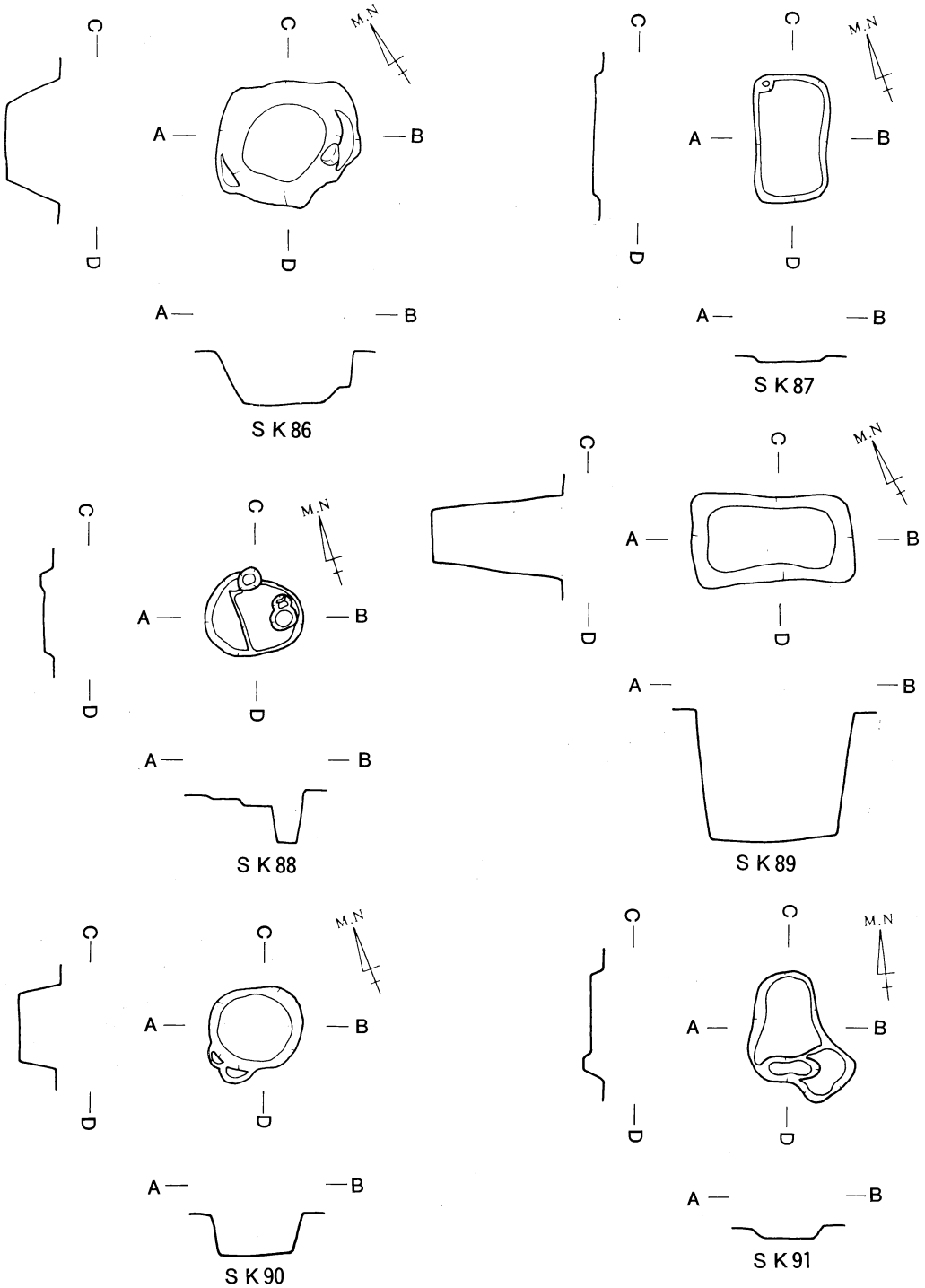
第40図　SK73・77～81



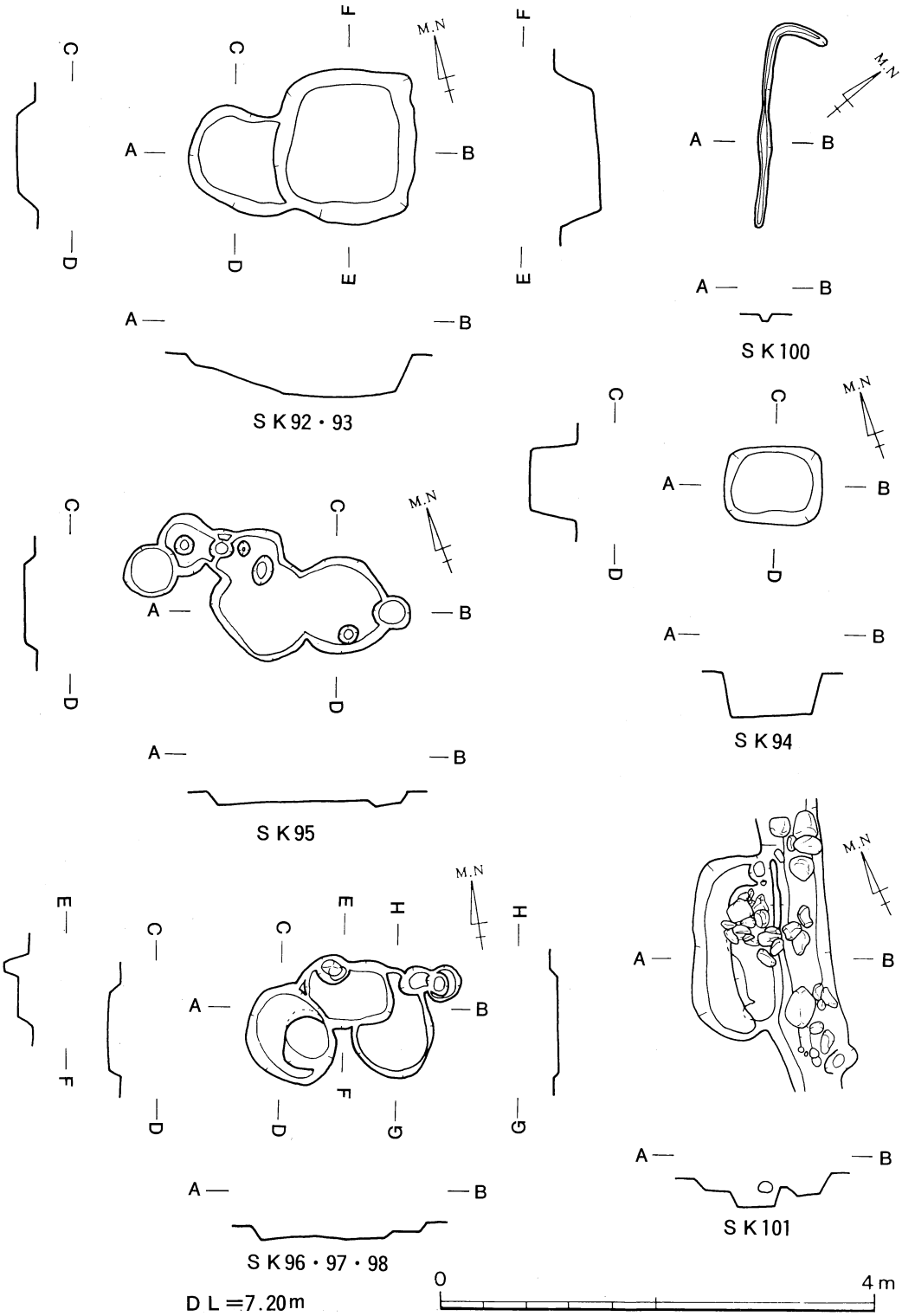
DL=7.20m

0 4m

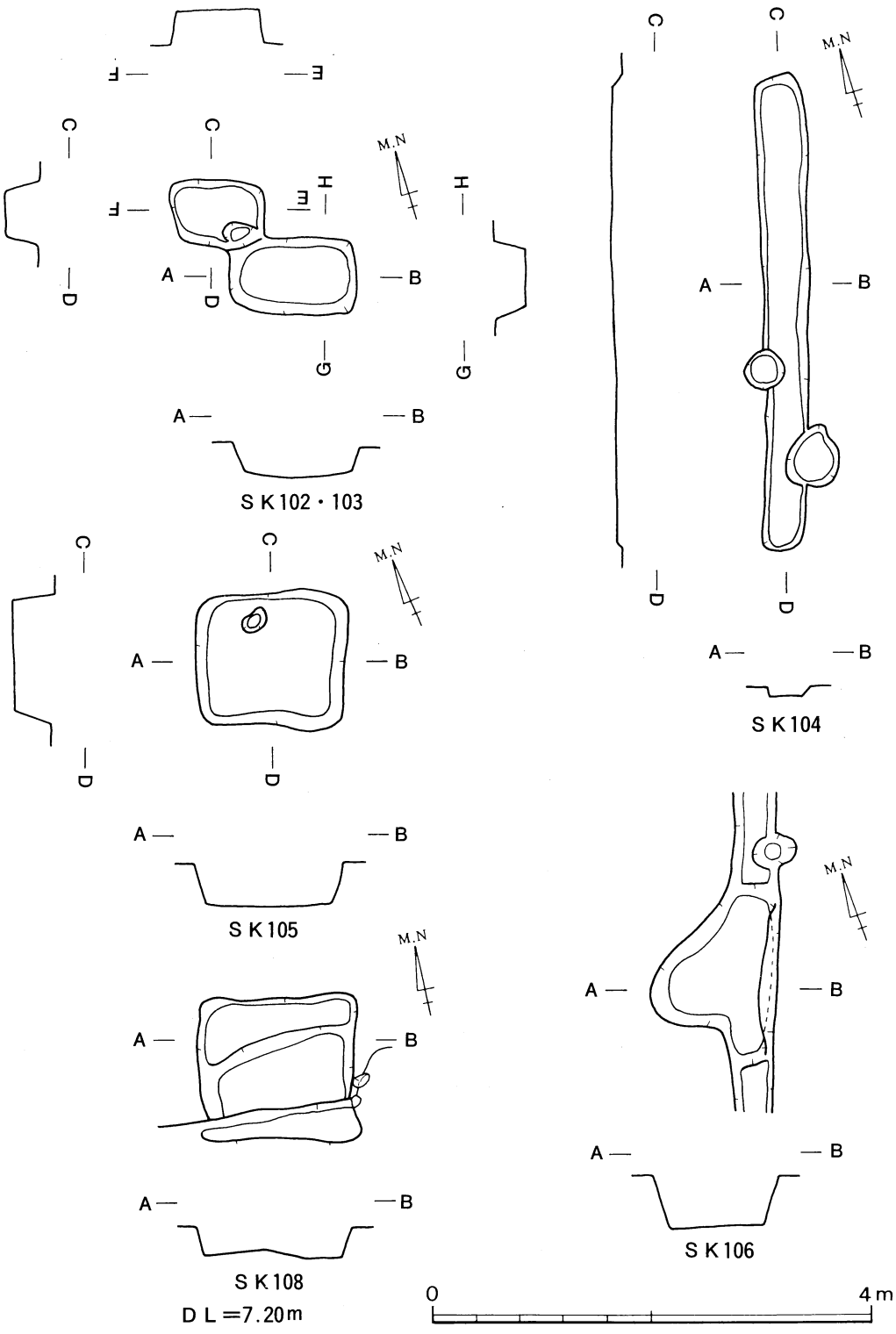
第41図　SK82～85



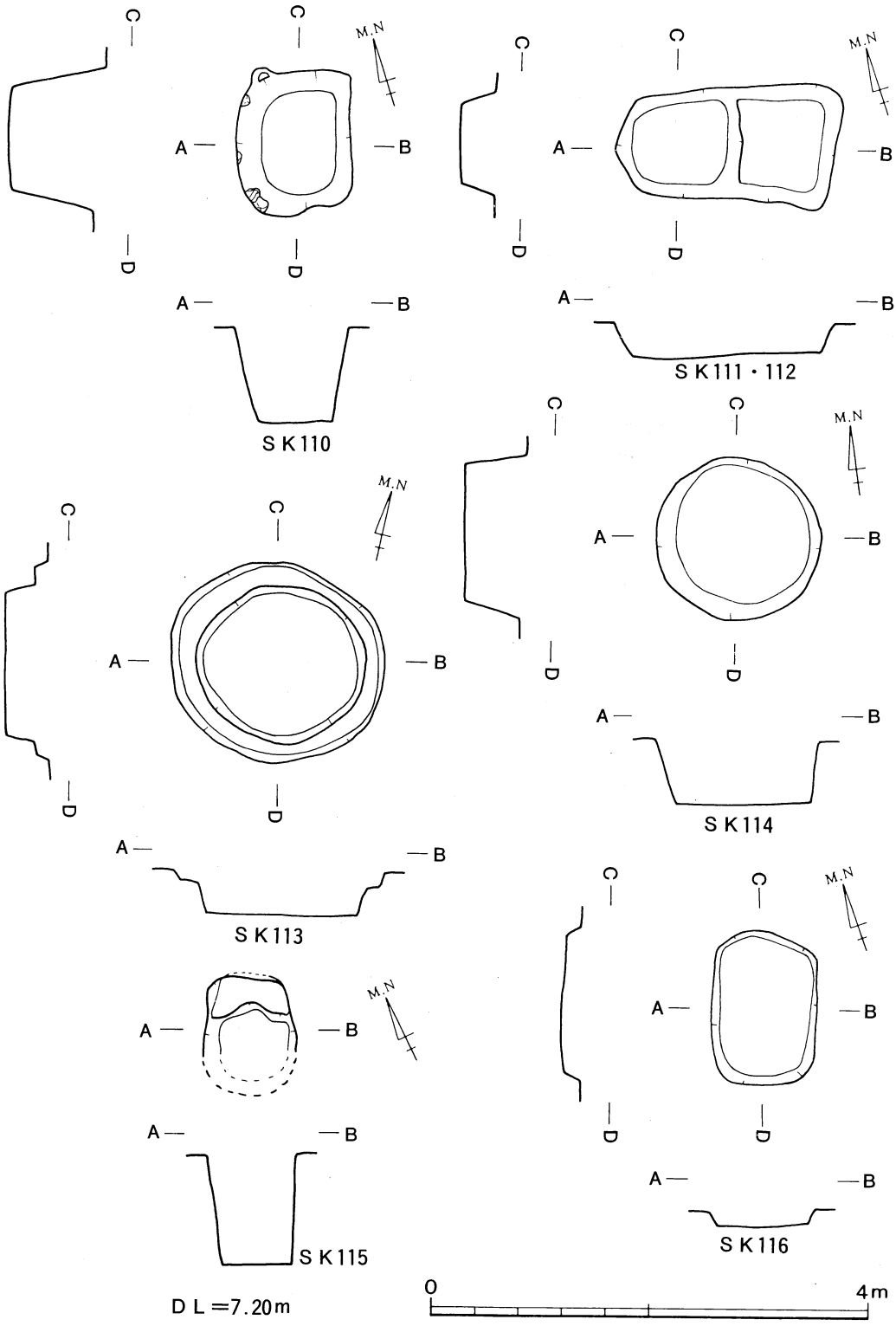
第42図　SK86～91



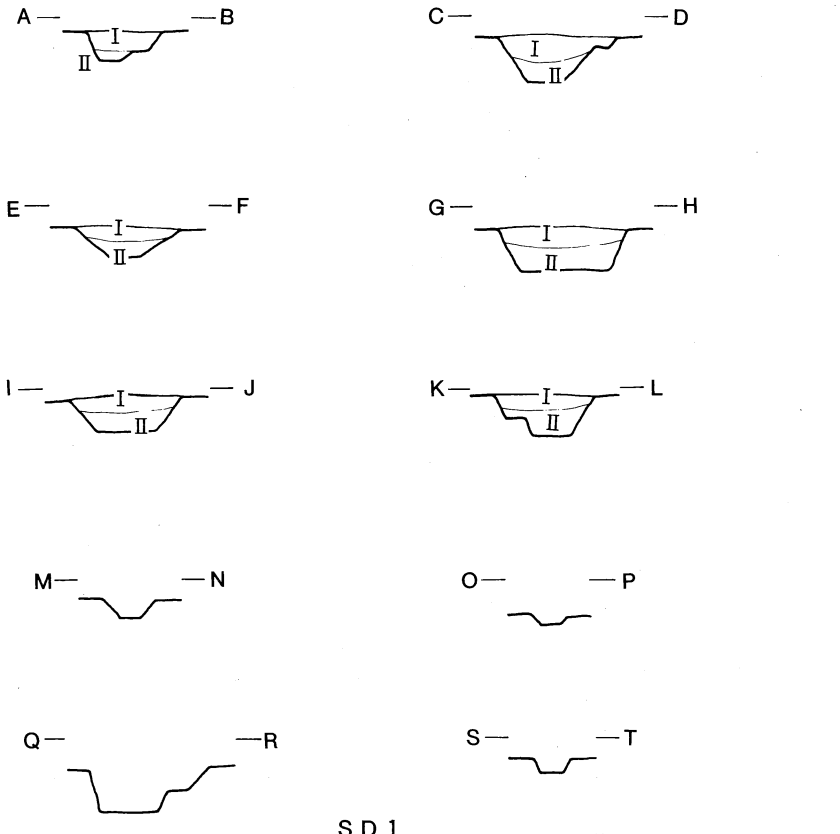
第43図　SK92～98・100・101



第44図　SK102～106・108

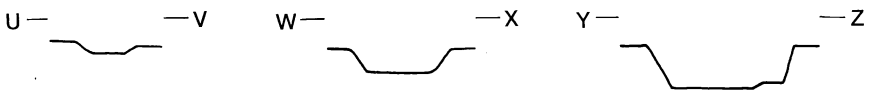


第45図　SK110～116



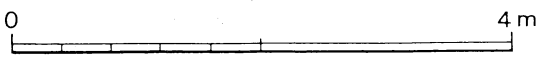
SD1

第Ⅰ層　灰色粘質土
第Ⅱ層　暗灰色粘質土

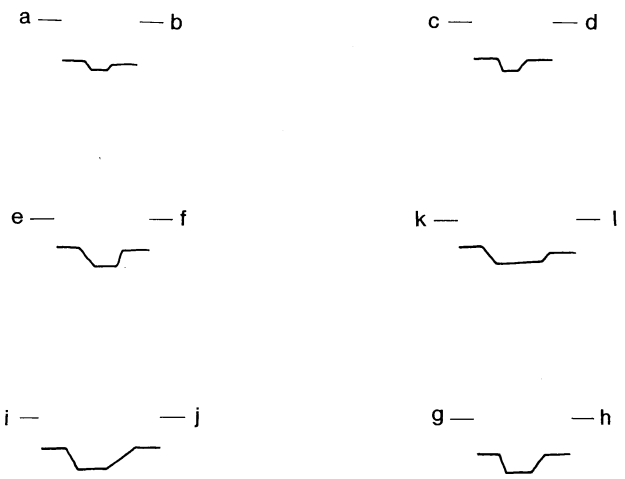


SD2

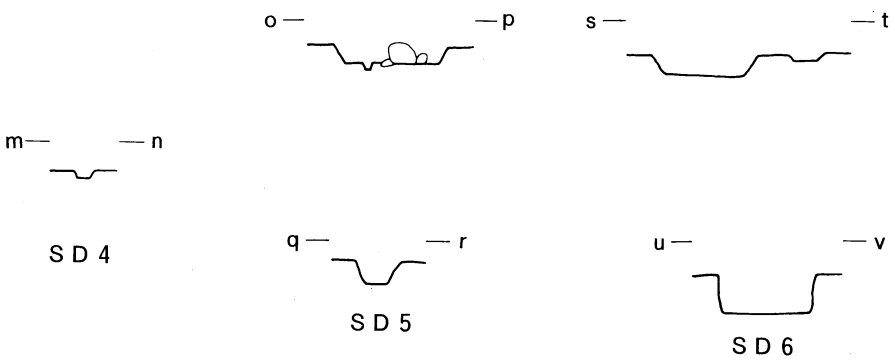
DL＝7.20m



第46図　SD1・2



SD 3



SD 4

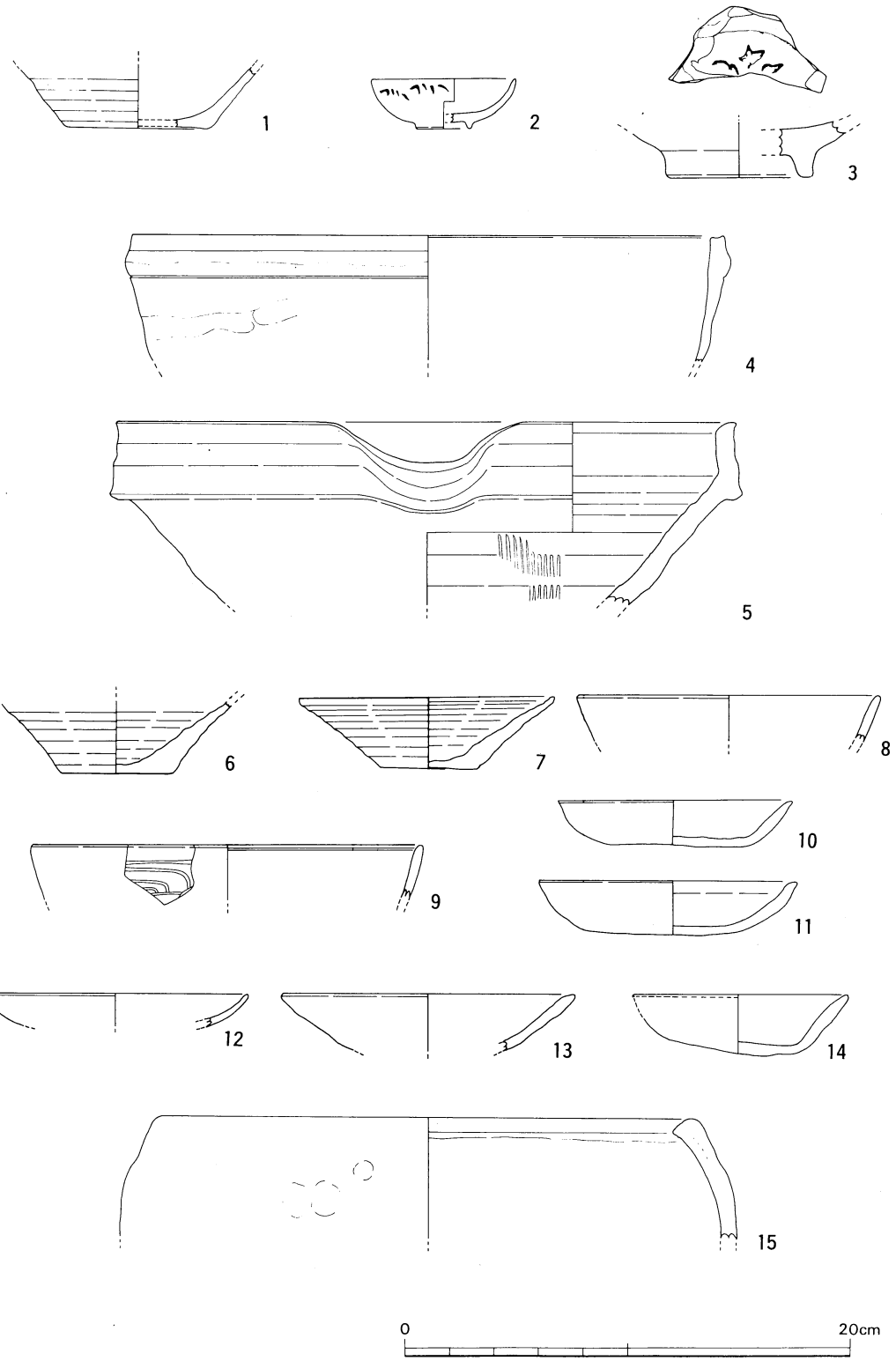
SD 5

SD 6

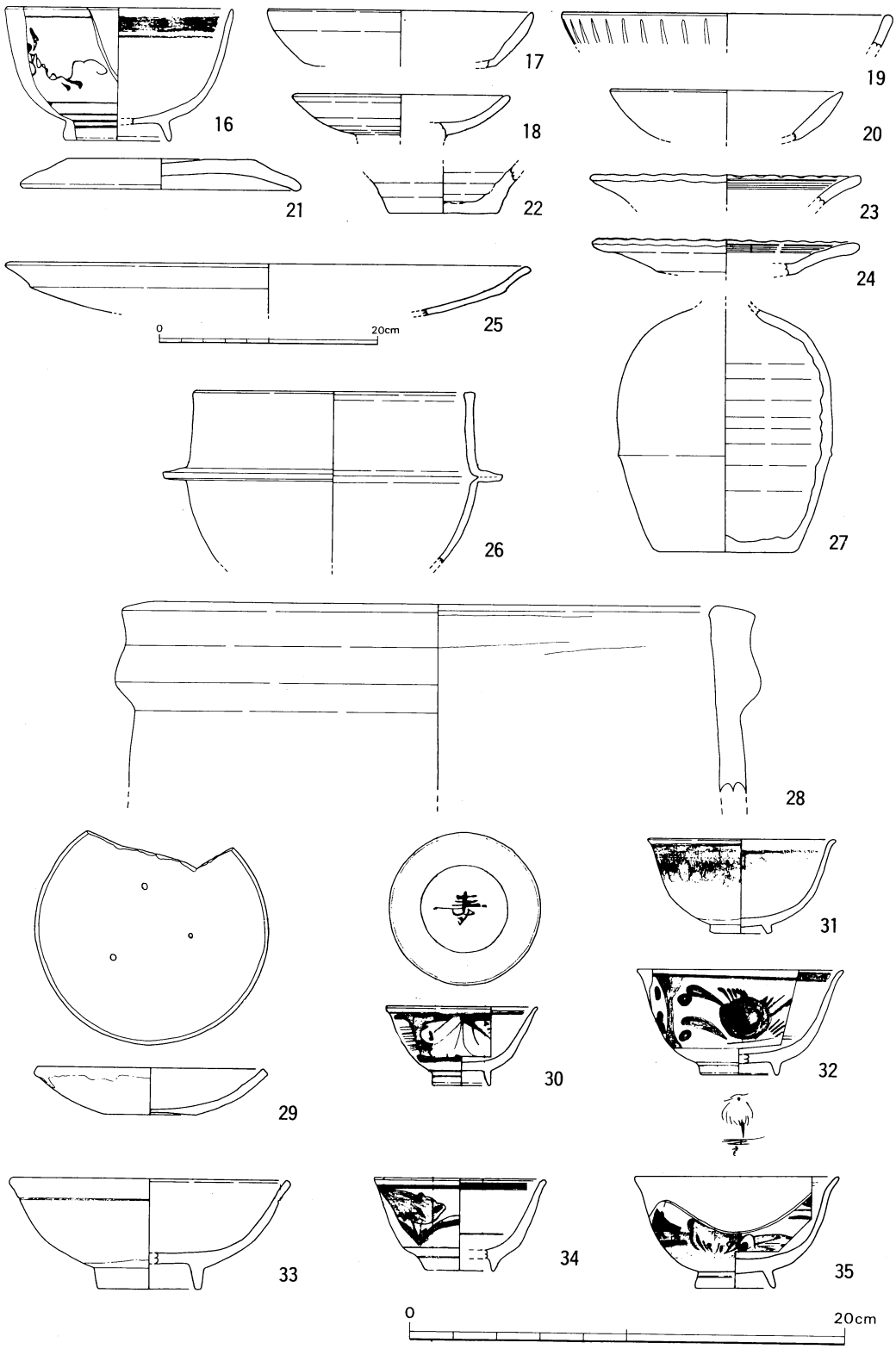
DL=7.20m

0 4m

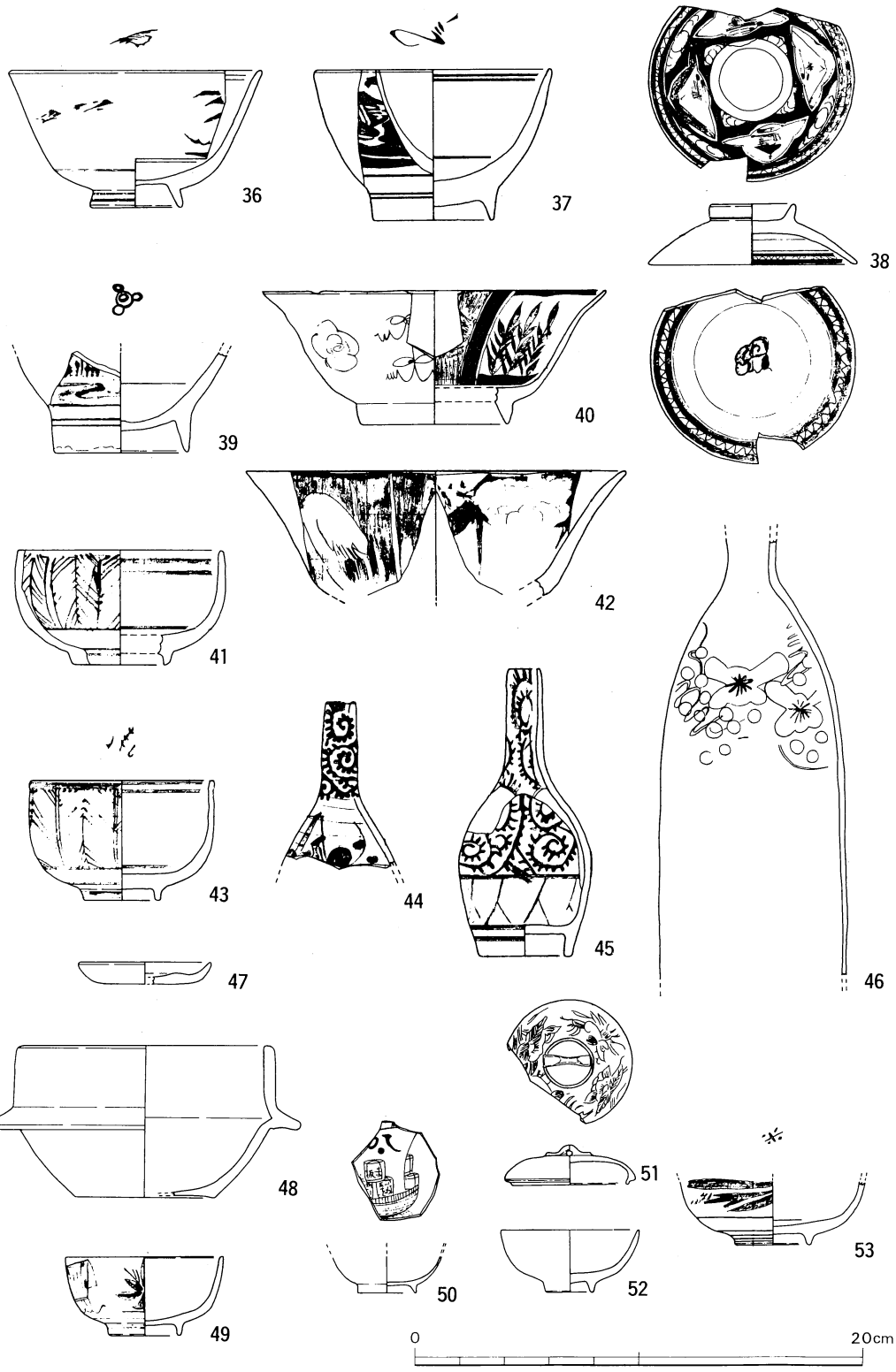
第47図　SD 3～6



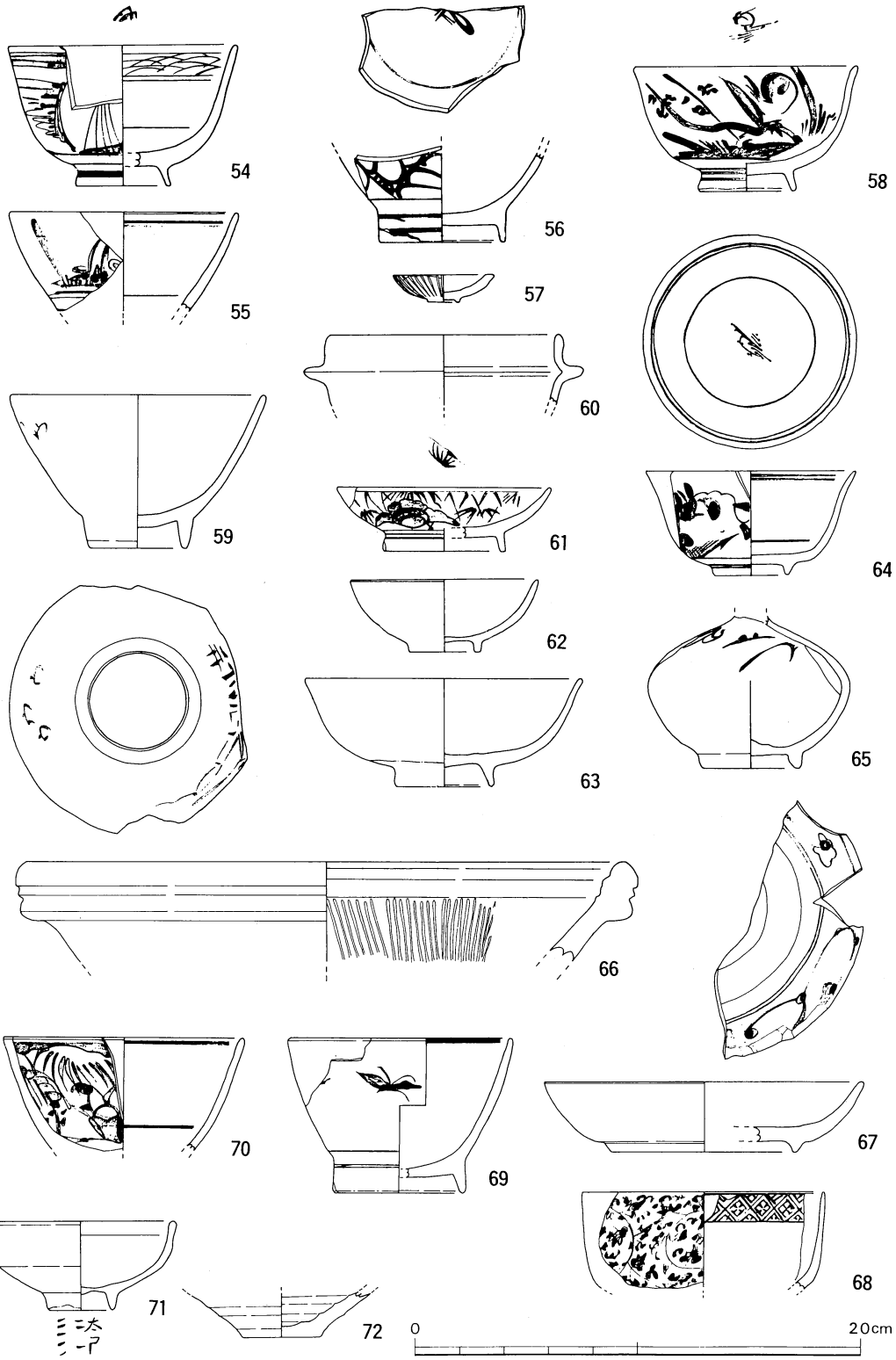
第48図　第Ⅰ～Ⅲ層、ＳＢ11・13・14・24・26・29・31・42　出土遺物



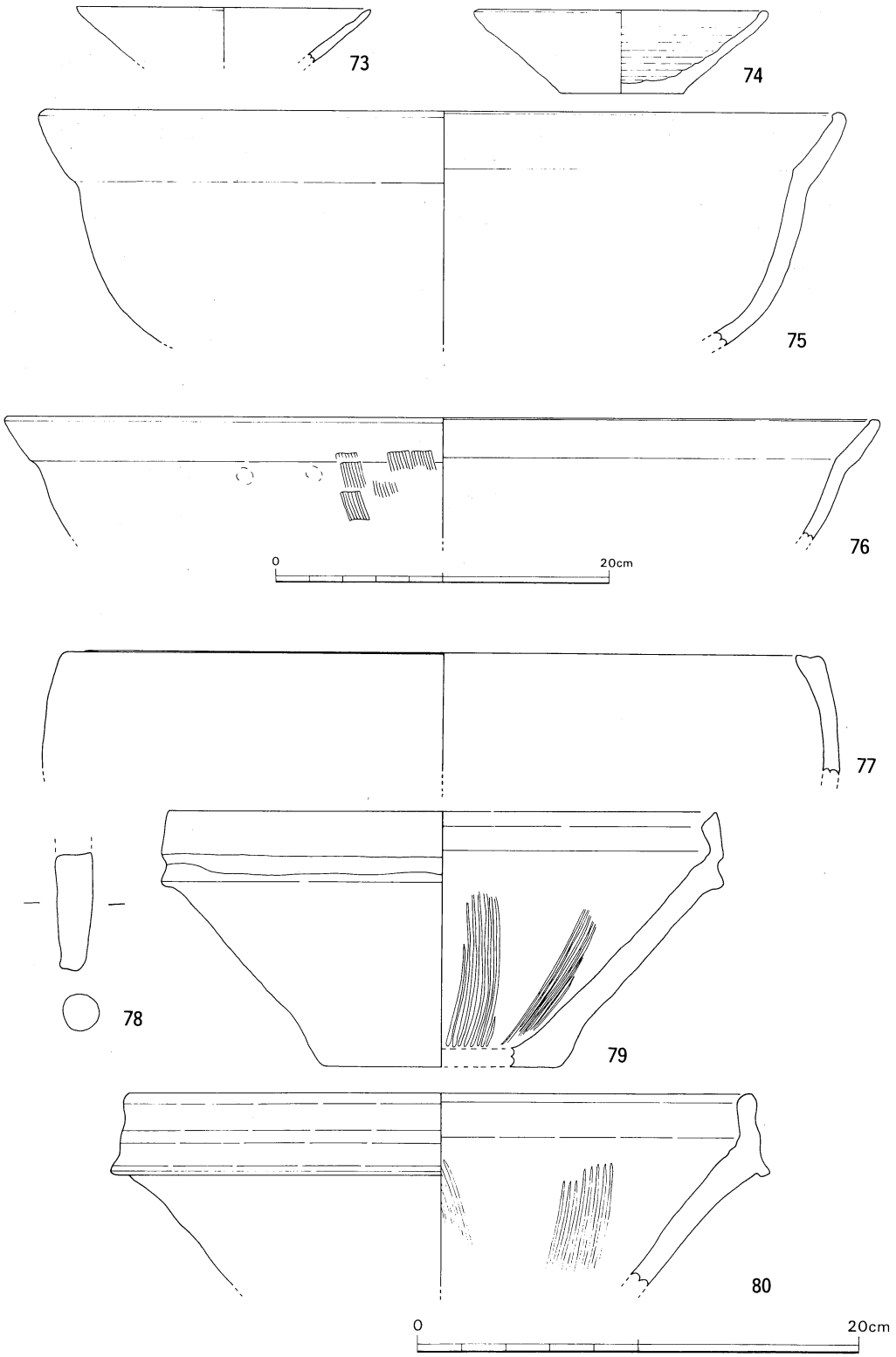
第49図　ＳＫ14・21・30・38・51・58・70・89・124　出土遺物



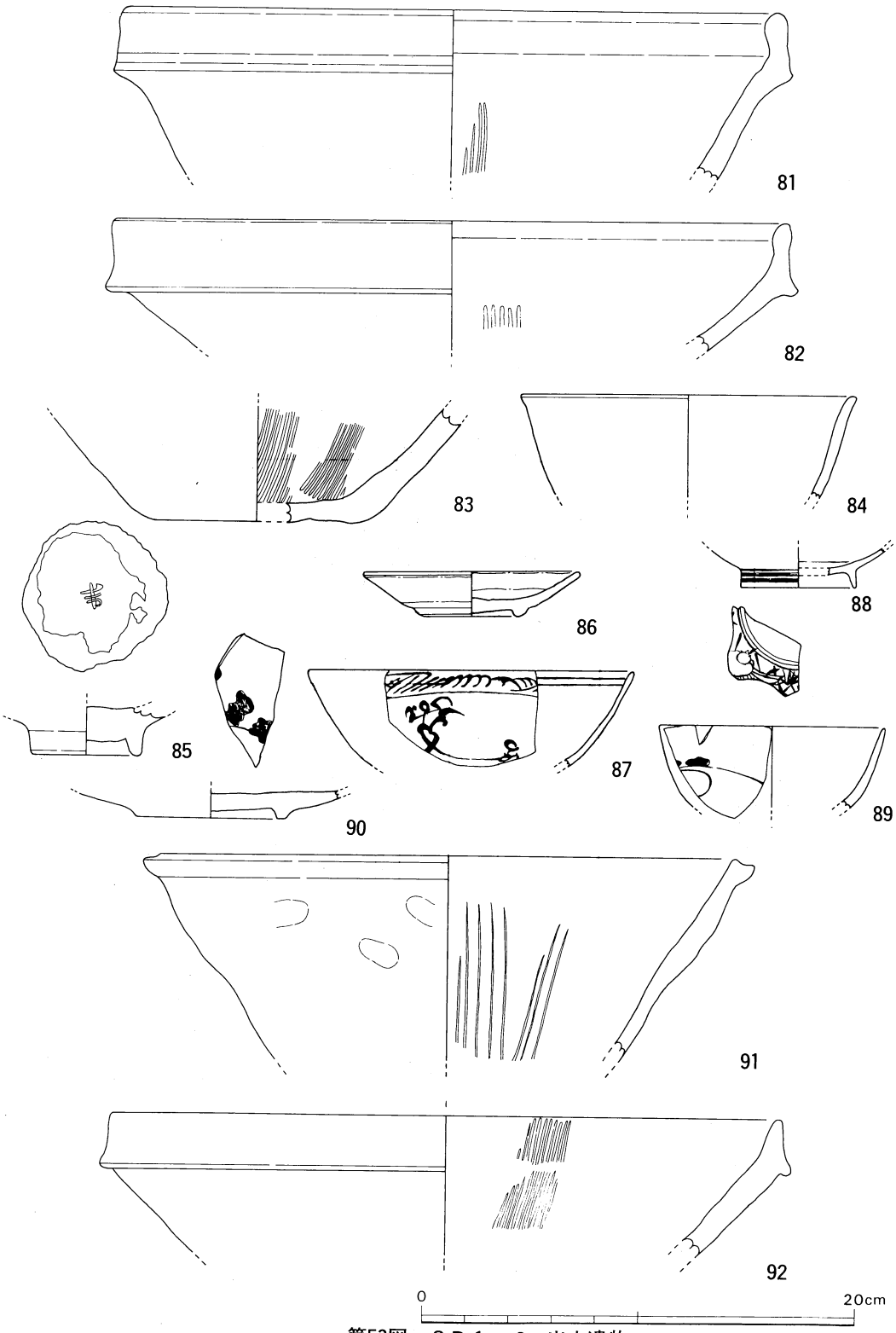
第50図　ＳＫ89・92・93　出土遺物



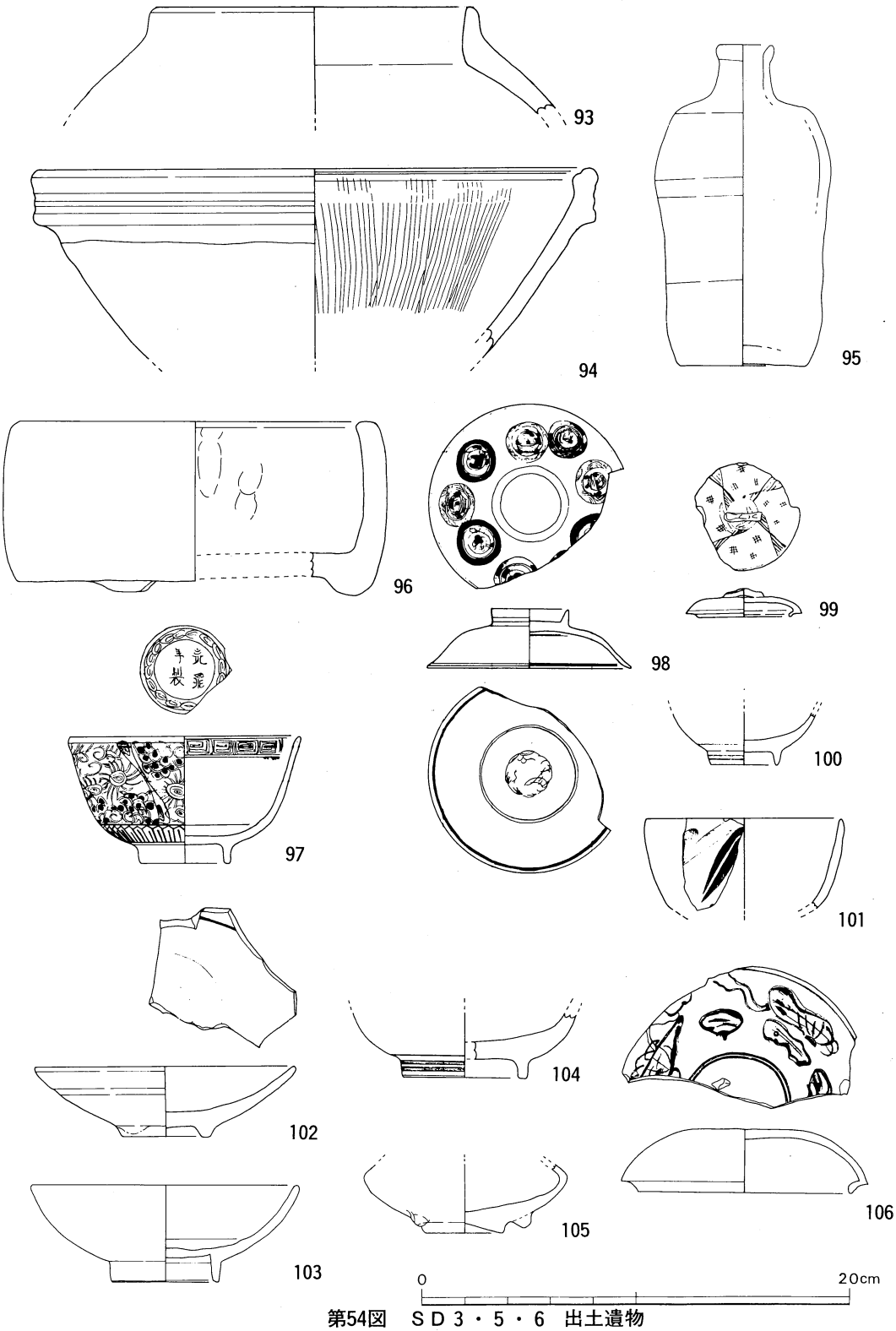
第51図　ＳＫ93・99・101・105・106・109・110・121 出土遺物



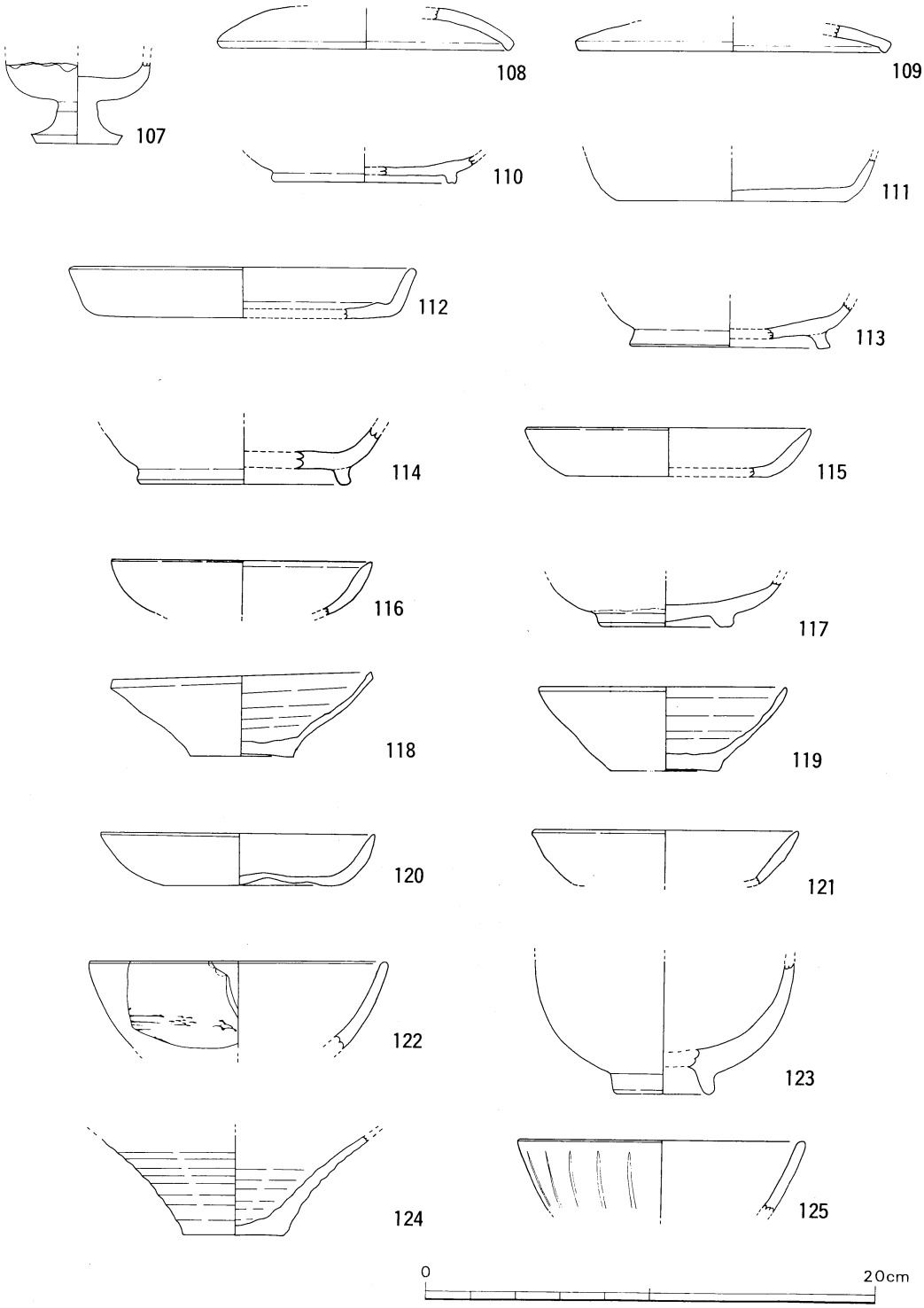
第52図　ＳＤ１　出土遺物



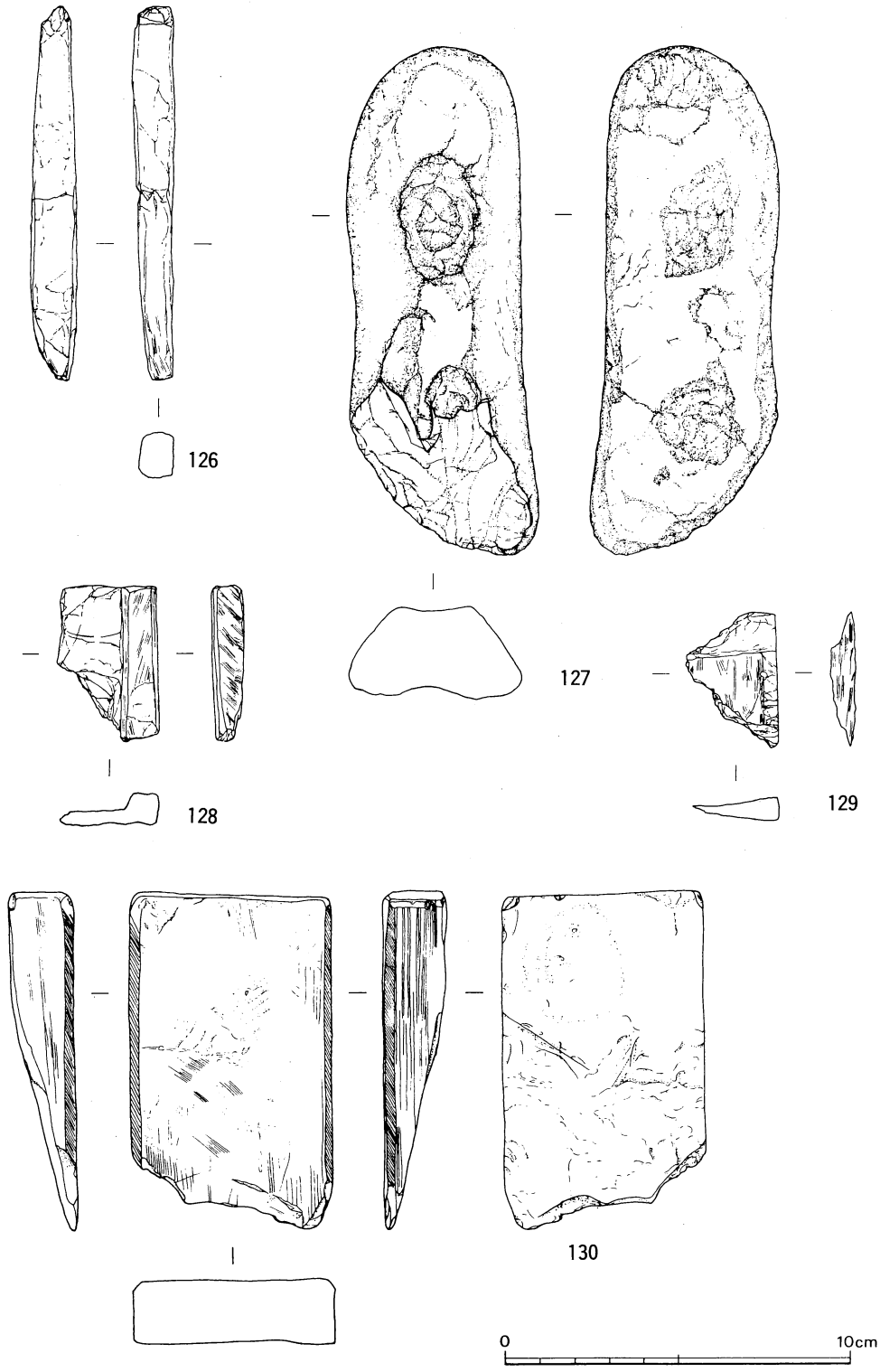
第53図　ＳＤ１・２　出土遺物



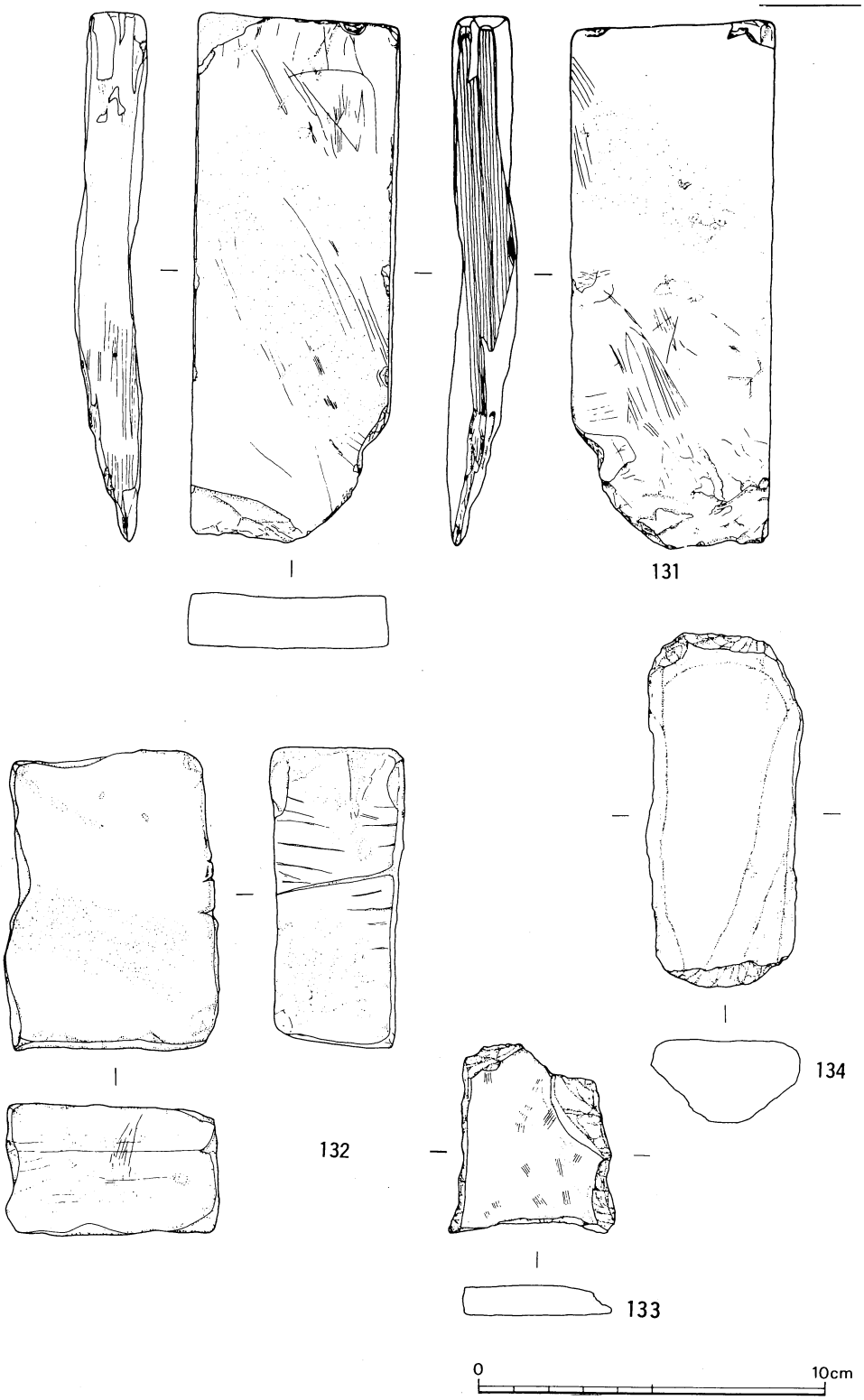
第54図　ＳＤ３・５・６　出土遺物



第55図　ＳＰ１、Ｐ１・２・４・９～16　出土遺物



第56図　ＳＫ55、ＳＤ１、ＳＰ１、Ｐ２・13　出土遺物



第57図　ＳＫ108、ＳＰ１、Ｐ１　出土遺物

2. Loc. 41

Loc. 41

1．位置と調査経過

Loc. 41は、田村遺跡群の西部に位置し、小字名は柿の本である。北には弥生時代の自然流路及び中世の掘立柱建物址群を検出したLoc. 36が接しており、西にも同類の遺構を検出したLoc. 32・33が接している。

当調査区では、空港拡張事業に付随した田村川暗渠化工事に伴い、まず、東半部の田村川右岸域2,275㎡の調査を緊急に行い、後に、西半部2,268㎡の調査を行った。東半部では、その北端部と南端部にトレンチを入れたところ、溝が検出されたため、同遺構を追って全面を発掘した。西半部でも、4か所にA～Dトレンチを任意に設定して試掘を行った結果、溝及びピット群が検出されたため、調査区中央の一部を除き、ほぼ全面を発掘した。

2．調査概要

当調査区の最終的な発掘面積は4,453㎡に及び、掘立柱建物址11棟、土坑45基、溝10条並びに弥生の自然流路（ＳＲ２）を検出した。

うち、溝１条（ＳＤ１）と自然流路（ＳＲ２）については『弥生編』で記述済みである。掘立柱建物址及び溝の大半は中世のものであり、土坑の中には近世墓と目される遺構も比較的多数を占めていた。但し、溝の中に１条だけ古墳時代に属するもの（ＳＤ２）があり、同遺構は本来ならば『古墳時代編』で扱うべきであるが、出土遺物も限られているため、本項において記述している。

3．層序と出土遺物

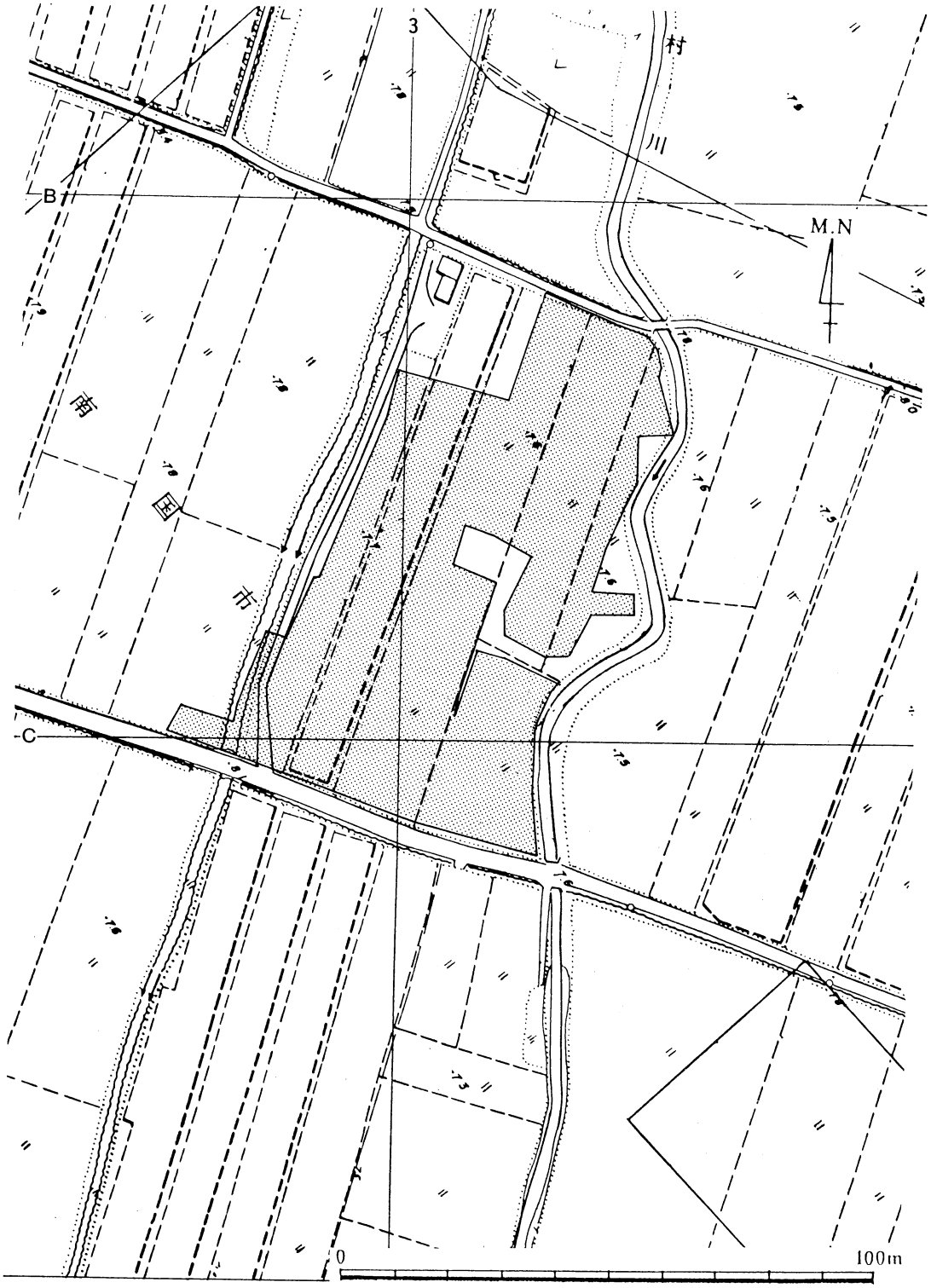
Loc. 41における基本的な層序は次の通りである。

第Ⅰ層　耕作土

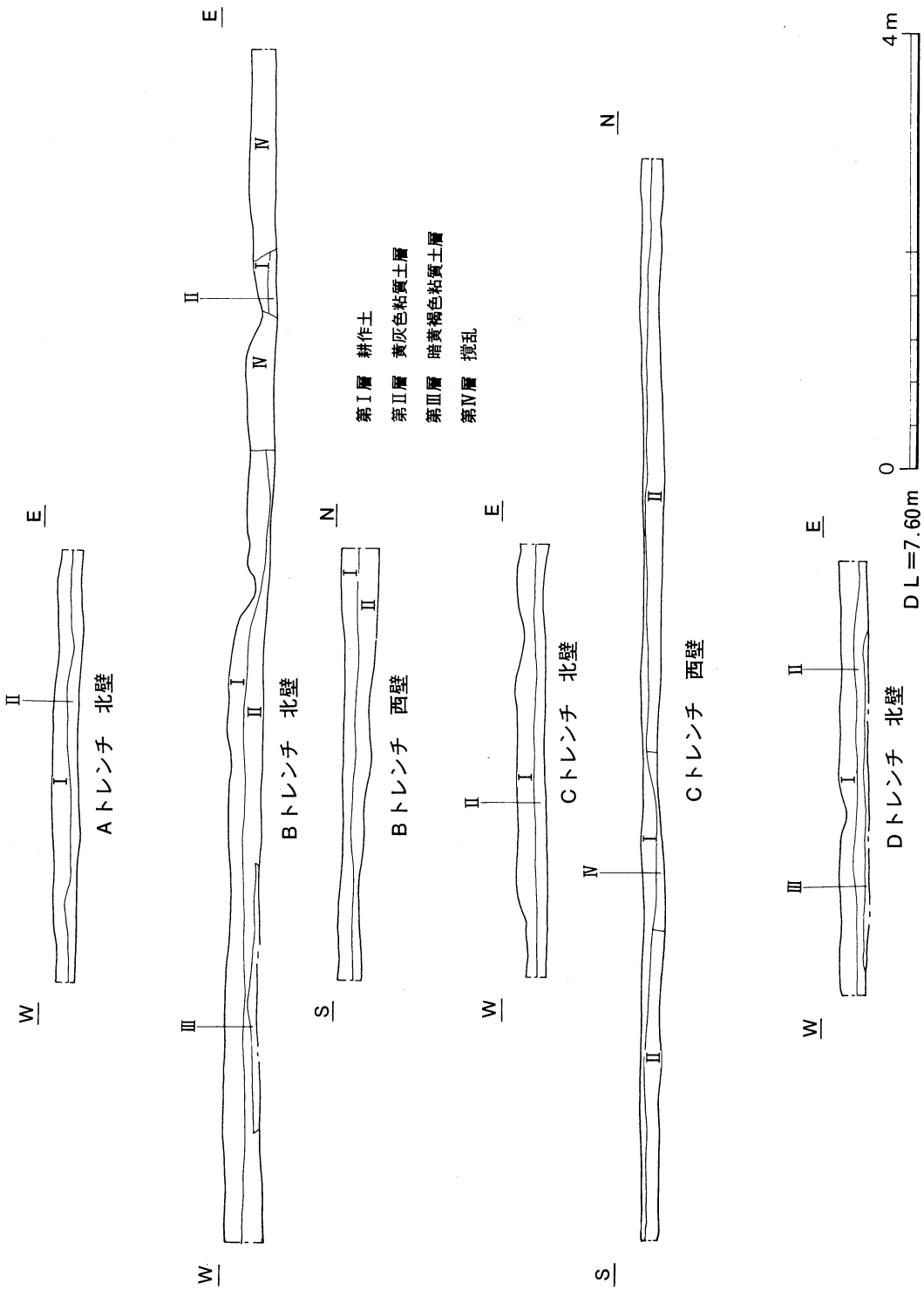
第Ⅱ層　黄灰色粘質土層

第Ⅲ層　暗黄褐色粘質土層

第Ⅱ層は、遺物包含層であり、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、備前焼擂鉢（１、２）、白磁碗（３）及び唐津系鉢（４）等が出土している。第Ⅲ層は、弥生時代～中・近世の遺構検出面である。但し、調査区東部ではＳＲ２の埋土上層（灰褐色砂質土あるいは淡灰黒褐色粘質土）が中・近世遺構の検出面となっていた。以後、同層を便宜上第Ⅳ層として記述することにする。



第58図　調査区設定図



第59図　調査区セクション

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の北西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。２×２間のほぼ正方形を呈する建物であるが、東西3.00ｍ、南北3.20ｍを測り、南北に若干長くなっている。棟方向はＮ－27°－Ｅを指す。但し、南辺の中間柱穴を欠いている。

各柱穴の平面形は直径20㎝内外の円形を呈し、深さも20㎝前後を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＢ２

ＳＢ２は、ＳＢ１の南西に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。２×２間の建物であるが、東西6.00ｍ、南北3.60ｍを測る東西棟であり、棟方向はＮ－70°－Ｗを指す。桁行西半の柱間距離が４ｍと非常に長くなっている。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは８～36㎝を測る。確認できた柱痕の直径は16㎝である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ２はＳＫ13・14・16と重複している。ＳＢ２がＳＫ14によって切られているのが確認できた他は、新旧関係は不明である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区の中央部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。２×３間の東西棟であり、梁間4.60ｍ、桁行5.60ｍを測り、棟方向はＮ－71°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径35㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは16～43㎝を測る。確認できた柱痕の直径は16㎝である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より須恵器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ３はＳＢ４と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、ＳＢ３とほぼ同位置で、第Ⅲ層上面において検出された。２×３間の東西棟であり、梁間3.70ｍ、桁行5.60ｍを測り、棟方向はＮ－72°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径35㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは５～40㎝を測る。確認できた柱痕の直径は14㎝である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ３・４は、形状、規模ともに類似しており、ほぼ同位置での建て

替えが行われたものと考えられるが、両者の新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、ＳＢ４の南西に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。１×２間の南北棟と考えられるが、南東端の柱穴を欠いている。梁間2.40ｍ、桁行3.60ｍを測り、棟方向はＮ－20°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径38㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは22～42㎝を測る。確認できた柱痕の直径は18㎝である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×４間の南北棟であり、梁間2.20ｍ、桁行7.00ｍを測り、棟方向はＮ－10°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径20～36㎝の円形あるいは不整円形を呈し、深さは10～25㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中位より若干の土師質土器が出土している。また、埋土上位より唐津系碗（５）も出土しているが、これは後世の混入によるものと考えられる。なお、ＳＢ６はＳＫ34・35によって切られている。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区の南西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。４×４間の一辺９ｍの正方形を呈する建物であるが、西北端部の柱穴を欠いている。棟方向はＮ－21°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは20～45㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器杯（６）・椀（７、８）が出土している。なお、ＳＢ７はＳＢ８・９及びＳＤ２と重複している。ＳＢ７がＳＤ２を切っているのが確認できた他は、新旧関係は不明である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、ＳＢ７の内部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。１×３間の東西棟であり、梁間1.50ｍ、桁行5.10ｍを測る。東端部の北側に2.10ｍ×1.50ｍの張り出し部が付いている。東西棟の棟方向はＮ－69°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径25㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは12～40㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器が出土している。

ＳＢ９

ＳＢ９は、ＳＢ７の東南に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。３×４間の総柱の建物であり、梁間6.40ｍ、桁行7.80ｍを測る。桁行の柱間距離はほぼ均一に２ｍ弱となっているが、梁間の柱間は、中央部と東部が広く、西部が狭くなっている。棟方向はＮ－14°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは15～45㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝内外である。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の土師質土器が出土している。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区の南部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×２間の南北棟であり、梁間2.20ｍ、桁行2.70ｍを測り、棟方向はＮ－23°－Ｅを指す。

各柱穴の平面形は直径30㎝内外の円形あるいは不整円形を呈し、深さは20～48㎝を測る。確認できた柱痕の直径は15㎝である。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＢ11

ＳＢ11は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。１×３間の東西棟であり、梁間4.00ｍ、桁行5.60ｍを測り、棟方向はＮ－85°－Ｗを指す。

各柱穴の平面形は直径35㎝内外の円形あるいは長円形を呈し、深さは20～50㎝を測る。確認できた柱痕の直径は10㎝である。埋土は黄灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＢ11はＳＤ９を切っている。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の北端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径2.02ｍ、短径1.68ｍを測り、長軸方向はＮ－36°－Ｗを指す。深さは0.40ｍであり、断面形は逆台形状を呈す。但し、東壁部には段を有している。埋土は灰色粘質土であり、埋土中より近世陶磁器が出土している。なお、ＳＫ１はＳＤ４を切って掘り込まれている。

ＳＫ２

ＳＫ２は、ＳＫ１の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.30ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.20ｍを測る。断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区の北東端部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径1.20ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.20ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが、周縁部に深さ３㎝の環状の細溝が検出された。壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁には２段の小段を有している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器、備前焼及び青磁の細片が出土している。形状からみて、座棺を埋置した近世墓と考えられる。

ＳＫ４

ＳＫ４は、ＳＫ３の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径0.78ｍの円形を呈し、深さは0.12ｍを測る。断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の弥生土器が出土している。

ＳＫ５

ＳＫ５は、調査区の北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は直径0.80ｍの円形を呈し、深さは0.10ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、須恵器高杯（９）及び砥石（35）が出土している。

ＳＫ６

ＳＫ６は、ＳＫ５の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈し、長径1.80ｍ、短径1.32ｍを測り、長軸方向はＮ－15°－Ｅを指す。深さは0.13ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が出土している。

ＳＫ７

ＳＫ７は、調査区の北部中央に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長方形を呈し、長径3.35ｍ、短径1.52ｍを測り、長軸方向はＮ－25°－Ｅを指す。深さ0.22ｍまで掘り下げた時点で、南半部は底面に達したが、北半部においては直径1.35ｍの円形土坑が検出された。円形土坑内では長径20㎝内外の自然礫よりなる集石が検出され、検出面から底面までの深さは0.40ｍに及んだ。底面周縁には、幅８㎝、深さ３㎝の小溝が巡っていた。埋土は灰褐色粘質土であり、集石の間を中心にして弥生土器及び伊万里系碗（10）が出土している。

ＳＫ７は、形状から座棺を埋置したところの近世墓と考えられるが、木片類の出土はみられなかった。なお、ＳＫ７は、２つの土坑が重複したような形状を呈しているが、全面が同一の埋土であり、切り合い関係は確認できなかった。

ＳＫ８～10

ＳＫ８～10は、ＳＫ７の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ３の西側に位置しており、埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

ＳＫ８は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.23ｍ、短径0.98ｍを測り、長軸方向はＮ－20°－Ｅを指す。深さは0.14ｍであり、底面はほぼ平坦であるが、中央部に深さ６㎝のピット状の窪みを有している。埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ９は、平面形が長円形を呈し、長径1.40ｍ、短径1.20ｍを測り、長軸方向はＮ－73°－Ｗを指す。深さは0.38ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。但し、西壁部には段を有している。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ９はＳＤ３の西肩を切って掘り込まれている。

ＳＫ10は、平面形が直径0.76ｍの円形を呈し、深さは0.58ｍに及ぶ。断面形は逆台形をなしている。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び瓦質土器の細片が出土している。

ＳＫ11・12

ＳＫ11・12は、調査区の北東部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ２の東側に位置し、埋土はいずれも黄灰褐色砂質土であった。

ＳＫ11は、幅0.18ｍ、長さ1.35ｍの帯状の小土坑であり、深さは８㎝を測る。埋土中より若干の弥生土器片が出土している。

ＳＫ12は、平面形が不整長円形を呈し、長径3.21ｍ、短径1.12ｍを測る。深さは0.29ｍであり、底面には起伏がみられる。埋土中より弥生土器が出土している。

ＳＫ13～17

ＳＫ13～17は、調査区の北西部で、第Ⅲ層上面において検出された。ＳＫ13・14・16はＳＢ２と重複する位置にある。埋土はいずれも灰褐色粘質土であった。

ＳＫ13は、平面形が隅丸長方形を呈し、長径1.30ｍ、短径0.72ｍを測り、長軸方向はＮ－80°－Ｗを指す。深さは0.20ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。底面直上において長径20㎝内外の自然礫よりなる集石が検出された。集石付近より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ13とＳＢ２との新旧関係は不明である。

ＳＫ14は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.58ｍ、短径0.92ｍを測り、長軸方向はＮ－65°－Ｗを指す。深さは0.22ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土中より、須恵器、土師質土器及び瓦質土器が出土している。なお、ＳＫ14の北壁はＳＢ２の柱穴を切っている。

ＳＫ15は、平面形が不整長円形を呈し、長径0.72ｍ、短径0.60ｍを測り、長軸方向はＮ－41°－Ｗを指す。深さは0.30ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。埋土中より若干の弥生土器が出土している。

ＳＫ16は、平面形が長円形を呈し、長径0.82ｍ、短径0.65ｍを測り、長軸方向はＮ－82°－Ｗを指す。深さは0.21ｍであり、断面形は逆台形をなす。埋土下位より弥生土器及び瓦質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ16とＳＢ２との新旧関係は不明である。

ＳＫ17は、平面形が不整長方形を呈し、長径1.00ｍ、短径0.60ｍを測り、長軸方向はＮ－80°－Ｗを指す。深さは0.12ｍであり、断面形は逆台形状をなす。埋土中からの出土遺物は皆無であった。

ＳＫ18

ＳＫ18は、調査区の東部北寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長方形を呈し、長径2.25ｍ、短径1.15ｍを測り、長軸方向はＮ－15°－Ｅを指す。深さは６㎝と浅く、中央部にピット状の窪みを有している。埋土は黄灰色粘質土であり、埋土中より、土師質土器、備前焼及び近世陶磁器が出土している。

ＳＫ19～21

ＳＫ19～21は、調査区の中央部で、第Ⅲ層上面において検出された。ＳＢ４の南部に位置し、埋土はいずれも黄灰褐色粘質土であった。

ＳＫ19は、平面形が直径0.80ｍ内外の不整円形を呈し、深さは５㎝と浅い。底面は平坦で、北西部に深さ３㎝の小さなピット状の窪みを有している。出土遺物は皆無であった。

ＳＫ20は、平面形が直径0.68ｍの不整円形を呈し、深さは0.48ｍに及ぶ。断面形はＵ字形をなしているが、西壁は袋状に抉り込まれている。埋土中位より、弥生土器、土師質土器及び近世陶器碗（11）が出土している。

ＳＫ21は、平面形が不定形であり、深さも６㎝と浅い。出土遺物も皆無であった。

ＳＫ22・23

ＳＫ22・23は、調査区の東部中央に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ６を挟んで東西に並んでおり、両土坑とも埋土は灰褐色粘質土であった。

ＳＫ22は、平面形が直径1.30ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.15ｍを測る。底面外縁には深さ４㎝の周溝を有し、底面中央には深さ15㎝のピット状の窪みを有している。埋土中より土師質土器及び近世陶磁器の細片が出土している。形状から、座棺埋置の近世墓である可能性が強いが、木片等は検出されなかった。

ＳＫ23は、平面形が長円形を呈し、長径1.50ｍ、短径0.81ｍを測り、長軸方向はＮ－40°－Ｗを指す。深さは0.30ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。底面中央に深さ５㎝の不定形の落ち込みを有している。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ24・25

ＳＫ24・25は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅲ層上面において検出された。ＳＢ５の南に南北に並ぶ近世墓である。

ＳＫ24は、平面形が直径1.75ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.60ｍに及ぶ。埋土は、３層に分層され、第Ⅰ層が灰色粘質土、第Ⅱ層が灰黄色粘質土、第Ⅲ層が灰褐色粘質土であり、第Ⅱ・Ⅲ層には黒色土がブロック状に混入していた。第Ⅰ層除去の段階で、座棺埋置部と考えられる第Ⅱ層が直径1.20ｍの円形プランをもって検出され、その周縁を掘り方部の埋土と目される第Ⅲ層が環状に巡っていた。第Ⅱ層下位において、長径20㎝内外の自然石が20個程検出され、その中に石臼も１点（36）混入していた。底面直上においては骨片と木片が若干出土している。元来、座棺の直上に配されていた自然石が座棺の腐朽に伴って陥落したものと考えられる。出土遺物は弥生土器及び備前焼等であった。

ＳＫ25は、平面形が不整長円形を呈し、長径1.86ｍ、短径1.60ｍを測り、長軸方向はＮ－60°－Ｗを指す。深さは0.61ｍに及び、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が灰黄色粘質土、第Ⅱ層が灰褐色粘質土であり、両層とも黒色土の混入が認められた。第Ⅰ層が座棺埋置部と考えられ、直径1.20ｍの円形プランを有しており、その周縁部の第Ⅱ層は掘り方部と判断される。第Ⅰ層と第Ⅱ層の境目には木目痕が残っている部分もあった。第Ⅰ層の上層部には大小の自然礫がぎっしり詰められており、その下位からは、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が若干出土しており、また、木片の出土もみた。

ＳＫ26

ＳＫ26は、ＳＫ24の東に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径3.55ｍ、短径2.16ｍを測り、長軸方向はＮ－68°－Ｗを指す。深さは0.34ｍであり、底面には若干の起伏がみられ、北壁と西壁には段を有している。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。底面直上から埋土上層に至るまで大小の自然礫よりなる集石が配せられており、集石の間より若干の弥生土器片が出土している。

ＳＫ26も、ＳＫ24・25と同じく近世墓である可能性が強いが、桶状の座棺が埋置されていた痕跡はなかった。

ＳＫ27～29

ＳＫ27～29は、ＳＫ26の東南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも、座棺を埋置したところの近世墓と考えられるが、ＳＫ28・29は上層部が撹乱を受けており、断定はできない。

ＳＫ27は、平面形が直径1.58ｍの円形を呈し、深さは0.42ｍを測る。断面形は逆台形状をなし、底面はほぼ平坦である。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロ

ック状に混入していた。埋土下層において約20個の自然礫も検出されており、底面直上からは骨片及び木片も出土している。出土遺物は、土師質土器、土錘（12）及び近世陶磁器の細片であった。

ＳＫ28は、平面形が直径1.40ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.48ｍを測る。底面には起伏があり、南半部が若干深くなっており、ピット状の浅い窪みを有している。壁は垂直に近く立ち上がるが、北壁際において深さ３㎝程の周溝が確認された。周溝は、おそらく座棺埋置に伴うものであろう。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ29は、平面形が直径1.18ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.46ｍを測る。底面はほぼ平坦であり、南部に周溝の一部と目される小溝を有している。埋土はＳＫ28と同様であり、埋土中より近世陶磁器の細片が出土している。

ＳＫ30・31

ＳＫ30・31は、調査区の東部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。両土坑は東西に隣接しており、ＳＫ31の西壁がＳＫ30の東壁を切っている。

ＳＫ30は、平面形が直径1.80ｍの円形を呈し、深さは0.65ｍを測る。断面形はＵ字形をなし、底面には若干の起伏がみられる。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び近世陶磁器が出土している。

ＳＫ31は、平面形が直径1.82ｍ内外の不整円形を呈し、深さは0.78ｍに及ぶ。断面形はＵ字形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は、ＳＫ30とほぼ同様であるが、若干灰色が強い。埋土中より、弥生土器、近世陶磁器及び木片が出土している。

ＳＫ30・31も、形状から、座棺埋置の近世墓である可能性が強い。

ＳＫ32

ＳＫ32は、ＳＫ31の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は不整長円形を呈し、長径3.76ｍ、短径1.10ｍを測り、長軸方向はＮ－70°－Ｗを指す。深さは0.24ｍであり、断面形は逆台形状をなしている。底面はほぼ平坦であるが、西部に深さ３㎝程のピット状の窪みを有している。埋土は、灰黒褐色粘質土であり、それに灰色土がブロック状に混入していた。埋土中より弥生土器の細片が出土しているが、ＳＫ32は検出状況等からして、近世の寝棺墓である可能性が強い。なお、ＳＫ32はＳＤ１の西肩を切って掘り込まれている。

ＳＫ33

ＳＫ33は、ＳＫ30の南に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。西端部が調査区外となっ

ており、全容は明らかでないが、平面形は長大な長方形を呈しており、長径5.00m以上、短径2.80mを測る。深さは0.15mと浅い。埋土は灰色シルトであり、埋土中より、土師質土器、備前焼及び伊万里系碗（13）が出土している。

ＳＫ34・35

ＳＫ34・35は、調査区の中央部南寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。いずれも近世墓と考えられる土坑である。

ＳＫ34は、平面形が不整長方形を呈し、長径2.22m、短径1.60mを測り、長軸方向はＮ－30°－Ｅを指す。深さは0.55mであり、断面形はＵ字形をなしている。埋土は、３層に分層され、第Ⅰ層が灰色粘質土、第Ⅱ層が暗灰色粘質土、第Ⅲ層が灰褐色粘質土であり、第Ⅱ層には黒色土がブロック状に混入していた。第Ⅰ層除去後に、ＳＫ34の南部において、第Ⅱ層が直径1.35mの円形のプランをもって検出され、外縁部に第Ⅲ層が環状に確認された。第Ⅱ層が座棺埋置部と考えられ、同層より近世陶磁器及び木片が出土している。また、西壁際より若干の自然礫も出土している。なお、ＳＫ34はＳＫ35の北壁を切って掘り込まれている。

ＳＫ35は、平面形が直径1.40mの円形を呈し、深さは0.39mを測る。断面形は箱形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、南半部に深さ３cm程の周溝を有している。埋土は、灰褐色粘質土をベースとしており、それに黒色土がブロック状に混入していた。埋土中より土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＫ34・35はＳＢ６の柱穴の一部を切っている。

ＳＫ36～39

ＳＫ36～39は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。埋土はいずれも灰褐色粘質土である。

ＳＫ36は、平面形が一辺1.38mの方形を呈し、深さは0.11mを測る。埋土中より若干の須恵器及び土師質土器片が出土している。

ＳＫ37は、平面形が不整長方形を呈し、長径2.70m、短径2.56mを測り、長軸方向はＮ－25°－Ｗを指す。深さは0.22mであり、底面には若干の起伏がみられ、壁は緩やかに立ち上がる。埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＫ38は、平面形が一辺1.10m内外の不整方形を呈し、深さは0.12mを測る。底面には起伏がみられ、北壁際が若干深くなっている。埋土中からの出土遺物は皆無であった。なお、ＳＫ38はＳＤ10の西肩を切っている。

ＳＫ39は、平面形が不整長円形を呈し、長径1.05m、短径0.40mを測り、長軸方向はＮ－28°－Ｅを指す。深さは８cmと浅く、埋土中より若干の土師質土器片が出土している。

ＳＫ40～43

ＳＫ40～43は、調査区の南端部東寄りに位置し、第Ⅳ層上面において検出された。うち、ＳＫ40・42・43は近世墓と考えられる土坑である。

ＳＫ40は、平面形が直径1.78ｍの円形を呈し、深さは0.47ｍを測る。埋土は、座棺埋置部と考えられる第Ⅰ層と掘り方部と考えられる第Ⅱ層とに分層され、第Ⅰ層が灰黄色粘質土、第Ⅱ層が灰褐色粘質土であり、いずれも黒色土がブロック状に混入していた。前者の上面は直径1.20ｍの円形を呈しており、埋土中より近世陶磁器及び木片が出土している。

ＳＫ41は、平面形が不定形であり、深さも９㎝と浅い。埋土は灰褐色粘質土であるが、埋土中からの出土遺物も皆無であった。

ＳＫ42は、平面形が直径1.70ｍの円形を呈し、深さは0.48ｍを測る。本土坑も座棺埋置の近世墓と考えられ、埋土の状況はＳＫ40の場合と同様であった。底面直上より近世陶磁器及び木片が出土している。

ＳＫ43は、平面形が不定形を呈しているが、その内側において遺構検出の時点より、座棺埋置部が直径1.20ｍの円形のプランをもって確認できた。同部及び掘り方部とも、埋土はＳＫ40の場合と同様であった。底面よりやや浮いた状態で近世陶磁器及び木片が出土している。

ＳＫ44

ＳＫ44は、ＳＫ43の東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は長方形を呈するものと考えられるが、南半部は調査区外となっており、全容は不明である。深さは0.15ｍであり、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黄灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、須恵器、土師質土器及び備前焼が出土している。

溝

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区の北東部から幾分屈曲しながら南西端部に至る長大な溝である。東半部は第Ⅳ層上面において検出され、西半部は第Ⅲ層上面において検出された。幅1.50～2.00ｍを測り、深さは0.40ｍを標準とする。断面形は舟底形を呈するが、概して最深部は西に偏している。確認長は115ｍに及び、北部中央では長さ10ｍの浅い支流も検出されている。また、南端部はLoc.31のＳＤ３に続くものと考えられる。埋土は、５層に分層され、第Ⅰ層灰褐色砂質土、第Ⅱ層灰黒褐色粘質土、第Ⅲ層青灰色砂質土、第Ⅳ層暗灰色細砂、第Ⅴ層暗灰褐色荒砂となっている。埋土中より、弥生土器壺（14～23）・甕（24）・小形土器（25）、土師器及び須恵器鉄鉢（26）が出土している。また、叩石（32、33）や砥石（34）の出土もみられた。

ＳＤ２は、出土遺物からみて弥生後期から古墳時代にかけて機能した溝と考えられる。なお、

同溝はＳＢ７及びＳＤ３によって切られている。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区の北端部から直線的に南へ延びる溝であり、第Ⅳ層上面において検出された。幅0.76ｍ、深さ0.25ｍを標準とし、断面形はＵ字形を呈している。長さは25ｍに及び、方向からみて南のＳＤ５に連続する可能性が強い。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＤ３は、ＳＤ２・４を切っており、ＳＫ９によって切られている。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の北部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ３と交錯して東西に延びる溝であり、確認長は11ｍである。幅1.00ｍ、深さ0.12ｍを標準とするが、西部では規模が半減している。断面形は逆台形状を呈す。埋土は灰褐色砂質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。なお、ＳＤ４はＳＤ３の他、ＳＫ１によっても切られている。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１の西側を南北に縦走する溝であり、全長31ｍに及ぶ。幅1.10ｍ、深さ0.36ｍを標準とし、断面形は舟底形を呈している。埋土は、３層に分層され、第Ⅰ層灰褐色シルト、第Ⅱ層暗灰褐色砂質土、第Ⅲ層茶褐色砂質土となっている。埋土中より、弥生土器、土師質土器及び備前焼の細片が出土している。なお、ＳＤ５は、ＳＤ１・６を切っており、ＳＤ７によって切られている。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区の東部で、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１の西側に位置し、ＳＤ５と交錯しながら北西から南東へ延びている。幅0.80ｍ、深さ0.24ｍを標準とし、断面形は舟底形を呈している。長さは49ｍに及び、方向はＮ－27°－Ｅを指す。埋土は、２層に分層され、第Ⅰ層が灰褐色シルト、第Ⅱ層が暗灰褐色砂質土であり、ＳＤ５とほぼ同様であるが、ＳＤ６の方が若干砂質に富んでいた。第Ⅱ層を中心にして、弥生土器及び土師質土器の細片が出土している。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区の東部中央に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。調査区の東端部より西北西へ向かって延びる溝であり、確認長は32ｍに及ぶ。幅0.75ｍ、深さ0.25ｍを標準とし、

断面形はU字形を呈している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器壺（27）、土師質土器、備前焼擂鉢（28）及び近世陶磁器碗（29）が出土している。なお、ＳＤ７はＳＤ１・５・６を切っている。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区の中央部で、第Ⅲ層上面において検出された。ＳＢ３・４の東側に位置する南北溝であり、全長7.50ｍを測る。幅0.50ｍ、深さ0.18ｍを標準とし、断面形は逆台形状を呈している。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より若干の弥生土器及び土師質土器が出土している。位置からみてＳＢ３・４に付随した溝である可能性が強い。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ１の東側を南北に並走する溝であり、北部は２条に分かれている。幅1.00ｍ、深さ0.20ｍを標準とし、断面形は逆台形状を呈している。確認長は19ｍである。埋土は灰褐色シルトであり、埋土中より、弥生土器、須恵器及び土師質土器が出土している。なお、ＳＤ９はＳＢ11を形成する柱穴によって切られている。

ＳＤ10

ＳＤ10は、ＳＤ９の東側に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。ＳＤ９と方向をほぼ同じくする南北溝であり、全長20ｍを測る。幅1.20ｍ、深さ0.14ｍを標準とするが、北部では徐々に規模を縮小している。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中より、弥生土器、須恵器及び近世陶磁器の細片が出土している。

ピット

Ｐ１

Ｐ１は、調査区の南西部に位置し、第Ⅲ層上面において検出された。平面形は直径30㎝の円形を呈し、深さは28㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より弥生土器及び土師質土器杯（30）が出土している。

Ｐ２

Ｐ２は、調査区の南東部に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。平面形は一辺20㎝内外の不整方形を呈し、深さは24㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、埋土中より、弥生土器、土師質土器及び土錘（31）が出土している。

5．まとめ

Loc.41における主な検出遺構としては、弥生時代のＳＤ１とＳＲ２を除けば、古墳時代のＳＤ２と中世の堀立柱建物址群及び近世座棺墓があげられる。

ＳＤ２は、出土遺物からして、弥生後期から古墳時代にかけて機能した可能性が強い。また、屈曲部も多く、人為的に構築された溝とは考えられない。

ＳＢ１～11は、中世の堀立柱建物址と把握して誤りないと考えられるが、特にＳＢ７は、柱穴より出土した土師質土器の形態からして、14～15世紀のものと考えられる。また、建物の方角・建て方から、ＳＢ２・８・９もＳＢ７とそれほど時期差をもたないものと判断してよかろう。

ＳＤ３～９も、ＳＤ７を除けば中世の溝と考えられるが、堀立柱建物址群を囲むような形状を呈しているものは皆無であった。但し、ＳＤ８のみがＳＢ３・４に伴うものであった可能性がある。

当調査区では、座棺を埋置したところの近世墓群も、調査区の中央部及び南端部で確認されている。当調査区一帯が水田化されて後、その片隅が墓域として設定されたものと考えられる。

第6表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第 60 図	SB 1	2 × 2	3.20 × 3.00	1.42 ～ 2.94	N－27°－E	9.6	
〃	SB 2	2 × 2	3.60 × 6.00	1.00 ～ 4.60	N－70°－W	21.6	
第 61 図	SB 3	2 × 3	4.60 × 5.60	1.12 ～ 2.76	N－71°－W	25.8	
〃	SB 4	2 × 3	3.70 × 5.60	1.40 ～ 3.64	N－72°－W	20.7	
第 62 図	SB 5	1 × 2	2.40 × 3.60	1.75 ～ 2.50	N－20°－E	8.6	
〃	SB 6	1 × 4	2.20 × 7.00	1.42 ～ 2.22	N－10°－E	15.4	
第 63 図	SB 7	4 × 4	9.00 × 9.00	2.12 ～ 4.22	N－21°－E	75.6	
第 64 図	SB 8	1 × 3	1.50 × 5.10	1.42 ～ 2.18	N－69°－W	7.7	
〃	SB 9	3 × 4	6.40 × 7.80	1.26 ～ 2.92	N－14°－E	49.9	
第 65 図	SB 10	1 × 2	2.20 × 2.70	1.27 ～ 2.58	N－23°－E	5.9	
〃	SB 11	1 × 3	4.00 × 5.60	1.80 ～ 4.00	N－85°－W	22.4	

第7表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 66 図	SK 1	不整長円形	2.02	1.68	0.40	N－36°－W	逆台形	
〃	SK 2	不整円形	1.40	1.25	0.20	N－45°－W	〃	
〃	SK 3	〃	1.20	——	0.20	————	〃	
〃	SK 4	円形	0.78	——	0.12	————	〃	
〃	SK 5	〃	0.80	——	0.10	————	皿形	
〃	SK 6	長方形	1.80	1.32	0.13	N－15°－E	逆台形	
〃	SK 7	不整長方形	3.35	1.52	0.40	N－25°－E	〃	
第 67 図	SK 8	〃	1.23	0.98	0.14	N－20°－E	箱形	
〃	SK 9	長円形	1.40	1.20	0.38	N－73°－W	〃	
〃	SK 10	円形	0.76	——	0.58	————	逆台形	
〃	SK 11	帯状	1.35	0.18	0.08	N－20°－E	〃	
〃	SK 12	不整長円形	3.21	1.12	0.29	N－30°－E	皿形	
〃	SK 13	隅丸長方形	1.30	0.72	0.20	N－80°－W	逆台形	
第 68 図	SK 14	不整長方形	1.58	0.92	0.22	N－65°－W	〃	
〃	SK 15	不整長円形	0.72	0.60	0.30	N－41°－W	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 68 図	SK 16	長円形	0.82	0.65	0.21	N－82°－W	逆台形	
〃	SK 17	不整長方形	1.00	0.60	0.12	N－80°－W	〃	
〃	SK 18	〃	2.25	1.15	0.06	N－15°－E	皿形	
〃	SK 19	不整円形	0.80	——	0.05	————	〃	
第 69 図	SK 20	〃	0.68	——	0.48	————	U字形	
〃	SK 21	不定形	1.35	0.45	0.06	N－15°－E	皿形	
〃	SK 22	不整円形	1.30	——	0.30	————	逆台形	
〃	SK 23	長円形	1.50	0.81	0.35	N－40°－W	箱形	
〃	SK 24	不整円形	1.75	——	0.60	————	〃	
第 70 図	SK 25	不整長円形	1.86	1.60	0.61	N－60°－W	〃	
〃	SK 26	隅丸長方形	3.55	2.16	0.34	N－68°－W	逆台形	
〃	SK 27	円形	1.58	——	0.42	————	〃	
〃	SK 28	不整円形	1.40	——	0.48	————	箱形	
〃	SK 29	〃	1.18	——	0.46	————	〃	
第 71 図	SK 30	円形	1.80	——	0.65	————	U字形	
〃	SK 31	不整円形	1.82	——	0.78	————	〃	
〃	SK 32	不整長円形	3.76	1.10	0.24	N－70°－W	逆台形	
第 72 図	SK 33	長方形	5.00	2.80	0.15	N－68°－W	〃	
〃	SK 34	不整長方形	2.22	1.60	0.55	N－30°－E	U字形	
〃	SK 35	円形	1.40	——	0.39	————	箱形	
〃	SK 36	方形	1.38	——	0.11	————	逆台形	
第 73 図	SK 37	不整長方形	2.70	2.56	0.22	N－25°－W	〃	
〃	SK 38	不整方形	1.10	——	0.12	————	〃	
〃	SK 39	不整長円形	1.05	0.40	0.08	N－28°－E	〃	
〃	SK 40	円形	1.78	——	0.47	————	箱形	
〃	SK 41	不定形	1.80	1.00	0.09	N－60°－E	逆台形	
〃	SK 42	円形	1.70	——	0.48	————	箱形	
第 74 図	SK 43	不定形	2.00	1.80	0.30	N－40°－W	〃	
〃	SK 44	長方形	——	——	0.15	————	逆台形	

第8表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅱ層	擂鉢	38.0 (9.8) —— ——	口縁部に2条の凹線。	9条1単位の条線を有す。 回転ロクロナデ調整。	備前焼。
2	〃	〃	34.4 (7.0) —— ——	口縁端部を上方に拡張。口唇部は内傾する面をなす。	回転ロクロナデ調整。	〃
3	〃	白磁 碗	20.0 (2.5) —— ——	玉縁状口縁。		
4	〃	鉢	24.0 (7.2) —— ——	〃	内外面とも施釉。	唐津系。

第9表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
5	SB 6 P 1	碗	12.5 (5.2) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は短く外反する。	外面体部下位は露胎。	唐津系。
6	SB 7 P 1	土師質土器 杯	—— (1.9) —— 6.2		底部回転糸切り。	
7	〃	土師質土器 椀	12.7 (3.9) —— ——	内湾して立ち上がり、端部は短く外反し、丸くおさめる。		
8	SB 7 P 2	〃	11.5 (3.5) —— ——	直線的に立ち上がり、端部は短く外反し、丸くおさめる。		
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
9	SK 5	須恵器 高杯	—— (4.0) —— 6.5	高杯脚部の上端部。		
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
10	SK 7	碗	9.8 5.1 —— 3.9		内外面とも施釉。 外面に草花文。	伊万里系。
11	SK 20	〃	11.5 (6.5) —— ——		内外面貫入有り。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm)	形態	文様・手法	備考
12	SK 27	土錘	全長 4.2 直径 1.0 重量(g) 3.8	紡錘形を呈す。		土師質。
13	SK 33	碗	口径 —— 器高 (2.6) 胴径 —— 底径 6.4		高台脇に2条の界線。	伊万里系。

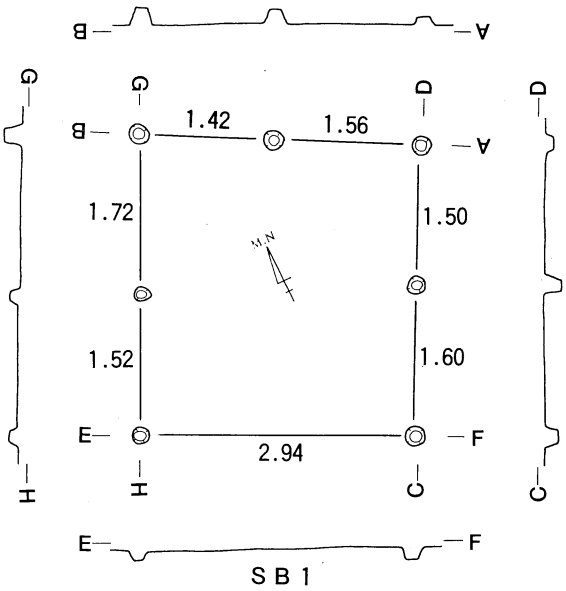
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm)	形態・文様	手法	備考
14	SD 2	弥生土器 壺	口径 19.2 器高 (9.2) 胴径 —— 底径 ——	短く直立気味に立ち上がり、頸部から口縁部は直線的に外反す。口縁部外面には幅2.1cmの粘土帯を貼付する。口唇部は幅広く凹状をなし、上下端に刻目を配す。	胴部上端に右上がりのハケ状原体による列点文を配す。 口唇部横方向のナデ調整。 頸部外面縦方向のハケ調整。	
15	〃	〃	口径 11.5 器高 (4.4) 胴径 —— 底径 ——	口縁部は丸く外反する。 口唇部は面をなす。		
16	〃	〃	口径 20.4 器高 (7.4) 胴径 —— 底径 ——	口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は丸くおさめる。	口頸部、胴部内面は右下がりのハケ調整。	
17	〃	〃	口径 12.5 器高 (6.2) 胴径 —— 底径 ——	わずかに肩のふくらんだ上胴部から口縁部は短く外反する。口唇部は面をなす。口縁部外面に外方から直径3㎜の円孔を穿つ(焼成前)。	口唇部及び口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部内面は右から左へのヘラ削り。外面ハケ調整。	
18	〃	〃	口径 —— 器高 (4.8) 胴径 —— 底径 10.4	非常に厚い底部。	調整不明。	
19	〃	〃	口径 —— 器高 (6.9) 胴径 —— 底径 7.8	下胴部は直線的に外上方に立ち上がる。		下胴部から外底にかけて黒斑有り。
20	〃	〃	口径 —— 器高 (5.2) 胴径 —— 底径 5.4	上げ底気味の厚い底部。		
21	〃	〃	口径 —— 器高 (3.9) 胴径 —— 底径 9.0		外面ヘラ磨き。	外底に黒斑有り。
22	〃	〃	口径 —— 器高 (5.3) 胴径 —— 底径 5.2	下胴部は直線的に外上方に立ち上がる。		
23	〃	〃	口径 —— 器高 (3.2) 胴径 —— 底径 5.2	若干小さい底部。		
24	〃	弥生土器 甕	口径 —— 器高 (7.0) 胴径 —— 底径 6.4		外面ハケ調整。	下胴部に黒斑有り。
25	〃	小形土器	口径 —— 器高 (2.9) 胴径 —— 底径 2.5		手捏ね。	外底に黒斑有り。

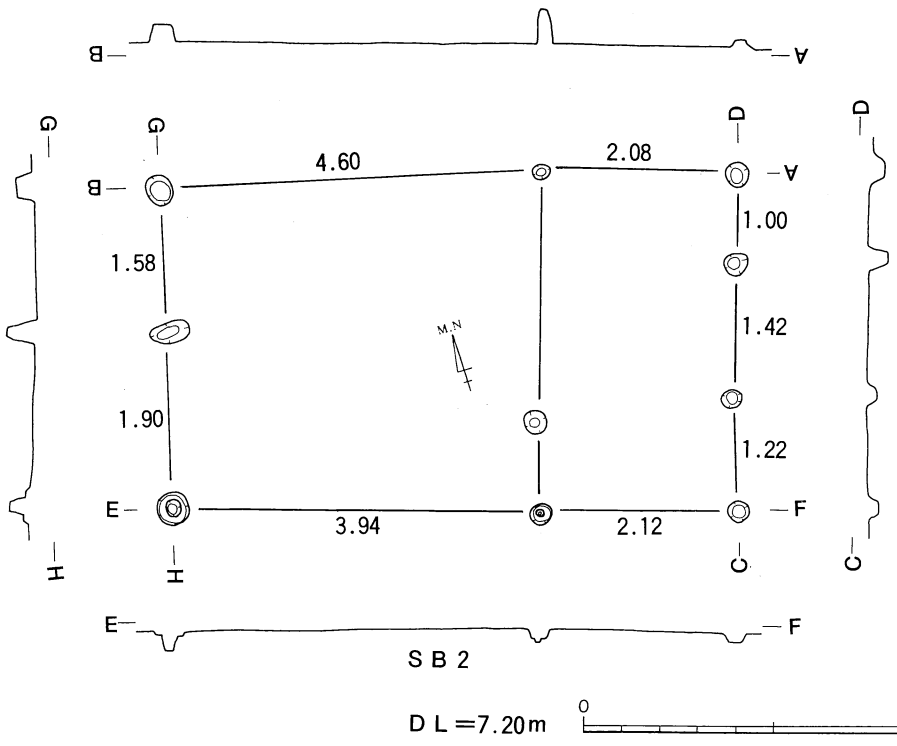
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態・文様	手法	備考
26	SD 2	須恵器 鉄鉢	23.4 (6.3) —— ——	上胴部から内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。		
27	SD 7	弥生土器 壺	18.8 (6.4) —— ——	口縁部は頸部から滑らかに外反する。口唇部はわずかに凹状をなし、下半に刻目を施す。	頸胴間にハケ原体押圧による段が生じている。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
28	SD 7	擂鉢	—— (6.7) —— 14.2		6条1単位の条線を施す。	備前焼。
29	〃	碗	—— (4.9) —— 4.7		畳付のみ露胎。 内外面とも貫入有り。	
30	P 1	土師質土器 杯	16.0 (4.4) —— ——	内湾しながら立ち上がり、端部は短く外反。	口縁部内面に弱い沈線有り。	
31	P 2	土錘	全長 4.0 直径 1.5 重量(g) 7.7	円筒形を呈す。		土師質。

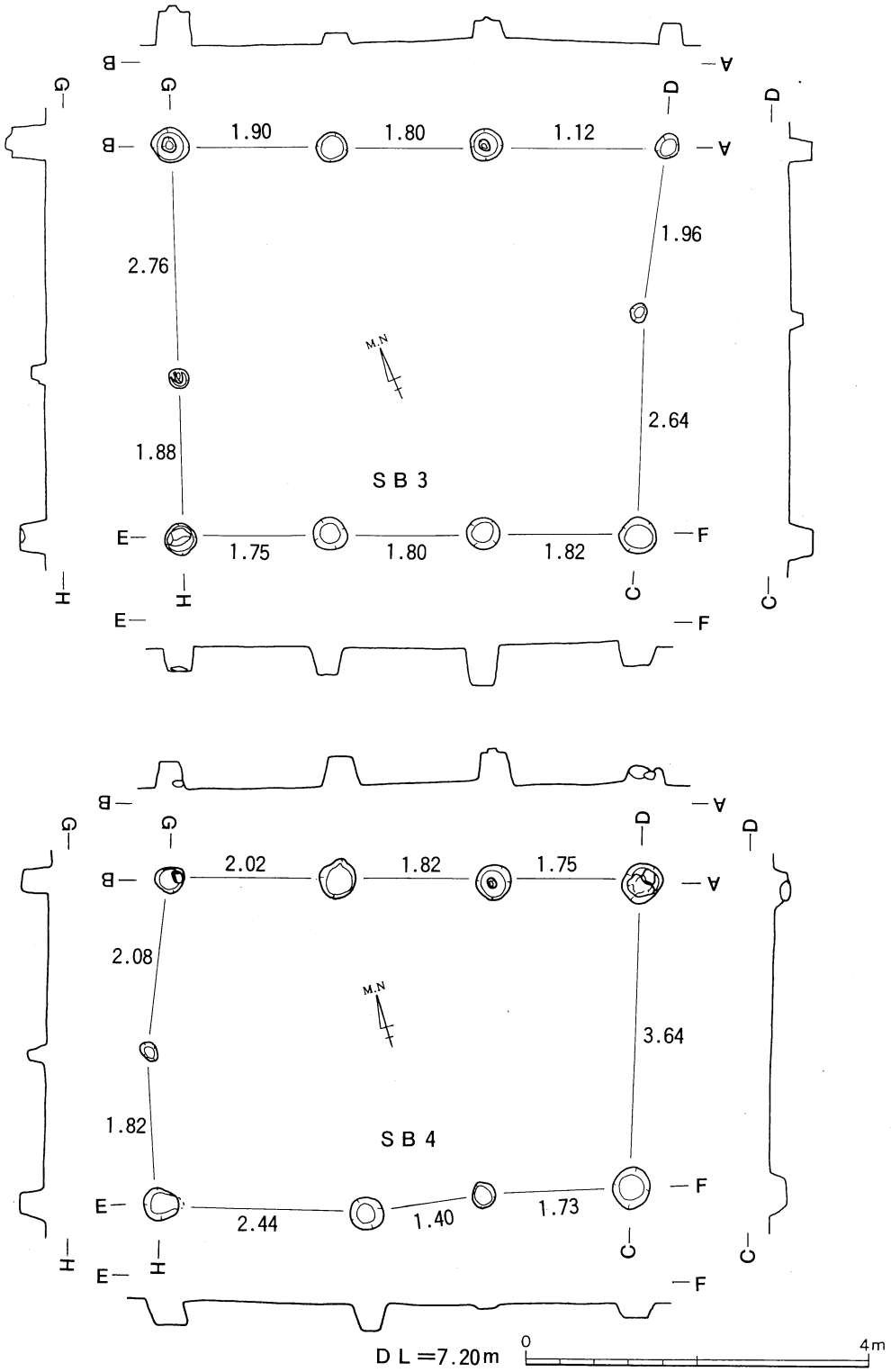
第10表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
32	SD 2	叩石	10.4 8.0 2.4 325.0	砂岩	主面中央部および長側縁部に潰痕有り。	
33	〃	〃	8.8 5.3 1.0 56.0	〃	自然面と剝離面とからなる。 周縁部に浅い潰痕を残す。	
34	〃	砥石	8.4 4.4 3.9 295.0	砂岩	3面を使用している。	
35	SK 5	〃	7.9 6.2 4.4 184.0	〃	4面とも使用している。	
36	SK 24	石臼	直径 30.6 全厚 5.7 重量(g)8900.0	〃	周縁部に柄装着のための穿孔有り。	

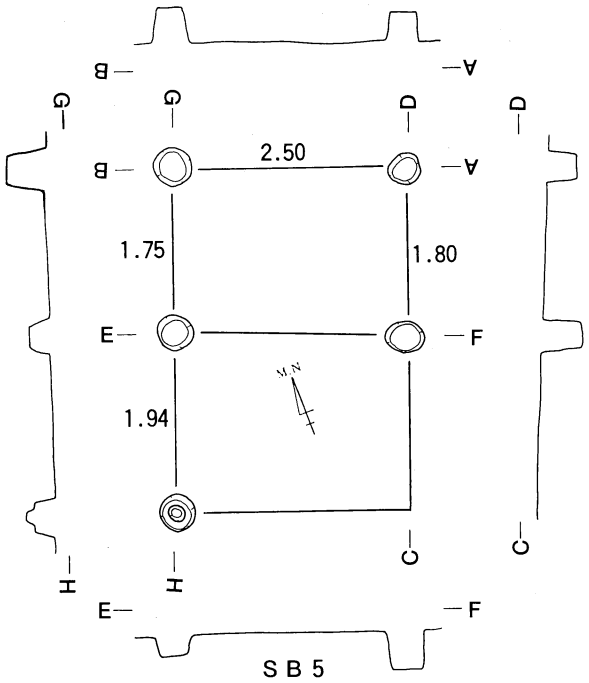

A
B
C
D
E
F
G
H
1.42
1.56
1.72
1.50
1.52
1.60
2.94
M.N
SB 1

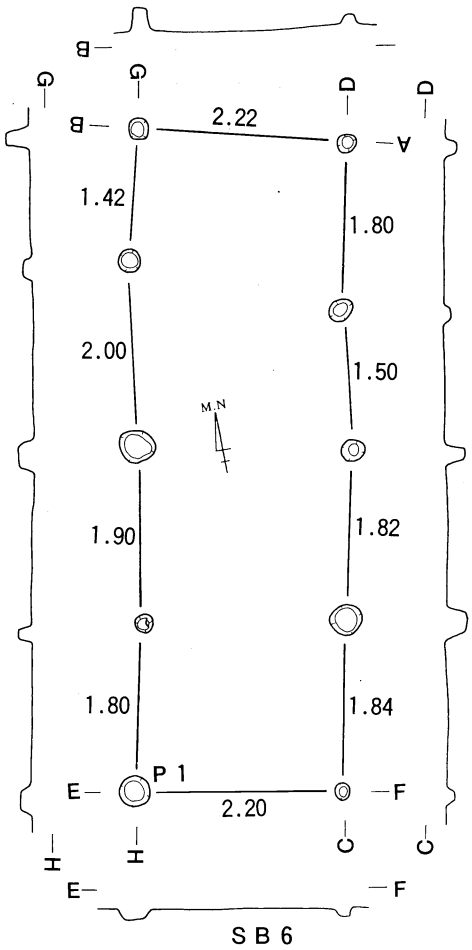

A
B
C
D
E
F
G
H
4.60
2.08
1.00
1.58
1.42
1.90
1.22
3.94
2.12
M.N
SB 2
DL=7.20m
0
4m

第60図　ＳＢ１・２


SB 3
1.90
1.80
1.12
1.96
2.76
2.64
1.88
1.75
1.80
1.82
SB 4
2.02
1.82
1.75
2.08
3.64
1.82
2.44
1.40
1.73
DL=7.20m
0
4m

第61図　ＳＢ３・４

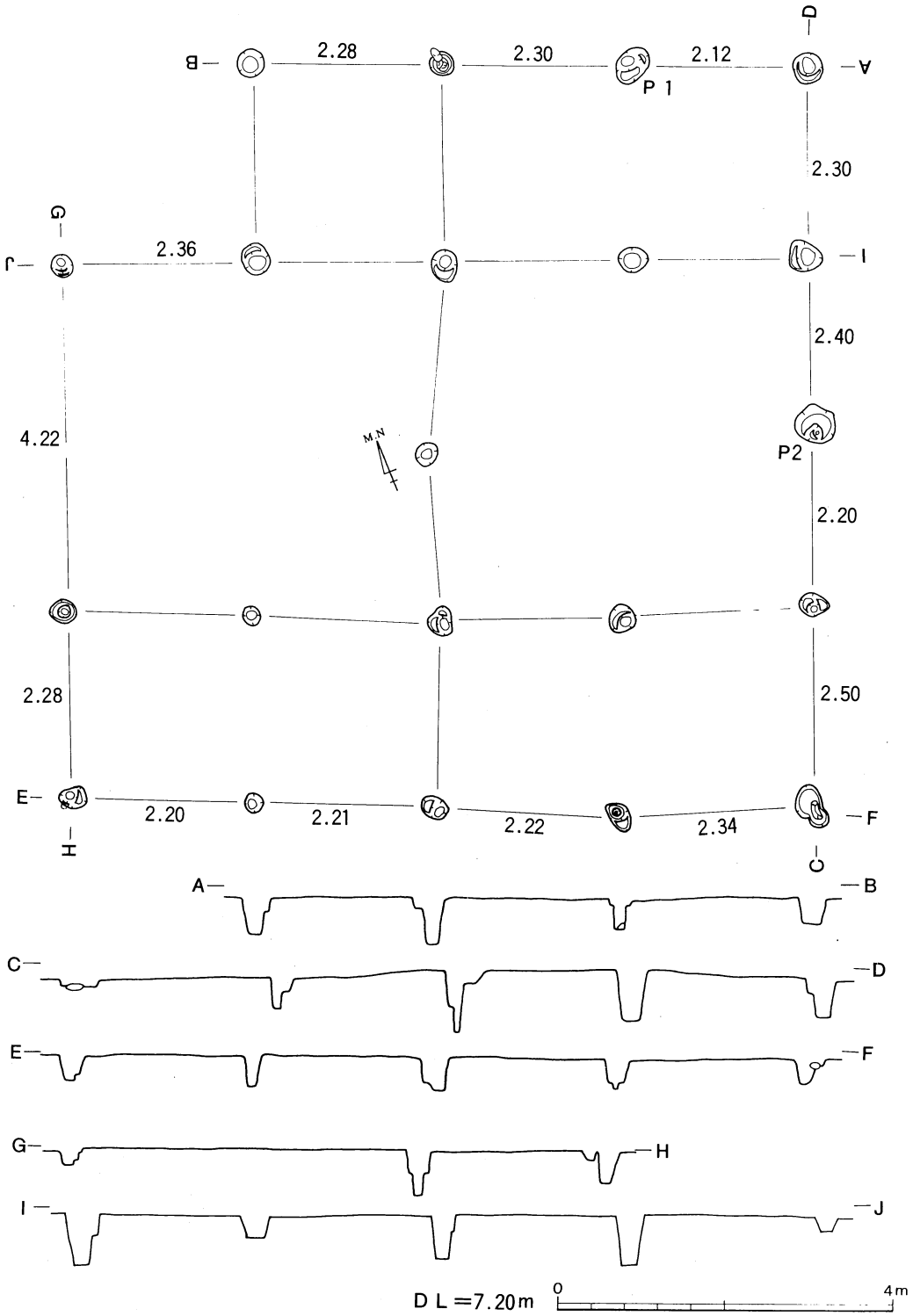




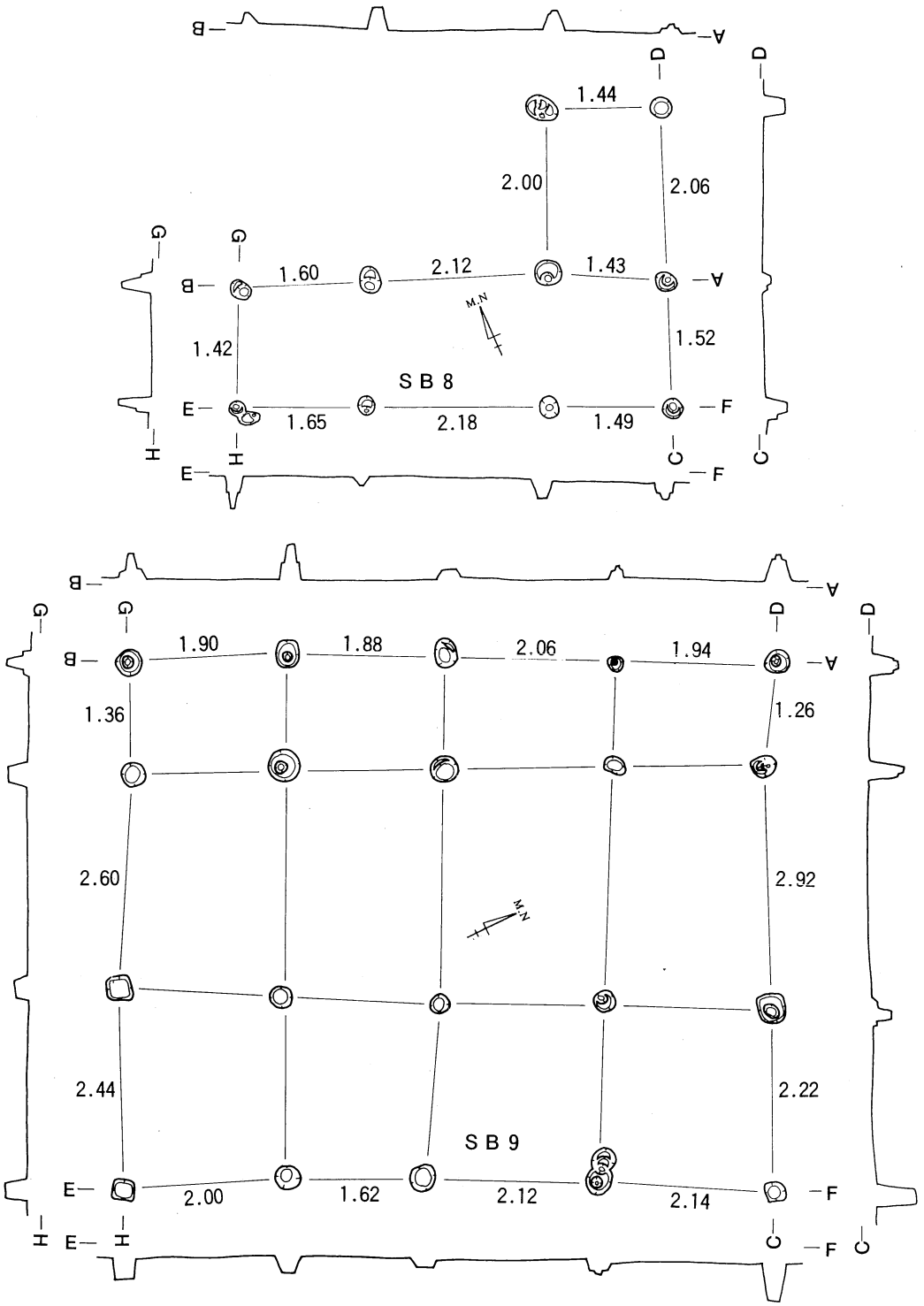
DL=7.20m

0 4m

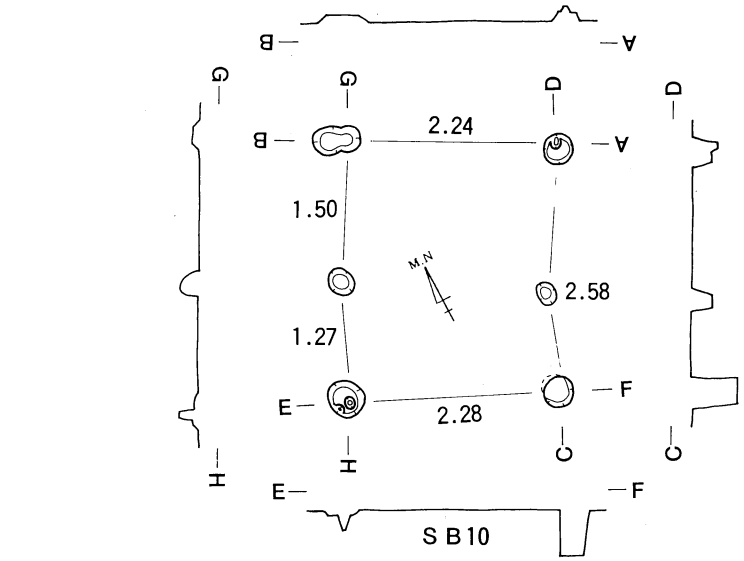
第62図　SB 5・6

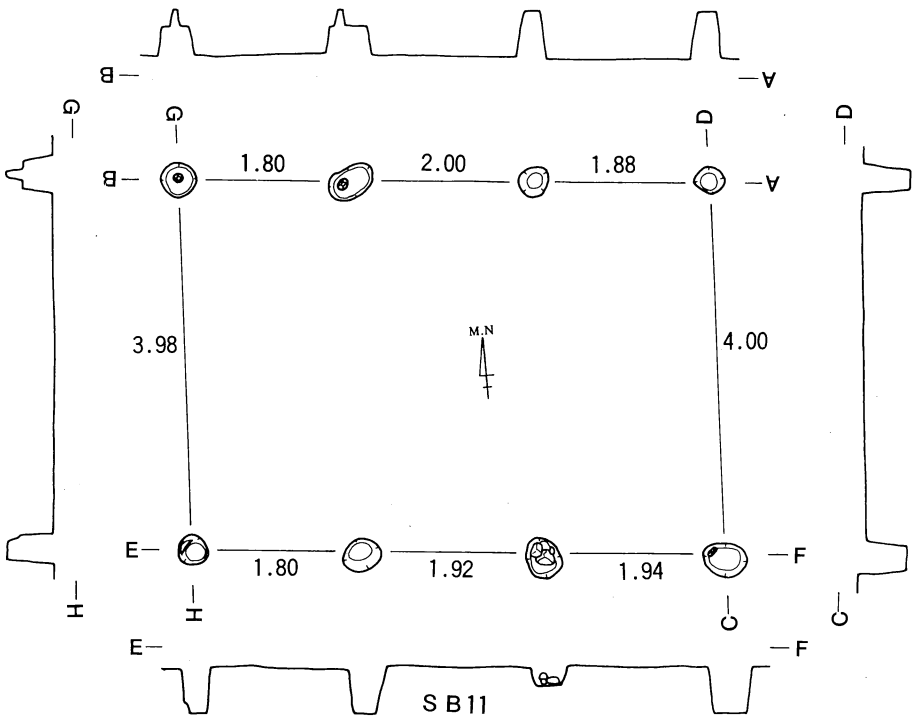

B
2.28
2.30
2.12
A
P 1
2.30
G
J
2.36
I
2.40
4.22
P2
2.20
2.28
2.50
E
2.20
2.21
2.22
2.34
F
H
C
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
DL=7.20m
0
4m

第63図　ＳＢ７


SB 8
1.44
2.00
2.06
1.60
2.12
1.43
1.42
1.52
1.65
2.18
1.49
SB 9
1.90
1.88
2.06
1.94
1.36
1.26
2.60
2.92
2.44
2.22
2.00
1.62
2.12
2.14
DL=7.20m
0
4m

第64図　ＳＢ８・９

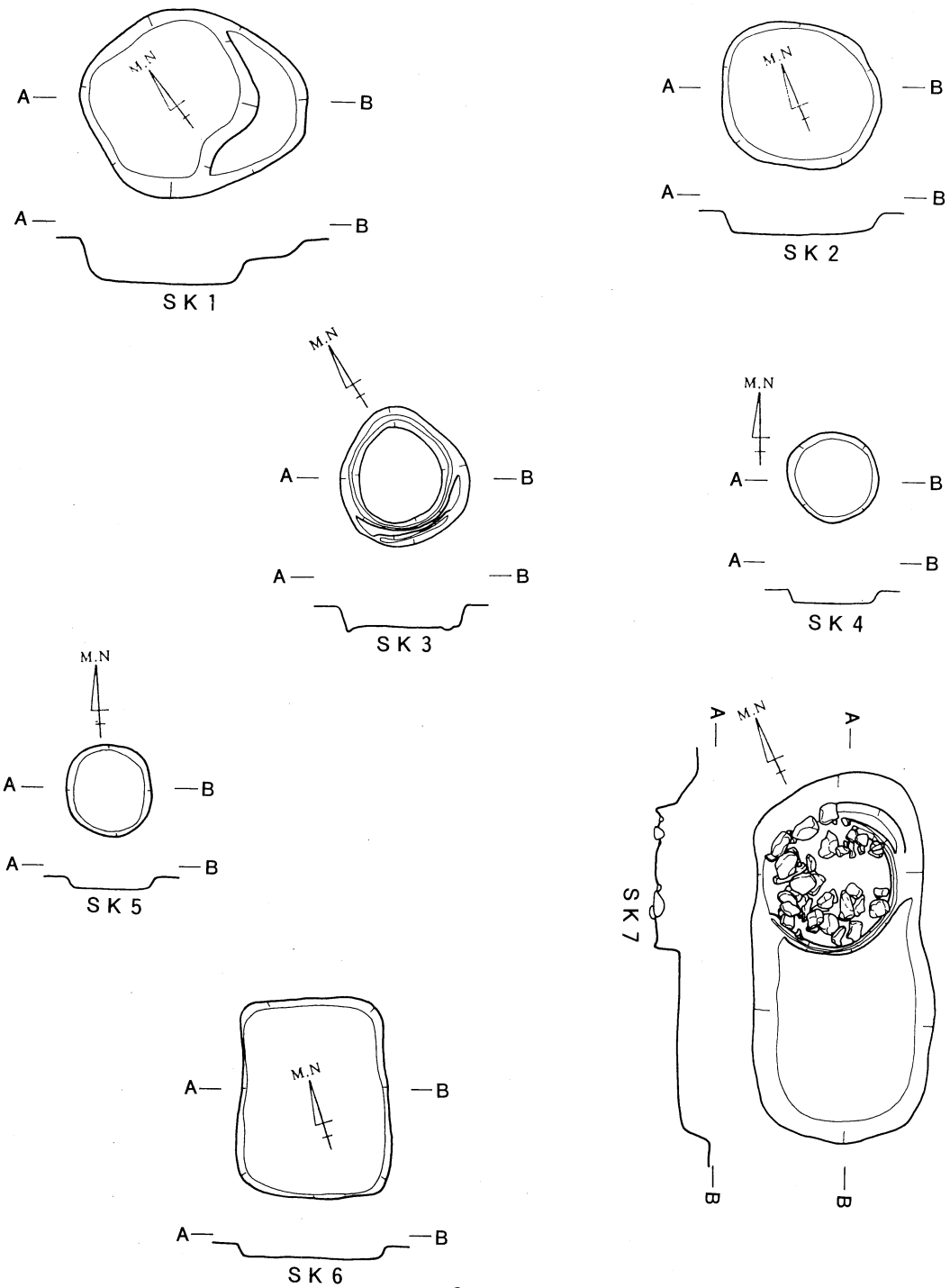




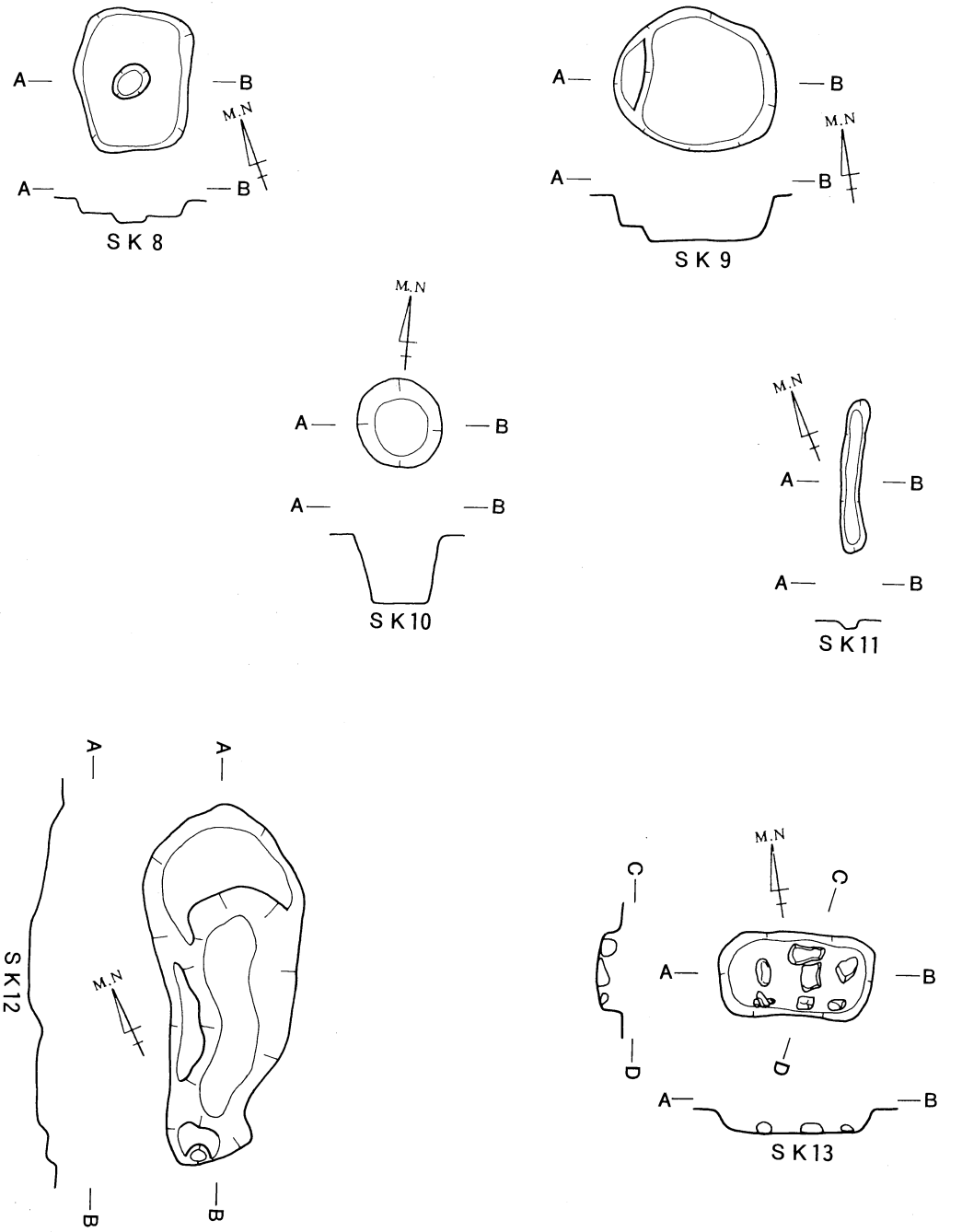
DL=7.20m

0 4m

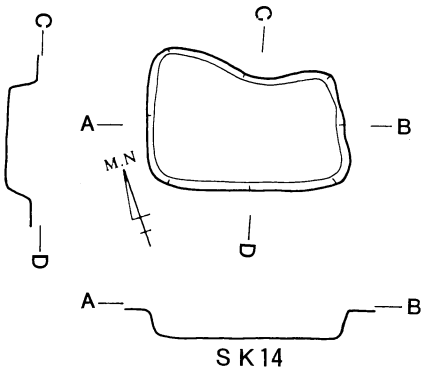
第65図　SB10・11

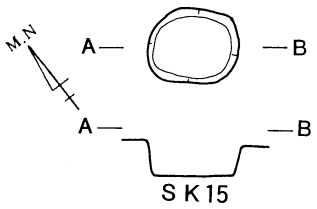


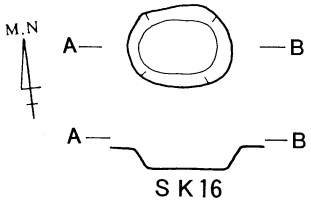
第66図　ＳＫ１～７

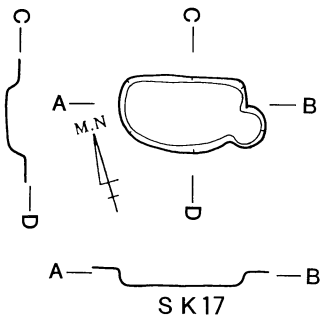


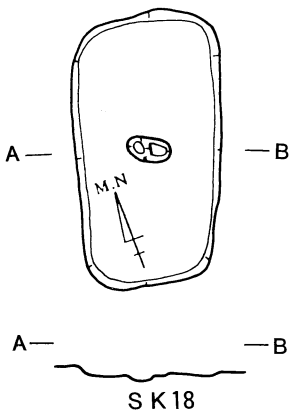
第67図　SK 8～13

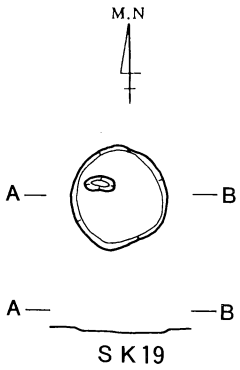

C
C
A
B
M.N
D
A
B
SK14


M.N
A
B
A
B
SK15


M.N
A
B
A
B
SK16

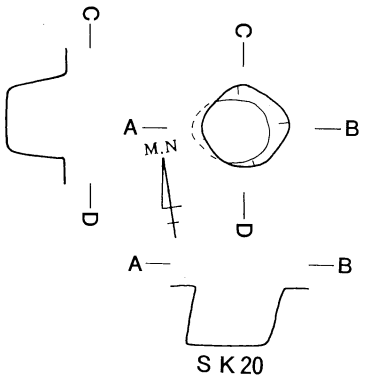

C
C
A
B
M.N
D
A
B
SK17


A
B
M.N
A
B
SK18

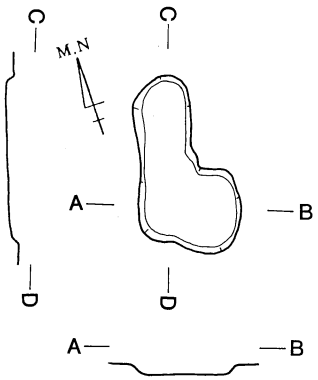

M.N
A
B
A
B
SK19

DL=7.10m
0
4m

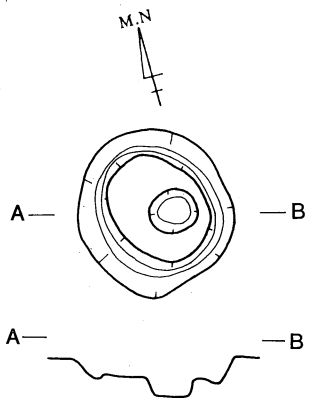
第68図　SK14～19



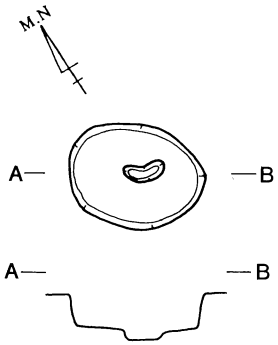
S K 20



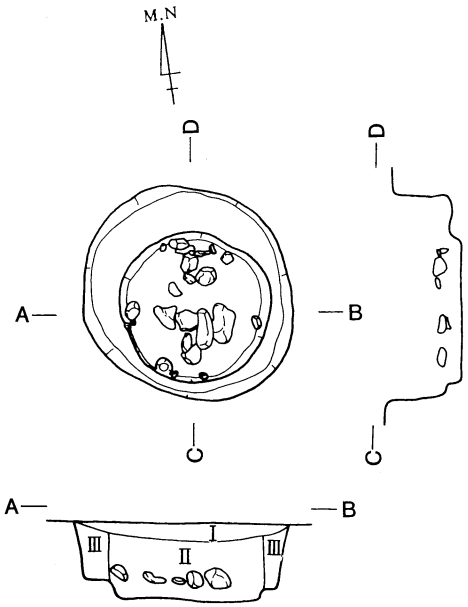
S K 21



S K 22



S K 23



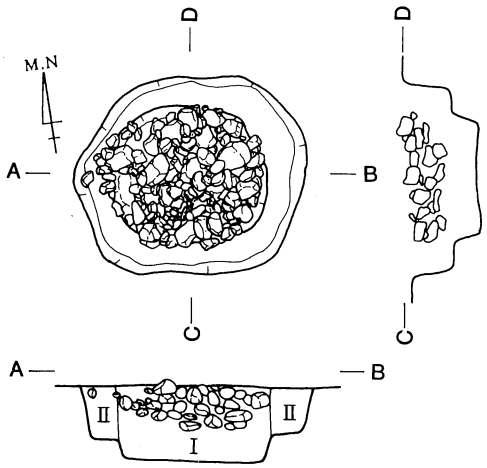
第Ⅰ層　灰色粘質土

第Ⅱ層　灰黄色粘質土

第Ⅲ層　灰褐色粘質土

S K 24

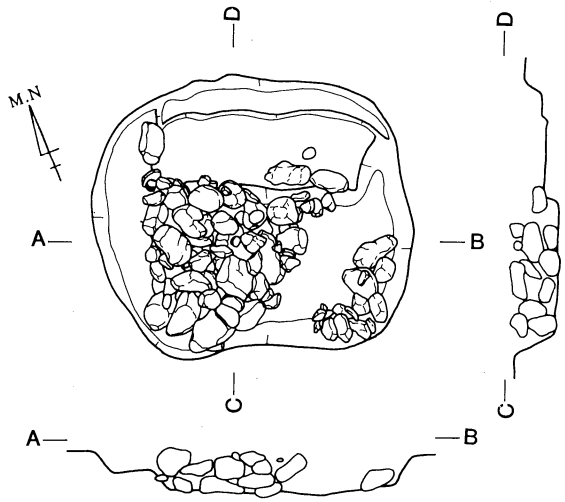
第69図　S K 20～24



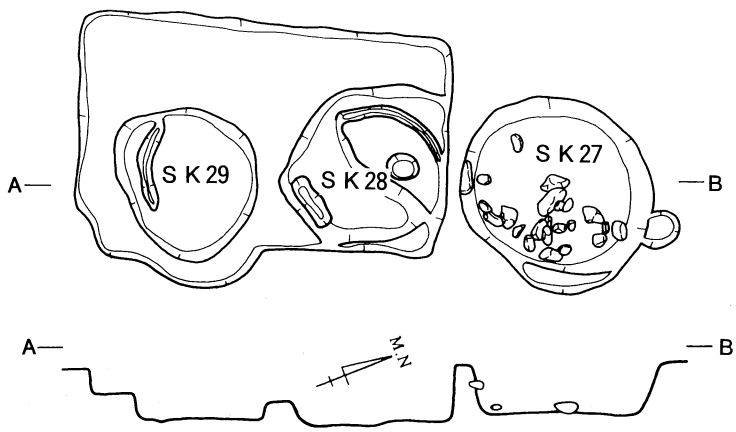
第Ⅰ層　灰黄色粘質土

第Ⅱ層　灰褐色粘質土

S K 25

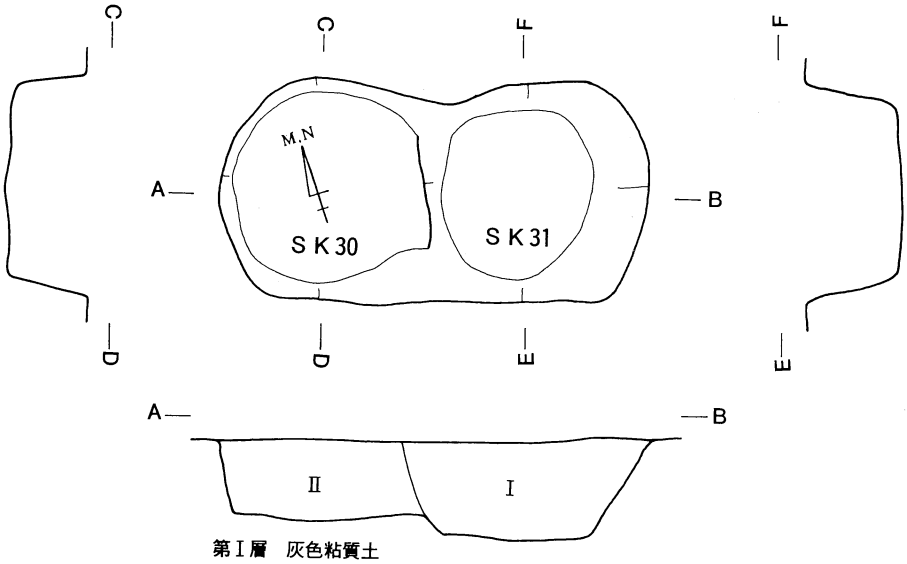


S K 26



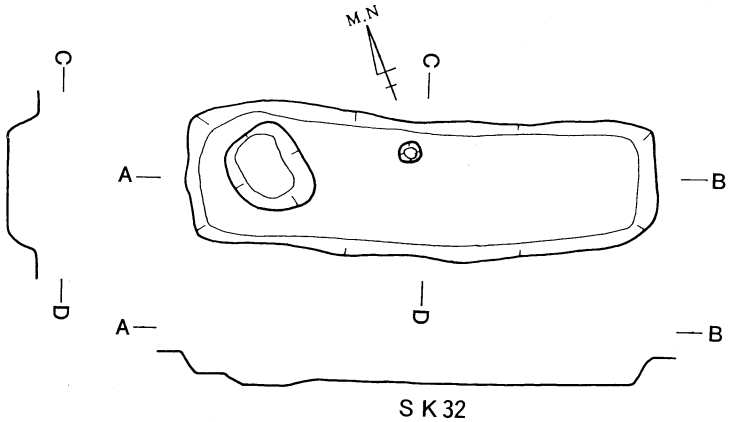
DL＝7.10m　0　4m

第70図　S K 25～29



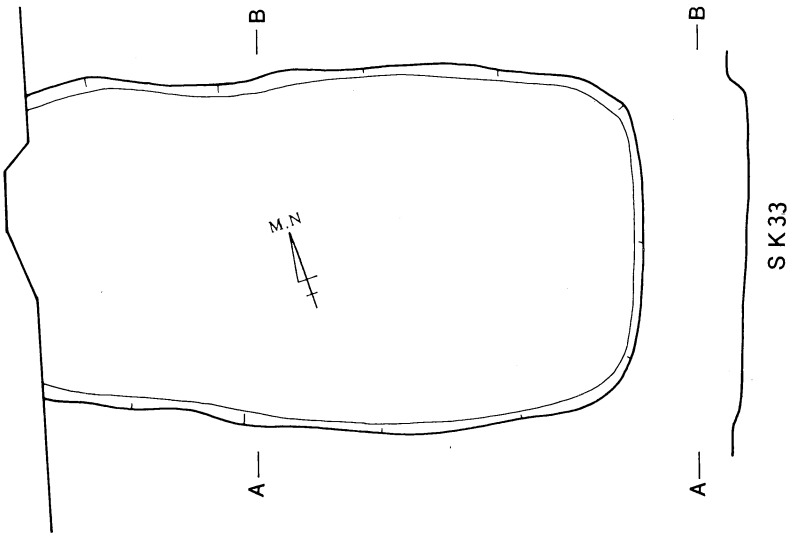
第Ⅰ層　灰色粘質土

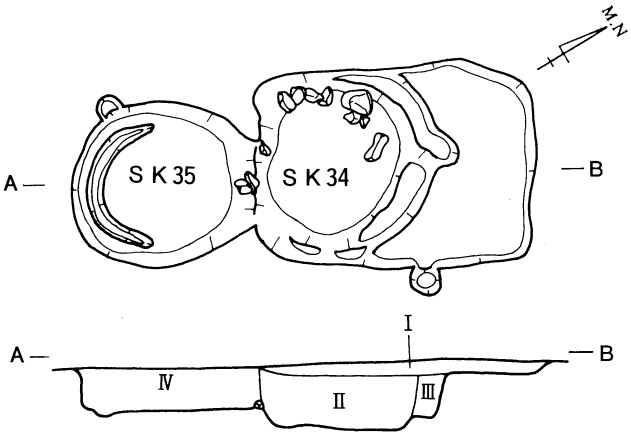
第Ⅱ層　灰褐色粘質土



D L =7.10m　0　4m

第71図　S K 30～32



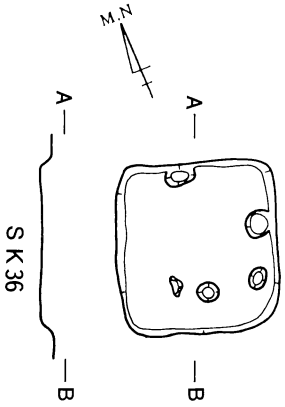


第Ⅰ層　灰色粘質土

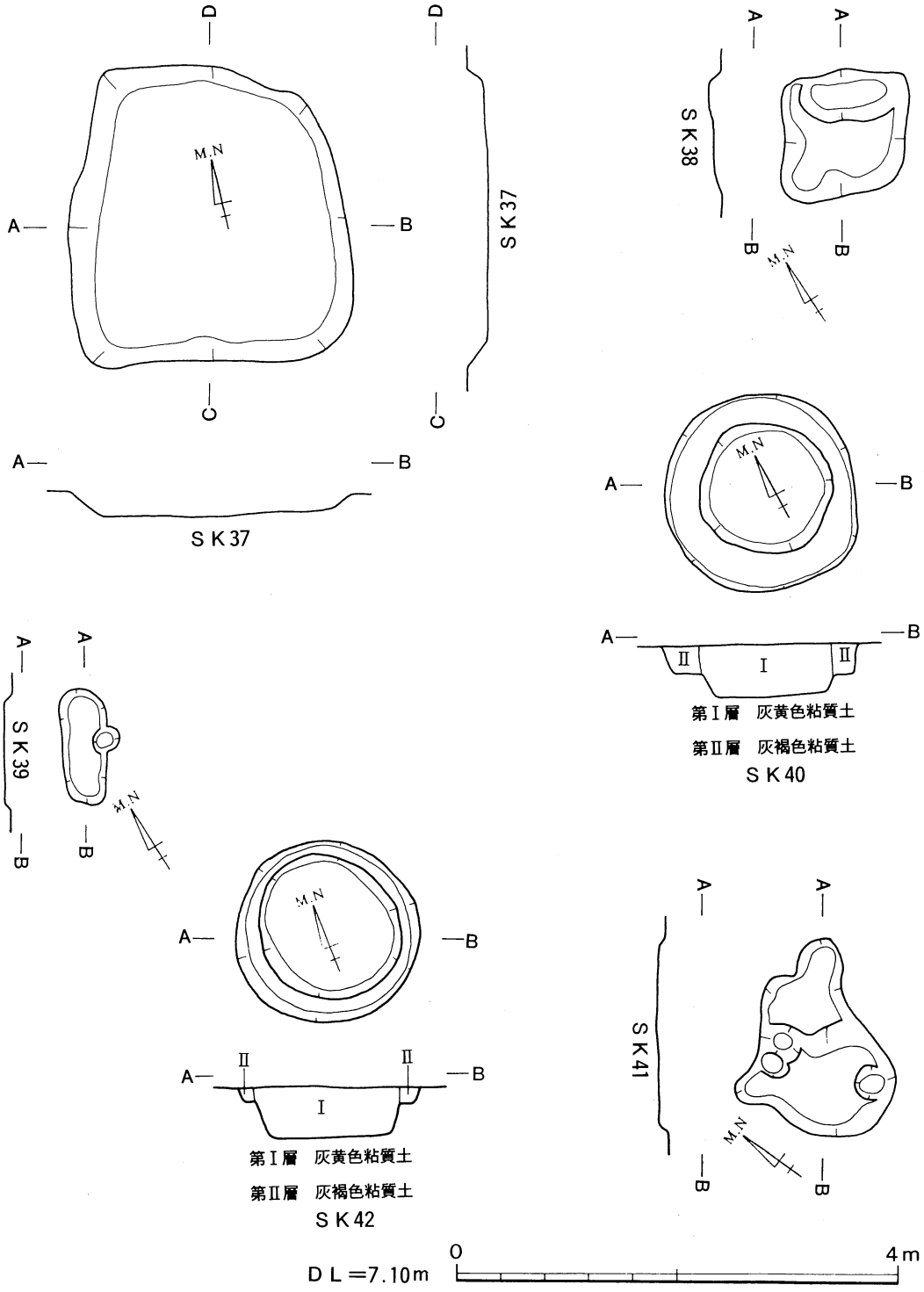
第Ⅱ層　暗灰色粘質土

第Ⅲ層　灰褐色粘質土

第Ⅳ層　灰褐色粘質土

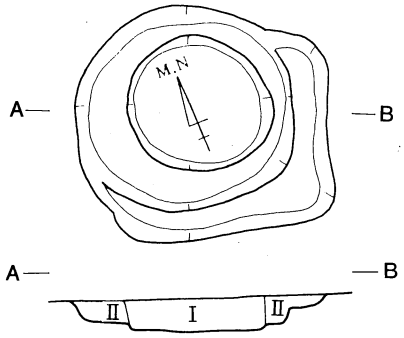


第72図　SK33～36



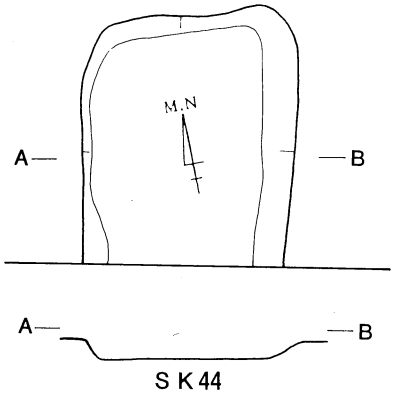
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
M.N
A
B
C
D
I
II
第Ⅰ層　灰黄色粘質土
第Ⅱ層　灰褐色粘質土
DL＝7.10m
0
4m

第73図　SK37～42



第Ⅰ層　灰黄色粘質土
第Ⅱ層　灰褐色粘質土

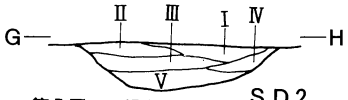
SK43



SK44

SD2

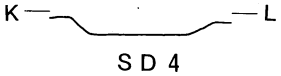
SD2



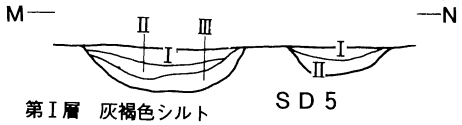
SD2

第Ⅰ層　灰褐色砂質土
第Ⅱ層　灰黒褐色粘質土
第Ⅲ層　青灰色砂質土
第Ⅳ層　暗灰色細砂
第Ⅴ層　暗灰褐色荒砂

SD3



SD4



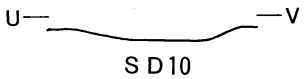
SD5

第Ⅰ層　灰褐色シルト
第Ⅱ層　暗灰褐色砂質土
第Ⅲ層　茶褐色砂質土

SD7

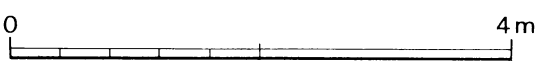
SD8

SD9

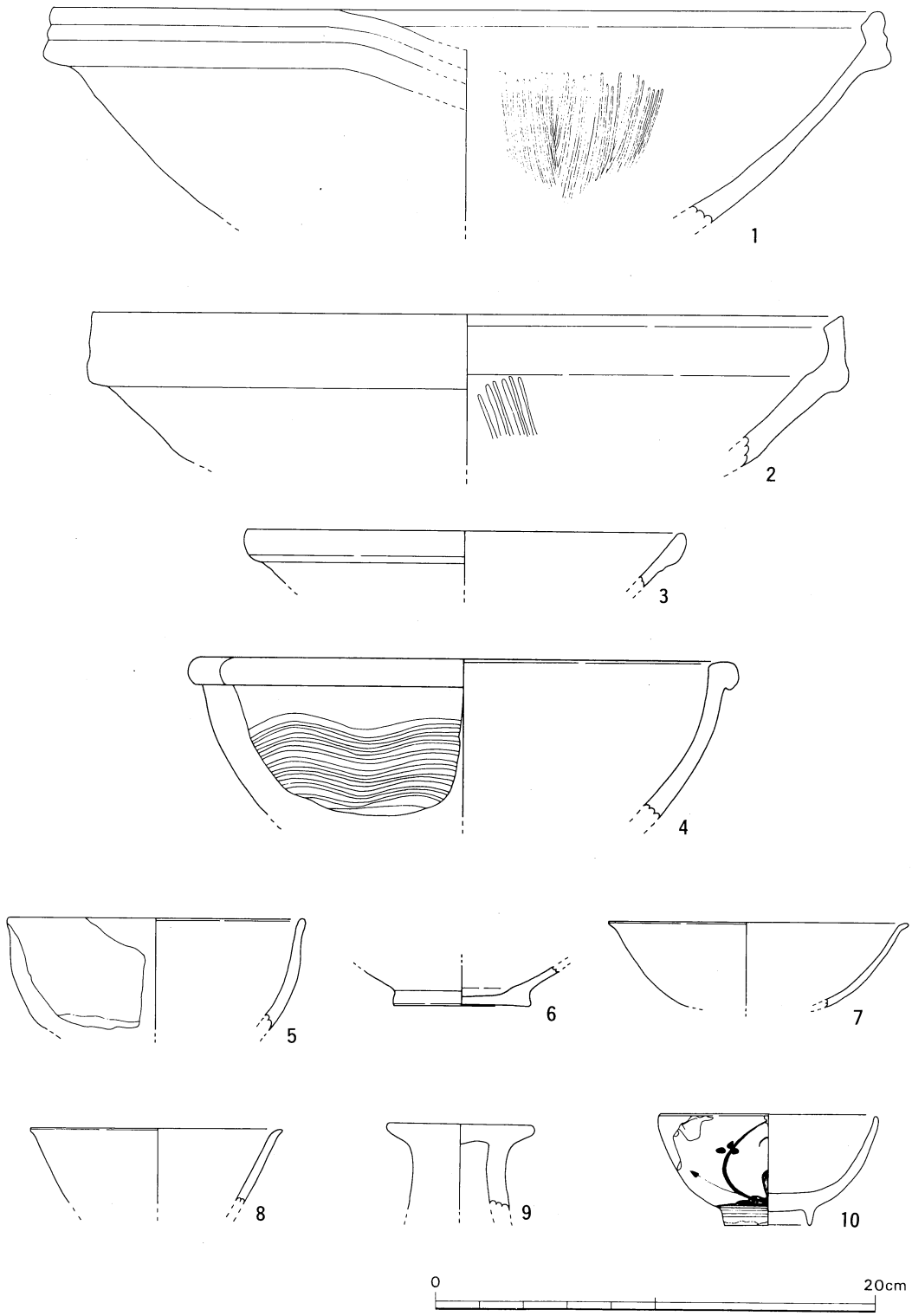


SD10

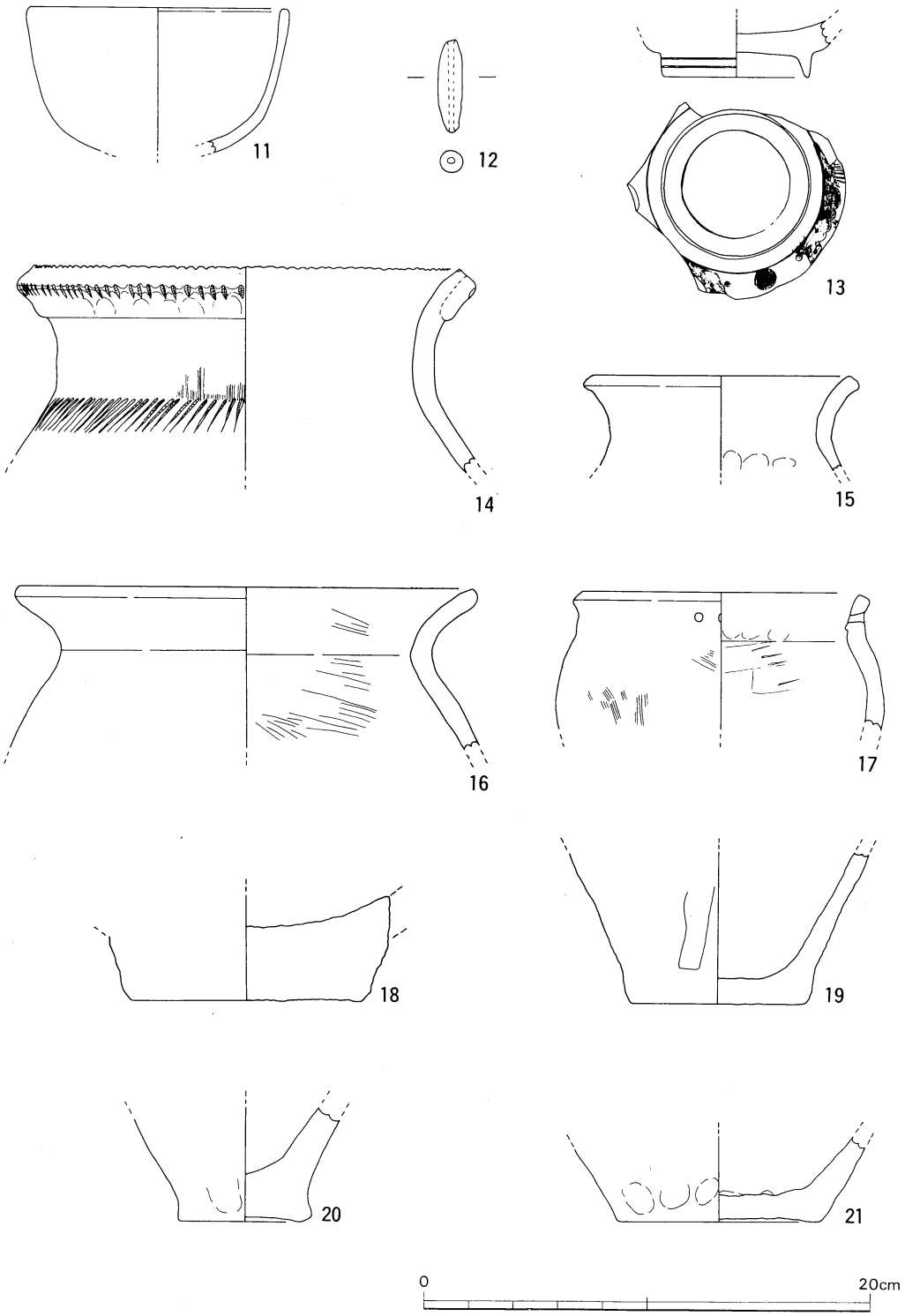
DL＝7.10m



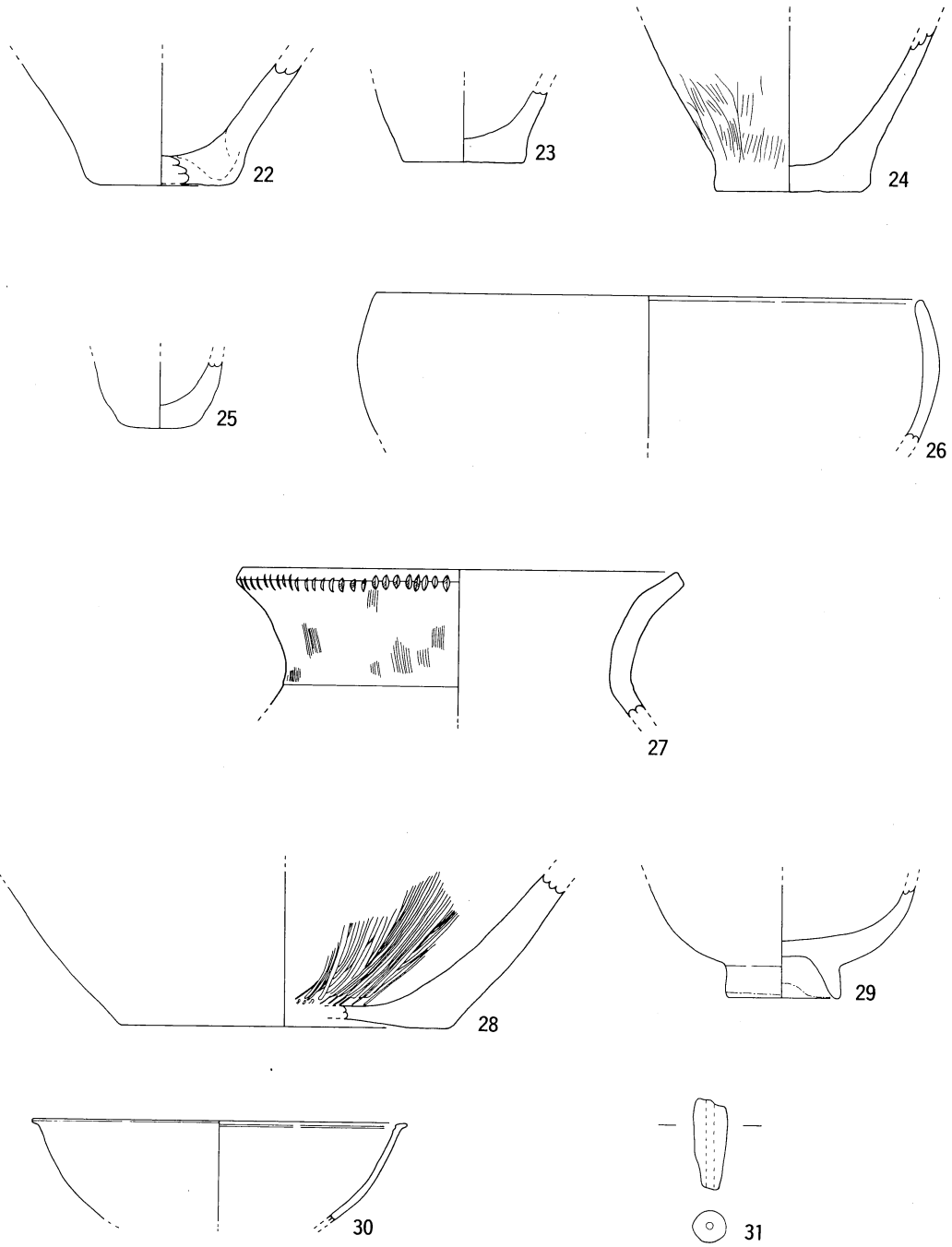
第74図　SK43・44、SD2～5・7～10



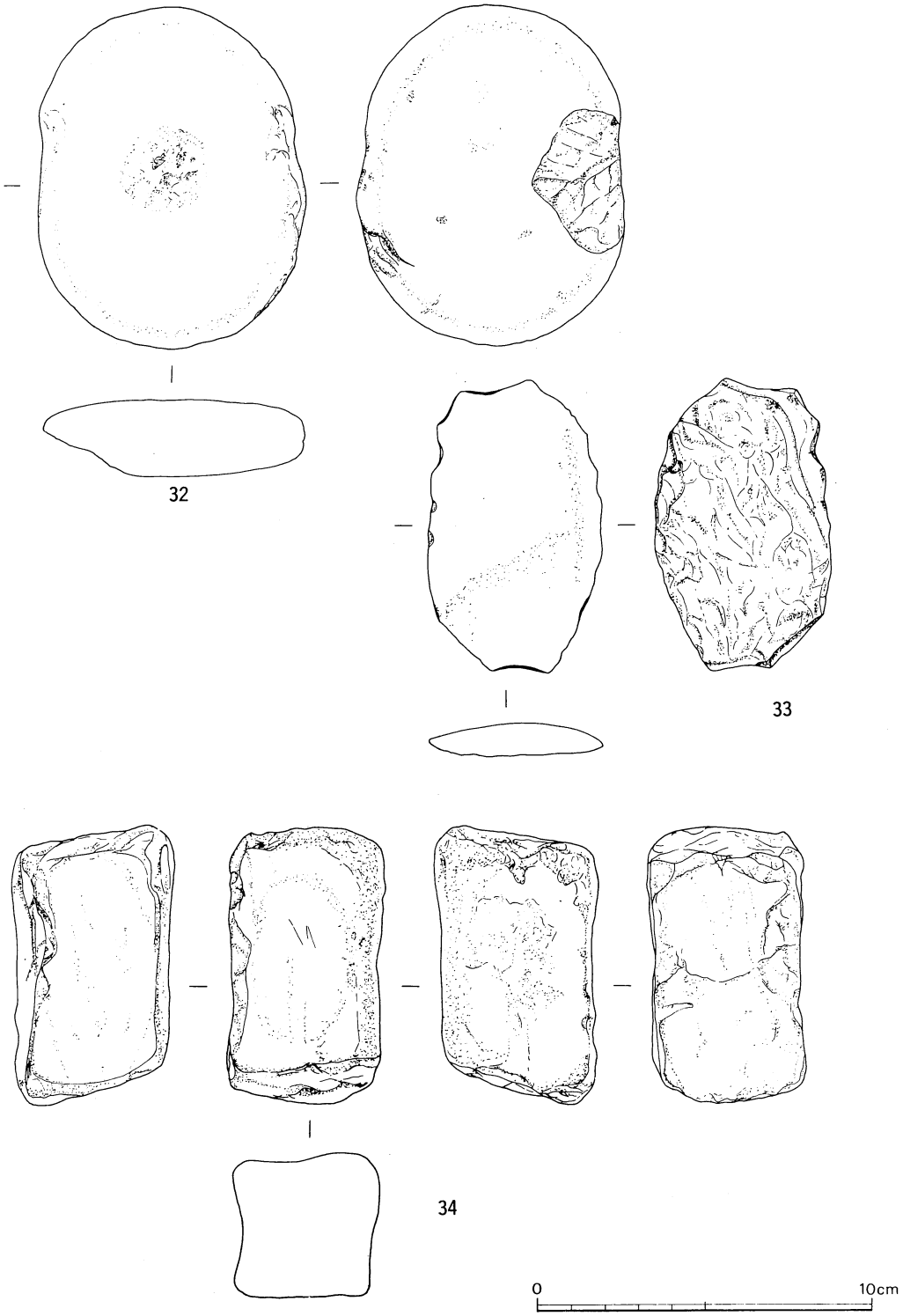
第75図　第Ⅱ層、ＳＢ６・７、ＳＫ５・７　出土遺物



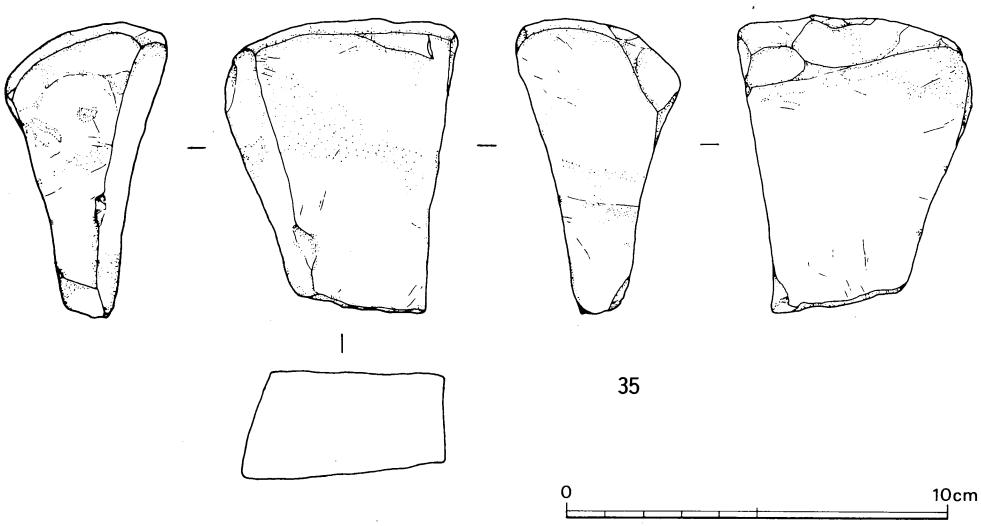
第76図　ＳＫ20・27・33、ＳＤ２　出土遺物

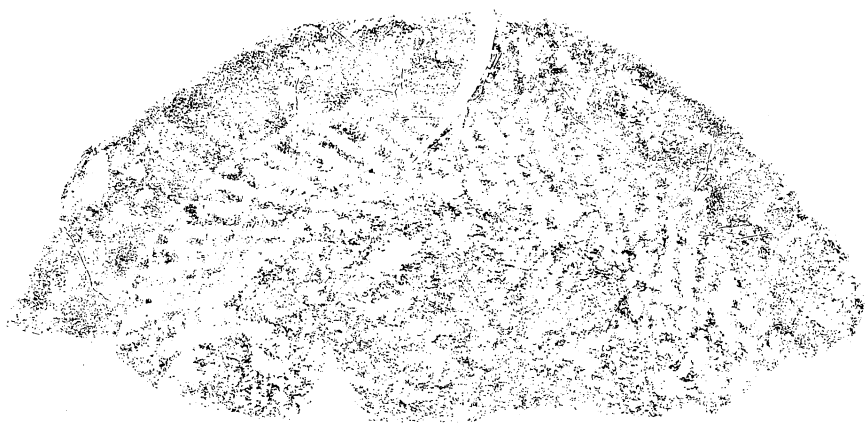


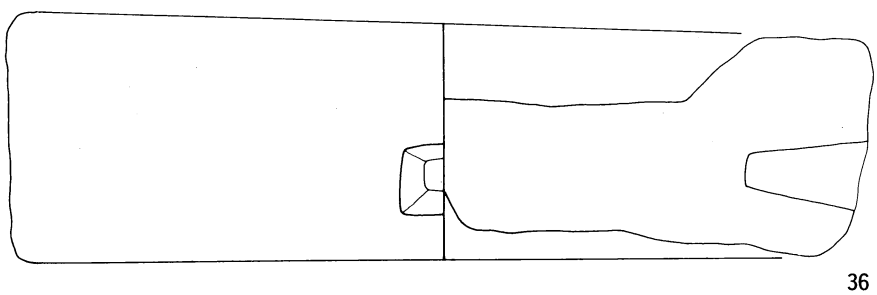
第77図　ＳＤ２・７、Ｐ１・２　出土遺物



第78図　ＳＤ２　出土遺物







第79図　ＳＫ５・24　出土遺物

3. Loc. 42

Loc. 42

1．位置と調査経過

Loc. 42は、田村遺跡群の北端部に位置する。Loc. 42の周辺の小字で城、桂昌寺中、二本松と呼称されている地域は、守護代細川氏の城館の所在地として有名な所である。その中で、Loc. 42の調査区は、小字二本松の南東部にあたる。本調査区は、高知空港拡張工事に伴う、県道地下道化工事に係るものである。調査対象範囲は、空港拡張範囲の北限から北へ延びる県道及びその拡張部分である。まず場周道路及び用排水の関係上、調査範囲の南端部に試掘トレンチを設定し調査を行った。調査区北部においては、田村城館内にはいることから全面発掘を実施した。調査は、排土の関係上、57年度において、県道の東西拡張部分及び旧県道部を行い、さらに吉本氏所有民家の移築及び工事仮設道の関係で一部58年度にかけて実施した。

2．調査概要

Loc. 42は、大部分が田村城館内にはいることから、調査の成果が期待された。検出遺構は、掘立柱建物址11棟、土坑103基、溝15条、井戸１基、性格不明遺構１基、ピット群である。出土遺物も15～16世紀にかけての土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入陶磁器等が多量に出土した。ＳＫ96では、一括して土師質土器が投棄されており良好な資料を得ることができた。また、調査区の南端部では外掘と、北端部では内掘の可能性のある遺構を確認することができた。遺構の残存状況は、旧県道等により上部が削平されているものが多かった。近世遺構については、木棺墓等を検出し、副葬品としての近世陶磁器類の資料も得ることができた。

3．層序と出土遺物

調査区において認められた基本層序は、以下の通りである。

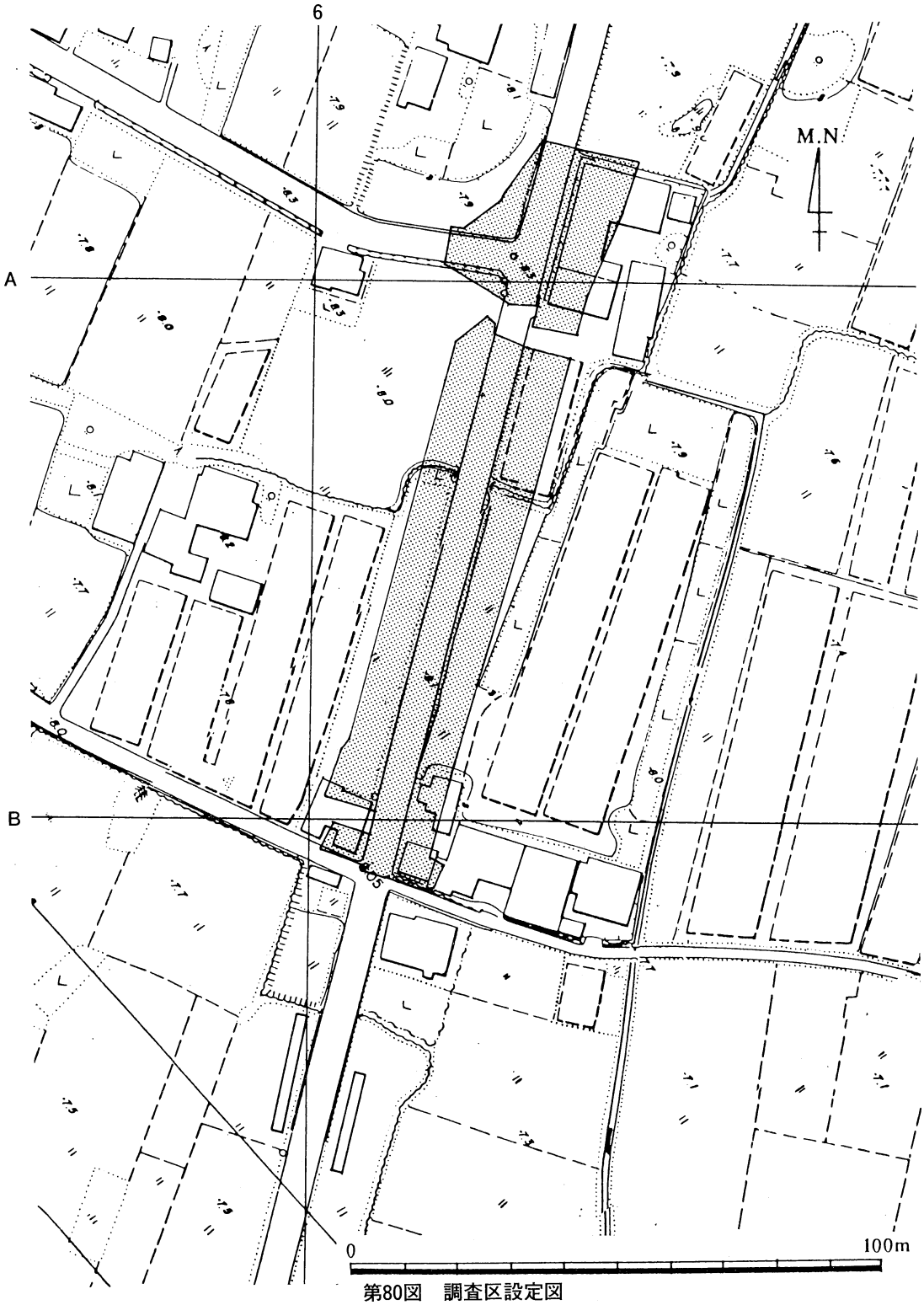
第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　茶灰色粘質土層（床土）

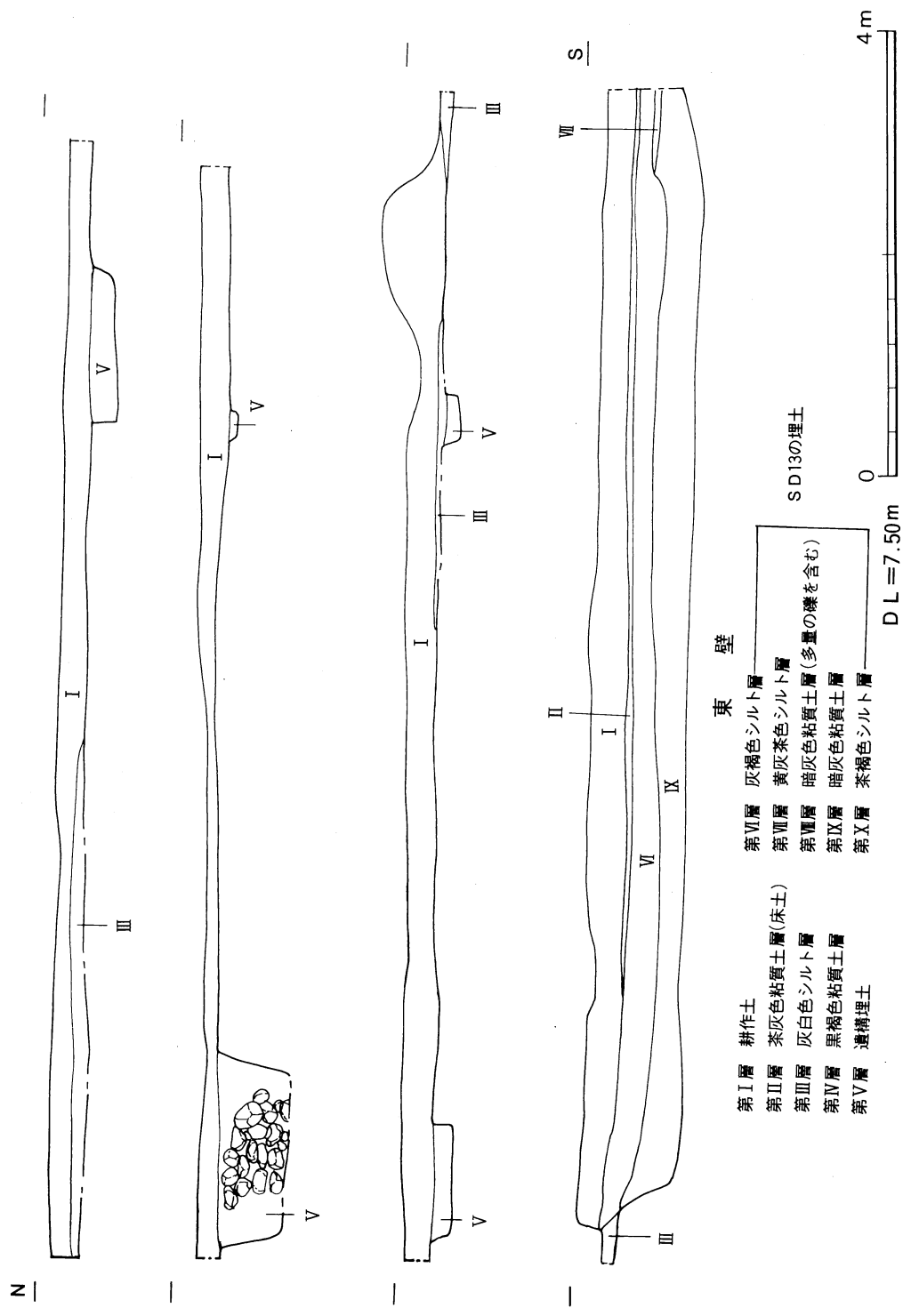
第Ⅲ層　灰白色シルト層

第Ⅳ層　黒褐色粘質土層

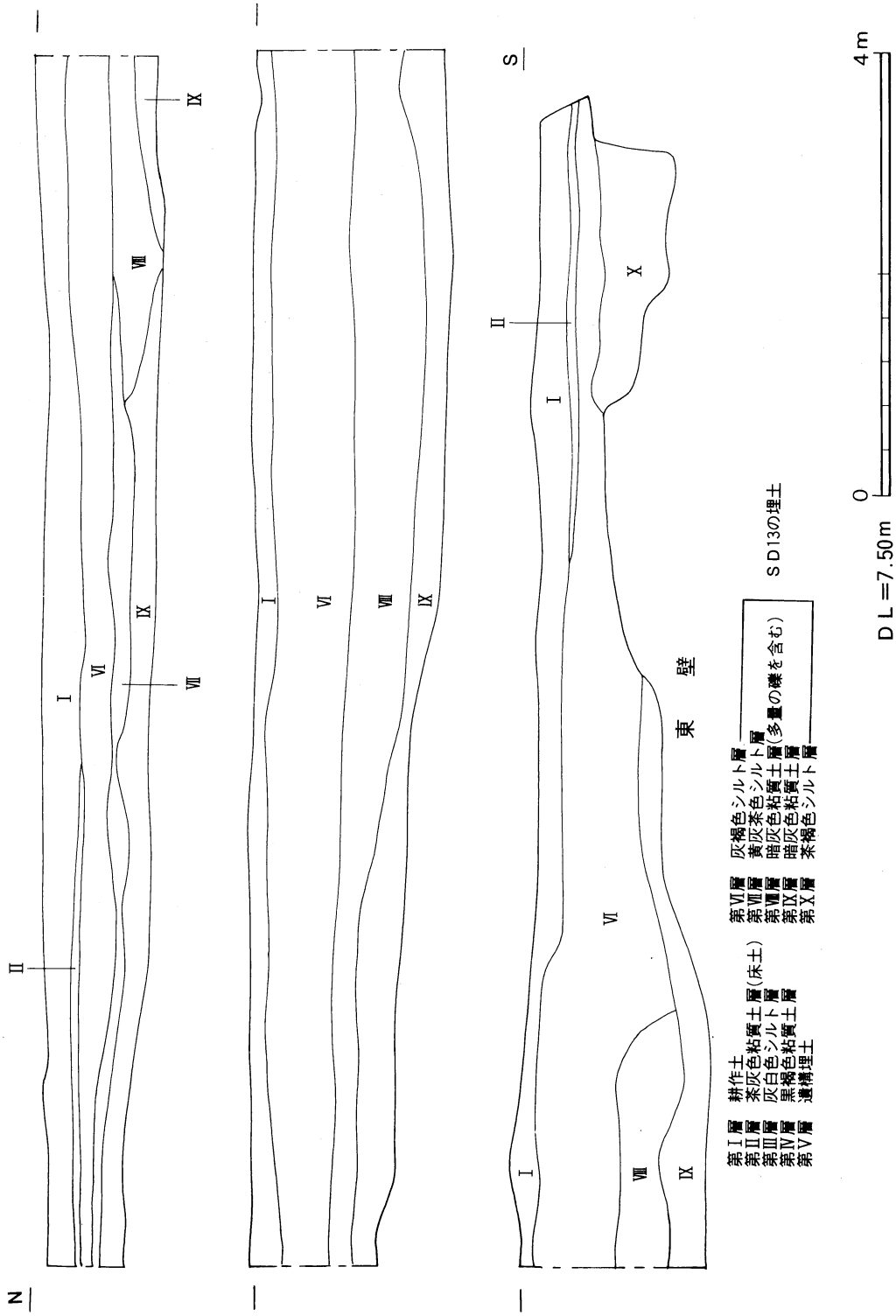
遺構は第Ⅰ～Ⅲ層を除去した段階で検出された。本調査区は、旧県道下であり、遺構の大半は上部が削平され、残存状況は悪かった。基本層序も、西側は第Ⅱ・Ⅲ層が堆積しているが、東側部分は第Ⅰ層の耕作土が大半である。第Ⅳ層以下は無遺物層である。第Ⅲ層中より、土師質土器鍋（１）・釜（２）、Ⅴ期の備前焼擂鉢（３）、近世備前焼擂鉢（４、５）、青磁稜花皿（６）、白磁皿（７）、土錘（８）、伊万里系紅猪口（９）が出土した。



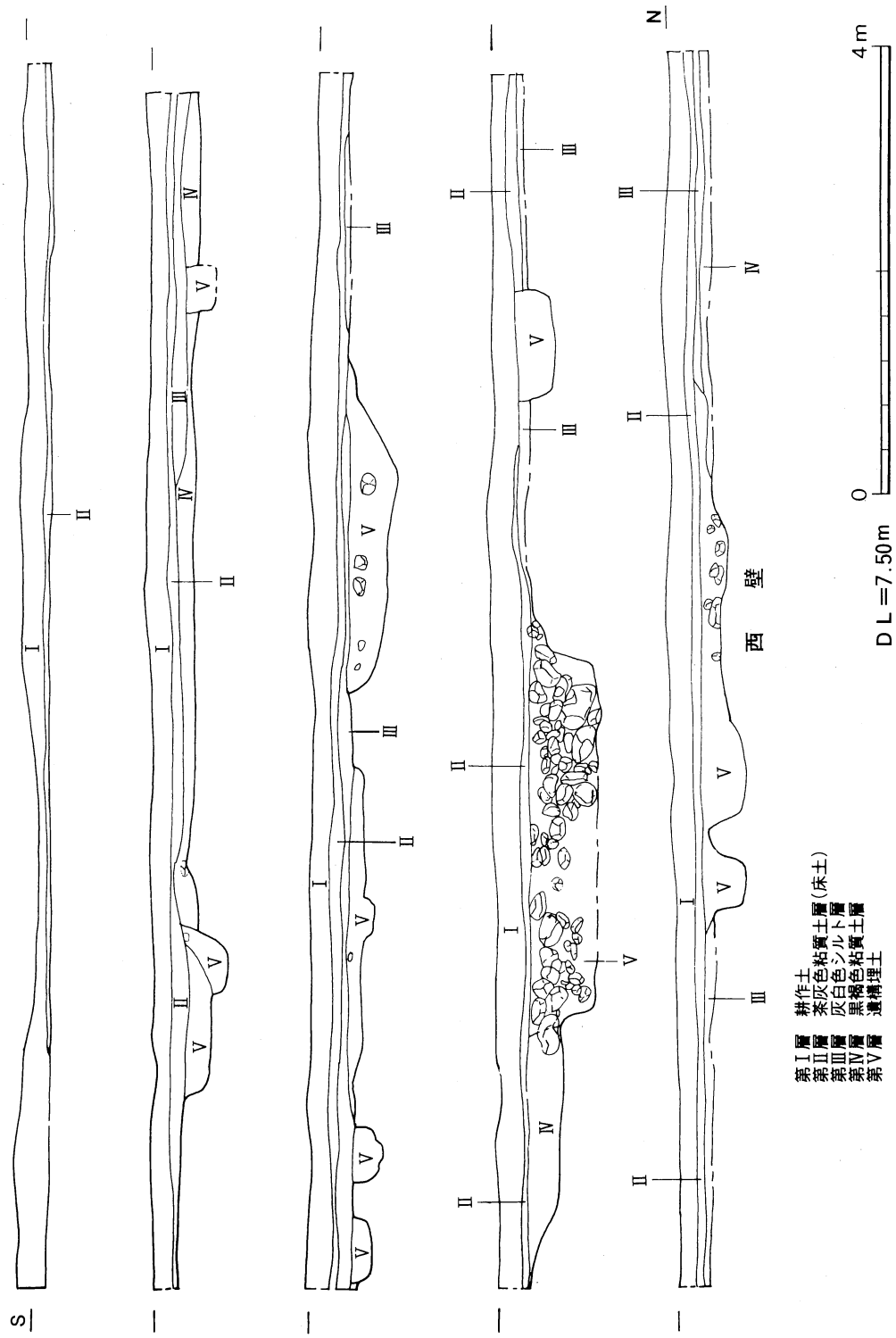
第80図　調査区設定図



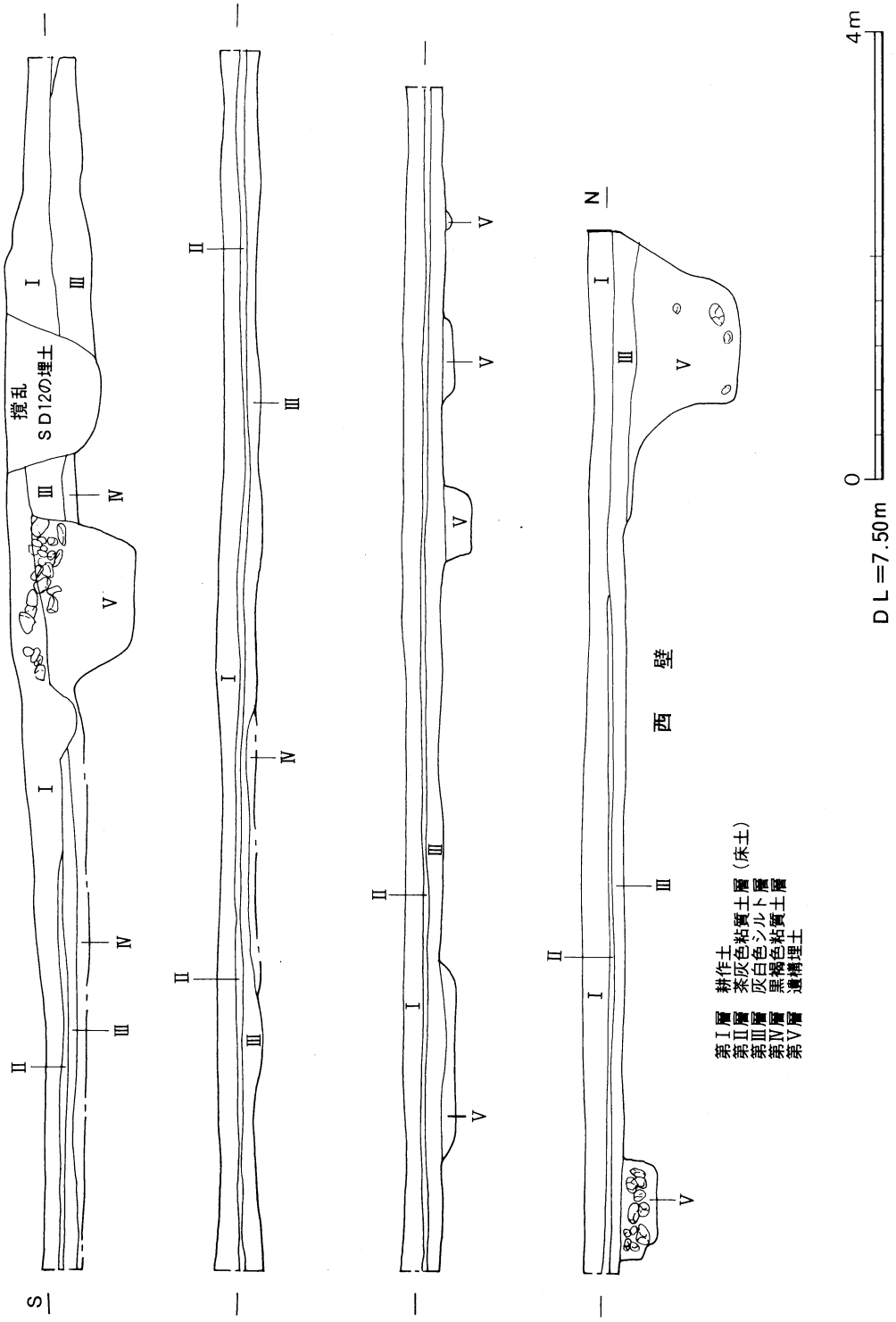
第81図　調査区セクション



第82図　調査区セクション



第83図　調査区セクション



第84図　調査区セクション

4．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×２間の南北棟で、梁間（東西）3.20ｍ、桁行（南北）4.75ｍを測る。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形で直径20～30㎝、検出面からの深さは20～60㎝を測る。北東隅の柱穴が浅い。基底面の標高は6.59～7.00ｍである。柱間距離は、梁間3.10～3.20ｍ、桁行が1.95～2.80ｍである。桁行北部の柱間距離が狭い。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＢ２

ＳＢ２は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、東側が調査区外へ延びているため規模は不明であるが、２×２間以上の東西棟と考えられる。棟方向はＮ－75°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径20～30㎝、検出面からの深さは20～30㎝を測る。北側の柱穴が浅い。基底面の標高は7.02～7.08ｍである。柱間距離は、桁行が1.75～1.80ｍ、梁間が3.45ｍを測る。西妻の中央柱がＳＫ13に切られたと考えられるが、埋土が類似しているため不明である。埋土は黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器細片がＰ１より出土しているが、実測不可能である。建替え等は行われていない。

ＳＢ３

ＳＢ３は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×４間の東西棟で、梁間（南北）3.45ｍ、桁行（東西）6.55ｍを測る。棟方向はＮ－72°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径20～40㎝、検出面からの深さは20～60㎝を測る。基底面の標高は6.65～6.95ｍである。柱間距離は、梁間3.10～3.45ｍ、桁行が1.40～2.55ｍを測る。梁間の中間柱は確認できなかったが、建物の規模は２×４間の東西棟になる可能性もある。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の南北棟で、梁間（東西）2.95ｍ、桁行（南北）4.30ｍを測る。棟方向はＮ－20°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形で直径20～30㎝、検出面からの深さは20～50㎝を測る。基底面の標高は6.75～7.05ｍである。柱間距離は、梁間1.45～1.50ｍ、桁行が2.15～

2.20ｍを測る。南妻の東隅の柱穴が欠ける。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。ＳＢ５及び北側に位置するＳＢ３と重複しているが、新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、調査区北部の中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×２間の東西棟で、梁間（南北）3.80ｍ、桁行（東西）7.31ｍを測る。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径20～30㎝、検出面からの深さ15～50㎝を測る。西妻の中間柱が浅い。基底面の標高は6.71～7.15ｍである。柱間距離は、梁間が1.80～2.00ｍ、桁行が3.55～3.75ｍを測る。東妻の中間柱が欠けている。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＢ３と北西部を、ＳＢ４と西半部をそれぞれ重複しているが、ピットの切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）は推定3.40ｍ、桁行（南北）5.45ｍを測る。棟方向はＮ－19°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形で直径30～50㎝、検出面からの深さ13～53㎝を測る。基底面の標高は6.45～6.90ｍである。柱間距離は、梁間1.55～1.70ｍ、桁行1.80～1.85ｍを測る。東辺柱列を検出できなかったが、梁間は３間以上東側に延びる可能性はない。

遺物は、Ｐ１より青磁細片、Ｐ２より土師質土器皿・鍋、瓦質土器片等が出土した。しかし、細片で実測不可能である。ＳＢ７と重複関係にあるが、ピットの切り合いが認められないため新旧関係は不明である。

ＳＢ７

ＳＢ７は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.45ｍ、桁行（南北）5.00ｍを測る。棟方向はＮ－14°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径27～47㎝、検出面からの深さ19～41㎝を測る。基底面の標高は6.73～6.84ｍである。柱間距離は、梁間1.60～1.85ｍ、桁行1.35～1.90ｍを測る。北妻の東側柱穴、東辺の南側柱穴を欠く。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１より土師質土器、瓦質土器、Ｐ２・３より土師質土器片が出土している。細片のため実測不可能である。ＳＢ６と重複関係にあるが、ピットの切り合いが認められず新旧関係は不明である。また、ＳＫ46・38との関係も明確にできなかった。ＳＫ37は、切り合い関係が認められるが、埋土が類似しているため、新旧関係は不明である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、調査区中央の東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、２×３間の南北棟で、梁間（東西）3.80ｍ、桁行（南北）6.80ｍを測る。棟方向はＮ－17°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形で直径25～40㎝、検出面からの深さ16～53㎝を測る。基底面からの標高は6.51～6.98ｍである。柱間距離は、梁間1.80～2.00ｍ、桁行2.10～2.35ｍを測る。東辺柱穴が１個欠損する。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器がＰ１～３より、瓦質土器がＰ４より出土した。いずれも細片で、実測不可能である。重複関係は、南西部がＳＫ53を切っている。

ＳＢ９

ＳＢ９は、調査区中央部東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、東側柱列、北側柱列が不明で明確にできないが、３×４間の南北棟と考えられる。棟方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴の平面形は、円形で直径27～50㎝、検出面からの深さ15～39㎝を測る。基底面からの標高は6.51～6.77ｍである。柱間距離は、梁間（東西）1.40～1.75ｍ、桁行（南北）0.80～1.85ｍを測る。西辺柱列の距離が不統一である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。南北に縦走するＳＤ９・10の一部を覆う形で存在するが、ピットの切り合いがなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ10

ＳＢ10は、調査区の南西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、１×３間の東西棟で西側が調査区外に接しており、西側に延びる可能性もある。棟方向はＮ－76°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径32～60㎝とやや大きい。検出面からの深さは19～48㎝を測る。基底面からの標高は6.65～7.08ｍである。柱間距離は、梁間（南北）3.65ｍ、桁行（東西）1.60～1.95ｍを測る。梁間が１間広く、精査したが中間柱を確認できなかった。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、Ｐ１から10の白磁皿が出土した。重複関係は、南北に縦走するＳＤ９を切っている。

ＳＢ11

ＳＢ11は、調査区の南西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

建物は、西側が調査区外になっており西に延びる可能性もあるが、１×１間の東西棟と考えられる。梁間（南北）3.10ｍ、桁行（東西）4.20ｍを測る。棟方向はＮ－74°－Ｗである。柱穴の平面形は、円形で直径26～50㎝、検出面からの深さ20～43㎝を測る。基底面からの標高は6.73～6.87ｍである。柱間距離は、梁間3.05～3.10ｍ、桁行3.95～4.20ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器が出土しているが、細片のため実測不可能であ

る。本遺構は、ＳＫ97を覆う形で存在するが、新旧関係及び関連等は不明である。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、調査区の北西隅に位置する。第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.90ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.54ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.64ｍを測る。埋土は、１層で暗灰色粘質土である。

本遺構は、近世の木棺墓で、木棺の蓋が埋没しており、それを除去すると底板が検出された。人骨は溶解しており木棺の幅は0.35ｍ、長さ1.60ｍである。幅の狭いことなどから横臥屈肢葬と考えられる。遺物の出土状況は、木棺の蓋の上から11の瀬戸・美濃系小碗が１点出土した。

ＳＫ２

ＳＫ２は、調査区の北西隅に位置し、ＳＫ１の南側１ｍの所に隣接する。第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長径1.02ｍ、短径0.40ｍ、深さ0.24ｍを測る。長軸方向はＮ－52°－Ｗである。壁は傾斜して立ち上がり、底面は西側が一段深くなっている。標高は西部で6.92ｍ、東部で6.98ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。

本遺構は、隅丸長方形のプランを呈しており、掘り方もしっかりとしている。北側に位置するＳＫ１は、木棺墓であり、形態、規模、位置等からも墓の可能性がある。出土遺物は皆無である。

ＳＫ３

ＳＫ３は、調査区の北西隅に位置し、ＳＫ２の南西0.50ｍの所に隣接する。第Ⅰ層を除去した段階で検出したが、かなり削平を受けている。

平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長径0.95ｍ、短径0.77ｍを測り、深さは７㎝と浅い。長軸方向はＮ－38°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、標高は7.10ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、底面直上より土師質土器、近世陶器が出土した。実測可能な土師質土器皿（12、13）でいずれもロクロ成形であるものと、唐津焼皿（14）である。

ＳＫ４

ＳＫ４は、調査区の北西隅に位置し、ＳＫ３の東側１ｍの所に隣接する。第Ⅰ層を除去した

段階で検出した。

平面形は、不整形を呈する。規模は、長径2.20m、短径1.20m、深さ0.50mを測る。長軸方向はN－40°－Eである。比較的急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦であるが、東部がやや高くなっている。底面の標高は6.65mである。埋土は、1層で灰色粘質土である。遺物は、15の伊万里系碗が出土している。

SK5

SK5は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出したが、削平が著しい。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.47m、短径1.15m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN－28°－Eである。壁は、急に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.94mを測る。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、瓦質土器、近世陶磁器が若干出土している。

SK8

SK8は、調査区の北西端に位置し、第Ⅰ層の耕作土を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.50m、短径1.25m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN－26°－Eである。壁は、急に傾斜して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で標高6.73mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

重複関係は、本遺構の北西部をSK6、南西部をSK7に切られている。SK6・7共に、現代の撹乱と考えられ、埋土中から現代も使用されている瓦片が出土している。本遺構は、これらの土坑に切られていることや、埋土の状態から近世の時期と考えられる。

SK9

SK9は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は瓢箪形を呈する。規模は、長径0.72m、短径0.48m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN－64°－Wである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は水平である。底面の標高は6.95mである。埋土は、1層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器の細片1点のみ出土しているが、実測不可能である。重複関係は、東側に位置するSK10を切っている。

SK10

SK10は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径1.95m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN－13°－Eである。上面が削平されており、SK9よりも浅い。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、

平坦で標高7.07ｍである。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器、瓦質土器が若干出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、本遺構の西端部をＳＫ９に切られている。

ＳＫ11

ＳＫ11は、調査区の北端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径0.98ｍ、短径0.56ｍ、深さ0.16ｍを測り、ＳＫ３・10同様著しく削平を受けている。長軸方向はＮ－１°－Ｗで、ほぼ磁北をさす。壁は、南部が比較的緩く、その他は急傾斜で立ち上がる。底面は、北部半分がやや深く落ち込んでいる。北側の底面の標高は7.03ｍである。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、本遺構の北東部の底面から完形に近い土師質土器杯１点（16）が出土している。その他、火葬骨片が出土している。形態も方形を呈しており、火葬墓として把握してもよかろう。

ＳＫ12

ＳＫ12は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径2.45ｍ、短径1.25ｍ、深さ0.60ｍを測る。長軸方向はＮ－25°－Ｅである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は、平坦で標高7.15ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より近世陶磁器が若干出土しているが、小片のため実測不可能である。重複関係は、周囲に掘り込まれているピットを切っている。

ＳＫ13

ＳＫ13は、調査区の北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.65ｍ、短径1.60ｍ、深さ0.49ｍを測る。長軸方向はＮ－70°－Ｗである。壁は、急傾斜をもって立ち上がり、底面は、平坦で標高6.80ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土である。底面直上より、小礫の集石が若干見られる。遺物は、埋土中より土師質土器、近世陶磁器が出土したが、細片のため実測不可能である。重複関係は、本遺構の南東側に位置するＳＫ14を切って掘り込まれている。

ＳＫ14

ＳＫ14は、調査区の北東隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈するものと考えられるが、ＳＫ13に大部分を切られており明確でない。規模は、推定であるが長径0.90ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.15ｍを測る。ＳＫ13に比べて、極端に浅く大部分が削平を受けているとみられる。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.20ｍを測る。埋土は、１層で灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ

13に大部分を切られている。

ＳＫ15

ＳＫ15は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径2.10ｍ、短径1.02ｍ、深さ0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁は、比較的急に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.21ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より瓦質土器、土師質土器、青磁碗等が出土した。細片のため実測不可能である。重複関係は、円形のピットに切られている。

ＳＫ16

ＳＫ16は、調査区の北東端に位置し、東側は調査区外である。第Ⅰ層を除去した段階で、染み状になっており、明確なプランをつかむことができなかった。

平面形は不整形を呈する。規模は、調査区内で長径2.35ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.14ｍで、掘り込みは非常に浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.12ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、周囲に存在するピット群を切っている。

ＳＫ17

ＳＫ17は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の円形を呈する。規模は、直径0.80ｍ、深さ８㎝を測る。上部はかなり削平されており、残存している部分は浅い。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.25ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器１片の他、寛永銭１枚と煙管の吸口の破片が出土した。出土遺物からみて座棺墓と判断してもよい。

ＳＫ18

ＳＫ18は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の隅丸方形を呈する。規模は、長径3.25ｍ、短径3.00ｍ、深さ0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－74°－Ｗである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、ほぼ平坦で標高は7.01ｍである。埋土は、１層で茶橙色シルトである。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが、細片のため実測不可能である。重複関係は、東西に走るＳＤ２を切っている。

ＳＫ19

ＳＫ19は、調査区北部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.50ｍ、深さ1.20ｍを測る。壁は、急傾斜で立ち上が

り底面は平坦である。底面の標高は6.73ｍを測る。埋土は、１層で暗灰色粘質土である。遺物の出土状況は、プラン検出時に20～30㎝大の集石がみられ、それを除去すると埋土中より、備前焼、青磁、土師質土器等が出土した。細片のため実測不可能である。重複関係は、東西に走るＳＤ２を切っている。

ＳＫ20

ＳＫ20は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径3.50ｍ、短径2.05ｍ、深さ0.37ｍを測る。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、底面は、平坦で標高6.70ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。

出土遺物は、伊万里系小杯（17）、二重網目文碗（18）、仏飯器（19）、京焼系碗（20～22）、産地不明甕（23）、寛永銭（744）である。重複関係は、本遺構の西側を走るＳＤ３を切っている。

ＳＫ21

ＳＫ21は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.80ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.46ｍを測る。長軸方向はＮ－23°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.60ｍである。埋土は、１層で暗灰色粘質土である。

本遺構の付近には、７基の土坑が密集して残存している。すべて近世墓と考えられるが、その中でも、本遺構は、木棺、人骨の残存状況が良好であった。木棺の幅は0.30ｍ、長さ1.50ｍである。人骨は、足を折りまげ、西向きに横臥させている。副葬品として、人骨の頭部付近より伊万里系小碗（24）と、寛永銭（745）が出土した。

ＳＫ22

ＳＫ22は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、ＳＫ21よりやや幅広い長方形を呈する。規模は、長径1.55ｍ、短径0.82ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｅである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.50ｍである。埋土は、１層で暗灰色粘質土である。本遺構も近世墓であり、ＳＫ21と同規模の木棺を埋置してある。棺蓋は、埋没しており残りが悪い。蓋を除去すると、人骨の残存状況は悪く足の骨のみ検出した。寝棺で横臥屈肢葬と考えられる。副葬品と考えられる遺物は、棺蓋の上から小皿１枚（25）が出土した。その他、寛永銭（746、747、751）も出土している。重複関係は、南西側に隣接しているＳＫ23に切られている。

ＳＫ23

ＳＫ23は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は小型の円形を呈する。規模は、直径0.80ｍ、深さ0.20ｍを測る。上部は、かなり削平を受けているものとみられる。壁は、比較的急に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.85ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。

本遺構は、棺及び人骨の出土はみられなかったが、南東に位置するＳＫ25と形態的に類似している点や位置から、座棺の近世墓と考えられる。出土遺物は皆無である。重複関係は、北東に隣接するＳＫ22を切って残存している。

ＳＫ24

ＳＫ24は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.70ｍ、短径0.64ｍ、深さ1.00ｍを測る。長軸方向はＮ－18°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.10ｍを測る。埋土は、１層で暗灰褐色粘質土である。本土坑は、周辺の遺構と比べ非常に深く、１ｍ余りも掘り下げた段階で若干の木片が出土した。これが木棺の残片とも考えられる。しかし、人骨は出土しなかった。

ＳＫ25

ＳＫ25は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ0.52ｍを測る。２段に掘り込まれており、壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.52ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。

本遺構は近世墓であるが、円形の掘り方の中に直径0.50ｍ程の座棺が埋められていた。被葬者は背を北に向け、頭を垂下させ埋葬されており、副葬品は伊万里系碗（26）と煙管（720）である。

ＳＫ26

ＳＫ26は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.90ｍ、深さ８㎝を測り、非常に浅い掘り込みである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、平坦で標高７ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色粘質土である。

本遺構は、円形のプランを持つものであり、形態から近世座棺墓を考えさせる。しかし、付近の土坑よりも浅く、上部が著しく削平されているものとみられる。遺物は、埋土中より近世陶磁器が出土しており、唐津鉢（27）である。

ＳＫ27

ＳＫ27は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.80ｍ、短径0.50ｍ、深さ1.30ｍを測る。長軸方向はＮ－24°－Ｅである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.70ｍを測る。埋土は、１層で暗灰色粘質土である。

本遺構は、ＳＫ21・22・24同様の近世寝棺墓である。長方形の掘り方内に、幅0.30ｍ、長さ1.60ｍの木棺が配置され、棺の蓋を除去すると人骨及び副葬品が出土した。人骨は、頭部を北に向け、西向きに横臥させている。頭部の東側に伊万里系小碗（28）１個体と寛永銭、煙管が副葬されていた。

ＳＫ28

ＳＫ28は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.20ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は、比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＤ４・５を切っている。

ＳＫ29

ＳＫ29は、調査区の北西部で、ＳＫ28の南側に隣接して位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.48ｍ、深さ0.58ｍを測る。壁は、傾斜して立ち上がる。底面は、平坦で標高6.78ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係はＳＤ５を切っている。

ＳＫ30

ＳＫ30は、調査区の北西部でＳＫ29の南側に隣接して位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈するものと考えられる。しかし、南側は調査区外であり全容は明らかではない。規模は、推定直径1.48ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.83ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ31

ＳＫ31は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.00ｍ、深さ0.34ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.85ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土で

ある。本土坑の中央よりやや西側に直径30cmのピットが掘られているが、埋土が濃茶色シルトであり、本土坑に付属するものではないとみられる。遺物は、埋土中より土師質土器等が出土した。細片のため実測不可能である。

ＳＫ32

ＳＫ32は、調査区の北西部で、ＳＫ31の南に隣接して位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.65ｍ、深さ0.35ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、平坦で標高6.84ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。本土坑の中央に、ＳＫ31同様濃茶色シルトの埋土をもつ直径0.30ｍ程のピットが掘り込まれているが、付属するものではないとみられる。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁等が出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ33

ＳＫ33は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の楕円形を呈する。規模は、長径1.90ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.42ｍを測る。長軸方向はＮ－14°－Ｗである。底面は、南部が一段高くなっており、平坦部を形成している。北部底面の標高は6.73ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より近世陶磁器、瓦片等が出土している。29は伊万里皿である。重複関係は、南側に位置するＳＫ34に切られている。

ＳＫ34

ＳＫ34は、調査区の北西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.70ｍ、深さ0.54ｍを測る。壁は、底面から垂直に立ち上がり、上部で若干段部をもち緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.74ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。本土坑も、ＳＫ31・32同様のピットが掘り込まれている。埋土は、濃茶色シルトである。遺物は、埋土中より近世陶器や瓦片が出土した。30は唐津大皿である。重複関係は、北側に位置するＳＫ33を切っている。

ＳＫ36

ＳＫ36は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。北側は、大部分が調査区外である。

平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.00ｍ、短径0.35ｍ、深さ0.25ｍを測る。壁は、西部が比較的急に立ち上がり、東部は段部を有し緩やかに

立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高6.89ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、実測不可能ではあるが、唐津の細片が出土している。

ＳＫ37

ＳＫ37は、調査区北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、直径2.10ｍ、深さ0.18ｍを測る。壁は急に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.90ｍである。埋土は、１層で灰白色シルトである。遺物は、近世陶磁器、砥石、寛永銭（748）、京焼系小碗（35）が埋土中より出土した。重複関係は、西側に位置するＳＤ８、東側に位置するＳＫ38を切っている。

ＳＫ38

ＳＫ38は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.75ｍ、短径1.45ｍ、深さ0.32ｍを測る。長軸方向はＮ－16°－Ｅである。壁は、垂直に近く立ち上がる。底面は、ほぼ水平で標高6.70ｍを測る。埋土は、１層で赤褐色シルトである。遺物は、埋土中より土師質土器片が比較的多く出土したが、細片のため実測不可能である。重複関係は、西側に位置するＳＫ37に切られている。

ＳＫ39

ＳＫ39は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.30ｍ、深さ0.16ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面の状況は、平坦で標高7.20ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。底面直上より２個の自然石が出土した。遺物は、埋土中より土師質土器、備前焼破片が出土しているが、細片のため実測不可能である。

ＳＫ40

ＳＫ40は、調査区北部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.25ｍ、深さ0.70ｍを測る。本遺構の西側は、調査区外である。壁は、東部が段部をもち、南北は急な傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高７ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。埋土中より10～20㎝大の自然石が密集して出土した。遺物は底面直上より近世陶磁器が数点出土した。細片のため実測不可能である。

ＳＫ41

ＳＫ41は、調査区の北西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整方形を呈する。規模は、長径0.95ｍ、短径0.85ｍ、深さ８㎝を測る。上部が削

平されているため非常に浅い。長軸方向はＮ－28°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上るがる。底面は、平坦で標高7.17ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ42

ＳＫ42は、調査区北部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。本遺構の西の一部は調査区外である。

平面形は円形を呈する。規模は、直径0.70ｍ、深さ0.32ｍを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は平坦だが、周囲に断面凹状の浅い溝がまわる。底面の標高は7.04ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は埋土中より土師質土器片が数点出土している。ＳＫ39と同形態を示していることや位置からも、同様な性格を有するものであろう。

ＳＫ43

ＳＫ43は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は東側に位置するＳＫ44に切られているため不明であるが、方形を呈していたと考えられる。規模は、残存している部分で、長径1.95ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.32ｍを測る。長軸方向はＮ－13°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.04ｍを測る。埋土は、１層で赤灰色粘質土である。埋土中より20～30㎝大の自然石が多量に出土した。出土遺物は皆無である。重複関係は、東側に位置するＳＫ44に切られている。

ＳＫ44

ＳＫ44は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は、長径6.05ｍ、短径3.05ｍ、深さ0.64ｍを測る。長軸方向はＮ－80°－Ｗである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、北東端に一段高い平坦部をもち、西端が一段低い。西端の底部標高は6.72ｍを測る。埋土は、１層で黄褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ43を切っている。

ＳＫ45

ＳＫ45は、調査区北部のほぼ中央に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は、長径1.53ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.24ｍを測る。長軸方向はＮ－24°－Ｅである。壁は、比較的緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.10ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、ＳＫ44を切っている。

ＳＫ46

ＳＫ46は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.65ｍ、短径1.08ｍ、深さ0.21ｍを測る。長軸方向はＮ－85°－Ｗである。壁は、比較的緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.95ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色シルトである。遺物は、底面直上より青磁、土師質土器、備前焼等が出土している。重複関係は、東側に隣接するピットを切っている。

ＳＫ47

ＳＫ47は、調査区の北部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は西側が調査区外へ延びているため完形は不明だが、方形を呈すると考えられる。規模は、残存している部分で長径2.20ｍ、短径2.10ｍ、深さ0.24ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.10ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色シルトである。出土遺物は皆無である。

ＳＫ48

ＳＫ48は、調査区の北部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い楕円形を呈する。規模は、長径3.00ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.13ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は、平坦で標高7.35ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物の出土状況は、底面直上及び埋土中より、土師質土器、白磁等が出土した。細片で実測不可能である。

ＳＫ49

ＳＫ49は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径4.10ｍ、短径1.73ｍ、深さ0.41ｍを測る。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。壁は、急傾斜で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、中央部がやや窪むがほぼ平坦である。底面の標高は6.72ｍを測る。北壁の中央部に集中して10～20㎝大の自然石が集中していた。出土遺物は皆無である。

ＳＫ51

ＳＫ51は、調査区北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、直径1.20ｍ、深さ0.19ｍを測る。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.95ｍである。埋土は１層で茶灰色シルトである。遺物は、底面直上及び埋土中より、多量の土師質土器が出土した。重複関係は、南北に縦走するＳＤ９を切っている。

ＳＫ52

ＳＫ52は、調査区の中央西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径4.30ｍ、短形3.65ｍ、深さ1.18ｍを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は、急傾斜で南部のみ段部を形成し、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.40ｍを測る。埋土は、１層で黄褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器杯（37）・鍋（38）、備前焼甕（39、40）、青磁碗（41、42）等多量に出土したが、ＳＤ７と切りあっており、ＳＤ７の遺物が混入しているとも考えられる。石製品は、砥石（705）が出土している。重複関係は、西側に位置し南北に縦走するＳＤ７を切っている。

ＳＫ53

ＳＫ53は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.45ｍ、短径1.05ｍ、深さ９㎝を測る。長軸方向はＮ－84°－Ｗである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高6.97ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ54

ＳＫ54は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.32ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.99ｍを測り、上部は削平されている。長軸方向はＮ－75°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高７ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ55

ＳＫ55は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径2.50ｍ、短径2.30ｍ、深さ0.25ｍを測る。長軸方向はＮ－８°－Ｅである。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.88ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中から青磁、備前、土師質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ56

ＳＫ56は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.83ｍ、短径1.24ｍ、深さ0.52ｍを測る。長軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、ほぼ水平で標高6.54ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色シルトである。遺物は、埋土中から土師質土器、青磁片が出土している。重複関係は、南北に縦走するＳＤ９とピットを切っている。

ＳＫ57

ＳＫ57は、調査区の北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い方形を呈する。規模は、長径3.18ｍ、短径0.57ｍ、深さ0.29ｍを測る。長軸方向はＮ－56°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、西部分がやや深めになっている。標高は、西端部が6.88ｍ、東端部が6.98ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。西半部埋土中より、10～20㎝大の自然石が多量に出土した。出土遺物は皆無である。

ＳＫ58

ＳＫ58は、調査区北東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.45ｍ、短径1.28ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。壁は、東西が緩やかに立ち上がり、東部は平坦部をもつ。南北は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部がやや深い。標高は、西部が6.90ｍ、東部が6.72ｍ、平坦部で6.95ｍを測る。遺物は、埋土中より近世陶磁器が出土している。伊万里碗（43）で見込に荒磯文が施されている。伊万里の半磁器系碗（44）である。石製品は、叩石（701）が出土しているが、これは混入したものである。重複関係は、南北に縦走するＳＤ９・10を切っている。

ＳＫ60

ＳＫ60は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。西半部は調査区外である。

平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は、残存している部分で長径1.45ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.60ｍを測る。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、底面は、北部がやや落ち込んでいる。標高は、北部で6.63ｍ、南部で6.75ｍを測る。埋土は、１層で黄褐色粘質土である。遺物は、底面直上より墨壺が出土し、埋土中より伊万里、唐津破片が出土した。土師質土器杯（46）、伊万里系小杯（47）、碗（48）、火消し壺（50）である。48は、見込に手描きの五弁花が施されている。木製品は、板材（724）、曲物の底板（743）が出土している。

ＳＫ61

ＳＫ61は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い溝状を呈する。規模は、長径3.40ｍ、短径0.43ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面の標高は6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より瓦、備前、土師質土器等が出土している。

ＳＫ62

ＳＫ62は、調査区の中央西寄りに位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.20ｍ、短径0.65ｍ、深さ0.41ｍを測る。長軸方向はＮ－13°－Ｅである。壁は、垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.76ｍを測る。埋土は、１層で黄褐色粘質土である。遺物は、底面直上より木棺の破片と鉄釘、寛永銭（749、750）が出土した。出土遺物から、近世墓と考えられる。

ＳＫ63

ＳＫ63は、調査区の中央西寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は、直径0.62ｍ、深さ0.15ｍを測る。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高７ｍを測る。埋土は、１層で黄茶褐色粘質土である。

人骨が出土しており、部位は足と頭蓋骨である。頭蓋骨は、腐って落ちこんだものと考えられる。平面形が円形を呈すると考えられることや、頭蓋骨の出土状況からして、本遺構は、座棺を埋葬した近世墓と考えられる。重複関係は、南側に位置するＳＫ64に切られている。ＳＫ64は現代の撹乱である。

ＳＫ65

ＳＫ65は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径1.50ｍ、短径0.73ｍ、深さ0.68ｍを測る。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。底面は、平坦で標高6.23ｍを測る。埋土は、１層で黄褐色粘質土である。

本遺構は近世墓であるが、木棺の残存状況が悪く木片はほとんど出土しなかった。しかし、所々に鉄釘が残り、棺の規模を推定できた。それによると、棺は、長さ1.25ｍ、幅0.30ｍを測り、横臥屈肢葬で、他と比較すると小型である。また堀り方の主軸に比し、棺の軸は若干西へ振っている。西側に位置するＳＫ60・62と一連の墓ではないかと考えられる。遺物は、埋土中より寛永銭と歯が出土した。重複関係は、南に位置するＳＫ66を切っている。

ＳＫ66

ＳＫ66は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い溝状を呈する。規模は、長径5.20ｍ、短径0.50ｍ、深さ0.11ｍを測る。長軸方向はＮ－70°－Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.82ｍを測る。本遺構の西側は、削平が著しい。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、備前焼等が出土している。細片のため実測不可能である。重複関係は、北側に位置するＳＫ65に切られている。

ＳＫ67

ＳＫ67は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い不整形の溝状を呈する。規模は、長径7.50ｍ、短径1.60ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、西部と北部に傾斜して立ち上がる。底面の標高は、西部で7.15ｍ、東部で6.78ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁等が出土しているが細片のため実測不可能である。重複関係は、周囲に散在しているピット群に切られている。

ＳＫ68

ＳＫ68は、調査区の中央部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.90ｍ、深さ0.82ｍを測る。壁は、西壁が垂直に近く、その他も急傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西部のみやや傾斜して立ち上がる。底面の標高は6.35ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より扁平な砥石や近世陶磁器が出土した。51は、外面に草花文が染め付けられている伊万里系碗である。

ＳＫ69

ＳＫ69は、調査区の中央部やや東寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は円形を呈する。規模は、直径1.20ｍ、深さ0.19ｍを測る。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.75ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが細片で実測不可能である。

ＳＫ70

ＳＫ70は、調査区の中央部西端に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.18ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.35ｍを測る。長軸方向はＮ－70°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、東部にやや傾斜して立ち上がり、標高は、西部で6.80ｍ、東部で6.90ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色シルトである。遺物は、埋土中より近世の備前片が出土しているが、細片で実測不可能である。

ＳＫ71

ＳＫ71は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の方形を呈する。規模は、長径2.28ｍ、短径1.50ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－82°－Ｗである。壁は、西部は緩やかに、東部は垂直に立ち上がる。底面は、中央部が一番深く、東西に一段高い平坦部を有する。標高は、中央部で6.73ｍ、西端で6.75ｍ、東端で6.87ｍをる。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より、備前、須恵器、

弥生、近世陶磁器片が雑多に出土した。また、上面に15～25cm前後の自然石が投棄されていた。近世陶磁器類が多く、他の遺物は混入したものと考えられる。

ＳＫ72

ＳＫ72は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.80ｍ、短径0.70ｍ、深さ0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁は比較的急に立ち上がる。底面は、平坦で標高7.01ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片や寛永銭が出土した。

ＳＫ73

ＳＫ73は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.00ｍ、短径2.30ｍ、深さ0.30ｍを測る。長軸方向はＮ－65°－Ｗである。壁は、西部が二段の平坦部を有し、その他の壁も緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。底面の標高は6.92ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色シルトである。

遺物は、埋土中より近世陶磁器、土師質土器片、寛永銭が出土した。近世陶磁器は、伊万里系（52）、京焼系（54）、唐津（53）である。いずれも18世紀頃生産されたものと考えられる。また、上面には20～30cm大の自然石が密集して投棄されている。重複関係は、北に位置するＳＫ71、東側に位置するＳＫ75を切っている。いずれも近世の時期での切合い関係である。

ＳＫ74

ＳＫ74は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。本遺構の西側は調査区外である。

平面形は、調査区外へ延びるため明確でないが、細長い楕円形を呈するものと考えられる。規模は、残存部分で、長径3.42ｍ、短径0.93ｍ、深さ0.64ｍを測る。長軸方向はＮ－28°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、南が一段深くなっている。標高は、南部で6.88ｍ、北部で7.05ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色シルトである。遺物は、土師質土器片、近世陶磁器が出土したが、細片で実測不可能である。また、北半部に20～30cm大の集石がみられる。

ＳＫ75

ＳＫ75は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈する。規模は、長径6.00ｍ、短径3.88ｍ、深さ0.92ｍを測る。長軸方向はＮ－77°－Ｗである。壁は西部を除いて垂直に立ち上がる。底面は、北半部で凹凸が激しく、南半部は平坦である。標高は、南端部で6.61ｍを測り、北部はやや高くなっている。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。

遺物は、埋土中より備前、青磁、白磁、瓦質土器、土師質土器、瓦片等が出土している。実測可能なものは、土師質土器小皿（55）・鍋（56、57）、土錘（59）、備前焼大甕（58、60）、常滑甕（61）である。本遺構の南半部は、20～30㎝大の河原石が密集しており、北半部は、粘土と若干の小礫が見られるのみであった。重複関係は、西側に位置するＳＫ73に切られている。

ＳＫ76

ＳＫ76は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長径2.77ｍ、短径0.88ｍ、深さ0.27ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は、東壁が垂直に、西壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.41ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より唐津、土師質土器が出土している。細片のため実測不可能である。

ＳＫ77

ＳＫ77は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径5.58ｍ、短径4.95ｍ、深さ1.00ｍを測る。長軸方向はＮ－79°－Ｗである。壁は垂直に近く立ち上がる。底面は、西部に一段高い平坦部を有す。東部は平坦である。底面の標高は、東部で6.19ｍ、西部で5.84ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。

遺物は、埋土中より近世陶磁器や中世の陶磁器が出土している。その中でも、伊万里や唐津片が比較的多い。実測可能なものは62～70までで、中には鎬蓮弁文碗（64）や、備前焼甕（62）等が出土しているが、これら中世の遺物は混入したものと考えられる。また、北側の埋土中には20～30㎝大の河原石が多量に流れ込んでいる。

ＳＫ78

ＳＫ78は、調査区のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径3.75ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.11ｍを測り、非常に浅い土坑である。長軸方向はＮ－74°－Ｗである。壁は垂直に立ち上がる。底面は、平坦で標高6.80ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に走るＳＤ９・10を切っている。

ＳＫ80

ＳＫ80は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は、不整形の細長い溝状を呈する。平面形を確認した段階では、ＳＤとして考えていたが、南北の壁を確認したのでＳＫとして取扱った。規模は、長径6.10ｍ、短径0.20ｍ、深さ

0.20ｍを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面の状況は、北部がやや深い。標高は、北部で7.10ｍ、南部で7.20ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、南部の底面直上より土師質土器杯（72）・皿（71）の完形品が出土した。重複関係は、南側でＳＫ81と接合しているが、上面での切合い関係は確認できなかった。

ＳＫ81

ＳＫ81は、調査区中央部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は大型の方形を呈するものと考えられる。本遺構の西側は調査区外である。規模は、残存部分で長径6.10ｍ、短径2.30ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－15°－Ｅである。壁は、南部は緩やかに、北部は急に立ち上がる。底面は、中央部が深く、南北に二段平坦部を形成している。標高は、中央部で6.55ｍ、北部で6.63ｍ、南部で6.95ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色シルトである。埋土上面で、若干の石積が検出された。これらの石積は、北部、中央部、南部と３ブロックに区分でき、南部と中央部は明瞭に円形を意識して積み上げられていた。北部は、調査区外へ延びるため明確でない。河原石は、20～30㎝大のものが多い。遺物は、埋土中より土師質土器片、瓦、近世陶磁器が出土している。実測可能なものは、唐津焼皿（74）、伊万里系小碗（73）である。いずれも18世紀頃生産されたものである。石製品は、砥石（704、713）、石臼（715）、凹石（718）が出土している。

ＳＫ82

ＳＫ82は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西半部をＳＫ81に切られており明確でないが、楕円形を呈していたと考えられる。規模は、残存部分で長径1.30ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－60°－Ｗをとると考えられる。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.11ｍを測る。埋土は、１層で黄茶色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器片が出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、西側に位置するＳＫ81に切られている。出土遺物から本遺構は中世に属するものと考えられる。

ＳＫ83

ＳＫ83は、調査区中央部南寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.50ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.23ｍを測る。長軸方向はＮ－72°－Ｗである。壁は、南部が緩やかに、その他は垂直に近く立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は、平坦で標高6.74ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南北に走るＳＤ９を切っている。

ＳＫ85

ＳＫ85は、調査区南部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.30ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.27ｍを測る。長軸方向はＮ－33°－Ｅである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東部がやや高くなっている。標高は、西部で6.68ｍ、東部で6.82ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器が出土したが、細片のため実測不可能である。また、上層に10～20㎝大の河原石が投棄されている。重複関係は、ＳＤ９と南側に位置しているＳＫ86を切っている。

ＳＫ86

ＳＫ86は、調査区南部ほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径3.60ｍ、短径1.80ｍ、深さ0.20ｍを測る。長軸方向はＮ－33°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.84ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より青磁、染付、土師質土器片が出土したが、細片で実測不可能である。埋土中に、10～20㎝大の河原石が積み上げられた状態で密集していた。重複関係は、北側に位置するＳＫ85に切られている。

ＳＫ87

ＳＫ87は、調査区中央部のやや南寄りに位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整形を呈する。規模は、長径2.30ｍ、短径1.90ｍ、深さ0.50ｍを測る。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。壁は、西部が二段の平坦部を有し、南・東壁は、一段平坦部を有し緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高は6.35ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、埋土中より土師質土器、青磁稜花皿の破片が出土したが、細片で実測不可能である。

ＳＫ88

ＳＫ88は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ・Ⅲ層を除去した段階で検出した。

平面形は、西側が調査区外で明確でないが、円形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で直径3.95ｍ、深さ0.83ｍを測る。壁は、北・南部が一段の平坦部をもち、緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.70ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色シルトである。遺物は、埋土中より青磁、備前、瓦質土器、土師質土器が出土しているが、細片で実測不可能である。また、埋土の上層に、20～30㎝大の河原石が多量に投棄されている。

ＳＫ89

ＳＫ89は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径0.90m、短径0.48m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN－70°－Wである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、平坦で標高6.76mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK90

SK90は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は細長い楕円形を呈する。規模は、長径1.70m、短径0.43m、深さ5cmと非常に浅い土坑である。長軸方向はN－30°－Eである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.89mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。重複関係は、南側に位置するピットに切られている。

SK91

SK91は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形はやや不整だが円形を呈する。規模は、直径0.90m、深さ6cmで非常に浅い土坑である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高6.83mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK92

SK92は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は不整の方形を呈する。規模は、長径0.80m、短径0.73m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN－72°－Wである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、西部に一段平坦部を有し、水平である。標高は、西部で6.84m、東部で6.76mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK93

SK93は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は方形を呈する。規模は、長径1.15m、短径0.77m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN－30°－Eである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、南部が深く掘り込まれているが平坦である。標高は、南部で6.82m、北部で6.96mを測る。埋土は、1層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SK94

SK94は、調査区南部のほぼ中央に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、中央がやや窪み、瓢箪形を呈する。規模は、長径0.95m、短径0.65m、深さ0.41m

を測る。長軸方向はＮ－24°－Ｅである。壁は、垂直に立ち上がる。底面は、平坦で北部が一段深く掘り込まれており、標高6.50ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ95

ＳＫ95は、調査区の南東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径1.05ｍ、短径0.67ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－20°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.14ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ96

ＳＫ96は、調査区の南東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

ＳＤ13に切られており、平面形は、明確ではないが円形を呈すると考えられる。規模は、直径2.10ｍ、深さ0.55ｍを測る。壁は、緩やかに立ち上がるが、東壁のみは比較的急である。底面は、平坦でなく凹凸がある。底面の最深部標高は6.56ｍである。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。

遺物の出土状況は、埋土を若干掘り下げると、重なりあって多量に土師質土器が出土した。上層で若干炭化物も検出したが、下層ではみられない。多量に出土した土師質土器（75～185）は、一括して廃棄されており、良好な資料である。中には完形品が多く、器種は小皿、皿、小杯、杯で、皿類は褐色系と白色系のものが見られ、ロクロは使用されていない。杯類は、すべて褐色系で、ロクロ成形、底部回転糸切り調整が施されている。その他に、若干の備前焼と青磁碗１点が出土しており、その中で実測可能な青磁碗（186）は細蓮弁文が施されている。重複関係は、南北に縦走するＳＤ13に、東壁の一部を切られている。

ＳＫ97

ＳＫ97は、調査区の南西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径3.30ｍ、短径1.30ｍ、深さ0.40ｍを測る。長軸方向はＮ－75°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は、東西両端が一段高い平坦部を有しており、ほぼ水平な面をもつ。標高は6.72ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。本遺構は、検出面ですでに若干の河原石を確認しており、これを掘り下げると、長方形の土坑に20～30㎝大の河原石が充満した状況で出土した。遺物は、埋土中より近世の瓦片や備前焼擂鉢が出土した。土師質土器杯（187）、伊万里碗（188）、京焼系碗（189）と考えられる。重複関係は、北東に位置するピットに切られている。

ＳＫ98

ＳＫ98は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は、長径1.15ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.15ｍを測る。長軸方向はＮ－31°－Ｅである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で標高7.00ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ99

ＳＫ99は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径4.40ｍ、短径1.40ｍ、深さ1.40ｍを測る。長軸方向はＮ－70°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.06ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、近世陶磁器が出土しており、190は瀬戸・美濃系の陶胎上絵技法をもつ碗である。

ＳＫ100

ＳＫ100は、調査区の南西部に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

平面形は長方形を呈する。規模は、長径3.35ｍ、短径1.35ｍ、深さ0.10ｍを測る。長軸方向はＮ－65°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、平坦で標高7.12ｍを測る。埋土は、１層で灰茶色粘質土である。遺物は、埋土中より備前焼、土師質土器や伊万里、唐津などの近世陶磁器が出土している。細片のため実測不可能である。

ＳＫ101

ＳＫ101は、調査区南部の西端に位置する。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

西側が調査区外へ延びているため、平面形は明確でないが、方形を呈するものと考えられる。規模は、検出した範囲で南北1.60ｍ、東西1.30ｍ、深さ0.30ｍを測る。壁は垂直に立ち上がる。底面は、南西部が一段高く平坦部を形成している。標高は、北部で6.98ｍ、南部で7.18ｍを測る。埋土は、１層で赤茶色粘質土である。出土遺物は皆無であるが、埋土上層の東南隅に集石が投棄されている。重複関係は、北側に位置するＳＤ９を切っている。

ＳＫ102

ＳＫ102は、調査区の南東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は楕円形を呈する。規模は、長径2.00ｍ、短径1.70ｍ、深さ0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－８°－Ｗである。壁は急傾斜で立ち上がる。底面は北西部が一段高い平坦部を有するが、ほぼ水平である。標高は、中央部で6.78ｍ、北西部で7.10ｍを測る。埋土は、１層で灰褐色粘質土である。遺物は、土師質土器、近世陶磁器が出土しているが、細片で実測不可能である。

その他の土坑（ＳＫ６・７・35・50・59・64・79・84・103）

ここでは、現代の撹乱である土坑あるいは、他の遺構に切られて遺存状況の悪い土坑の説明を一括して行うことにする。ＳＫ６・７は、北部に位置しており、ＳＫ８を切っている現代の撹乱である。壁は、垂直に立ち上がり、その内側に白赤色のハンダを敷いた状態で、現代の瓦等が投棄されていた。ＳＫ35は、ＳＤ６の南側に位置するが、幅５ｍの溝状を呈する。掘り方は浅く15㎝内外で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。調査区外に延びるため、東西の規模は不明である。埋土中より近世陶磁器類が出土した。ＳＫ35の北肩は、吉本氏所有（居住）の家屋のコンクリート工事を受けている。ＳＫ50は、中央部北東寄りに位置する。ＳＤ９を切っている。本遺構の東半分は、発掘区外へ延びており、未調査である。埋土を掘り下げると、河原石が円形状に積み上げられていた。井戸の可能性もあるが、完掘していないため不明である。ＳＫ59は、調査区中央の西部に位置する。ＳＤ７・12に切られており、西と南の壁は残存していない。切り合いが激しく全形は不明だが、大型の円形を呈するものとみられる。ＳＫ64は電柱坑であり、現代の撹乱である。ＳＫ79は、調査区南西部に位置する。小型の方形を呈するが、上部は著しく削平されており浅い。出土遺物は皆無である。ＳＫ84は、調査区南部に位置する。平面形は方形を呈するが、ＳＫ79同様、上部は削平されており浅い土坑である。出土遺物は皆無である。ＳＫ103は、調査区南東端に位置する。ＳＤ14に切られて残存する。平面形は、明確ではないが方形を呈するものとみられる。底面はＳＤ14よりも浅く、壁、底面共に礫である。出土遺物は皆無である。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、調査区の北西隅に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

本遺構の西側は調査区外で、肩の一部のみ調査した。調査区外は水田となっており、この水田の畦がＳＤ１と対になるカーブを描いている。この畦は、明らかに堀を踏襲していたかのように観察できる。推論ではあるが、この田の畦がＳＤ１の西壁であるとすれば、規模は、幅約８ｍを測り、本調査区南端で検出した田村城館の外堀と同規模になる。以上の点及びその位置から、ＳＤ１は、内堀の東南隅にあたる可能性がある。規模は推定幅約８ｍ、方向は北から緩やかにカーブを描き西側に屈折する。壁は、コーナー部で緩やかに立ち上がり、北部及び西部に延びる地点では急傾斜で立ち上がる。埋土は、３層に区分でき、第Ⅰ層は暗灰色粘質土、第Ⅱ層は赤褐色小礫、第Ⅲ層は暗青色粘質土である。出土遺物は、埋土上層より近世陶磁器、輸入陶磁器類が出土した。溝に伴う時期と考えられるれる遺物は少ない。青磁碗（193）、染付皿（194）が出土している。重複関係は、東西に走るＳＤ２・３を切っている。

ＳＤ２

ＳＤ２は、調査区北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、幅３～４ｍ、深さ0.60～0.80ｍ、長さ21.50ｍを測る。断面形は、Ｕ字形を呈する。本遺構の南東隅は、近代の撹乱をうけている。基底面の標高は6.44～6.66ｍを測る。埋土は、２層に区分でき、第Ⅰ層は褐灰色粘質土、第Ⅱ層は暗灰色土である。出土遺物は、土師質土器皿（200～286）・小杯（287～290）・杯（291～322）・鍋（323～331）・釜（332）、瓦質土器擂鉢（333）・鍋（334～344）・羽釜（345、346）及び備前焼擂鉢（347～354）・壺（355）・甕（356～358）、瀬戸小壺（359）等であり、土錘（380～401）も出土している。また、青磁碗（360～376）・盤（377）及び、白磁（378、379）も出土している。石製品では、石鍋（702）、凹石（717）が出土している。重複関係は、ＳＫ18・19、ＳＤ１に切られている。

ＳＤ３

ＳＤ３は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.50～2.00ｍ、深さ0.50ｍ、長さ11ｍで、北東から緩やかにカーブを描き西側へ延びる。底面の標高は6.40～6.56ｍを測る。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は、３層で第Ⅰ層は茶灰色粘質土、第Ⅱ層は黄白色粘質土、第Ⅲ層は灰白色土である。

出土遺物は、埋土中より土師質土器皿（409、410）・杯（411）・小皿（408）があり、410の皿は、完形に近い形で底面直上より出土した。備前の擂鉢で（412）は、Ⅲ期の特徴をもっている。

重複関係は、ＳＤ４、ＳＤ１に切られている。また、ＳＫ20にも切られていたものとみられるが、上面の切り合いにあたる部分が県道側壁による撹乱をうけており、平面形確認の段階では不明であった。しかし、出土遺物から見るとＳＫ20が新しいものである。ＳＤ２との切り合いについても、同様な理由で明確にできなかった。

ＳＤ４

ＳＤ４は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅1.60～2.70ｍ、深さ0.80～0.90ｍ、長さ10.50ｍで、北東から緩やかにカーブして西側に延びる。底面の標高は、北東部が5.76ｍ、西部が6.12ｍを測り、北東部に向けて低くなっている。しかし、溝は北東端で切れている。断面形は、逆台形状を呈する。埋土は、５層に区別でき、第Ⅰ層は黄茶色粘質土、第Ⅱ層は灰褐色シルト、第Ⅲ層は黄褐色シルト、第Ⅳ層は黄色シルト、第Ⅴ層は暗青色粘質土である。

出土遺物は埋土中より土師質土器、備前焼、青磁が出土している。青磁は、稜花皿（415）・内外面無文碗（416）等が出土している。また、本遺構の西端部では、埋土上層に20～30㎝の河原石を配列したかのように並べて投棄していた。重複関係は、ＳＤ３を切っている。ＳＤ５

については、重複している部分が市道の側壁や電柱の撹乱をうけており、全容は明確にできなかった。

ＳＤ５

ＳＤ５は、調査区の北西端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、幅1.00ｍ、深さ0.85ｍ、長さ5.30ｍを測り、断面形は、箱形を呈する。底面の標高は6.20～6.30ｍで北部が深くなっている。埋土は、１層で灰黄褐色粘質土であり、他の溝とはやや様相を異にしている。遺物は、土師質土器、瓦質土器、青磁が若干出土しているが、細片で実測不可能である。重複関係は、ＳＫ28・29・32に切られている。ＳＤ４との関係は不明である。本遺構の南側は調査区外になっているが、その南端の断面形を観察すると、南に位置する調査区で南北に走るＳＤ７の断面形と類似しており、位置的な面からも一連の溝の可能性もある。

ＳＤ６

ＳＤ６は、調査区北部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.40～0.90ｍ、深さ0.20ｍ、長さ18.50ｍを測る。東西に走る溝であるが、西端部で南に屈曲して方向を変えている。断面形は、緩いＵ字形を呈する。底面の標高は6.87～6.95ｍを測る。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は認められない。

ＳＤ７

ＳＤ７は、調査区中央西部に位置する。第Ⅲ層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、幅1.40～2.30ｍ、深さ1.30ｍ、長さ30ｍを測る。断面形は、逆台形状を呈する。底面の標高は6.01～6.20ｍを測る。埋土は、北端部で３層に、南端部で６層に区分できた。北端部は、第Ⅰ層茶灰色粘質土、第Ⅱ層灰褐色粘質土、第Ⅲ層暗灰色粘質土である。南端部では、第Ⅰ層灰褐色粘質土、第Ⅱ層黄茶色粘質土、第Ⅲ層黄灰色粘質土、第Ⅳ層茶黒褐色粘質土、第Ⅴ層茶灰色粘質土、第Ⅵ層暗灰色粘質土である。

遺物は、埋土中より多量に出土した。土師質土器皿（417～421）・小杯（422～477）・杯（478～606）・鍋（607～612）である。国内産の陶器は、備前焼擂鉢（613～619）・甕（620）、瀬戸・美濃系天目茶碗（630）である。土師質土器の杯類が非常に多いのが特徴である。輸入陶磁器は、青磁稜花皿（621）・碗（622～627）である。また、白磁皿（628、629）が出土している。さらに、石硯（703）、砥石（706～708、710）、茶臼（714）、煙管（720）が出土している。重複関係は、南端部でＳＫ52、ＳＤ12に切られている。また、周辺部に散在しているピット群にも切られている。

ＳＤ８

ＳＤ８は、調査区北東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、幅0.20～0.30ｍ、深さ0.10～0.20ｍ．長さ3.90ｍを測る。非常に浅く短い溝で、断面形は、緩いＵ字形を呈する。底面の標高は7.03～7.06ｍを測る。埋土は、１層で茶灰色シルトである。出土遺物は皆無である。重複関係は、東側に位置するＳＫ37に切られている。

ＳＤ９

ＳＤ９は、調査区北東端から縦走して南西端まで延びている。第Ⅱ層を除去した段階で検出した。

規模は、幅0.40～1.20ｍ、深さ0.10～0.40ｍ、長さ約80ｍを測る。調査区を斜めに小さなカーブをもちながら縦走する溝で、南西端部で西に屈曲する。断面形は、北部でＵ字形、南部で緩いＶ字形を呈する。底面の標高は6.75～7.06ｍを測り、北に行く程幅が広くなり、検出面からの深度も深くなる。埋土は、１層で茶褐色粘質土である。出土遺物は備前焼擂鉢（636）、青磁稜花皿（637）・碗（638）、京焼系碗（640）および土師質土錘（639）等であり、砥石も２点（709、711）出土している。重複関係は、北からＳＫ50・51・56・58、ＳＥ１、ＳＤ10、ＳＫ78・83・85・98・101に切られている。

ＳＤ10

ＳＤ10は、調査区中央の東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

調査区中央部の北東隅からＳＤ９の東側に沿って縦走する溝で、幅0.40～0.70ｍ、深さ0.20～0.60ｍ、長さ30ｍを測る。南端は緩やかに立ち上がり、ＳＫ77の南側で終っている。断面形は、緩いＵ字形を呈する。底面の標高は6.82～6.87ｍを測る。埋土は、茶灰色粘質土で１層のみである。遺物は弥生土器が若干出土したが、実測不可能である。重複関係は、北よりＳＫ58、ＳＥ１、ＳＫ78、ピット群に切られている。また、西側に隣接するＳＤ９を切っている。

ＳＤ11

ＳＤ11は、調査区中央の西部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面プランからすると、細長い土坑にも分類できるが、断面形、幅等からみて溝として取扱うことにする。南北に走る溝で、幅0.40～0.50ｍ、深さ0.30～0.50ｍ、長さ1.50ｍを測る。断面形は、Ｕ字形を呈する。底面の標高は7.15～7.22ｍである。埋土は、１層で黄灰色粘質土である。遺物は、土師質土器が若干出土したが、細片で実測不可能である。重複関係は、北側に位置するＳＫ52に切られている。ＳＤ12との関係は不明である。

ＳＤ12

ＳＤ12は、現代まで使用されている用水路である。用水路の水流による還元粘土を除去すると、底面よりＳＤ７の南端やＳＥ１の石組みを検出した。調査区の中央部に位置し、東西に走る用水路である。規模は、幅0.80～2.50ｍ、深さ0.60～0.70ｍ、長さ22.80ｍを測る。遺物は、716の石臼が投棄されていた。

ＳＤ13

ＳＤ13は、調査区東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝であるが、東側が調査区外のため全体の規模は不明である。検出した部分で、幅2.00～3.40ｍ、深さ0.60～1.10ｍ、長さ38ｍを測る。底面の標高は5.89～6.40ｍである。埋土は、５層に区別でき、第Ⅰ層は灰褐色シルト、第Ⅱ層は黄灰茶色シルト、第Ⅲ層は暗灰色粘質土（多量の礫を含む）、第Ⅳ層は暗灰色粘質土、第Ⅴ層は茶褐色シルトである。

遺物は、比較的多量に出土しており、土師質土器皿（641～643）・杯（644～646）・鍋（647、648）・釜（649）等及び瓦質土器擂鉢（650）・鍋（651～653）等があり、また、備前焼擂鉢（654～659）、常滑焼甕（660、661）、瀬戸・美濃系天目茶碗（662）も出土している。輸入陶磁器では、青磁碗（663～666）と、染付碗（667、668）・皿（669）があり、他に土錘（670、671）や、近世陶磁器類（672～678）の出土もみた。石製品では砥石（712）が存在する。重複関係は、北部の西をＳＸ１に切られており、南部の西でＳＫ96を切っている。

ＳＤ14

ＳＤ14は、調査区の南東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

南北に走る溝で、北端が調査区外へ延びている。南端は、ＳＫ103の位置する所で終結している。幅0.80～1.00ｍ、深さ0.60ｍ、長さ11.00ｍを測る。断面形は、Ｕ字形を呈する。底面の標高は6.10～6.16ｍである。埋土は、１層で褐色粘質土である。出土遺物は、土師質土器皿（679～684）・杯（685）・鍋（686）と、青磁稜花皿（687）、土錘（688）である。重複関係は、南端東側に位置するＳＫ103を切っている。

ＳＤ15

ＳＤ15は、調査区の南端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

東西に走る溝で、調査区外に延びており、基盤である礫層を１ｍ以上も掘削している。規模は、幅5.50～6.80ｍ、深さ1.20～1.30ｍを測る。本遺構は、位置、規模から田村城館の外堀と考えられる。東側は、未調査で不明だが、西側はLoc.43のＳＤ７に連結するものと考えられる。遺物は、土師質土器杯（689）・釜（690）、青磁皿（691）・碗（692）、近代陶磁器（693、694）が出土しており、木製品では、棒状木製品（722、731、732）、板材木製品（735）、及び性格不

明木製品（725、729、730、733、734）が出土している。

井戸

ＳＥ１

ＳＥ１は、調査区中央の東部に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で、掘り方のプランと北側の石組を検出した。しかし、中央部は、現代まで使用されていた溝ＳＤ12に切られており、上部は破壊されていた。ＳＤ12の埋土をすべて除去した段階で、環状に並ぶ井戸の石組を確認した。石組は直径30～40㎝前後の河原石を利用しており、上端の内径は1.30ｍを測り、その掘り方は直径3.50ｍの不整円形を呈する。石組は、下層に向かうにしたがって内径を漸減させ、下端部で直径1.10ｍとなる。さらに、その下に木製の桶状井筒が設置され、周囲には河原石が敷きつめられていた。井戸の深さは、検出面より井筒の下端部まで3.20ｍを測る。埋土は、上層で灰褐色粘質土、下層に向かうにしたがって黒灰色粘質土になり粘性を帯びてくる。井筒の上端部で湧水が著しい。掘り方は、黄灰褐色土で小礫を含有している。桶状の井筒は、幅7.50㎝、長さ45㎝の板を円形に組み合わせ、竹紐の箍で固定している。出土遺物は、瓦質土器鍋（697）、青磁碗（698）で、木製品は、棒状木製品（723）、板材木製品（727、728）、曲物底板（726、737、739～742）、性格不明木製品（736、738）である。重複関係は、東西に走るＳＤ12に切られ、南北に走るＳＤ９・10を切っている。

性格不明遺構

ＳＸ１

ＳＸ１は、調査区中央部東端に位置する。第Ⅰ層を除去した段階で検出した。

平面形は、楕円形を呈する。規模は、長径1.20ｍ、短径0.80ｍを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋土は、１層で灰色粘質土である。埋土中には、10～20㎝大の礫が円形状に投棄されていた。遺物は、近世陶磁器類が出土したが、実測可能なものは碗（699）のみである。

ピット

Ｐ１

ピット群は、調査区北東端部と中央部東寄り、北西端部に比較的集中して存在する。すべて掘立柱建物址が存在する部分に集中している。平面形はすべて円形である。規模は、直径20～40㎝、深さ30～40㎝程度のものが多い。

Ｐ１は、調査区の中央から、北東寄りに位置し、平面形は直径25cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。埋土中より、青磁盤（700）を出土している。

５．まとめ

Loc.42における検出遺構は、掘立柱建物址11棟、土坑103基、溝14条、井戸１基、性格不明遺構１基、ピット群である。本調査区は、田村城館内に位置することから、調査の成果が期待された。城館に伴うと考えられる。遺構は、調査区の南端で検出したＳＤ15と、北端で検出したＳＤ１である。ＳＤ15は城館の南側外堀で、ＳＤ１は内堀である。しかし、内堀に関しては、調査を行った範囲が狭く全貌を明確にすることができず、現段階では一応その可能性があるということにしておきたい。掘立柱建物址は、出土遺物が細片で数少なく、時期を明確にすることができない。中世の土坑は、性格不明のものが多い。しかし、その中でＳＫ96などは、良好な一括資料を得ることができるものであった。ＳＫ96は、土師質土器が多量に投棄された土坑で、杯、小杯、皿、小皿等の器種があり、共伴した186の青磁碗も出土していることから、年代を15世紀後半～16世紀前半におさえることができる。ＳＫ96出土の遺物については、中世の考察の項で、詳しく述べることとする。ＳＤ２・７からも多量の遺物が出土している。ＳＤ２は土師質土器皿類を主として、ＳＤ７は土師質土器杯を主として出土する。Loc.42から出土した遺物は、全体的に近世を除けば15世紀後半～16世紀前半にかけてのものが主流である。調査は、田村城館の一部について実施したのみで、城館の全体的な様相を明確にすることはできなかった。しかし、文献上で推察されていた城館の外堀等を確認できたことは大きな成果といえよう。

近世の遺構として把握できるものは、ＳＫ1・21～27に代表される近世墓である。平面形は、長方形と円形を呈するものである。長方形のものは寝棺で、円形のものは座棺である。出土遺物は、副葬品として18世紀に生産された伊万里系猪口や碗がある。さらにＳＫ21などでは、人骨の残存状況が良好で、西向きに横臥させ、足を折りまげた屈肢葬の方法で埋葬していたことを確認することができた。その他、近世土坑群中のＳＫ58などからは、43の伊万里焼の見込荒磯文碗が出土しており、17世紀後半代と考えられる遺構も存在している。近世の遺構は、土坑が多く存在し、墓以外は性格不明である。しかし、遺物は、伊万里焼、唐津焼、京焼系の陶器等が土坑から共伴して出土しており、良好な資料を得ることができた。

第11表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (㎡)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第 85 図	S B 1	1 × 2	3.20 × 4.75	1.95 ～ 3.20	N－17°－E	15.2	
〃	S B 2	————	————	1.75 ～ 3.45	N－75°－W	——	
第 86 図	S B 3	1 × 4	3.45 × 6.55	1.40 ～ 3.45	N－72°－W	22.6	
第 85 図	S B 4	2 × 2	2.95 × 4.30	1.45 ～ 2.20	N－20°－E	——	
第 86 図	S B 5	2 × 2	3.80 × 7.31	1.80 ～ 3.75	N－76°－W	27.2	
第 87 図	S B 6	2 × 3	3.40 × 5.45	1.55 ～ 1.85	N－19°－E	——	
第 88 図	S B 7	2 × 3	3.45 × 5.00	1.35 ～ 1.90	N－14°－W	17.3	
第 87 図	S B 8	2 × 3	3.80 × 6.80	1.80 ～ 2.35	N－17°－E	25.8	
第 88 図	S B 9	3 × 4	————	0.80 ～ 1.85	N－14°－E	——	
第 89 図	S B 10	1 × 4	3.65 × 5.60	1.60 ～ 3.65	N－76°－W	20.4	
〃	S B 11	1 × 1	3.10 × 4.20	3.05 ～ 4.20	N－74°－W	13.0	

第12表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 90 図	S K 1	長方形	1.90	0.65	0.54	N－12°－E	箱形	
〃	S K 2	隅丸長方形	1.02	0.40	0.24	N－52°－W	逆台形	
〃	S K 3	不整楕円形	0.95	0.77	0.07	N－38°－E	浅い逆台形	
〃	S K 4	不整形	2.20	1.20	0.50	N－40°－E	逆台形	
〃	S K 5	方形	1.47	1.15	0.23	N－28°－E	〃	
————	S K 6	円形	1.50	——	——	————	————	撹乱。
————	S K 7	〃	1.20	——	——	————	————	〃
第 90 図	S K 8	隅丸方形	1.50	1.25	0.42	N－26°－E	逆台形	
第 91 図	S K 9	瓢箪形	0.72	0.48	0.12	N－64°－W	〃	
〃	S K 10	不整形	1.95	——	0.12	N－13°－E	————	
〃	S K 11	方形	0.98	0.56	0.16	N－1°－W	逆台形	
〃	S K 12	長方形	2.45	1.25	0.60	N－25°－E	〃	
〃	S K 13	隅丸方形	1.65	1.60	0.49	N－70°－W	〃	
〃	S K 14	楕円形	0.90	0.70	0.15	————	〃	規模は推定。
〃	S K 15	長方形	2.10	1.02	0.20	N－14°－E	浅い逆台形	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第92図	SK 16	不整形	2.35	1.00	0.14	―――	―――	平面形は推定。
〃	SK 17	円形	0.80	――	0.08	―――	浅い逆台形	
〃	SK 18	隅丸方形	3.25	3.00	0.20	N－74°－W	〃	
〃	SK 19	円形	1.50	――	1.20	―――	逆台形	
第93図	SK 20	方形	3.50	2.05	0.37	N－60°－W	〃	
〃	SK 21	長方形	1.80	0.60	0.46	N－23°－E	箱形	
〃	SK 22	〃	1.55	0.82	0.50	N－20°－E	〃	
〃	SK 23	小型の円形	0.80	――	0.20	―――	逆台形	
第94図	SK 24	長方形	1.70	0.64	1.00	N－18°－E	箱形	
〃	SK 25	円形	0.90	――	0.52	―――	〃	
〃	SK 26	〃	0.90	――	0.08	―――	浅い逆台形	
〃	SK 27	長方形	1.80	0.50	1.30	N－24°－E	箱形	
〃	SK 28	円形	1.20	――	0.30	―――	逆台形	
〃	SK 29	〃	1.48	――	0.58	―――	浅い逆台形	
第95図	SK 30	〃	1.48	――	0.15	―――	―――	規模は推定。
〃	SK 31	〃	1.00	――	0.34	―――	逆台形	
〃	SK 32	〃	1.65	――	0.35	―――	〃	
〃	SK 33	不整楕円形	1.90	1.40	0.42	N－14°－W	〃	
〃	SK 34	円形	1.70	――	0.54	―――	箱形	
―――	SK 35	―――	(8.40)	4.50	0.50	―――	―――	東側は調査区外。
第96図	SK 36	方形	1.00	0.35	0.25	―――	―――	
第95図	SK 37	〃	2.10	――	0.18	N－16°－E	逆台形	
〃	SK 38	〃	2.75	1.45	0.32	N－16°－E	〃	
第96図	SK 39	円形	1.30	――	0.16	―――	浅い逆台形	
〃	SK 40	〃	1.25	――	0.70	―――	―――	
〃	SK 41	不整方形	0.95	0.85	0.08	N－28°－E	逆台形	
〃	SK 42	円形	0.70	――	0.32	―――	〃	
第97図	SK 43	方形	1.95	0.60	0.32	N－13°－W	〃	平面形は推定。
〃	SK 44	長方形	6.05	3.05	0.64	N－80°－W	〃	
〃	SK 45	隅丸長方形	1.53	0.70	0.24	N－24°－E	―――	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 98 図	SK 46	隅丸長方形	1.65	1.08	0.21	N－85°－W	浅い逆台形	
〃	SK 47	方形	2.20	2.10	0.24	N－75°－W	逆台形	平面形は推定。
〃	SK 48	楕円形	3.00	0.78	0.13	N－12°－E	浅い逆台形	
〃	SK 49	長方形	4.10	1.73	0.41	N－83°－W	逆台形	
第 99 図	SK 50	———	1.93	——	0.80	———	———	
〃	SK 51	方形	1.20	——	0.19	———	逆台形	
〃	SK 52	不整形	4.30	3.65	1.18	N－19°－E	〃	
第 100 図	SK 53	隅丸方形	1.45	1.05	0.09	N－84°－W	浅いレンズ状	
〃	SK 54	楕円形	1.32	0.75	0.99	N－75°－E	〃	
〃	SK 55	方形	2.50	2.30	0.25	N－8°－E	逆台形	
〃	SK 56	隅丸方形	1.83	1.24	0.52	N－14°－E	〃	
〃	SK 57	方形	3.18	0.57	0.29	N－56°－W	箱形	
第 101 図	SK 58	不整形	3.45	1.28	0.38	N－82°－W	逆台形	
———	SK 59	———	——	——	0.30	———	———	SD12に破壊されている北肩のみ検出。
第 101 図	SK 60	方形	1.45	0.65	0.60	N－12°－E	———	推定。
〃	SK 61	溝状	3.40	0.43	0.35	N－75°－W	逆台形	
〃	SK 62	楕円形	1.20	0.65	0.41	N－13°－E	〃	
第 102 図	SK 63	円形	0.62	——	0.15	———	———	
〃	SK 64	隅丸方形	1.45	0.65	0.65	N－75°－W	逆台形	撹乱
〃	SK 65	長方形	1.50	0.73	0.68	N－19°－E	箱形	
〃	SK 66	溝状	5.20	0.50	0.11	N－70°－W	浅い逆台形	
〃	SK 67	不整形溝状	7.50	1.60	0.50	N－75°－W	〃	
第 103 図	SK 68	円形	1.90	——	0.82	———	逆台形	
〃	SK 69	〃	1.20	——	0.19	———	〃	
〃	SK 70	隅丸方形	1.18	0.70	0.35	N－70°－W	U字形	
〃	SK 71	不整方形	2.28	1.50	0.50	N－82°－W	逆台形	
〃	SK 72	楕円形	0.80	0.70	0.20	N－14°－E	〃	
第 104 図	SK 73	不整形	3.00	2.30	0.30	N－65°－W	———	
第 103 図	SK 74	楕円形	3.42	0.93	0.64	N－28°－E	———	推定。
第 104 図	SK 75	大型方形	6.00	3.88	0.92	N－77°－W	———	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第104図	SK 76	隅丸方形	2.77	0.88	0.27	N－75°－W	逆台形	
第105図	SK 77	不整形	5.58	4.95	1.00	N－79°－W	———	
〃	SK 78	方形	3.75	0.80	0.11	N－74°－W	浅い逆台形	
〃	SK 79	隅丸方形	1.25	1.05	0.50	N－25°－E	〃	
第106図	SK 80	不整形溝状	6.10	0.20	0.20	———	〃	
第107図	SK 81	大型方形	6.10	2.30	0.50	N－15°－E	———	
〃	SK 82	楕円形	1.30	1.10	0.15	N－60°－W	———	推定。
第106図	SK 83	方形	1.50	1.10	0.23	N－72°－W	逆台形	
〃	SK 84	〃	2.40	1.20	0.12	N－25°－E	〃	
〃	SK 85	不整形	2.30	1.30	0.27	N－33°－E	———	
〃	SK 86	〃	3.60	1.80	0.20	N－33°－E	———	
〃	SK 87	〃	2.30	1.90	0.50	N－57°－W	———	
第108図	SK 88	円形	3.95	——	0.83	———	浅いU字形	推定。
〃	SK 89	楕円形	0.90	0.48	0.20	N－70°－W	逆台形	
〃	SK 90	〃	1.70	0.43	0.05	N－30°－E	浅い逆台形	
〃	SK 91	円形	0.90	——	0.06	———	〃	
〃	SK 92	不整方形	0.80	0.73	0.20	N－72°－W	逆台形	
第109図	SK 93	方形	1.15	0.77	0.14	N－30°－E	浅い逆台形	
〃	SK 94	瓢箪形	0.95	0.65	0.41	N－24°－E	箱形	
〃	SK 95	楕円形	1.05	0.67	0.15	N－20°－E	逆台形	
第111図	SK 96	円形	2.10	——	0.55	———	———	平面形は推定。
第109図	SK 97	長方形	3.30	1.30	0.40	N－75°－W	———	
第110図	SK 98	隅丸方形	1.15	0.95	0.15	N－31°－E	浅い逆台形	
第109図	SK 99	楕円形	4.40	1.40	1.40	N－70°－W	〃	
第110図	SK100	長方形	3.35	1.35	0.10	N－65°－W	〃	
〃	SK101	方形	1.60	1.30	0.30	———	———	推定。
〃	SK102	楕円形	2.00	1.70	0.38	N－ 8°－W	逆台形	

第13表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅲ層	土師質土器 鍋	15.8 (5.2) —— ——	肩部に鍔を持ち、外方に突出する。口縁端部は内傾する面を持つ。	内外面に指頭圧痕、体部外面に叩目あり。口縁部にヨコナデが観察される。	外面、肩部以下に煤状炭化物付着。 にぶい橙色。
2	〃	土師質土器 釜	—— (7.4) —— ——	肩部は内湾し、頸部で一旦屈曲してから直立し、口縁部にいたる。肩部に把手が貼付される。	ロクロナデ。 内面に指頭圧痕。	淡黄色
3	〃	擂鉢	27.4 (7.9) —— ——	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は、上方及び下外方に拡張される。	条線数不明。	内面、灰赤色。 外面、赤橙色。 備前焼。
4	〃	〃	31.0 (7.9) —— ——	体部は直線的。口縁部上方に拡張し、内面に段を有す。外面は凹線状になる。	条線は、10本1単位。 ロクロナデ。	備前焼。(近世)
5	〃	〃	31.8 (7.2) —— ——	〃	〃	〃
6	〃	青磁 稜花皿	13.9 (2.1) —— ——	体部は腰部で屈曲し、外反気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。口縁端部は、稜花形に刻まれる。	口縁部内面に2条の沈線。 内外面、貫入あり。	濃緑色釉。
7	〃	白磁 皿	8.4 2.0 —— 4.1	高台は、アーチ状を呈する。 体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり丸くおさめた口縁部にいたる。	全面に施釉される。 貫入なし。	白色釉。 胎土、灰白色。
8	〃	土錘	全長 3.2 直径 1.1 重量(g) 2.5	土師質の土錘で、円筒形を呈し、ほぼ中央部に直径4㎜の円孔を穿つ。		
9	〃	紅猪口	4.2 1.4 —— 6.4	断面三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して立ち上がる。口縁部は、水平に面取られ、体部外面には細かい放射状の凹凸。	口縁部外面と見込の部分に釉が施される。	白色釉。 伊万里系。

第14表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
10	SB 10	白磁 皿	—— (1.8) —— 5.2	高台は、アーチ状を呈する。 体部は、内湾して外上方に立ち上がる。	全面に施釉される。 貫入あり。	
11	SK 1	小碗	7.2 3.4 —— 2.5	高台内やや深く削られた底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。 口縁部やや外反。	体部外面、四方に文様が濃青色に発色する。	白色釉。 瀬戸・美濃系。
12	SK 3	土師質土器 皿	10.4 1.9 —— 6.3	体部は、やや内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕あり。	淡黄橙色。
13	〃	〃	10.9 2.8 —— 4.7	平坦な底部から、体部は一旦くびれた後、やや内湾気味に口縁部にいたる。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
14	SK 3	皿	11.2 3.3 —— 4.6	底部は、削り出して高台状にしている。体部は内湾気味に口縁部にいたる。	内面全面及び外面口縁下まで施釉される。	灰赤色釉。 胎土は橙色。
15	SK 4	碗	—— (3.1) —— 2.7	断面三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付を除く全面に施釉される。	白色釉。 焼成不良。 伊万里。Ⅲ期。
16	SK 11	土師質土器 杯	12.5 4.3 4.9 ——	平坦な底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕あり。	淡黄橙色。
17	SK 20	小杯	—— (3.6) —— 1.3	高台は、断面台形状を呈する。腰部で一旦屈曲してから、体部は直線的に、外上方へ立ち上がる。	高台脇に、二重の界線が濃青緑色に発色する。畳付は、釉が削りとられる。	灰白色釉。 伊万里系。
18	〃	碗	—— (3.7) —— 3.4	断面長方形の高台を持つ底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がる。	貫入なし。高台外面に二重の界線、体部外面に二重網目文が、あせた青色に発色する。	明るい明緑灰色釉。
19	〃	仏飯器	7.4 4.4 —— 7.6	脚部は短い。 皿部は内湾して外上方に立ち上がる。		伊万里系。
20	〃	碗	12.3 7.9 —— 5.2	高台は断面四角形で、高台内の削りは、やや深い。体部は内湾して立ち上がり、直立し端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内外面貫入あり。 畳付は釉が削りとられる。 高台内面に砂溶着。	淡黄色釉。 京焼系。
21	〃	〃	12.4 8.3 —— 4.9	〃	〃	〃
22	〃	〃	—— (3.5) —— 4.4	断面四角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面、高台脇まで施釉され、外底及び高台は露胎。	明オリーブ灰色釉。 胎土、灰白色。
23	〃	甕	28.0 (18.1) —— ——	胴部は、内湾して立ち上がり、内傾してT字状の口縁部にいたる。	全面に施釉された後、さらに外面に放射状に施釉される。	
24	SK 21	小碗	7.0 3.5 —— 3.0	断面四角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	畳付は、釉が削りとられる。 外面に笹文が灰オリーブ色に発色する。 貫入なし。	灰白色釉。
25	SK 22	土師質土器 小皿	7.0 1.2 —— 4.3	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部回転糸切り痕あり。 ロクロナデ。	淡黄橙色。
26	SK 25	碗	11.0 7.8 —— 5.3	体部は内湾して外上方に立ち上がり、直立した口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	畳付の釉が削りとられる。 体部外面に山水文があせた青灰色に発色する。 全面に貫入あり。 外底に砂溶着。	青味がかった白色釉。 半磁器。
27	SK 26	鉢	—— (6.5) —— 10.0	高台は、断面長方形で幅広く安定している。体部は内湾して立ち上がる。	内面に白色またはにぶい黄橙色の釉をハケ塗りしている。外面に自然釉がみられる。	胎土、にぶい赤橙色。 唐津焼。
28	SK 27	小碗	7.1 3.6 —— 2.9	高台は断面三角形。 体部は内湾して外上方に立ち上がり、丸くおさめた口縁部にいたる。	畳付の釉は、削りとられる。 体部外面に笹文が施される。	白色釉。 胎土、灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
29	SK 33	皿	13.8 3.1 —— 7.9	高台は、断面逆台形状を呈する。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	内面につる草文があせた青色に発色する。 畳付は釉が削りとられる。 見込部分、蛇ノ目状釉ハギ。	白色釉。 胎土、灰白色。
30	SK 34	〃	10.2 (5.4) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して外反、端部は上方に拡張する。高台内の削りが深い。	白または灰オリーブ色の釉を内外面にハケで塗る。 外底が半分程露胎する以外は、全面に施釉される。	唐津。Ⅲ期。
31	SK 35	〃	—— (1.6) —— ——	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。	内面に、四方欅文がにぶい青色に発色する。 内外面かきわけ。	内面、明緑灰色釉。 外面、淡緑色釉。
32	〃	碗	—— (2.2) —— 4.0	断面逆台形状の安定した高台から、体部は内湾して立ち上がる。底部見込付近肥厚。	畳付は、釉が削りとられる。 高台脇、畳付に砂溶着。	淡黄色系の灰白色釉。 胎土、灰白色。
33	〃	燈明皿	11.2 (2.0) —— ——	体部は、底部から屈曲した後、直線的に口縁部にいたる。「立ち上がり」は、内傾して立ち上がる。	「立ち上がり」の内側を除く内面全面と、外面口縁下まで、釉が施される。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。 瀬戸・美濃系。
34	〃	碗	—— (3.7) —— 5.1	高台は断面長方形で、外方にやや開く。体部は内湾して、外上方へ立ち上がる。	畳付は、釉が削りとられる。 全面に貫入がみられる。	淡黄色釉。 胎土、灰白色。
35	SK 37	〃	—— (1.5) —— 3.1	高台は、外方に開き、断面長方形。高台内の削りやや深い。体部は、内湾気味の立ち上がりを示す。	内面全面及び外面高台脇まで施釉される。	明緑灰色釉。 胎土、灰白色。 露胎部、淡黄橙色。 京焼系。
36	〃	土師質土器 皿	—— (1.6) —— 5.8	平坦な底部から、体部は外上方に内湾して立ち上がる。	内面ロクロ痕、底部回転糸切り痕有り。	浅黄橙色。
37	SK 52	土師質土器 杯	—— (2.8) —— 4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内面、ロクロ痕有り。	淡黄橙色。 器表の磨耗が激しい。
38	〃	土師質土器 鍋	22.6 (7.6) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、内傾して口縁部にいたる。端部は内傾した面を成す。肩部に断面三角形の鍔。	ロクロナデ。 体部外面、肩部下に叩目有り。	内面、橙色。 外面、にぶい赤褐色。 外面に煤状炭化物。
39	〃	甕	—— (7.5) —— 26.0	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。	備前焼。
40	〃	〃	32.6 (11.9) —— ——	直立した頸部の上に玉縁状の口縁部を有する。	ロクロナデ。 体部外面、口縁部内面に自然釉。	〃
41	〃	青磁 碗	—— (3.5) —— 5.4	高台内の削りが浅い。高台は、外方にやや開き気味で、外面が面取られ、畳付は狭くされる。体部は内湾気味。	体部外面にヘラ描き沈線。 内面に一条のヘラ描き沈線。	オリーブ灰色釉。 胎土、灰白色。
42	〃	〃	—— (2.3) —— 4.4	〃	畳付及び外底部の釉は削り取られる。 内面に印花文。	オリーブ黄色釉。 胎土、灰白色。
43	SK 58	碗	—— (3.9) —— 5.8	高台は断面三角形で、内面を面取られ、畳付が狭くされる。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	見込に二重の界線、その中に荒磯文が淡いオリーブ灰色に発色する。高台外面に二重の界線が同様に発色する。貫入なし。	灰白色釉。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
44	SK 58	碗	—— (3.2) —— 4.4	断面三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して立ち上がる。	高台に二重の界線、高台脇に一重の界線がにぶい青色に発色する。畳付の釉は削りとられる。高台内面に砂溶着。	胎土、灰色。伊万里系半磁器。
45	SK 59	青磁碗	13.2 (2.1) —— ——	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。	口縁下外面に一条の沈線、体部外面にヘラ描蓮弁文有り。	青緑色釉。胎土、灰色。
46	SK 60	土師質土器杯	—— (2.7) —— 4.6	体部はやや外反気味に立ち上がる。	調整不明。	淡黄橙色。砂粒非常に多い。磨耗が激しい。
47	〃	小杯	2.6 2.4 —— 2.7	断面逆三角形の高台を有し、厚みのある底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底、畳付に砂溶着。	灰白色釉。胎土、灰白色。
48	〃	碗	—— (3.3) —— 4.5	断面長方形の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がる。	畳付の釉は、削り取られる。見込に一重の界線と手描きの五弁花、外底に渦巻福銘が青色に発色する。内外面かきわけ。	内面、白色釉。外面、明るい淡緑色釉。胎土、灰白色。
49	〃	〃	8.5 5.8 —— 3.6	高台外面端部が面取られ、畳付を狭くする。体部は内湾して外上方に立ち上がり、外反気味に口縁部にいたる。	畳付は釉が削り取られる。貫入あり。	明オリーブ灰色釉。胎土、灰白色。伊万里系。半磁器。
50	〃	墨壺	14.2 20.6 24.4 20.2	底部に断面半円形の三足が付く。直線的に立ち上がり、口縁部は内傾、端部は内側に大きく屈曲する。	全面に施釉される。	黒色釉。
〃	〃	墨壺蓋	15.2 (2.4) —— ——	口縁部が、水平に突出する落とし蓋である。	〃	〃
51	SK 68	碗	15.2 (5.9) —— ——	体部は、内湾して立ち上がり、口縁部にいたる。	外面に梅文がにぶい青色に発色する。	青味がかった白色釉。胎土、白色。
52	SK 73	小碗	—— (2.7) —— 3.1	断面長方形の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がる。	畳付は釉が削り取られる。体部外面に文様があせた濃青色に発色する。	白色釉。胎土、白色。伊万里系。
53	〃	碗	—— (4.0) —— 4.6	断面、逆台形状の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がる。	焼成不良で、釉は溶解していない。	胎土、橙色。唐津系。
54	〃	〃	—— (2.5) —— 4.8	高台内が、やや深く削られる。高台外面端部は面取られ、畳付が狭くされる。	畳付は、釉が削り取られる。全面に貫入あり。	淡黄色釉。胎土、灰白色。
55	SK 75	土師質土器小皿	7.3 (1.1) —— ——	体部は、平坦な底部から内湾して、外上方に立ち上がる。底部中央に直径7㎜の穴を穿孔。	ロクロナデ。底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色糸灰白色。
56	〃	土師質土器鍋	18.8 (5.7) —— ——	胴部は、口縁下で一旦屈曲し、内傾して口縁部にいたる。肩部に断面三角形の鍔あり。口縁端部は内傾した面をなす。	ロクロナデ。胴部外面に叩目有り。	淡黄橙色。外面肩部以下に煤状炭化物付着。
57	〃	〃	32.2 (5.5) —— ——	口縁部は内傾し、端部は内傾した面をなす。肩部に断面三角形の鍔が貼付される。	ロクロナデ。外面に指頭圧痕。胴部外面に叩目有り。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
58	SK 75	甕	34.6 (22.0) —— ——	玉縁状の口縁部を呈する。	ロクロナデ。	赤褐色。 備前焼。
59	〃	土錘	全長(4.3) 直径 1.9 重量(g) 12.5	土師質の土錘で円筒形を呈す。やや端よりに直径4.5mmの円孔を穿つ。		
60	〃	甕	34.8 (22.0) —— ——	胴部は内湾しながら内傾した立ち上がりを示し、頸部で屈曲した後直立し、玉縁状の口縁部にいたる。	胴部内面ヘラ削り。頸部にハケ目がみられる。 内面に指頭圧痕有り。 ロクロナデ。	にぶい赤褐色。 備前焼。
61	〃	〃	22.2 (6.5) —— ——	N字状の口縁部を呈する。	ロクロナデ。	灰赤色。 常滑焼。
62	SK 77	〃	35.1 (5.5) —— ——	直立した頸部から、玉縁状の口縁部にいたる。	〃	灰赤色。 備前焼。
63	〃	〃	22.8 (8.7) —— ——	頸部でくの字状に屈曲した後、外反した口縁部にいたる。口縁部は肥厚する。	口縁部外面に2条の凹線。 ロクロナデ。	暗赤灰色。 備前焼。
64	〃	青磁碗	14.9 (4.2) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味の口縁部にいたる。	体部外面に蓮弁文。 貫入なし。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
65	〃	皿	—— (4.5) —— 4.3	高台は逆台形状を呈し、体部は外方に大きく開いて内湾気味に立ち上がる。	見込、蛇ノ目状釉ハギ。 外面は、高台外面あるいは高台脇にかけて施釉される。 貫入なし。高台に砂溶着。	明淡緑色釉。 胎土、白色。 伊万里。Ⅲ期。
66	〃	〃	13.0 3.4 —— 4.8	高台は、断面逆台形状で、体部は、内湾して外上方に大きく開いて立ち上がり、口縁部にいたる。	見込、蛇ノ目状釉ハギ。 外面は、高台脇まで施釉される。 貫入有り。高台に砂溶着。	内面、青緑色釉。 外面、淡黄色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。
67	〃	碗	—— (2.6) —— 5.1	高台は、外面が垂直に削られ、断面台形状を呈す。体部は、内湾して外上方に立ち上がる。	外底の一部以外の全面に施釉される。 貫入有り。畳付に砂溶着。	灰白色釉、胎土灰白色。 唐津焼。
68	〃	〃	—— (3.0) —— 4.3	断面長方形の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がる。	内面及び外面高台脇まで施釉される。貫入有り。 見込に砂溶着。	淡黄色釉。 胎土、灰白色。
69	〃	〃	10.4 4.9 —— 3.9	断面三角形の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がり、口縁部にいたる。	貫入有り。 畳付に砂溶着。	淡黄色釉。 胎土、灰白色。
70	〃	土錘	全長(5.4) 直径 2.5 重量(g) 16.0	土師質の土錘で、円筒形を呈し、ほぼ中央部に直径5.5mmの円孔を穿つ。		
71	SK 80	土師質土器皿	8.0 1.8 —— 5.1	体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロナデ。	淡橙色。
72	〃	土師質土器杯	10.2 3.8 —— 6.7	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕有り。	灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
73	SK 81	小碗	7.3 4.3 —— 2.7	断面三角形の高台を持つ底部から、体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部外面に雨降り文が、高台外面に二重、高台脇に一重の界線が、にぶい青色に発色する。畳付の釉は削り取られる。貫入なし。	青味がかった白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里系。
74	〃	皿	—— (2.1) —— 3.7	高台は断面逆台形状で、外面は垂直に削り取られる。体部は、大きく開きながら、内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面、蛇ノ目状釉ハギ。 外面は、高台脇、高台外面にかけて施釉される。 見込及び高台、外底に砂溶着。	緑がかった淡黄色釉。 唐津焼。内野山窯。
75	SK 96	土師質土器 小皿	6.6 1.6 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	外面に指頭圧痕有り。	淡黄橙色。
76	〃	〃	7.1 1.5 —— ——	〃	〃	灰白色。
77	〃	〃	6.8 1.8 —— ——	〃	〃	〃
78	〃	〃	7.0 1.6 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
79	〃	〃	6.3 1.5 —— 4.2	体部は外傾して外上方に立ち上がる。口縁端部は外傾した水平面をなす。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕有り。	〃
80	〃	土師質土器 皿	10.0 2.0 —— ——	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はナデのため外反する。	内面は、丁寧なヨコナデにより仕上げられる。	白色系。
81	〃	〃	10.6 2.3 —— 4.8	〃	内面は、丁寧なヨコナデにより仕上げられる。 体部外面に指頭圧痕有り。	淡黄橙色。
82	〃	〃	10.3 2.2 —— ——	〃	〃	灰色または黒褐色。
83	〃	〃	10.0 2.1 —— ——	〃	〃	灰色。
84	〃	〃	9.6 2.2 —— ——	〃	内面は、丁寧なヨコナデで仕上げられている。	淡黄橙色。
85	〃	〃	13.1 2.9 —— ——	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は強いヨコナデのため外反し、口縁下はやや肥厚する。	体部内外面に指頭圧痕有り。 口縁部はヨコナデで仕上げる。	〃
86	〃	〃	13.0 3.0 —— ——	〃	〃	〃
87	〃	〃	13.2 3.0 —— ——	〃	〃	淡橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
88	SK 96	土師質土器 皿	12.8 3.0 —— 7.0	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下は、ヨコナデのために肥厚する。	体部内外面に指頭圧痕。 口縁部はヨコナデで仕上げている。	淡橙色。
89	〃	〃	13.3 2.4 —— ——	〃	〃	〃
90	〃	〃	12.5 3.1 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
91	〃	〃	13.2 2.4 —— ——	〃	〃	橙色。
92	〃	〃	13.0 2.9 —— ——	〃	〃	〃
93	〃	〃	12.8 3.1 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
94	〃	〃	12.7 3.0 —— ——	〃	〃	〃
95	〃	〃	6.5 3.8 —— ——	〃	〃	〃
96	〃	〃	13.1 2.7 —— ——	〃	〃	淡橙色。
97	〃	〃	13.1 2.8 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
98	〃	〃	12.9 3.1 —— ——	〃	〃	内面、淡橙色。 外面、淡黄橙色。
99	〃	〃	19.0 3.0 —— ——	〃	〃	淡橙色。
100	〃	〃	12.5 3.1 —— ——	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下は、ヨコナデのために肥厚する。 口縁部は強いナデのため外反。	〃	〃
101	〃	〃	13.2 2.9 —— ——	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁下はナデのため肥厚する。	〃	〃
102	〃	〃	11.9 2.7 —— ——	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
103	SK 96	土師質土器 皿	13.6 2.7 —— 5.8	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下はヨコナデのため肥厚する。	体部内外面に指頭圧痕有り。口縁部はヨコナデで仕上げている。	淡橙色。
104	〃	〃	13.5 2.8 —— 8.0	〃	〃	〃
105	〃	〃	13.2 2.8 —— 6.0	〃	〃	〃
106	〃	〃	12.8 2.5 —— 7.0	〃	〃	〃
107	〃	〃	12.8 2.9 —— ——	〃	〃	〃
108	〃	〃	12.8 (2.7) —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
109	〃	〃	10.8 3.0 —— ——	〃	〃	〃
110	〃	〃	13.4 (2.8) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡橙色。
111	〃	〃	13.4 2.4 —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下が、やや肥厚する。	〃	淡黄橙色。
112	〃	〃	13.8 2.5 —— ——	〃	〃	内面、淡橙色。外面、淡黄橙色。
113	〃	〃	13.4 2.3 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
114	〃	〃	13.4 2.7 —— ——	〃	〃	淡橙色。
115	〃	〃	13.9 2.8 —— ——	〃	〃	〃
116	〃	〃	14.6 2.5 —— ——	体部は直線的に外上方に立ち上がり、外反気味の口縁部にいたる。	体部内外面及び底面に指頭圧痕が有り、口縁部及び内面はヨコナデで仕上げられる。	内面、灰白色。外面、淡黄橙色。体部外面に黒斑有り。
117	〃	〃	12.8 2.4 —— 7.2	〃	〃	灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
118	SK 96	土師質土器 皿	17.0 2.9 —— 10.6	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、外反した口縁部にいたる。	体部外面に指頭圧痕が残り、口縁部及び内面はていねいなヨコナデで仕上げられる。	淡黄橙色。(白色系)
119	〃	〃	15.9 2.6 —— 10.2	〃	〃	〃
120	〃	〃	16.5 3.0 —— ——	〃	〃	灰白色。(白色系)
121	〃	〃	15.0 2.7 —— ——	〃	〃	〃
122	〃	〃	14.8 2.5 —— ——	〃	〃	〃
123	〃	〃	14.2 2.8 —— 9.2	〃	〃	淡橙色。
124	〃	〃	15.4 2.9 —— 9.5	〃	〃	白色系。
125	〃	〃	15.2 2.8 —— ——	〃	〃	〃
126	〃	土師質土器 小杯	6.6 2.0 —— 3.4	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕、底部回転糸切り痕有り。	橙色。
127	〃	〃	6.8 1.9 —— 4.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	橙色。 器表の磨耗が激しい。
128	〃	〃	7.3 1.8 —— 3.9	〃	内面にロクロ痕有り。	橙色。
129	〃	〃	7.2 1.8 —— 3.8	〃	ロクロナデ。	淡橙色。 器表の磨耗が激しい。
130	〃	〃	7.2 1.8 —— 3.9	〃	〃	〃
131	〃	〃	7.3 2.0 —— 3.9	〃	〃	淡黄橙色。 器表の磨耗が激しい。
132	〃	〃	7.3 2.1 —— 4.0	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
133	SK 96	土師質土器 小杯	7.4 / 2.2 / —— / 4.1	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄橙色。器表の磨耗が激しい。
134	〃	〃	7.0 / 1.9 / —— / 3.6	〃	〃	〃
135	〃	〃	7.0 / 1.8 / —— / 3.5	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
136	〃	〃	5.9 / 1.9 / —— / 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕、底部回転糸切り痕有り。	灰白色。(白色系)砂粒はほとんど含まない。
137	〃	〃	8.0 / 2.0 / —— / 3.8	〃	ロクロナデ。	淡黄橙色。器表の磨耗が激しい。
138	〃	〃	7.1 / 1.9 / —— / 3.8	〃	内面にロクロ痕有り。	〃
139	〃	〃	6.6 / 1.8 / —— / 3.5	〃	調整不明。	〃
140	〃	〃	6.4 / 1.9 / —— / 4.0	〃	ロクロナデ。底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。
141	〃	〃	7.2 / 1.9 / —— / 4.0	〃	〃	橙色。
142	〃	〃	7.6 / 2.0 / —— / 4.2	〃	〃	淡黄橙色。
143	〃	〃	7.4 / 2.0 / —— / 3.6	体部は、一旦外反し、それから内湾気味に口縁部にいたる。	調整不明。	淡黄橙色。器表の磨耗が激しい。
144	〃	〃	7.7 / 2.0 / —— / 4.0	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	ロクロナデ。	〃
145	〃	〃	7.9 / 2.0 / —— / ——	体部は外反気味に立ち上がり、口縁部は、やや内湾する。	内面にロクロ痕。底部、回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。
146	〃	〃	6.9 / 2.2 / —— / 4.0	体部は、外反気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。	橙色。器表の磨耗が激しい。
147	〃	〃	7.2 / 2.1 / —— / 3.7	〃	〃	内面、淡橙色。外面、橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
148	SK 96	土師質土器 小杯	6.2 / 2.1 / —— / 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部に一箇所、穿孔がみられる。	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。砂粒をほとんど含まず、焼成は極めて良好。
149	〃	〃	5.9 / 2.0 / —— / 3.1	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡黄橙色。(白色系)砂粒は、ほとんど含まれない。
150	〃	〃	6.6 / 2.0 / —— / 3.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	橙色。器表の磨耗が激しい。
151	〃	〃	5.8 / 2.0 / —— / 2.5	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がり、わずかに屈曲して口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。(白色系)砂粒をほとんど含まない。
152	〃	〃	7.8 / 2.5 / —— / 4.0	体部は、外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄橙色。器表の磨耗が激しい。
153	〃	〃	7.4 / 2.1 / —— / 3.8	〃	〃	〃
154	〃	土師質土器 杯	12.6 / 3.9 / —— / 4.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。
155	〃	〃	12.0 / 3.5 / —— / 5.6	〃	内面、ロクロ痕有り。	橙色。
156	〃	〃	11.9 / 3.5 / —— / 5.4	〃	〃	橙色。器表の磨耗が激しい。
157	〃	〃	10.6 / 4.2 / —— / 5.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は、外傾した面をなす。	内面、ロクロ痕、底部回転糸切り痕有り。体部内外面に指頭圧痕。	淡黄橙色。焼成は極めて良好。
158	〃	〃	11.7 / 3.6 / —— / 5.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味の口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕有り。	橙色。器表の磨耗が激しい。
159	〃	〃	11.7 / 3.5 / —— / 5.4	〃	〃	〃
160	〃	〃	11.5 / 3.8 / —— / 5.4	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡橙色。
161	〃	〃	11.9 / 3.5 / —— / 5.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味の口縁部にいたる。	〃	橙色。
162	〃	〃	11.2 / 3.8 / —— / 5.7	体部は外反して外上方に立ち上がる。口縁端部は外傾した水平面をなす。	内面にロクロ痕、底部回転糸切り痕、体部外面に指頭圧痕有り。	淡橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
163	SK 96	土師質土器 杯	11.7 3.5 —— 5.2	体部は、外反気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄橙色。
164	〃	〃	12.2 3.6 —— 5.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	橙色。
165	〃	〃	12.4 4.1 —— 5.6	〃	〃	淡黄橙色。
166	〃	〃	11.7 3.1 —— 5.2	体部は、やや内湾した立ち上がりを示す。口縁下が肥厚する。	〃	〃
167	〃	〃	11.9 3.7 —— 4.9	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに内湾する。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	〃
168	〃	〃	11.8 3.6 —— 4.7	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。	淡橙色。 器表の磨耗が激しい。
169	〃	〃	11.5 4.1 —— 4.7	〃	〃	淡黄橙色。 器表の磨耗が激しい。
170	〃	〃	12.0 3.2 —— 5.3	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、直線的な口縁部にいたる。	〃	〃
171	〃	〃	10.7 3.7 —— 4.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	調整不明。	〃
172	〃	〃	10.2 3.8 —— 5.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 口縁端部わずかに内湾。	内面ロクロ痕が残る。	橙色。 器表の磨耗が激しい。
173	〃	〃	13.6 3.6 —— 7.4	体部は内湾気味に立ち上がり、やや外反した口縁部にいたる。	〃	〃
174	〃	〃	11.6 3.6 —— 5.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	〃
175	〃	〃	12.3 3.3 —— 5.1	〃	〃	淡黄橙色。 器表の磨耗が激しい。
176	〃	〃	12.4 3.6 —— 5.2	〃	調整不明。	〃
177	〃	〃	12.4 3.4 —— 4.8	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	内面ロクロ痕。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
178	SK 96	土師質土器 杯	12.6 3.7 —— 5.6	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁下が肥厚する。	内面にロクロ痕有り。	橙色。
179	〃	〃	12.3 3.2 —— 5.5	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、外反した口縁部にいたる。	〃	橙色。 器表の磨耗が激しい。
180	〃	〃	12.0 3.4 —— 5.0	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、外反気味の口縁部にいたる。	〃	〃
181	〃	〃	11.8 3.8 —— 5.0	体部は、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄橙色。 砂粒をほとんど含まない。
182	〃	〃	11.1 3.8 —— 5.0	体部は、外反気味に外上方に立ち上がり、やや内湾して口縁部にいたる。	〃	〃
183	〃	〃	10.6 3.5 —— 4.8	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	灰白色。(白色系) 砂粒をほとんど含まない。
184	〃	〃	11.8 3.5 —— 5.0	〃	内面、ロクロ痕。	淡黄橙色。
185	〃	〃	11.8 3.5 —— 5.0	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部はわずかに内湾。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	〃
186	〃	青磁 碗	14.3 (5.0) —— ——	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面に貫入あり。 体部外面に細蓮弁文があり、蓮弁の単位は意識されている。	淡暗緑色釉。 胎土、灰白色。
187	SK 97	土師質土器 杯	—— (4.3) —— 7.0	平坦な底部から、体部は内湾して立ち上がる。	底部回転糸切り痕、ロクロナデが観察される。	淡黄橙色。
188	〃	碗	—— (3.4) —— 3.7	断面逆三角形の高台を持つ底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付は、釉が削り取られる。文様は、あせた暗青灰色に発色する。 畳付に砂溶着。	灰白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里。
189	〃	〃	10.6 5.0 —— 4.0	断面長方形の高台を持つ底部から、体部は内湾して立ち上がり、屈曲して直立する口縁部にいたる。	内面及び外面高台脇まで施釉される。内外面貫入あり。 見込に砂溶着。	淡黄色釉。 胎土、明るい淡黄色。 京焼系。
190	SK 99	〃	10.0 5.4 —— 3.9	〃	内面及び外面高台脇まで施釉される。内外面貫入あり。 体部外面に陶胎上絵技法による笹文が淡緑黄色に発色する。	淡黄色系の灰白色釉。 胎土、灰白色。 瀬戸・美濃系。
191	SD 1	擂鉢	30.4 (5.6) —— ——	体部は、直線的に外上方に延び、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	口縁部外面に2条の凹線が施される。内面には、二段の段を有す。	赤黄褐色。 備前焼。
192	〃	壺	10.3 (4.5) —— ——	頸部から口縁部にかけて外反し、端部は小玉縁を呈する。	ロクロナデ。	暗赤灰色。 胎土、灰白色。 備前焼。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
193	SD 1	青磁 碗	—— (4.0) —— 6.2	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。高台は、比較的高く逆三角形を呈す。	高台内まで施釉。外底に釉は施されない。見込に文様有り。	青緑色釉。胎土、灰白色。
194	〃	皿	—— (2.1) —— 5.2	高台は、断面逆台形である。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。	高台外まで施釉され、外底、畳付は露胎する。見込、蛇の目状釉ハギ。内外面に文様が染付される。高台脇に一重の界線。	青味を帯びた白色釉。胎土、乳白色。伊万里系。
195	〃	猪口	3.3 3.4 —— 2.3	底部は比較的厚く、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面に薄いコバルトブルーの染付が施される。釉は内外面施されるが、畳付、外底、高台の一部は露胎。畳付の一部に砂溶着。	灰白色釉。胎土、白色。伊万里系。
196	〃	杯	(7.2) (1.9) —— ——	体部は、直線的に外上方に延び、口縁部は外反する。	口縁に一重の界線が施される。外面にあせた青い草花文。	灰白色釉。胎土、乳白色。伊万里系。
197	〃	皿	—— (1.5) —— 7.8	削り出し高台で、畳付は内外を面取られ狭くされる。ヘソ高台を有し、施釉されている。	見込に鮮やかな藍色に発色した文様が染付される。高台外面に、一重の界線。見込に目跡が残る。	灰白色釉。胎土、乳白色。鹿児焼。
198	〃	〃	—— (1.8) —— 3.8	高台は低い削り出しで、外底まで釉は施されていない。畳付は露胎、内ぐりは丁寧ではない。	内外面貫入あり。	暗黄緑色釉。胎土、灰白色。唐津焼。
199	〃	甕	—— (9.3) —— ——	胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく屈曲して外反する。端部は、小玉縁を呈す。	胴部上位に5条と3条の凹線が施される。内外面ロクロナデ。	灰紫褐色。
200	SD 2	土師質土器 皿	11.6 (2.0) —— ——	口縁部は内湾する。	手捏ね。	淡黄橙色。
201	〃	〃	14.3 (3.0) —— ——	体部は内湾して立ち上がり、口縁下が若干肥厚し、端部はつまみ上げられる。	〃	〃
202	〃	〃	12.8 3.2 —— ——	体部は内湾して立ち上がり口縁部にいたる。	内外面指頭圧痕有り。	橙色。
203	〃	〃	10.8 (2.1) —— ——	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁下は、ナデのため肥厚する。	口縁部ヨコナデ。体部外面指頭圧痕。	淡黄橙色。
204	〃	〃	13.5 2.7 —— 9.0	平坦な底部から屈曲し、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
205	〃	〃	11.3 2.7 —— 4.0	体部は、内湾して外上方に立ち上がる。ナデのため口縁下は若干肥厚する。	〃	淡黄橙色。口縁部内面に煤付着。
206	〃	〃	12.1 2.4 —— 8.0	平坦な底部から、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部中央の器壁は厚い。	体部内外面に指頭圧痕有り。	暗灰褐色。
207	〃	〃	12.4 (2.1) —— ——	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は、強いナデのため、やや外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。	淡黄橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
208	SD 2	土師質土器 皿	12.9 2.0 —— 8.4	平坦な底部から、ほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下はナデのため若干肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面に指頭圧痕。	淡橙色。
209	〃	〃	12.5 2.3 —— ——	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下、ナデのため若干肥厚する。	〃	淡黄橙色。
210	〃		12.8 2.1 —— 8.2	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下、ナデのため若干肥厚。 口縁部でやや屈曲する。	体部内外面指頭圧痕。	〃
211	〃	〃	10.2 3.3 —— ——	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁下はヨコナデのため肥厚する。	体部内外面指頭圧痕。 口縁部内外面ヨコナデ。	〃
212	〃	〃	13.0 (2.1) —— ——	体部は、やや内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。ナデのため口縁部外面に軽い段を有する。	〃	〃
213	〃	〃	12.3 (2.2) —— ——	体部は底部から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がる。	〃	〃
214	〃	〃	12.4 2.7 —— ——	体部は、底部から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がる。 口縁部はナデのため屈曲する。	〃	灰茶褐色。
215	〃	〃	12.6 (2.6) —— ——	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡橙色。
216	〃	〃	12.3 2.2 —— ——	平坦な底部から、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はナデのため外反する。底部中央の器壁が厚い。	〃	〃
217	〃	〃	12.3 2.5 —— ——	平坦な底部から屈曲し、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
218	〃	〃	12.2 2.6 —— ——	平坦な底部から直線的に、外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	体部内外面指頭圧痕。	橙色。
219	〃	〃	13.5 3.0 —— ——	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	淡黄橙色。
220	〃	〃	11.6 2.4 —— ——	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	〃	淡橙色。
221	〃	〃	12.5 2.5 —— 8.0	〃	口縁部ヨコナデ。	淡黄橙色。
222	〃	〃	12.6 2.1 —— 7.5	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部はナデのためやや外反。	体部内外面、指頭圧痕。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
223	SD 2	土師質土器 皿	11.5 2.4 —— 5.0	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	口縁部、ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	淡黄橙色。
224	〃	〃	13.9 2.9 —— ——	体部内湾して外上方に立ち上がる。	〃	にぶい橙色。
225	〃	〃	12.4 2.4 —— ——	体部、内湾して外上方に立ち上がる。 口縁部はナデによりやや外反する。	〃	〃
226	〃	〃	12.4 (1.9) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	〃	淡橙色。
227	〃	〃	12.4 2.8 —— (8.0)	〃	〃	淡黄橙色。
228	〃	〃	12.3 3.4 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部がやや外反する。	〃	〃
229	〃	〃	12.3 2.3 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部が若干肥厚する。		淡黄橙色。 磨滅が著しい。
230	〃	〃	11.7 2.7 —— 4.4	平坦な底部から、ほぼ直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部が肥厚する。	内外面指頭圧痕が残る。	にぶい橙色。
231	〃	〃	12.3 2.9 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面、指頭圧痕。	橙色。
232	〃	〃	12.7 2.8 —— 6.5	体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して、上方に立ち上がる。	〃	にぶい橙色。
233	〃	〃	11.6 2.1 —— 8.0	平坦な底部から屈曲して外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	〃	〃
234	〃	〃	12.5 (2.6) —— ——	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部下が肥厚し、端部はやや外反する。	〃	橙色。
235	〃	〃	13.1 2.5 —— ——	体部は肥厚し、直線的に外上方に立ち上がる。	〃	にぶい黄橙色。
236	〃	〃	12.9 2.8 —— ——	体部は屈曲しながら直線的に外上方に立ち上がる。	〃	淡黄橙色。
237	〃	〃	11.6 1.9 —— 7.0	平坦な底部から内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部やや外反する。	〃	淡黄色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
238	SD 2	土師質土器 皿	12.3 2.4 —— 9.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。体部は肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面、指頭圧痕が残る。	橙色。
239	〃	〃	13.4 2.6 —— 8.0	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
240	〃	〃	13.0 3.0 —— 8.0	〃	〃	にぶい橙色。
241	〃	〃	11.6 2.1 —— 6.6	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚する。	〃	淡黄橙色。
242	〃	〃	11.4 2.5 —— ——	〃	〃	淡橙色。
243	〃	〃	12.4 3.3 —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
244	〃	〃	12.4 2.2 —— 9.0	〃	〃	淡橙色。
245	〃	〃	12.9 2.5 —— ——	体部は内湾気味に大きく開いて外上方に立ち上がる。	〃	〃
246	〃	〃	11.8 2.7 —— 6.8	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	〃	淡黄色。
247	〃	〃	12.2 2.5 —— 8.2	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。	〃	淡黄橙色。
248	〃	〃	12.7 2.4 —— 7.6	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。 口縁部下が肥厚する。	〃	淡橙色。
249	〃	〃	13.8 2.4 —— 9.0	〃	〃	淡黄色。
250	〃	〃	12.6 2.7 —— 10.2	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡黄橙色。
251	〃	〃	12.3 2.1 —— 8.2	〃	〃	〃
252	〃	〃	12.2 2.6 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部下が肥厚する。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
253	SD 2	土師質土器 皿	12.3 2.4 —— ——	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭圧痕が残る。	淡赤橙色。
254	〃	〃	12.7 2.4 —— ——	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部下が肥厚する。	〃	淡黄橙色。
255	〃	〃	13.0 2.4 —— ——	体部は、平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 端部をつまみ上げている。	〃	淡赤褐色。
256	〃	〃	11.7 (2.7) —— ——	体部は屈曲して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	〃	橙色。
257	〃	〃	11.1 1.5 —— ——	底部から屈曲して口縁部に立ち上がる。口縁端部は、ナデによりやや外反する。	口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色。
258	〃	〃	13.8 (2.1) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はナデによりやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	黄茶褐色。
259	〃	〃	13.1 (2.1) —— ——	〃	口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色。
260	〃	〃	12.4 2.2 —— ——	平坦な底部から内湾して外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。ナデにより端部がやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	灰黄褐色。
261	〃	〃	10.2 2.1 —— 7.5	平坦な底部から屈曲して直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はナデにより、外反する。	〃	淡黄橙色。
262	〃	〃	11.4 2.7 —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	〃	淡橙色。
263	〃	〃	12.0 2.3 —— ——	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。	淡黄橙色。
264	〃	〃	13.0 2.2 —— 4.4	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	〃
265	〃	〃	11.0 (2.6) —— ——	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、体部は若干肥厚し、口縁部は外反する。	〃	淡橙色。
266	〃	〃	13.5 2.1 —— 10.0	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	〃	淡黄橙色。
267	〃	〃	12.3 1.9 —— 7.4	〃	〃	にぶい黄橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
268	SD 2	土師質土器 皿	12.9 2.8 —— 7.8	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚し、口縁部はやや外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	淡黄橙色。
269	〃	〃	13.3 2.4 —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	〃	淡橙色。
270	〃	〃	13.4 2.4 —— 9.0	〃	〃	淡黄橙色。
271	〃	〃	11.9 2.6 —— ——	〃	〃	〃
272	〃	〃	13.0 2.5 —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部は肥厚する。	〃	〃
273	〃	〃	14.0 1.9 —— 10.2	平坦な底部から屈曲して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 口縁部下が若干肥厚する。	〃	橙色。
274	〃	〃	14.4 (2.1) —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部下が肥厚する。	〃	淡赤褐色。
275	〃	〃	14.8 2.7 —— ——	体部は、平坦な底部から屈曲し、外上方に立ち上がる。口縁部は外反する。	〃	淡茶褐色。
276	〃	〃	15.0 2.2 —— 9.6	平坦な底部から外上方に立ち上がり、口縁部下が肥厚する。	体部内外面指頭圧痕。	明茶褐色。
277	〃	〃	18.2 (2.7) —— ——	体部は直線的に大きく開いて外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部外面に指頭圧痕。	淡黄橙色。
278	〃	〃	14.0 (2.4) —— ——	体部は屈曲しながら外上方に立ち上がる。	口縁部、ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	内面、にぶい橙色。 外面、黒褐色。
279	〃	〃	14.7 2.6 —— 9.0	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	にぶい黄橙色。
280	〃	〃	14.4 2.8 —— 9.0	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡橙色。
281	〃	〃	13.7 2.5 —— 10.0	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 底部の指頭による凹凸が激しい。	〃	淡黄橙色。
282	〃	〃	14.1 (3.0) —— ——	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下は若干肥厚する。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
283	SD 2	土師質土器 皿	14.3 1.9 —— ——	体部は、大きく開いて外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。体部から口縁部にかけて肥厚する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面に指頭圧痕が残る。	淡黄橙色。
284	〃	〃	15.8 (1.9) —— ——	体部、内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙色。
285	〃	〃	26.3 2.8 —— ——	〃	〃	灰白色。
286	〃	〃	15.0 2.9 —— ——	〃	口縁部ヨコナデ。 内外面、比較的丁寧なナデによる調整が行われている。	淡黄色。
287	〃	土師質土器 小 杯	6.9 2.1 —— ——	平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	黄茶褐色。
288	〃	〃	7.1 2.1 —— 5.4	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。	〃	淡橙色。
289	〃	〃	6.1 2.2 —— 2.9	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄色。
290	〃	〃	6.1 1.8 —— 3.4	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。 口縁部はわずかに屈曲し、上方に立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。 口縁部ヨコナデ。	〃
291	〃	土師質土器 杯	11.7 3.4 —— 5.9	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄橙色に赤橙色が混じる。
292	〃	〃	11.3 4.1 —— 5.4	〃	内外面にロクロ痕。	灰黄色。
293	〃	〃	11.0 4.1 —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 口縁端部は面取りされている。	内面、ロクロ痕。 底部、回転糸切り痕。	淡黄橙色。
294	〃	〃	12.3 4.1 —— 5.0	体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内面に若干ロクロ痕が残る。	淡黄橙色。 磨滅が著しい。
295	〃	〃	11.3 4.6 —— 4.7	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 口縁部ヨコナデ。	淡黄色。
296	〃	〃	11.3 4.3 —— 4.0	〃	内外面、ロクロ痕。	橙色。
297	〃	〃	11.7 3.8 —— 5.2	〃	内面ロクロ痕。 底部回転糸切り痕有り。	淡黄色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
298	SD 2	土師質土器 杯	12.1 3.4 —— 5.6	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	淡黄色。
299	〃	〃	12.0 3.9 —— 4.9	〃	〃	〃
300	〃	〃	12.2 3.5 —— 5.6	体部は中位で屈曲し、口縁部は、外上方へ開いた立ち上がりを示す。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。 内面に指頭圧痕。	〃
301	〃	〃	12.2 3.8 —— 4.8	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕が残る。	淡黄橙色。
302	〃	〃	13.7 (3.3) —— ——	〃	〃	黄橙色。
303	〃	〃	11.8 (2.9) —— ——	体部はやや外反気味に外上方へ立ち上がる。	〃	淡赤褐色。 磨滅が著しい。
304	〃	〃	11.5 (2.7) —— ——	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は面をなし、上方につまみ上げられる。 器壁が他と比べて薄い。	〃	淡黄橙色。
305	〃	〃	—— (2.1) —— 5.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕が残る。 底部回転糸切り痕が残る。	淡黄色。
306	〃	〃	—— (2.8) —— 5.1	〃	内面、ロクロ痕。	〃
307	〃	〃	—— (4.0) —— 4.6	〃	〃	黄橙色。
308	〃	〃	9.2 2.5 —— 5.5	〃	〃	淡黄灰色。
309	〃	〃	—— (1.4) —— 6.5	〃	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕が残る。	茶褐色。
310	〃	〃	—— (2.9) —— 4.8	〃	内面、ロクロ痕。	淡黄褐色。
311	〃	〃	—— (2.5) —— 4.4	〃	〃	淡黄橙色。
312	〃	〃	—— (3.4) —— 5.0	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
313	SD 2	土師質土器 杯	—— (3.3) —— 4.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内外面、ロクロ目有り。	淡黄色。
314	〃	〃	—— (2.5) —— 4.6	〃	〃	淡黄橙色。
315	〃	〃	—— (2.6) —— 5.2	〃	内面にロクロ痕。	淡橙色。
316	〃	〃	—— (2.9) —— 5.3	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	淡黄橙色。
317	〃	〃	—— (2.8) —— 5.4	〃	内面ロクロ痕有り。	淡黄色。
318	〃	〃	12.0 4.2 —— 4.8	〃	内面ロクロ痕有り。 底部回転糸切り痕。	淡黄色。 底部に煤付着。
319	〃	〃	—— (4.2) —— 3.7	〃	〃	淡黄橙色。 砂粒はほとんど含まない。
320	〃	〃	—— (3.5) —— 3.8	〃	〃	淡橙色。
321	〃	〃	12.2 4.0 —— 5.8	〃	〃	淡黄色。
322	〃	〃	—— (2.4) —— 5.4	〃	〃	〃
323	〃	土師質土器 鍋	16.8 (9.3) —— ——	底部から内湾して、体部は上方に立ち上がり、肩部は、外上方に突出する。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。	口縁部、肩部はヨコナデで、肩部に指頭圧痕が残る。体部外面肩部以下に叩目、内面はナデ調整。	にぶい橙色。 体部外面肩部下に煤付着。
324	〃	〃	20.0 (8.5) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、肩部は外上方に突出する。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。	口縁部、肩部は内外面共ヨコナデ、体部は右上がりの叩目が施され、体部内面ナデ調整。	内面、淡橙色。 外面、にぶい橙色。 体部外面肩部下に煤付着。
325	〃	〃	19.5 (7.1) —— ——	肩部は断面三角形を呈し、外上方に突出する。口縁部は、内傾して立ち上がるが、端部は肥厚し広く内傾する面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面に指頭圧痕が残る。体部外面は右上がりの叩目、内面はナデ調整。	暗褐色。 肩部から体部にかけて煤付着。
326	〃	〃	20.2 (10.7) —— ——	体部は大きく内湾して立ち上がり、肩部は断面三角形で外上方に突出する。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。	口縁部と肩部は強いヨコナデ、体部は外面右上がりの叩目。内面はナデ調整。	橙色。 肩部以下に煤付着。
327	〃	〃	22.2 (9.9) —— ——	〃	口縁部と肩部は内外面ヨコナデ。 体部外面は、上位に指頭圧痕、中位に右上がりの叩目、体部内面に指頭圧痕。	褐灰色。 体部に煤付着。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
328	SD 2	土師質土器 鍋	19.7 (4.1) —— ——	肩部は外上方に突出し、口縁部は内傾して立ち上がる。端部は内傾した面をなす。	口縁部外面、肩部はヨコナデ。体部外面、右上がりの叩目。内面ナデ調整。	にぶい橙色。肩部下に煤付着。
329	〃	〃	22.2 (11.4) —— ——	体部は内湾し、上方に立ち上がり、肩部は外上方に突出する。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は若干肥厚し、内傾する面を持つ。	口縁部、肩部は内外面ヨコナデで肩部には指頭圧痕が残る。体部外面は右上りの叩目、内面はナデ調整。	橙色。
330	〃	〃	33.8 (16.1) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は肥厚する。	口縁部、頸部の外面に指頭圧痕が残る。内面は横位のハケ目調整で、口縁部内面には、若干指頭圧痕が残る。	淡黄橙色。体部外面の一部に煤付着。
331	〃	〃	35.0 (9.0) —— ——	口縁部は内傾する。双耳である。	口縁部内面、体部下位に若干指頭圧痕が残る。内面体部下位に指頭圧痕。	〃
332	〃	土師質土器 釜	15.6 (10.8) —— ——	胴部上位から口縁部にかけて内傾した立ち上がりを示す。口縁部は肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部下と胴部内外面に指頭圧痕が残る。肩部内面に粘土紐痕が観察できる。	にぶい黄橙色。
333	〃	瓦質土器 擂鉢	25.4 (4.3) —— ——	体部はやや内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は若干肥厚して、端部は外傾する。指おさえの片口。	外面に指頭圧痕有り。内面に8本1単位の条線が施され、その上に横ハケが施される。	褐灰色。
334	〃	瓦質土器 鍋	19.0 (4.6) —— ——	胴部は内湾して上方へ立ち上がり、頸部で屈曲し、外反した口縁部にいたる。	頸部と胴部に指頭圧痕有り。	
335	〃	〃	(18.8) (8.3) —— ——	胴部は大きく内湾して、頸部で屈曲し上方に立ち上がる。端部は水平面をなす。	横方向のナデ。	
336	〃	〃	18.8 (4.7) —— ——	内湾した胴部から、頸部で屈曲し、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。	口縁部内外面ともヨコナデ。	
337	〃	〃	20.6 (4.3) —— ——	内傾した胴部から、やや外反した口縁部にいたる。端部はわずかに外傾した面をなす。	口縁部ヨコナデの後、指頭圧痕が残る。口縁端部に浅い一条の凹線。	胴部外面に煤付着。
338	〃	〃	17.8 (6.4) —— ——	内傾した胴部から、直立した口縁部にいたる。端部は水平面をなす。	ロクロナデ。	内面、灰色。外面、黒灰色。
339	〃	〃	11.4 (5.8) —— ——	大きく内湾した胴部から頸部で屈曲した後、やや外反気味の口縁部にいたる。端部は外傾する面をなす。	内面ヨコナデ。頸部に指頭圧痕。	
340	〃	〃	31.6 (5.7) —— ——	〃	内外面ヨコナデ。胴部に指頭圧痕。	
341	〃	〃	23.2 (6.6) —— ——	大きく内湾した胴部から、頸部で屈曲した後、口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。端部は外傾する面をなす。	内面、ヨコナデ。外面、頸部に指頭圧痕。	
342	〃	〃	25.0 (6.3) —— ——	体部は大きく内湾し、頸部で屈曲して、外反した口縁部にいたる。端部は、外傾した面をなす。	体部内面に一部ヨコナデ。頸部外面、体部内面に指頭圧痕。口縁端部に一条の浅い凹線。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
343	SD 2	瓦質土器 鍋	22.6 (11.5) —— ——	大きく内湾した体部から、頸部で屈曲した後、外反気味の口縁部にいたる。端部は水平面をなす。	体部外面に指頭圧痕。	
344	〃	〃	19.4 (3.6) —— ——	大きく内湾した体部から、頸部で屈曲した後、外反気味の口縁部にいたる。端部は外傾した面をなす。	口縁部内外面ヨコナデの後、指頭圧痕が残る。口縁端部にナデによる凹線がみられる。	
345	〃	瓦質土器 釜	22.4 (7.1) —— ——	口縁部は内傾して立ち上がる。鍔は、水平に長く突出。口縁端部は内傾する面を持つ。	胴部内面ハケ調整の後ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。 鍔端部は、ナデにより凹状。	鍔以下に煤付着。
346	〃	〃	20.5 (7.2) —— ——	〃	〃	〃
347	〃	擂鉢	—— (5.6) —— 18.8	未調整の平坦な底部から、外上方に開く体部を持つ。	9本単位の条線。 ロクロナデ。	内面、赤灰色。 外面、にぶい赤橙色。 備前焼。
348	〃	〃	27.2 (5.0) —— ——	体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は肥厚して上方に立ち上がる。口縁部外面に一条の凹線、内面に弱い段を有す。	〃	備前焼。
349	〃	〃	—— (4.2) —— 17.4	未調整の底部から体部は直線的に立ち上がる。	条線の単位は不明。 ロクロナデ。	〃
350	〃	〃	37.0 (4.3) —— ——	体部は直線的。口縁部は肥厚して、下方にわずかに拡張される。	〃	〃
351	〃	〃	24.8 (4.6) —— ——	体部は直線的で、口縁部は上下に拡張される。	〃	〃
352	〃	〃	29.6 (6.6) —— ——	直線的に立ち上がってきた体部が外反気味に口縁部にいたる。口縁部は上方に拡張され、内傾する。	〃	〃
353	〃	〃	—— (8.1) —— ——	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は拡張され、上方に立ち上がる。	〃	〃
354	〃	〃	21.6 (4.0) —— ——	体部は直線的で、口縁部は肥厚して、下方に拡張される。	〃	〃
355	〃	壺	14.2 (7.4) —— ——	内傾した肩部から、頸部は屈曲して直立し、玉縁状の口縁部にいたる。	ロクロナデ。 肩部に自然釉がかかる。	〃
356	〃	甕	33.0 (6.0) —— ——	頸部は、直立し、口縁部は玉縁状を呈する。	ロクロナデ。	〃
357	〃	〃	35.0 (7.8) —— ——	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
358	SD 2	甕	40.6 (7.9) —— ——	内傾した肩部から屈曲して、頸部は直立、玉縁状の口縁部にいたる。	ロクロナデ。	備前焼。
359	〃	小壺	—— (8.2) —— 5.0	底部は広く、胴部のみ球形を呈す。	ロクロナデ。	瀬戸。
360	〃	青磁 椀	14.0 (4.8) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	口縁部に1条の沈線と、片切彫りで幅広い蓮弁文が施される。	青緑色釉。 胎土、灰色。
361	〃	〃	13.3 (4.9) —— ——	〃	外面口縁部に雷文帯、体部に蓮弁文が施される。内外面貫入あり。	薄い青緑色釉。 胎土、灰白色。
362	〃	〃	14.8 (4.3) —— ——	〃	口縁部内外面に雷文帯が施されるが、外面は磨滅が著しくはっきりしない。体部内面に文様が施される。	淡緑黄色釉。 胎土、淡灰褐色。
363	〃	〃	(14.6) (4.9) —— ——	〃	外面にヘラ先による線描細蓮弁文が施される。縦線と剣頭とが蓮弁の単位を意識している。内外面貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
364	〃	〃	13.8 (5.5) —— ——	〃	〃	〃
365	〃	〃	14.3 (4.5) —— ——	〃	〃	〃
366	〃	〃	13.2 (5.6) —— ——	〃	体部外面にヘラ先による蓮弁が施される。山形の剣頭は省略される。内外面貫入あり。	〃
367	〃	〃	12.9 (4.5) —— ——	〃	口縁部外面に雷文帯、体部外面に幅広の蓮弁が施されている。	〃
368	〃	〃	13.6 (4.5) —— ——	〃	無文である。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色で部分的に赤橙色に発色している。
369	〃	〃	15.0 (2.8) —— ——	口縁部は外反する。	無文で、内外面貫入あり。	淡青緑色釉。 胎土、灰色。
370	〃	〃	16.6 (2.1) —— ——	〃	無文である。	青緑色釉。 胎土、乳白色。
371	〃	〃	(13.6) (4.0) —— ——	体部は、内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。	無文で、内外面貫入あり。	灰緑色釉。 胎土、灰色。
372	〃	〃	—— (2.8) —— 6.0	底部の器壁は厚く、比較的高くしっかりとした高台を持つ。高台内の削りは浅い。	見込に界線あり。目跡が三ケ所認められる。内外面貫入あり。畳付、外底は露胎し、赤褐色に発足する。	青緑色釉。 胎土、灰色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
373	SD 2	青磁 碗	—— (3.3) —— 6.1	底部の器壁が厚く高台部もしっかりとして安定感がある。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	見込に数ケ所目跡が残る。 外底は、蛇の目状に釉を削り取られ、それ以外の全面に施釉される。内外面に貫入あり。	青緑色釉。 胎土、灰白色。 露胎部、赤褐色。
374	〃	〃	—— (2.2) —— 5.2	〃	高台畳付まで施釉され、高台内及び外底は露胎する。見込に界線あり。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
375	〃	〃	—— (3.4) —— 4.9	端部を斜めに削り取り、畳付を狭くした高台を持ち、器壁の厚い底部から、体部は、内湾して立ち上がる。	釉は、畳付を越えて、高台内面途中までかかり、外底は無釉。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
376	〃	〃	—— (2.6) —— 7.0	高台内面を斜位に削り取り、畳付を狭くしている。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	見込中央部は円形に施釉されず露胎。釉は、一部畳付を越えて、外底までかかるが、大部分の外底は露胎。内外面に貫入あり。 露胎部脇に砂溶着。	薄い青緑色釉。 胎土、灰色。
377	〃	青磁 盤	—— (3.5) —— 11.0	底部は厚く、体部は大きく開いて、外上方に立ち上がる。畳付は、丸くおさめられる。	釉は1㎜の厚さで施され、畳付を越えて外底までかかる。外底はその後、蛇の目状に釉を削り取られる。	濃緑色釉。 胎土、白色。 露胎部は赤く発色。
378	〃	白磁 皿	—— (1.4) —— 3.8	高台アーチ状を呈す。		白濁色。
379	〃	〃	(9.0) 2.2 —— 4.5	アーチ状の高台を有する底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	全面に施釉され、見込に目跡が三ケ所確認される。	灰白色釉。 胎土、灰白色。
380	〃	土錘	全長 3.5 直径 8.5 重量(g) 2.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径4.5㎜の円孔を穿つ。		
381	〃	〃	全長 4.1 直径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径2.5㎜。		
382	〃	〃	全長 4.8 直径 1.3 重量(g) 7.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径5㎜。		
383	〃	〃	全長(2.1) 直径 0.9 重量(g) 2.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径4㎜。		
384	〃	〃	全長 3.8 直径 0.9 重量(g) 4.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径3㎜。		
385	〃	〃	全長 3.4 直径 0.8 重量(g) 2.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径4㎜。		
386	〃	〃	全長 3.2 直径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径2㎜。		
387	〃	〃	全長 5.5 直径 1.1 重量(g) 6.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径4.5㎜。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
388	SD 2	土錘	全長 3.2 直径 0.7 重量(g) 2.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径3㎜の円孔を穿つ。		
389	〃	〃	全長 3.8 直径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径4㎜。		
390	〃	〃	全長(3.3) 直径 1.0 重量(g) 2.5	〃		灰白色。
391	〃	〃	全長 3.1 直径 1.0 重量(g) 3.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径3㎜。		灰色。
392	〃	〃	全長 3.6 直径 0.8 重量(g) 2.5	〃		
393	〃	〃	全長 3.5 直径 0.9 重量(g) 3.0	〃		黒色。
394	〃	〃	全長 3.1 直径 1.0 重量(g) 3.0	〃		灰色。
395	〃	〃	全長(3.0) 直径 0.9 重量(g) 2.5	〃		
396	〃	〃	全長 3.6 直径 0.9 重量(g) 2.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径4㎜。		
397	〃	〃	全長 3.3 直径 0.8 重量(g) 2.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径2㎜。		
398	〃	〃	全長 3.6 直径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径3㎜。		
399	〃	〃	全長(4.3) 直径 1.8 重量(g) 12.5	〃		
400	〃	〃	全長(3.9) 直径 1.0 重量(g) 2.5	〃		
401	〃	〃	全長 4.3 直径 0.9 重量(g) 3.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。円孔は直径3.5㎜。		
402	〃	瓦質土器 火鉢	—— (8.5) —— ——	口縁部は内側に水平にのびる。	二重の突帯中に斜格子の文様がつく。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
403	SD 2	皿	—— (1.3) —— 4.8	体部は大きく開く。	見込、蛇の目状釉ハギ。 畳付に砂溶着。	伊万里系。
404	〃	猪口	7.6 (3.1) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。		白色釉。 胎土、乳白色。 伊万里系。
405	〃	皿	12.0 4.0 —— 4.6	断面逆台形のしっかりとした高台を持つ底部から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外折し、端部は上方へ肥厚する。	釉が、体部中位から下位にかかる。 見込に目跡が5ケ所残る。底部から高台にかけては露胎。	唐津焼。
406	〃	碗	9.9 7.1 —— 5.0	高台は断面長方形でやや開き気味である。体部は内湾して立ち上がり、やや外傾して口縁部にいたる。	体部下位まで釉が施され、底部から高台にかけて、化粧がけがなされる。	唐津。
407	〃	〃	—— (6.2) —— 4.8	高台内を斜めに削られた、断面三角形の高台を有す。体部は内湾気味に立ち上がり、直線的に上方に延びる。	全面に施釉され、畳付のみ釉が削り取られる。 畳付に砂が溶着。	京焼系。
408	SD 3	土師質土器 小皿	6.2 1.4 —— 4.4	体部は、直線的に立ち上がる。口縁端部は面取りされ、外傾する面をなす。	ロクロナデ。 底部回転糸切り痕あり。	
409	〃	土師質土器 皿	10.6 3.0 —— ——	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は屈曲してやや外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕あり。	
410	〃	〃	14.0 3.9 —— ——	〃	〃	
411	〃	土師質土器 杯	—— (1.7) —— 4.8	体部は直線的に立ち上がる。	内面にロクロ痕が残る。 底部回転糸切り痕あり。	
412	〃	擂鉢	23.5 (3.8) —— ——	体部は直線的で口縁部は上下に拡張される。	ロクロナデ。	備前焼。
413	SD 4	土師質土器 皿	14.3 (2.3) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部指頭圧痕が残る。	
414	〃	擂鉢	—— (8.2) —— 13.2	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	ロクロナデ調整の後、指頭圧痕が残る。底部未調整。 9本単位の条線が下から上へ施される。	
415	〃	青磁 稜花皿	13.0 (2.0) —— ——	体部下位で屈曲し、大きく外反して口縁部にいたる。端部は、稜花状を呈する。	口縁部内外面に3条の沈線を稜花状に配する。内外面貫入あり。	
416	〃	青磁 碗	—— (3.3) —— 5.4	高台は断面長方形で、端部外側を削り、畳付を狭くしている。高台内の削りは、やや浅い。体部は内湾気味に立ち上がる。	釉は高台外までかかる。 内外面貫入あり。	緑色釉。 胎土、灰白色。
417	SD 7	土師質土器 皿	12.5 2.5 —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は若干外反する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
418	SD 7	土師質土器 皿	15.5 2.7 —— ——	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部下はナデのため肥厚する。	口縁部ヨコナデ。 体部内外面指頭圧痕。	
419	〃	〃	12.0 (2.5) —— ——	〃	〃	淡橙色。
420	〃	〃	13.2 (2.2) —— ——	口縁下はヨコナデのため肥厚する。	〃	淡黄橙色。
421	〃	〃	11,3 (2.7) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部下、ナデのためやや肥厚する。	〃	灰白色。
422	〃	土師質土器 小杯	6.8 2.2 —— 3.1	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
423	〃	〃	6.0 2.4 —— 2.8	〃	〃	
424	〃	〃	6.7 2.3 —— 2.7	〃	〃	
425	〃	〃	6.5 2.3 —— 2.4	〃	〃	
426	〃	〃	6.6 2.4 —— 3.0	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部はやや内湾する。	内面にロクロ痕。	
427	〃	〃	6.6 2.3 —— 3.9	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
428	〃	〃	6.2 2.2 —— 2.9	〃	〃	
429	〃	〃	6.3 2.1 —— 3.0	〃	内面にロクロ痕。	
430	〃	〃	6.4 2.1 —— 2.8	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面ロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
431	〃	〃	6.1 2.1 —— 3.6	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	内面にロクロ痕。	
432	〃	〃	6.3 2.1 —— 2.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
433	SD 7	土師質土器 小杯	6.4 / 2.3 / —— / 3.0	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	内外面にロクロ痕。底部回転糸切り痕。	
434	〃	〃	6.7 / 2.1 / —— / 2.8	〃	内面にロクロ痕。	
435	〃	〃	6.7 / 2.2 / —— / 2.9	〃	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕。	
436	〃	〃	6.5 / 2.1 / —— / 3.0	〃	〃	
437	〃	〃	6.9 / 2.2 / —— / 2.9	〃	〃	
438	〃	〃	6.5 / 2.0 / —— / 2.8	〃	〃	
439	〃	〃	6.2 / 2.0 / —— / 2.9	〃	〃	
440	〃	〃	6.5 / 2.1 / —— / 3.0	〃	内面にロクロ痕。	
441	〃	〃	6.2 / 1.9 / —— / 2.4	〃	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕。	
442	〃	〃	6.5 / 2.3 / —— / 2.7	〃	〃	淡橙色。
443	〃	〃	6.4 / 2.5 / —— / 2.6	〃	〃	〃
444	〃	〃	6.5 / 2.2 / —— / 2.8	〃	〃	
445	〃	〃	6.4 / 2.1 / —— / 2.8	〃	〃	
446	〃	〃	6.6 / 2.3 / —— / 3.3	〃	〃	
447	〃	〃	6.6 / 2.1 / —— / 2.8	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
448	SD 7	土師質土器 小杯	6.2 / 2.3 / —— / 2.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。底部回転糸切り痕あり。	
449	〃	〃	6.8 / 2.0 / —— / 3.3	〃	〃	
450	〃	〃	6.8 / 2.0 / —— / 3.2	〃	〃	
451	〃	〃	6.6 / 1.9 / —— / 3.6	〃	〃	
452	〃	〃	7.3 / 2.3 / —— / 3.1	〃	〃	
453	〃	〃	6.5 / 2.4 / —— / 3.2	〃	〃	
454	〃	〃	7.8 / 2.1 / —— / 3.2	〃	〃	
455	〃	〃	7.2 / 2.4 / —— / 2.5	〃	〃	
456	〃	〃	6.7 / 2.3 / —— / 2.5	〃	〃	
457	〃	〃	8.0 / 2.0 / —— / 3.0	〃	〃	
458	〃	〃	6.6 / 2.0 / —— / 2.8	〃	〃	
459	〃	〃	6.0 / 2.2 / —— / 2.2	〃	〃	
460	〃	〃	6.1 / 2.1 / —— / 3.4	〃	〃	
461	〃	〃	6.3 / 2.3 / —— / 2.8	〃	〃	
462	〃	〃	6.1 / 2.0 / —— / 3.0	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
463	SD 7	土師質土器 小杯	6.2 2.1 —— 3.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面、ロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
464	〃	〃	6.1 2.1 —— 3.2	〃	内面にロクロ痕。	
465	〃	〃	7.9 2.2 —— 3.2	〃	〃	
466	〃	〃	6.6 1.9 —— 3.3	〃	〃	
467	〃	〃	5.8 2.5 —— 3.1	〃	〃	
468	〃	〃	6.8 2.0 —— 3.0	〃	〃	
469	〃	〃	6.9 2.5 —— 3.8	〃	〃	
470	〃	〃	7.0 (1.6) —— ——	〃	〃	
471	〃	〃	—— (2.1) —— 3.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
472	〃	〃	—— (1.7) —— 3.8	〃	〃	
473	〃	〃	6.5 2.3 —— 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	
474	〃	〃	6.7 2.1 —— 3.0	〃	〃	
475	〃	〃	7.3 2.4 —— 3.1	〃	〃	
476	〃	〃	7.3 2.2 —— 3.8	〃	〃	橙色。
477	〃	〃	6.6 1.9 —— 3.5	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
478	ＳＤ 7	土師質土器 杯	11.9 / 4.5 / —— / 4.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
479	〃	〃	11.2 / 4.0 / —— / 3.8	〃	〃	
480	〃	〃	11.0 / 3.8 / —— / 3.8	〃	〃	
481	〃	〃	11.0 / 3.8 / —— / 3.8	〃	〃	
482	〃	〃	11.6 / 3.7 / —— / 3.7	〃	内面にロクロ痕。	
483	〃	〃	11.2 / 4.2 / —— / 4.2	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
484	〃	〃	12.3 / 4.0 / —— / 4.1	〃	〃	
485	〃	〃	11.5 / 3.9 / —— / 3.6	〃	内面にロクロ痕。	
486	〃	〃	10.9 / 3.2 / —— / 3.4	〃	〃	
487	〃	〃	12.6 / 3.9 / —— / 3.8	〃	〃	
488	〃	〃	11.6 / 3.8 / —— / 3.4	〃	〃	
489	〃	〃	11.4 / 4.2 / —— / 4.3	〃	〃	
490	〃	〃	10.6 / 4.2 / —— / 3.6	〃	〃	
491	〃	〃	12.9 / 3.7 / —— / 4.2	〃	〃	
492	〃	〃	12.8 / 4.4 / —— / 4.5	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
493	SD 7	土師質土器 杯	11.4 4.0 —— 4.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。	
494	〃	〃	12.4 3.8 —— 4.4	〃	〃	
495	〃	〃	11.3 4.5 —— 3.4	〃	〃	
496	〃	〃	13.0 4.1 —— 4.2	〃	〃	
497	〃	〃	11.8 4.0 —— 3.4	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	〃	
498	〃	〃	12.4 4.1 —— 4.0	体部は、わずかに外反気味の立ち上がりを示す。	〃	
499	〃	〃	10.8 3.8 —— 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部を丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 体部内面に墨書が観察できるが意味不明。	
500	〃	〃	10.5 4.1 —— 3.7	体部は直線的で、口縁部は、やや内湾気味に立ち上がる。	内面にロクロ痕が残る。	
501	〃	〃	11.6 3.9 —— 3.5	〃	内外面にロクロ痕。	
502	〃	〃	10.6 3.5 —— 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
503	〃	〃	11.7 4.2 —— 4.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや内湾して口縁部にいたる。	〃	淡黄橙色。
504	〃	〃	10.8 3.7 —— 3.9	〃	〃	〃
505	〃	〃	11.2 4.1 —— 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	〃	〃
506	〃	〃	10.5 3.8 —— 4.0	〃	〃	淡橙色。
507	〃	〃	11.1 4.0 —— 3.8	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
508	SD 7	土師質土器 杯	11.4 4.0 — 3.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、丸くおさめた口縁部にいたる。	内面にロクロ痕あり。	内面、淡橙色。 外面、橙色。
509	〃	〃	11.9 3.7 — 3.8	〃	〃	淡橙色。
510	〃	〃	11.2 3.8 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや内湾気味に、口縁部にいたる。	内面にロクロ痕あり。 底部回転糸切り痕あり。	淡橙色。 砂粒をほとんど含まない。
511	〃	〃	10.8 4.2 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	淡橙色。
512	〃	〃	11.0 4.0 — 4.0	〃	〃	〃
513	〃	〃	11.0 4.2 — 3.7	〃	〃	〃
514	〃	〃	10.5 3.6 — 3.7	〃	〃	淡赤橙色。
515	〃	〃	10.7 4.3 — 3.8	〃	〃	淡橙色。
516	〃	〃	11.0 3.9 — 3.7	〃	〃	〃
517	〃	〃	12.0 3.6 — 3.7	体部は、やや内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は外傾した面をなす。	〃	〃
518	〃	〃	11.8 3.7 — 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	〃	〃
519	〃	〃	10.6 4.1 — 4.0	〃	〃	〃
520	〃	〃	11.5 4.2 — 3.5	〃	〃	〃
521	〃	〃	11.6 4.5 — 4.0	〃	〃	〃
522	〃	〃	11.9 3.7 — 3.8	体部は内湾して外上方に立ち上がり、丸くおさめた口縁部にいたる。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
523	SD 7	土師質土器 杯	11.2 4.2 —— 3.8	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	淡橙色。
524	〃	〃	11.2 4.0 —— 4.0	〃	〃	〃
525	〃	〃	11.2 3.9 —— 3.8	〃	〃	〃
526	〃	〃	12.8 4.5 —— 4.5	〃	〃	〃
527	〃	〃	11.1 4.2 —— 3.3	〃	〃	〃
528	〃	〃	8.6 3.2 —— 3.0	〃	内面にロクロ痕。	淡黄橙色。 磨滅が著しい。
529	〃	〃	11.7 4.1 —— 3.6	〃	〃	〃
530	〃	〃	11.5 3.2 —— 3.7	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	灰白色。
531	〃	〃	11.6 4.1 —— 3.4	〃	〃	〃
532	〃	〃	11.6 3.9 —— 4.1	〃	〃	〃
533	〃	〃	12.6 (3.1) —— ——	体部は直線的で、口縁端部は丸くおさめられる。	内面にロクロ痕。	
534	〃	〃	12.8 (4.0) —— ——	〃	〃	
535	〃	〃	12.2 (2.7) —— ——	〃	〃	淡黄橙色。
536	〃	〃	12.0 3.6 —— 4.1	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。端部は外傾した面をなす。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	〃
537	〃	〃	—— (2.4) —— 3.7	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
538	SD 7	土師質土器 杯	—— / (3.3) / —— / 3.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	
539	〃	〃	—— / (3.0) / —— / 3.6	〃	〃	
540	〃	〃	—— / (3.1) / —— / 3.5	〃	〃	
541	〃	〃	—— / (1.7) / —— / 5.5	〃	内面にロクロ痕。	
542	〃	〃	—— / (3.1) / —— / 4.3	〃	〃	
543	〃	〃	—— / (3.2) / —— / 4.5	〃	〃	
544	〃	〃	—— / (2.7) / —— / 3.7	〃	〃	
545	〃	〃	—— / (3.0) / —— / 4.0	〃	〃	
546	〃	〃	—— / (1.9) / —— / 3.5	〃	〃	
547	〃	〃	—— / (2.6) / —— / 4.0	〃	〃	
548	〃	〃	—— / (2.2) / —— / 3.6	〃	〃	
549	〃	〃	—— / (3.0) / —— / 4.6	〃	〃	
550	〃	〃	—— / (2.1) / —— / 3.4	〃	〃	
551	〃	〃	—— / (2.7) / —— / 4.0	〃	〃	
552	〃	〃	—— / (3.6) / —— / 4.1	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
553	SD 7	土師質土器 杯	11.3 4.1 —— 3.9	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕あり。	淡橙色。
554	〃	〃	10.9 4.2 —— 3.8	〃	〃	〃
555	〃	〃	11.2 4.1 —— 3.8	〃	〃	〃
556	〃	〃	—— (2.8) —— 3.9	体部は内湾気味に立ち上がる。	〃	〃
557	〃	〃	—— (3.0) —— 3.8	体部は直線的に立ち上がる。	〃	〃
558	〃	〃	—— (3.3) —— 3.8	体部は内湾気味に立ち上がる。	〃	〃
559	〃	〃	—— (2.7) —— 4.0	〃	内面にロクロ痕あり。	
560	〃	〃	—— (2.1) —— 3.9	〃	〃	
561	〃	〃	—— (2.8) —— 3.7	〃	〃	
562	〃	〃	—— (2.9) —— 3.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	
563	〃	〃	—— (2.3) —— 3.5	〃	〃	
564	〃	〃	—— (3.3) —— 3.7	〃	〃	
565	〃	〃	—— (3.0) —— 3.5	〃	〃	
566	〃	〃	—— (2.7) —— 5.1	〃	〃	
567	〃	〃	—— (2.5) —— 4.0	〃	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
568	ＳＤ 7	土師質土器 杯	―― (2.5) ―― 4.3	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕あり。	
569	〃	〃	―― (2.7) ―― 4.0	〃	〃	
570	〃	〃	―― (3.6) ―― 4.0	〃	〃	
571	〃	〃	―― (2.7) ―― 4.2	〃	〃	
572	〃	〃	―― (2.4) ―― 3.6	〃	〃	
573	〃	〃	―― (2.8) ―― 4.6	〃	〃	
574	〃	〃	―― (2.9) ―― 3.7	〃	内外面にロクロ痕。	
575	〃	〃	―― (2.2) ―― 5.3	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
576	〃	〃	―― (2.9) ―― 3.4	〃	内面にロクロ痕。	
577	〃	〃	―― (2.5) ―― 4.4	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	淡黄橙色。
578	〃	〃	―― (1.5) ―― 4.2	〃	〃	〃
579	〃	〃	―― (2.1) ―― 5.2	〃	〃	〃
580	〃	〃	―― (2.5) ―― 3.8	〃	〃	〃
581	〃	〃	―― (1.6) ―― 3.7	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。 底部に平行圧痕あり。	〃
582	〃	〃	―― (3.2) ―― 3.5	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	淡橙色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
583	SD 7	土師質土器杯	—— / (3.0) / —— / 3.2	体部は直線的に立ち上がる。	内面にロクロ痕あり。	
584	〃	〃	—— / (2.7) / —— / 4.0	〃	〃	
585	〃	〃	—— / (3.1) / —— / 4.3	〃	〃	
586	〃	〃	—— / (1.9) / —— / 4.0	〃	〃	淡黄橙色。
587	〃	〃	—— / (3.0) / —— / 4.4	〃	〃	〃
588	〃	〃	—— / (2.9) / —— / 4.4	〃	〃	淡橙色。
589	〃	〃	—— / (3.2) / —— / 3.7	〃	〃	〃
590	〃	〃	—— / (2.0) / —— / 4.2	〃	内面にロクロ痕あり。 底部回転糸切り。	〃
591	〃	〃	—— / (2.1) / —— / 3.8	〃	内面にロクロ痕。	淡黄橙色。
592	〃	〃	—— / (1.9) / —— / 3.8	〃	〃	〃
593	〃	〃	—— / (2.1) / —— / 4.2	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り。	
594	〃	〃	—— / (2.7) / —— / 4.2	〃	〃	
595	〃	〃	—— / (3.2) / —— / 4.4	〃	内面にロクロ痕。	
596	〃	〃	—— / (3.6) / —— / 3.9	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り。	淡黄橙色。
597	〃	〃	—— / (2.3) / —— / (3.9)	〃	内面にロクロ痕。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
598	SD 7	土師質土器 杯	—— (1.9) —— 3.9	体部は内湾気味に立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡黄橙色。
599	〃	〃	—— (2.0) —— 3.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	〃
600	〃	〃	—— (2.6) —— 4.2	〃	〃	〃
601	〃	〃	—— (2.3) —— 4.1	〃	〃	淡橙色。
602	〃	〃	—— (2.2) —— 3.8	〃	〃	〃
603	〃	〃	—— (2.1) —— 3.7	〃	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り。 底面に平行圧痕有り。	〃
604	〃	〃	—— (2.2) —— 3.7	〃	内面にロクロ痕。	〃
605	〃	〃	—— (1.9) —— 3.7	〃	〃	〃
606	〃	〃	—— (2.3) —— 3.9	〃	〃	〃
607	〃	土師質土器 鍋	31.3 (10.3) —— ——	腰部で屈曲した後、体部は直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は水平面を成す。	内外面にハケ目が残り、口縁部外面に指頭圧痕がみられる。	
608	〃	〃	18.4 (5.8) —— ——	肩部は断面三角形。口縁部は内傾して立ち上がり、端部は内傾した面をなす。	口縁部内外面と肩部はヨコナデで仕上げられ、肩部に指頭圧痕が残る。体部外面に叩目有り。	橙色。 肩部以下に煤付着。
609	〃	〃	19.8 (6.0) —— ——	〃	〃	にぶい橙色。 外面に煤付着。
610	〃	〃	17.4 (5.7) —— ——	〃	〃	〃
611	〃	〃	22.2 (4.3) —— ——	〃	〃	〃
612	〃	〃	10.6 (4.6) —— ——	肩部は断面三角形で外上方に突出する。口縁部は大きく内傾し、端部は内傾した面を持つ。	口縁部と肩部は強いヨコナデ。体部は内外面ともナデ調整。	橙色。 外面肩部以下に煤付着。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
613	SD 7	擂鉢	23.4 (4.8) —— ——	口縁部は肥厚し、上方に拡張される。	条線は10本単位。 ロクロナデ。	内面、黄灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
614	〃	〃	31.8 11.8 —— 14.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、やや外反気味に口縁部にいたる。口縁部は上下に拡張される。	条線は8本単位。 ロクロナデ。	淡橙色。 備前焼。
615	〃	〃	35.4 (7.9) —— ——	〃	〃	内面、灰赤色。 外面、赤褐色。
616	〃	〃	32.3 (7.2) —— ——	体部はやや外反して口縁部にいたる。口縁部は肥厚し上方に拡張される。	条線は10本単位。 ロクロナデ。	内面、灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
617	〃	〃	26.2 (4.3) —— ——	口縁部は上方及び外方に拡張される。	条線の単位は不明。 ロクロナデ。	内面、褐灰色。 外面、灰白色。 備前焼。
618	〃	〃	—— (6.2) —— 16.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	条線は、7本単位。 ロクロナデ、指頭圧痕有り。	淡黄色。 備前焼。
619	〃	〃	—— 7.6 —— 10.4	〃	条線は、9本単位。 ロクロナデ。体部内面に指頭圧痕。	内面、明青灰色。 外面、にぶい赤橙色。 備前焼。
620	〃	甕	36.0 (6.2) —— ——	頸部は直立し、口縁部は、玉縁状を呈する。	ロクロナデ。	灰赤色。 備前焼。
621	〃	青磁 稜花皿	—— (2.9) —— 6.6	高台は、端部外面を面取りし、畳付を狭くしている。腰部で屈曲した後、体部は外反した立ち上がりを示す。	全面施釉後、外底は、蛇の目状に釉を削り取られる。内外面貫入有り。見込に1条の沈線と印花文有り。	淡緑色釉。 胎土、灰白色。
622	〃	青磁 碗	14.2 (3.9) —— ——	体部は内湾気味に立ち上がり口縁部にいたる。	体部外面に片切彫のヘラ描き蓮弁文。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
623	〃	〃	—— (4.6) —— 5.5	高台は断面長方形で、外面端部は面取られる。体部は内湾して立ち上がる。	体部に片切彫の蓮弁文。見込に一重の界線、それに囲まれて印花文が施される。	〃
624	〃	〃	—— (2.8) —— 6.9	高台は断面長方形で内傾し、内外の端部は面取られる。高台内の削りは浅い。	釉は高台外面まで施され、畳付、高台内及び外底は露胎する。見込は円形に釉を削り取る。	灰オリーブ色釉。 胎土、灰白色。
625	〃	〃	—— (3.3) —— ——	口縁部は端反りを示す。	内外面貫入有り。	明緑白色釉。 胎土、白色。
626	〃	〃	13.4 (4.1) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	貫入なし。	オリーブ灰色釉。 胎土、灰白色。
627	〃	〃	14.0 (2.7) —— ——	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、端反りの口縁部にいたる。	内外面貫入有り。	淡緑色釉。 胎土、白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
628	SD 7	白磁 皿	10.0 2.7 —— 4.2	高台はアーチ状を呈する。 体部は内湾気味に外方に大きく開いて立ち上がる。	内外面に貫入有り。 畳付の一部を除いて全面に釉が施される。見込に目跡有り。	青味がかった白色釉。 胎土は白色。
629	〃	〃	—— (2.1) —— 3.7	断面長方形で、やや外に開き気味の高台を有し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	不明。	胎土は灰白色。 焼成が極めて悪く釉は観察されない。
630	〃	天目茶碗	—— (3.1) —— 4.3	高台は内反りで、高台脇を水平に削る。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	高台脇まで釉がかかり、外底から高台脇にかけては露胎。	にぶい赤褐色釉。胎土、灰白色。露胎部、赤色あるいは橙色。 瀬戸・美濃系。
631	〃	土錘	全長 4.6 直径 1.7 重量(g) 7.5	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径5㎜の円孔を穿つ。		
632	〃	〃	全長(2.5) 直径 1.5 重量(g) 5.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。 円孔は直径5㎜。		
633	〃	〃	全長 4.3 直径 1.6 重量(g) 10.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。 円孔は直径3㎜。		
634	〃	瓦質土器 火鉢	—— (4.5) —— ——	口唇部は内側に水平にのびる。	口縁部外面に2本の突帯をめぐらし、その突帯間を施文帯としている。	
635	〃	〃	—— (5.0) —— ——	口縁部は上方に立ち上がる。		
636	SD 9	擂鉢	33.0 (7.7) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し、上下に拡張する。口縁部内面に浅い段を有す。	条線は7本単位。 ロクロナデ。	内面、にぶい橙色。 外面、にぶい赤褐色。 備前焼。
637	〃	青磁 稜花皿	13.4 (2.1) —— ——	体部は腰部で一旦屈曲した後、外反して口縁部にいたる。口縁端部は稜花形に刻まれる。	内外面に貫入あり。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
638	〃	青磁 碗	—— (3.1) —— 4.5	高台は端部内外を面取られ、畳付を狭くする。高台内の削りは浅い。体部は内湾して立ち上がる。	体部外面に細蓮弁文、高台外面と高台脇に各々一重の沈線。高台内から外底にかけて露胎し、それ以外の全面に施釉される。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
639	〃	土錘	全長(2.8) 直径 1.5 重量(g) 5.7	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径3㎜の円孔を穿つ。		
640	〃	碗	—— 7.1 —— 5.2	高台外面は垂直に、内面は斜めに深く削られる。腰部が張り、体部は内湾して立ち上がる。	畳付は釉が削り取られ、それ以外の全面に施釉される。 内外面貫入有り。 見込及び畳付に砂溶着。	淡黄色釉。 胎土、淡黄灰白色。 京焼系。
641	SD 13	土師質土器 皿	9.5 (2.1) —— 5.6	体部は平坦な底部から屈曲して、直線的に外上方へ立ち上がる。	調整不明。	淡黄橙色。 磨滅が著しい。
642	〃	〃	17.8 1.9 —— ——	体部は大きく内湾気味に開き、口縁部はヨコナデのため外反する。	口縁部はヨコナデ。 体部は丁寧なナデで仕上げる。	白色系。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
643	SD 13	土師質土器 皿	16.7 (1.7) —— ——	体部は大きく内湾気味に開き、口縁部はヨコナデのため外反する。	口縁部はヨコナデで仕上げられ、体部内外面に指頭圧痕が残る。	白色系。
644	〃	土師質土器 杯	—— (2.4) —— 5.0	体部は内湾気味に立ち上がる。	内面にロクロ痕、底部回転糸切り。	灰白色。
645	〃	〃	—— (2.5) —— 5.4	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕有り。	淡橙色。
646	〃	〃	—— (2.7) —— 5.0	〃	内面にロクロ痕有り。 底部回転糸切り。	灰白色（白色に近い）。
647	〃	土師質土器 鍋	20.8 (8.2) —— ——	体部は内湾気味に上方へ立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。	内面、淡黄橙色。 外面、淡赤橙色。
648	〃	〃	32.4 (8.5) —— ——	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、ヨコナデのため口縁部下で一旦屈曲してから外反する。	口縁部、体部ともヨコナデで仕上げる。	淡黄橙色、あるいはにぶい褐色。 体部内外面に煤付着。
649	〃	土師質土器 釜	—— —— —— ——	胴部は内傾して頸部にいたり、屈曲した後、口縁部は上方に立ち上がる。肩部に外耳が貼付される。	口縁部及び体部はナデにより仕上げる。	淡黄橙色。
650	〃	瓦質 擂鉢	23.7 (5.0) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁端部は外傾する面を有する。	体部外面に指頭圧痕有り。 条線は上から下へ施され、単位は不明。	灰色。
651	〃	瓦質 鍋	16.4 (6.5) —— ——	口縁部は内傾し、端部はわずかに内傾した面を成す。肩部に退化した鍔を持つ。	外面に指頭圧痕有り。	内面は灰色。 外面は灰白色。
652	〃	〃	10.6 7.3 —— ——	〃	〃	灰白色。
653	〃	〃	19.2 (3.9) —— ——	内湾して上方に立ち上がってきた体部は、頸部で屈曲した後外反した口縁部にいたる。	〃	灰色。
654	〃	擂鉢	—— (5.3) —— 15.9	末調整の平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	条線は8本単位。 ロクロナデ。 内外面に指頭圧痕。	淡黄橙色。 備前焼。
655	〃	〃	32.4 9.9 —— 18.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上方へ拡張される。	〃	赤褐色。 備前焼。
656	〃	〃	28.4 (10.5) —— ——	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上方へ拡張される。 口縁部内面に浅い段を有す。	条線は8本単位。 内外面ともロクロナデ。 口縁部外面に2条の凹線あり。	内面、にぶい赤褐色。 外面、にぶい赤橙色。
657	〃	甕	33.8 (9.0) —— ——	頸部は直立し、口縁部は玉縁状を呈す。	ロクロナデ。	灰赤色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
658	SD 13	甕	27.3 (6.3) —— ——	頸部は直立して立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈す。	ロクロナデ。	にぶい赤褐色。 備前焼。
659	〃	壺	15.1 (5.5) —— ——	〃	〃	にぶい橙色。 備前焼。
660	〃	甕	34.0 (6.2) —— ——	口縁部は外傾気味に上方に立ち上がる。口縁部はN字状を呈する。	〃	淡黄橙色。 常滑焼。
661	〃	小壺	—— (5.9) —— 5.1	平坦な底部から胴部は大きく内湾して上方に立ち上がり、上胴部は内傾する。	胴部に自然釉。 底部回転糸切り。	内面、にぶい赤褐色。 外面、赤褐色。 胎土、灰白色。
662	〃	天目茶碗	—— (4.9) —— 4.2	高台は内反りで高台脇を平坦に深く削る。体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、くびれを持つ。	外面、胴部下位から高台にかけて露胎。	にぶい赤褐色。 胎土、灰白色。 瀬戸焼。
663	〃	青磁碗	13.9 (4.8) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部外面に細蓮弁文。 内外面に貫入有り。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
664	〃	〃	11.3 (4.6) —— ——	〃	〃	明緑灰色釉。 胎土、灰白色。
665	〃	〃	—— (2.8) —— 5.4	高台は端部外面を面取りされ、畳付が狭くされている。 高台内の削りが浅い。	畳付は釉が削り取られ、外底も蛇ノ目状に釉が削り取られる。 体部に蓮弁文有り。貫入がみられる。 畳付に砂溶着。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
666	〃	〃	—— (3.8) —— 5.5	〃	畳付は釉が削り取られ、外底も蛇ノ目状に釉が削り取られる。 見込に一重の界線、その中に印花がみられる。高台内面に砂溶着。	明濃緑色釉。 胎土、灰白色。
667	〃	染付碗	18.7 (5.8) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり、外反する口縁部にいたる。	体部外面、口縁部内外面に文様が濃青色に発色する。内外面貫入あり。	白色釉。 胎土、灰白色。
668	〃	〃	—— (2.8) —— 4.3	高台は外面垂直、内面斜めに削り取られ、見込中央部は肥厚する。体部は内湾して立ち上がる。	外底及び高台は露胎。高台脇に一重の界線、見込に蓮の文様が、あわい青色に発色する。高台に砂溶着。	〃
669	〃	染付皿	—— (2.0) —— 13.4	高台は、断面三角形で外面端部は面取られる。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付及びその周辺は釉が削り取られる。芙蓉手の皿で、呉須は青色に発色する。畳付、高台内に砂溶着。	白色釉。 胎土、白色。
670	〃	土錘	全長 4.2 直径 1.7 重量g 10.2	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径5.5㎜の円孔を穿つ。		
671	〃	〃	全長 3.9 直径 1.2 重量g 5.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。 円孔は直径4㎜。		
672	〃	火鉢	—— —— —— ——	体部は直線的に上方に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部外面に2条の貼付突帯を有する。	内外面ともヨコナデ。	内外面とも黒色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
673	SD 13	皿	12.5 3.6 —— 2.4	見込中央の器壁は厚い。 体部は内湾気味に立ち上がり口縁部にいたる。	高台外面付近まで釉がかかる。 見込蛇の目状釉ハギ。 畳付、高台脇に砂溶着。	青緑色釉。 胎土、灰白色。 唐津焼。
674	〃	〃	—— (3.2) —— 5.8	高台外面端部は面取られ、畳付を狭くする。高台内は斜めに深く削られる。体部は内湾気味に立ち上がる。	外面高台脇まで施釉される。 見込蛇の目状釉ハギ。	明褐灰色釉。 胎土、淡黄橙色。 唐津焼。
675	〃	天目茶碗	11.6 6.9 —— 4.2	端部外面を面取られ、外に開く形状の高台を有する。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は一旦くびれて外反する。	外面胴部中位ぐらいまで施釉され、それ以下は露胎。	茶赤褐色釉。 胎土、淡赤橙色。 唐津焼。
676	〃	鉢	—— (4.2) —— 9.7	幅広く安定した断面逆台形の高台を有する。体部は内湾気味に立ち上がる。	灰赤色または白色の釉を内面に刷毛で塗る。内面と外面畳付まで施釉される。	外面暗赤灰色釉。 胎土、灰赤色。 唐津焼。
677	〃	碗	14.6 (5.2) —— ——	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	内外面に貫入有り。	にぶい褐色釉。 胎土、淡橙色。
678	〃	〃	10.5 (6.8) —— ——	〃	〃	淡黄緑色釉。 胎土、灰白色。
679	SD 14	土師質土器 皿	13.3 (2.1) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内外面に指頭圧痕。	淡黄橙色。
680	〃	〃	12.7 2.1 —— ——	〃	〃	〃
681	〃	〃	13.0 2.1 —— 8.2	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 口縁部下はナデのため肥厚する。	体部内外面に指頭圧痕。 ヨコナデ調整。	〃
682	〃	〃	11.3 1.9 —— 6.0	体部は内湾して口縁部にいたる。	体部内外面に指頭圧痕。	橙色。
683	〃	〃	13.2 2.5 —— ——	体部は内湾して口縁部にいたる。 口縁下はナデのため肥厚する。	体部内外面に指頭圧痕。 口縁部ヨコナデ。	淡黄橙色。
684	〃	〃	12.2 1.7 —— 7.4	〃	〃	〃
685	〃	土師質土器 杯	—— (2.0) —— 4.8	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り。	〃
686	〃	土師質土器 鍋	17.2 (6.2) —— ——	胴部はわずかに内湾気味に上方へ立ち上がる。口縁端部は内傾した面を成す。肩部に断面三角形の鍔有り。	外面肩部下に右上がりの叩目有り。口縁部内外面、体部内面は、ヨコナデで仕上げられる。	内面、橙色。 外面、にぶい橙色。 外面に煤状炭化物付着。
687	〃	青磁 稜花皿	12.4 (2.0) —— ——	腰部で一旦屈曲した後、体部は外反して口縁部にいたる。口縁端部は稜花形に刻まれる。	口縁部内面に3条の沈線がみられる。内外面、貫入有り。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
688	SD 14	土錘	全長 4.1 直径 1.6 重量(g) 5.0	土師質の土錘で円筒形を呈する。ほぼ中央部に直径3.5㎜の円孔を穿つ。		
689	SD 15	土師質土器 杯	9.1 4.3 —— 4.8	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部回転糸切り。	淡黄橙色。
690	〃	土師質土器 釜	6.8 (7.6) —— ——	胴部上位は内湾し、内傾して頸部にいたり屈曲、口縁部は直線的に上方に立ち上がる。	ロクロナデ。	〃
691	〃	青磁 皿	—— (1.3) —— 5.0	高台は外面端部を面取られ、畳付を狭くする。	外底は蛇の目状に釉が削り取られる。 見込に一重の界線と印花有り。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。
692	〃	青磁 碗	—— (2.1) —— 4.7	高台は端部外面が面取られ高台内の削りは浅い。体部は内湾気味に立ち上がる。	高台内面の途中まで施釉される。見込円形釉ハギ。 見込に砂溶着。	青緑色釉。 胎土、灰白色。
693	〃	稜花皿	10.8 2.3 —— 6.2	高台は断面三角形で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は端反りを示し、端部は稜花形に刻まれる。	見込にゴム印染付が黒色に発色。	白色釉。 胎土、白色。 瀬戸焼、昭和～。
694	〃	碗	10.5 (3.8) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり直線的な口縁部にいたる。	体部外面に銅板染付が濃い青色に発色する。	白っぽい灰白色釉。 胎土、白色。 明治末～大正末。
695	SD 16	皿	14.0 (2.8) —— ——	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は端反りを示す。	体部外面につる草文、内面に雪の輪文があせた濃青色に発色する。	白色釉。 胎土、灰白色。 伊万里。
696	〃	〃	11.5 3.7 —— ——	高台は断面長方形で、外に開き気味で有り、端部外面が面取られる。体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	外面高台脇まで施釉され、見込蛇の目状釉ハギ。	淡黄オリーブ色釉。 胎土、灰白色。 陶器。
697	SE 1	瓦質土器 鍋	22.6 (6.2) —— ——	体部は内湾して上方に立ち上がり、直線的な口縁部にいたる。端部は水平面を成す。	ロクロナデ。 外面に指頭圧痕有り。	内面は灰白色。 外面は灰色。
698	〃	青磁 碗	—— (2.4) —— 4.9	高台は、内面端部を面取られ、高台内の削りは浅い。体部は高台脇で一旦屈曲して、やや内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内面及び高台外面まで施釉される。体部外面に蓮弁文、見込に一重の界線。	淡青緑色釉。 胎土、灰白色。
699	〃	碗	7.0 5.7 —— 3.9	高台は断面逆台形を呈する。体部は腰部で一旦屈曲し、上方に直立する。		淡黄色系灰白色釉。 胎土、灰白色。
700	P 1	青磁 盤	—— (3.5) —— 9.0	外面端部を面取られ、断面逆台形状の高台を有する底部から、体部は内湾して立ち上がる。	見込に印花文有り。 外底は円形に釉を削り取る。	濃緑色釉。 胎土、灰白色。

第15表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g)	材質	特徴	備考
701	SK 58	叩石	最大長 11.4 最大幅 9.1 最大厚 3.4 重量 494.0	砂岩	偏平な河原石をそのまま利用し、中央部と縁辺部に潰痕がみられる。	
702	SD 2	石鍋	口径 20.8 器高 7.9 胴径 —— 底径 11.2	頁岩	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部は肥厚して作りだされている。	
703	SD 7	石硯	(8.6) (8.8) 1.0 70.0	〃	大型の硯で大部分が欠損しており、陸部には使用痕がみられる。	
704	SK 81	砥石	8.0 4.2 9.5 75.0	流紋岩	断面長方形で側面は垂直である。1面のみ使用している。	
705	SK 52	〃	(11.3) 14.3 4.3 1130.0	砂岩	大型の砥石で断面は長方形を呈する。表面と側面の2面使用している。	
706	SD 7	〃	(8.3) 10.1 7.8 1128.0	〃	上下端が欠損している。 4面共使用している。	
707	〃	〃	(12.8) 9.4 7.6 1460.0	〃	大型の砥石で断面方形を呈する。3面を使用している。	
708	〃	〃	(13.0) 9.6 3.5 790.0	〃	大部分が欠損している。 表面の1面のみ使用している。	
709	SD 9	〃	9.4 4.9 2.1 1225.0	泥岩	断面は垂直に切っており、裏面を除き3面使用している。擦痕が認められる。	
710	SD 7	〃	(9.3) 7.5 9.9 1010.0	不明	大部分が欠損している。 1面のみ使用している。	
711	SD 9	〃	8.7 4.4 2.0 130.0	泥岩	断面長方形を呈する。 4面共使用している。	
712	SD 13	〃	10.8 7.5 3.4 460.0	砂岩	断面長方形を呈する。 表面と側面の3面を使用している。	
713	SK 81	〃	(5.6) 5.1 1.9 82.5	流紋岩	小型の砥石で断面長方形を呈する。4面共使用している。	
714	SD 7	茶臼	—— 直径 18.3 11.6 3000.0	砂岩	約½が残存している。	
715	SK 81	石臼	—— 直径 44.0 8.4 4000.0	〃	石臼で径20cmの幅で窪む。摺目は磨滅しており、細くなっている。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
716	SD 12	石臼	—— 半径 13.9 6.9 2100.0	砂岩	下臼で、摺目は磨滅しており細くなっている。	
717	SD 2	凹石	16.7 12.5 7.4 3200.0	〃	楕円形を呈し、中央部は4cm幅で窪む。 周囲に煤付着。	
718	SK 81	〃	11.4 11.1 10.2 1740.0	〃	中央部は幅4cmで深さ1cmに窪む。	

第16表　遺構出土金属器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
719	SK 17	煙管	6.8 1.0 0.1 ——	銅		
720	SD 7	〃	5.0 1.5 0.04 ——	〃		
721	SK 25	〃	10.3 1.1 0.1 ——	〃		

第17表　遺構出土木器観察表

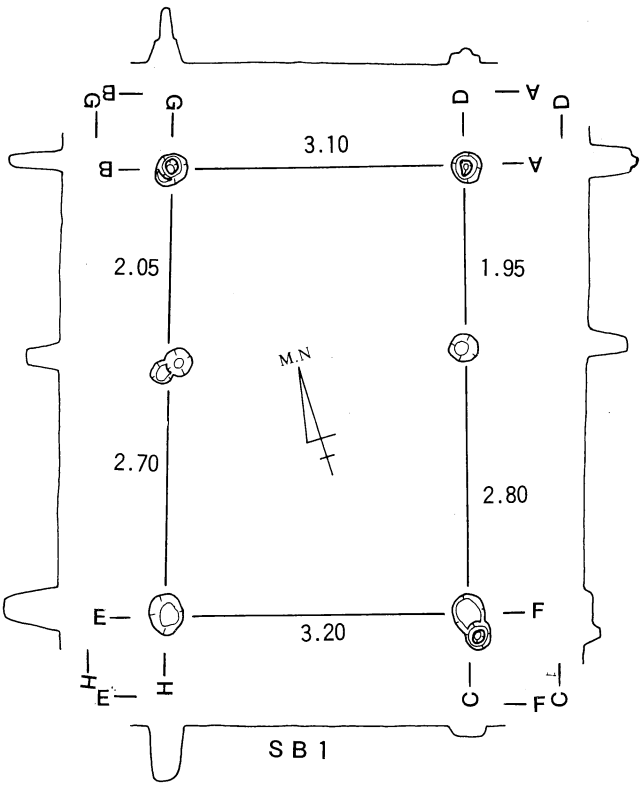
挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
722	SD 15	角材	8.8 1.7 1.5 ——	不明	断面方形の材の上下両端に切り込みをいれている。	
723	SE 1	木片	10.3 1.9 2.0 ——	〃	断面円形を呈し、上端部にコの字形に切り込みを入れている。	
724	SK 60	板材	10.2 5.0 1.3 ——	〃	上端を削り、丸みを作っている。曲物の底板の一部と考えられる。	
725	SD 15	不明	11.1 3.1 1.0 ——	〃	上端部を刃物で削っている。小破片で不明の木製品である。	
726	SE 1	曲物底板	12.7 4.0 0.8 ——	〃	上端部に丸みを有しており、曲物の底板の一部と考えられる。	

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
727	SE 1	板材	17.4 3.3 1.1 ——	不明	断面長方形で、上端部は丸みを有しており、切り込みを入れて径3㎜の円孔が穿たれる。	
728	〃	〃	8.6 8.3 2.3 ——	〃	厚さ、幅から桶状板製品の一部と考えられる。	
729	SD 15	不明	8.9 7.2 2.2 ——	〃	断面長方形を呈し、上端の一部に切り込みが見られる。	
730	〃	〃	4.7 10.4 1.6 ——	〃	断面長方形を呈し、両側面を削り出し、板状にしている。	
731	〃	角材	13.4 2.9 1.7 ——	〃	断面方形を呈し、上下両端を切断している。	
732	〃	〃	15.2 2.7 2.1 ——	〃	断面方形を呈し、上下両端に切り込みを入れ切断している。	
733	〃	不明	20.6 8.7 4.1 ——	〃	下端の一部に切り込みが見られるが、用途は不明。	
734	〃	〃	33.5 0.6 0.6 ——	〃	上下両端に切り込みがはいり用途不明である。	
735	〃	板材	22.5 5.0 1.0 ——	〃	断面長方形を呈し上端を切断している。下端は不明。	
736	SE 1	不明	24.0 6.3 1.8 ——	〃	切り抜きの桶の一部と考えられるが、細片で不明である。	
737	〃	曲物底板	30.0 9.0 1.3 ——	〃	周辺部を円形に丁寧に削りとっている。	
738	〃	不明	23.6 5.1 3.9 ——	〃	杭の一部と考えられるが、残存している部分が少なく不明である。	
739	〃	曲物底板	13.7 11.0 0.6 ——	〃	3枚の板を繋ぎ合せ、周辺部を丁寧に円形に削りとっている。	
740	〃	〃	15.8 8.7 1.0 ——	〃	周辺を円形に削り取っている。約½が残存。	
741	〃	〃	14.6 13.8 1.0 ——	〃	円形を呈し、周辺部を丁寧に削りとっている。	

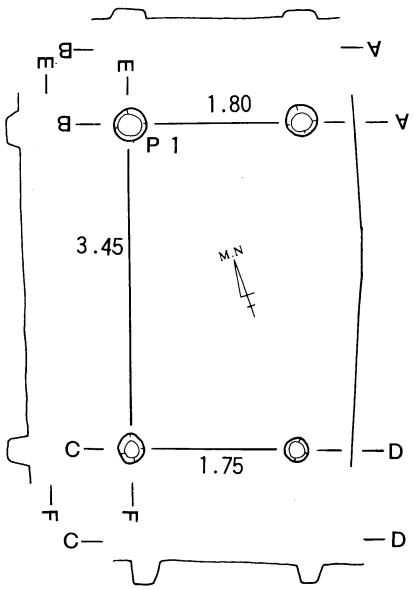
挿図番号	遺構番号	器　種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重　量	材　質	特　徴	備　考
742	ＳＥ　1	曲物底板	18.0 13.1 1.3 ——	不　明	約¼残存している。 円形を呈していたと考えられ、周辺部は丁寧に削りとっている。	
743	ＳＫ 60	〃	25.6 16.7 1.0 ——	〃	約½が残存している。 周辺部を円形に削りとっているが、磨滅が著しい。	

第18表　遺構出土古銭観察表

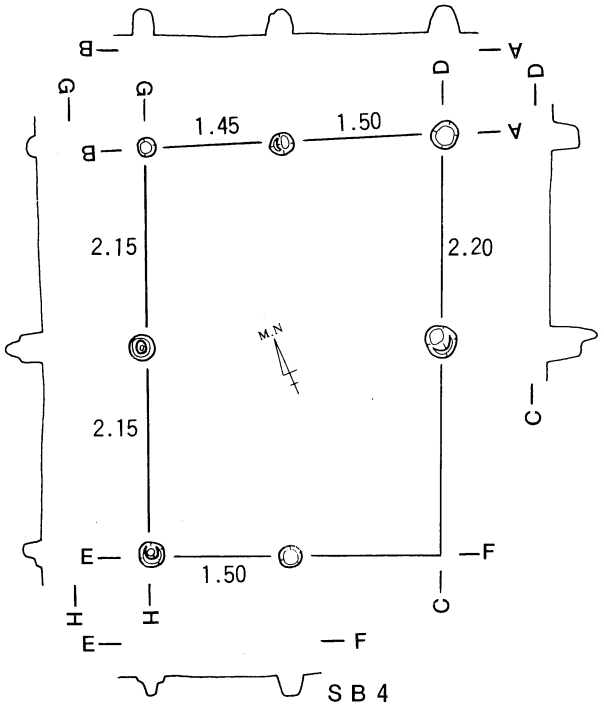
挿図番号	遺構番号	銭　種	初鋳年(西 暦)	備　考
744	ＳＫ 20	寛永通宝	日本明正(1636)	
745	ＳＫ 21	〃	〃	
746	ＳＫ 22	〃	〃	
747	〃	〃	〃	
748	ＳＫ 37	〃	〃	
749	ＳＫ 62	〃	〃	
750	〃	〃	〃	
751	ＳＫ122	〃	〃	



SB 1



SB 2

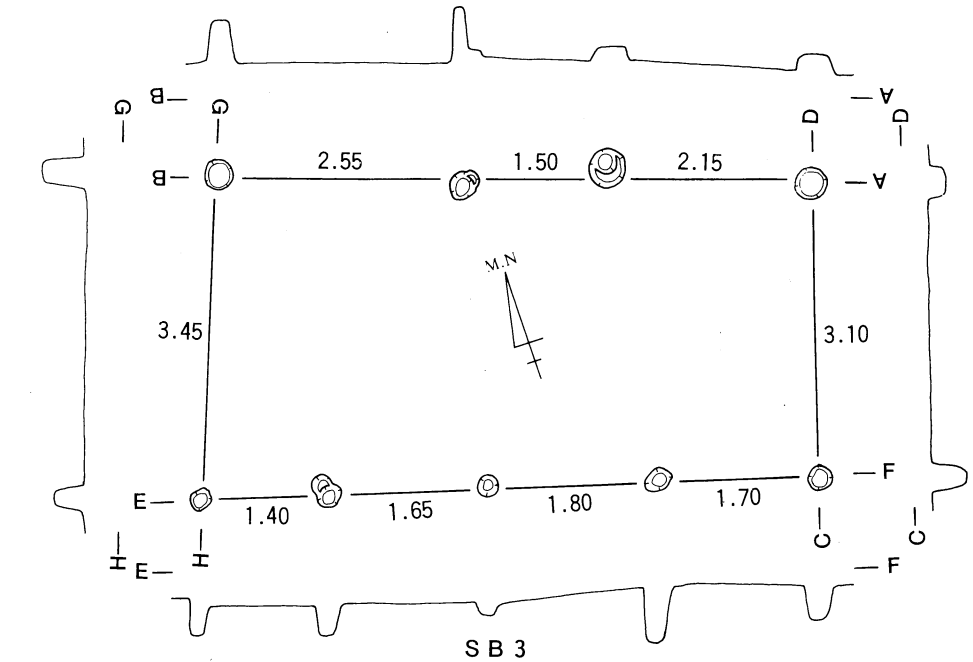


SB 4

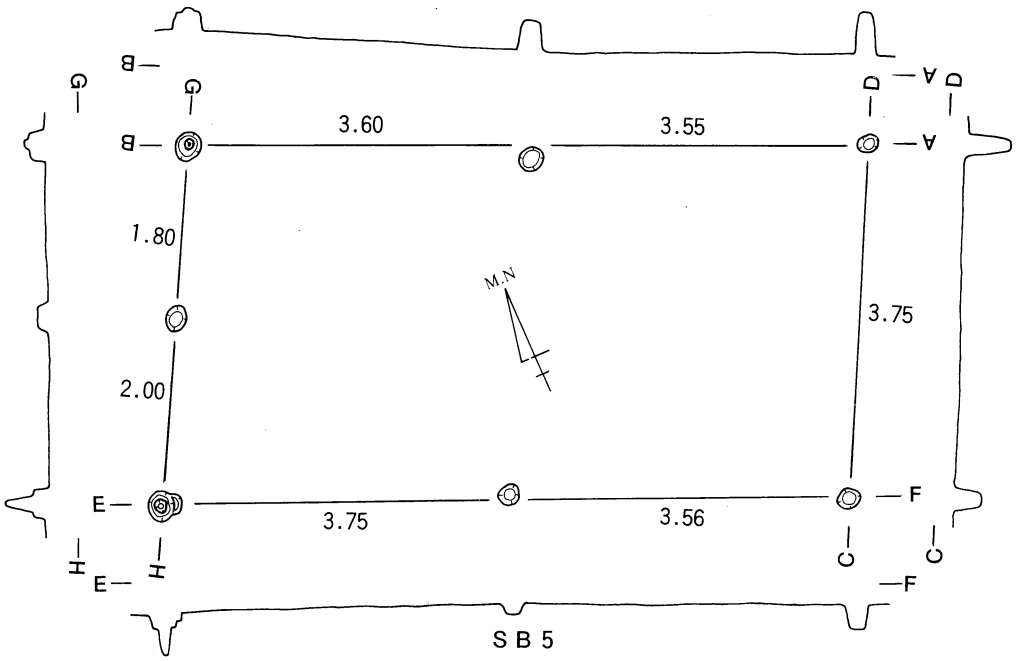
DL=7.50m

0 4m

第85図　SB 1・2・4



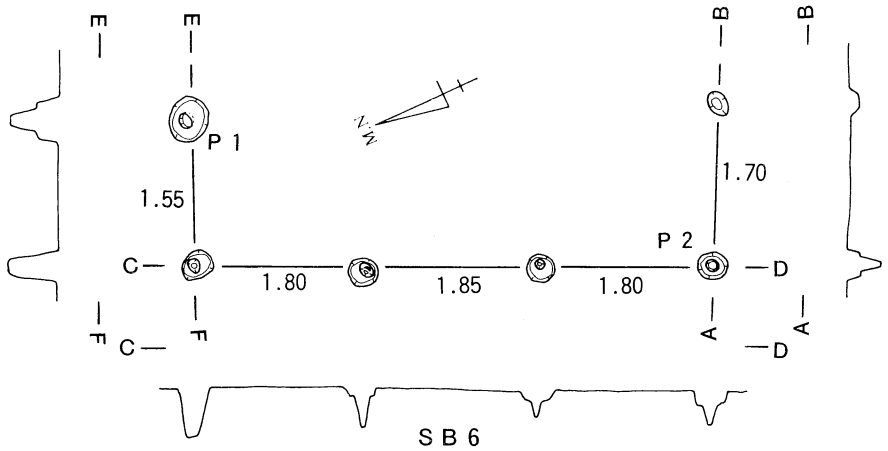
SB 3

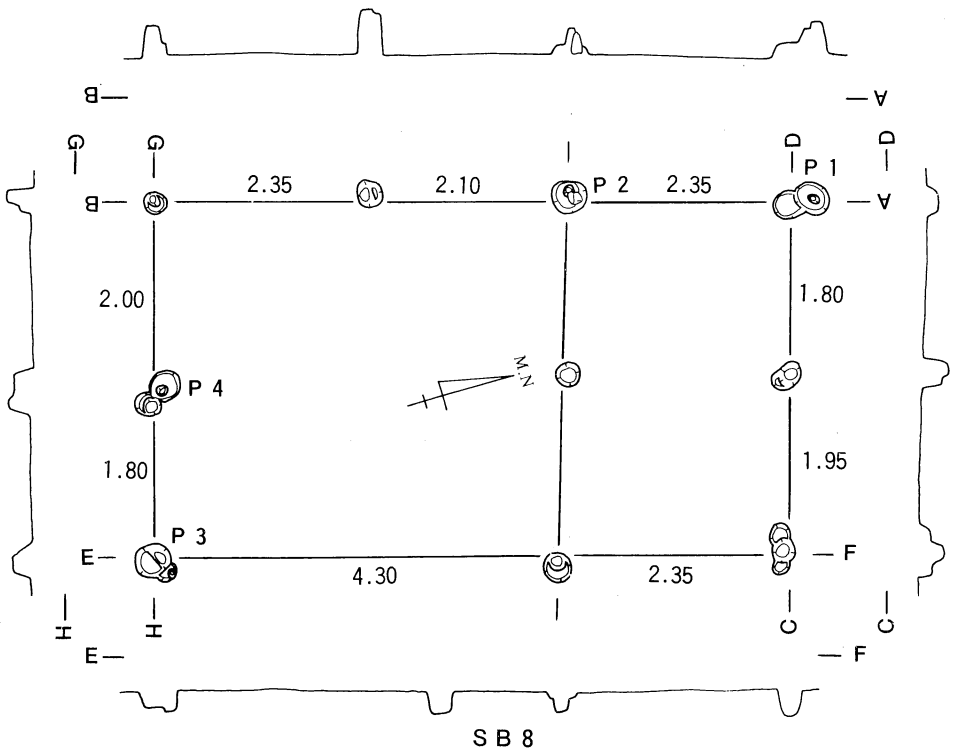


SB 5

DL=7.50m 0 4m

第86図　SB 3・5

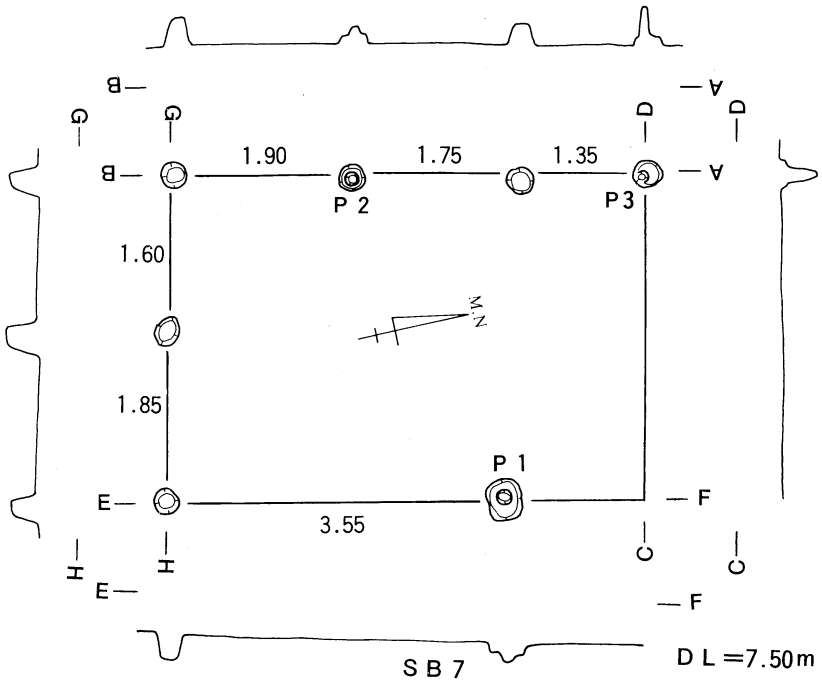


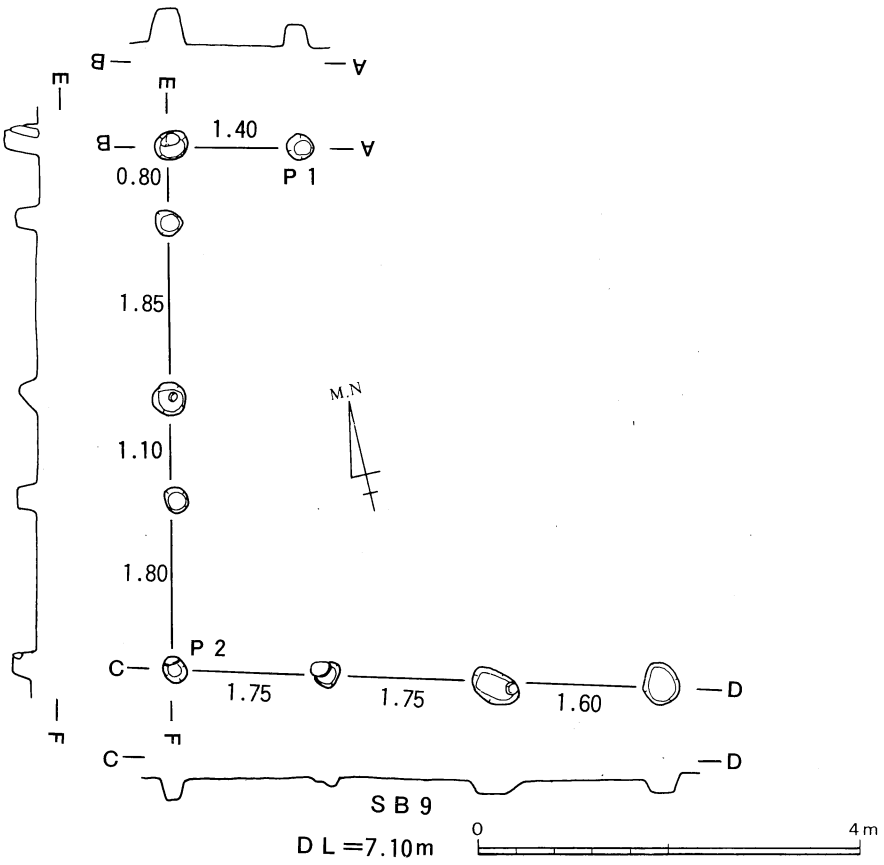


DL=7.50m

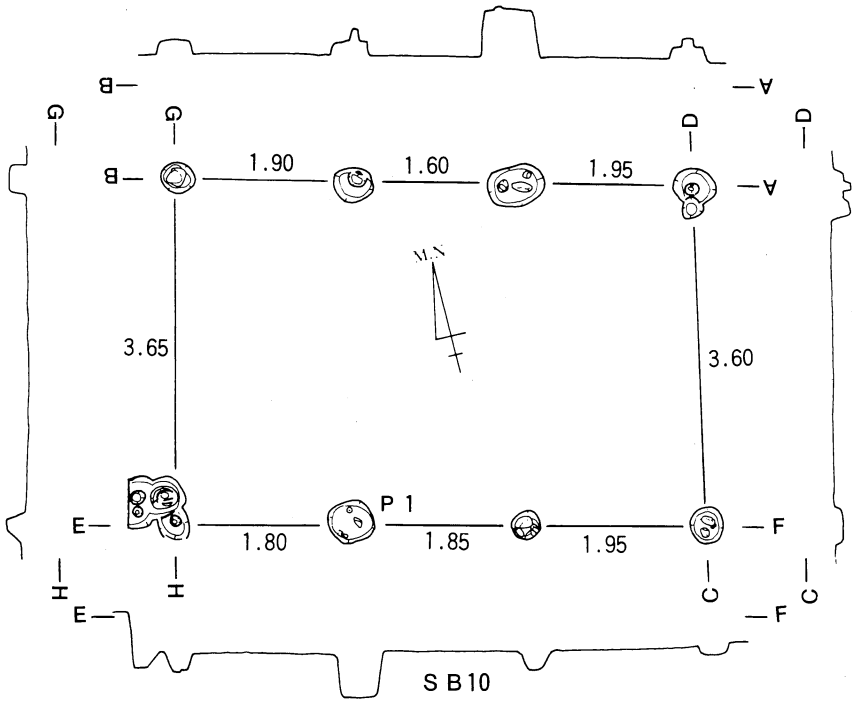
0 4m

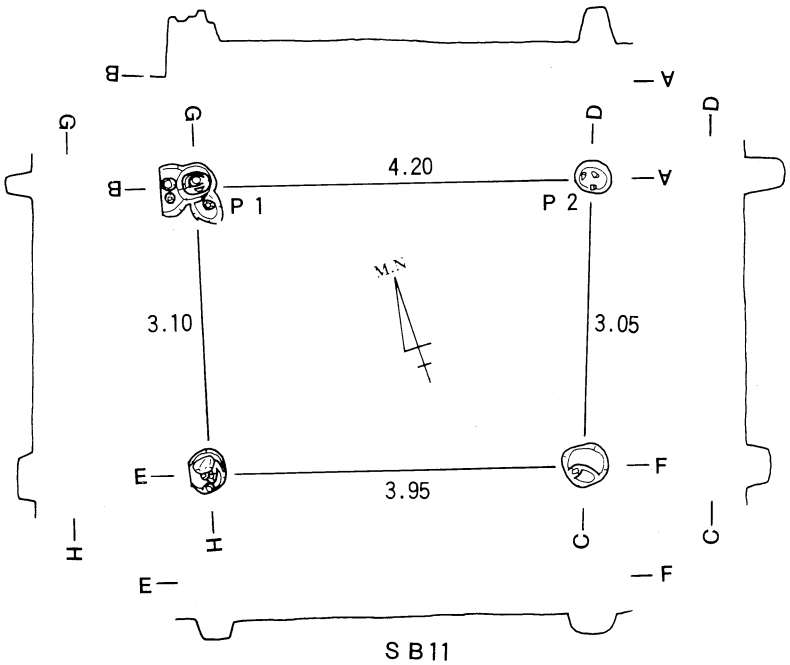
第87図　SB 6・8


1.90
1.75
1.35
P 2
P3
1.60
1.85
P 1
3.55
M.N
SB 7
DL=7.50m


1.40
0.80
P 1
1.85
1.10
1.80
P 2
1.75
1.75
1.60
M.N
SB 9
DL=7.10m
0
4m

第88図　ＳＢ７・９

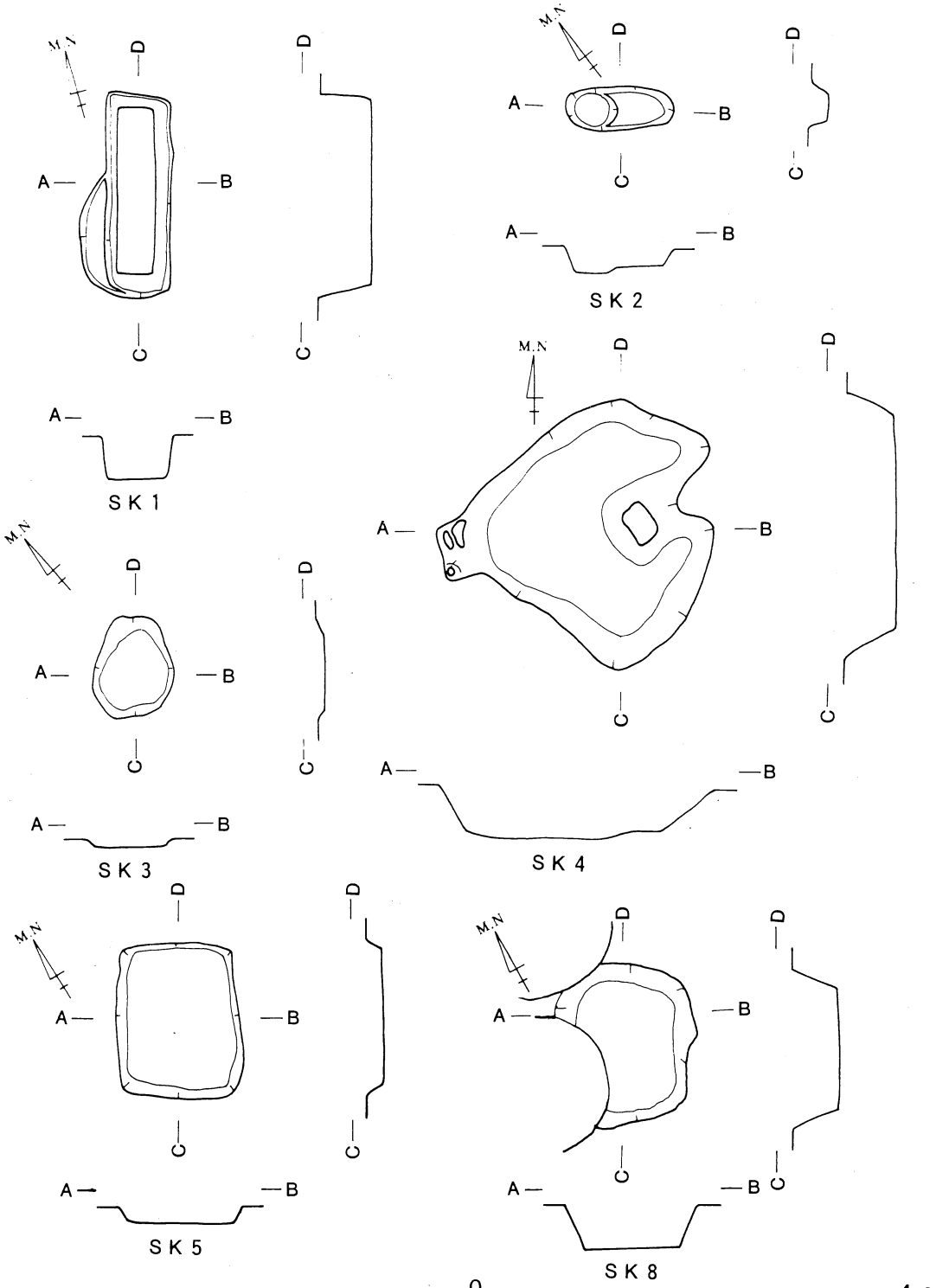




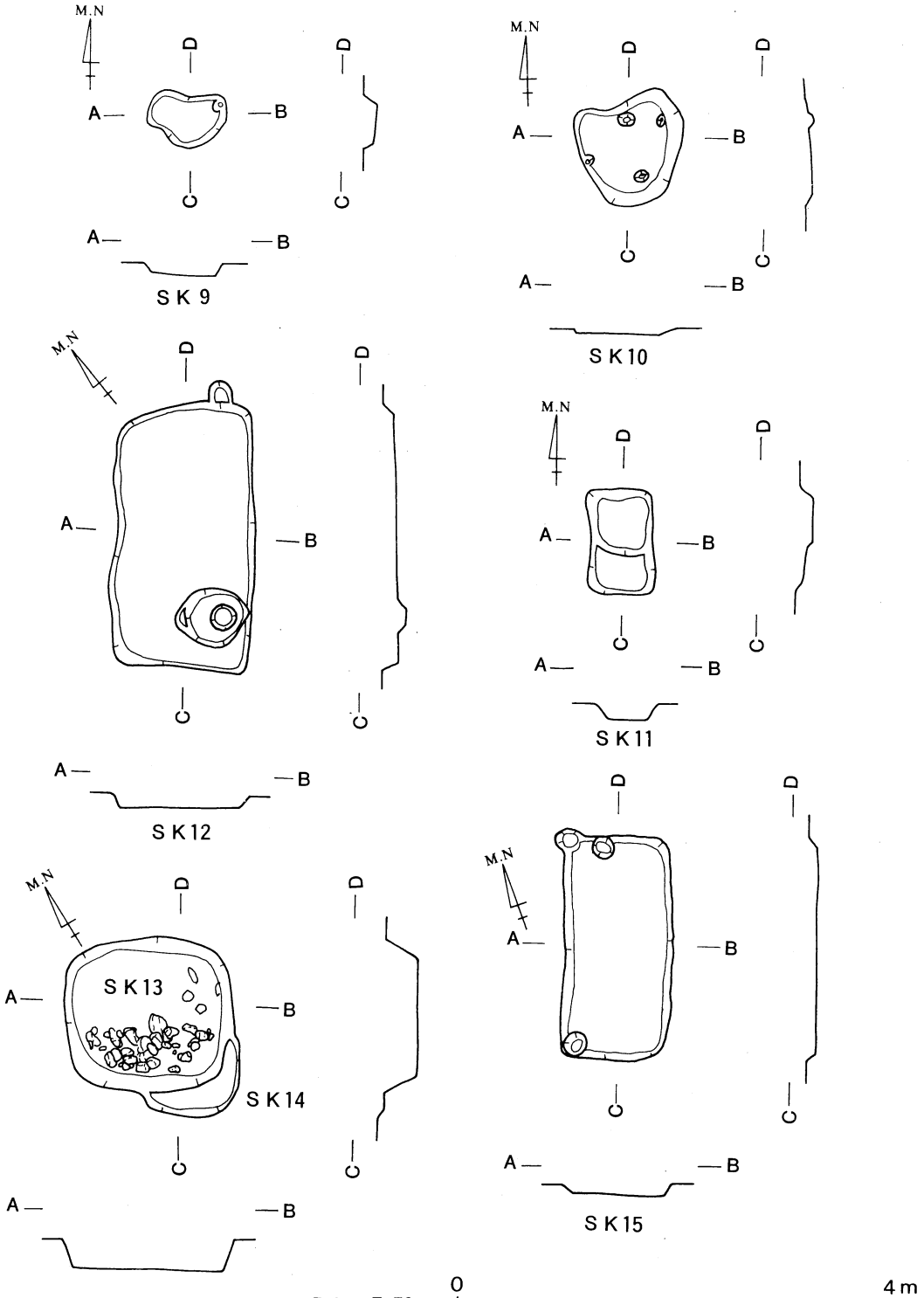
DL=7.50m

0 4m

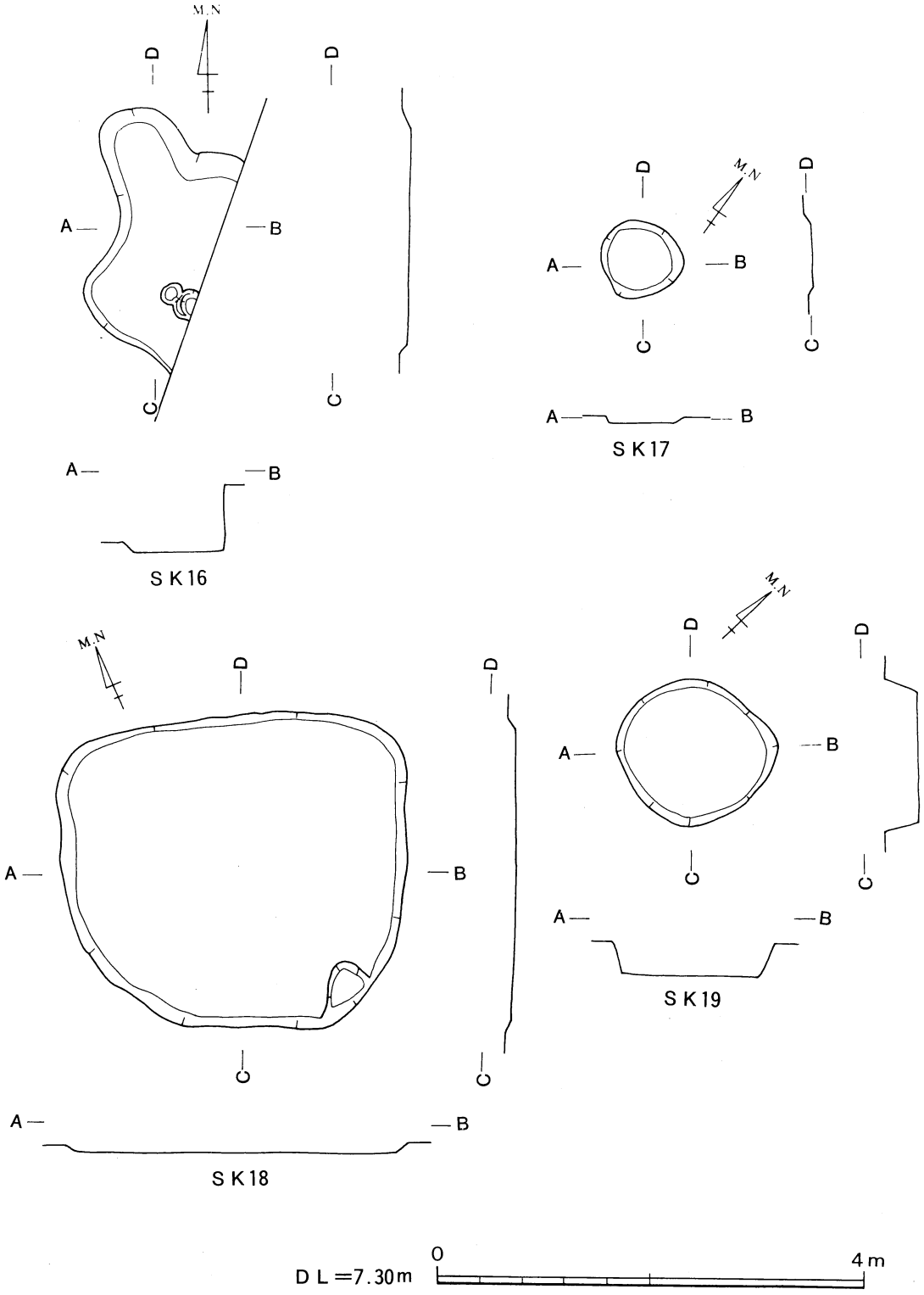
第89図　SB10・11



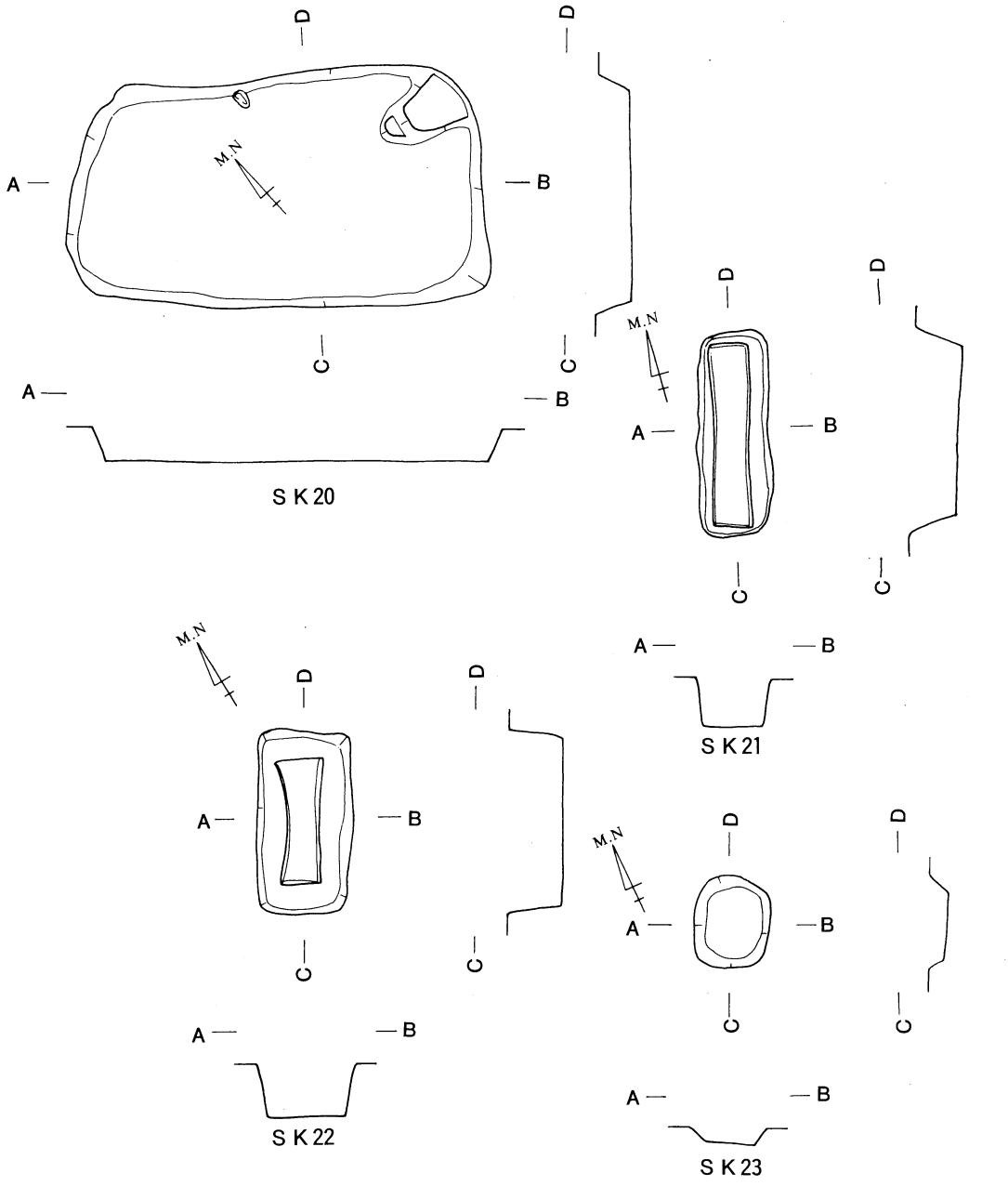
第90図　SK 1～5・8



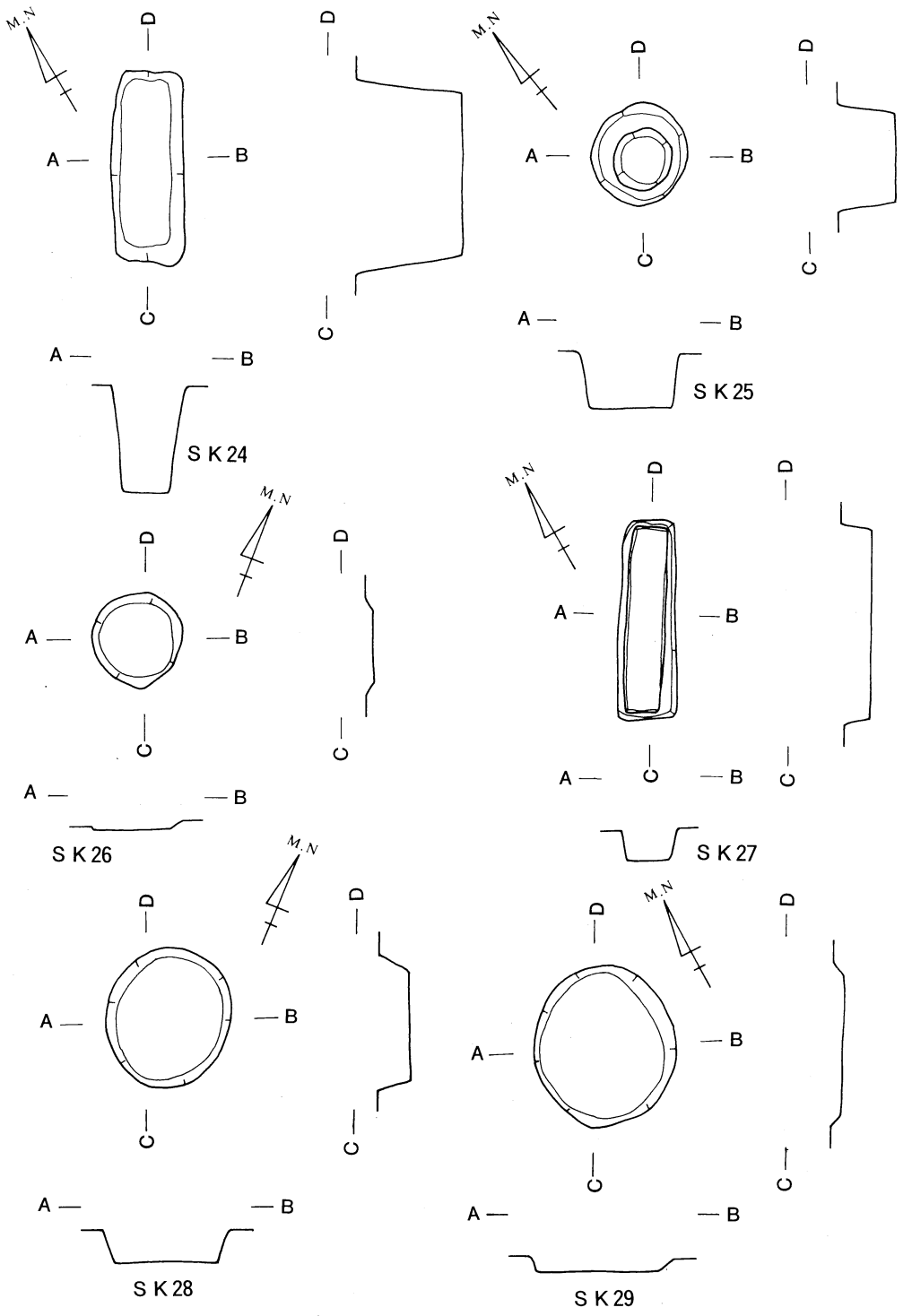
第91図　SK 9～15



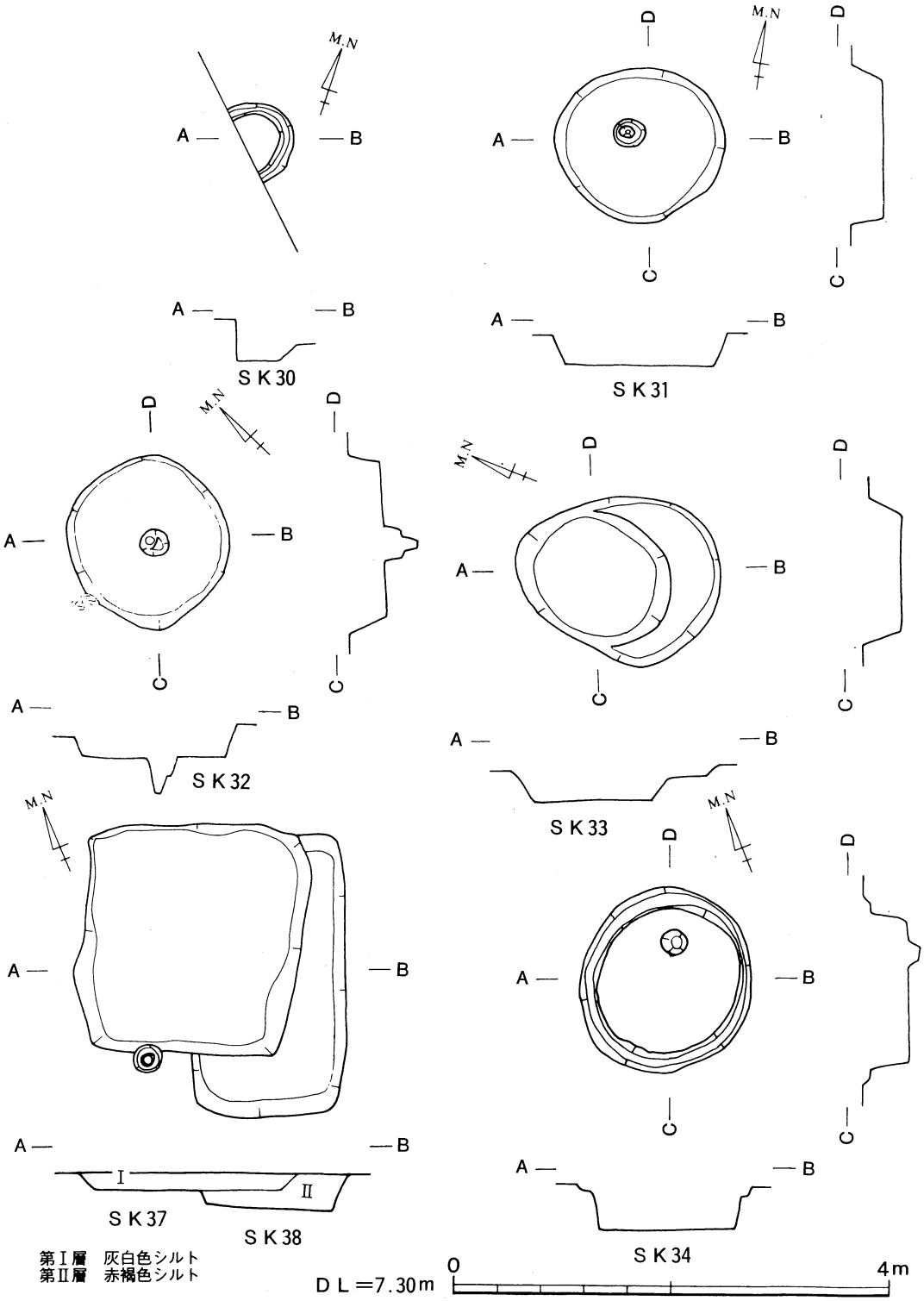
第92図　SK16～19



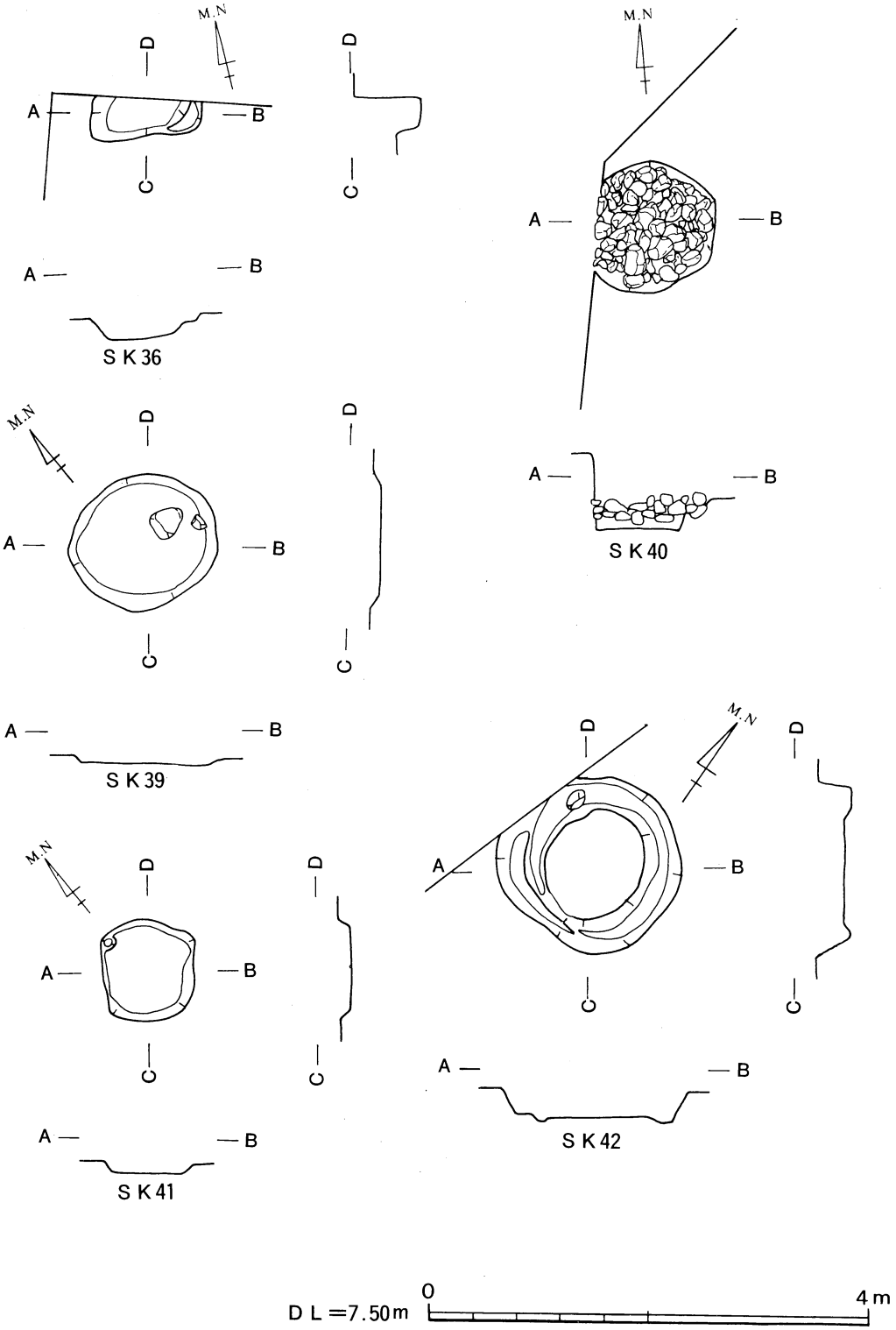
第93図　SK20～23



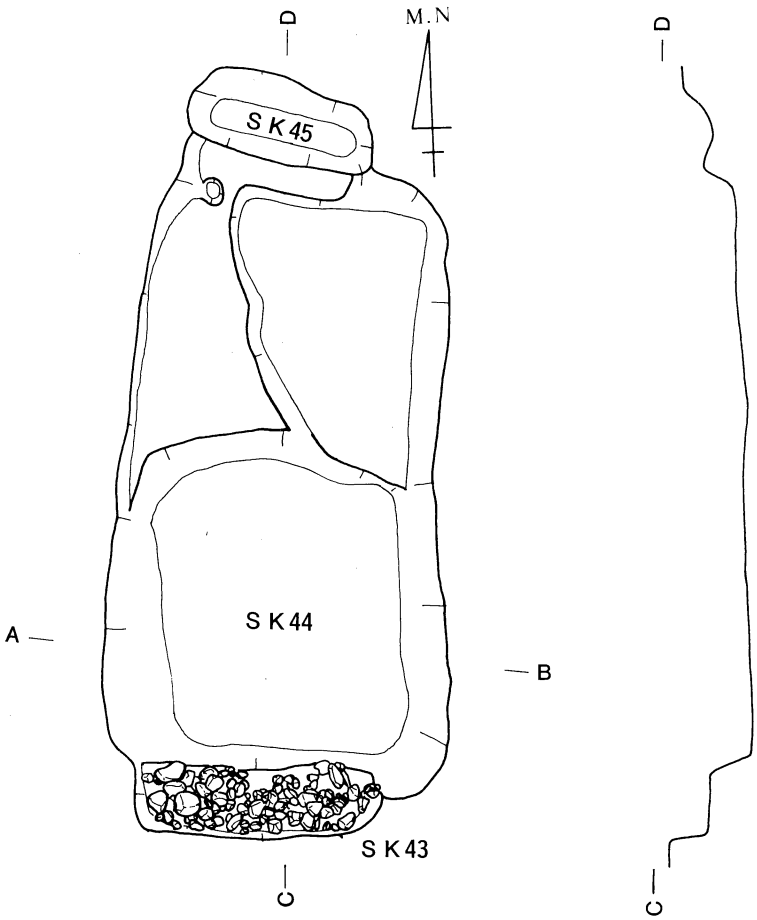
第94図　SK24～29



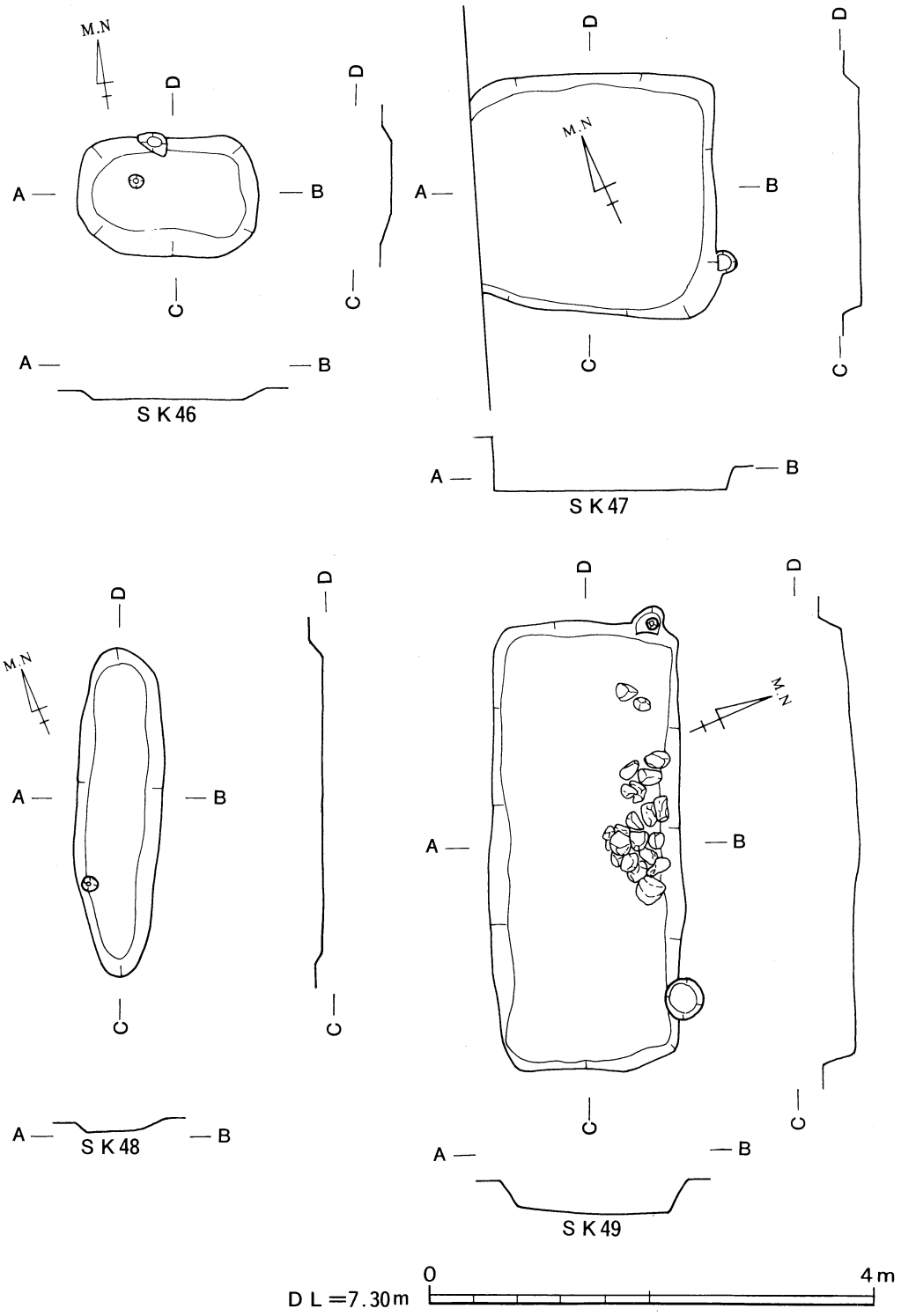
第95図　SK30～34・37・38



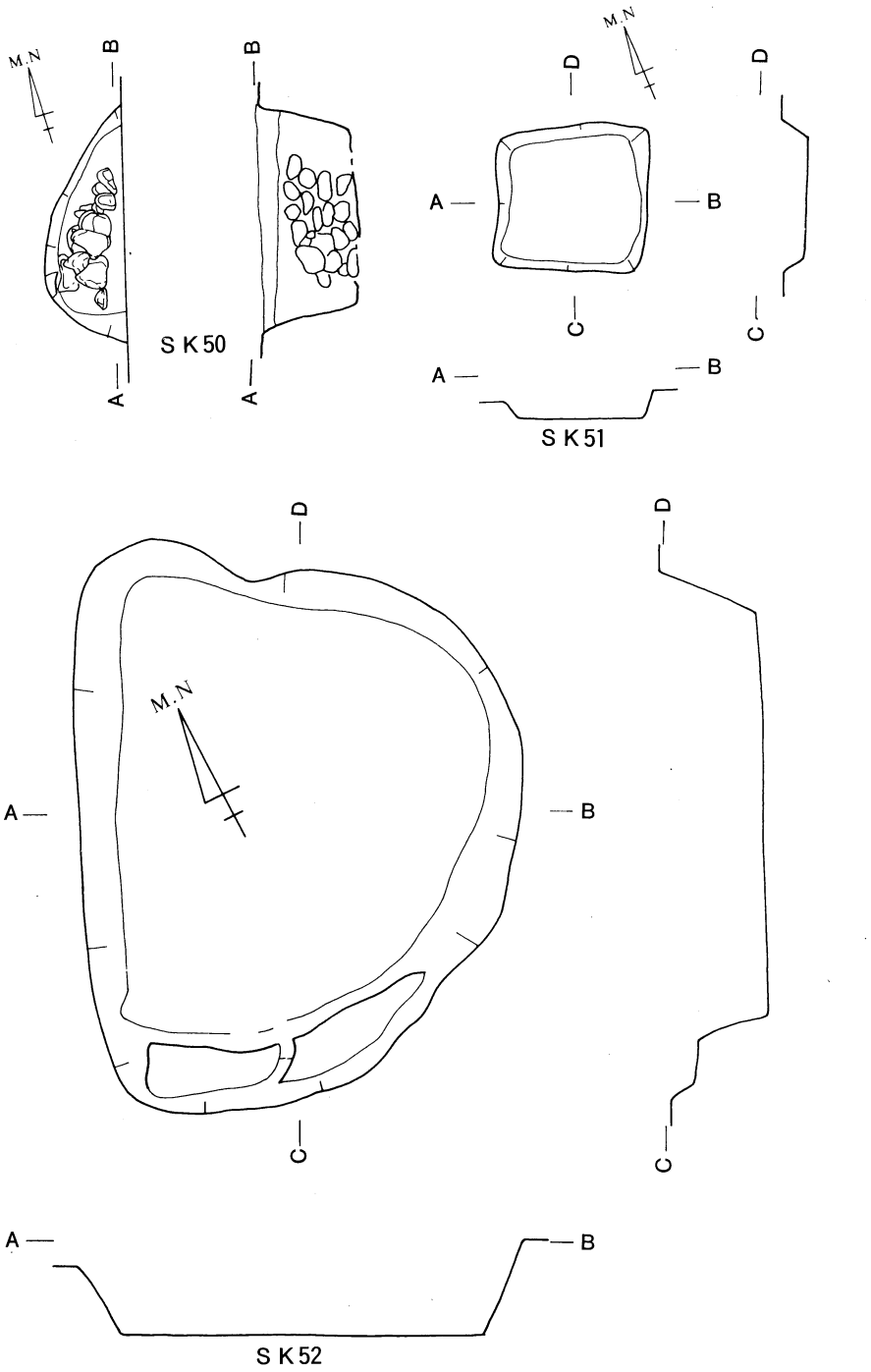
第96図　S K 36・39～42


D
M.N
SK45
SK44
SK43
A
B
C
D
A
B
I
II
第Ⅰ層　灰茶色シルト
第Ⅱ層　灰褐色粘土
DL＝7.50m
0
4m

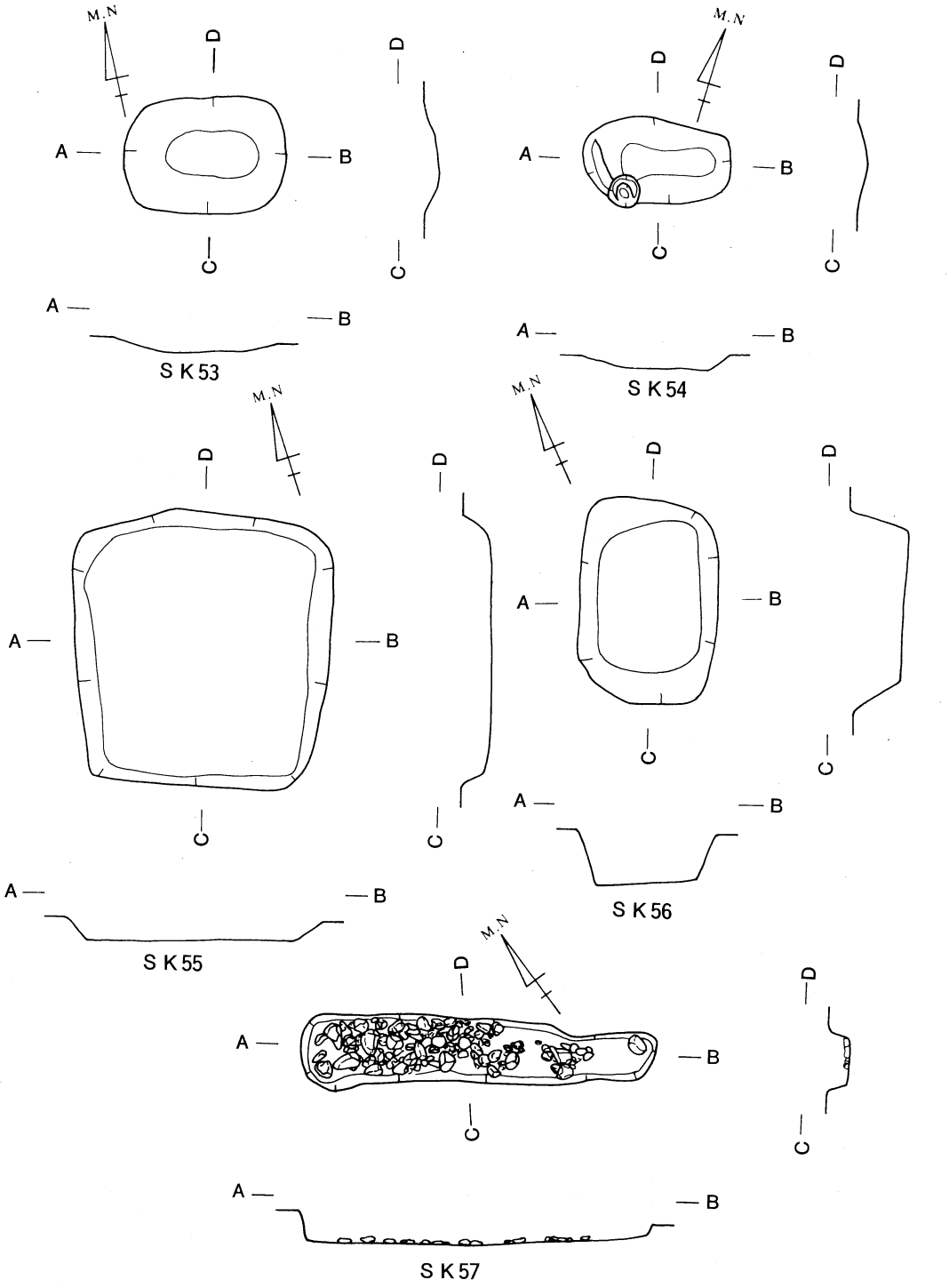
第97図　ＳＫ43～45



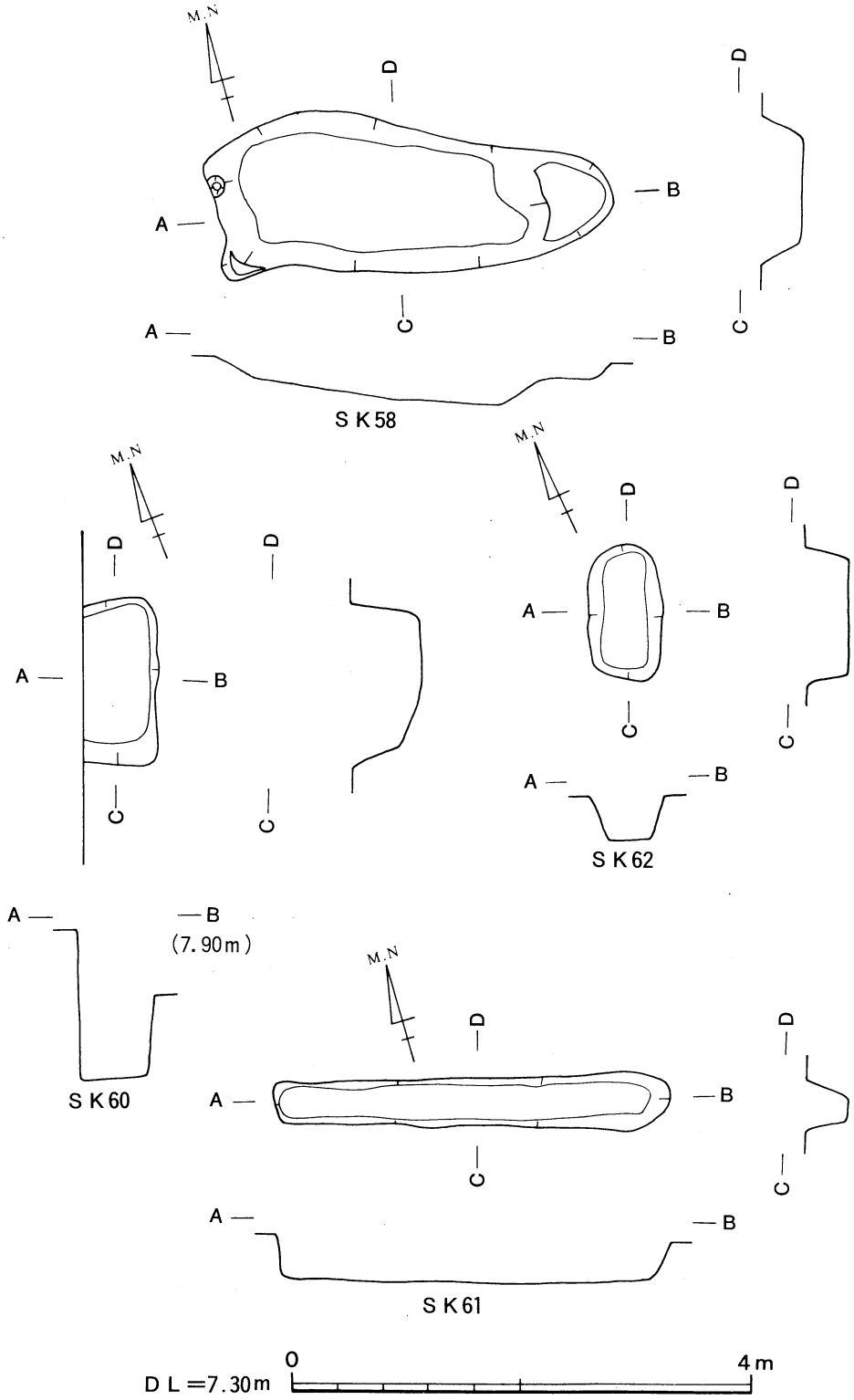
第98図　S K 46～49



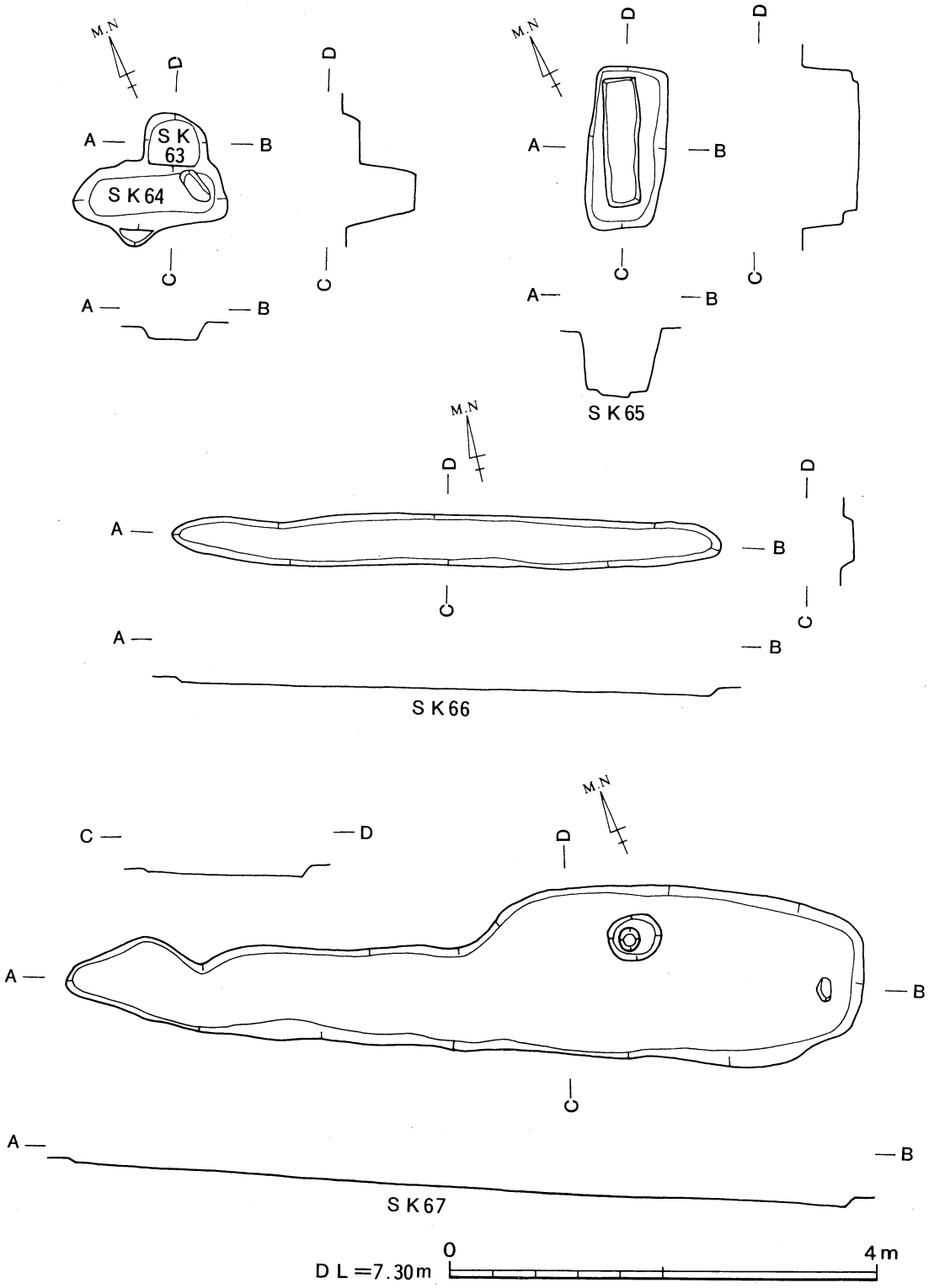
第99図　SK50～52



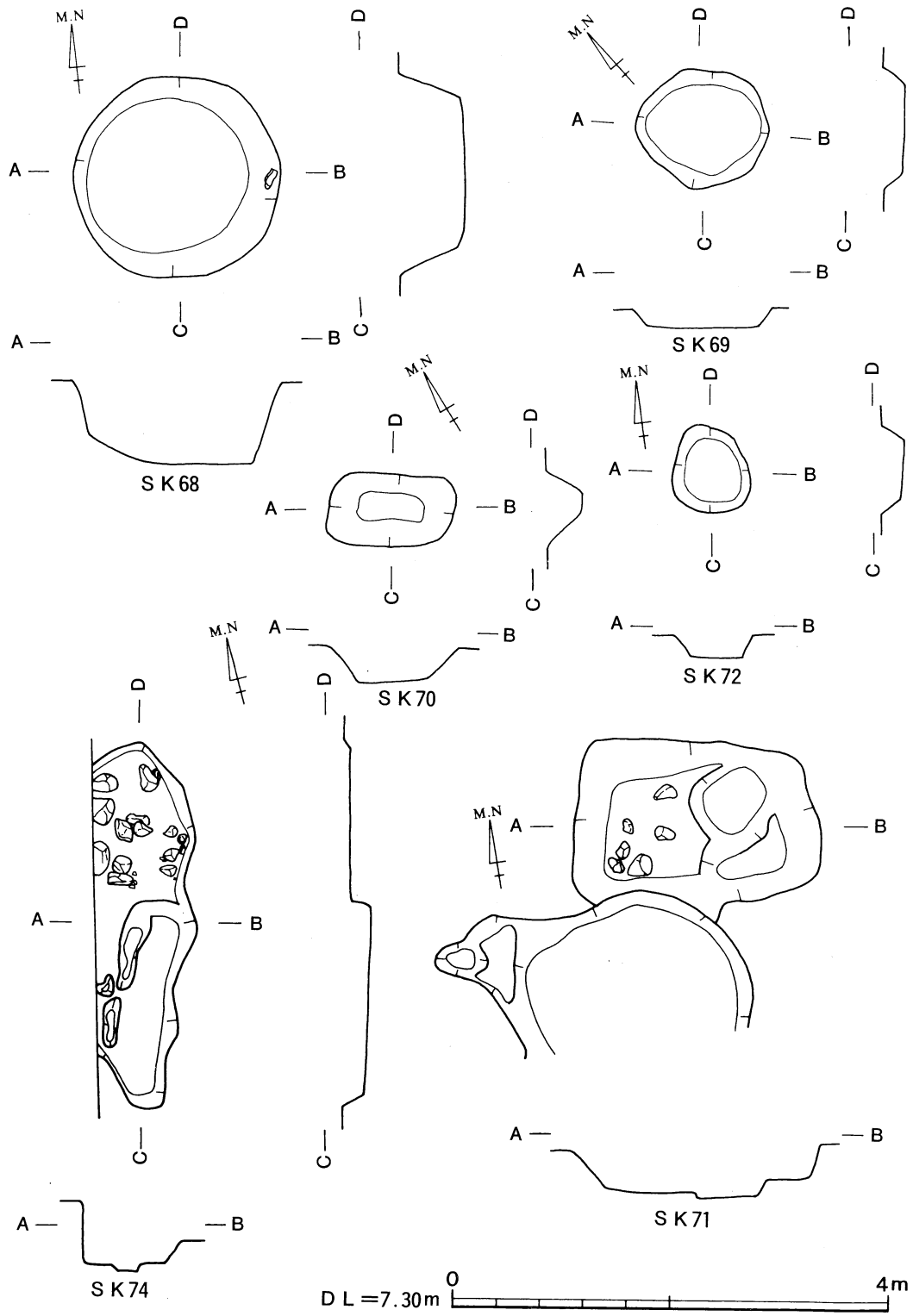
第100図　SK53～57



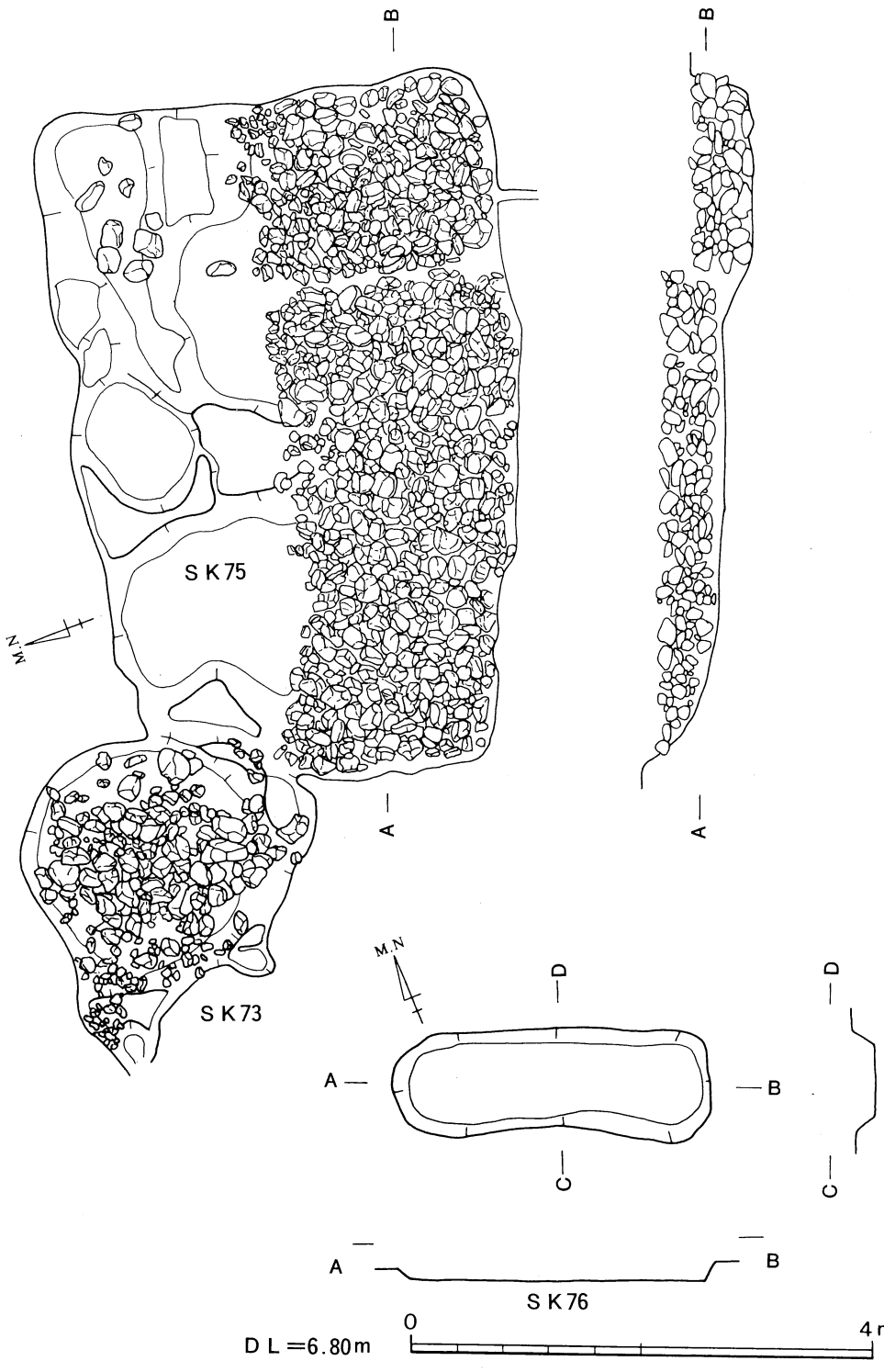
第101図　ＳＫ58・60～62



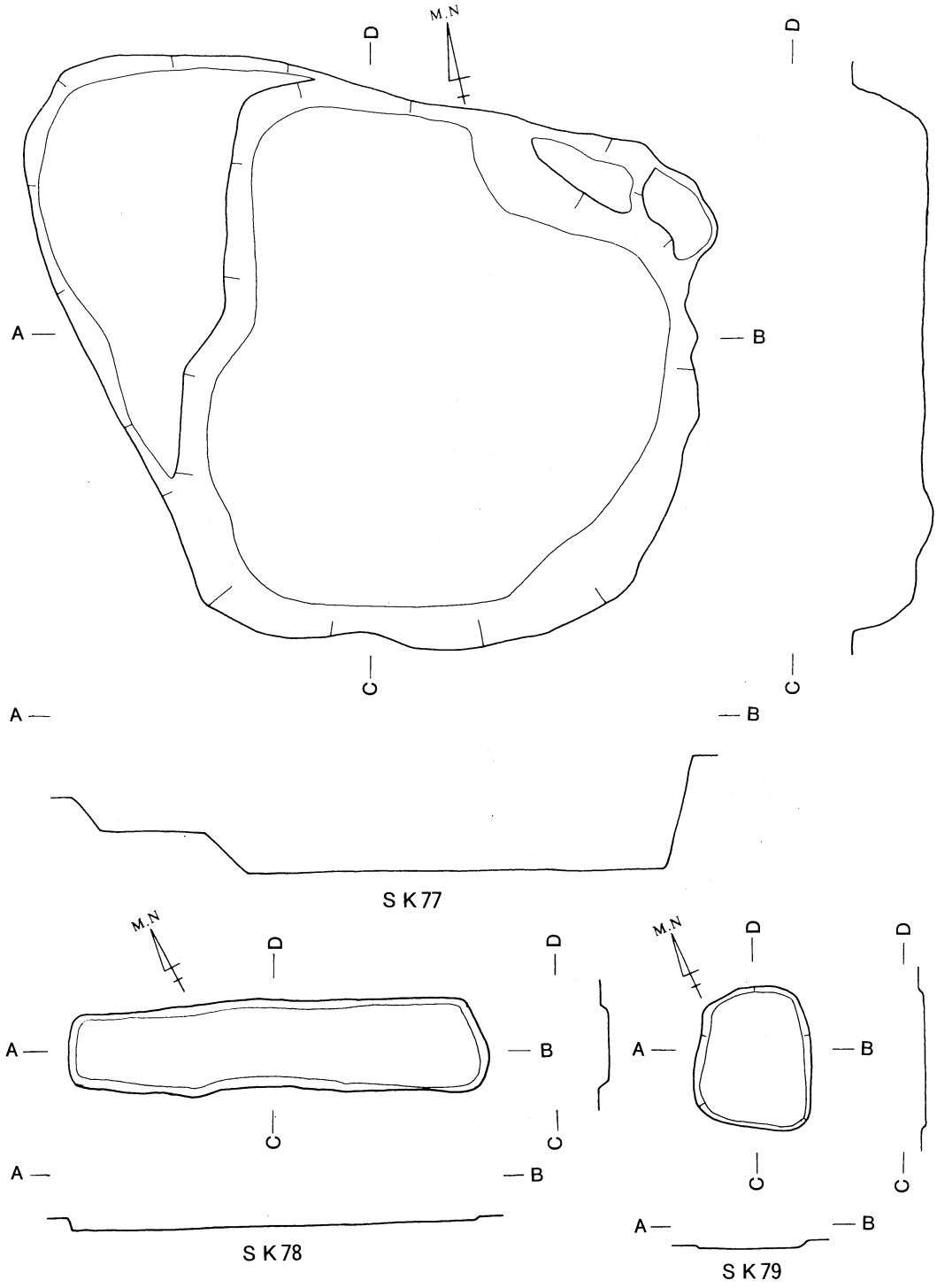
第102図　SK63～67



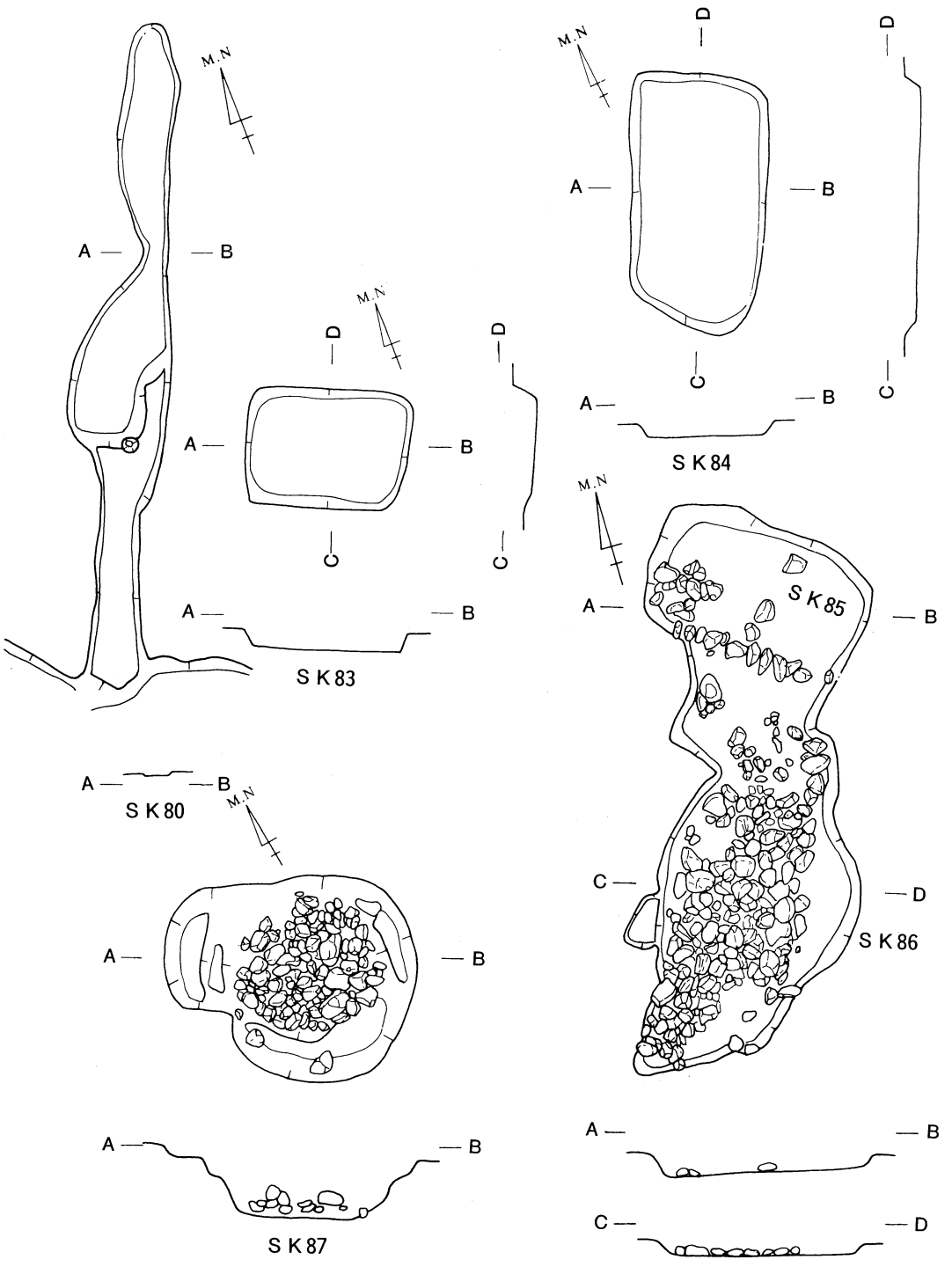
第103図　SK68～72・74



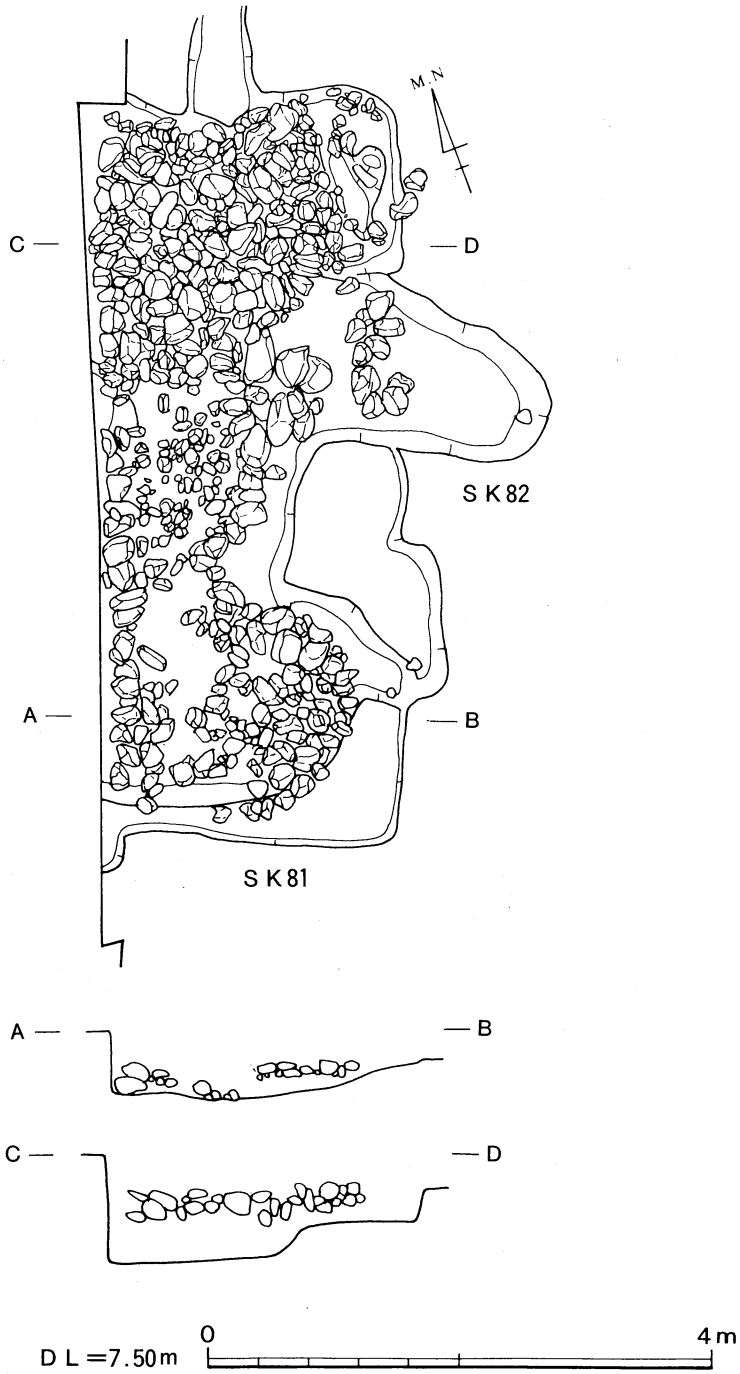
第104図　S K 73・75・76



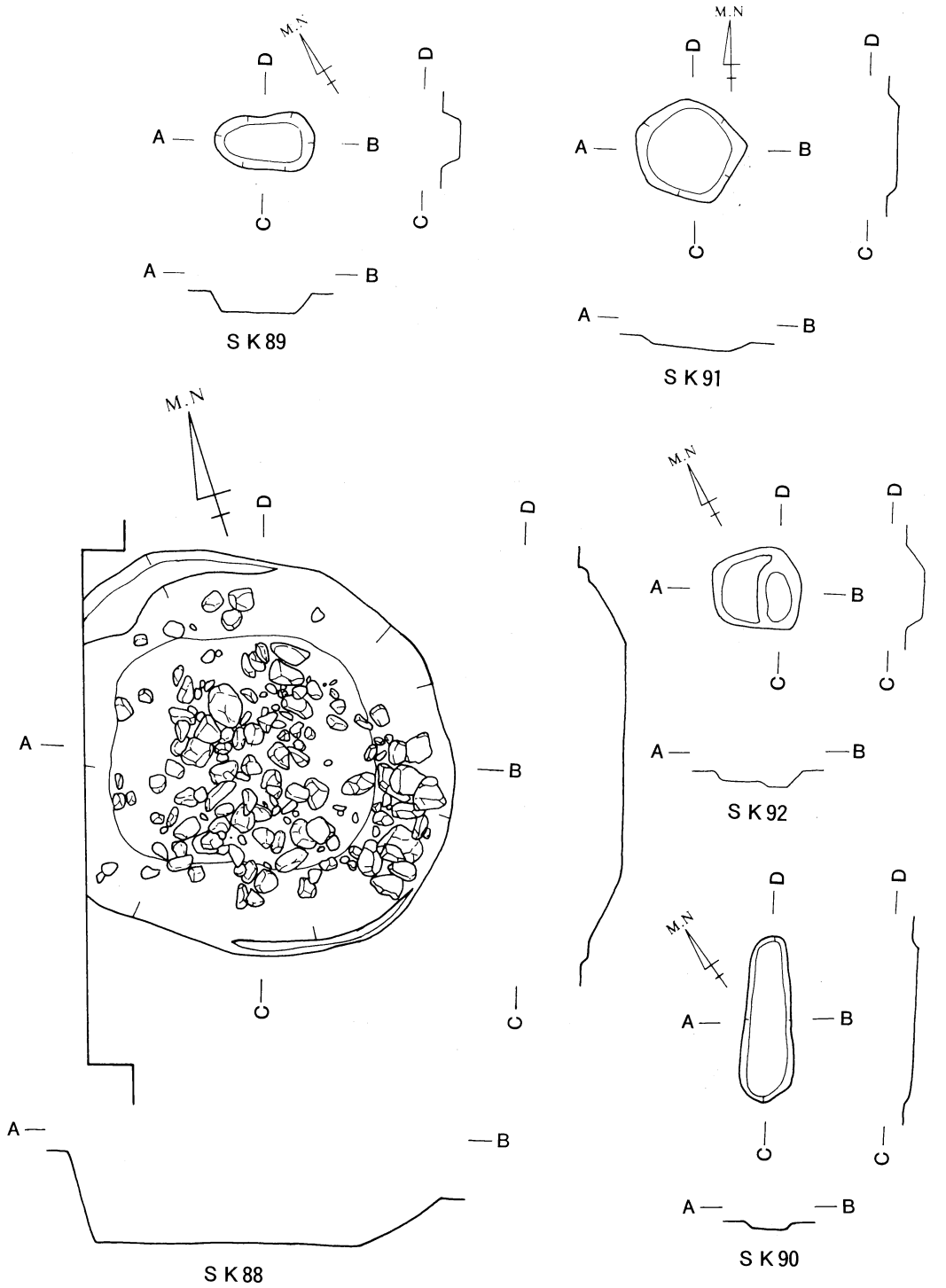
第105図　SK77～79



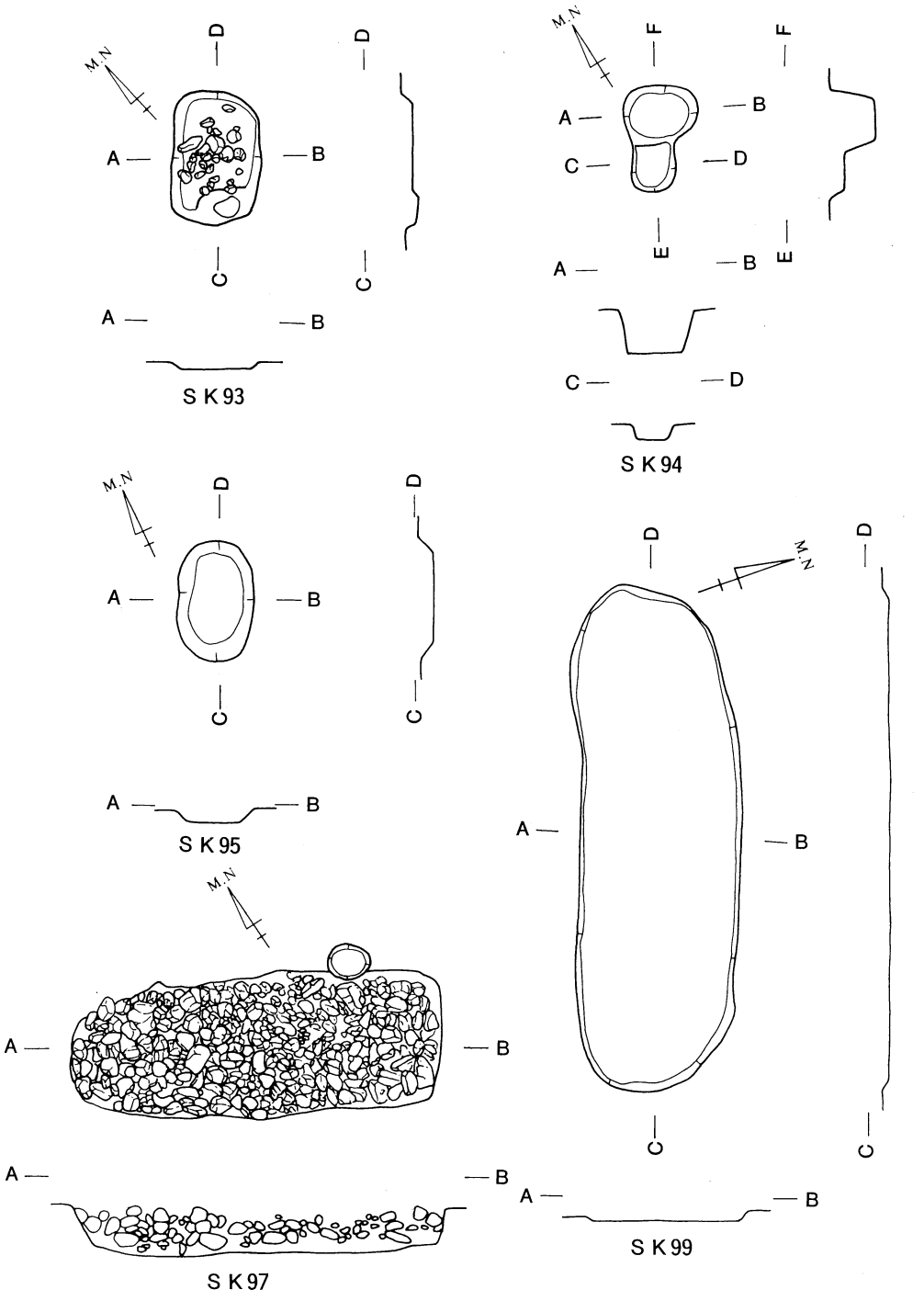
第106図　S K 80・83～87



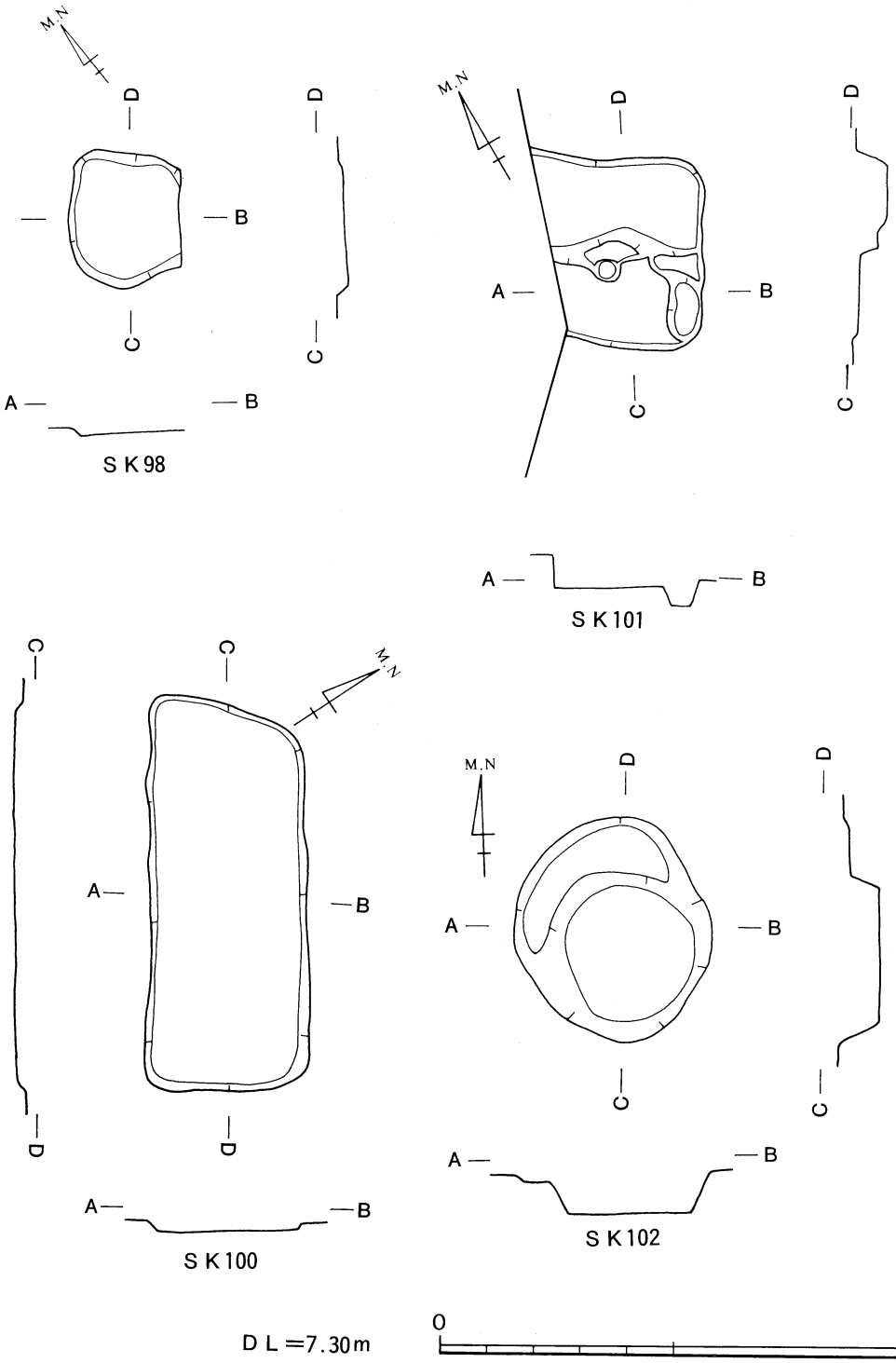
第107図　SK81・82



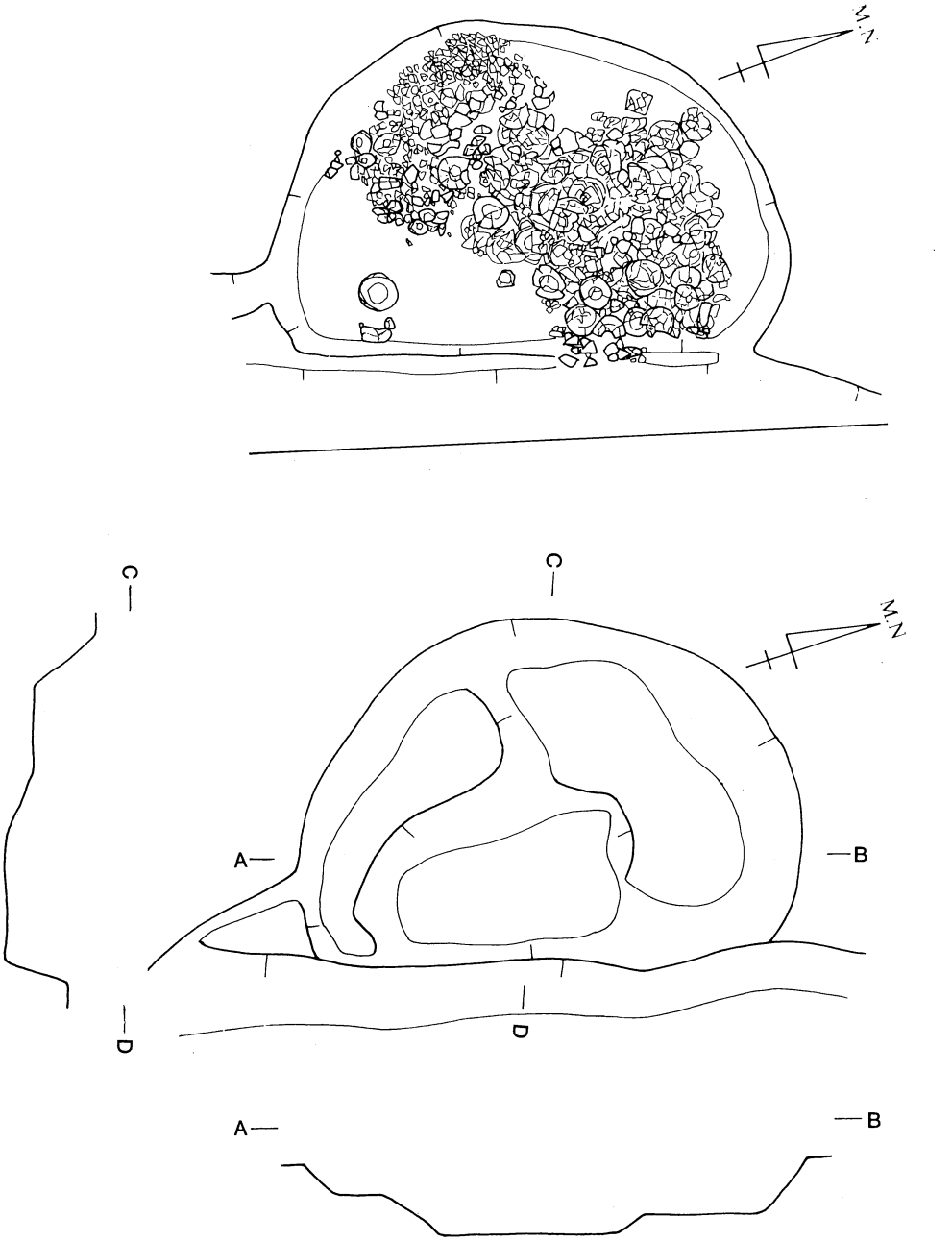
第108図　SK88～92



第109図　SK93～95・97・99



第110図　SK98・100～102

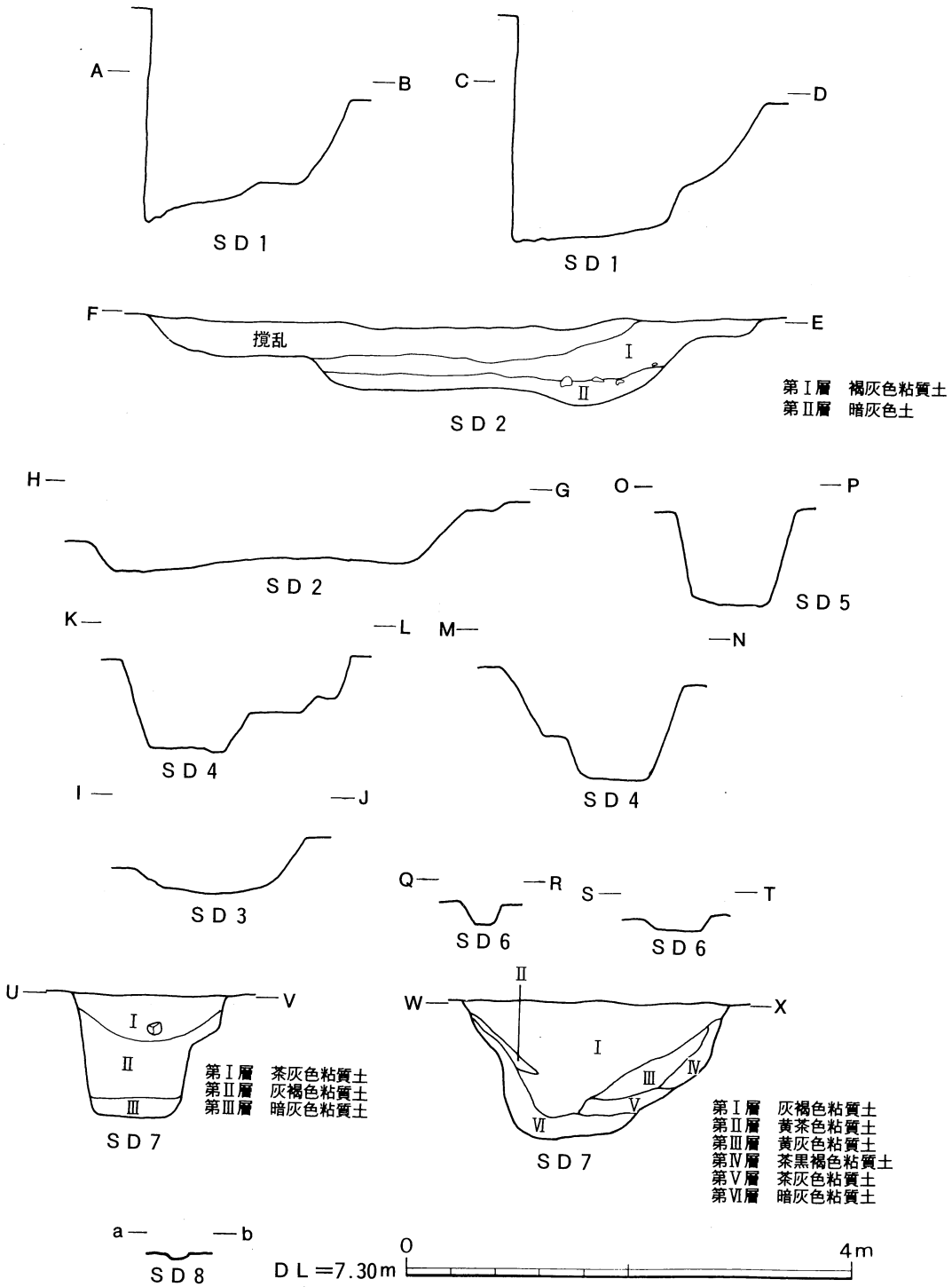


SK96

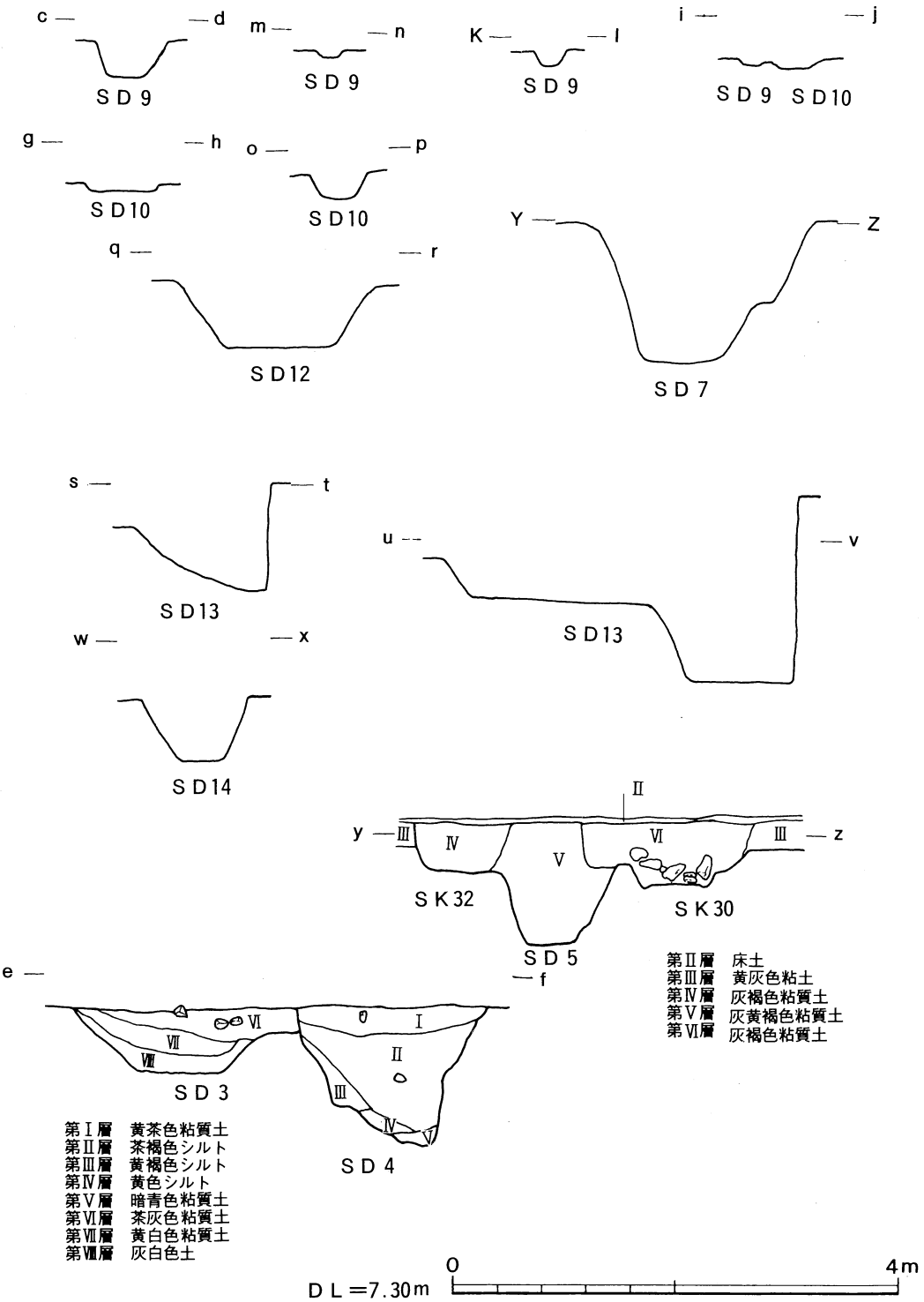
DL=7.50m

0 2m

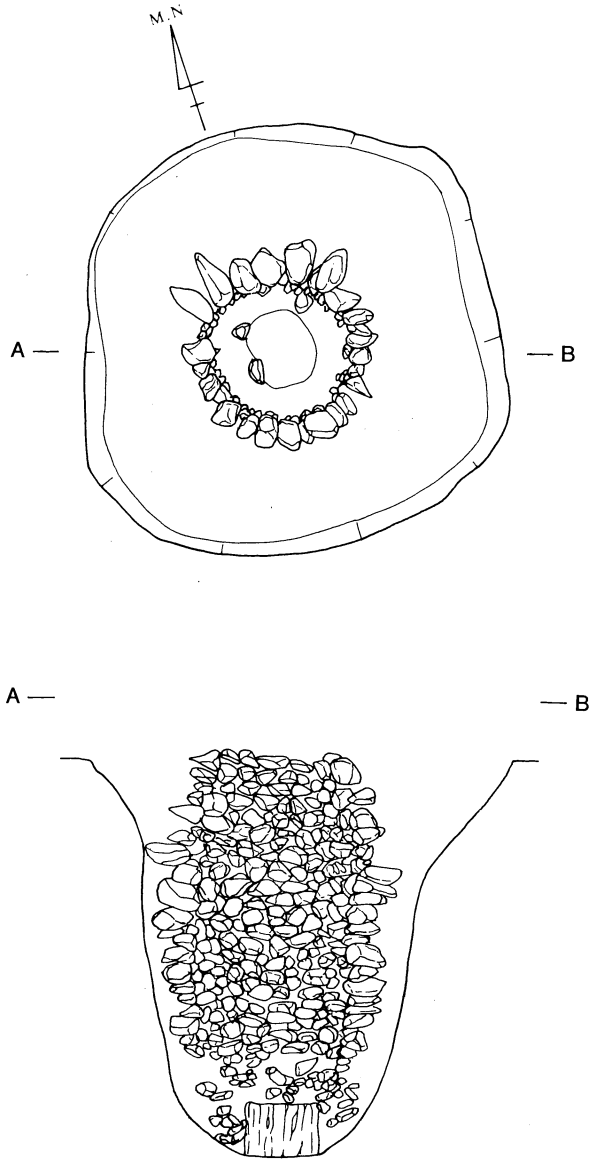
第111図　SK96


A
B
SD 1
C
D
SD 1
F
E
撹乱
I
II
SD 2
第Ⅰ層　褐灰色粘質土
第Ⅱ層　暗灰色土
H
G
SD 2
O
P
SD 5
K
L
SD 4
M
N
SD 4
I
J
SD 3
Q
R
SD 6
S
T
SD 6
U
V
I
II
III
第Ⅰ層　茶灰色粘質土
第Ⅱ層　灰褐色粘質土
第Ⅲ層　暗灰色粘質土
SD 7
W
X
II
I
III
IV
V
VI
SD 7
第Ⅰ層　灰褐色粘質土
第Ⅱ層　黄茶色粘質土
第Ⅲ層　黄灰色粘質土
第Ⅳ層　茶黒褐色粘質土
第Ⅴ層　茶灰色粘質土
第Ⅵ層　暗灰色粘質土
a
b
SD 8
DL=7.30m
0
4m

第112図　SD 1～8



第113図　SK30・32、SD3～5・7・9・10・12～14

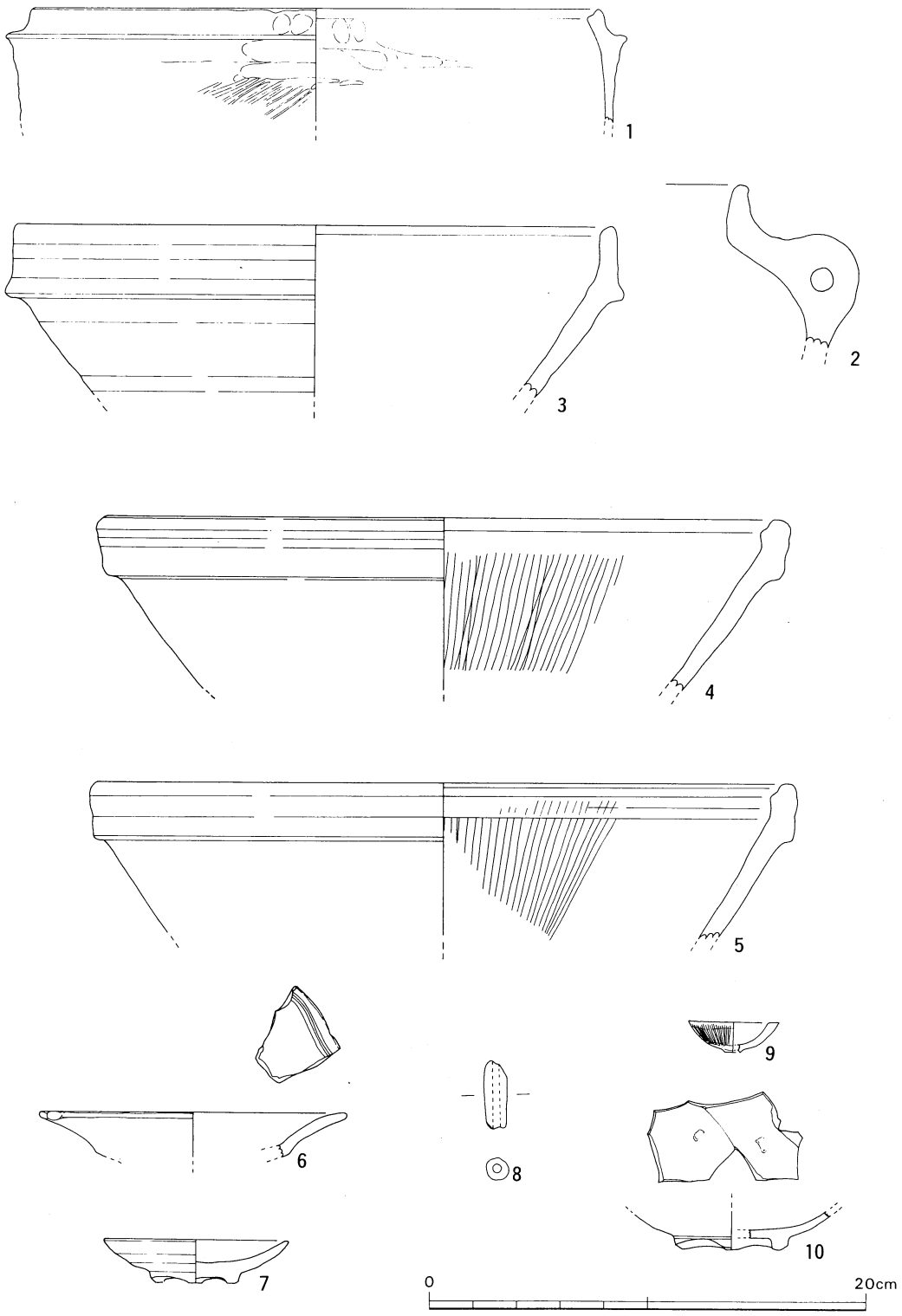


SE1

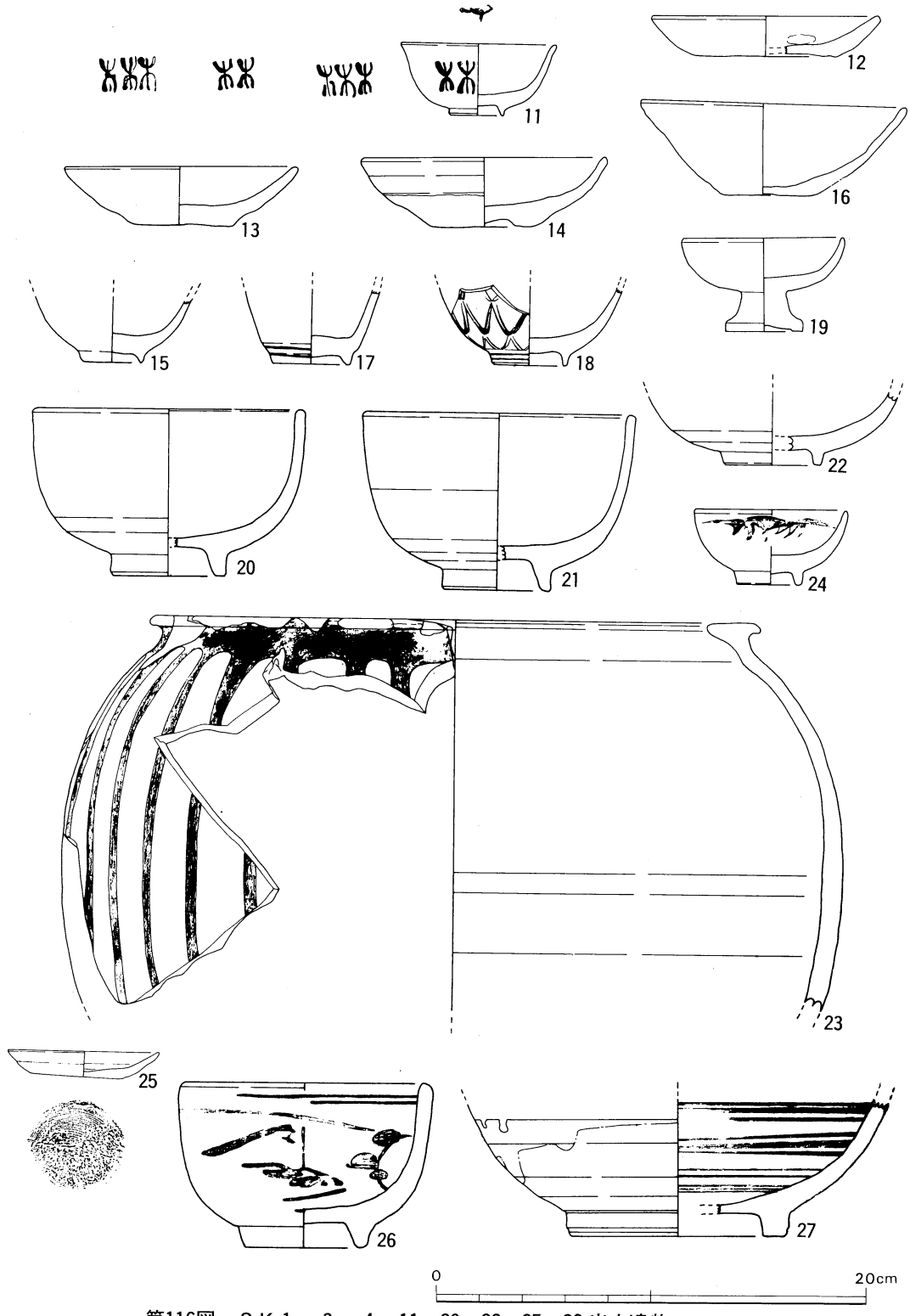
DL=7.50m

0 2m

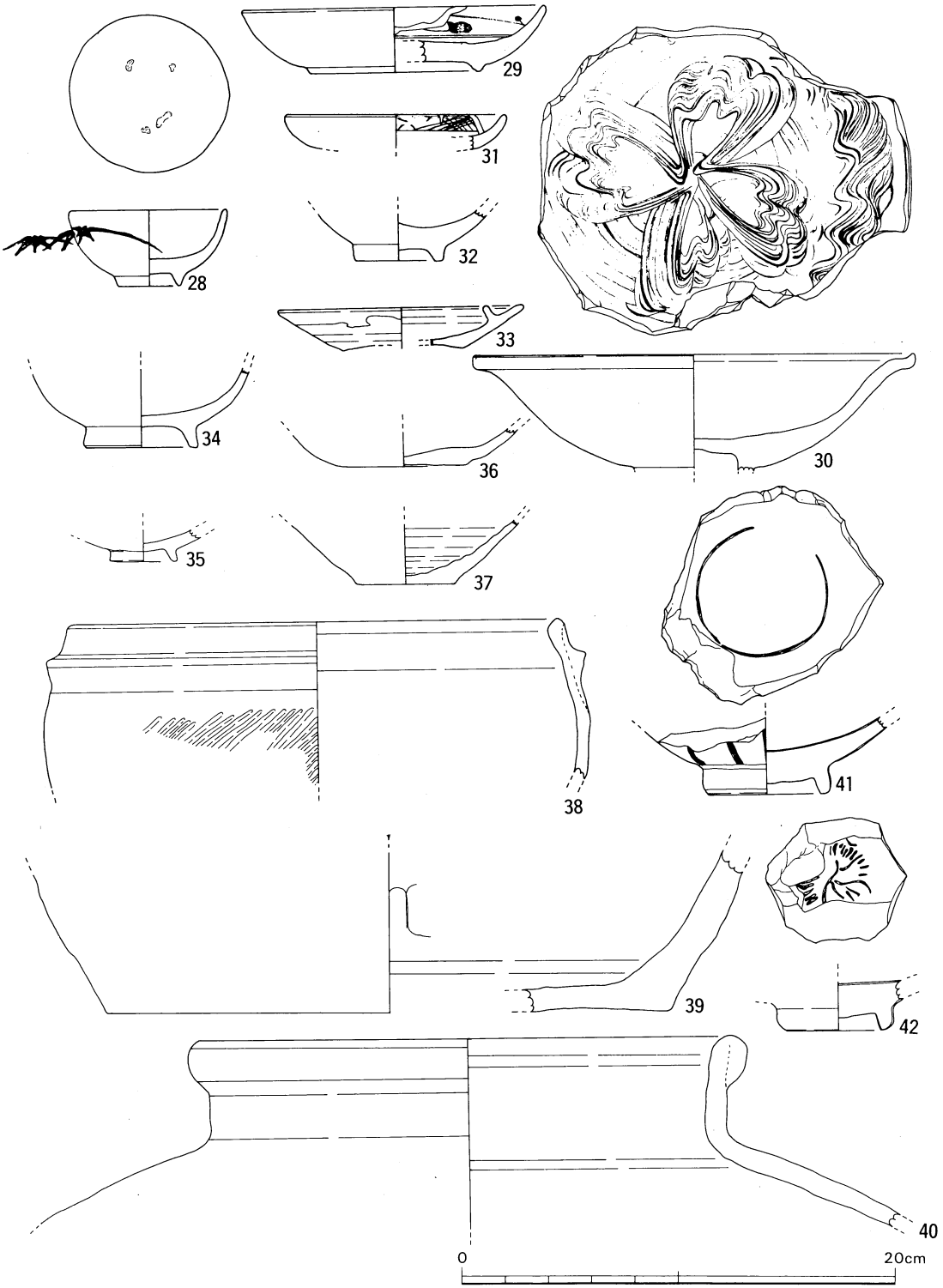
第114図　SE1



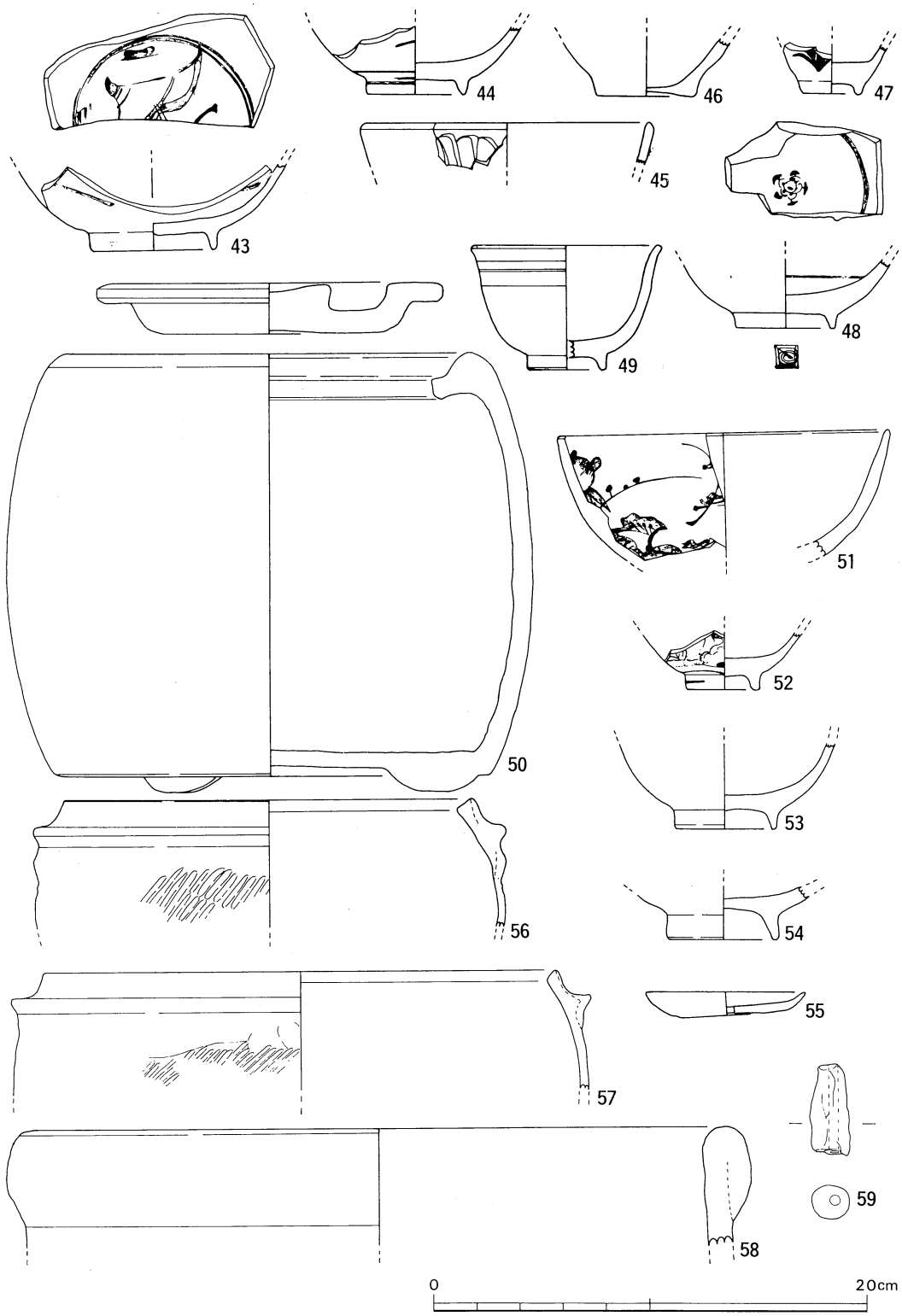
第115図　第Ⅲ層、ＳＢ10出土遺物



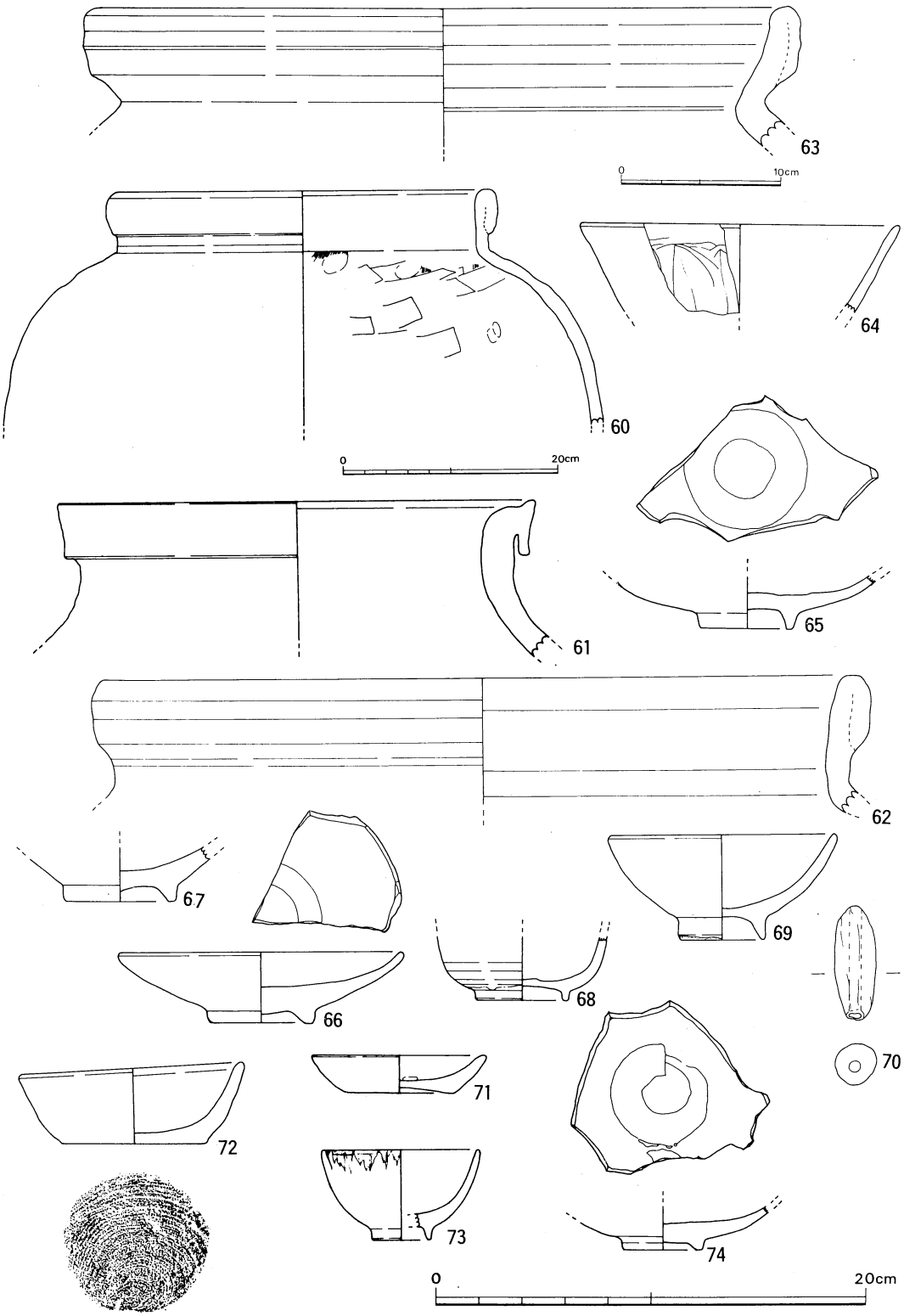
第116図　ＳＫ１・３・４・11・20～22・25・26 出土遺物



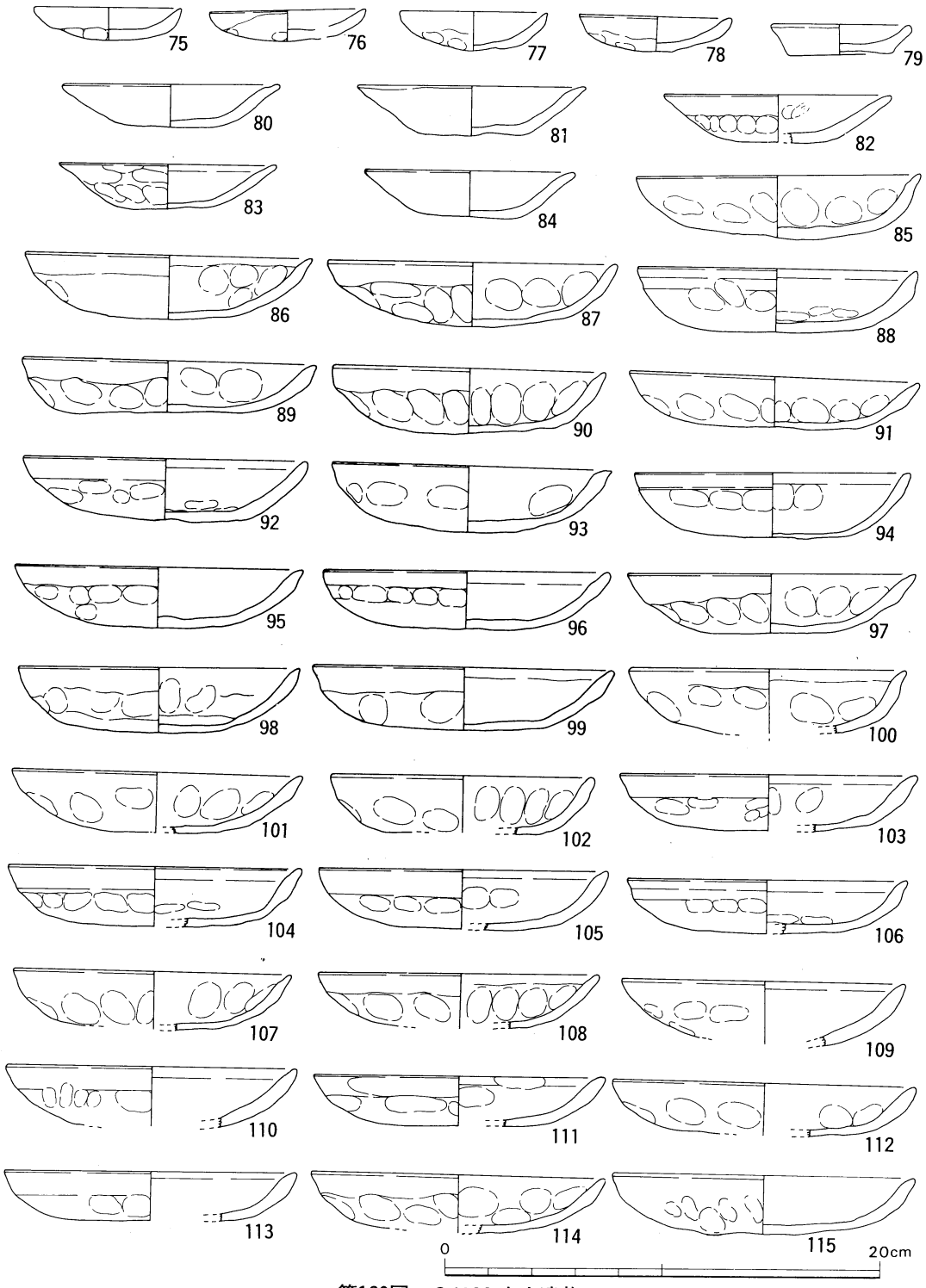
第117図　ＳＫ27・33～35・37・52 出土遺物



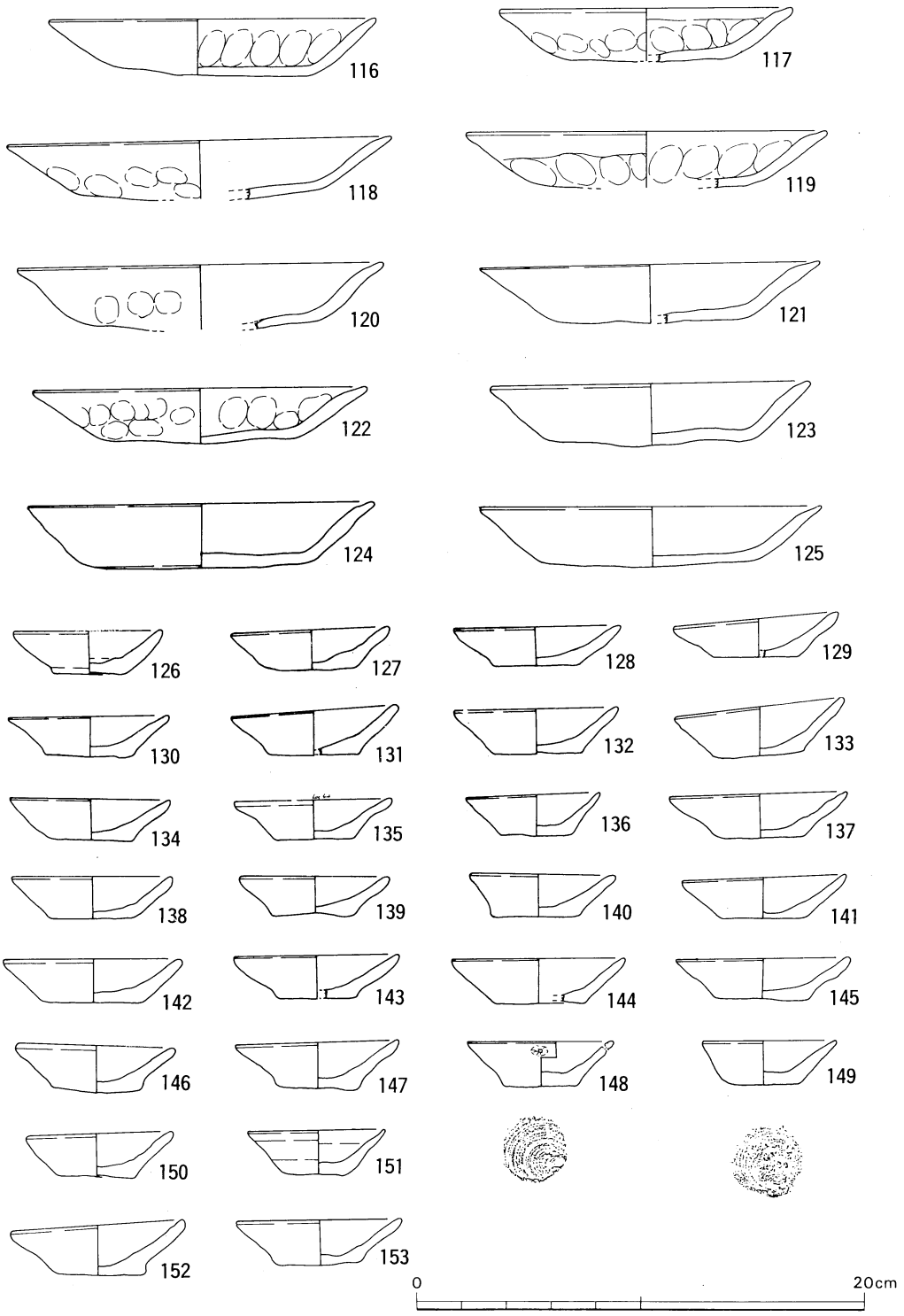
第118図　ＳＫ58～60・68・73・75 出土遺物



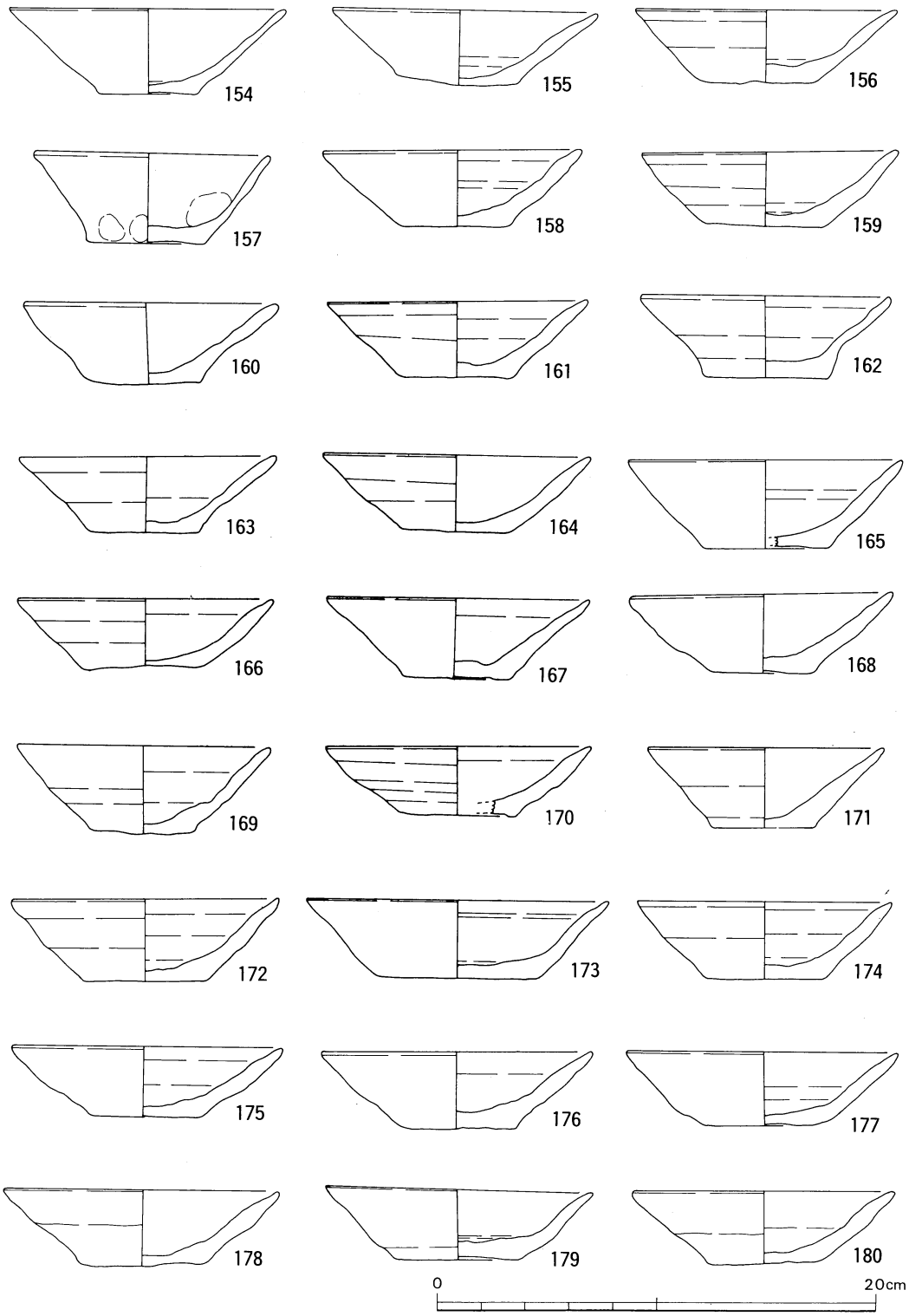
第119図　ＳＫ75・77・80・81 出土遺物



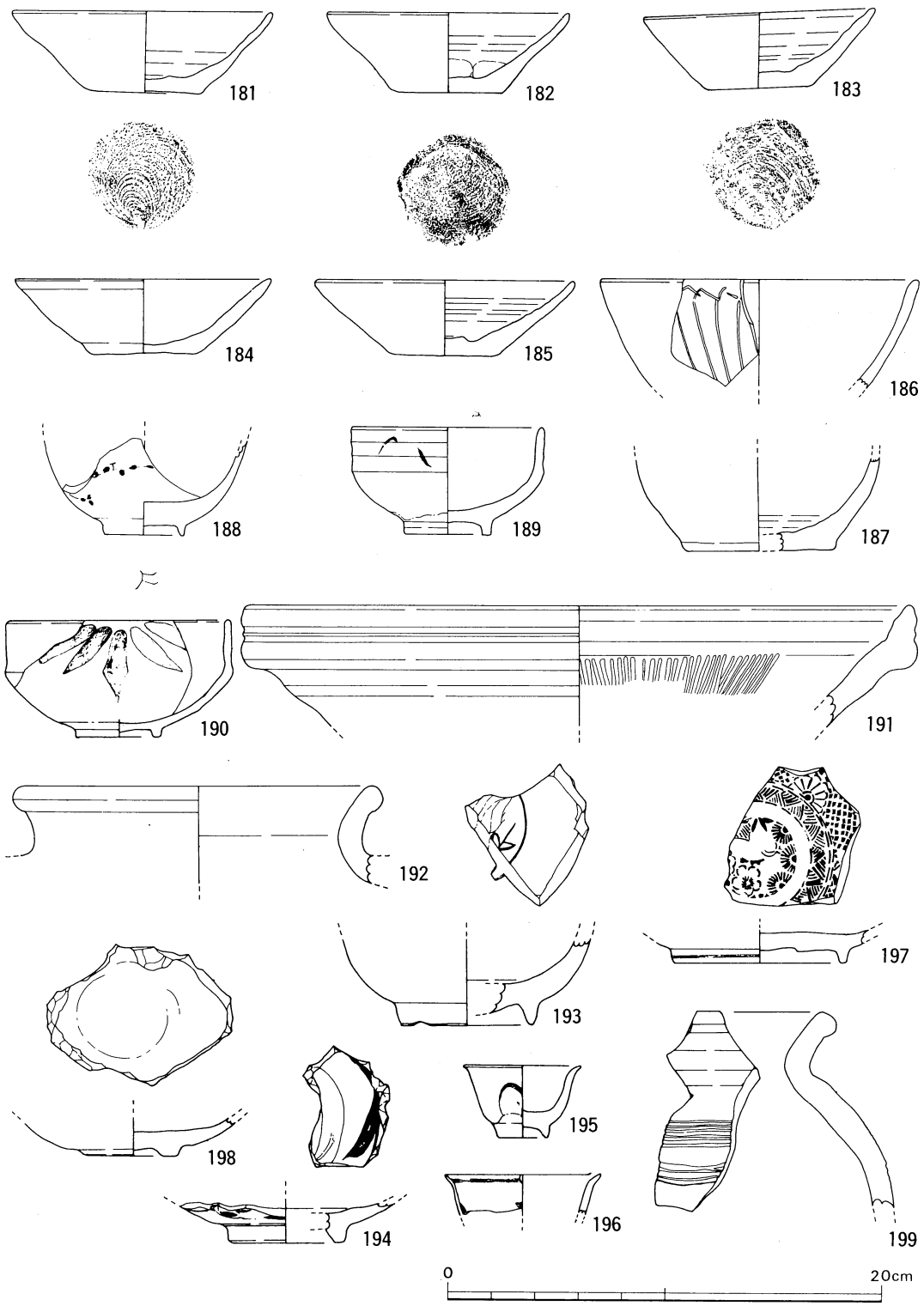
第120図　ＳＫ96 出土遺物



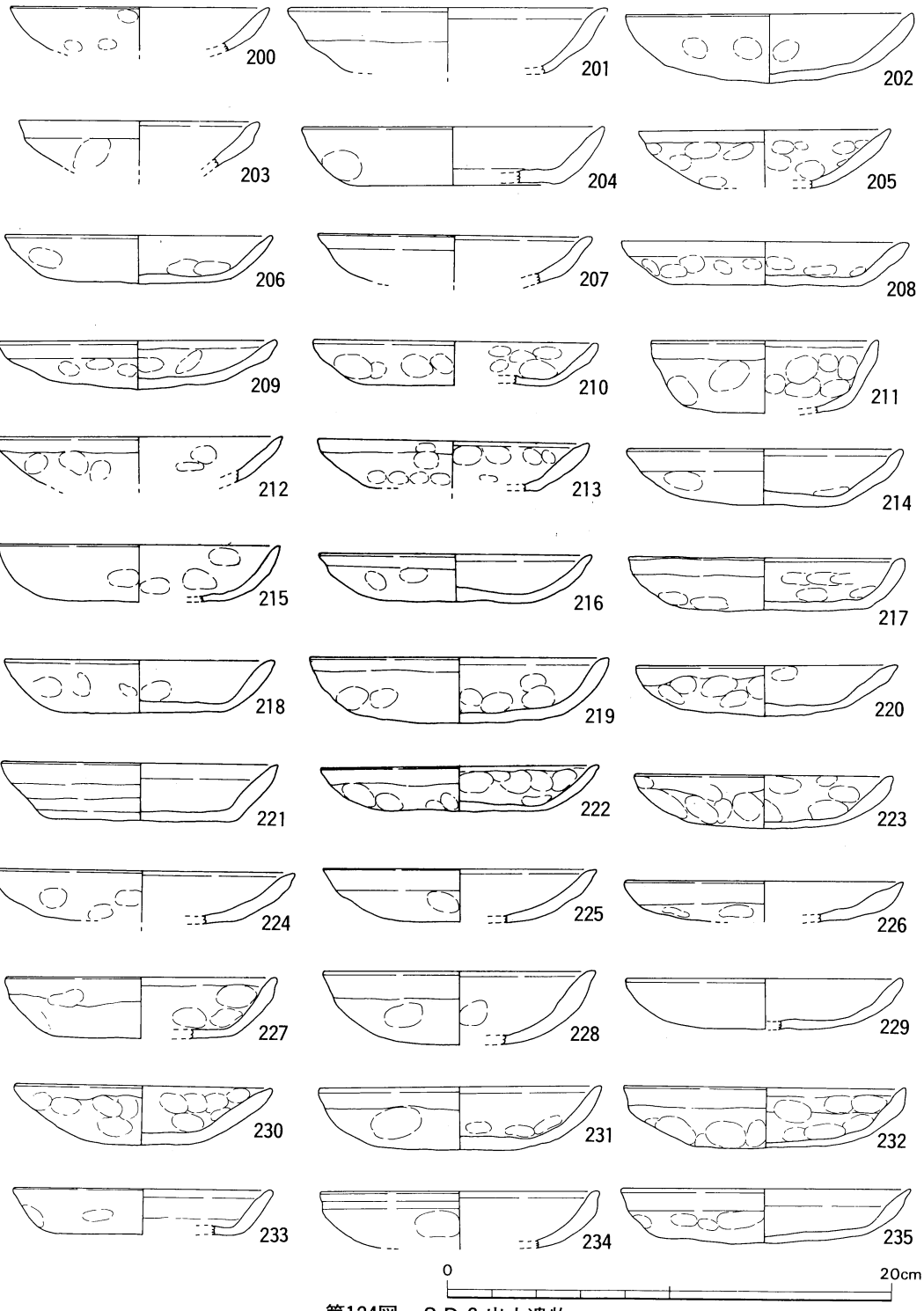
第121図　ＳＫ96 出土遺物



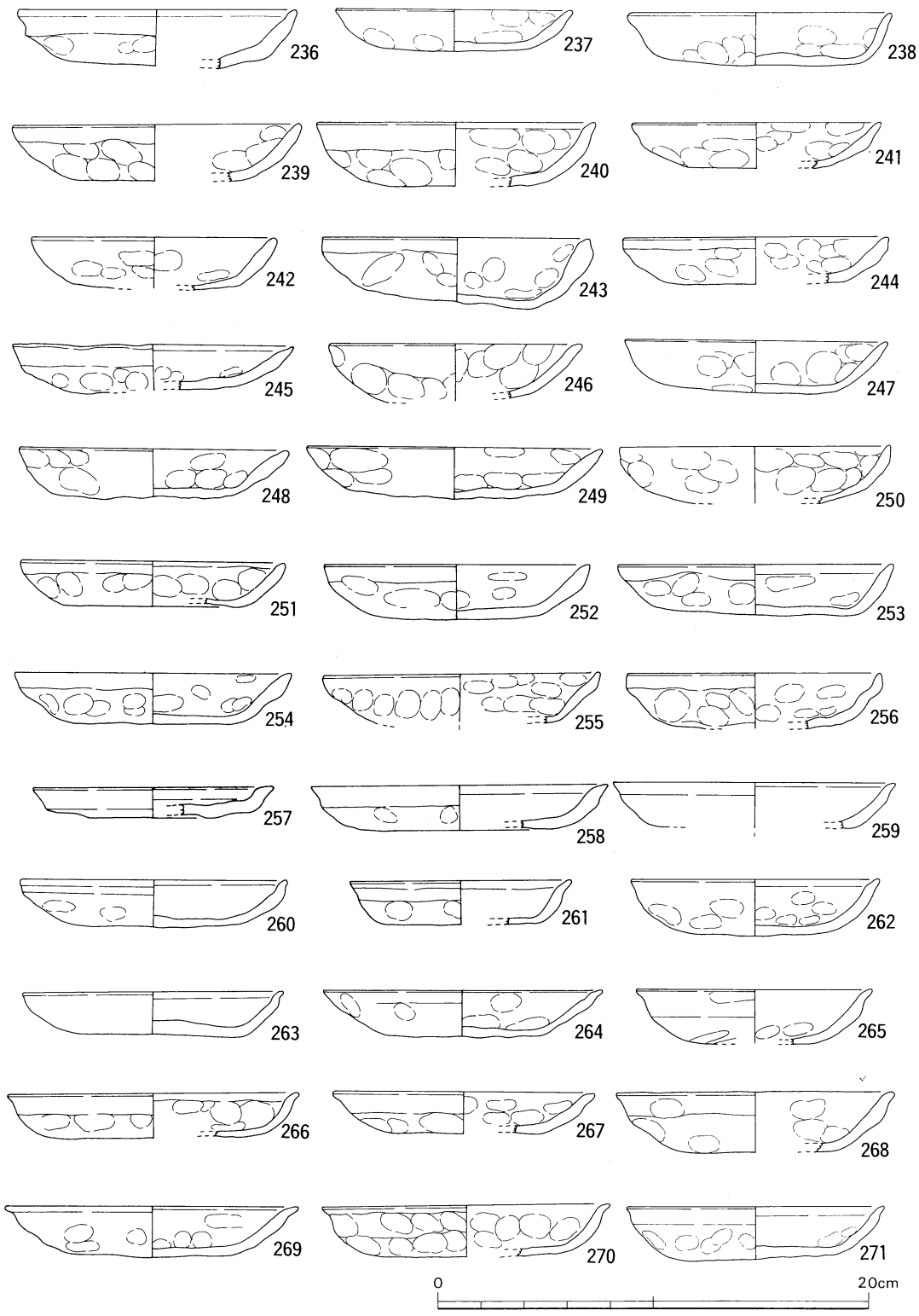
第122図　ＳＫ96出土遺物



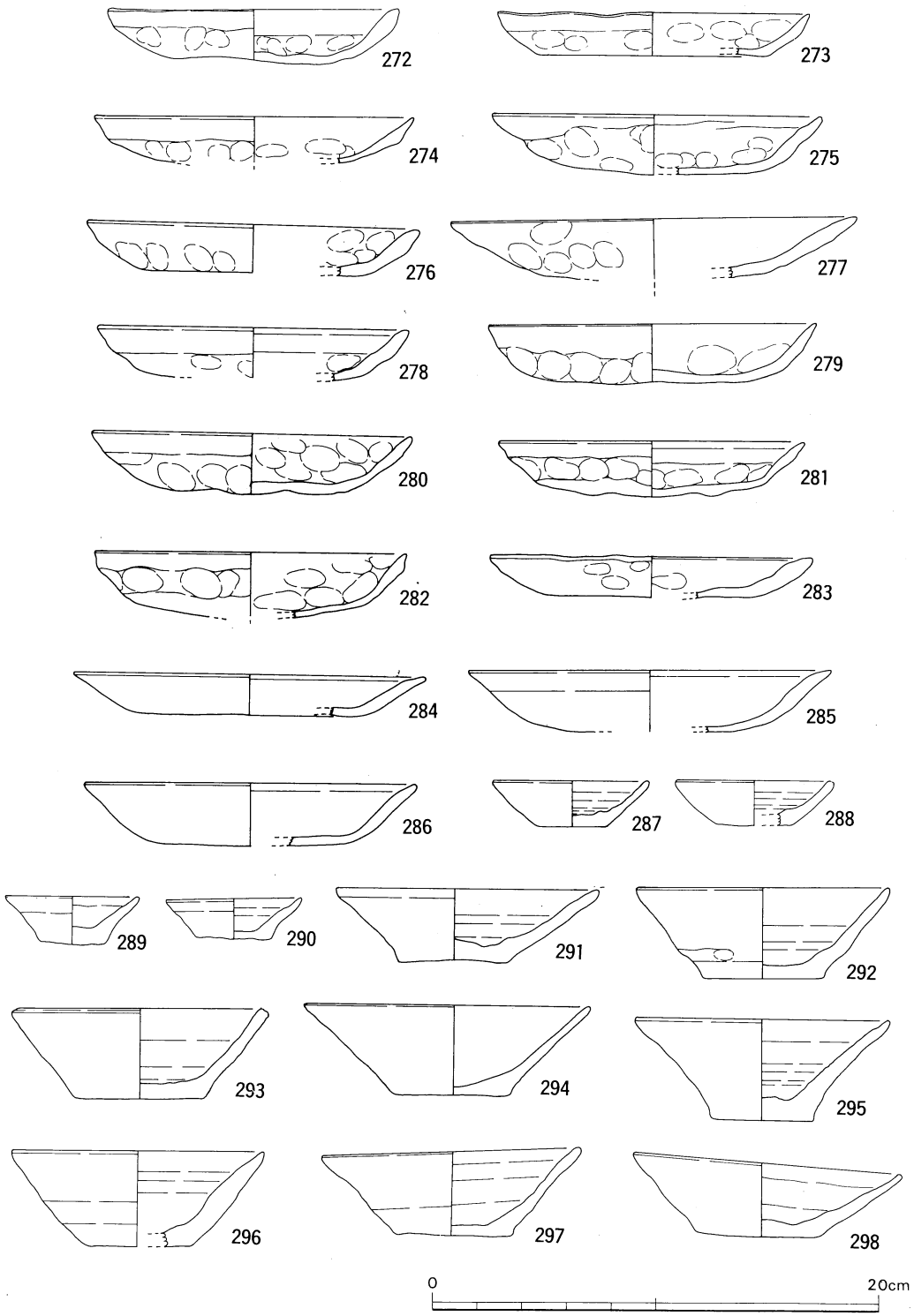
第123図　ＳＫ96・97・99、ＳＤ１出土遺物



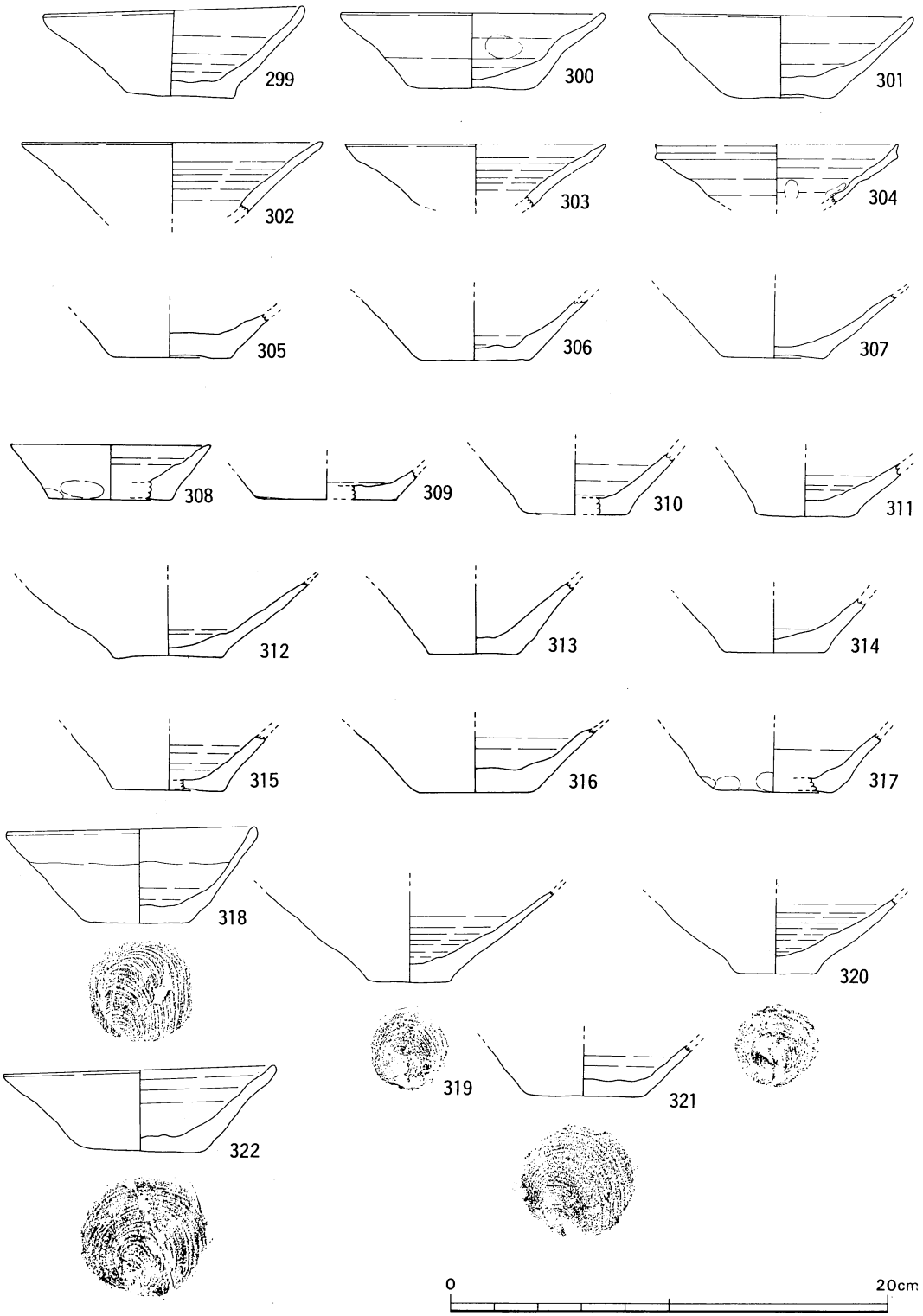
第124図　ＳＤ２出土遺物



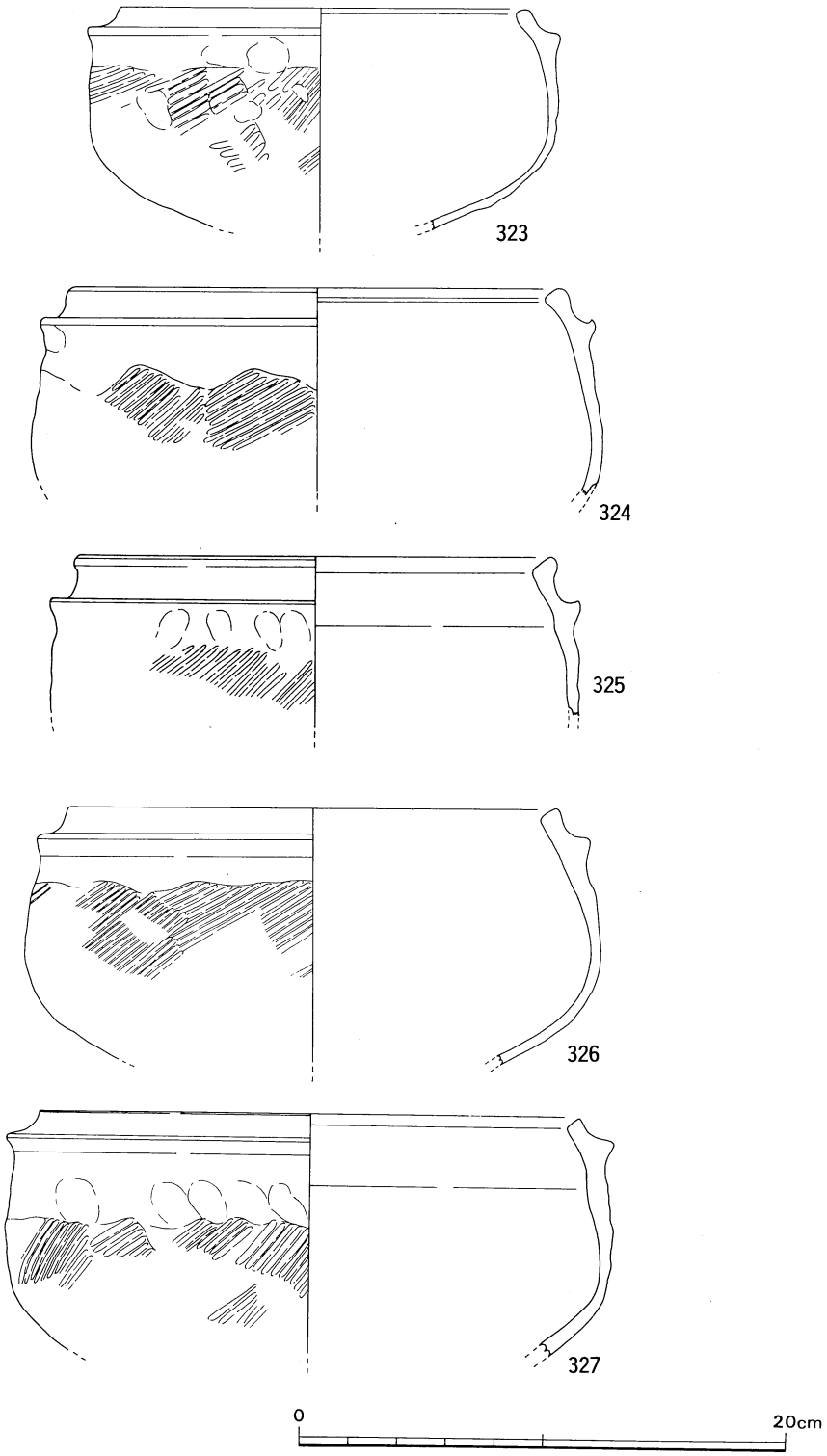
第125図　ＳＤ２ 出土遺物



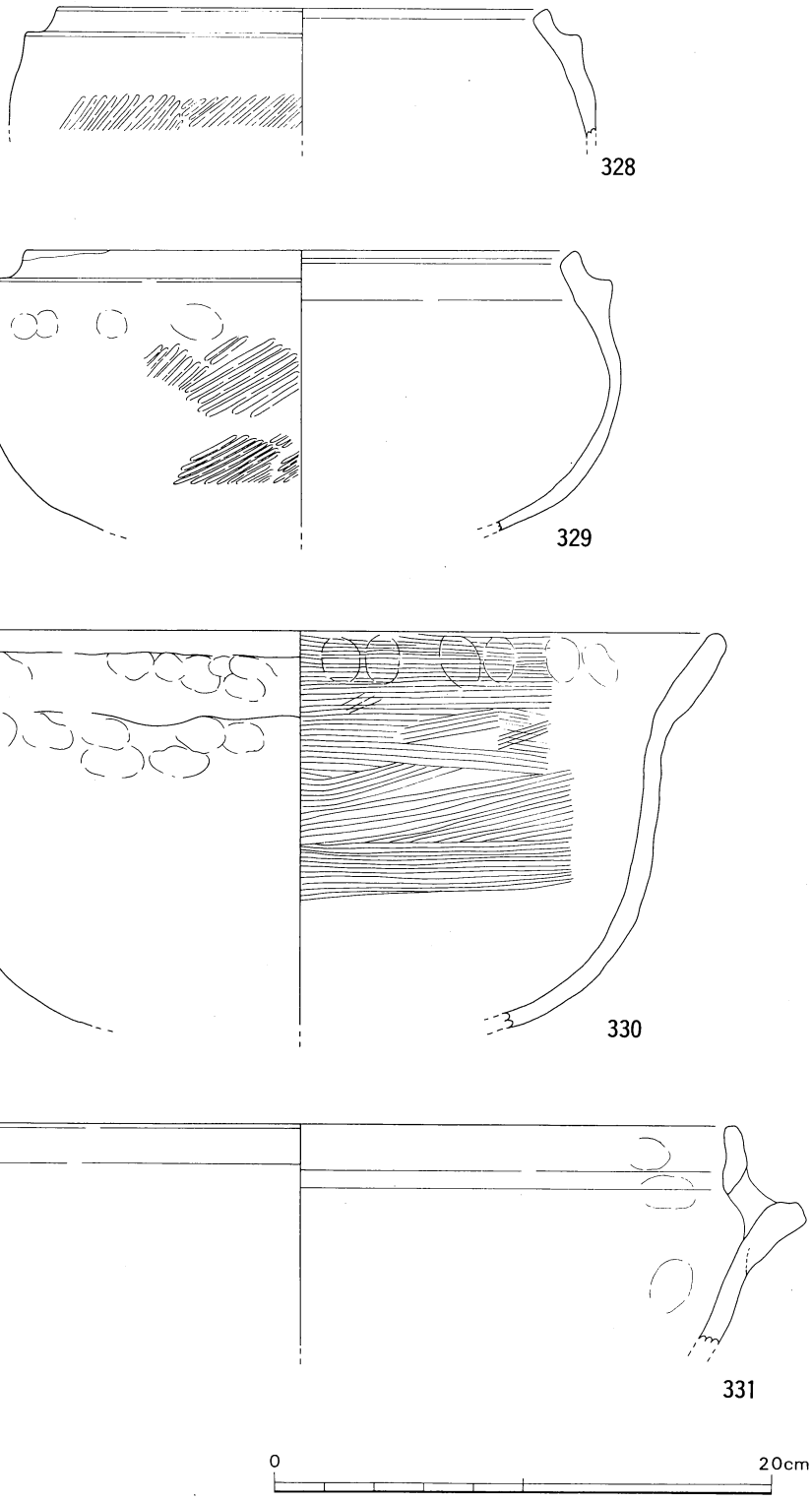
第126図　ＳＤ２出土遺物



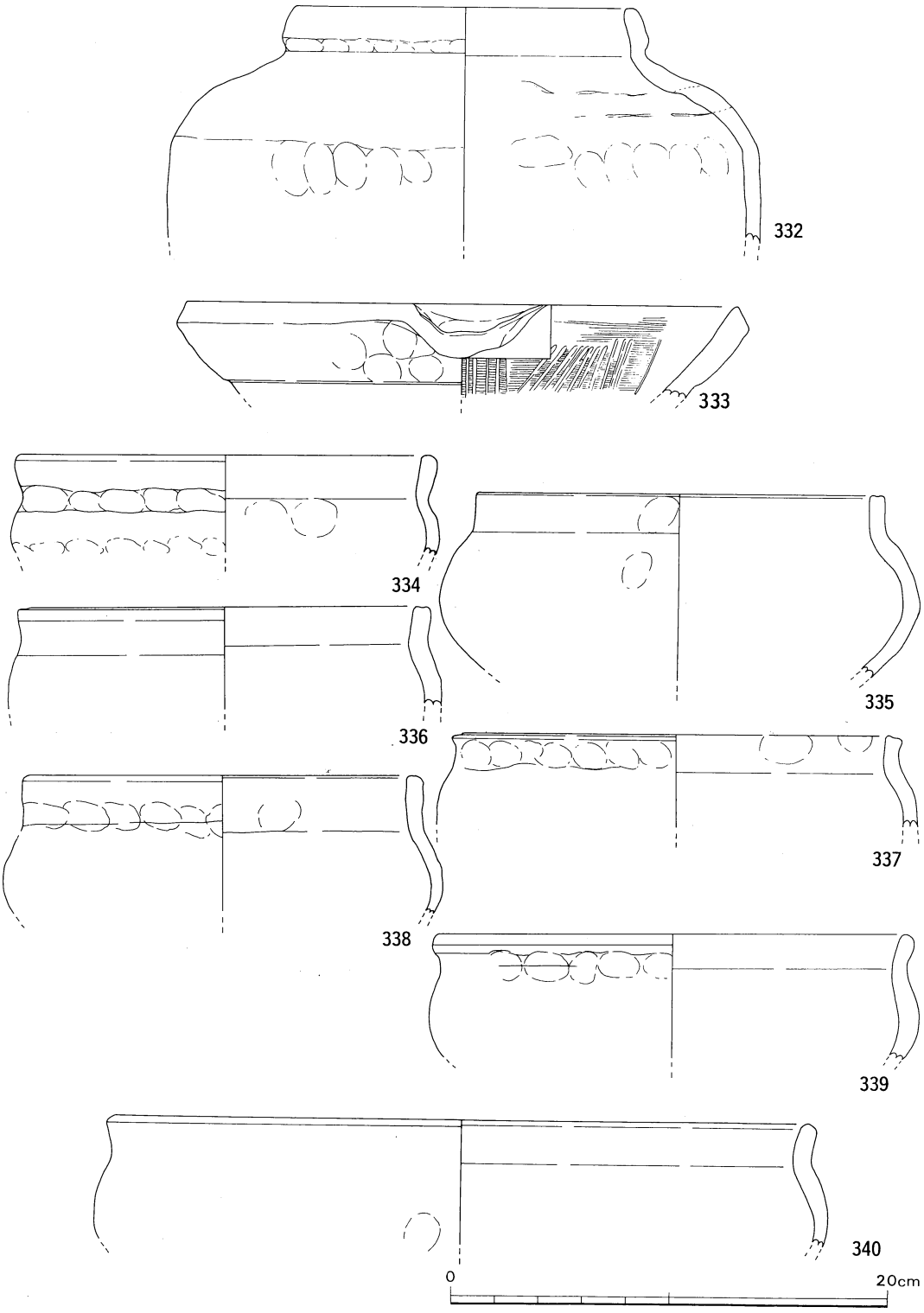
第127図　ＳＤ２出土遺物



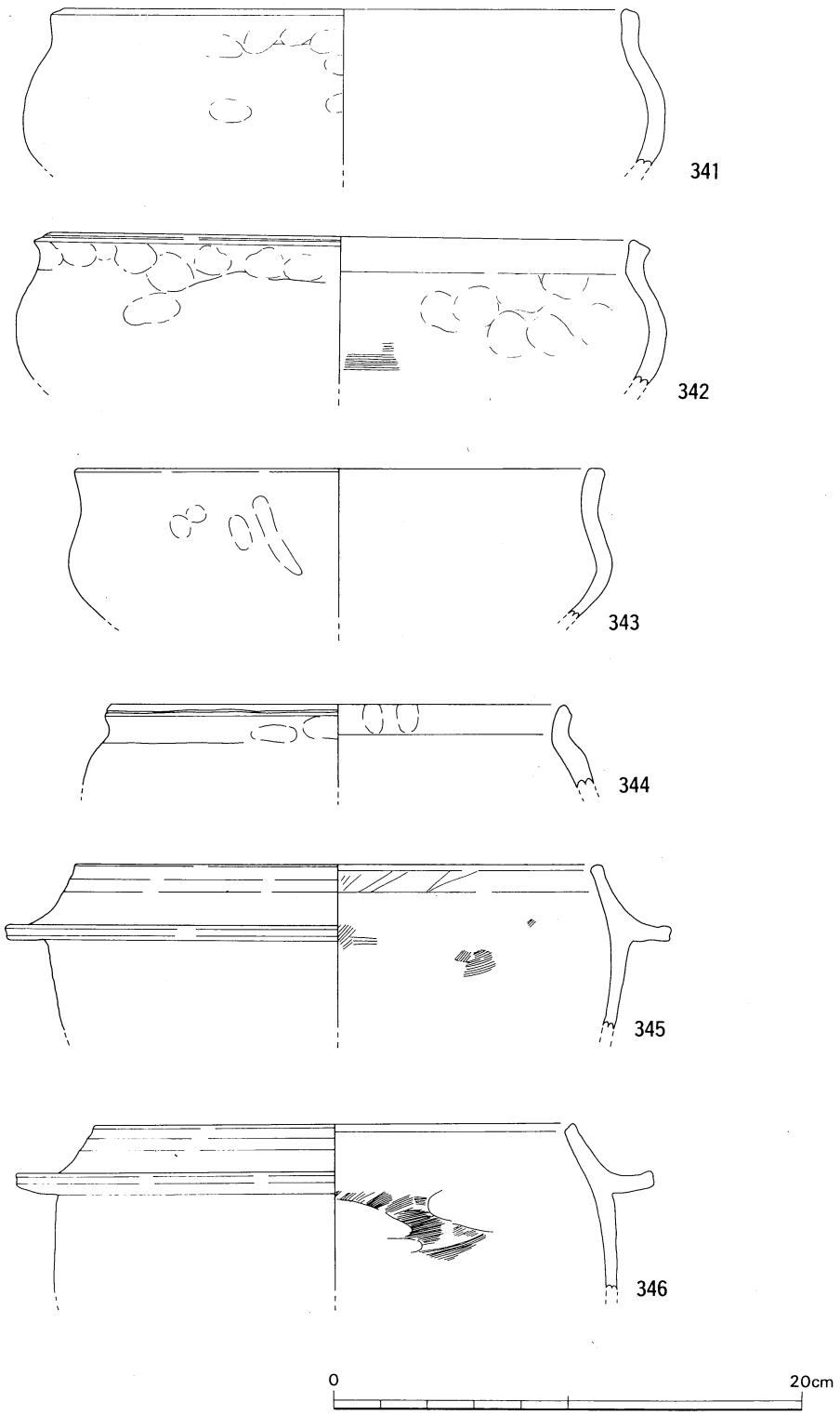
第128図　ＳＤ２出土遺物



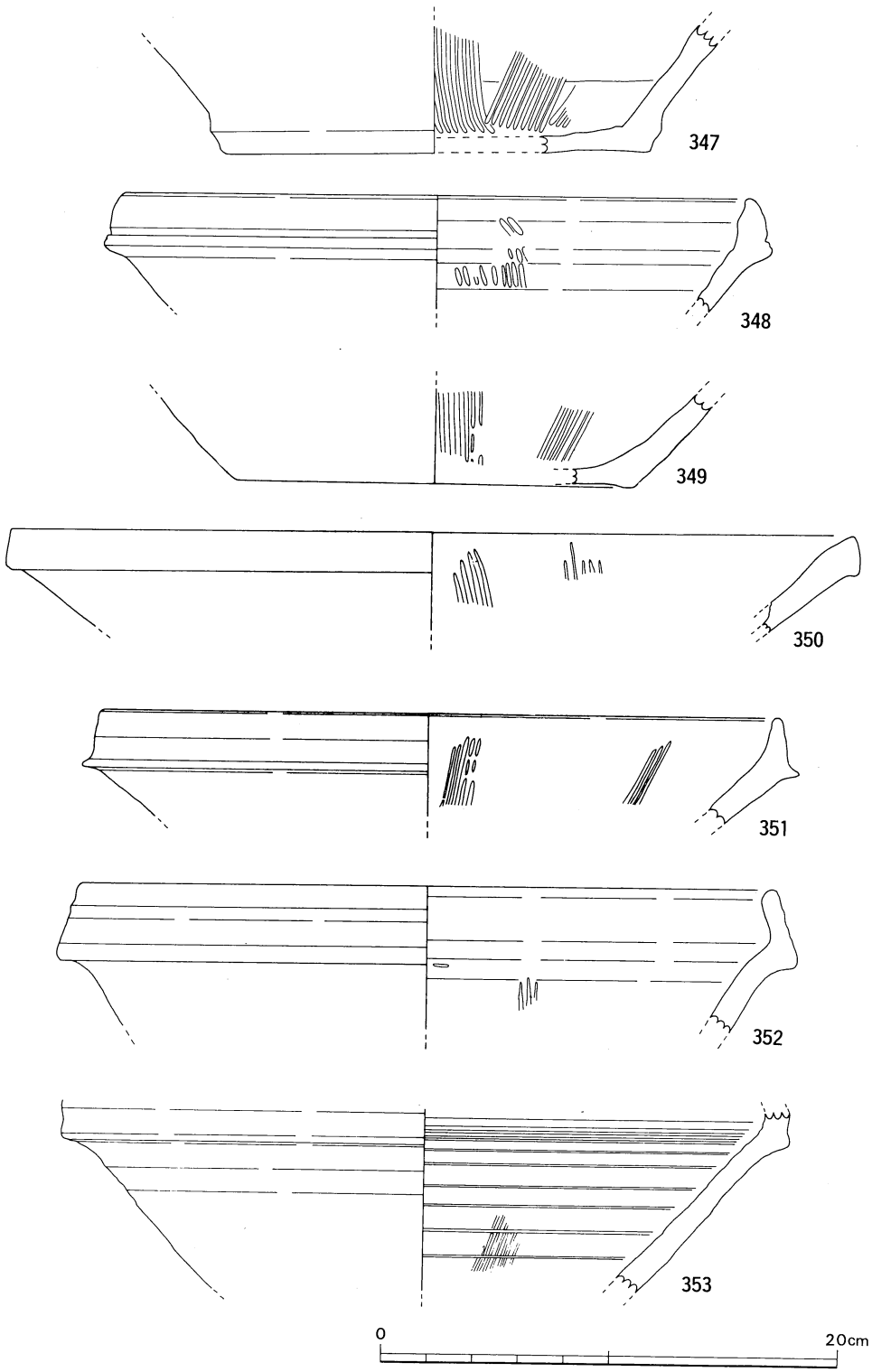
第129図　ＳＤ２ 出土遺物



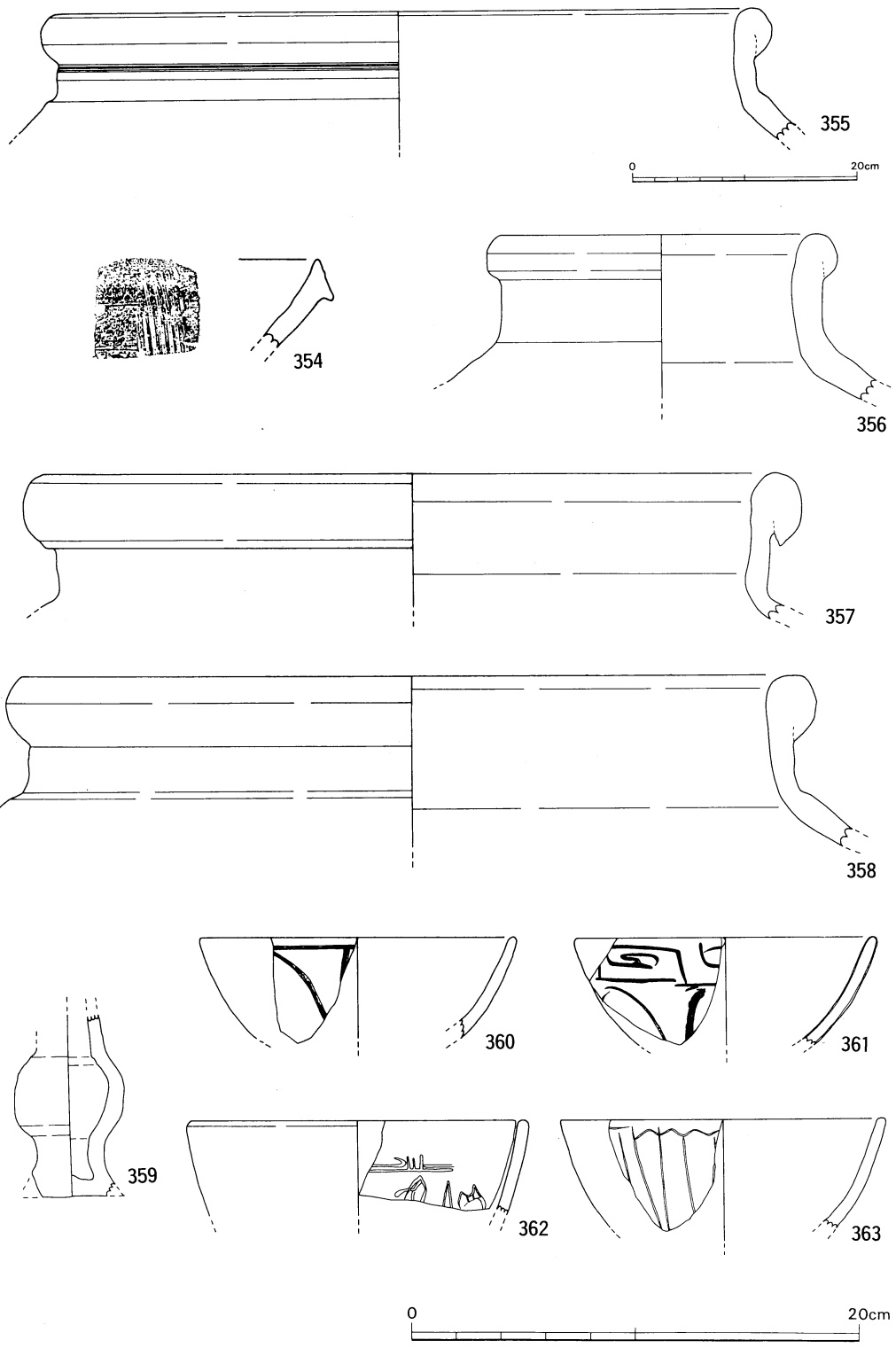
第130図　ＳＤ２出土遺物



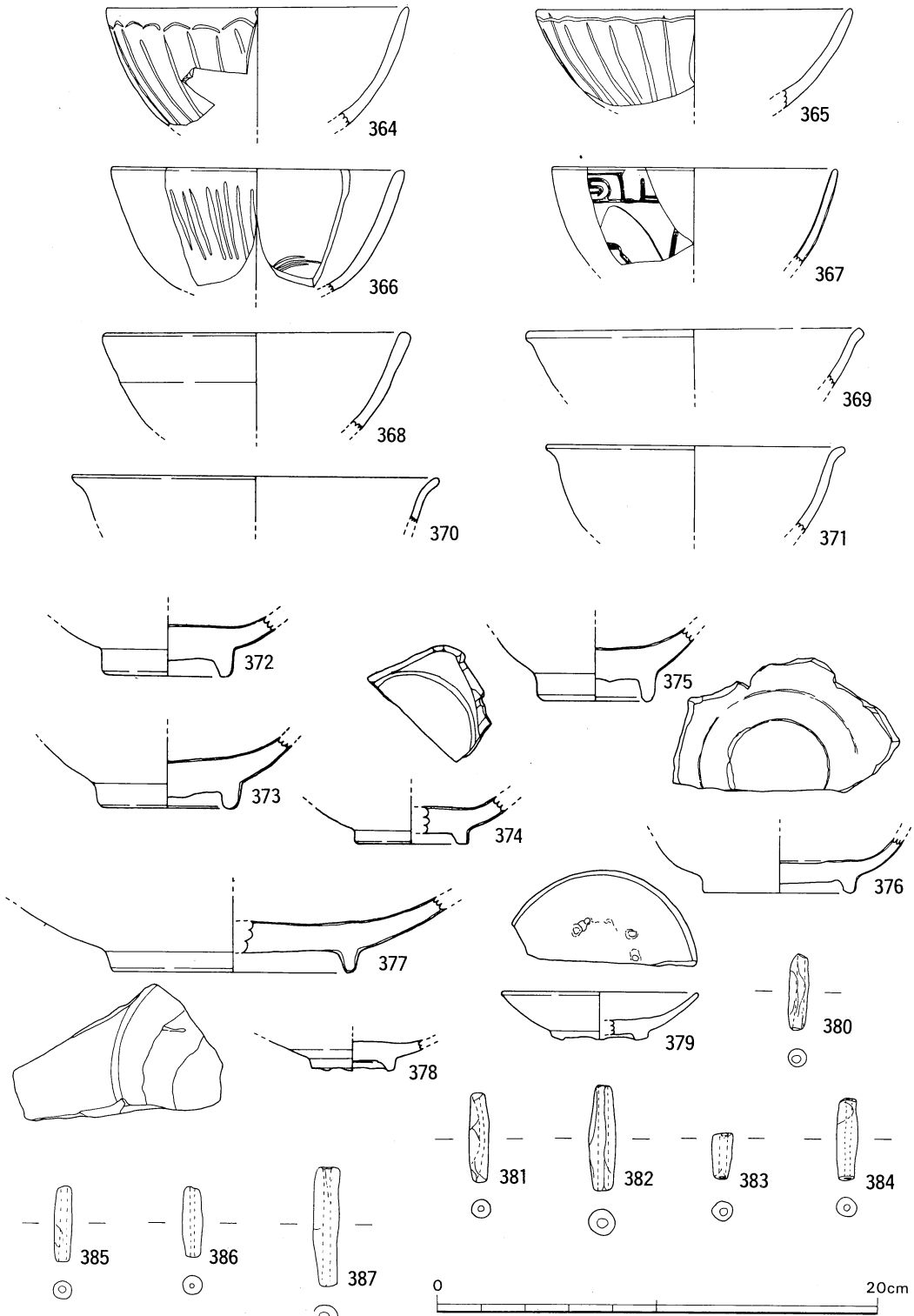
第131図　ＳＤ２ 出土遺物



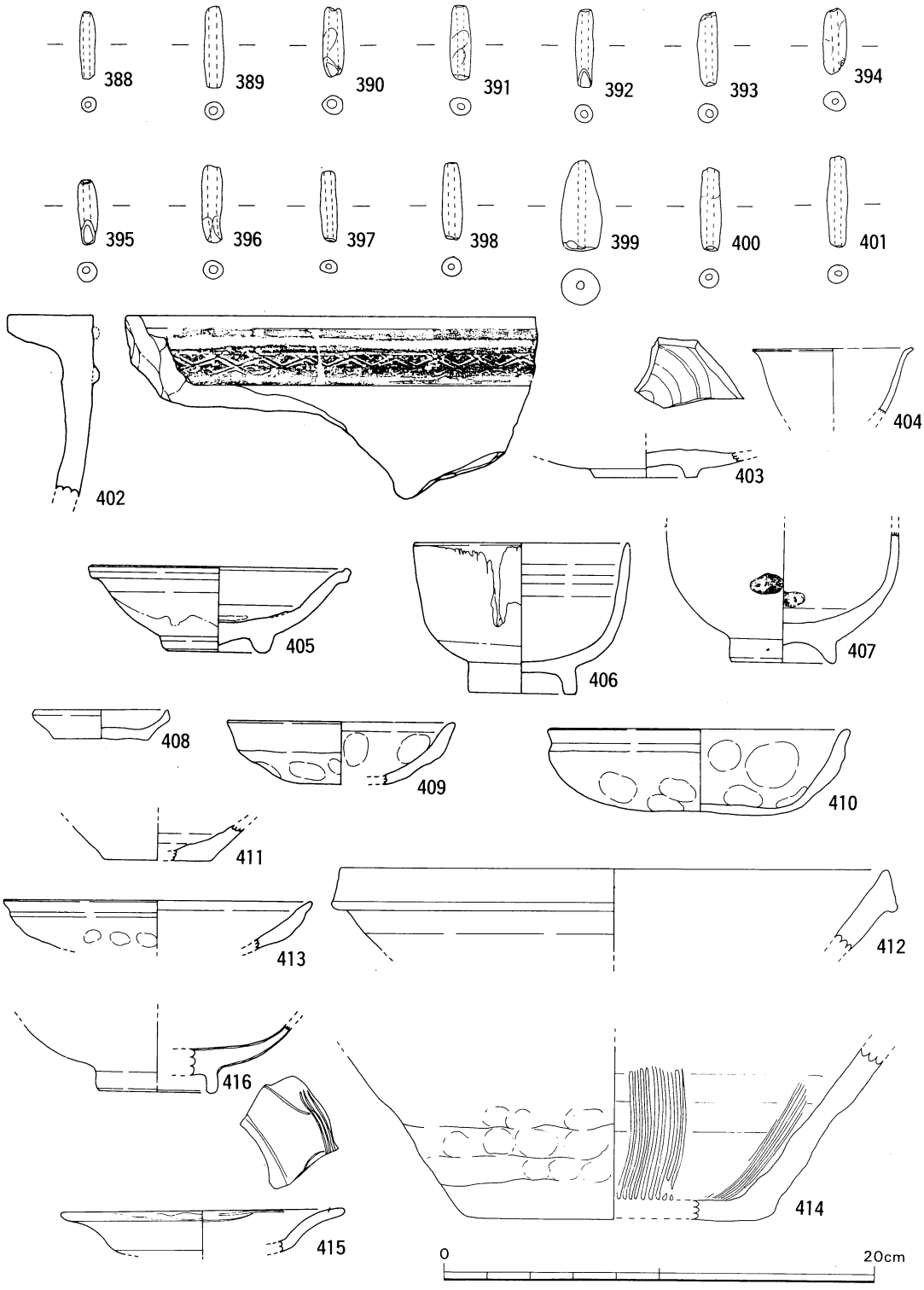
第132図　ＳＤ２ 出土遺物



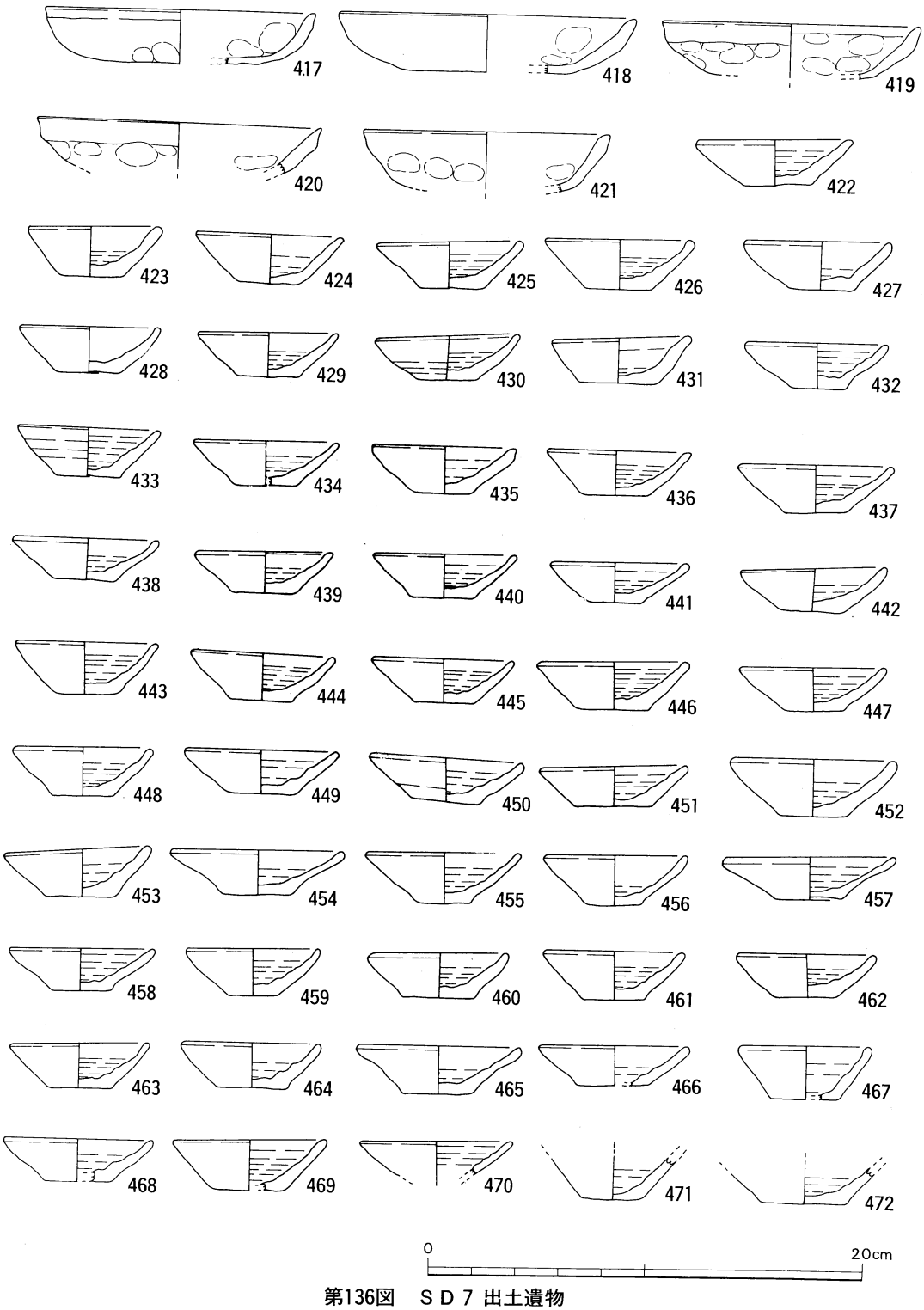
第133図　ＳＤ２出土遺物



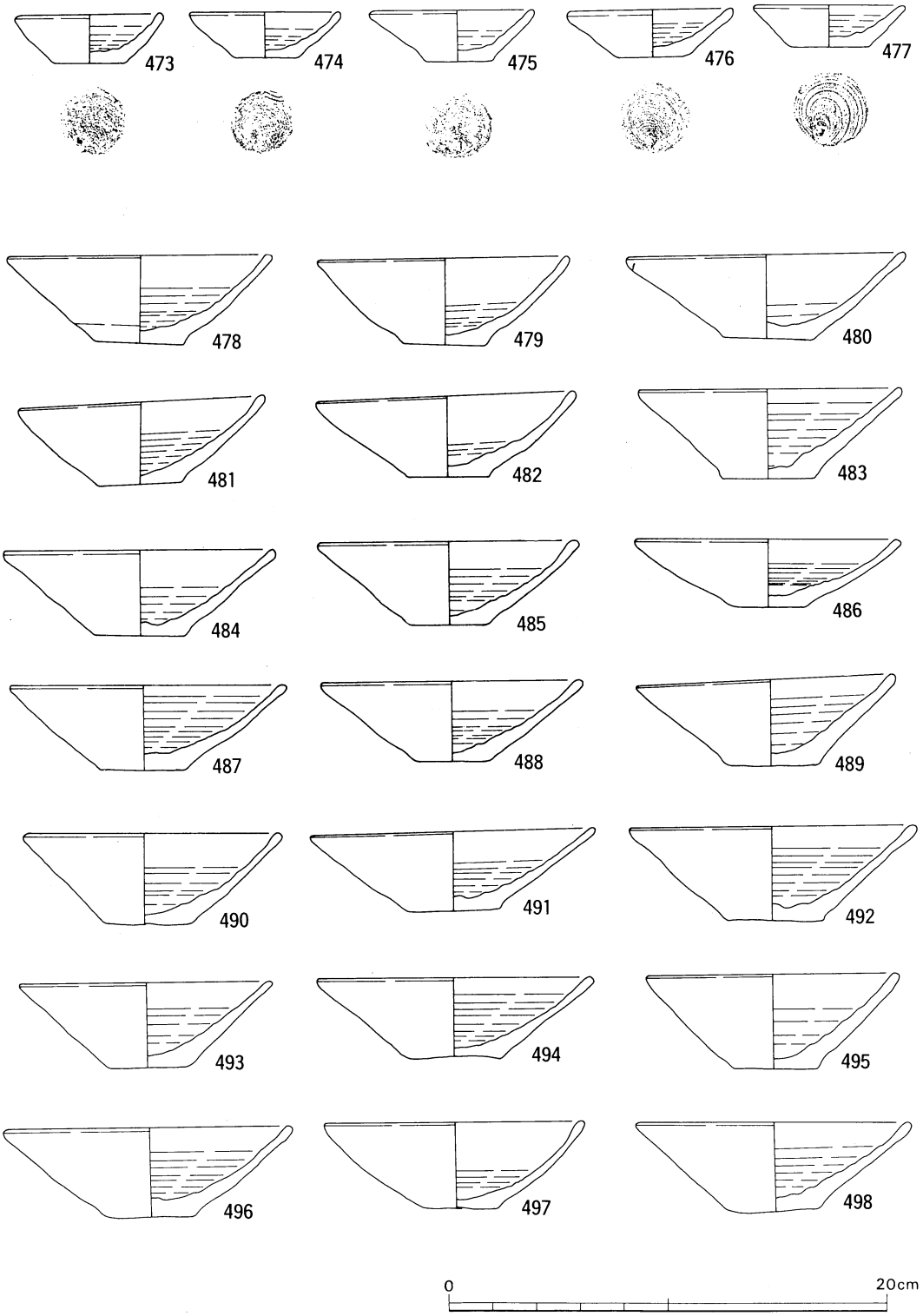
第134図　ＳＤ２出土遺物



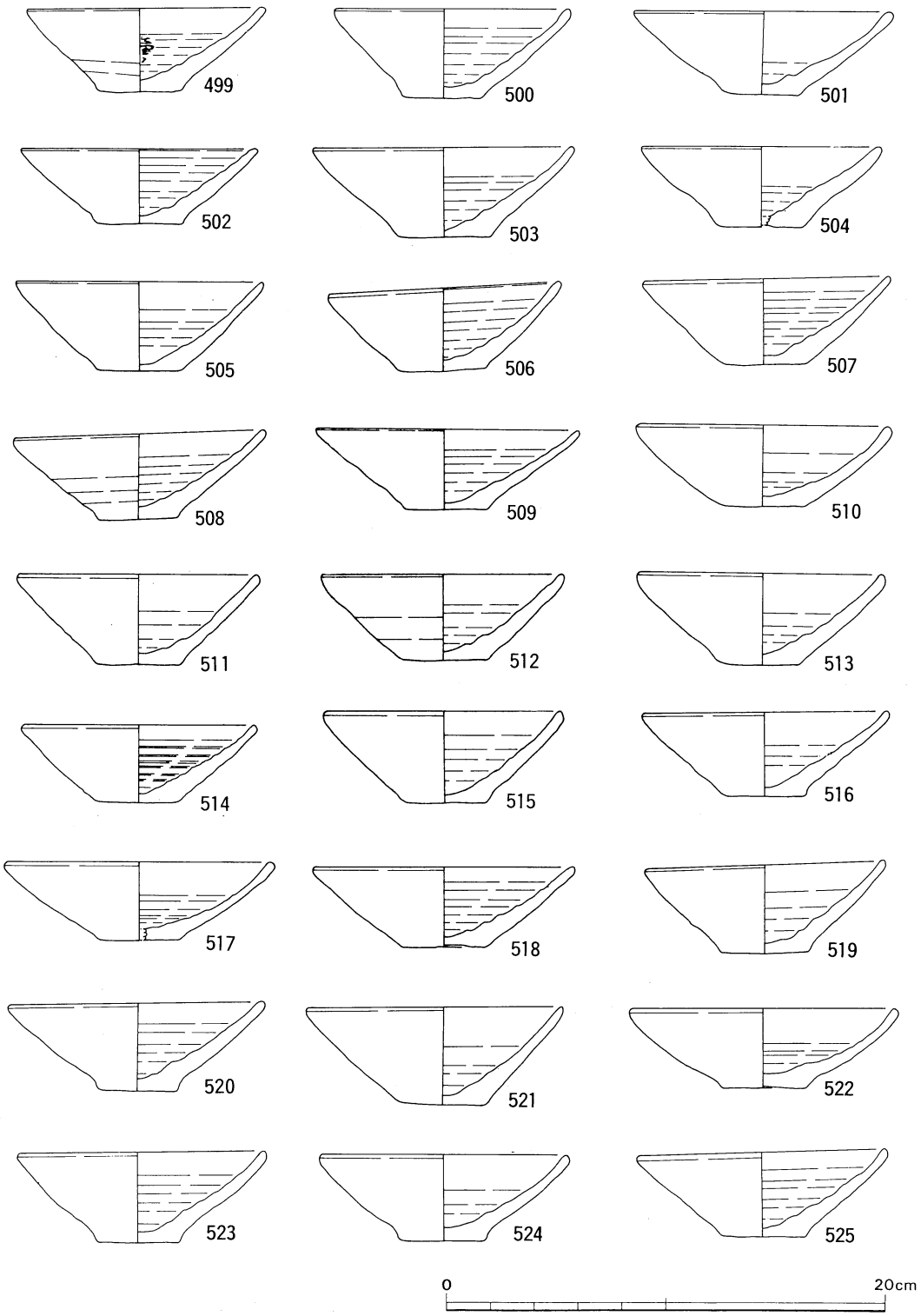
第135図　ＳＤ２～４出土遺物



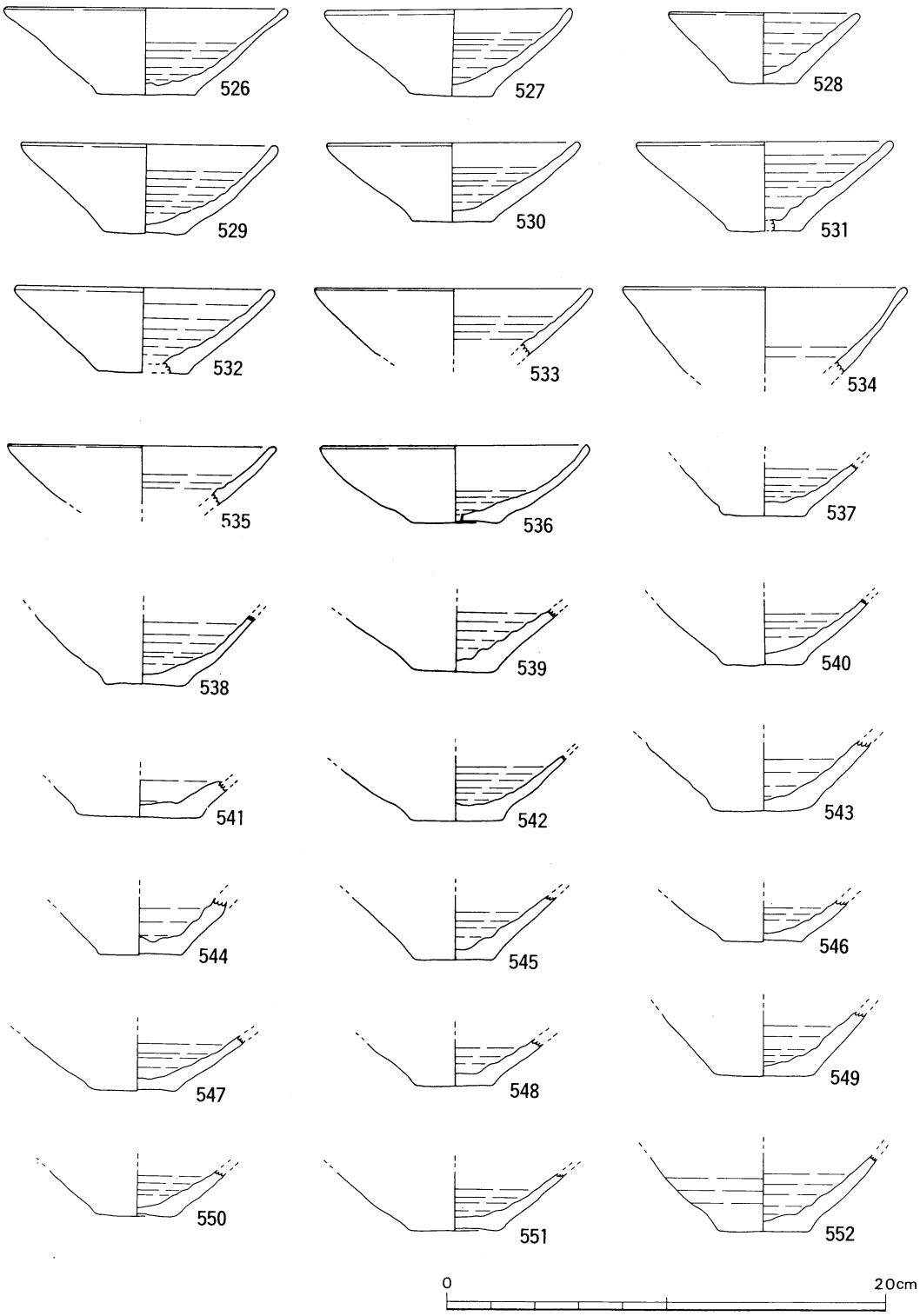
第136図　ＳＤ７ 出土遺物



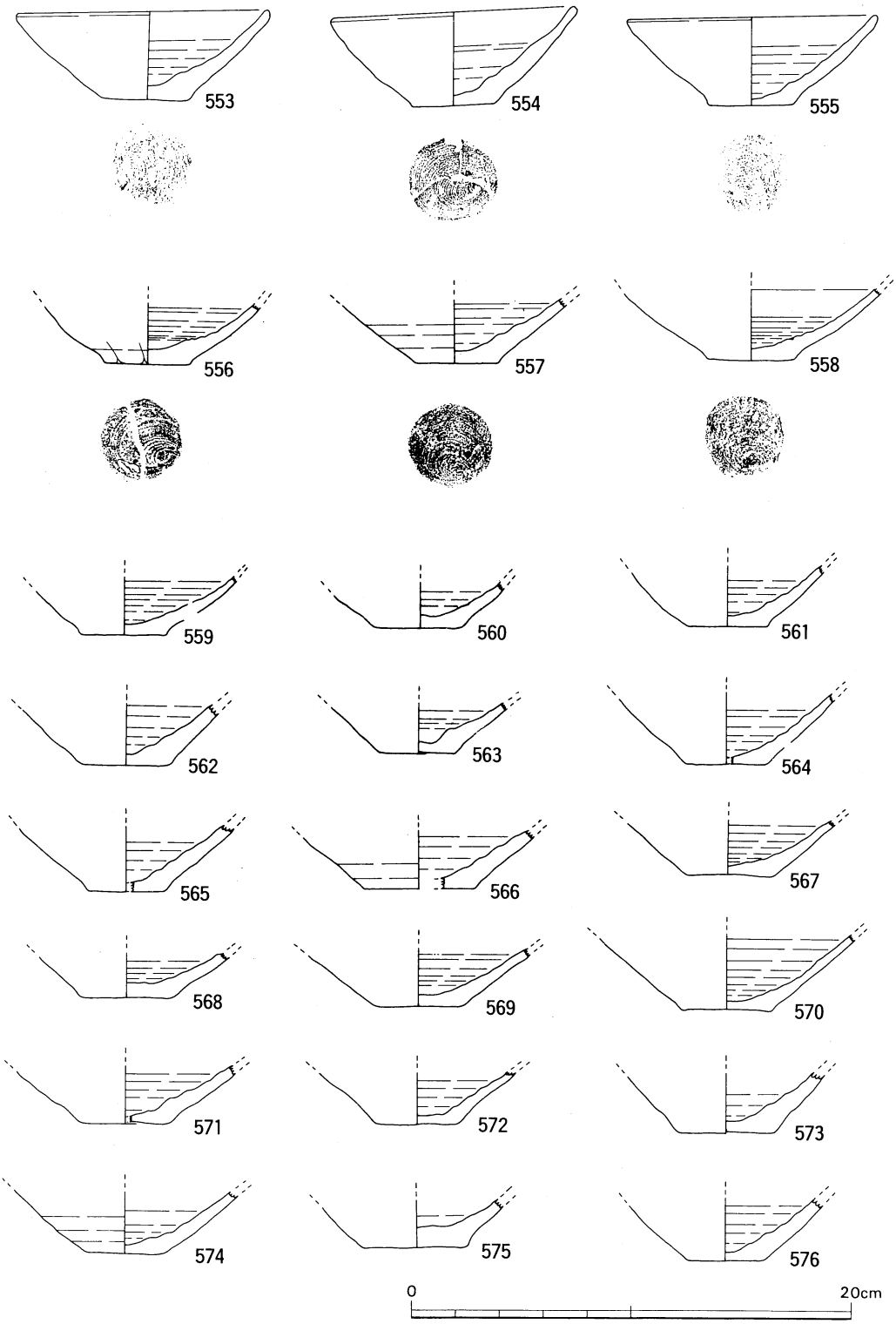
第137図　ＳＤ７ 出土遺物



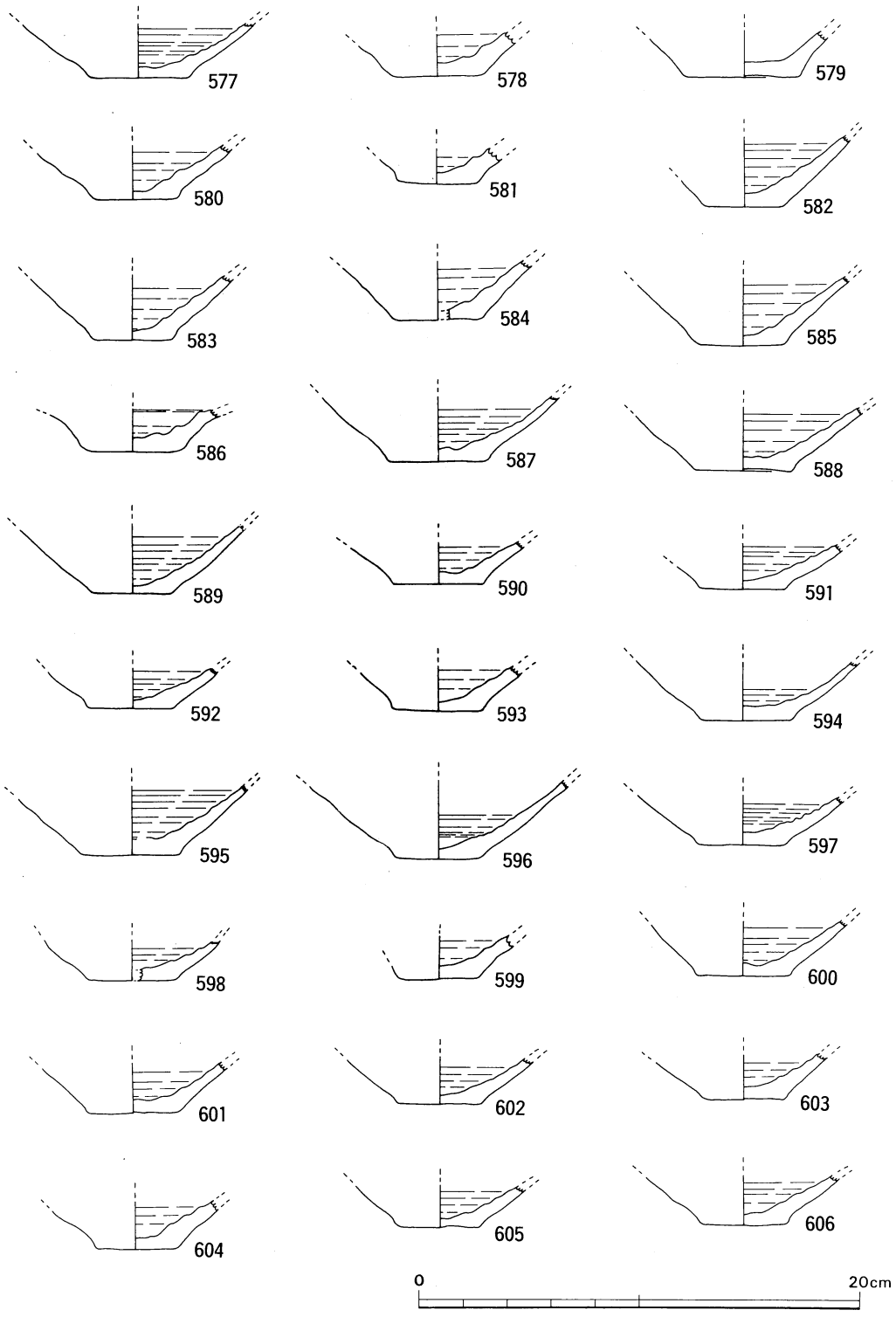
第138図　ＳＤ７ 出土遺物



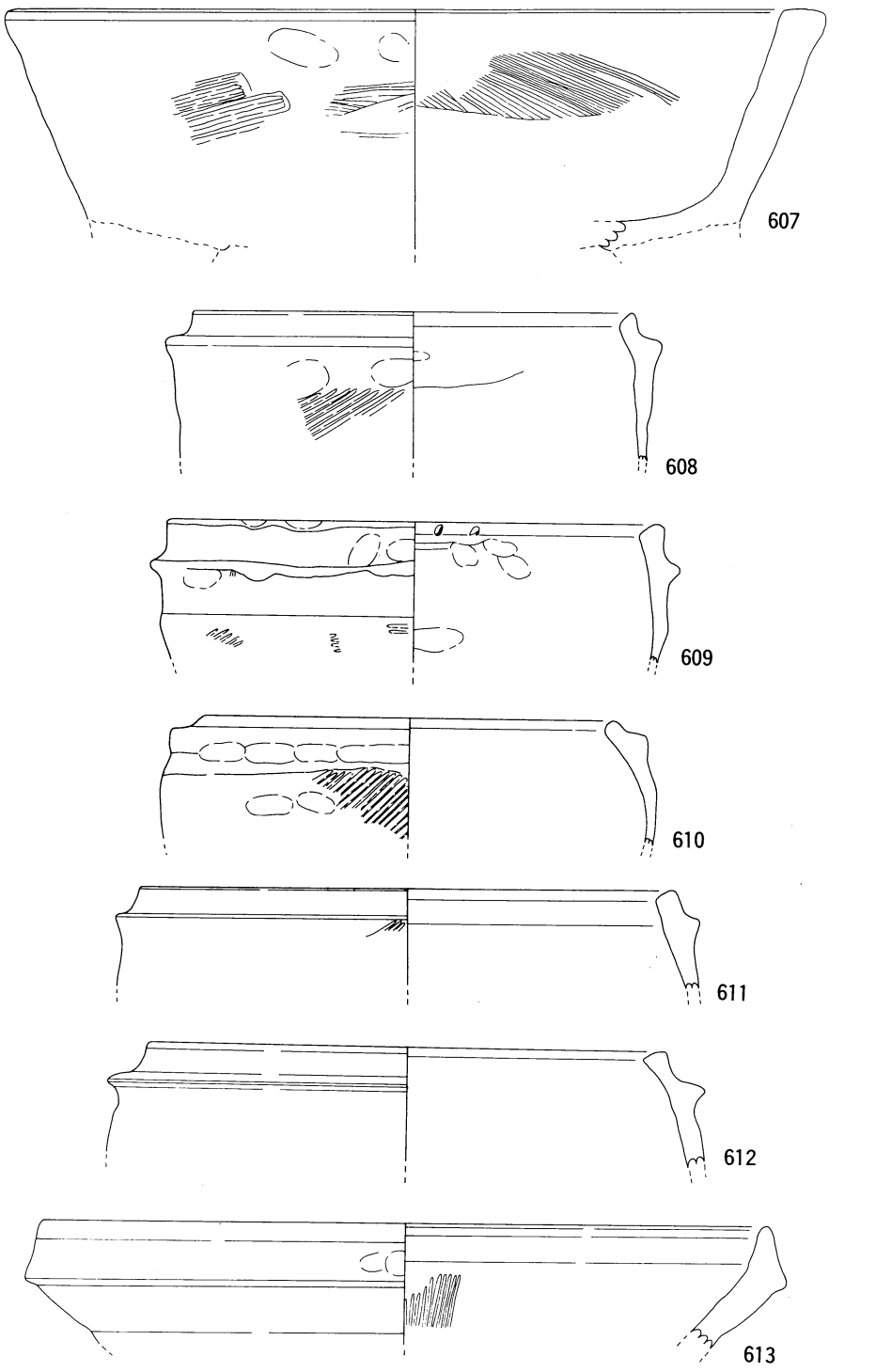
第139図　ＳＤ７ 出土遺物



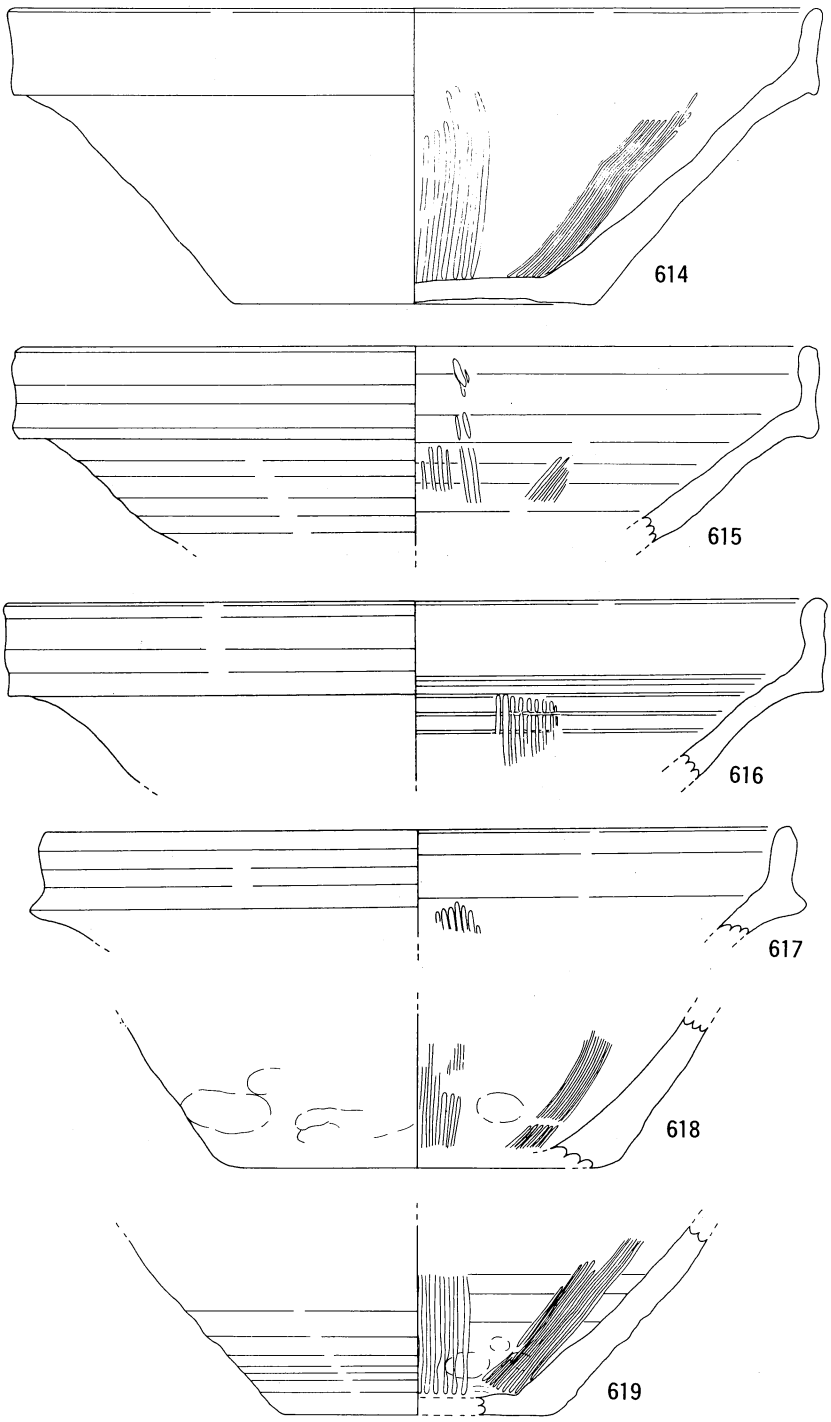
第140図　ＳＤ７ 出土遺物



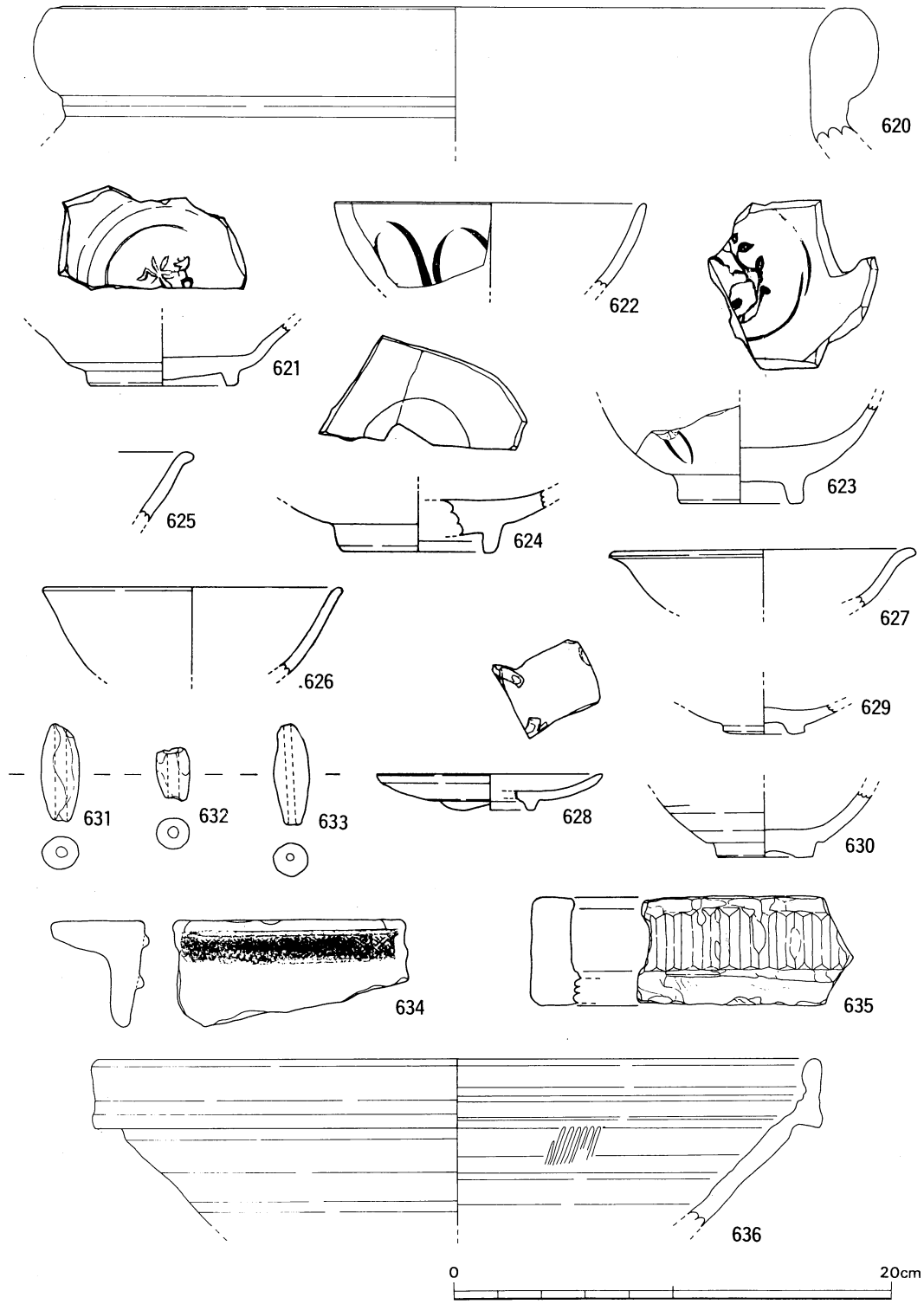
第141図　ＳＤ７出土遺物



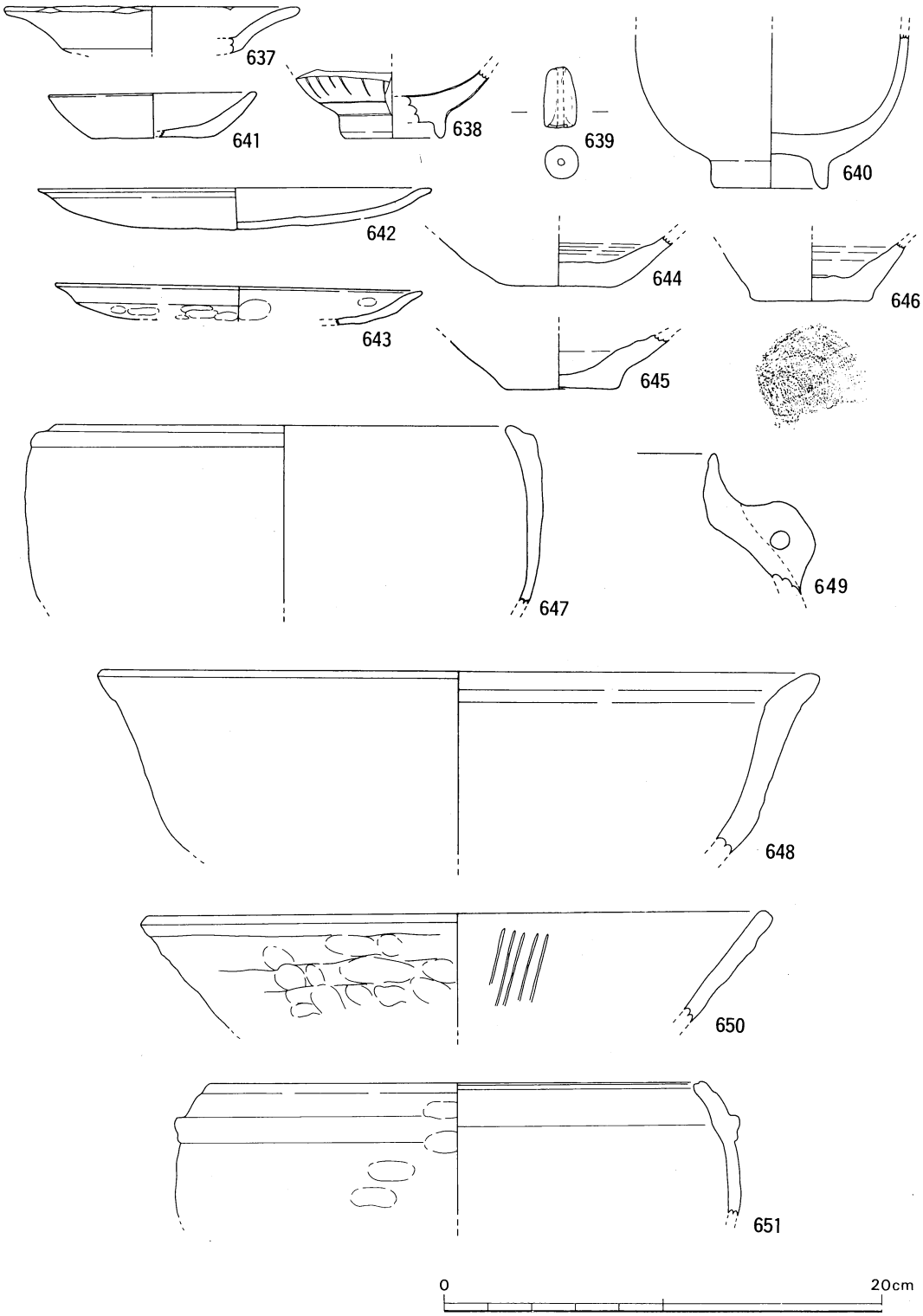
第142図　ＳＤ７出土遺物



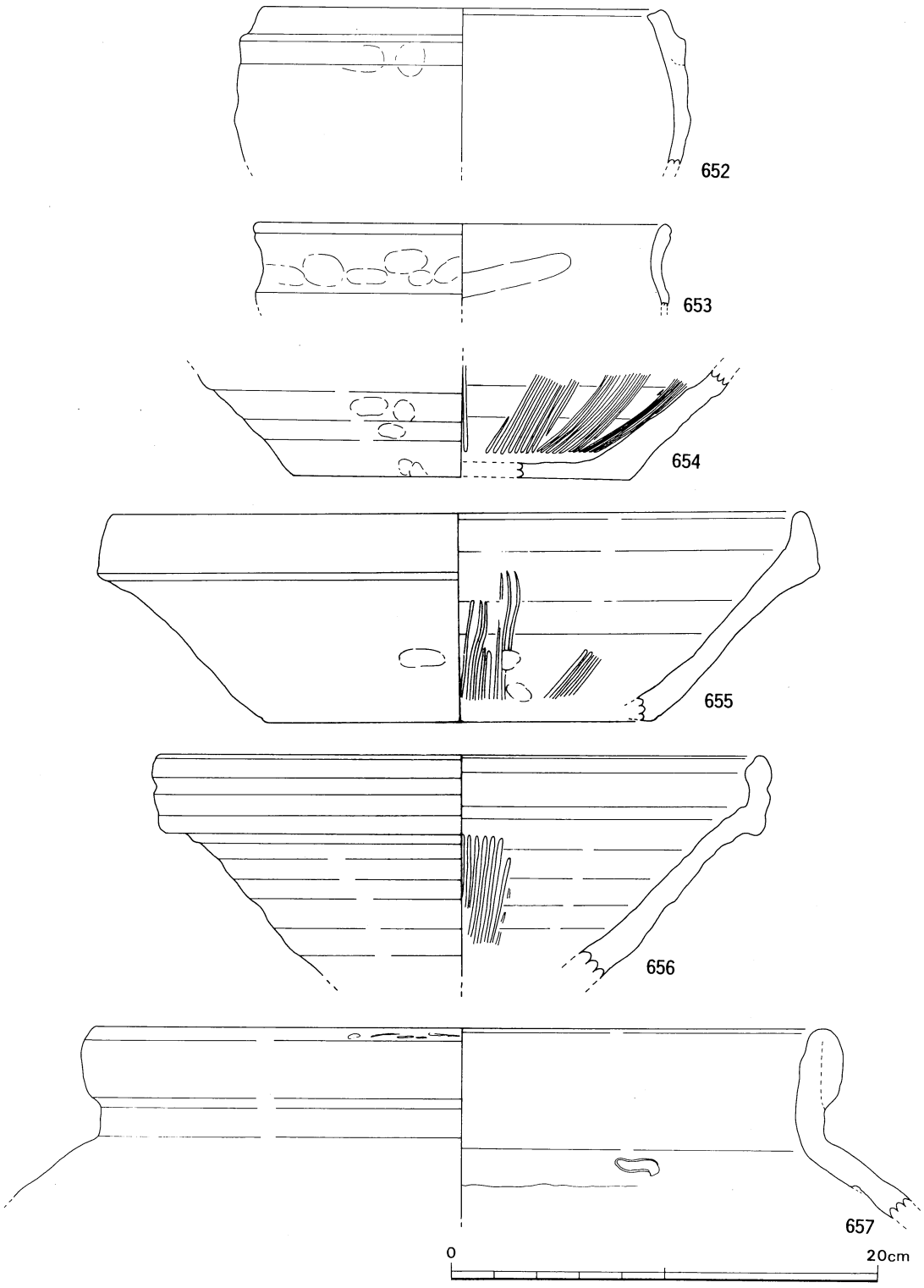
第143図　ＳＤ７出土遺物



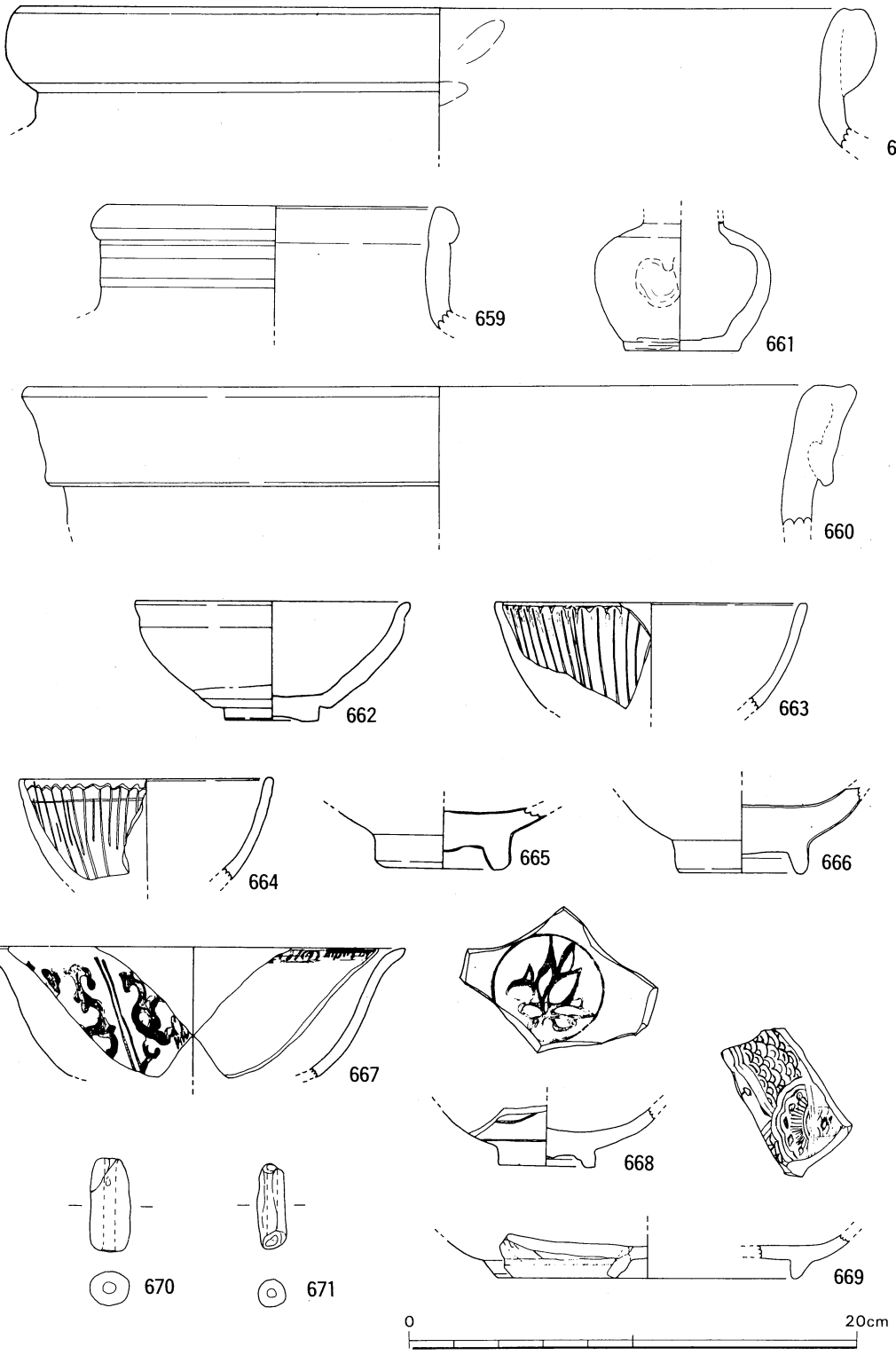
第144図　ＳＤ７・９ 出土遺物



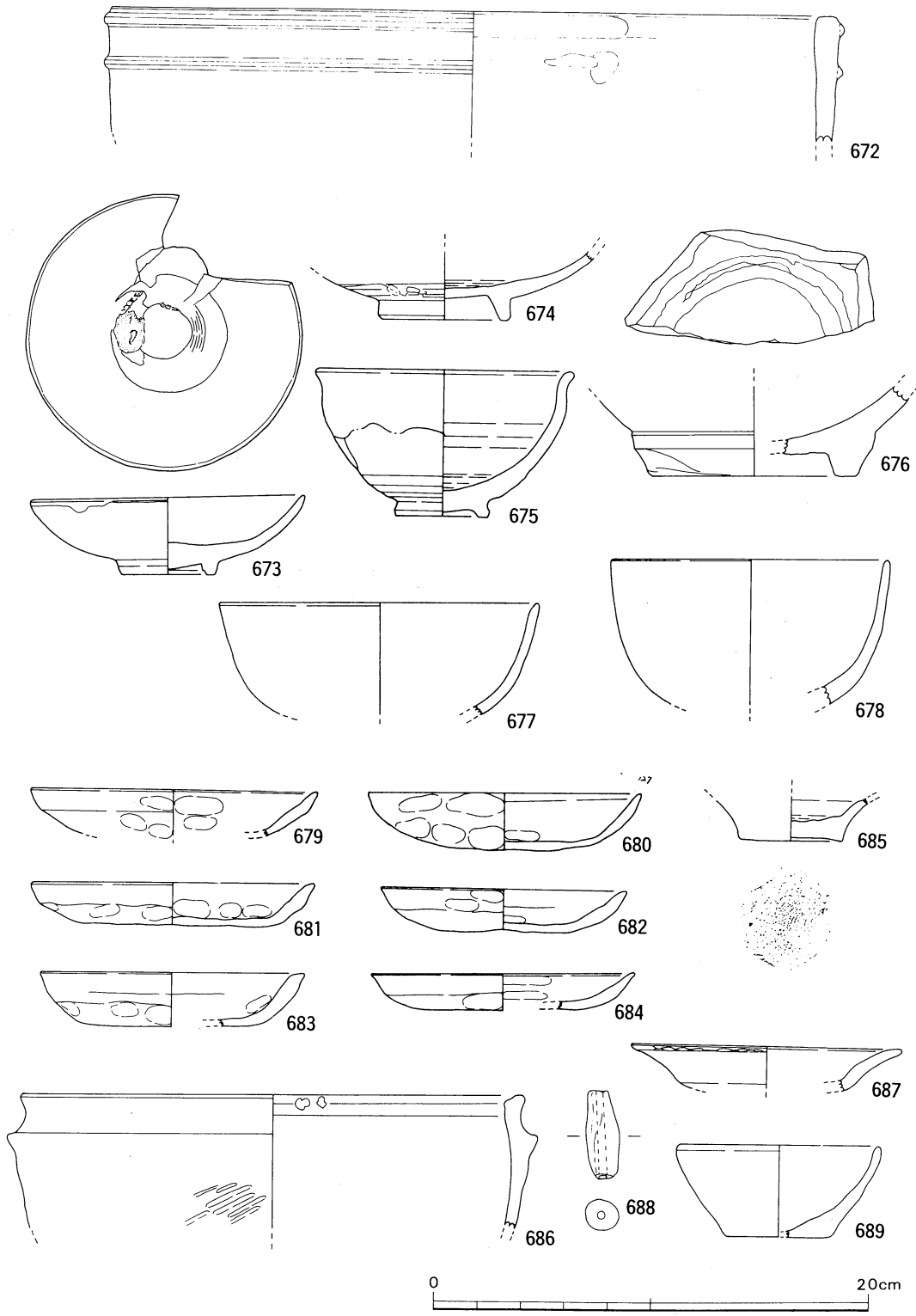
第145図　ＳＤ９・13 出土遺物



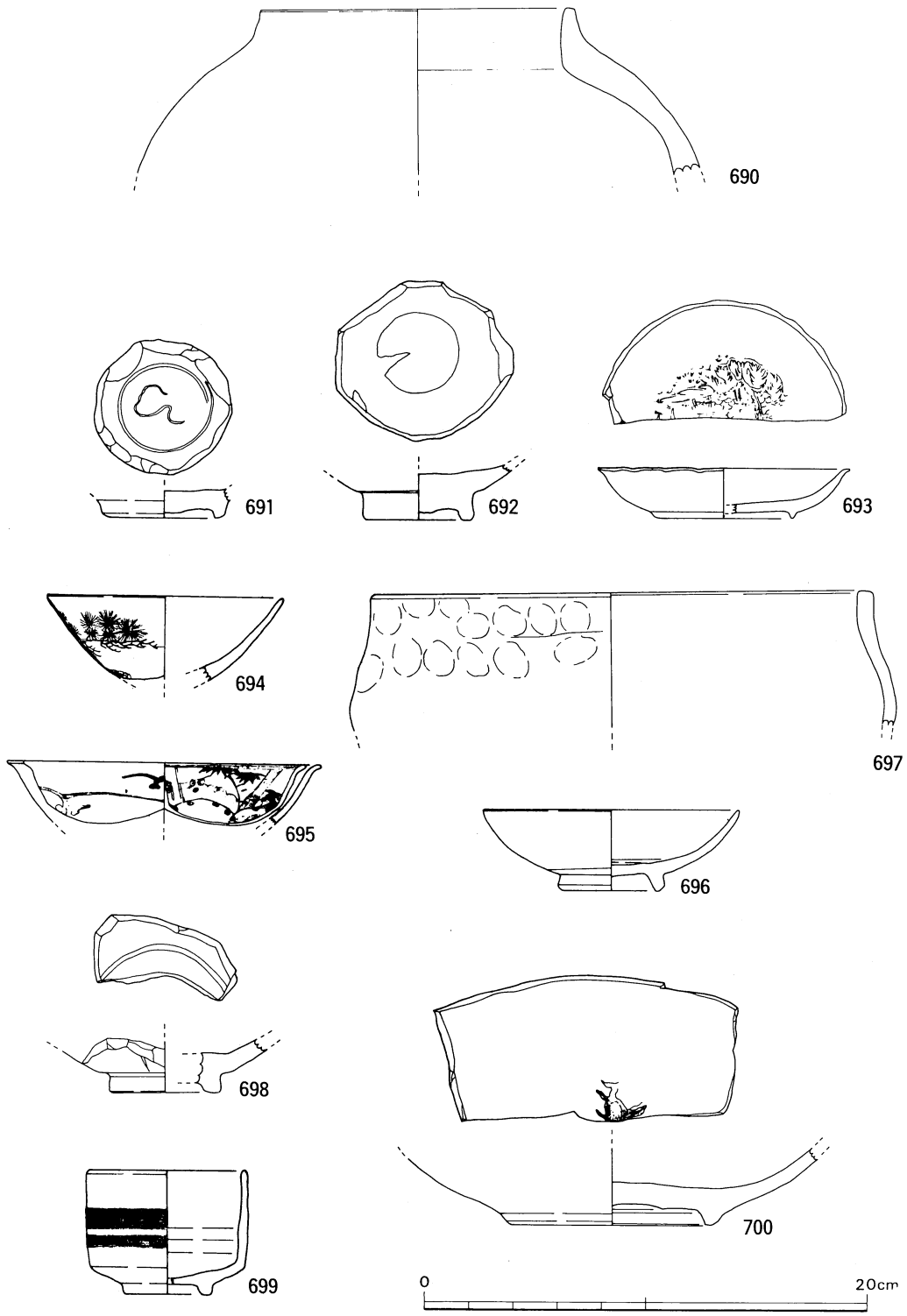
第146図　ＳＤ13 出土遺物



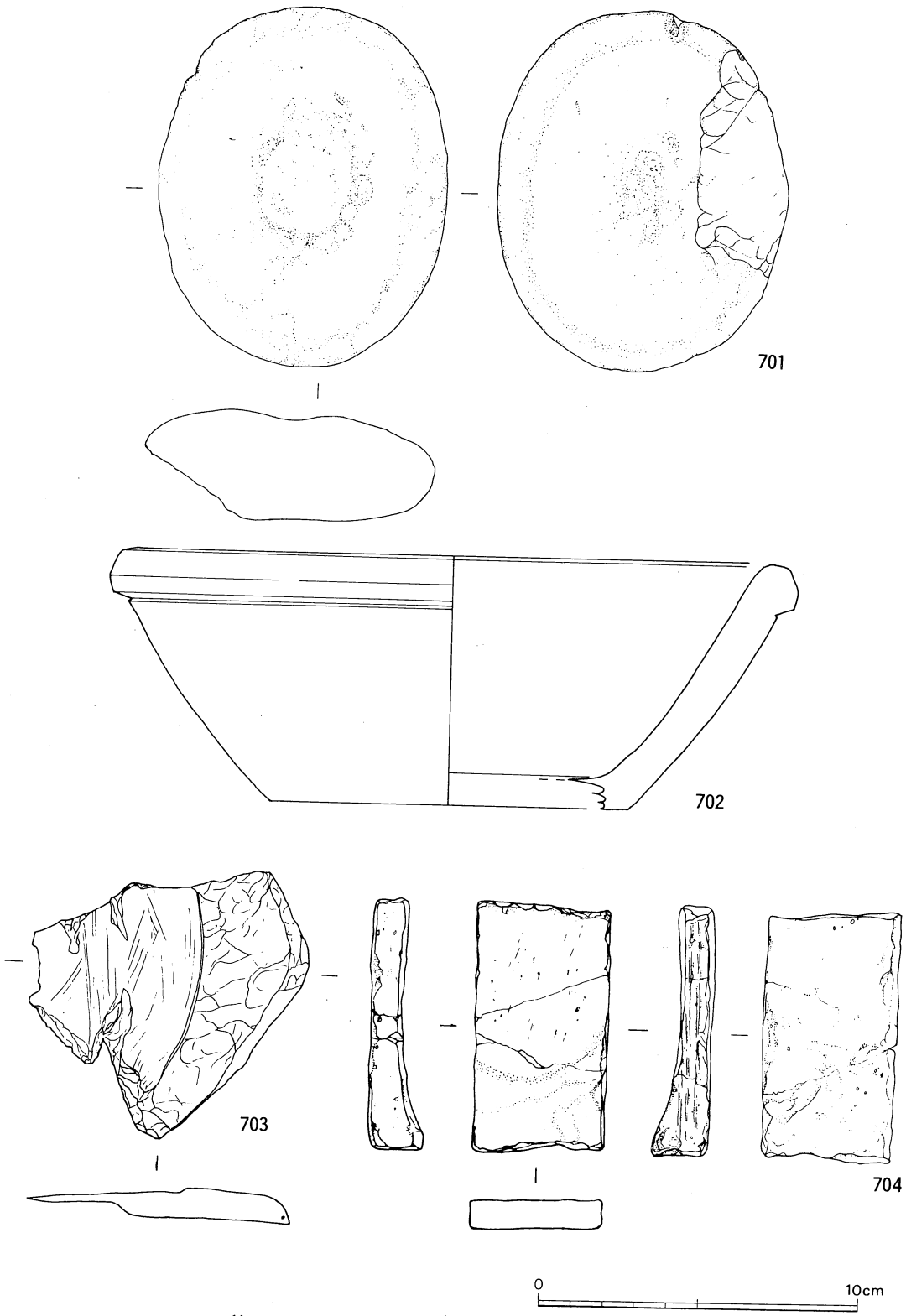
第147図　ＳＤ13 出土遺物



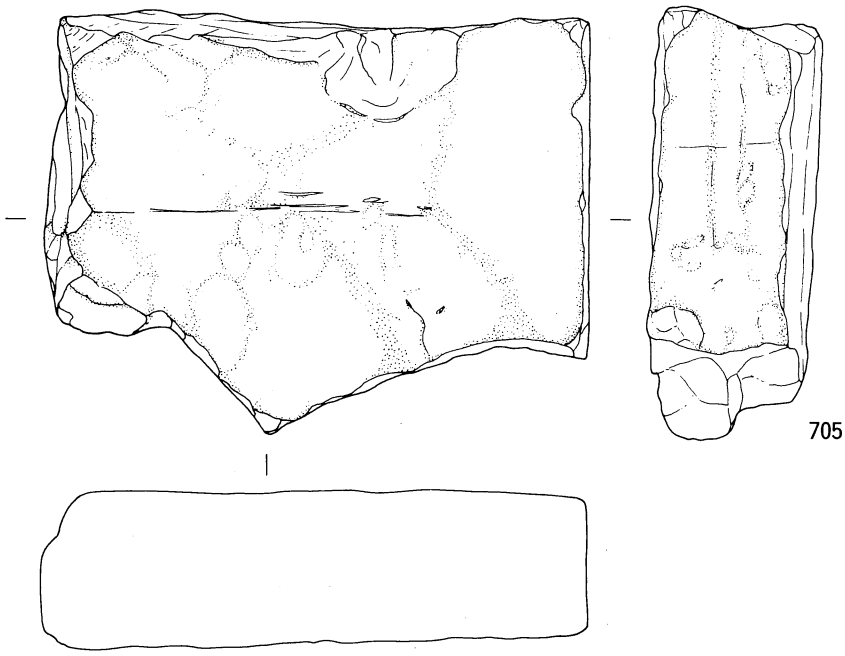
第148図　ＳＤ13～15 出土遺物

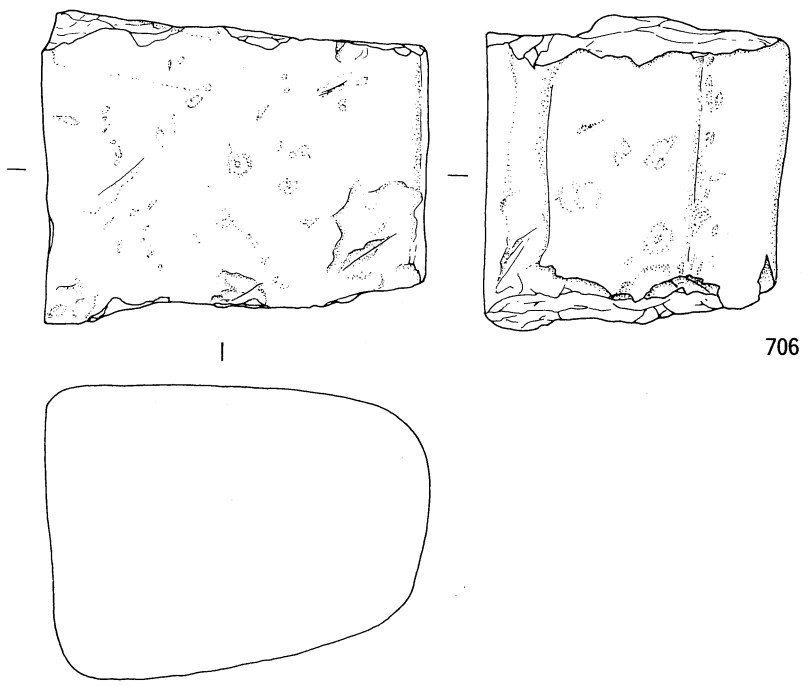


第149図　ＳＤ15・16、ＳＥ１、Ｐ１ 出土遺物

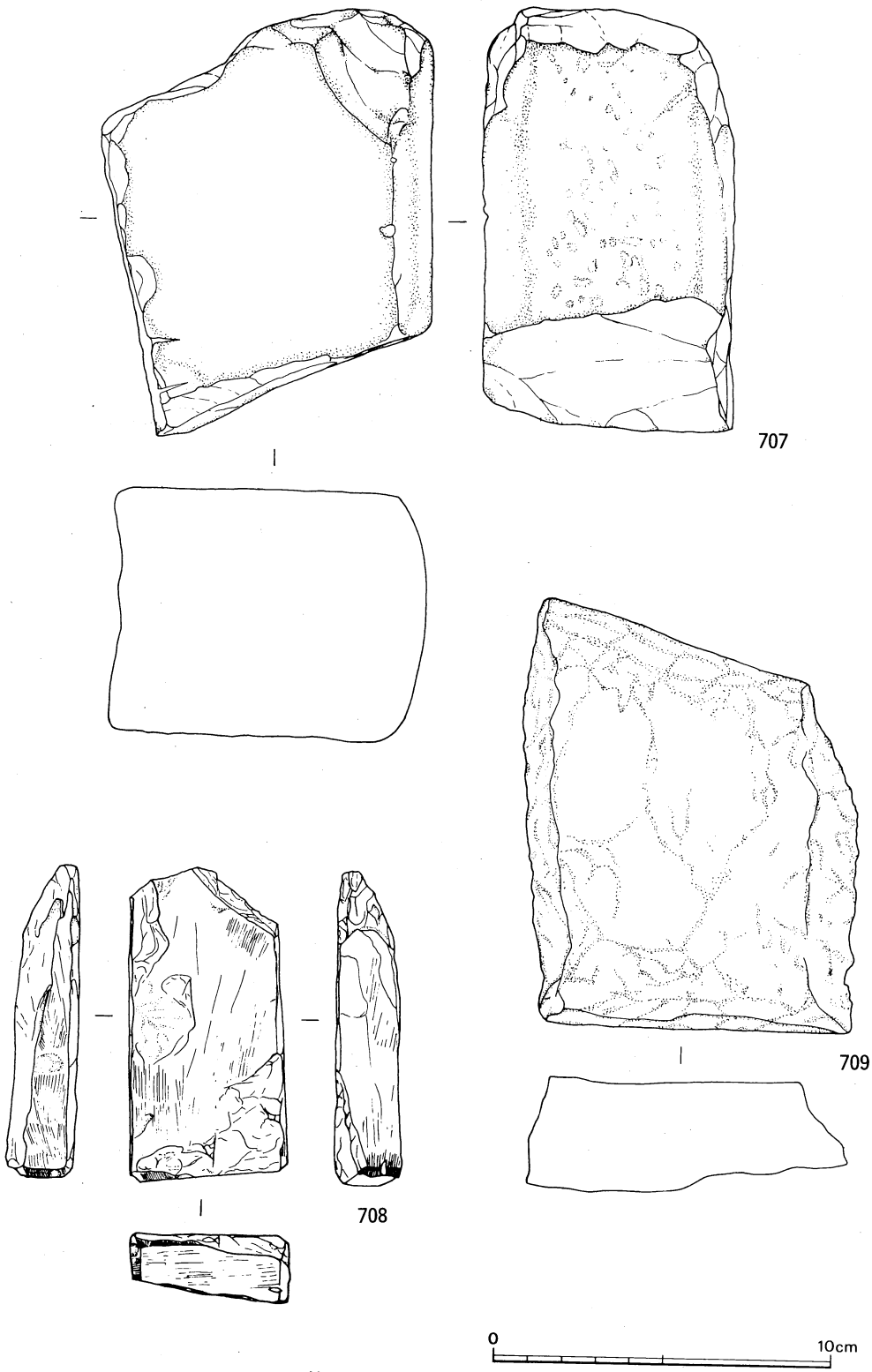


第150図　ＳＫ58・81、ＳＤ２・７ 出土遺物

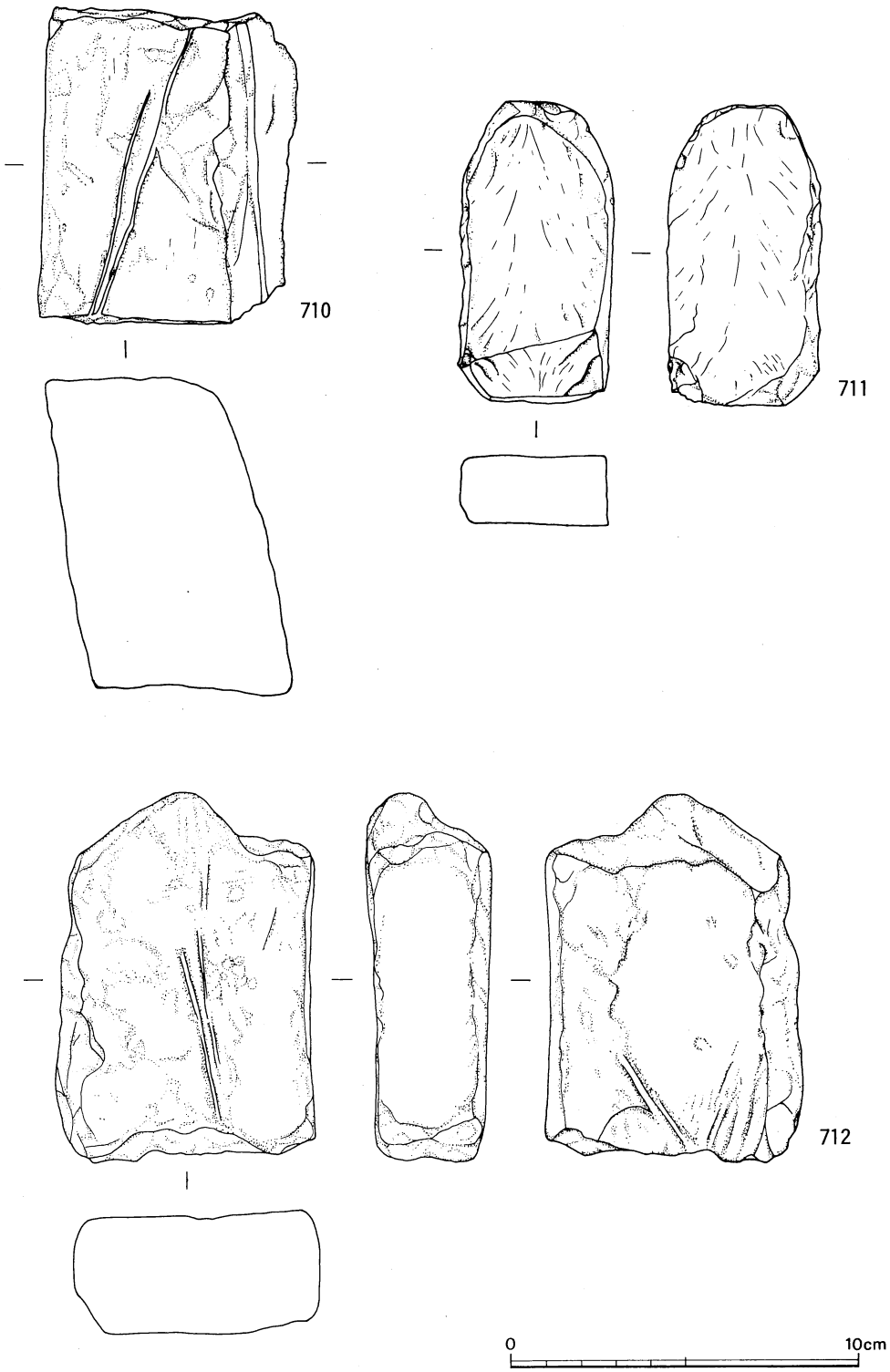




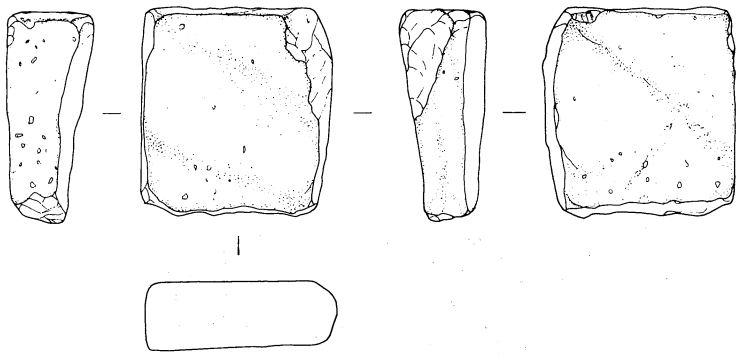
第151図　ＳＫ52、ＳＤ７ 出土遺物

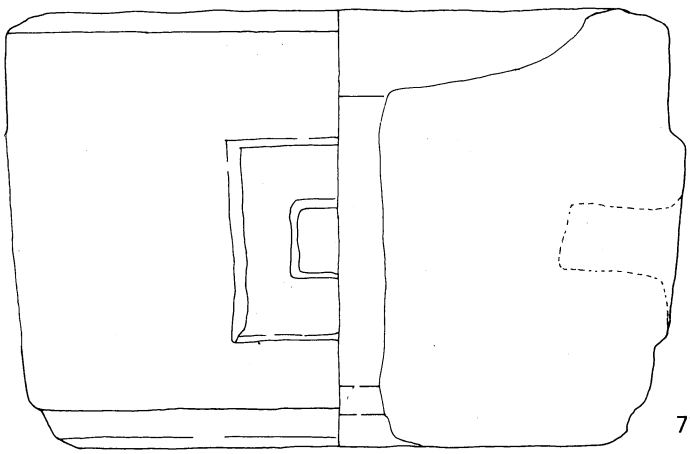


第152図　ＳＤ７・９出土遺物



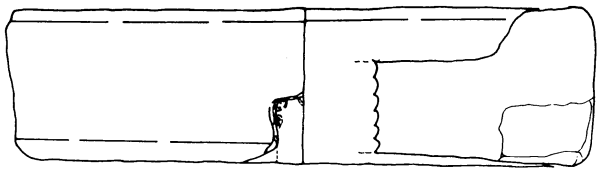
第153図　ＳＤ７・９・13 出土遺物





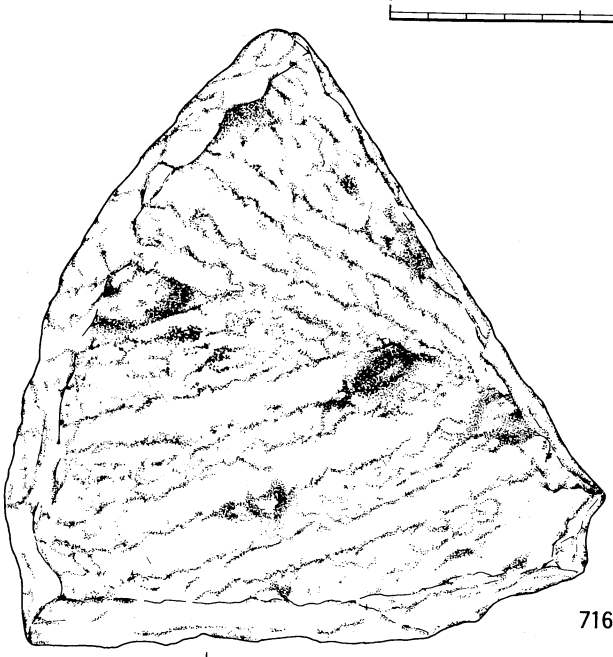
0 10cm

第154図　ＳＫ81、ＳＤ７ 出土遺物

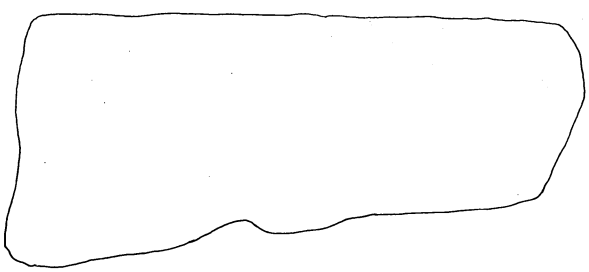


715

0 20cm

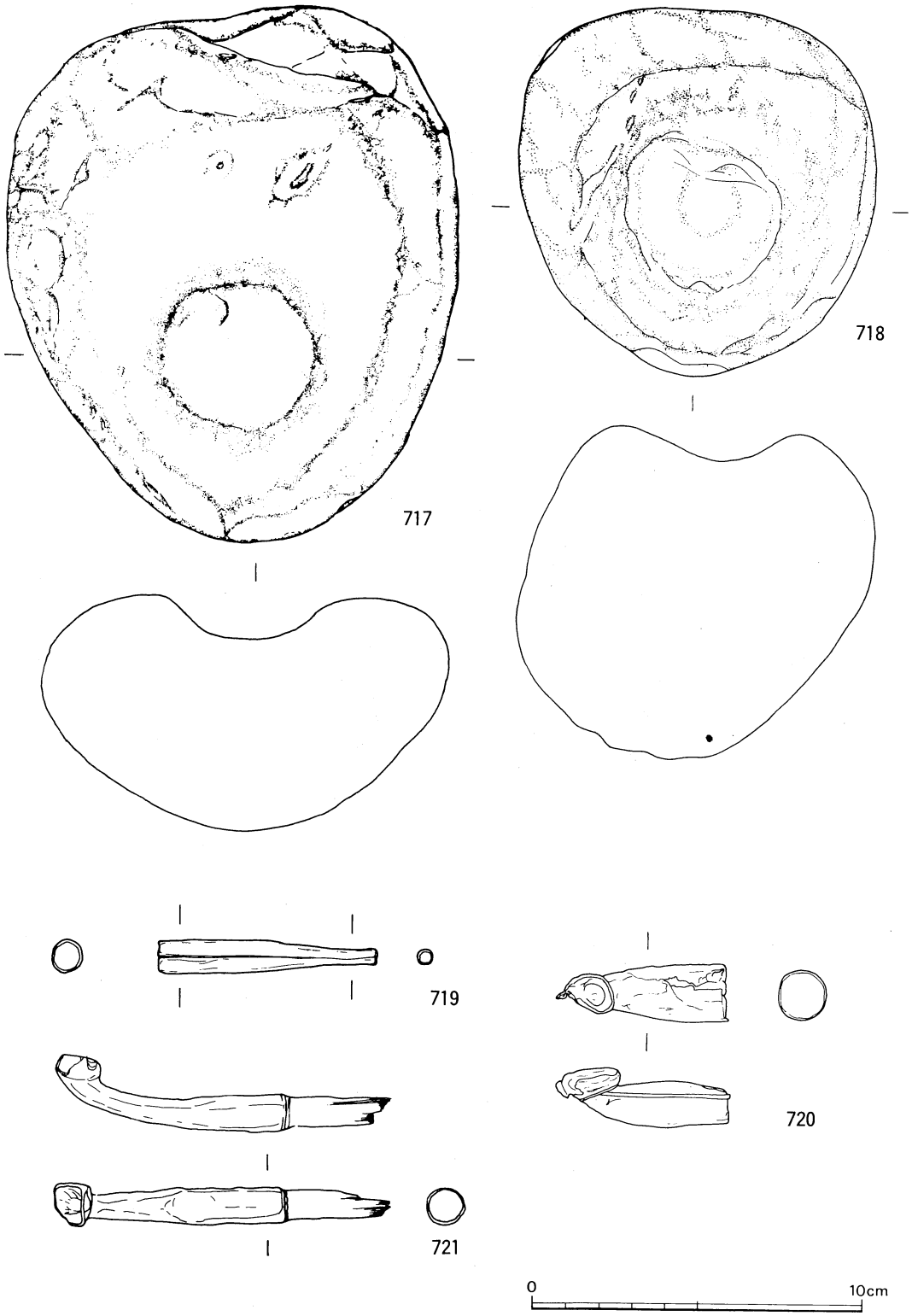


716

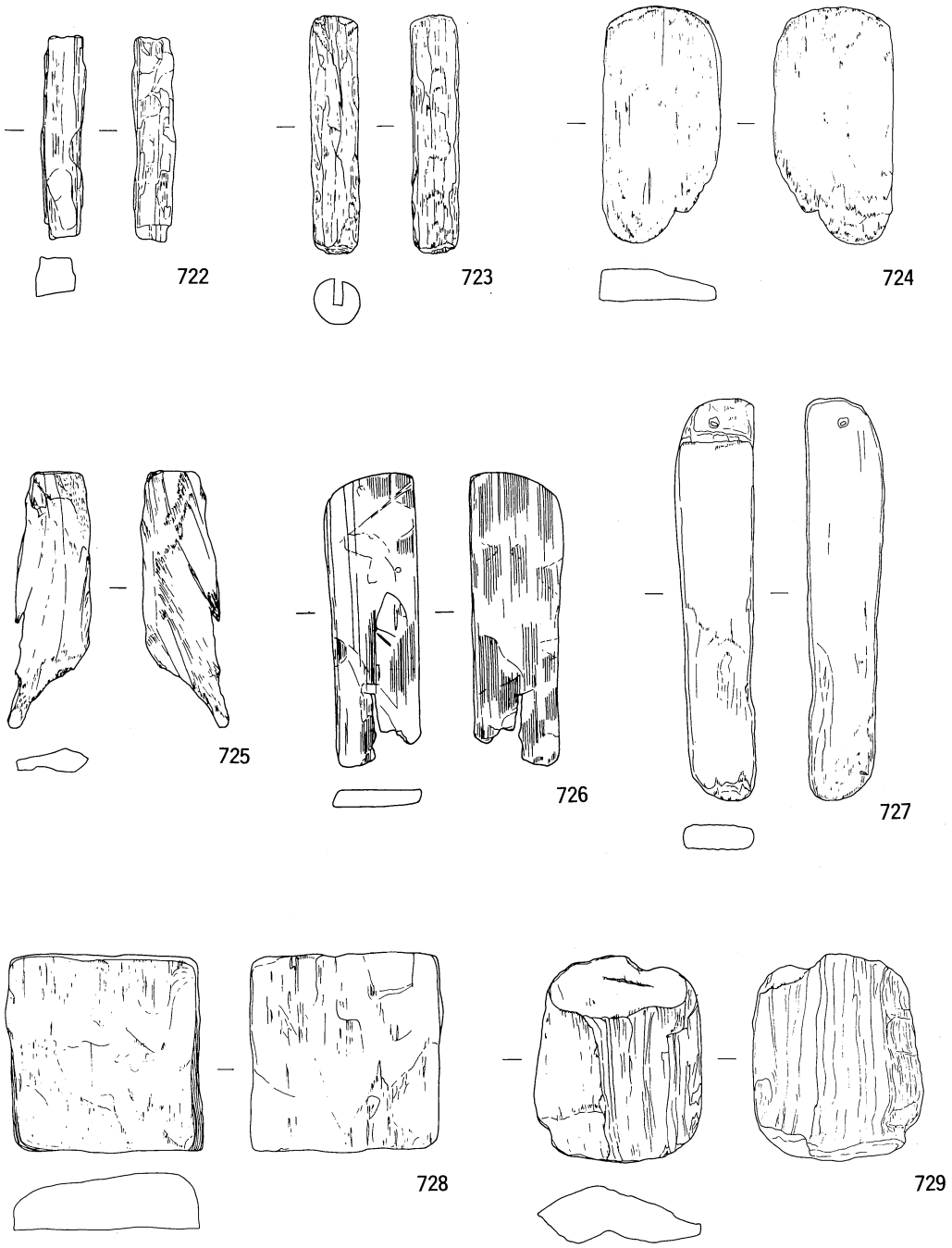


0 10cm

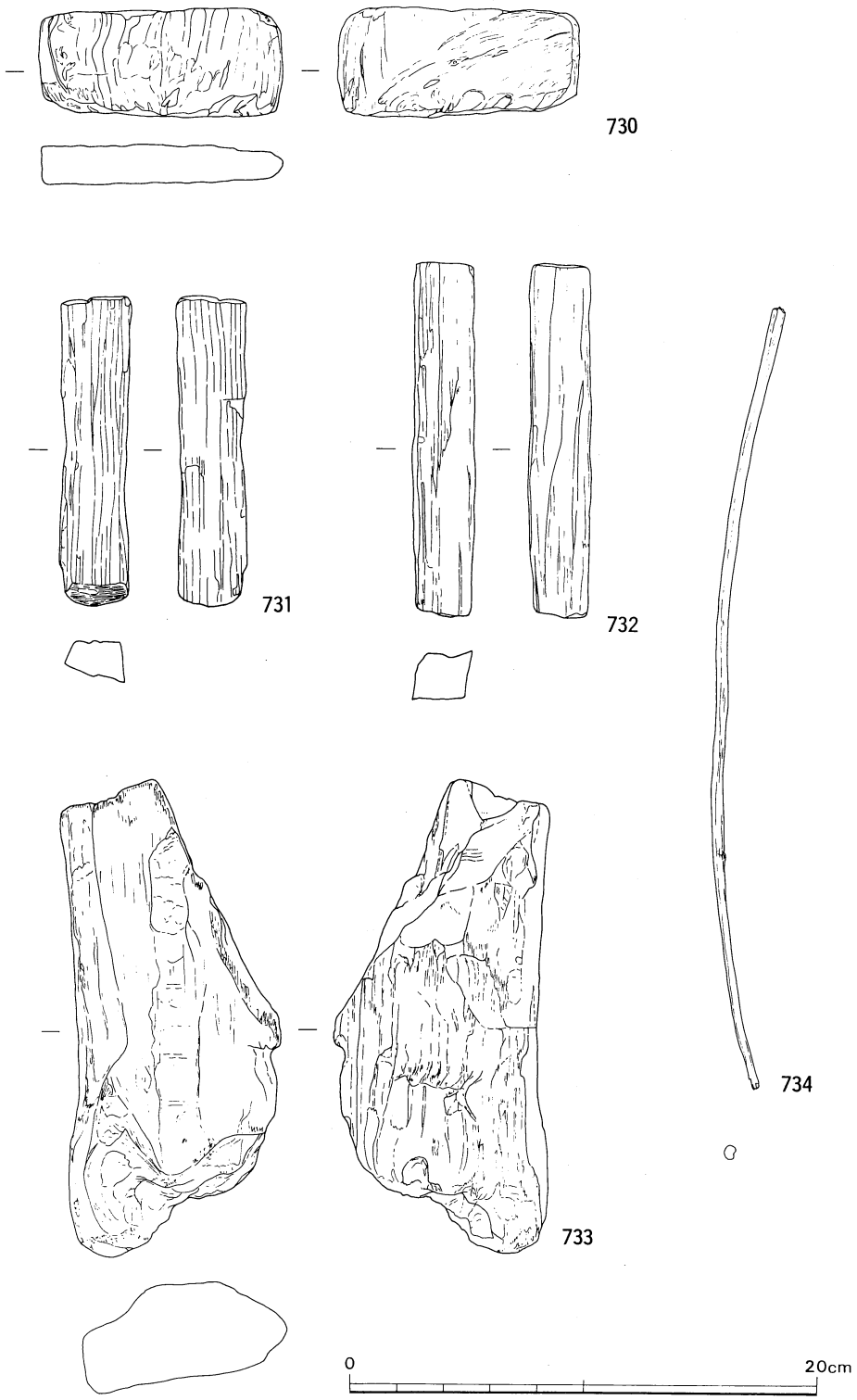
第155図　ＳＫ81、ＳＤ12 出土遺物



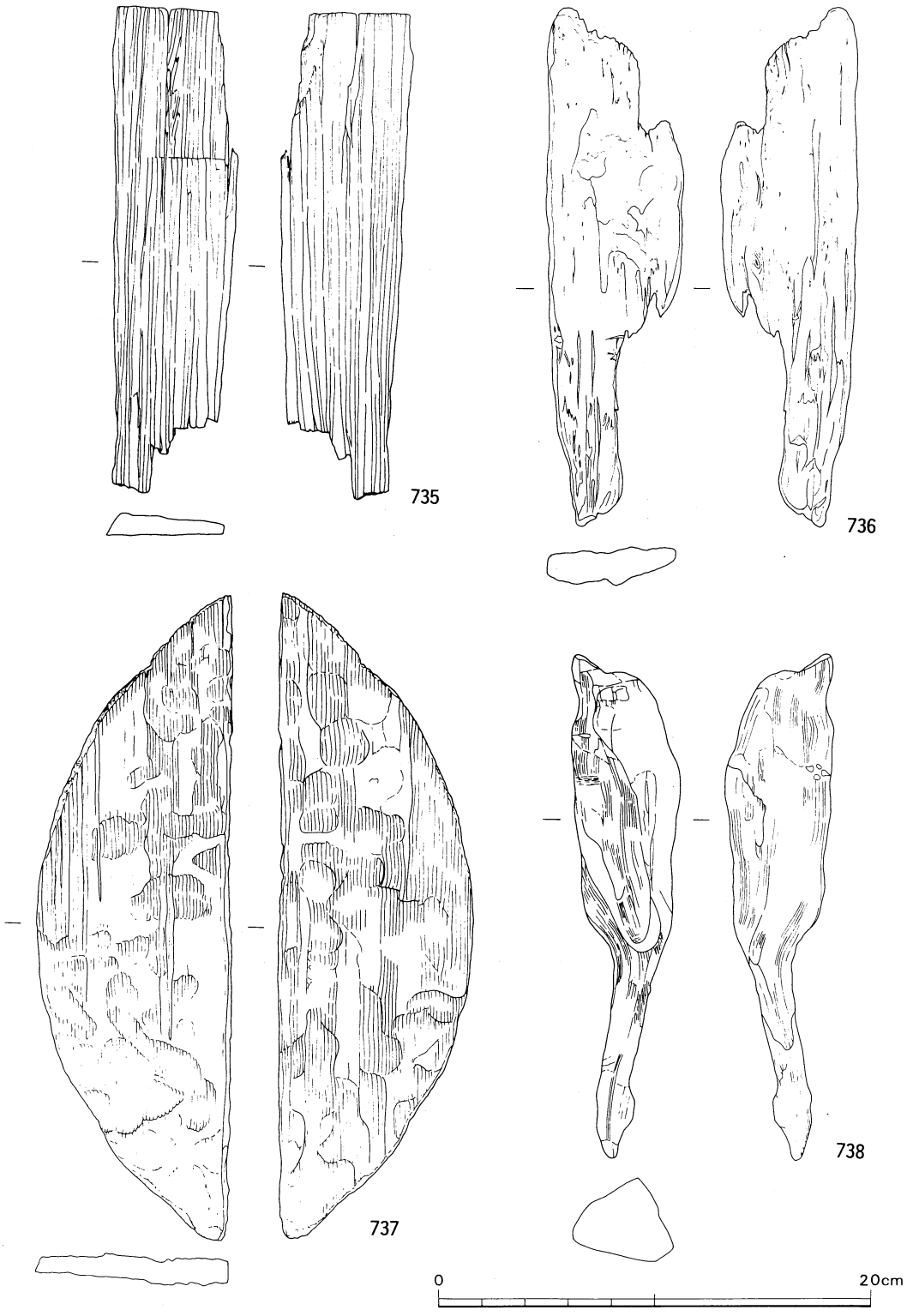
第156図　ＳＫ17・25・81、ＳＤ２・７ 出土遺物



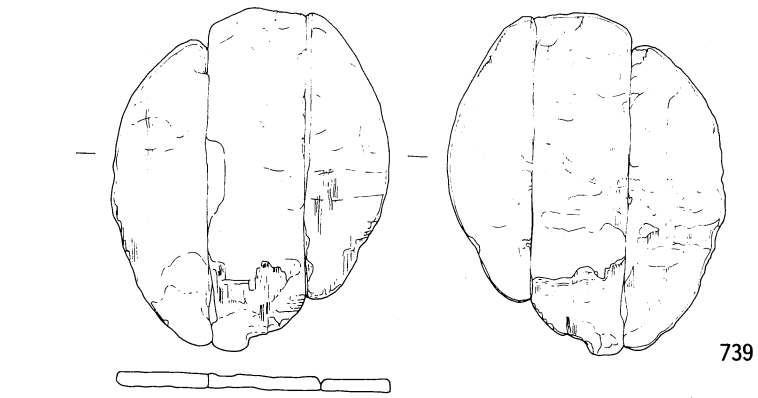
第157図　ＳＫ60、ＳＤ15、ＳＥ１ 出土遺物

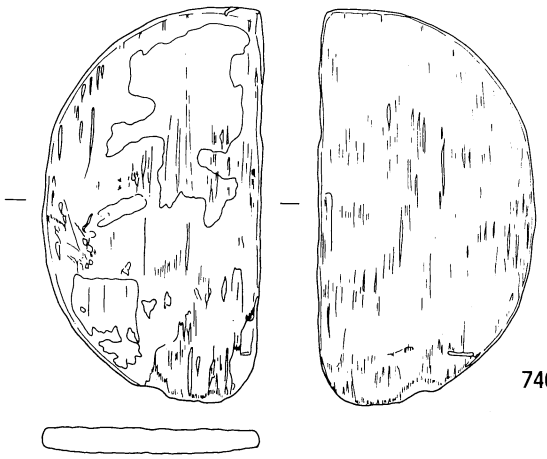


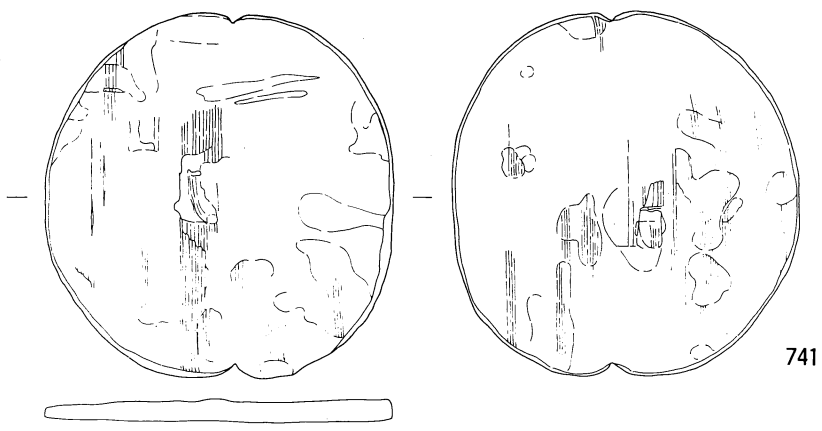
第158図　ＳＤ15 出土遺物

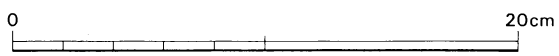


第159図　ＳＤ15、ＳＥ１ 出土遺物

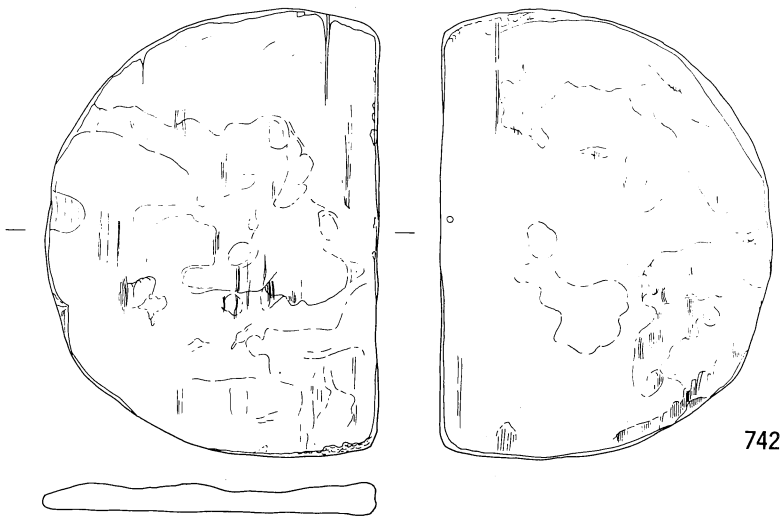


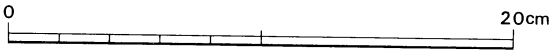


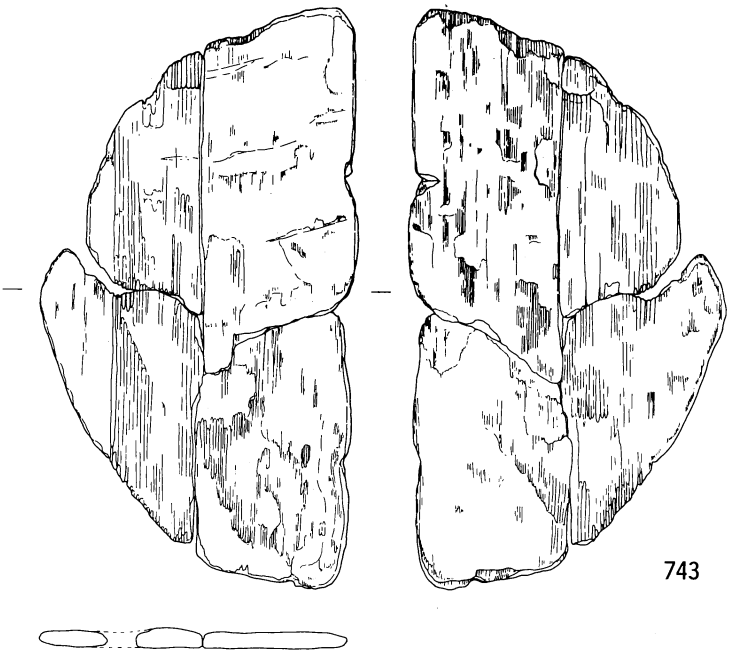


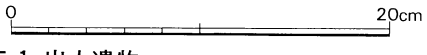


第160図　ＳＥ１ 出土遺物



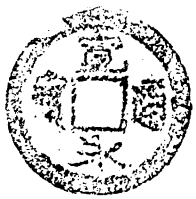


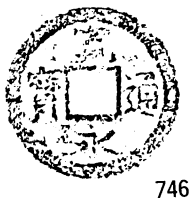




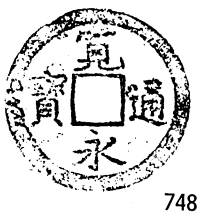
第161図　ＳＫ60、ＳＥ１ 出土遺物

744

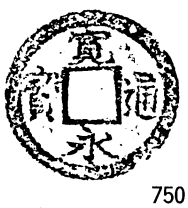

745

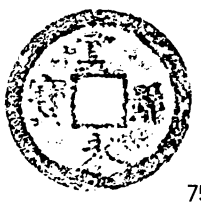

746

747


748

749


750


751

0 5cm

第162図　ＳＫ20～22・37・62・122 出土遺物

4. Loc. 43

Loc.43

1．位置と調査経過

Loc.43は、田村遺跡群の北端部に位置しており、場外整備事業として行われた。田村川から分かれ、場外場周水路から秋田川へ流れる排水路の工事に伴うものである。字名は柱昌寺中と呼ばれている。現状は、細勝寺の西を100ｍ南下し、さらに東へと続く、幅約２ｍの水路であり、工事計画は、水路幅を３ｍと拡張し、深さは約２ｍほどに掘り下げ、コンクリート３面張りにするものであった。調査区の範囲は、現状の水路部分とわずかな拡張部分であり、東西方向の部分では道路の下なども工事範囲に入っていたので、調査は工事工程により期間的な問題もあって、南北方向と東西方向の部分の２回に分け行われ部分的には工事と並行して調査が行われた。

今回の調査範囲は、従来、田村城の外堀が図上で復元され、その存在が明確な部分であった。調査の結果は水路部分の調査であり、かつ調査面積も狭いので、その全貌を知ることはできなかったけれども、堀の存在は実証された。

調査期間は昭和57年10～12月にかけての約３か月間であり、調査面積は873㎡である。

2．調査概要

調査は、当初、空港拡張範囲の北の場周道路及び水路部分として試掘調査を行った。この試掘グリッドにおいて、堀の南西コーナーの壁が検出され、また、東の試掘グリッドでは、弥生時代前期及び中～近世の土坑が検出された。そこで現状の水路及び道路部分については、工事の段階で調査を行うことにし、それ以外の拡張部分については、事前に調査を行った。

桂昌寺中の西辺にあたる水路部分については工事工程上、まず最初に調査された。その結果、現状の水路にほぼ重複するように、堀（ＳＤ１）が検出された。次いで調査の行われた東西方向の拡張部分においては、試掘トレンチと同様に、弥生時代前期と中～近世の土坑、及び溝が検出された。東西方向の堀（ＳＤ１）については、北壁のプランが確認されたが最後に一括して調査を行った。その結果、堀は南北方向から、直角に東へ曲り、調査区外へと延びていることが確認された。また、東の県道部分の調査区（Loc.42）において、ＳＤ１の延長とみられる堀が一部検出されている。

3．層序と出土遺物

Loc.43の基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　黄灰色粘質土層

第163図　調査区設定図

第Ⅳ層　明褐色粘質土層

第Ⅰ層耕作土は厚さ約10cm、第Ⅱ層床土は厚さ約５cmを測る。第Ⅲ層黄灰色粘質土層は遺物包含層であり厚さ約15cmを測る。第Ⅳ層明褐色粘質土層は基盤であり、その上面は遺構検出面である。堀部分の断面によれば、第Ⅳ層以下には、第Ⅴ層茶褐色粘質土層、第Ⅵ層黒褐色粘土層がみられた。

遺物包含層である第Ⅲ層からの出土遺物は土師質土器の細片及び近世陶磁器の細片が混在しており出土量も少なく、図示できるものはなかった。

4．遺構と遺物

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、試掘トレンチにおいて検出された土坑であり、ＳＤ１の北に隣接している。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径3.92ｍ、短径0.89ｍ、深さ0.37ｍを測る。平面形は不整方形であり、長軸方向はＮ－23°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦であり、南端部には、深さ５cmほどの小さな落ち込みがみられる。また、西壁は、深さ10cm前後の不整形の落ち込みが幅0.86ｍに張り出し、浅い段状をなす。断面形は逆台形を呈し、埋土は黒茶褐色粘質土である。遺物は底面上及び10cmほど上部に面をなし出土しており、壺（２）甕（３～16）がみられる。石器は磨製石鏃（17）が出土している。時期は、前期Ⅱと考えられる。

ＳＫ２

ＳＫ２は、試掘トレンチの北に位置しており、ＳＫ１の北に隣接して、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径4.50ｍ、短径0.89ｍ、深さ0.25ｍを測る。平面形は不整方形であり、長軸方向はＮ－14°－Ｅを示す。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に立ち上る。断面形は箱形を呈し、北半部の底面上には薄く炭化物がみられる。埋土は黒茶褐色粘質土である。遺物は、北半部の炭化物上部に面をなし出土しており、壺（１）がみられる。

時期は、ＳＫ１と同じく前期Ⅱと考えられる。また、中央部をＳＤ４に切られている。

ＳＫ３

ＳＫ３は、試掘トレンチの東部に位置しており、ＳＤ６の西壁に接し、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径0.90m、短径0.73m、深さ0.18mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN－82°－Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ３は、ＳＤ６と重複し、切っているので新しく、埋土などからみれば、中～近世の土坑ではないかと考えられる。

ＳＫ４

ＳＫ４は、試掘トレンチの東端部に位置しており、ＳＫ３の東、ＳＤ６の東壁に接し、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径1.08m、短径0.83m、深さ0.20mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN－12°－Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰茶褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ４は、ＳＤ６と重複し、切っているので新しく、ＳＫ３と同じく中～近世の土坑ではないかと考えられる。

ＳＫ５

ＳＫ５は、試掘トレンチの北東に位置しており、調査区の北東部にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径3.08m、短径2.85m、深さ0.68mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN－17°－Eを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。壁は緩やかに立ち上り、調査区外へと続いている。埋土は２層に分かれ、上層は灰褐色粘質土、下層は暗灰色粘質土である。出土遺物は、土師質土器小皿（18）、伊万里皿（19）、瀬戸・美濃系の植木鉢（20）がみられ、時期的には、18世紀と考えられる。

ＳＫ５はＳＫ３と重複し、切っているので、ＳＤ３が深く、重複部分は、ＳＤ３を完掘した段階では消滅した。

ＳＫ６

ＳＫ６は、東の調査区の北部に位置しており、ＳＫ７と重複し、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長1.17m、深さ0.22mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN－60°－Wを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ６はＳＫ７と重複し、切っているので新しいが、時期は出土遺物もなく不明である。

ＳＫ７

ＳＫ７は、東の調査区の北部に位置しており、ＳＫ６と重複し、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長0.80ｍ、深さ0.13ｍを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はＮ－79°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ７は、前述のとおりＳＫ６に切られており古いが、時期は不明である。

ＳＫ８

ＳＫ８は、東の調査区の南部に位置しており、ＳＤ１の北壁にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径2.81ｍ、短径2.13ｍ、深さ0.45ｍを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はＮ－75°－Ｗを示す。底面は西半部に深さ10㎝ほどの落ち込みがみられ、北西部には小ピットが存在する。断面形は不整逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物は伊万里の紅猪口（21）がみられる。

ＳＫ８は、ＳＤ１・９と重複し、切っているので新しく、出土遺物からみれば、18～19世紀と考えられる。

ＳＫ９

ＳＫ９は、東の調査区の東部に位置しており、ＳＫ10と重複し検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長1.03ｍ、深さ0.39ｍを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はＮ－25°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を示す。埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物は土師質土器の杯（27）がみられた。

ＳＫ９はＳＫ10に大部分を切られており古く、時期は，出土遺物から16世紀と考えられる。

ＳＫ10

ＳＫ10は、東の調査区の東部に位置しており、ＳＫ９、ＳＤ１と重複し検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径3.98ｍ、短径1.99ｍ、深さ1.23ｍを測り、深い。平面形は楕円形であり、長軸方向はＮ－81°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、下部は水路からの水分により青灰色となる。出土遺物は、伊万里皿（22）、大皿（29）、白磁菊花皿（23）、瀬戸・美濃系灯明皿（24）、備前擂鉢（25）、産地不明碗（26）がみられた。

ＳＫ10は、ＳＫ９、ＳＤ１を切っており新しく、時期は、出土遺物から18～19世紀と考えら

れる。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、田村川から分離し、南北方向に流れる水路部分と、東に曲り延びる水路と道路部分であり、検出された全形はＬ字状をなしている。検出状態は、調査部分が水路と道路であり、かつ、工事に並行する調査のために、きわめて難しく、南北部分では、ＳＤ１の基底部及び西壁の一部、南の東西部分においても基底部から壁の半分ほど検出されたにすぎない。

規模は、南北部分では、検出長136ｍ、深さ2.88ｍ、幅5.20～6.80ｍを測り南端部は南西コーナーとなり東へ続いている。北端部はさらに北へ延びると思われる。基底部は、幅2.10～３ｍを測り、中央部から北が狭くなっている。また、北から52.4ｍの部分には、西壁側に幅1.80ｍ、基底部からの高さ１ｍほどの段がみられる。底面の高さは、ほぼ平坦であるが、中央部がわずかに低くなっている。

ＳＤ１の東壁は、そのほとんどが調査区の東壁であり、ＳＤ１の壁として認められる部分は南から28ｍの範囲の基底部から0.50ｍ上部までである。西壁は、ほぼ原形が検出されていると考えられるが、上端部１ｍほどについては、現状の水路と工事の関係により上部を削られたので明確にはできなかった。基底部と、明確に検出された両壁の立ち上りからみれば、西壁は比較的緩やかに立ち上るのに対して、東壁は40°ほどの角度をもって立ち上り、やや急傾斜をもっている。

また、北半部の東壁側には、細勝寺の西を区切る土塁状の地形がみられたが、ＳＤ１の東壁は、完全に土塁状の地形の下に入っており、ＳＤ１との直接的な関連は認められず時期的に新しいものと考えられる。

東西部分の規模は、検出長70.80ｍ、幅5.20～6.40ｍ、深さ0.70ｍを測る。西端部は南北方向から続き、東端部はさらに東へ延びている。基底部は、幅2.80～3.40ｍを測り、東端部でやや細くなっている。南北部分に比べ、深さが浅いのは、南の道路部分及び、北の拡張部分について、検出面が現状の水路の影響により、ＳＤ１の埋土と共に青灰色を呈し、不明確なために掘り下げた結果であり、本来はさらに深いと考えられる。

南壁と北壁の立ち上りは、共に緩やかであり、32°の角度を測る。両壁の中間部には、部分的な小段がみられる。底面はほぼ平坦であるが、わずかに東へ低く、傾斜している。

埋土は基本的には青灰色から黒灰色を呈する粘土であり、部分的に砂、砂利層がみられる。上半部は、現状の水路にあたっており、かなりの撹乱がみられる。また基底部上には、暗青灰色粘土が薄く堆積しており、その中に多量の木葉がみられ、松笠も混り出土している。

出土遺物の中で特記すべきものは、土師質土器小皿（45～52）、皿（53～58）と御札（60）

であり、これらの遺物は、南西コーナーより北へ28mの地点において、基底部の暗青灰色粘土の上面に一括出土している。御札には、文頭に金剛界大日如来を表す梵字（バーンク）がみられ、「○　奉轉讀大般若經一部六□」が中央に、その右には、般若菩薩を表す梵字（ジーク）がみられ、「○　飯命十六善神□□」、左には、「大永□年□」が読み取られる。これらの出土状態からみれば、病災を除去するために使用し、一括廃棄されたものである。また、大永年間は1521～1527年なので、ＳＤ１の廃絶時期は16世紀初頭である。他に、埋土中の遺物としては、土師質土器杯（37）、鍋脚部（38）、備前擂鉢（39）、瀬戸梅瓶（28）、仏飯器（44）、青磁碗（40、41）、尾戸皿（42、43）がみられる。

以上のように、ＳＤ１は、守護代細川氏の城館である田村城の外堀にあたると考えられ、西辺の南半部から南西コーナー、さらに南辺の一部が検出された。堀の状態としては、基底部の暗青灰色粘土中に、木葉、松笠がみられ、かつ一括遺物が出土することから、ほとんど水はなく、空堀のような状況であり、必要に応じて、水を入れたと考えられる。また、堀の機能した時期としては、細川頼益が土佐の守護代として赴任し、田村へ居城をかまえた1380年から廃絶時期の大永年間の約150年間と考えられる。

ＳＤ２

ＳＤ２は、試掘トレンチの北に位置する南北方向の溝であり、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長３m、幅0.48m、深さ0.12mを測る。方向はＮ－55°－Ｅを示し、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は黄茶褐色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ２は、ＳＤ３と重複し、切られているので古く、ＳＤ３が15世紀と考えられることから、15世紀以前の溝である。

ＳＤ３

ＳＤ３は、試掘トレンチの北に位置しており、東西方向から北へ曲り、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長は、東西方向12.70m、南北方向2.10m、幅1.10m、深さ0.15mを測る。方向はＮ－81°－Ｗを示し、北へほぼ直角に曲る。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、土師質土器皿（30～32）、小杯（33）、杯（34～36）がみられる。

ＳＤ３は、ＳＫ２、ＳＤ２・４・５と重複するが、ＳＤ４にのみ切られている。時期は、出土遺物からみれば、15世紀と考えられる。

ＳＤ４

ＳＤ４は、試掘トレンチの北に位置しており、ＳＤ３と重複し検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長6.50ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.24ｍを測る。方向は、南北方向でありＮ－30°－Ｅを示す。底面は平坦であり、中央部に長径20㎝前後の円礫が一列に並べられている。断面形は逆台形を呈し、埋土は白灰色粘土である。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ４は、前述のとおりＳＤ３を切っているので新しく、埋土などからみれば、近世～近代にかけての溝と考えられる。

ＳＤ５

ＳＤ５は、試掘トレンチの北に位置する南北方向の溝であり、ＳＤ３に重複し検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長2.50ｍ、幅0.40ｍ、深さ９㎝を測る。北はＳＤ３に切られ、南は試掘トレンチの撹乱により切られている。方向はＮ－８°－Ｅを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は黄白灰色シルトである。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ５は、ＳＤ３と重複し、切られているので古く、15世紀以前の溝である。

ＳＤ６

ＳＤ６は、試掘トレンチの東に位置する南北方向の溝であり、ＳＫ３・４と重複し検出されている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長4.00ｍ、幅0.60ｍ、深さ0.18ｍを測る。方向はＮ－２°－Ｗを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ６は、ＳＫ３・４に切られており古いが、時期は、不明である。

ＳＤ７

ＳＤ７は、試掘トレンチの中央部に位置する南北方向の溝であり、北部は撹乱を受け、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長2.20ｍ、幅1.20ｍ、深さ0.41ｍを測る。方向はＮ－６°－Ｅを示し、底面は平坦である。西壁には幅0.20ｍ、深さ0.11ｍの小段がみられ、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。時期は不明である。

ＳＤ８

ＳＤ８は、東の調査区の東部に位置する南北方向の溝であり、調査区の北辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長3.80m、幅0.54m、深さ0.17mを測る。方向はN－12°－Eを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰色シルトである。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ８は、ＳＤ９と重複し、切っているので新しいが、時期は不明である。

ＳＤ９

ＳＤ９は、東の調査区の西部に位置する東西方向の溝であり、ＳＫ８、ＳＤ８と重複し検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、全長7.40m、幅0.70m、深さ0.21mを測る。方向はN－76°－Wを示し、底面は平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰白色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ９は、ＳＫ８、ＳＤ８に切られており古く、ＳＫ８が18～19世紀と考えられるので中世の溝ではないかと考えられる。

５．まとめ

Loc.43では、弥生時代前期の土坑２基と中～近世の土坑、溝、さらに土佐の守護代であった細川氏歴代の居館である田村城館の外堀が検出された。

弥生時代前期の土坑は、ＳＫ１・２であり、いずれも水路の拡張部分において、中～近世の遺構と同一面に検出された。その規模は、両者共に長径４m前後、短径１m弱を測る南北に長い溝状を呈しており、南北に並んでいる。時期は、出土遺物から前期Ⅱと考えられ、周辺部のLoc.35・44などの調査区においても同時期の遺構が検出されており、前期Ⅱにおける集落の一部を構成するものと考えられる。ＳＫ１・２共に同様な規模を有し、南北に並ぶことから、遺物の出土量は多いが、同じ性格をもつ土坑であり、墓坑である可能性も存在する。

中世における遺構としては、田村城館の外堀として確認されたＳＤ１と、ＳＤ３・５が存在するが、ＳＤ３・５は田村城館に関連する遺構であるか否か不明である。他の土坑、溝については近世～近代の遺構と考えられるが、不明な点が多い。

田村城館の外堀であるＳＤ１は、西辺と南西コーナーから南辺にかけて検出されており、確実に堀として確認される部分は基底部と壁の立ち上り１mの範囲であり、壁の上半部、特に西辺の東壁はほとんど検出することができなかった。確実に検出された部分から堀の全体を推定すると、上部は幅６m、基底部は幅１m、深さ２m前後を測ると考えられ、やはり大規模なものである。また、堀の南辺は東へ延びており、県道部の調査区Loc.42で一部検出され、さらに東へ延びることが、確認されている。

田村城館については、かつて島田豊寿氏が「長宗我部地検帳」を基にして図上で復元されている。[註1]これによると田村城館の範囲は、東辺と北辺は不確定要素が多く明確ではないが、西辺と南辺は坪境界線にあり、四辺に土塁と堀をもつ。面積は、四町五反以上に及ぶ巨大な城館である。今回の調査で検出した堀は、西辺の南半部から南辺の西部にかけてであり、島田氏によ

る復元が誤りでない事が明確になった。

ＳＤ１からの出土遺物中、大永年間の年号をもつ御札は、田村遺跡群にあってはまれな実年代を示す資料であり、田村城館の外堀からの原位置を保つ一括出土であることをみれば、その意義は大きい。この御札の出土により田村城館の廃絶の時期を知ることができる。堀の基底部から木葉、松笠、木枝等と共に出土していることから、空堀として機能していた段階に廃棄されたことを示している。埋土中の遺物はほとんどみられないことから短期間に埋没したと考えられ、御札の年号である大永年間、実年代1521～1527年に廃絶したと推定される。また、この廃絶年代によって、間接的ではあるが田村城館に関連する溝に囲まれた屋敷跡もほぼこの頃に姿を消した事が推則される。また、御札の文面及び出土状態から病災等を除去するために使用された後、共伴する土師質土器小皿、杯と一括廃棄されたものである。

註１　島田豊寿「田村城館と守護代町について」『土佐史談』復刊40号19

第19表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第164図	SK 1	不整方形	3.92	0.89	0.37	N－23°－E	逆台形	
〃	SK 2	〃	4.50	0.89	0.25	N－14°－E	箱形	
〃	SK 3	楕円形	0.90	0.73	0.18	N－82°－W	逆台形	
〃	SK 4	〃	1.08	0.83	0.20	N－12°－E	〃	
第165図	SK 5	不定形	3.08	2.85	0.68	N－17°－E	〃	
〃	SK 6	楕円形	1.17	——	0.22	N－60°－W	〃	
〃	SK 7	〃	0.80	——	0.13	N－79°－W	〃	
〃	SK 8	不定形	2.81	2.13	0.45	N－75°－W	不整逆台形	
〃	SK 9	〃	1.03	——	0.39	N－25°－W	逆台形	
——	SK 10	楕円形	3.98	1.99	1.23	N－81°－W	〃	

第20表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
1	SK 2	壺	34.2 (6.6) —— ——	口縁部はなめらかに外反する。	口縁部内外面ヘラミガキ。	
2	SK 1	〃	—— (4.8) —— 7.8	底部はやや上げ底気味。	不明。	磨耗が著しい。
3	〃	甕	20.4 (3.8) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。有段部をもつ。	外面ヨコナデと一部縦のハケ目。	
4	〃	〃	20.2 (5.0) 18.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。胴上部に有段部をもつ。	口縁部外面はヨコナデ。	
5	〃	〃	20.6 (9.0) 18.8 ——	〃	口縁部外面はヨコナデ。胴部はハケ目だが、摩耗して不明。	
6	〃	〃	19.0 (10.0) 18.0 ——	〃	口縁部外面ヨコナデ。外面は斜位のハケ目。	
7	〃	〃	19.6 (3.2) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。	口縁部外面ヨコナデ。	
8	〃	〃	28.0 (9.2) 25.4 ——	口縁部は如意形に外反する。胴部に有段部を有する。口唇部は刻目。	外面ヨコナデの後ハケ目、内面は一部ナデ。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
9	SK 1	甕	19.8 (12.4) 16.0 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
10	〃	〃	27.8 (12.2) 26.6 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。胴部中位に有段部。	外面斜位、縦位のハケ目。	
11	〃	〃	21.4 (5.8) 19.8 ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。	不明。	磨耗が著しい。
12	〃	〃	21.2 (4.6) —— ——	口縁部は如意形に外反する。口唇部に刻目。	口縁部外面ヨコナデの後、斜位縦位のハケ目。	
13	〃	〃	21.2 (9.4) 18.4 ——	〃	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦のハケ目。内面はナデ調整。	
14	〃	〃	23.2 (7.8) 21.8 ——	〃	口縁部外面ヨコナデ、胴部縦のハケ目。	
15	〃	〃	—— (2.8) —— 7.6	底部は平底。	外面ハケ目調整。	
16	〃	〃	—— (2.8) —— 10.8	底部はほぼ平底。	外面はナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
18	SK 5	土師質土器 小皿	6.3 1.4 —— 2.3	体部は内湾して立ち上がる。	手捏ねにより成形し、内外面に指頭押圧が残る。	
19	〃	くらわんか皿	13.2 3.4 —— 8.3	体部は内湾して立ち上がり口縁にいたる。 高台は断面三角形。	見込部にコンニャク判による五弁花文。 外面につる草文。裏銘有り。	伊万里。
20	〃	植木鉢	28.8 (4.5) —— ——	わずかに外反した頸部より逆L字状の口縁部へといたる。	内面は口縁下まで施釉。 外面口縁下に3条の沈線がみられる。内外面ともに貫入有り。	瀬戸・美濃系。
21	SK 8	紅猪口	4.6 1.4 —— 1.5	体部は内湾して水平面をなし口縁へといたる。	見込と口縁部に施釉。	伊万里。
22	SK 10	皿	—— (1.3) —— 4.3	高台は外面を垂直に内面を斜めに削る。	見込に手描きによる五弁花文外底に「うずまき福」の裏銘有り。畳付けは釉を削りとる。	〃
23	〃	白磁 菊花皿	7.8 2.4 —— 3.4	体部は内湾して立ち上がる。 畳付は内外面を面取りする。	内面型うち成形の菊花皿である。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
24	SK 10	灯明皿	10.4 2.2 —— 3.7	あげ底の底部より体部は内湾して立ち上がる。 内面たち上がりは上方へ立ち上がる。	内面及び口縁部外面にのみ施釉。貫入有り。 底面に墨書がみられる。	瀬戸・美濃系。
25	〃	擂鉢	—— (3.9) —— 8.0	体部は直線的に立ち上がる。	条線は9本1単位で底部にまでみられる。	備前。
26	〃	碗	13.2 4.9 —— 6.0	体部は内湾して立ち上がりやや外反する口縁へといたる。畳付けは内外面を面取りする。	内面は蛇の目状に釉ハギが施される。 外面は高台脇まで施釉。	
27	SK 9	土師質土器 杯	—— (1.5) —— 3.5	体部は直線的に外方へ立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
28	SD 1	染付 梅瓶	—— (17.5) 17.0 10.0	よく張った肩部よりやや丸みをもって底部へといたる直腰型の梅瓶。	内面に輪積成形痕。	
29	SK 10	大皿	40.0 6.2 —— 22.6	体部は内湾して大きく外上方に立ち上がる。口縁部はさらに大きく外反し、輪花状を呈する。	見込部二重の界線内には、牡丹と蘭の文様が施される。 外面つる草文及び外底には裏銘（福の変字）がみられる。	伊万里。
30	SD 3	土師質土器 小皿	8.6 2.2 —— 4.7	平坦な底部より、体部は内湾しながら外方へと立ち上がる。	内面にロクロ痕。 底部回転糸切り痕。	
31	〃	土師質土器 皿	12.7 2.6 —— 9.8	比較的平坦な底部より屈曲して体部は立ち上がる。 口縁下はナデにより肥厚。	手捏ねにより成形。 内外面に指頭押圧が残る。	
32	〃	〃	12.8 2.2 —— 7.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部にいたる。	手捏ねによる成形。 内外面に指頭押圧が残る。 底部外面に黒斑有り。	
33	〃	土師質土器 小杯	6.6 2.4 —— 3.8	平坦な底部より屈曲して直線的に体部から立ち上がる。	底部回転糸切り痕。	
34	〃	土師質土器 杯	11.7 4.1 —— 3.8	〃	内面にロクロ痕が明瞭に残る。 底部回転糸切り痕。	
35	〃	〃	11.8 3.9 —— 4.1	〃	〃	
36	〃	〃	11.7 4.7 —— 3.5	平坦で小さな底部より体部は少しくびれて直線的に立ち上がる。	〃	
37	SD 1	〃	—— (2.6) —— 4.9	平坦な底部より屈曲して直線的に体部が立ち上がる。	〃	
38	〃	瓦質土器 鍋脚	全長(10.9) 直径 4.1	断面形はほぼ円形。	全面に指頭圧痕が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
39	SD 1	擂鉢	—— (6.7) —— 14.8	あげ底気味の底部より体部は直線的に立ち上がる。	条線は7本1単位。外面に指頭圧痕が残る。	備前。
40	〃	青磁碗	12.7 7.8 —— 5.0	体部は内湾して立ち上がり、直線的に口縁へいたる。高台は内面を垂直に、外面端部を丸くおさめ畳付を狭くする。	見込に印花文。 体部外面には細蓮弁文。 外底は蛇の目状に釉をはぐ。	
41	〃	〃	—— (3.2) —— 5.7	高台は内外面とも垂直に削られ、外面端部を面取りして畳付を狭くする。	全面に施釉して後、畳付の一部及び外底を蛇の目状に釉ハギする。見込に「清・記・何」の字がみられる。	
42	〃	皿	13.1 4.9 —— 4.9	体部は内湾して立ち上がり、短く外反する口縁部へといたる。 高台は内側を斜めに削り端部外面を面取りする。	内面は蛇の目状に釉をかきとる。 外面は高台脇まで施釉。	尾戸。
43	〃	〃	12.8 4.6 —— 4.1	体部は内湾に立ち上がり口縁へといたる。 畳付は内外面を削りとる。	〃	〃
44	〃	仏飯器	5.9 4.8 —— 3.2	中空の脚部は内傾して立ち上がり、内湾した体部を持つ杯部へ続く。		瀬戸。
45	〃	土師質土器小皿	6.9 1.9 —— 3.8	凹凸のある底部より内湾した体部へといたる。 口縁下が肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。	
46	〃	〃	6.6 1.7 —— 2.3	全体的に内湾した体部である。 底部は若干肥厚し口縁端部は丸くおさめる。	〃	
47	〃	〃	6.3 1.6 —— 2.2	内湾した体部。器壁は全体的に薄いが底部は若干肥厚する。	外面に指頭圧痕が残る。	
48	〃	〃	6.3 1.6 —— 3.7	若干肥厚した底部より内湾して外方へ立ち上がった体部。口縁端部は丸くおさめる。	手捏ね成形により、外面に指頭圧痕が残る。	
49	〃	〃	6.1 1.6 —— 1.3	全体的に内湾した体部。底部は若干肥厚し、口縁端部は丸くおさめる。	〃	
50	〃	〃	6.6 1.8 —— 1.2	底部が若干肥厚した内湾する体部をもつ。 口縁下がやや肥厚する。	〃	
51	〃	〃	6.7 1.6 —— 1.3	底部が若干肥厚した内湾する体部をもつ。 体部はやや肥厚する。	〃	
52	〃	〃	6.7 1.5 —— 1.2	若干肥厚した底部より内湾して外上方に立ち上がった体部。口縁端部は丸くおさめる。	〃	
53	〃	土師質土器皿	12.6 1.9 —— 7.3	比較的平らな底部より屈曲して外反気味に立ち上がった体部。口縁下は肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。 底面に黒斑がみられる。	

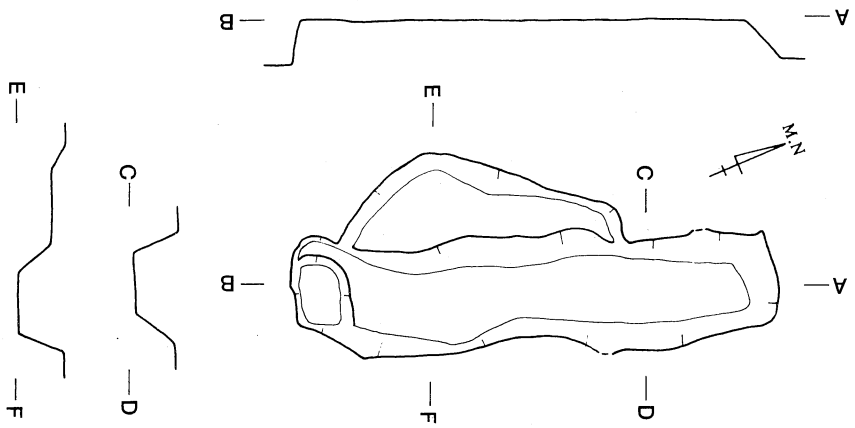
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
54	SD 1	土師質土器 皿	11.8 2.3 —— 7.9	比較的平坦な底部より屈曲して内湾気味に立ち上がった体部。口縁下が肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残る。	
55	〃	〃	11.8 2.1 —— 7.4	比較的平らな底部より屈曲して内湾気味に立ち上がった体部。底部及び口縁下は肥厚する。	〃	
56	〃	〃	11.9 2.0 —— 8.0	底部より内湾気味に立ち上がった体部。口縁下は肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が若干残るが、ナデにより丁寧に仕上げる。	
57	〃	〃	12.5 2.5 —— 8.7	体部は底部より屈曲してやや内湾気味に立ち上がる。口縁下はナデのため若干肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残るが、仕上げはヨコナデによる。底部に平行圧痕。	
58	〃	〃	12.0 2.1 —— 7.3	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁下はナデにより肥厚する。	手捏ね成形により内外面に指頭圧痕が残るが、仕上げはヨコナデによる。	
59	〃	天目茶碗	11.2 (5.5) —— ——	内湾して立ち上がった体部が一旦垂直方向にのび、口縁下で一度くびれた後、短く外反する口縁へといたる。高台脇を平らに削る。	内面及び外面口縁下1/3のところまで施釉。釉調はにぶい赤褐色を呈する。	瀬戸。

第21表　遺構出土石器観察表

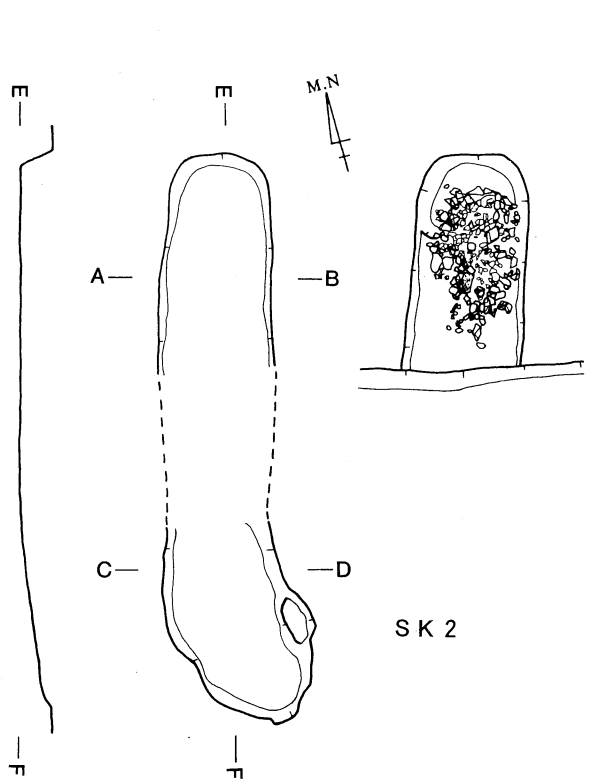
挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
17	SK 1	石鏃	3.1 1.1 0.4 2.3	頁岩	先端部と基部が欠損する。全体的によく研磨されている。	

第22表　遺構出土木器観察表

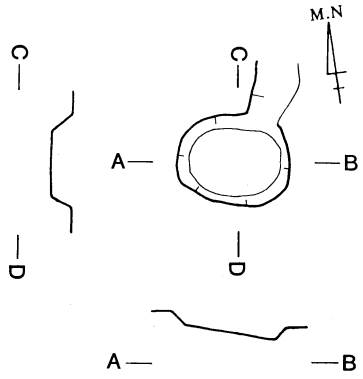
挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
60	SD 1	御札	(24.4) 4.4 0.9 ——	杉	頭部を圭頭とし、下端部は欠損する。	



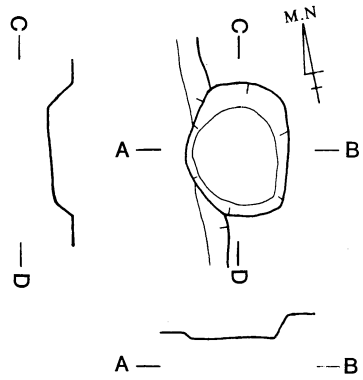
SK 1



SK 2



SK 3

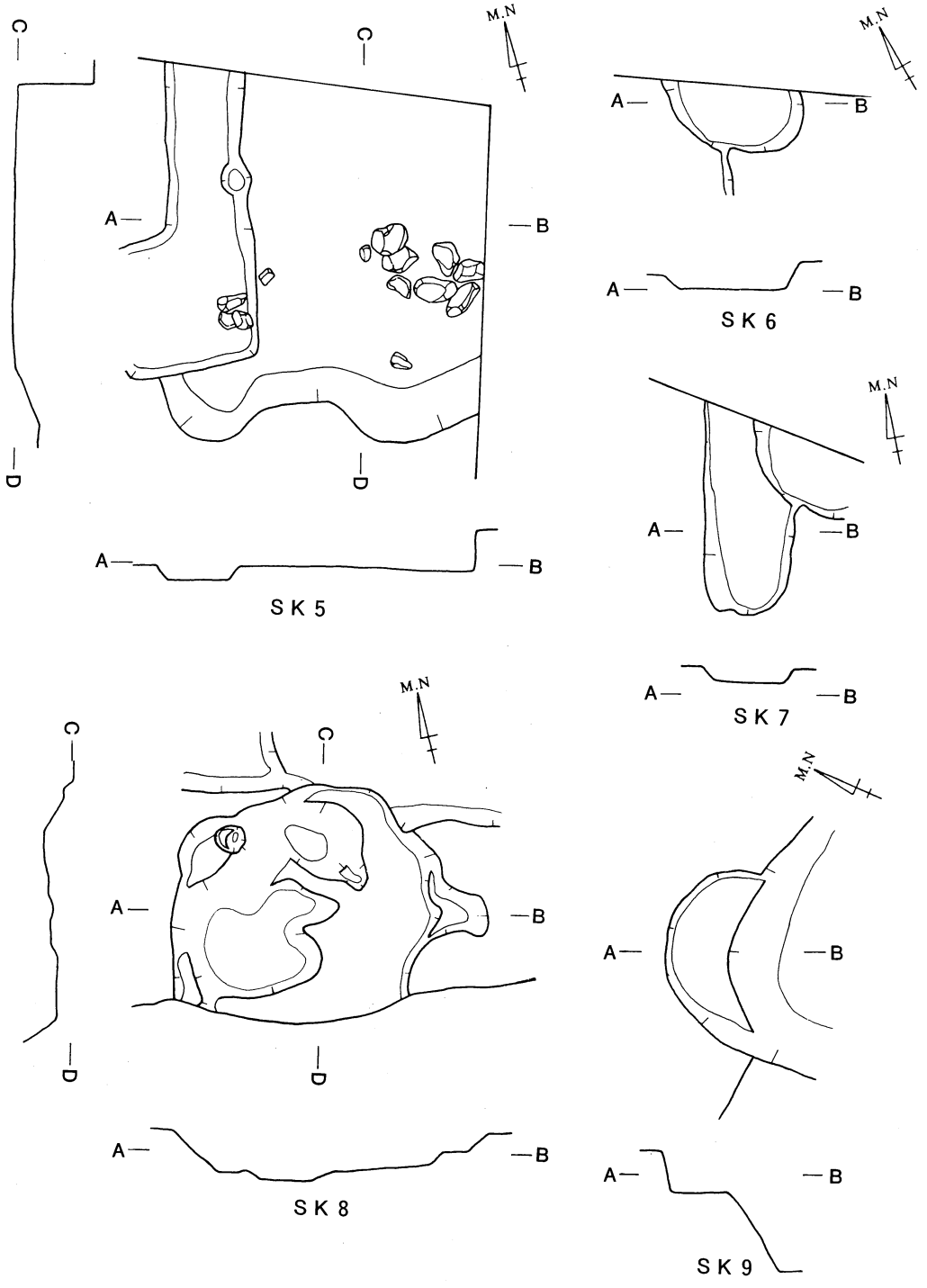


SK 4

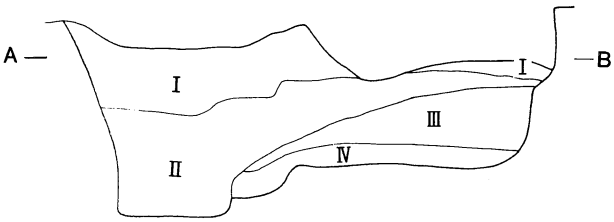
DL=7.00m

0 4m

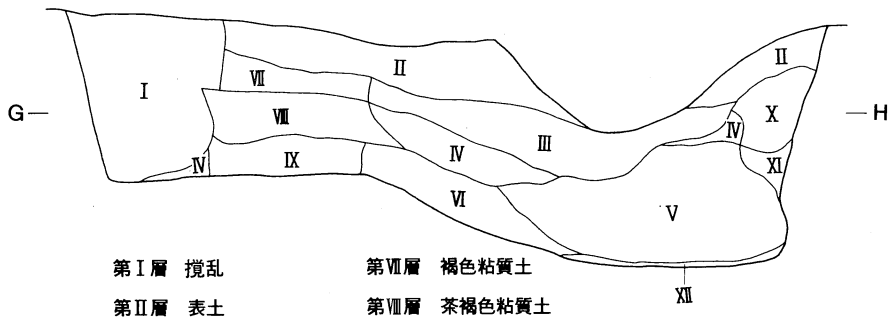
第164図　SK 1～4


C
C
M.N
A
B
D
D
A
B
SK 5
M.N
A
B
A
B
SK 6
M.N
A
B
A
B
SK 7
M.N
C
C
A
B
D
D
A
B
SK 8
M.N
A
B
A
B
SK 9
DL=7.00m
0
4m

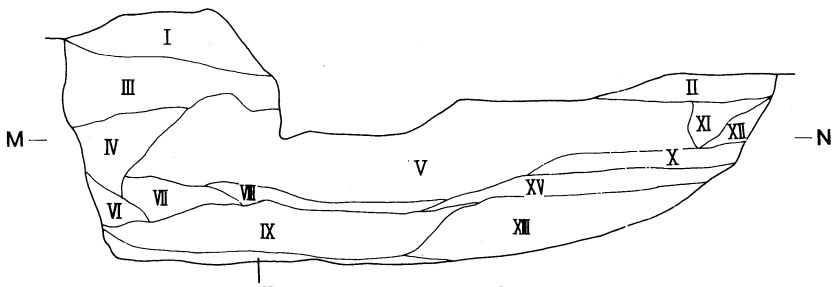
第165図　SK 5～9



第Ⅰ層　青灰色砂
第Ⅱ層　暗青灰色粘土
第Ⅲ層　青灰色砂礫
第Ⅳ層　褐色礫



第Ⅰ層　撹乱
第Ⅱ層　表土
第Ⅲ層　青灰色ヘドロ
第Ⅳ層　青灰色粘土
第Ⅴ層　暗青灰色粘土
第Ⅵ層　青灰色砂礫土
第Ⅶ層　褐色粘質土
第Ⅷ層　茶褐色粘質土
第Ⅸ層　褐色砂
第Ⅹ層　黄褐色粘土
第Ⅺ層　灰色粘土
第Ⅻ層　青灰色礫

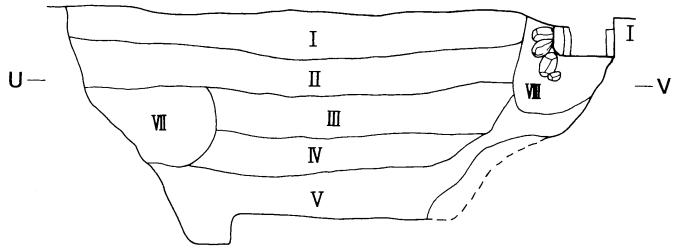


第Ⅰ層　盛土
第Ⅱ層　表土
第Ⅲ層　明茶褐色粘土
第Ⅳ層　暗茶褐色粘土
第Ⅴ層　暗青灰色粘土
第Ⅵ層　黄褐色粘土
第Ⅶ層　明青灰色粘土
第Ⅷ層　明青灰色粘土
第Ⅸ層　暗青灰色粘土
第Ⅹ層　黒灰色粘土
第Ⅺ層　褐色粘土
第Ⅻ層　暗褐色粘土
第ⅩⅢ層　明青色粘土
第ⅩⅣ層　砂礫
第ⅩⅤ層　明黒灰色粘土

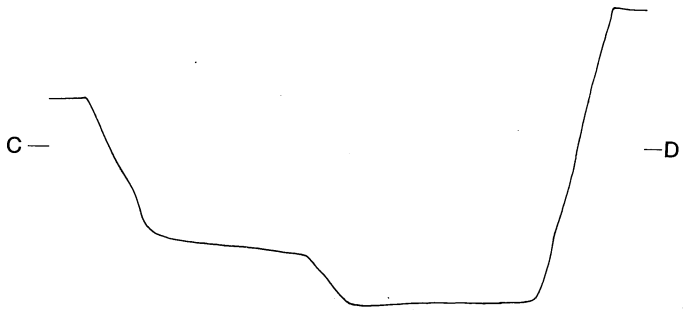
ＤＬ＝7.00m

0　4m

第166図　ＳＤ１セクション



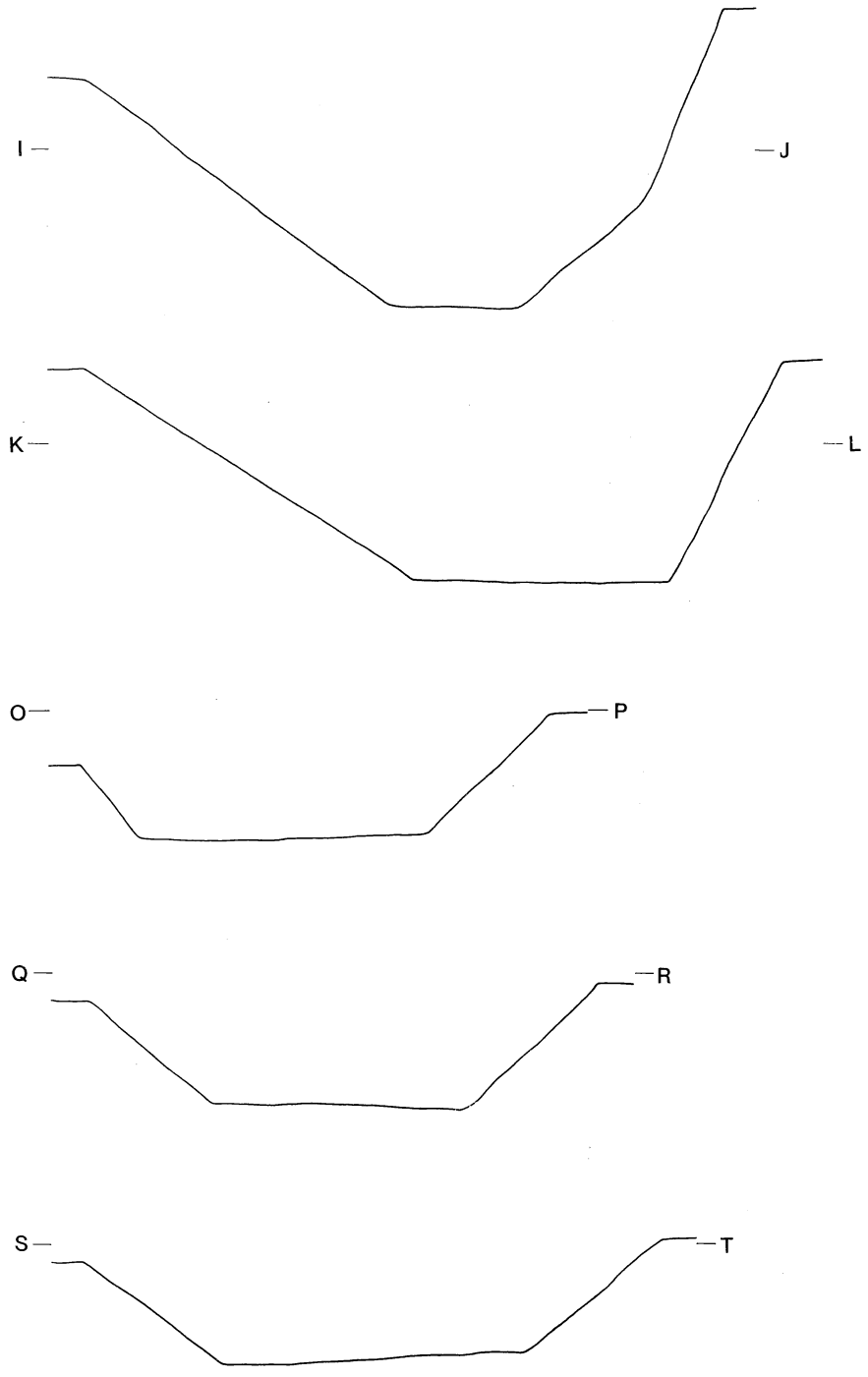
第Ⅰ層　置土
第Ⅱ層　暗灰茶色粘土
第Ⅲ層　茶灰色粘土
第Ⅳ層　灰色粘土
第Ⅴ層　暗灰色粘土
第Ⅵ層　青灰色小砂利
第Ⅶ層　灰色礫
第Ⅷ層　暗青灰色粘土



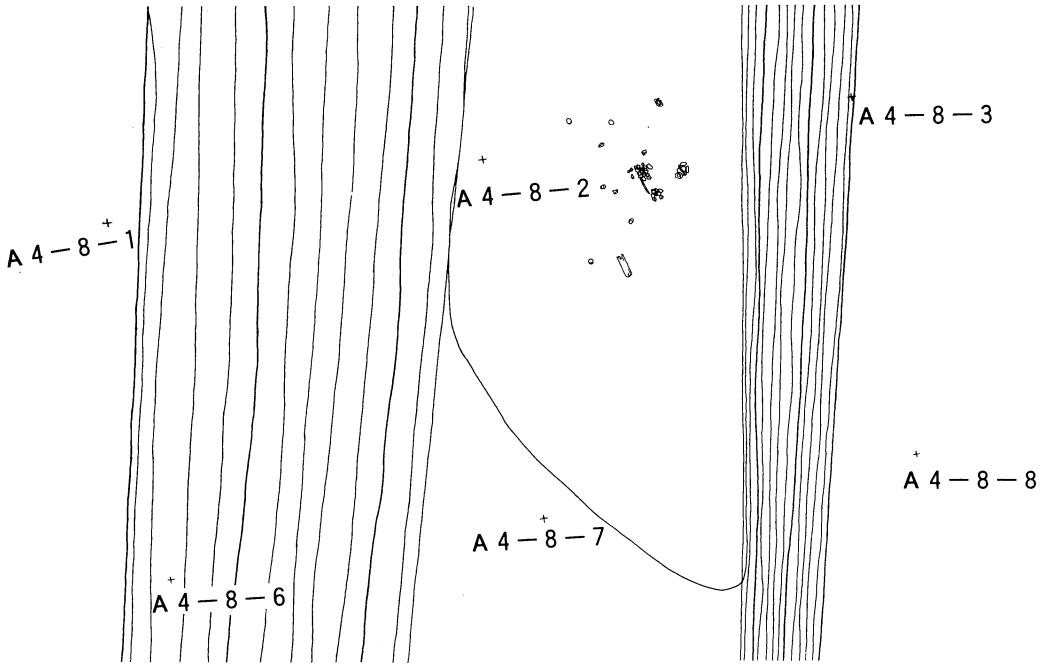
ＤＬ＝7.00m

0　4m

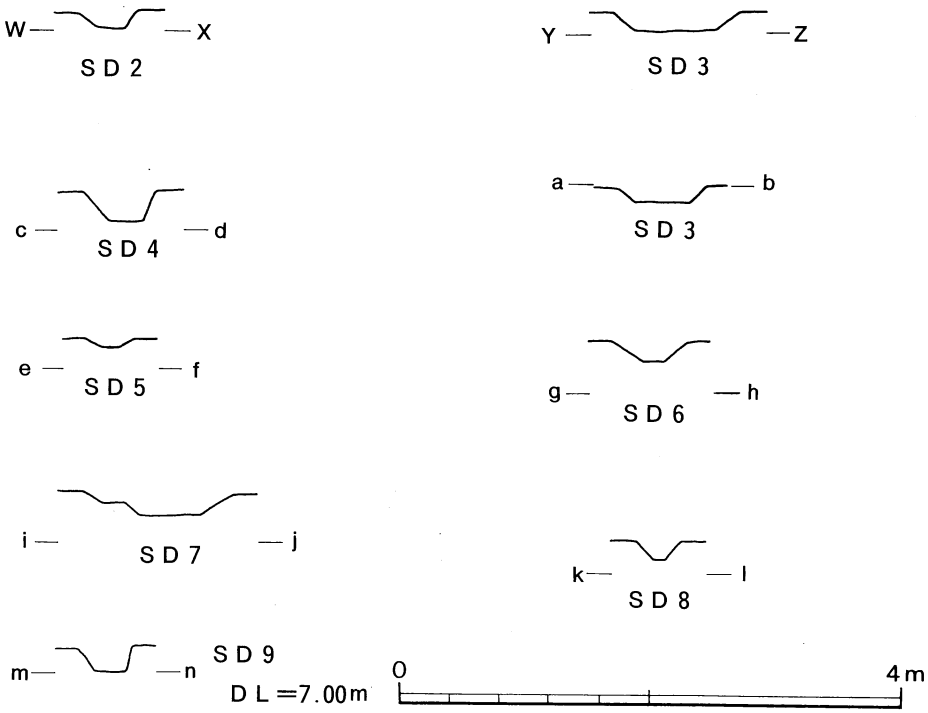
第167図　ＳＤ１セクション



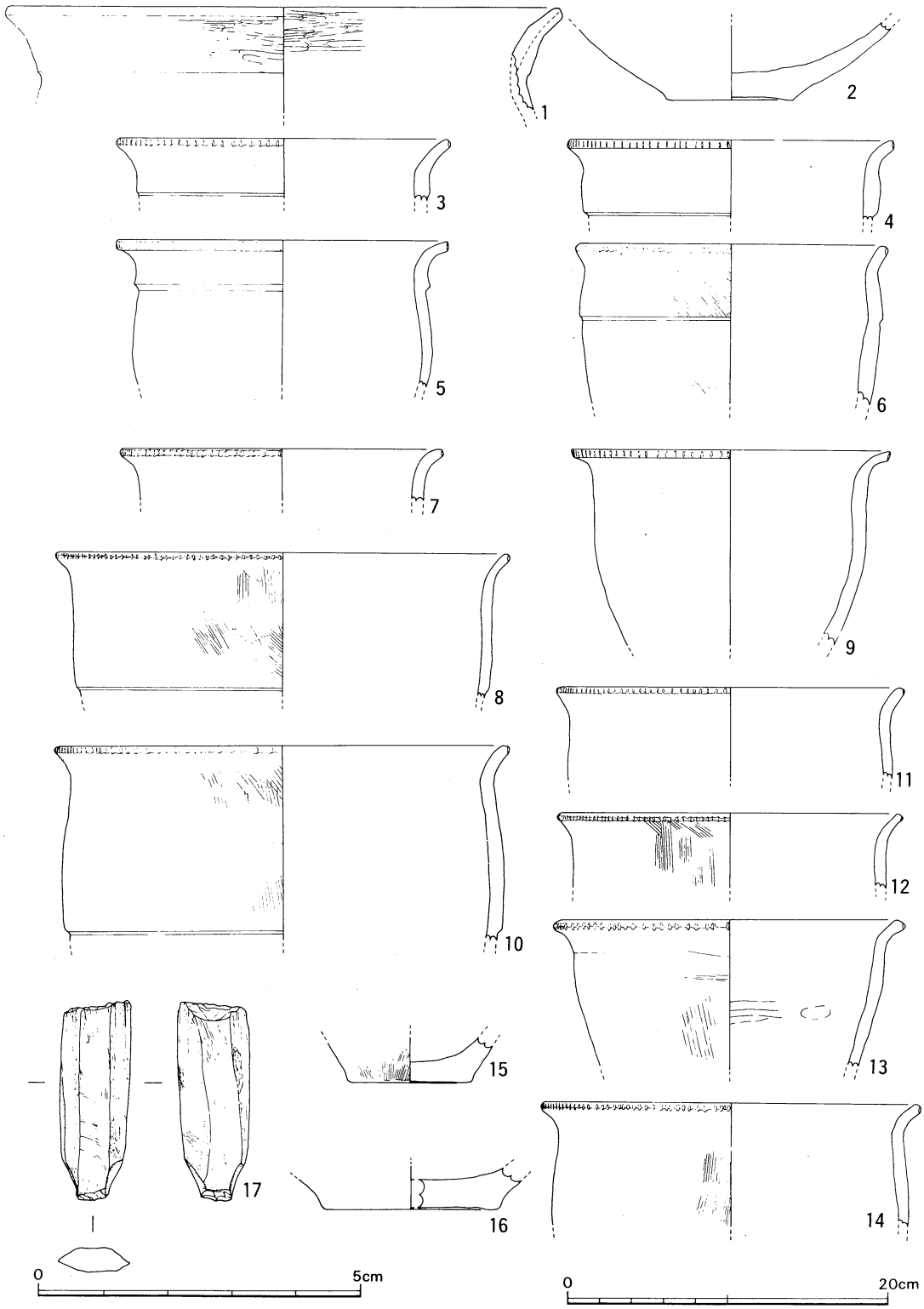
第168図　ＳＤ１



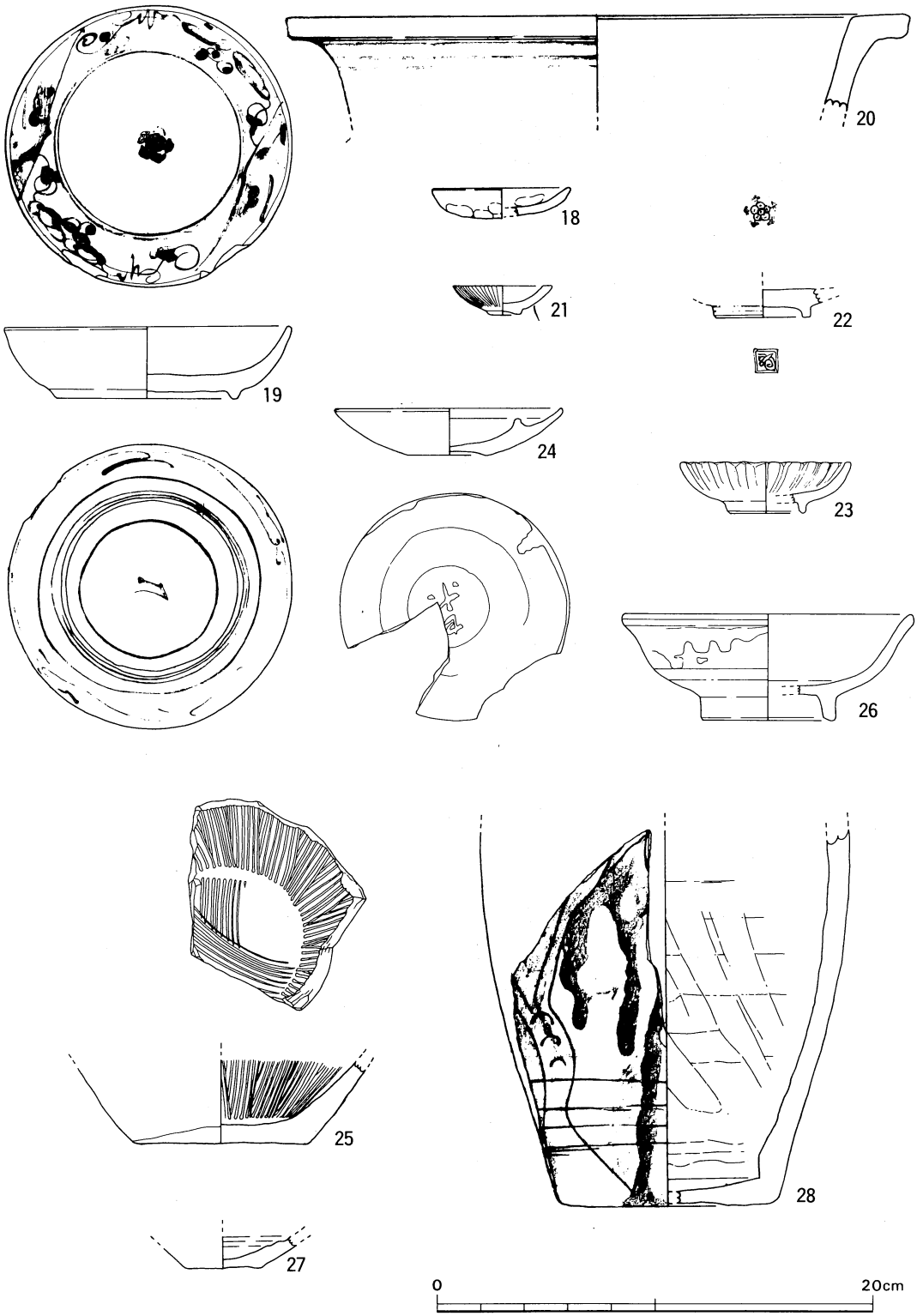
ＳＤ１　遺物出土状態



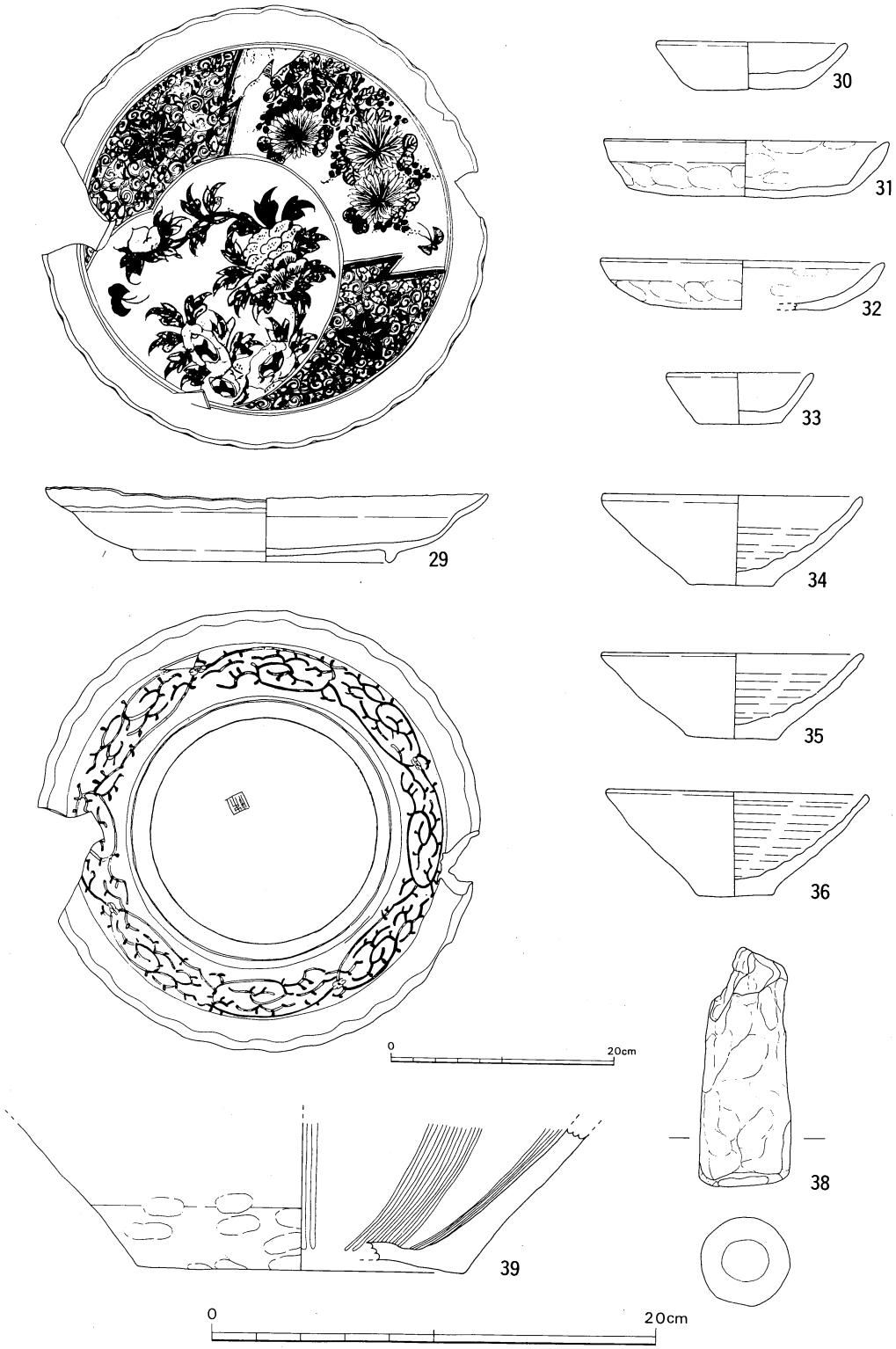
第169図　ＳＤ１遺物出土状態、ＳＤ２～９



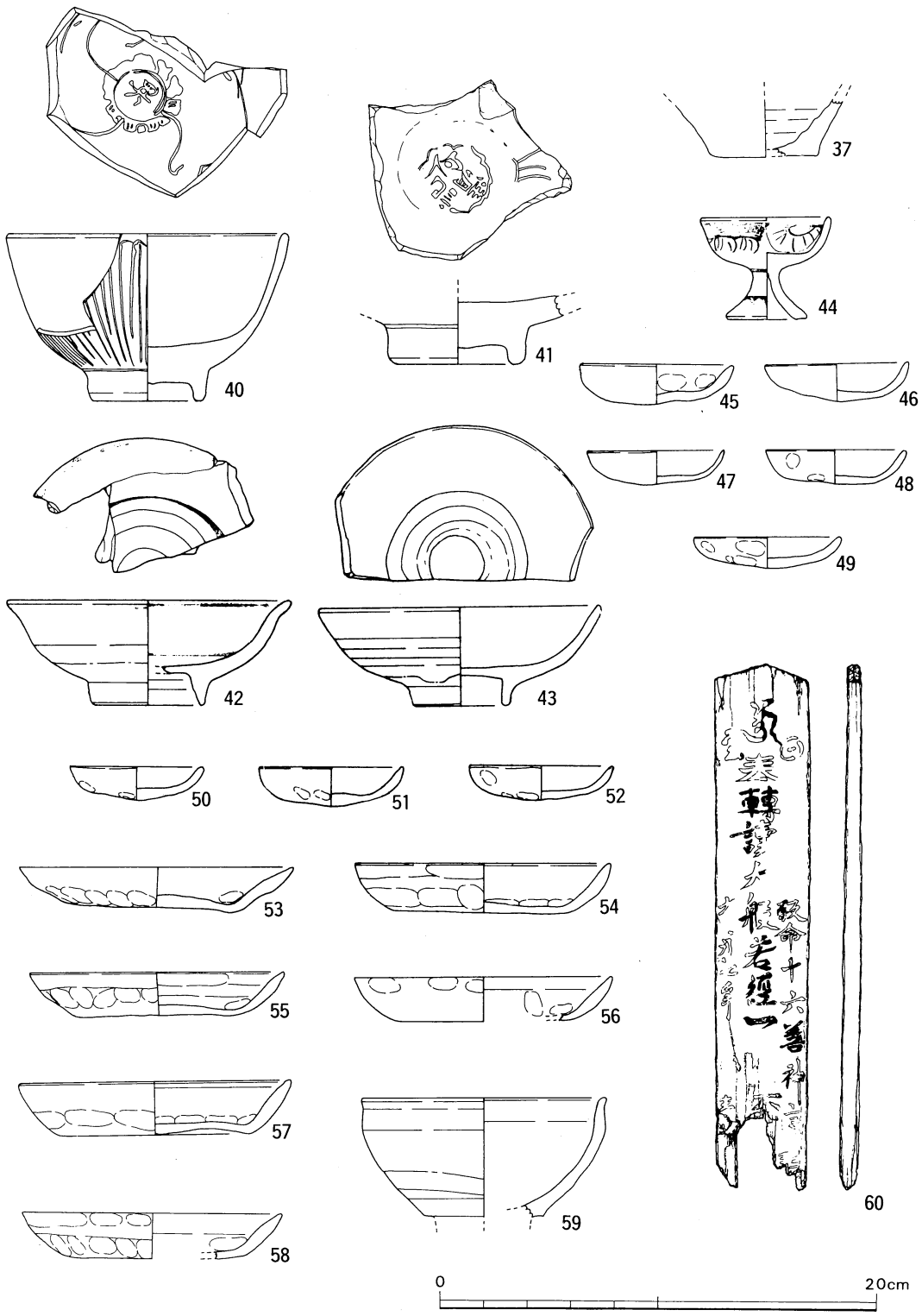
第170図　ＳＫ１・２出土遺物



第171図　ＳＫ５・８～10、ＳＤ１出土遺物



第172図　ＳＫ10、ＳＤ１・３出土遺物



第173図　ＳＤ１出土遺物

5. Loc. 48

Loc. 48

1．位置と調査経過

Loc. 48は、空港拡張範囲の南に位置しており、県道の地下道化工事に伴い、設定された調査区である。Loc. 48の字名は三ノ戸であり、下田村分に含まれる。調査期間は昭和57年10月から昭和58年６月にかけてである。調査面積は2,383㎡である。県道は、空港拡張範囲の中央部を南北に走っており、拡張計画の当初より地下道化が考えられていた。地下道部分は空港拡張範囲内に含まれ、地下道に至る取付け道路は、幅約20ｍで北が約125ｍ、南は約250ｍの拡張が計画されていた。調査は、まず試掘トレンチにより遺構、遺物の存在を確認し、検出された場合は拡張することとしたが、諸般の事情により、Loc. 48全体では５次にわたる小面積ごとの調査であった。最終的には北と南の２か所の調査区となり、北をＡ区、南をＢ区と呼ぶこととした。Ａ区は県道の東と西のトレンチ状の調査区であり、県道部分は北端部の堀の部分のみ調査された。Ｂ区では一部未調査部分が残された。

2．調査概要

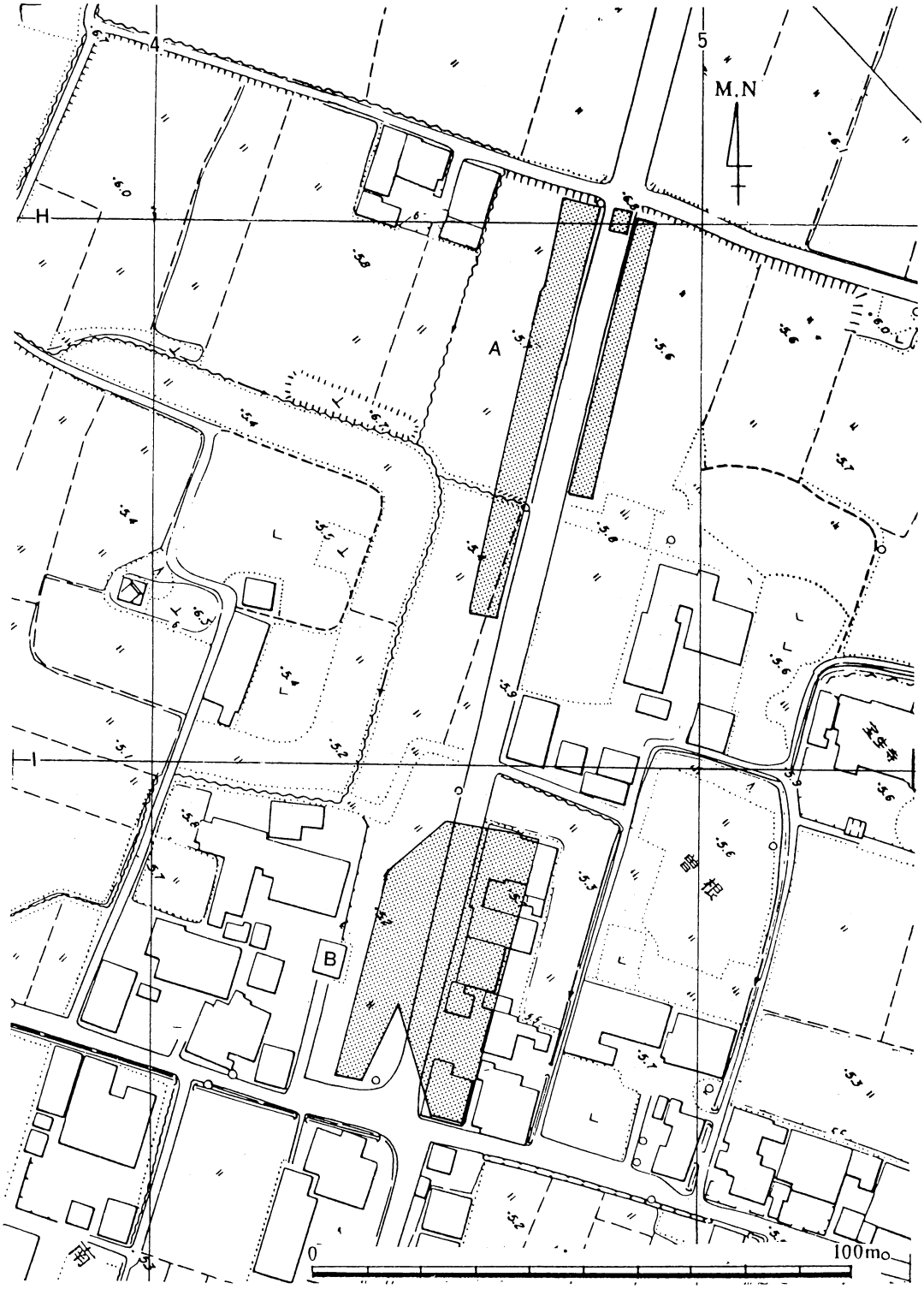
Loc. 48は空港拡張範囲外の南部であるが、調査区の西には、室町～戦国時代に台頭した有力国人である千屋氏の居館とされている千屋城跡が存在しており、千屋城関係の遺構の存在が考えられた。Ａ区の調査では、北端部に堀と考えられるＳＤ１が検出され、千屋城の外堀ではないかと推定された。また、その南部においても、ＳＤ１と同様に堀の一部ではないかと考えられるＳＤ６が検出された。他の遺構としては、土坑と溝、ピットが北半部に検出されたが、土坑は近世及び近～現代のものがほとんどであり、また、溝とピットは時期不明なものが多く、中世の遺構として時期を決定できるものはほとんど存在しなかった。

Ｂ区の調査では、千屋城跡の東に隣接しているため、Ａ区よりさらに千屋城関係の遺構の検出が期待されたが、一部を除き、近～現代の土坑及び時期不明のピットが多く検出された。しかしＳＤ17がＳＤ１・６と同じく堀と考えられる他に、ＳＤ14～16、ＳＫ38など確実に中世と考えられる遺構も存在している。また、掘立柱建物址は、ＳＢ１～８が検出されたが、これらも中世と考えられる。

3．層序と出土遺物

Loc. 48の基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　耕作土
第Ⅱ層　床土
第Ⅲ層　黄褐色粘質土層
第Ⅳ層　明褐色粘質土層



第174図　調査区設定図

第Ⅰ層耕作土は厚さ10cm、第Ⅱ層床土は厚さ５cmを測る。第Ⅲ層黄褐色粘質土は、遺物包含層であり、厚さ５～15cmを測るが、遺物の出土数は少なく、近世～近代の遺物が中心である。第Ⅳ層明褐色粘質土層上面が遺構検出面であり、厚さ約20cmを測る。第Ⅳ層下には暗茶褐色粘質土層、黒褐色粘質土層、茶褐色砂質土層、青灰色砂層などがみられ、地表下約2.3mで基盤の砂礫層がみられた。

第Ⅲ層出土遺物としては、土師質土器杯（１）、鍋（２）、備前擂鉢（３、４）、甕（５）、青磁碗（６～９、11）、伊万里皿（10）、唐津皿（12）、土錘（13～15）がみられ、時期的には15～16世紀と18世紀のものが混在している。

４．遺構と遺物

掘立柱建物址

ＳＢ１

ＳＢ１は、Ｂ区の北端部に位置しており、ＳＢ２と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.69m、桁行3.59mを測る１×２間の南北棟であり、棟方向はＮ－20°－Ｅを示す。柱間距離は、1.64～2.69mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径20～40cmを測る円形および不整形であり、深さは８～32cmを測る。柱痕を残す柱穴は２個存在し、柱痕の直径は８～28cmである。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ１は、ＳＢ２と重複するが、柱穴の切り合いはみられず、新旧関係は不明である。またＳＫ18には切られており、より古いことが判明している。

ＳＢ２

ＳＢ２は、Ｂ区の北端部に位置しており、ＳＢ１と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、２×２間であり、やや南北に長いので南北棟と考えれば、梁間3.62m、桁行3.95mを測り、棟方向はＮ－13°－Ｅを示す。柱間距離は、1.80～2.05mを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径20～48cmを測る円形および方形であり、深さは12～30cmを測る。柱痕を残す柱穴は２個存在し、柱痕の直径は24～26cmである。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ２は、ＳＢ１と重複するが、柱穴の切り合いはみられず、新旧関係は不明である。

ＳＢ３

ＳＢ３は、Ｂ区の北部に位置しておりＳＢ２の南3.6ｍに検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.40ｍ、桁行3.73ｍを測る１×２間の南北棟であり、棟方向はＮ－10°－Ｅを示す。柱間距離は、1.62～2.40ｍを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24㎝前後を測る円形であり、深さは13～25㎝を測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ３は、ＳＫ21と重複するが、切り合いはなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ４

ＳＢ４は、Ｂ区の北部に位置しており、ＳＢ５の北辺と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、１×１間であり、南辺2.64ｍ、西辺2.85ｍを測り、正方形に近いが、わずかに南北に長い。柱間距離は、2.60～2.85ｍを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24㎝前後を測る円形であり、深さは９～36㎝を測る。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿（16、17）がみられる。

ＳＢ４は、ＳＢ５と重複しているが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ５

ＳＢ５は、Ｂ区の中央部に位置しており、ＳＢ４の南に一部重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.93ｍ、桁行7.29ｍを測る２×３間の東西棟であり、棟方向はＮ－80°－Ｗを示す。柱間距離は、1.14～3.38ｍを測り、桁行では西が短く、梁間においても南が短く、よく揃っている。

柱穴は、直径20～38㎝を測る円形及び不整形であり、深さは16～42㎝を測り、ほとんどは30㎝前後である。柱痕を残す柱穴は４個存在し、柱痕の直径は13～15㎝を測る。また切り合いをもつ柱穴は３個存在するが、掘立柱建物址と認められるものはない。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器片が若干みられた。

ＳＢ５は、ＳＢ４・６と重複しているが、柱穴の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ６

ＳＢ６は、Ｂ区の中央部に位置しており、ＳＢ５の南辺と重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.61ｍ、桁行4.33ｍを測る１×２間の南北棟であり、棟方向はＮ－15°－Ｅを

示す。柱間距離は、2.02～2.61ｍを測り、よく揃っている。

柱穴は、直径24～32㎝を測る円形である。深さは12～44㎝を測り、ほとんどは30㎝前後である。柱痕を残す柱穴は１個存在し、柱痕は長径28㎝を測る不整形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ６は、ＳＢ５・７、ＳＫ33と重複している。ＳＢ５・７とは柱穴の切り合いもなく、新旧関係は不明である。また、不明瞭ではあるがＳＫ33により切られており、ＳＢ６がより古いことが判明している。

ＳＢ７

ＳＢ７は、Ｂ区の中央部に位置しており、ＳＢ６と重複してやや南に検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、２×２間であり、やや東西に長いので東西棟と考えれば、梁間3.08ｍ、桁行3.49ｍを測り、棟方向はＮ－78°－Ｗを示す。柱間距離は、1.40～1.95ｍを測り、よく揃っている。また西辺の柱穴が１個検出されなかった。

柱穴は、直径28～40㎝を測る円形および不整形である。深さは20～64㎝を測り、ほとんどは30㎝前後である。柱痕を残す柱穴は１個存在し、柱痕の直径は８㎝を測る。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＢ７は、ＳＢ６、ＳＫ32・33と重複するが、切り合いはなく、新旧関係は不明である。

ＳＢ８

ＳＢ８は、Ｂ区の中央部に位置しており、ＳＢ５～７の西２ｍに検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、梁間2.56ｍ、桁行4.00ｍを測る１×２間の南北棟であり、棟方向はＮ－８°－Ｅを示す。柱間距離は、1.71～2.56ｍを測り、桁行の北がやや短い。

柱穴は、直径34～44㎝を測る円形および不整形である。深さは25～48㎝を測り、ほとんどは30㎝前後である。柱痕を残す柱穴は３個存在し、柱痕の直径は12～18㎝を測る。また切り合いをもつ柱穴は３個存在するが、掘立柱建物址は認められない。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、青磁碗（18）、産地不明の鉢（19）がみられる。

ＳＢ８は、ＳＫ30・31と一部重複するが、埋土の違いは明確ではなく、新旧関係は不明である。

土坑

ＳＫ１

ＳＫ１は、Ａ区の西側調査区北部に位置しており、ＳＤ２の南2.2ｍに単独で検出された。

検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径1.16m、短径0.94m、深さ0.38mを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はN－37°－Wを示す。底面は平坦であり、直上に木片が2点みられた。壁は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物は、産地不明の碗（20）、磁器道士像（21）がみられた。出土遺物及び、底面上の木片などからみるとＳＫ１は近世墓である。

ＳＫ２

ＳＫ２は、Ａ区の西側調査区北部に位置しており、調査区にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径4.98m、短径0.91m、深さ0.35mを測る。平面形は溝状を呈し、長軸方向はN－15°－Eを示す。底面は中央部がやや低く、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ２は、ＳＤ３と重複しており、ＳＤ３を切っているので、より新しいことが判明している。

ＳＫ３

ＳＫ３は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、調査区にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径4.97m、短径1.20m、深さ0.42mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN－18°－Eを示す。底面は、ほぼ平坦である。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は、備前壺（22）、甕（23、24）、青磁皿（25）がみられ、時期的には15世紀と考えられる。

ＳＫ３は、ＳＤ３・５と重複しているが、埋土の違いは不明瞭であり、新旧関係は明らかでない。

ＳＫ４

ＳＫ４は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、ＳＫ２の南10.8mに検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径2.24m、短径0.72m、深さ0.11mを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はN－5°－Eを示す。底面は、平坦であり、3個の小ピットがみられる。断面形は浅い逆台形を呈し、埋土は灰黄色粘質土である。出土遺物は備前甕（26）がみられる。また、単独で検出されており重複する遺構は存在しない。

ＳＫ５

ＳＫ５は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、ＳＫ４の東2.8ｍに単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径2.06ｍ、短径1.71ｍ、深さ0.86ｍを測る。平面形は円形であり、長軸方向はＮ－18°－Ｅを示す。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はみられない。また、単独で検出されており、重複する遺構は存在しない。

ＳＫ６～８

ＳＫ６～８は、Ａ区の東側調査区の北部に位置しており、ＳＫ６・８は調査区の東辺に接し、ＳＫ７はその西に検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ６が、長径2.10ｍ、短径1.60ｍ、深さ0.48ｍ、ＳＫ７が、長径1.95ｍ、短径1.60ｍ、深さ0.10ｍ、ＳＫ８が、長径2.95ｍ、短径1.46ｍ、深さ0.16ｍを測る。平面形は、ＳＫ６が楕円形、ＳＫ７・８は不定形である。長軸方向は、ＳＫ６がＮ－20°－Ｅ、ＳＫ７・８がＮ－13°－Ｅを示す。底面はいずれもほぼ平坦であり、断面形はすべて逆台形である。埋土は、ＳＫ７が灰色粘質土であり、ＳＫ６・８は黄灰色粘質土である。出土遺物は、ＳＫ６から砥石（80）がみられたのみである。

ＳＫ８は、ＳＤ７を切っており、より新しいが、ＳＫ６・７は単独で検出されており、時期は近世以降とも考えられるが不明である。

ＳＫ９～12

ＳＫ９～12は、Ａ区の東側調査区の中央部に位置しており、ＳＫ11・12は調査区の西辺にかかり、いずれも単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ９が、長径2.24ｍ、短径0.36ｍ、深さ0.10ｍ、ＳＫ10は、長径1.15ｍ、短径1.06ｍ、深さ0.12ｍ、ＳＫ11は、長径1.45ｍ、短径1.19ｍ、深さ0.30ｍ、ＳＫ12は、長径1.09ｍ、短径0.91ｍ、深さ0.30ｍを測る。平面形は、ＳＫ９が不整方形、ＳＫ10は円形、ＳＫ11・12は不定形である。長軸方向は、ＳＫ９がＮ－70°－Ｗ、ＳＫ10はＮ－15°－Ｅ、ＳＫ11はＮ－79°－Ｗ、ＳＫ12はＮ－17°－Ｅを示す。底面は、いずれもほぼ平坦であり、中に小ピットが数個みられる。断面形もすべて逆台形である。埋土はＳＫ９～12共に黄灰色粘質土であり、遺物は、ＳＫ９から染付皿（27）、青磁碗（28）、ＳＫ11から備前甕（29、30）がそれぞれ出土し、ＳＫ10・12からの出土遺物はほとんどみられなかった。

ＳＫ13～16

ＳＫ13～16は、Ａ区の東側調査区の中央部南に位置しており、ＳＫ13～15は重複し、ＳＫ16

は調査区の西辺にかかり検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ13が長径1.99ｍ、短径1.55ｍ、深さ0.28ｍ、ＳＫ14は、長径3.08ｍ、短径1.33ｍ、深さ0.24ｍ、ＳＫ15は、長径2.20ｍ、短径1.68ｍ、深さ0.38ｍ、ＳＫ16は、長径2.00ｍ、短径1.65ｍ、深さ0.44ｍを測る。平面形は、ＳＫ13・14は長方形、ＳＫ15・16は不定形である。長軸方向は、ＳＫ13がＮ－70°－Ｗ、ＳＫ14はＮ－18°－Ｅ、ＳＫ16はＮ－17°－Ｅを示すがＳＫ15は不明である。底面はいずれもほぼ平坦であり、断面形は、逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられず、いずれの土坑も時期は不明である。

ＳＫ13～15は重複しており、ＳＫ14は、ＳＫ13・15に切られており、より古いことが判明している。

ＳＫ17～21

ＳＫ17～21は、Ｂ区の北部に位置しており、北より点在し、検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ17が、長径1.10ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.21ｍ、ＳＫ18は、長径2.21ｍ、短径1.80ｍ、深さ0.18ｍ、ＳＫ19は、長径1.66ｍ、短径0.69ｍ、深さ0.18ｍ、ＳＫ20は、長径1.27ｍ、短径は0.80ｍ、深さ0.12ｍ、ＳＫ21は、長径2.33ｍ、短径0.46ｍ、深さ0.16ｍを測る。平面形は、ＳＫ17は円形、ＳＫ18は方形、ＳＫ19・20は不定形、ＳＫ21は溝状である。長軸方向は、ＳＫ17がＮ－23°－Ｅ、ＳＫ18はＮ－24°－Ｅ、ＳＫ19はＮ－25°－Ｅ、ＳＫ20はＮ－21°－Ｅ、ＳＫ21はＮ－72°－Ｗを示す。底面はいずれも平坦であり、断面形は逆台形を呈する。ＳＫ20・21の底面には小ピットがみられる。埋土は灰黄色粘質土であり、出土遺物はほとんどみられず、いずれの土坑も時期は不明である。

ＳＫ18は、ＳＢ１およびＳＫ17も切っており、より新しいことが判明している。

ＳＫ22

ＳＫ22は、Ｂ区の北部に位置しており、ＳＢ３の南に隣接して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径3.56ｍ、短径1.52ｍ、深さ0.49ｍを測る。平面形は長方形であり、長軸方向はＮ－76°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、遺物は、備前擂鉢（31）、唐津系甕（32）、唐津皿（36）、産地不明の壺（34）、伊万里皿（35）、京焼系碗（33）が出土しており、他に砥石（81）と石臼片（82）がみられる。これらの出土遺物により、ＳＫ22の時期は19世紀と考えられる。

ＳＫ23～26

ＳＫ23～26は、Ｂ区の北部に点在しており、それぞれ単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上

面である。

規模はＳＫ23が、長径1.61ｍ、短径1.36ｍ、深さ0.61ｍ、ＳＫ24は、長径1.24ｍ、短径0.98ｍ、深さ８㎝、ＳＫ25は、長径1.43ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.16ｍ、ＳＫ26は、長径1.52ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.22ｍを測る。平面形はすべて長方形である。長軸方向は、ＳＫ23がＮ－７°－Ｅ、ＳＫ24はＮ－81°－Ｗ、ＳＫ25はＮ－20°－Ｅ、ＳＫ26はＮ－79°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は、ＳＫ23が深い逆台形であり、ＳＫ24～26は浅い逆台形を呈する。また、ＳＫ24の底面には小ピットが３個みられ、ＳＫ25・26は、西半部が県道にかかり検出されなかった。埋土は黄灰色粘質土であり、遺物は、ＳＫ23から伊万里碗（37）、ＳＫ26から備前擂鉢（38）がそれぞれ出土し、時期は17～18世紀と考えられる。また、石製品としてはＳＫ24からは石錐（83）が、ＳＫ26からは線刻籠字で「鳥」と考えられる銘をもつ砥石（84）がそれぞれ出土している。

ＳＫ27・28

ＳＫ27・28は、Ｂ区の東部に位置しており、ＳＫ28は調査区外に延びている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ27が、長径2.66ｍ、短径2.30ｍ、深さ0.58ｍ、ＳＫ28は、長径3.98ｍ、短径2.16ｍ、深さ0.24ｍを測る。平面形はいずれも楕円形であり、長軸方向は、ＳＫ27がＮ－15°－Ｅ、ＳＫ28はＮ－２°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は、ＳＫ27が箱形、ＳＫ28は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土に黄褐色と茶褐色の粘質土のブロックを含んでいる。遺物は、ＳＫ27から京焼系碗（39）と伊万里碗（40）、石臼（85）、ＳＫ28からは伊万里皿（41）、備前壺（42）、石臼（86）がみられた。他にも近代の陶磁器の細片が含まれており、近代の土坑と考えられる。

ＳＫ28は、ＳＫ27に切られており、より古いことが判明しているが、時期差はあまりないとみられる。

ＳＫ29～34

ＳＫ29～34は、Ｂ区の中央部に点在しており、それぞれ単独で検出されている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ29が、長径1.46ｍ、短径0.82ｍ、深さ0.10ｍ、ＳＫ30は、長径1.86ｍ、短径1.29ｍ、深さ0.47ｍ、ＳＫ31は、長径1.82ｍ、短径1.64ｍ、深さ0.75ｍ、ＳＫ32は、長径2.96ｍ、短径1.48ｍ、深さ0.45ｍ、ＳＫ33は、長径1.29ｍ、短径0.95ｍ、深さ0.37ｍ、ＳＫ34は、長径1.78ｍ、短径1.32ｍ、深さ0.15ｍを測る。平面形は、いずれも方形および長方形であり、長軸方向は、ＳＫ29がＮ－24°－Ｅ、ＳＫ30はＮ－75°－Ｗ、ＳＫ31はＮ－77°－Ｗ、ＳＫ32はＮ－19°－Ｅ、ＳＫ33はＮ－72°－Ｗ、ＳＫ34はＮ－33°－Ｅを示す。底面は平坦であり、断面形は、ＳＫ29・34が逆台形、ＳＫ30～33は壁が垂直に近く立ち上がり、箱形を呈する。埋土は、ＳＫ29・34が灰色粘質土であり、ＳＫ30～33は黄灰色粘質土である。遺物は、ＳＫ34から木製の玉製品（88）

が出土している他にはほとんどみられず、近世～近代の陶磁片が若干出土しているのみであり、その時期の土坑と考えられる。

ＳＫ30・31は、ＳＢ８の柱穴を切っており、より新しく、ＳＫ32・33は、ＳＢ６・７と重複して切っているので、より新しいことが判明している。

ＳＫ35～37

ＳＫ35～37は、Ｂ区の西部に位置しており、重複して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ35が、長径1.40ｍ、短径0.82ｍ、深さ７㎝、ＳＫ36は、長径0.93ｍ、短径0.74ｍ、深さ0.17ｍ、ＳＫ37は、長径2.50ｍ、短径1.56ｍ、深さ0.28ｍを測る。平面形は、ＳＫ35が方形、ＳＫ36は円形、ＳＫ37は不定形であり、長軸方向は、ＳＫ35がＮ－22°－Ｅ、ＳＫ36はＮ－29°－Ｅ、ＳＫ37はＮ－61°－Ｗを示す。底面はすべて平坦であり、断面形も逆台形である。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＫ35～37は重複しているが、埋土の違いはみられず、新旧関係は不明である。

ＳＫ38

ＳＫ38は、Ｂ区の西部に位置しており、ＳＫ35～37の南に隣接し、調査区外に延びている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径5.96ｍ、短径1.99ｍ、深さ0.45ｍを測る。平面形は楕円形であり、長軸方向はＮ－11°－Ｅを示す。底面はわずかな傾斜をもち、壁も緩やかに立ち上がり、断面形は皿形を呈する。中央部には、南北に区切るように、長径20～30㎝の楕円形の自然石を１～２段に積んでおり、北部および北壁にも、同様に自然石がみられる。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は、底面直上に、瀬戸天目茶碗（46）がみられ、埋土上面からは、備前甕（45）、京焼系碗（47）、唐津系皿（48）、肥前系碗（49）が出土している。時期的には、埋土と底面直上の天目茶碗により、15世紀と考えられ、水に関連する機能をもっていたのではないかと推定される。

ＳＫ39

ＳＫ39は、Ｂ区の南西部に位置しており、ＳＫ38の南東1.6ｍに、単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、長径2.80ｍ、短径1.05ｍ、深さ0.18ｍを測る。平面形は不定形であり、長軸方向はＮ－51°－Ｅを示す。底面は平坦であり、断面形は浅い逆台形を呈する。北東部は、県道下にあたり、検出されなかった。埋土は灰色粘質土である。出土遺物はみられず、ＳＫ39の時期は不明である。

ＳＫ40～45

ＳＫ40～45は、Ｂ区の南部に位置しており、重複し、集中して検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、ＳＫ40が、長径3.38ｍ、短径1.46ｍ、深さ0.49ｍ、ＳＫ41は、長径4.02ｍ、短径3.50ｍ、深さ0.36ｍ、ＳＫ42は、長径1,64ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.40ｍ、ＳＫ43は、長径5.13ｍ、短径2.17ｍ、深さ0.36ｍ、ＳＫ44は、長径4.32ｍ、短径3.96ｍ、深さ0.45ｍ、ＳＫ45は、長径2.76ｍ、短径2.33ｍ、深さ0.28ｍを測る。平面形は、ＳＫ40・41・45は、方形、ＳＫ42は円形、ＳＫ43は長方形、ＳＫ44は不定形である。長軸方向は、ＳＫ40がＮ－８°－Ｅ、ＳＫ41はＮ－14°－Ｅ、ＳＫ42はＮ－77°－Ｗ、ＳＫ43はＮ－72°－Ｗ、ＳＫ44はＮ－８°－Ｅ、ＳＫ45はＮ－10°－Ｅを示す。底面はいずれも平坦であり、断面形は、ＳＫ40・42～45は逆台形、ＳＫ41は箱形を呈する。埋土は灰色粘質土に黄褐色と黒褐色粘質土のブロックが混入している。遺物は、ＳＫ41から唐津系皿（50）と土錘（51）、ＳＫ44からは備前甕（52）が出土しているが、近代の陶磁器片も出土しており、埋土からみても、いずれも時期は近代と考えられる。

溝

ＳＤ１

ＳＤ１は、Ａ区の北部に位置しており、東と西、中央の県道部と３ケ所に分かれて検出された東西方向の堀と考えられる溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、幅約5.20ｍ、深さ約2.50ｍを測り、検出長は西から、6.12ｍ、3.65ｍ、3.08ｍである。基底部の幅は0.40～0.63ｍと狭く、壁の下半分は傾斜がきつくＶ字状をなし、上半部は緩やかな傾斜となる。北壁は、調査区外に延びており、基底部から約１ｍの部分が検出された。埋土は色調により５～６層に分層されたが、暗灰色から黒灰色の粘土であり、一部に間層として砂層がみられた。出土遺物は、土師質土器鍋（53）、備前甕（54）がみられ、時期は15世紀と考えられる。また、木製品として、木札（89）、小形槽状木器（90）、曲物底部（91）、異形木器（92、93）、火鑽杵（94）、炭化棒（95）、切口をもつ丸棒（96～99）、杭（100、101）が出土している。

ＳＤ１は、検出された位置からみれば、千屋城の外堀と推定されるが、検出部分は一部であり、不明な点が多く、断定することはできない。

ＳＤ２

ＳＤ２は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、ＳＤ１の南1.9ｍに検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長6.40ｍ、幅1.36ｍ、深さ0.21ｍを測り、方向はＮ－82°－Ｗを示す。底面は

平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＤ２は単独で検出されており、重複する遺構もなく、時期も不明である。

ＳＤ３

ＳＤ３は、Ａ区の西側調査区に位置しており、ＳＫ２・３の間に検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長2.83ｍ、幅0.56ｍ、深さ0.12ｍを測り、方向はＮ－80°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器片が若干みられた。

ＳＤ３は、ＳＫ２・３と重複しており、ＳＫ２には切られており、より古いが、ＳＫ３については切り合いが明確ではなく、新旧関係は不明である。また、ＳＤ３は、ＳＤ２と同じ方向性を示すので、関連性をもつ溝かもしれない。

ＳＤ４

ＳＤ４は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、ＳＤ３の南3.45ｍに検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長4.86ｍ、幅0.62ｍ、深さ0.17ｍを測る。方向はＮ－80°－Ｗを示し、ＳＤ２・３と同じ方向をもっている。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿（55）がみられ、時期は15～16世紀と考えられる。

ＳＤ４は、ＳＤ５と重複しており、切られているので、より古いことが判明している。

ＳＤ５

ＳＤ５は、Ａ区の西側調査区の北部に位置しており、ＳＤ４と直交し、検出された、南北方向の溝である。

規模は、検出長6.10ｍ、幅0.82ｍ、深さ0.43ｍを測り、方向はＮ－21°－Ｅを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。北端部はＳＫ３と重複し、東へ曲がり、延びており、南端部はそのままで終わっている。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＤ５は、ＳＤ４を切っており、15世紀以降の時期と考えられる。また、ＳＫ３と重複するが新旧関係は不明である。

ＳＤ６

ＳＤ６は、Ａ区の西側調査区の南部に位置しており、単独で検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、幅4.65m、深さ3.32mを測り、検出長は、東西方向部分は4.12mを測り、南壁が西端部で南へ直角に曲がり、9.02mほど延びた後、西南へ曲がりさらに延びている。基底部の幅は0.42mと非常に狭く、北壁は、基底部から急角度で立ち上がり、上部は緩やかな傾斜となる。南壁から東壁はきわめて急傾斜で立ち上がり、断面形は、鋭いV字形を呈する。埋土は青灰色から暗灰色の粘土であり、基底部上に木葉がみられた。出土遺物は、土師質土器皿（56～58)、須恵質土器甕（59)、土錘（60）がみられ、時期はやはり15世紀と考えられる。

ＳＤ６は、規模、埋土などから堀の一部ではないかと考えられ、千屋城に関係するものと考えられる。また、基底部上の埋土中から木葉が出土していることから、空堀の状態にあったと推定される。

ＳＤ７

ＳＤ７は、Ａ区の東側調査区の北部に位置しており、ＳＫ８と重複して検出された。東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長1.87m、幅0.24m、深さ６cmを測り、方向はＮ－79°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は白磁皿（61）が出土しており、時期的には15世紀と考えられ、ＳＫ８に切られている。

ＳＤ８

ＳＤ８は、Ａ区の東側調査区の南部に位置しており、ＳＤ９と平行して検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長6.43m、幅1.04m、深さ0.11mを測り、方向はＮ－85°－Ｗを示す。東端部で２条に分かれ、北の溝は幅0.56m、南の溝は幅0.35mを測り、深さの変化はみられない。底面は平坦であり、断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

ＳＤ９

ＳＤ９は、Ａ区の東側調査区の南部に位置しており、ＳＤ８の南1.20mに検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長6.41m、幅1.12m、深さ0.18mを測り、方向はＮ－80°－Ｗを示す。東端部で２条に分かれ、北の溝は幅0.36m、南の溝は幅0.33mを測り、深さの変化はみられない。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は備前甕底部（62）がみられ、時期は不明確ではあるが15世紀と考えられる。

ＳＤ10

ＳＤ10は、Ａ区の東側調査区の南部に位置しており、ＳＤ９の南約10ｍに検出された、北西から南東方向への溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長7.63ｍ、幅1.49ｍ、深さ0.19ｍを測り、方向はＮ－38°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は暗灰色砂質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

ＳＤ11

ＳＤ11は、Ｂ区の北部に位置している。北東から南西方向への溝であり、北部は調査区外に延びている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長9.63ｍ、幅0.64ｍ、深さ0.11ｍを測り、方向はＮ－62°－Ｅを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられず、時期は不明である。

ＳＤ12

ＳＤ12は、Ｂ区の北部に位置しており、ＳＤ11の東７ｍに検出された、Ｌ字形の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、幅0.64ｍ、深さ0.21ｍを測り、検出長は、南北方向4.83ｍ、東西方向4.02ｍである。方向は南北部分でＮ－８°－Ｅを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質土であり、出土遺物はみられなかった。

ＳＤ12は、ＳＢ１・２を切っており、より新しいことが判明しているが、ＳＫ18については、埋土の違いも明確ではなく、新旧関係は不明である。

ＳＤ13

ＳＤ13は、Ｂ区の西部に位置しており、調査区外に延びている。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長3.41ｍ、幅0.76ｍ、深さ0.18ｍを測り、方向はＮ－10°－Ｅを示す。底面には小ピットと落ち込みがみられ、断面形は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物はみられず、ＳＤ13の時期は不明である。

ＳＤ14

ＳＤ14は、Ｂ区の南部に位置しており、ＳＤ15・16と平行して検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長4.68ｍ、幅1.83ｍ、深さ0.32ｍを測り、方向はＮ－73°－Ｗを示す。底面は平坦であり、南が最も深く、北は浅い溝に分かれている。断面形は逆台形であり、埋土は灰褐

色粘質土である。出土遺物は土師質土器皿（63～73）が床面上にみられ、時期的には15世紀と考えられる。

ＳＤ15

ＳＤ15は、Ｂ区の南部に位置しており、ＳＤ14の南0.83ｍに検出された、東西方向の溝である。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長4.10ｍ、幅0.62ｍ、深さ0.56ｍを測り、方向はＮ－71°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は深い逆台形を呈し、東端部はそのまま終わっている。埋土は灰色粘質土であり、出土遺物は土師質土器皿（74、75）がみられ、時期は15世紀と考えられる。

ＳＤ16

ＳＤ16は、Ｂ区の南東部に位置しており、ＳＫ45の南3.63ｍに検出された。検出面は第Ⅳ層上面である。

規模は、検出長4.12ｍ、幅4.20ｍ、深さ1.84ｍを測り、方向はＮ－84°－Ｗを示す。底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈する。西端部はそのまま終わっており、東端部は東へ延びているが、人家が残されており調査不可能であった。埋土は青灰色から黒灰色の粘土であり、ＳＤ１・６の埋土に類似している。出土遺物はみられなかった。

ＳＤ16は、検出された位置、埋土からみれば、堀と考えられ、やはり、千屋城の南の外堀の一部であろうと考えられる。

ピット

Ｐ１

Ｐ１は、Ｂ区の中央部に位置しており、第Ⅳ層上面に検出された。規模は、直径21㎝、深さ18㎝を測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は土師質土器杯（76）と砥石（87）がみられた。

Ｐ２

Ｐ２は、Ｂ区の中央部に位置しており、第Ⅳ層上面に検出された。規模は、直径32㎝、深さ21㎝を測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は青磁碗（77）がみられた。

Ｐ３

Ｐ３は、Ｂ区の中央部に位置しており、第Ⅳ層上面に検出された。規模は、直径31㎝、深さ25㎝を測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は青磁皿（78）がみられた。

P 4

P 4 は、B区の中央部に位置しており、第Ⅳ層上面に検出された。規模は、直径28cm、深さ12cmを測り、円形である。埋土は灰褐色粘質土であり、出土遺物は備前壺（79）がみられた。

5. まとめ

Loc. 48で検出された遺構は、掘立柱建物址８棟、土坑45基、溝16条、多数のピットであるが、出土遺物からみれば、15世紀と考えられる遺構と、近世及び近～現代の遺構に大別される。15世紀を中心とする遺構は、ＳＫ３・38、ＳＤ１・６・７・９・14～16であり、掘立柱建物址は、ＳＢ４が15世紀ではないかと考えられる以外は不明である。

溝の中でもＳＤ１・６・17は、千屋城の堀と考えられ、千屋城の存続期間及び範囲を知る上で貴重な資料とみられる。千屋城址は、県道の西75ｍに詰が位置しており、その南には土塁の一部が残されている。この土塁を東へ延長したライン上にＳＤ16が検出されており、南の外堀と考えられる。ＳＤ16は、東へは延びているが、西はそのまま消滅しており、この部分が城の虎口であった可能性も充分存する。また、ＳＤ１の西延長上、県道の西には、幅３ｍ、長さ10ｍほどの土塁状の地形がみられ、ここも北の外堀を形成する可能性をもつ。

今回の調査では、15世紀と考えられる遺構は少なく、千屋城跡と関連をもつ遺構としては堀が存在するが、他の遺構については不明な点が多い。土坑は大半が近～現代であり、掘立柱建物址は時期不明のものが多いが、やはり15世紀の千屋城関係の遺構ではないかと考えられる。

第23表　掘立柱建物址計測表

挿図番号	遺構番号	規模			棟方向	面積 (m²)	備考
		梁(間)×桁(間)	梁 × 桁 (m)	柱間距離 (m)			
第175図	SB 1	1 × 2	2.69 × 3.59	1.64 ～ 2.69	N－20°－E	9.7	
〃	SB 2	2 × 2	3.62 × 3.95	1.80 ～ 2.05	N－13°－E	14.3	
第176図	SB 3	1 × 2	2.40 × 3.73	1.62 ～ 2.40	N－10°－E	9.0	
〃	SB 4	1 × 1	2.64 × 2.85	2.60 ～ 2.85	――	7.5	
第177図	SB 5	2 × 3	2.93 × 7.29	1.14 ～ 3.38	N－80°－W	21.4	
〃	SB 6	1 × 2	2.61 × 4.33	2.02 ～ 2.61	N－15°－E	11.3	
第178図	SB 7	2 × 2	3.08 × 3.49	1.40 ～ 1.95	N－78°－W	10.7	
〃	SB 8	1 × 2	2.56 × 4.00	1.71 ～ 2.56	N－ 8°－E	10.2	

第24表　土坑計測表

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第179図	SK 1	楕円形	1.16	0.94	0.38	N－37°－W	箱形	
〃	SK 2	溝状	4.98	0.91	0.35	N－15°－E	逆台形	
〃	SK 3	不定形	4.97	1.20	0.42	N－18°－E	〃	
〃	SK 4	〃	2.24	0.72	0.11	N－ 5°－E	〃	
第180図	SK 5	円形	2.06	1.71	0.86	N－18°－E	箱形	
〃	SK 6	楕円形	2.10	1.60	0.48	N－20°－E	逆台形	
〃	SK 7	不定形	1.95	1.60	0.10	N－13°－E	〃	
〃	SK 8	〃	2.95	1.46	0.16	N－13°－E	〃	
――	SK 9	不整方形	2.24	0.36	0.10	N－70°－W	〃	
第181図	SK 10	円形	1.15	1.06	0.12	N－15°－E	〃	
〃	SK 11	不定形	1.45	1.19	0.30	N－79°－W	〃	
〃	SK 12	〃	1.09	0.91	0.30	N－17°－E	〃	
〃	SK 13	長方形	1.99	1.55	0.28	N－70°－W	〃	
〃	SK 14	〃	3.08	1.33	0.24	N－18°－E	〃	
〃	SK 15	不定形	2.20	1.68	0.38	――	〃	
第 182図	SK 16	〃	2.00	1.65	0.44	N－17°－E	〃	
〃	SK 17	円形	1.10	1.00	0.21	N－23°－E	〃	
〃	SK 18	方形	2.21	1.80	0.18	N－24°－E	〃	

挿図番号	遺構番号	平面形	規模 (m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第182図	SK 19	不定形	1.66	0.69	0.18	N－25°－E	逆台形	
〃	SK 20	〃	1.27	0.80	0.12	N－21°－E	〃	
〃	SK 21	溝状	2.33	0.46	0.16	N－72°－W	〃	
第183図	SK 22	長方形	3.56	1.52	0.49	N－76°－W	〃	
〃	SK 23	〃	1.61	1.36	0.61	N－ 7°－E	〃	
〃	SK 24	〃	1.24	0.98	0.08	N－81°－W	〃	
〃	SK 25	〃	1.43	1.10	0.16	N－20°－E	〃	
〃	SK 26	〃	1.52	0.90	0.22	N－79°－W	〃	
第184図	SK 27	楕円形	2.66	2.30	0.58	N－15°－E	箱形	
〃	SK 28	〃	3.98	2.16	0.24	N－ 2°－W	逆台形	
〃	SK 29	方形	1.46	0.82	0.10	N－24°－E	〃	
〃	SK 30	〃	1.86	1.29	0.47	N－75°－W	箱形	
〃	SK 31	〃	1.82	1.64	0.75	N－77°－W	〃	
第185図	SK 32	長方形	2.96	1.48	0.45	N－19°－E	〃	
〃	SK 33	方形	1.29	0.95	0.37	N－72°－W	〃	
〃	SK 34	〃	1.78	1.32	0.45	N－33°－E	逆台形	
〃	SK 35	〃	1.40	0.82	0.07	N－22°－E	〃	
〃	SK 36	円形	0.93	0.74	0.17	N－29°－E	〃	
〃	SK 37	不定形	2.50	1.56	0.28	N－61°－W	〃	
第186図	SK 38	楕円形	5.96	1.99	0.45	N－11°－E	皿形	
〃	SK 39	不定形	2.80	1.05	0.18	N－51°－E	逆台形	
第187図	SK 40	方形	3.38	1.46	0.49	N－ 8°－E	〃	
〃	SK 41	〃	4.02	3.50	0.36	N－14°－E	箱形	
第188図	SK 42	円形	1.64	1.40	0.40	N－77°－W	逆台形	
〃	SK 43	長方形	5.13	2.17	0.36	N－72°－W	〃	
第189図	SK 44	不定形	4.32	3.96	0.45	N－ 8°－E	〃	
〃	SK 45	方形	2.76	2.33	0.28	N－10°－E	〃	

第25表　包含層出土土器観察表

挿図番号	層位	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
1	第Ⅲ層	土師質土器 杯	12.1 3.9 —— 5.0	体部は直線的に外反し、口縁端部は丸みをもつ。底部は上げ底状。	内外面共ロクロナデ調整。 内面にロクロ目痕。	
2	〃	土師質土器 鍋	24.0 (4.7) —— ——	口縁部は内傾し、端部は丸みをもつ。	内外面共横方向のナデ調整。	
3	〃	擂鉢	25.4 (4.5) —— ——	口縁部は直立し、端部は段をなす。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
4	〃	〃	33.0 (6.4) —— ——	口縁部は直立し、端部はやや内傾する。	〃	〃
5	〃	甕	34.8 (6.4) —— ——	口縁部はやや内傾する。端部は丸みをもつ。	〃	〃
6	〃	青磁 碗	15.0 (3.3) —— ——	口縁端は丸みをもつ。	外面に、形くずれの雷文帯をもつ。 全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。 緑色釉。
7	〃	〃	16.6 (4.5) —— ——	〃	外面に細蓮弁文。 全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。 淡緑色釉。
8	〃	〃	11.6 (4.5) —— ——	体部は、内湾する。	外面に細蓮弁文。	胎土、灰色。 緑色釉。
9	〃	〃	14.8 (3.0) —— ——	口縁端部は外反する。		〃
10	〃	染付 皿	—— (1.7) —— 5.6	高台内の削りが深い。	見込蛇ノ目釉ハギ。 高台外面に2条の界線をもつ。	胎土、灰白色。 外底面に「大」の黒書銘。 伊万里焼。
11	〃	青磁 碗	—— (1.9) —— 4.6	〃	見込蛇ノ目釉ハギ。 高台内無釉。	
12	〃	皿	—— (1.6) —— 4.2	高台内の削りが浅い。 底部片。	糸切り底。	胎土、淡赤褐色。 灰白色釉。 唐津焼。
13	〃	土錘	全長 5.9 径 1.9 重量(g) 13.9	両端は欠損。	不明。	
14	〃	〃	全長(2.4) 径 1.5 重量(g) 4.6	大きく欠損する。	〃	
15	〃	〃	全長(3.3) 径 1.8 重量(g) 7.5	〃	〃	

第26表　遺構出土土器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
16	SB 4	土師質土器 皿	13.2 (2.9) —— ——	口縁部は肥厚する。	内外面共ナデ調整。	
17	〃	〃	15.2 (2.7) —— ——	口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸みをもつ。	内外面共ナデ調整。 口縁部内外面に黒斑有り。	
18	SB 8	青磁 碗	—— (1.3) —— 6.8	高台内の削りが浅い。	外底底面、ロクロナデ調整。	淡青灰色。
19	〃	鉢	20.8 (4.1) —— ——	直立する体部に、やや外傾する玉縁状の口縁部をもつ。	内外面共ロクロナデ調整。	陶器。
20	SK 1	染付 碗	8.0 4.7 —— 2.9	体部は内湾する。	外面に、菊花を表わすコンニャク判が3ケ所施文される。	
21	〃	青磁 人形	全長 5.2 全幅 3.4 厚 2.1	道師像で、結跏趺坐の形をとる。上体は右に傾く。	背面下半から底面にかけて穿孔する。 外面には自然釉付着。	青白色釉。
22	SK 3	壺	—— (3.7) —— 7.0	平坦な底部に、内湾する体部をもつ。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
23	〃	甕	—— (10.5) —— 25.0	体部は厚みを持つ。	外底面、ヘラ削り調整。	〃
24	〃	〃	—— (4.7) —— 33.2	平底。	内外面共ロクロナデ調整。	〃
25	〃	青磁 輪花皿	12.2 (2.4) —— ——	口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。	全面に貫入が入る。	胎土、淡灰白色。 淡緑色釉。
26	SK 4	甕	31.2 (5.1) —— ——	口縁部は内傾する。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
27	SK 9	染付 皿	—— (1.8) —— 4.4	高台内の削りが深い。	内面に染付。 貫入を持つ。	胎土、茶白色。
28	〃	青磁 碗	12.8 (6.1) —— ——	内湾する体部から、口縁部が直立状に立ち上がる。	全面に貫入がはいる。	胎土、灰白色。 淡緑色釉。
29	SK 11	甕	40.0 (4.5) —— ——	口縁端部の破片。	口縁端部は、粘土を外側へ折り返す。	備前焼。
30	〃	〃	17.4 (2.6) —— ——	やや外傾する口縁端部をもつ。	内外面共ロクロナデ調整。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
31	SK 22	擂鉢	37.2 (6.6) —— ——	口縁部は直立する。	内外面にロクロナデ調整。	備前焼。
32	〃	甕	30.4 (13.3) —— ——	口縁端部は肥厚し、平坦面をもつ。	内外面ともロクロナデ調整。	唐津焼。
33	〃	碗	—— (6.7) —— 4.9	高台内の削りが深い。体部は直立する。	外面にロクロ目痕を残す。	
34	〃	青磁細首壺	—— (9.0) 11.7 5.0	体部上半は薄い。	内面にロクロ目痕。	緑灰色釉。
35	〃	染付皿	14.0 3.0 —— 7.0	高台端はとがりぎみ。 高台高は低い。	内面底部に五弁花の印花文。見込蛇ノ目釉ハギ。	淡白青色釉に、淡青色の染付。
36	〃	皿	—— (1.8) —— 4.0	底部の破片。	内面底部に重ね焼痕。	唐津焼。
37	SK 23	染付碗	—— (3.6) —— 5.2	高台端部は丸みをもつ。	高台外面と体部下半に2条の界線。	胎土、淡柴褐色。淡青緑色釉。
38	SK 26	擂鉢	28.0 (9.8) —— ——	口縁部はやや内傾し、端部は丸みをもつ。	内面に細い条線をもつ。	備前焼。
39	SK 27	碗	—— (5.8) —— 4.2	高台内の削りが深い。	体部はやや内湾する。	胎土、淡白黄色。淡黄茶色釉。
40	〃	染付碗	—— (2.8) —— 5.3	底部の破片。	高台外面に2条の界線をもつ。	伊万里焼。
41	SK 28	皿	13.0 (2.0) —— ——	口縁部の破片。 口縁端部は外反する。	内外面共、ロクロナデ調整。	
42	〃	壺	12.2 (4.3) —— ——	口縁端部は丸みをもつ。	外面胴部上半に波状文。 内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
43	SK 31	土師質土器皿	13.8 3.6 —— 5.0	口縁部は、やや肥厚する。	内外面共、横方向のナデ調整を施す。	
44	SK 38	甕	—— (5.6) —— 7.5	高台の高さは低い。	高台端部を削る。	唐津焼。
45	〃	〃	—— (5.9) —— 39.7	底部の破片。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態	文様・手法	備考
46	SK 38	天目茶碗	— (5.8) — 4.2	高台と体部の境が明瞭。	外面に施釉。	胎土、白灰色。瀬戸焼。
47	〃	碗	— (4.5) — 4.8	体部は内湾する。	内外面共ロクロナデ調整。	
48	〃	皿	— (2.5) — 4.0	体部は薄い。	内面に胎土目。	唐津焼。
49	〃	碗	— (2.0) — 6.1	底部の破片。 高台端部はとがりぎみ。	高台内を深く削る。 高台外面に1条の界線。	
50	SK 41	皿	— (1.4) — 4.5	底部の破片。 高台高は低い。	内外面共ロクロナデ調整。	唐津焼。
51	〃	土錘	全長(2.3) 径 1.4 重量 3.0	片側を欠損する。 全体に丸みをもつ。		
52	SK 44	甕	26.6 (5.4) — —	口縁部はやや内傾する。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
53	SD 1	土師質土器 鍋	18.8 (4.3) — —	口縁部は内傾し、端部は面をもつ。	口縁部下半に、断面三角形の突帯をもつ。	
54	〃	壺	27.4 (6.8) — —	口縁部は、体部上端を外側へ折り返して形成する。	内外面共横方向のナデ調整。	備前焼。
55	SD 4	土師質土器 皿	14.0 3.0 — —	口縁部はやや肥厚する。	口縁端部に面をもつ。	
56	SD 6	〃	11.2 2.2 — —	口縁部は厚みをもつ。 底部は薄い。	内外面共ロクロナデ調整。	
57	〃	〃	13.1 3.7 — 6.0	体部は内湾し、端部は肥厚する。	〃	
58	〃	〃	16.2 (3.3) — —	口縁端部はやや外反する。	〃	
59	〃	須恵質土器 甕	— (4.0) — 10.0	底部の破片。 平底。	内外面に横方向のナデ調整がある。	
60	〃	土錘	全長 3.4 径 1.2 重量 2.6g	不整形な体部をもつ。		

挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
61	SD 7	白磁 皿	13.8 3.3 —— 8.6	口縁部は直線的に外反し、端部は面をもつ。	外面に施釉。	白色釉。
62	SD 9	甕	—— (5.3) —— 25.2	底部の破片。 平底。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。
63	SD 14	土師質土器 皿	13.0 4.2 —— 5.0	口縁端部は肥厚する。底部は薄い。	〃	
64	〃	〃	13.2 (3.2) —— ——	体部は直線的に外反する。	〃	
65	〃	〃	13.4 3.2 —— 5.5	口縁部は肥厚する。	〃	
66	〃	〃	15.2 3.1 —— 9.2	口縁端部はやや外反する。	口縁端部に強いヨコナデ調整を施す。	
67	〃	〃	14.4 3.3 —— 5.0	〃	内外面に指頭圧痕をもつ。	
68	〃	〃	14.6 3.2 —— ——	口縁端部は肥厚する。	内外面共ロクロナデ調整。	
69	〃	〃	13.7 4.1 —— 7.0	〃	〃	
70	〃	〃	14.5 3.8 —— 7.2	体部下半は薄く、口縁端部は肥厚する。	〃	
71	〃	〃	15.1 3.6 —— ——	口縁端部はやや外反する。	〃	
72	〃	〃	14.8 3.5 —— ——	〃	口縁端部に強いヨコナデ調整を施す。	
73	〃	〃	14.3 (3.8) —— ——	〃	〃	
74	SD 15	〃	12.1 2.0 —— 6.0	器高は低く、口縁部は肥厚する。	〃	
75	〃	〃	16.0 (2.7) —— ——	口縁部はやや外反する。	内外面共、ロクロナデ調整を施す。	

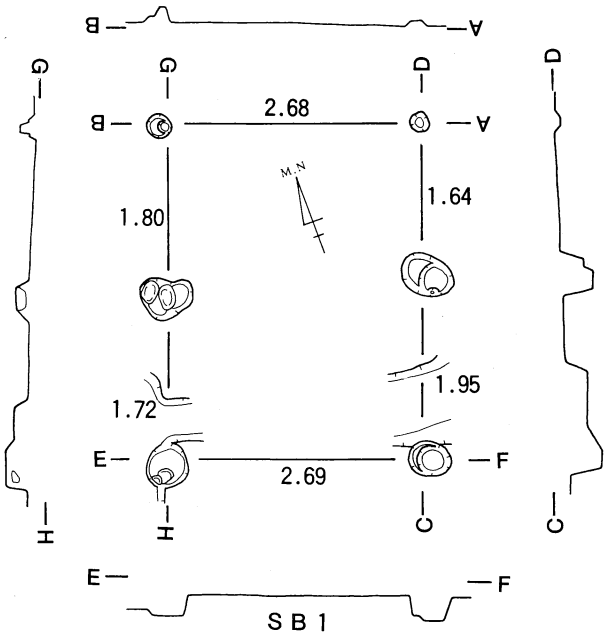
挿図番号	遺構番号	器種	法量(cm) 口径 / 器高 / 胴径 / 底径	形態	文様・手法	備考
76	P 1	土師質土器 杯	9.4 / 3.8 / —— / 4.9	平底で、体部は内湾する。	内外面共ロクロナデ調整。	
77	P 2	青磁 碗	—— / (2.4) / —— / 5.3	碗底部。	見込に「惟」の字が印刻される。全面に貫入がみられる。	胎土、灰色。緑色釉。外底面、蛇ノ目釉ハギ。
78	P 3	青磁 輪花皿	10.5 / (2.1) / —— / ——	口縁部は大きく外反する。端部は丸い。波状口縁。	全面に貫入がはいる。	胎土、灰色。緑色釉。
79	P 4	壺	4.0 / (1.5) / —— / ——	小壺。口縁端部は短く外反する。	内外面共ロクロナデ調整。	備前焼。

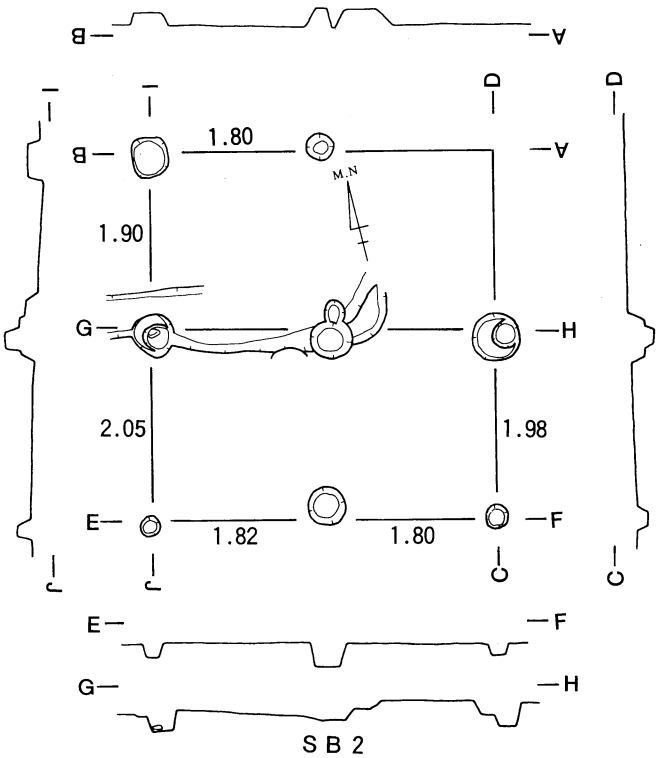
第27表　遺構出土石器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 / 最大幅 / 最大厚 / 重量	材質	特徴	備考
80	SK 6	砥石	13.3 / 8.8 / 3.1 / 543.0	砂岩	使用面は、3面にみられる。使用痕をもつ。	
81	SK 22	〃	10.8 / 5.4 / 1.4 / 83.8	頁岩	細線状の使用痕がみられる。	
82	〃	石臼	9.7 / 5.0 / 3.5 / 253.0	砂岩	刻線が残る。	
83	SK 24	石錘	13.2 / 7.4 / 2.7 / 403.0	〃	楕円状の河原石の、中央部両端を打ち欠く。	
84	SK 26	石製品	4.5 / 5.2 / 1.6 / 52.3	泥岩	曲線状の刻線が4本認められる。「鳥」のくずし文字を刻む。	
85	SK 27	石臼	21.0 / 14.5 / 7.2 / 3400.0	砂岩	片面は、熱変化している。	
86	SK 28	〃	14.3 / 12.1 / 6.2 / 1545.0	〃	引き臼の破片。7本の刻線がみられる。	
87	〃	砥石	4.1 / 2.9 / 0.7 / 10.6	安山岩	細線の研摩痕が多数みられる。	

第28表　遺構出土木器観察表

挿図番号	遺構番号	器種	計測値(cm, g) 最大長 最大幅 最大厚 重量	材質	特徴	備考
88	SK 34	不明	直径5.3 —— —— 5.5	不明	球形を呈する。頂部に1孔もうけるが、貫通しない。金粉が塗られている。	
89	SD 1	木札	20.7 3.7 0.3 ——	〃	長方形状で、厚みは薄い。	
90	〃	小形槽状木器	11.6 4.1 1.5 ——	〃	凹型のくりこみをもつ。 加工痕をもつ。	
91	〃	曲物	14.5 2.1 0.5 ——	〃	底部の破片。側面は弧状を呈する。	
92	〃	異形木器	11.6 2.4 1.2 ——	〃	用途不明。断面は長方形。	
93	〃	〃	9.7 2.0 1.1 ——	〃	〃	
94	〃	火鑽杵	14.1 2.2 1.2 ——	〃	棒状で、端部は丸みをもつ。	
95	〃	不明	10.4 2.4 2.1 ——	〃	断面は円形を呈する。炭化している。	
96	〃	〃	25.0 2.3 2.2 ——	〃	加工木で切り口をもつ。 用途不明。	
97	〃	〃	20.7 3.0 2.9 ——	〃	〃	
98	〃	〃	17.6 2.8 2.6 ——	〃	〃	
99	〃	〃	12.2 2.9 3.1 ——	〃	〃	
100	〃	杭	17.6 2.8 2.6 ——	〃	先端は尖る。	
101	〃	〃	12.2 2.9 3.1 ——	〃	加工痕をもつ。	

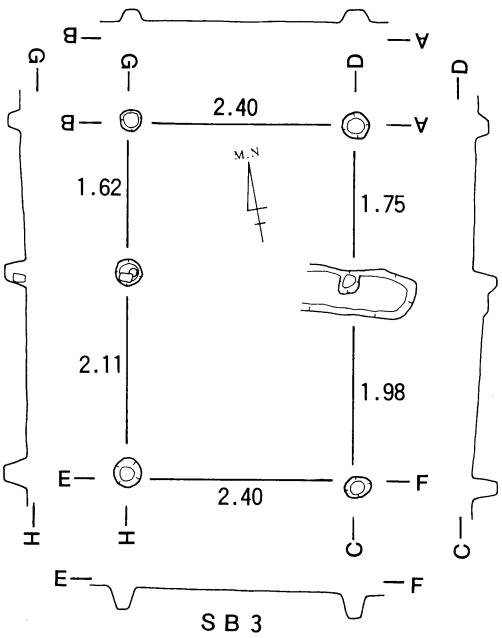




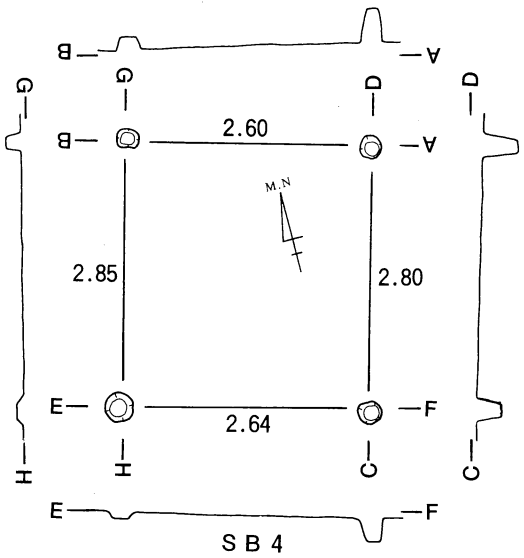
DL=5.00m

0 4m

第175図　SB 1 ・ 2



SB 3

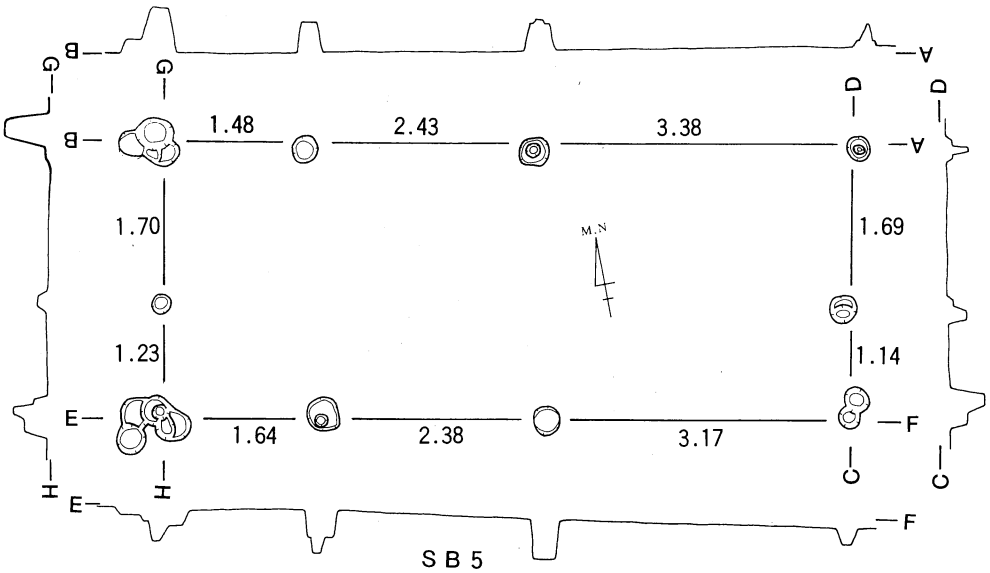


SB 4

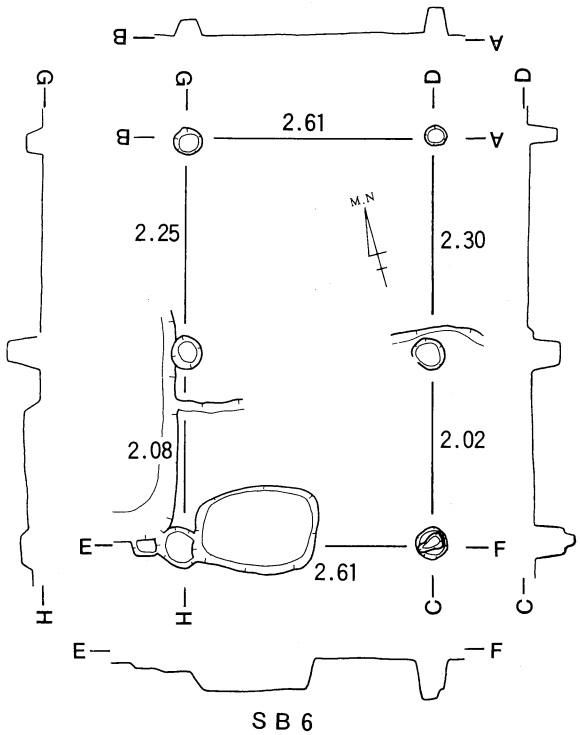
DL=5.00m

0 4m

第176図　SB 3・4



SB5

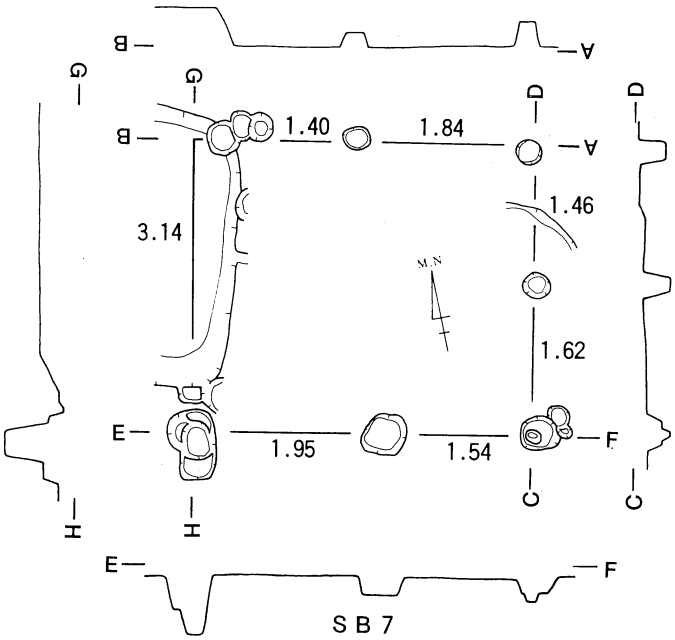


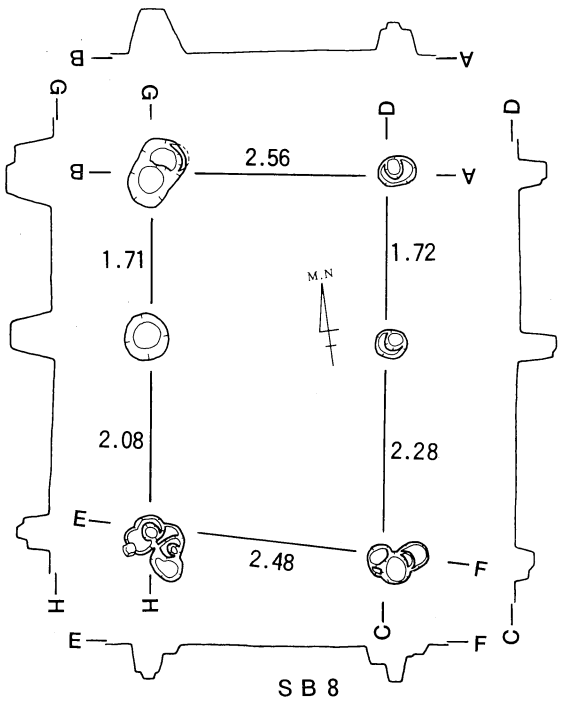
SB6

DL=5.00m

0 4m

第177図　SB5・6

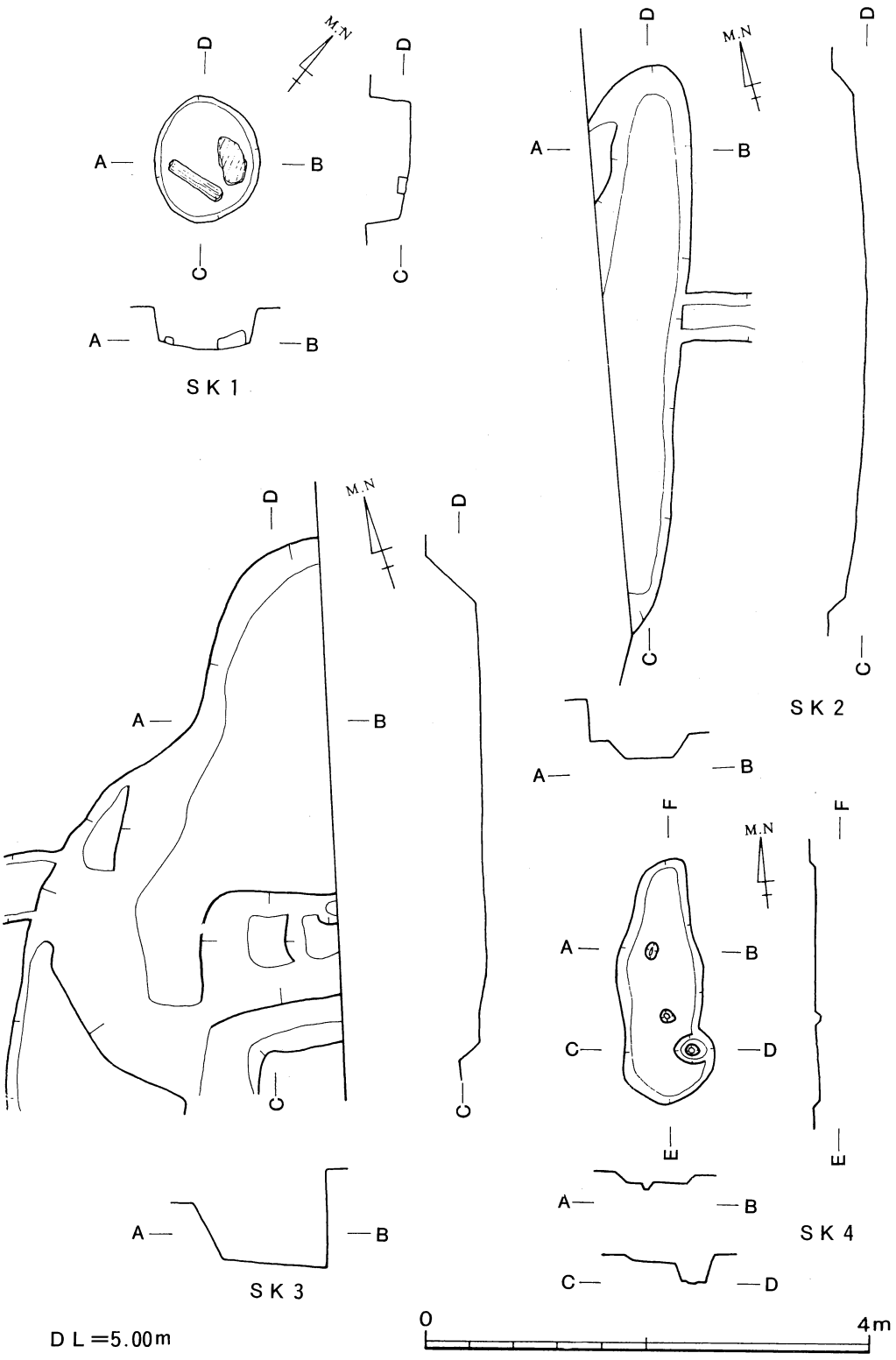




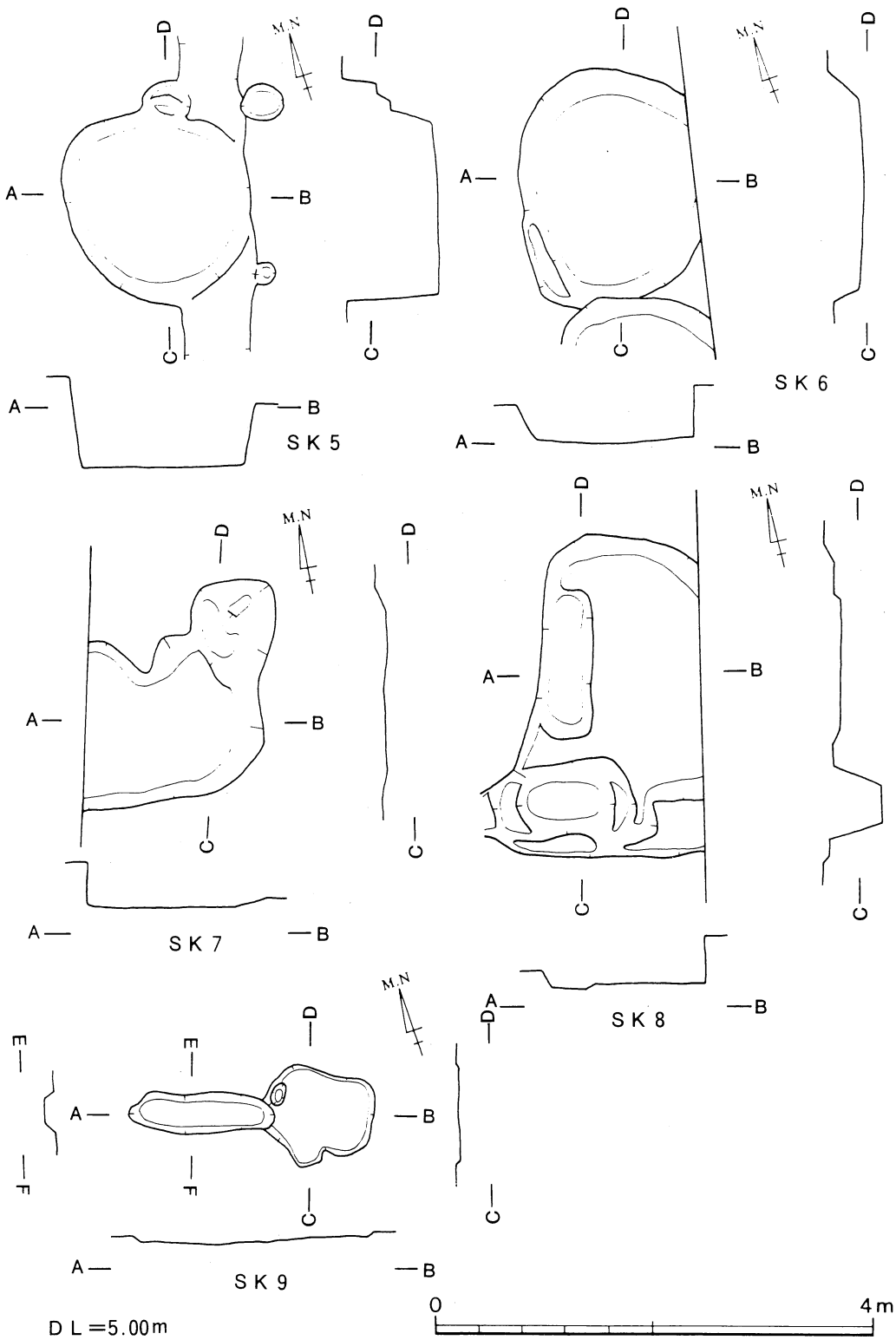
DL=5.00m

0 4m

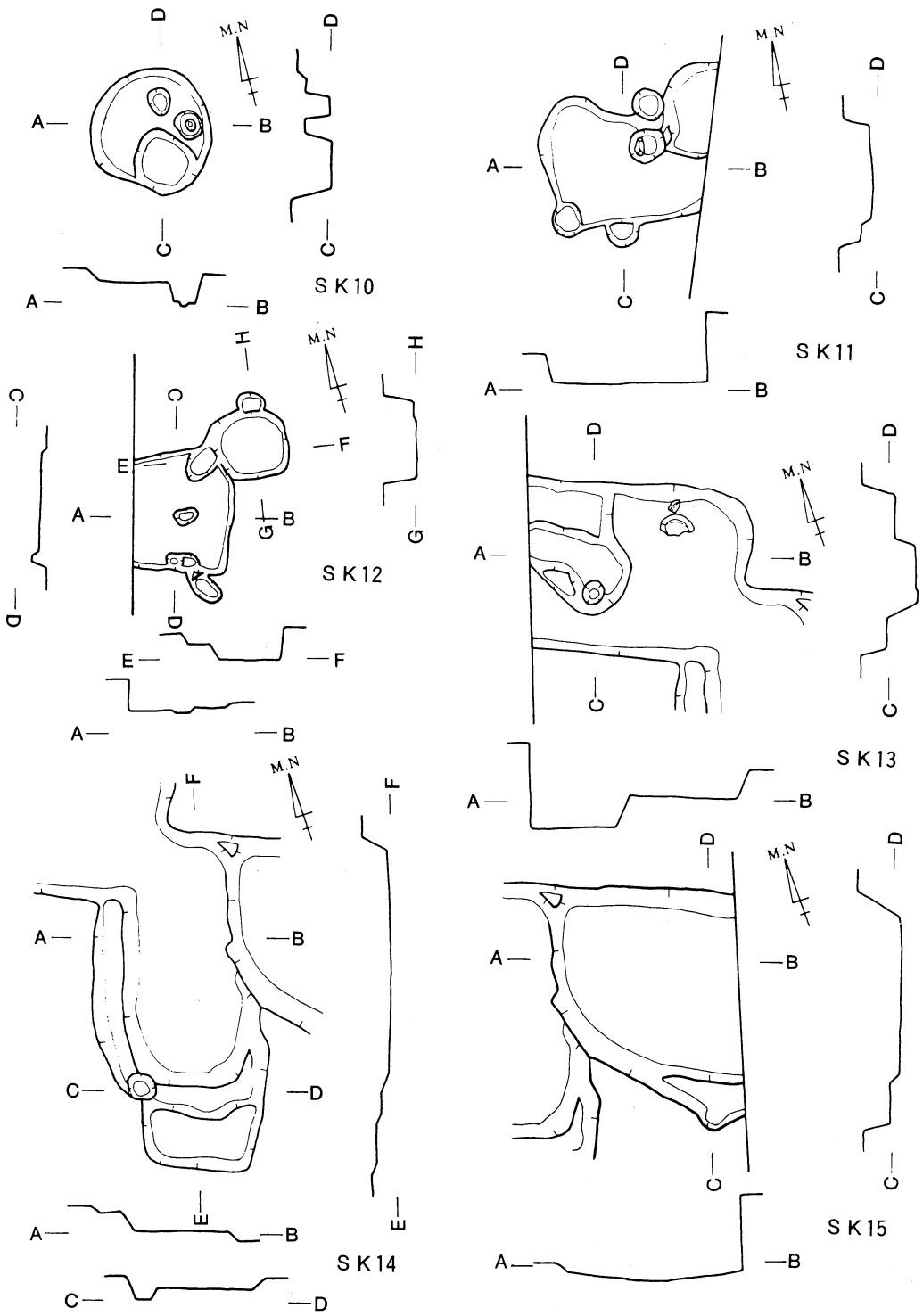
第178図　SB 7・8



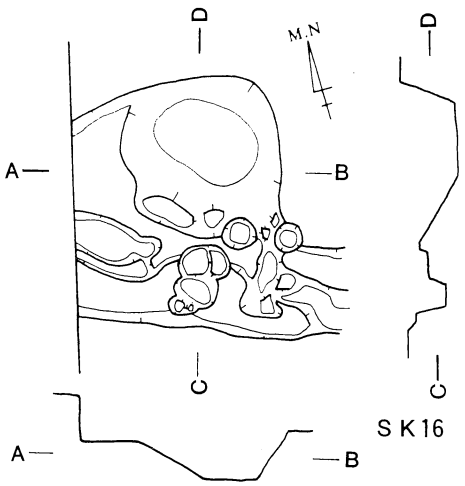
第179図　ＳＫ１～４



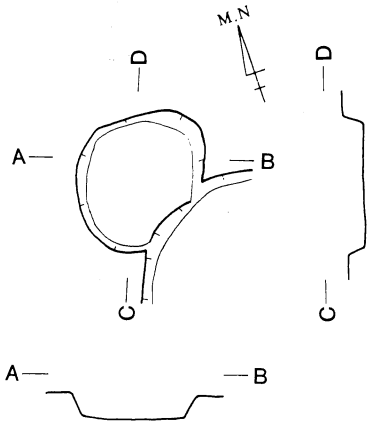
第180図　SK 5～9



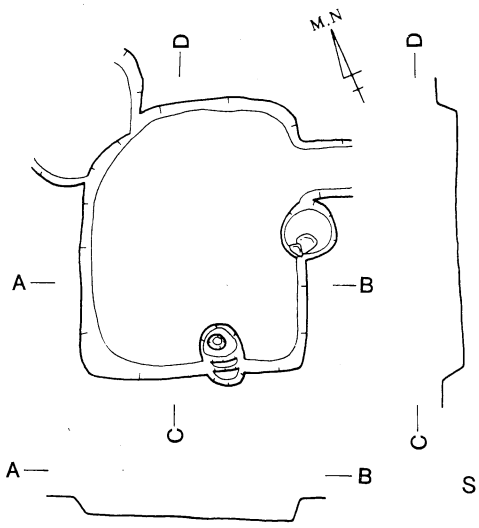
第181図　SK10～15



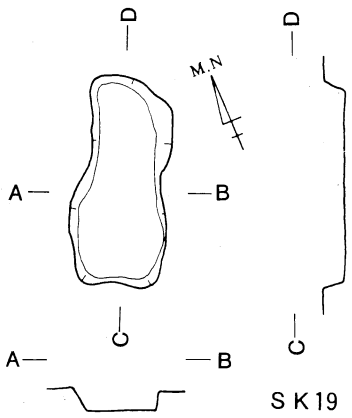
SK16



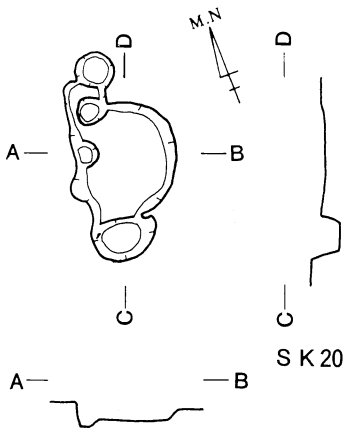
SK17



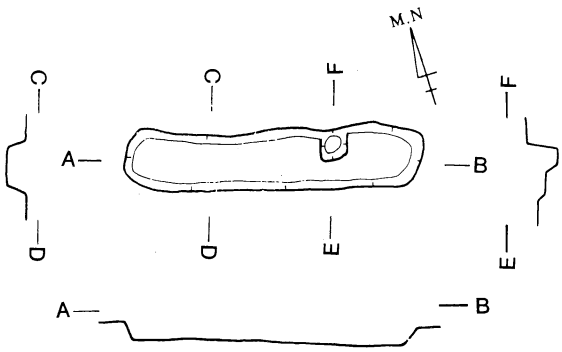
SK18



SK19



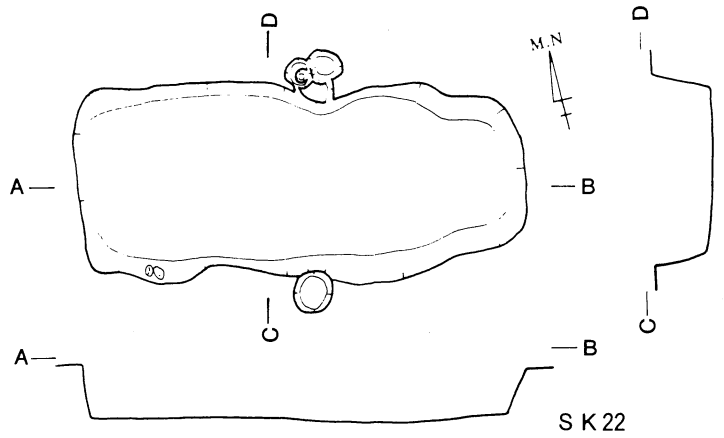
SK20



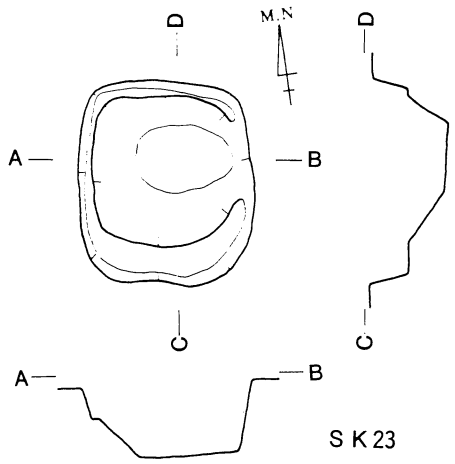
SK21

DL=5.00m

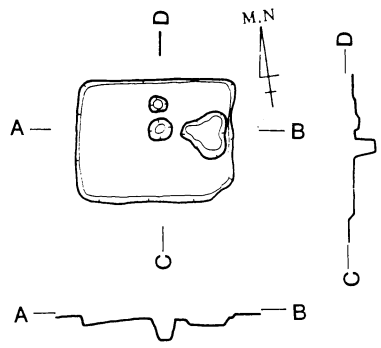
第182図　SK16～21



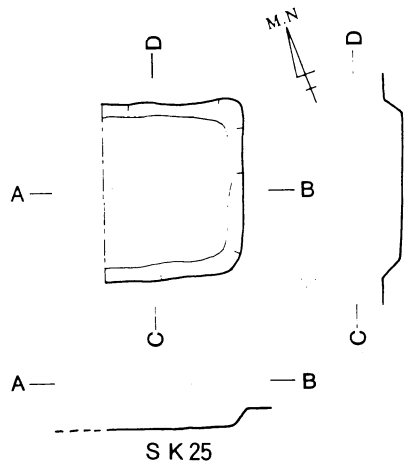
S K 22



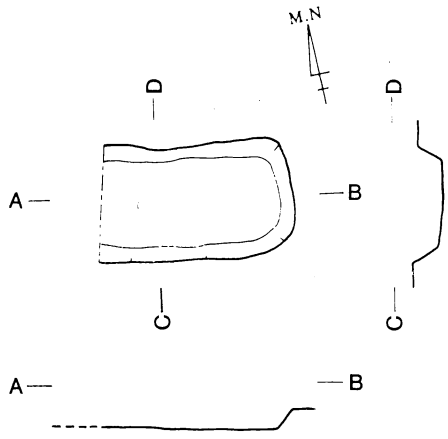
S K 23



S K 24



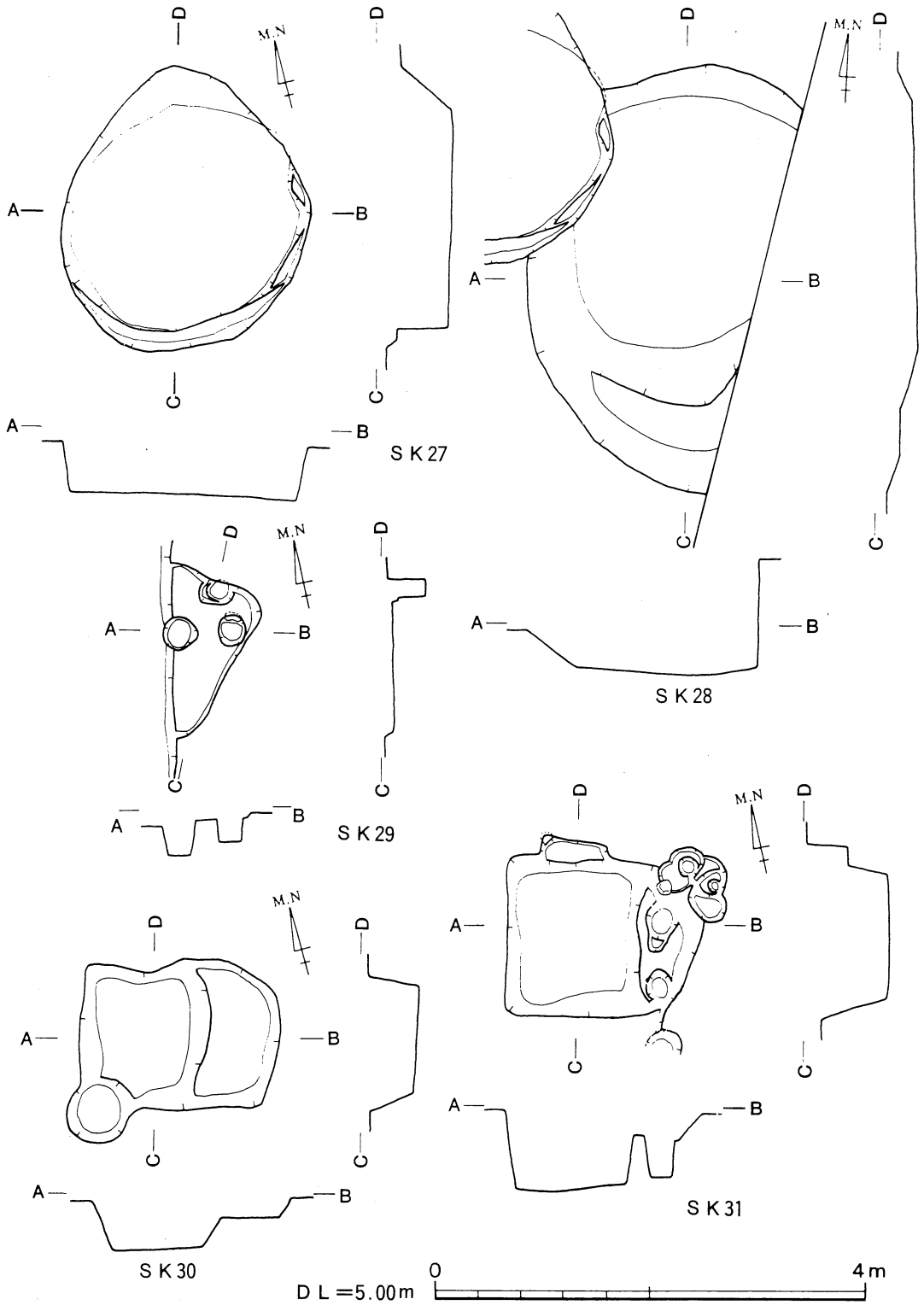
S K 25



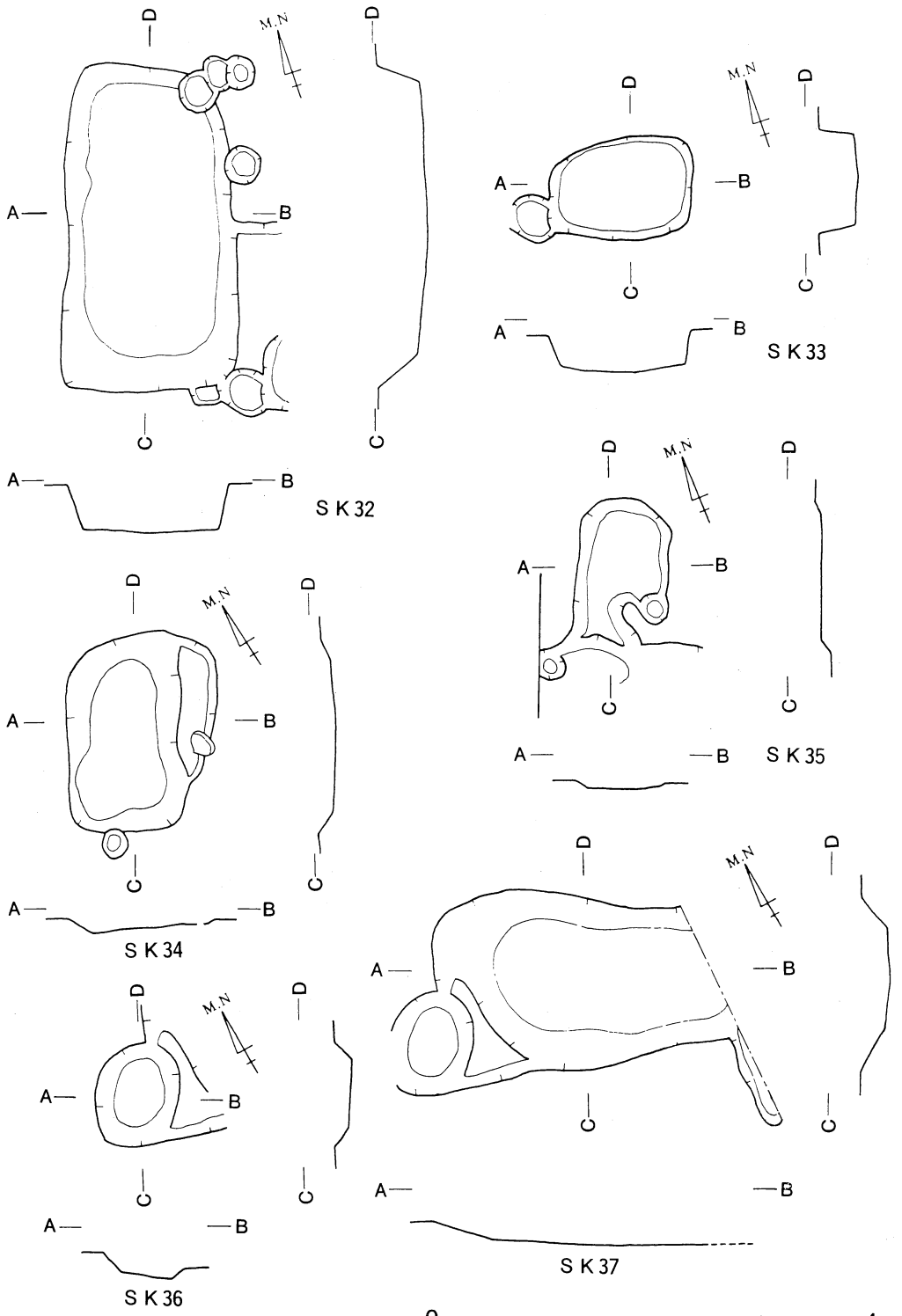
S K 26

D L ＝5.00m　0　4m

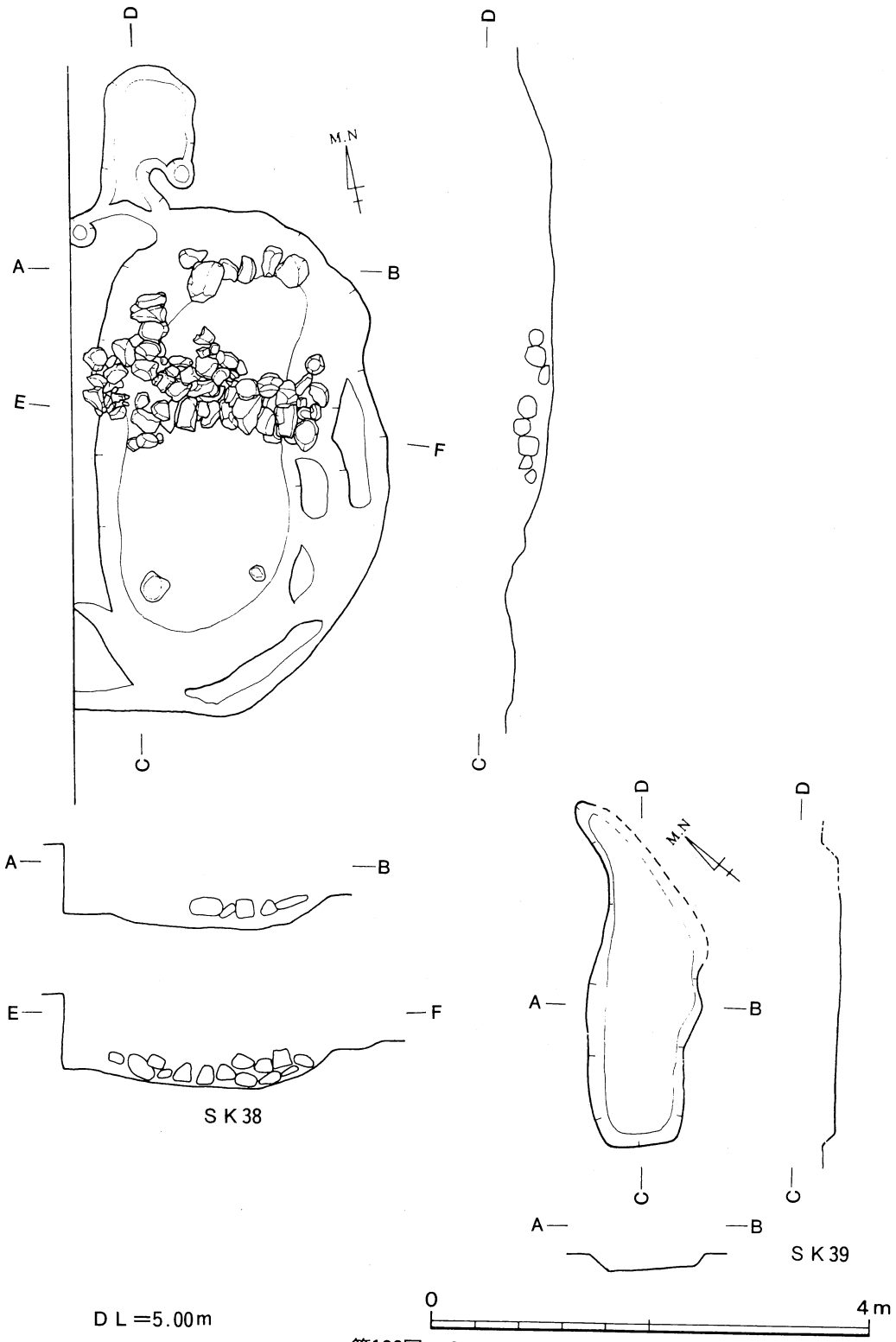
第183図　S K 22～26



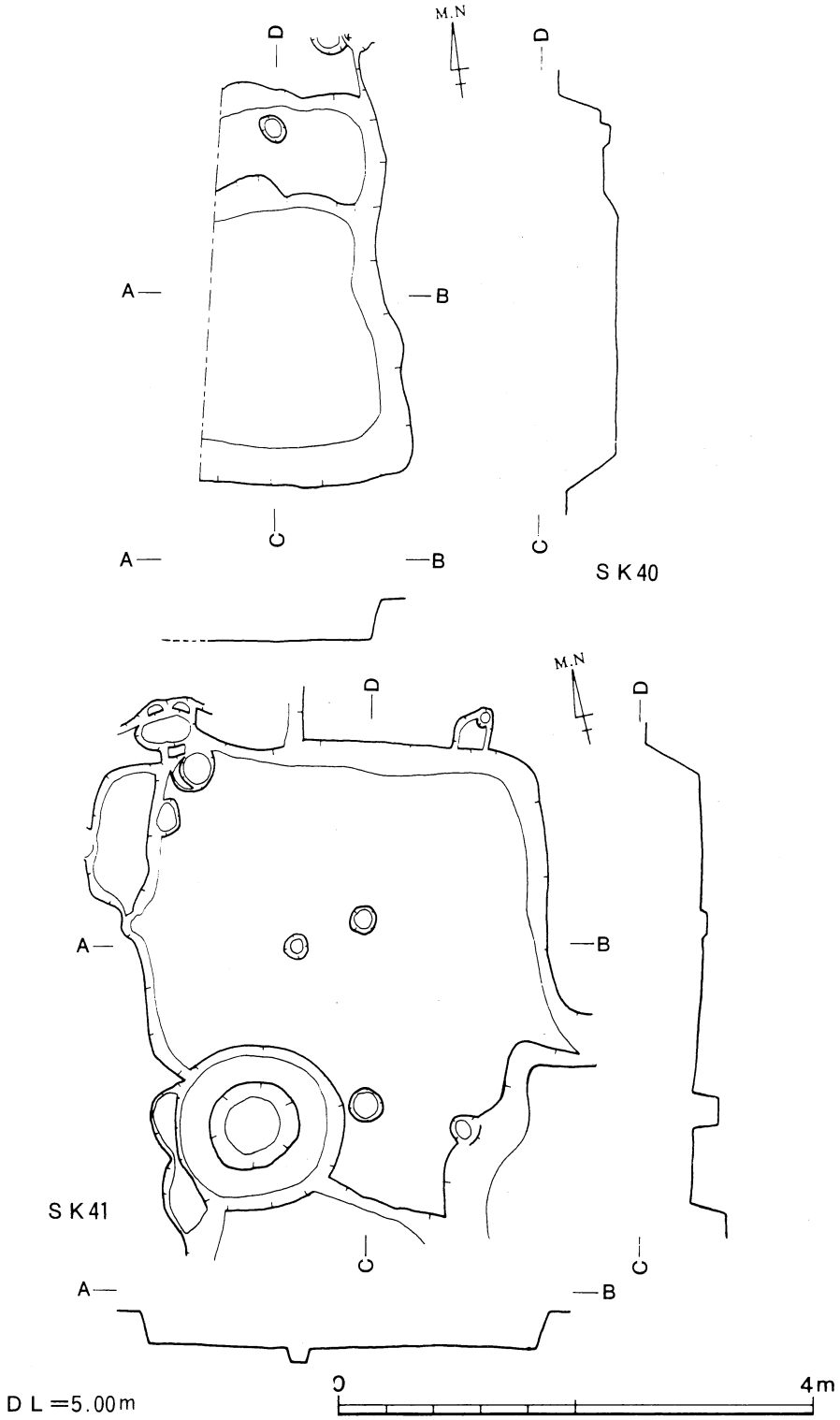
第184図　SK27～31



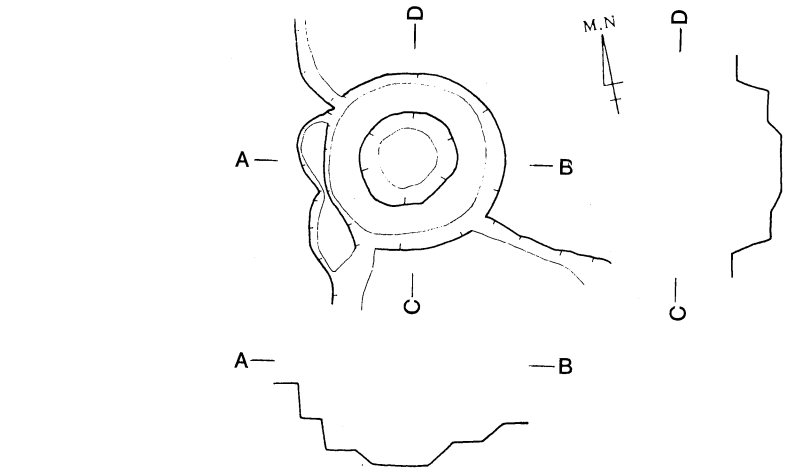
第185図　S K 32～37



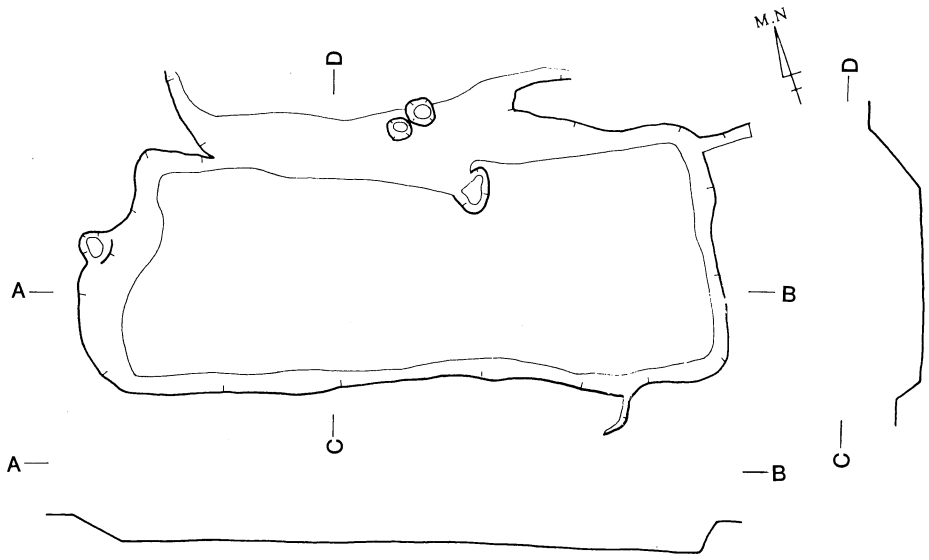
第186図　SK38・39



第187図　S K 40・41



S K 42

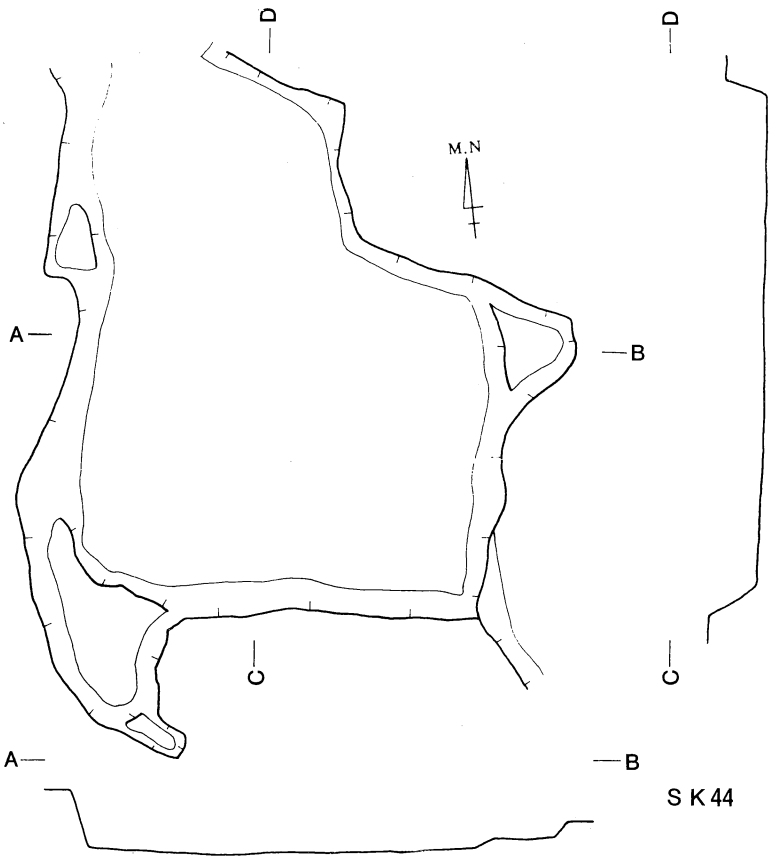


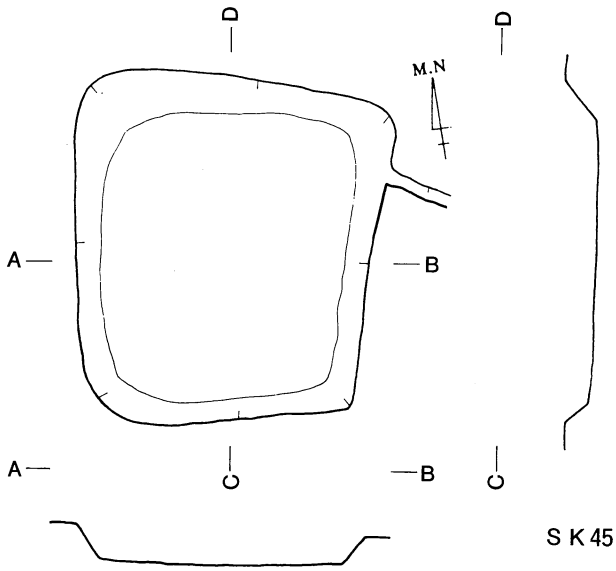
S K 43

D L =5.00m

0 4m

第188図　S K 42・43

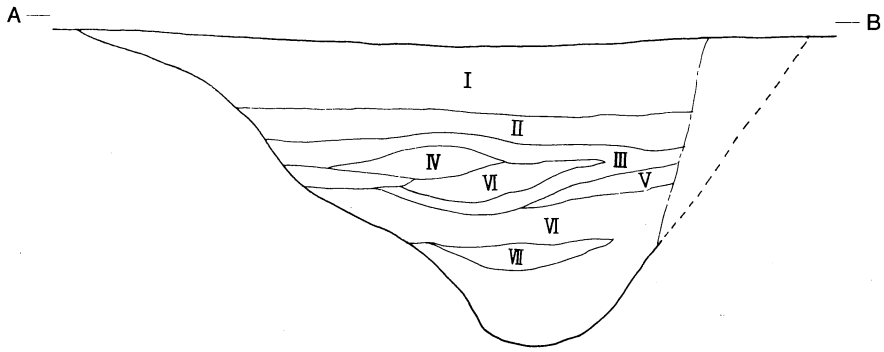




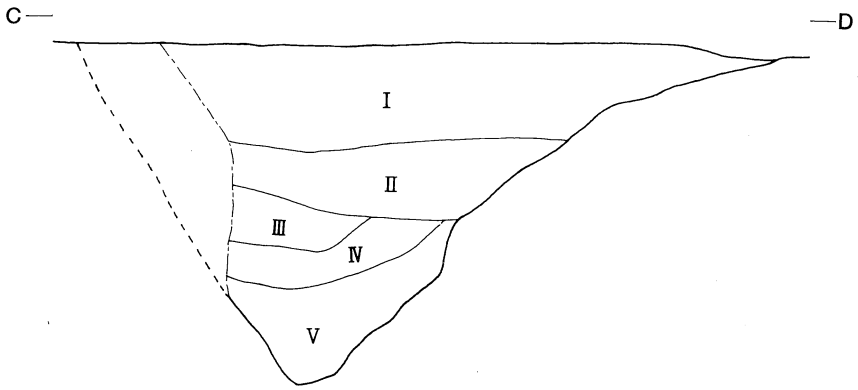
D L =5.00m

0 4m

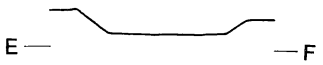
第189図　S K 44・45



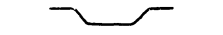
SD1　西　壁



SD1　東　壁



SD2



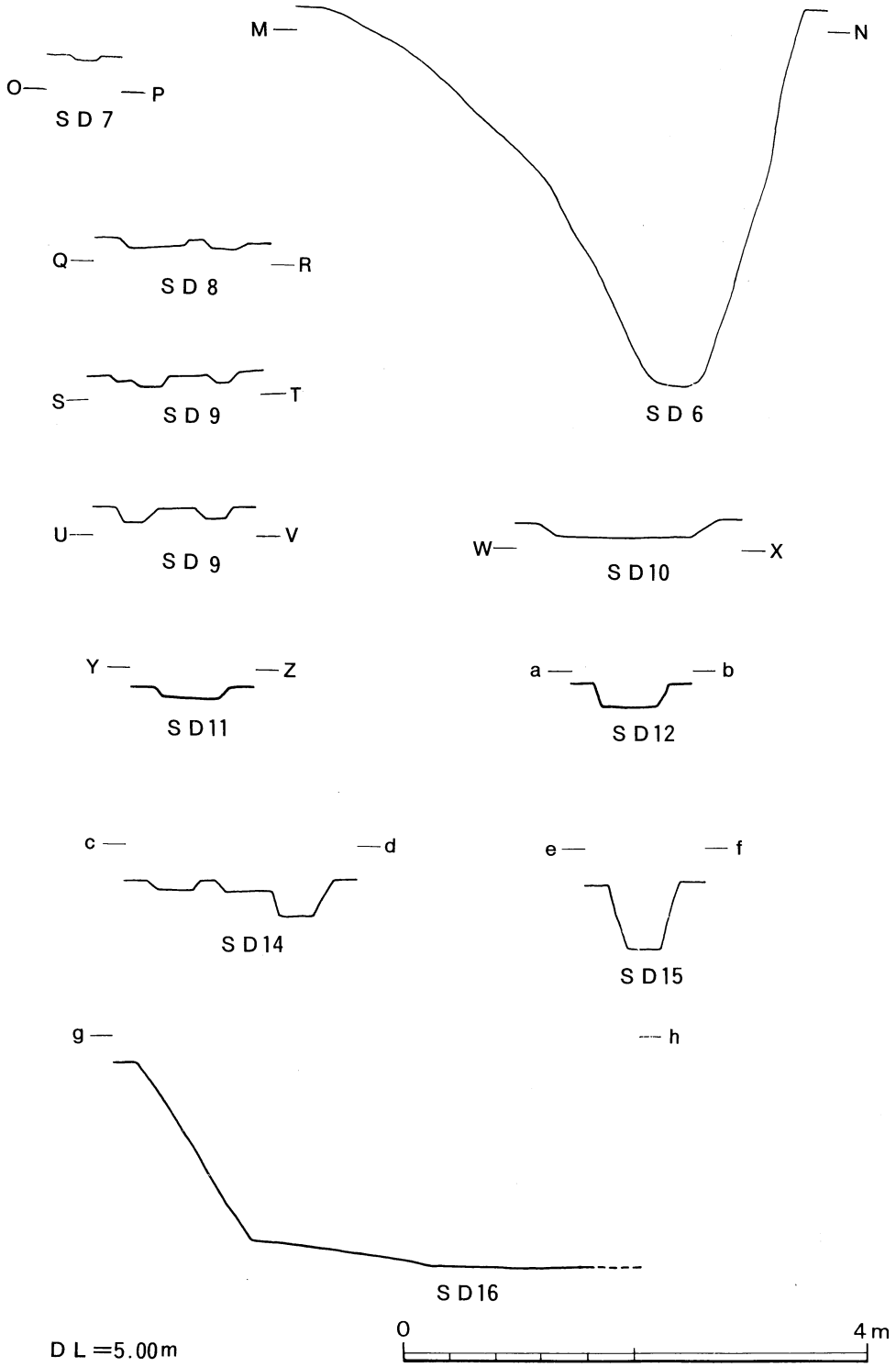
SD3

SD4

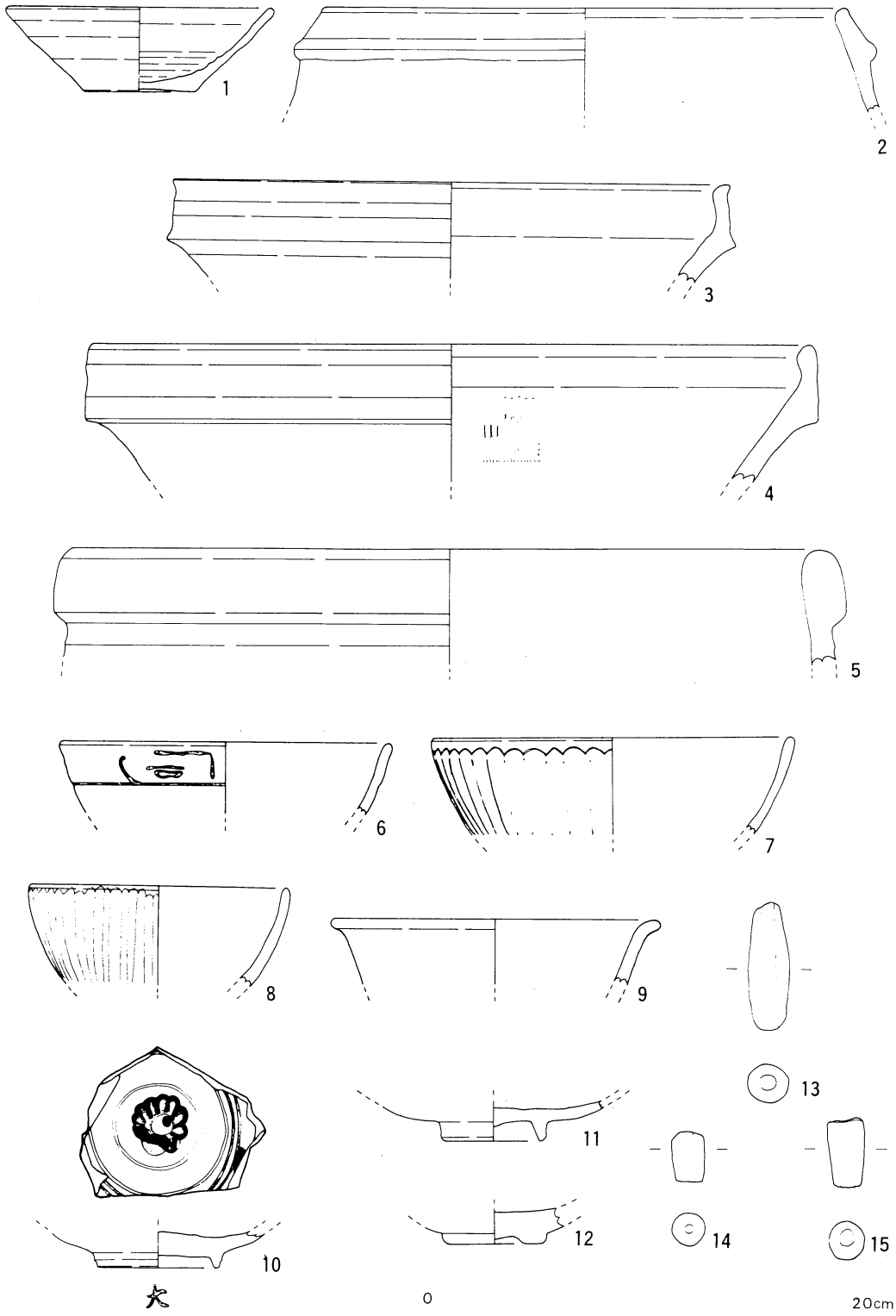
SD5

DL＝5.00m

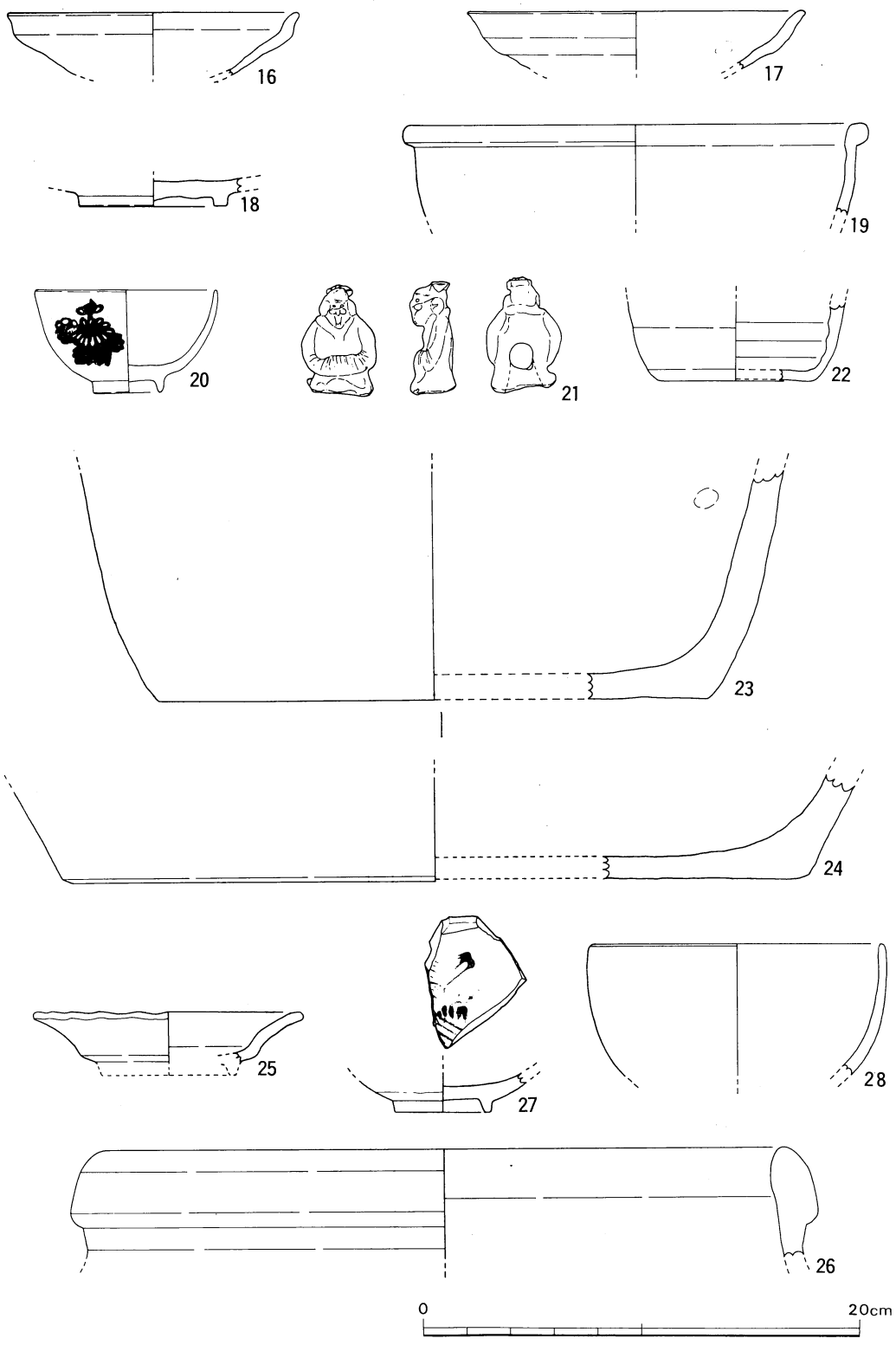
第190図　SD1～5



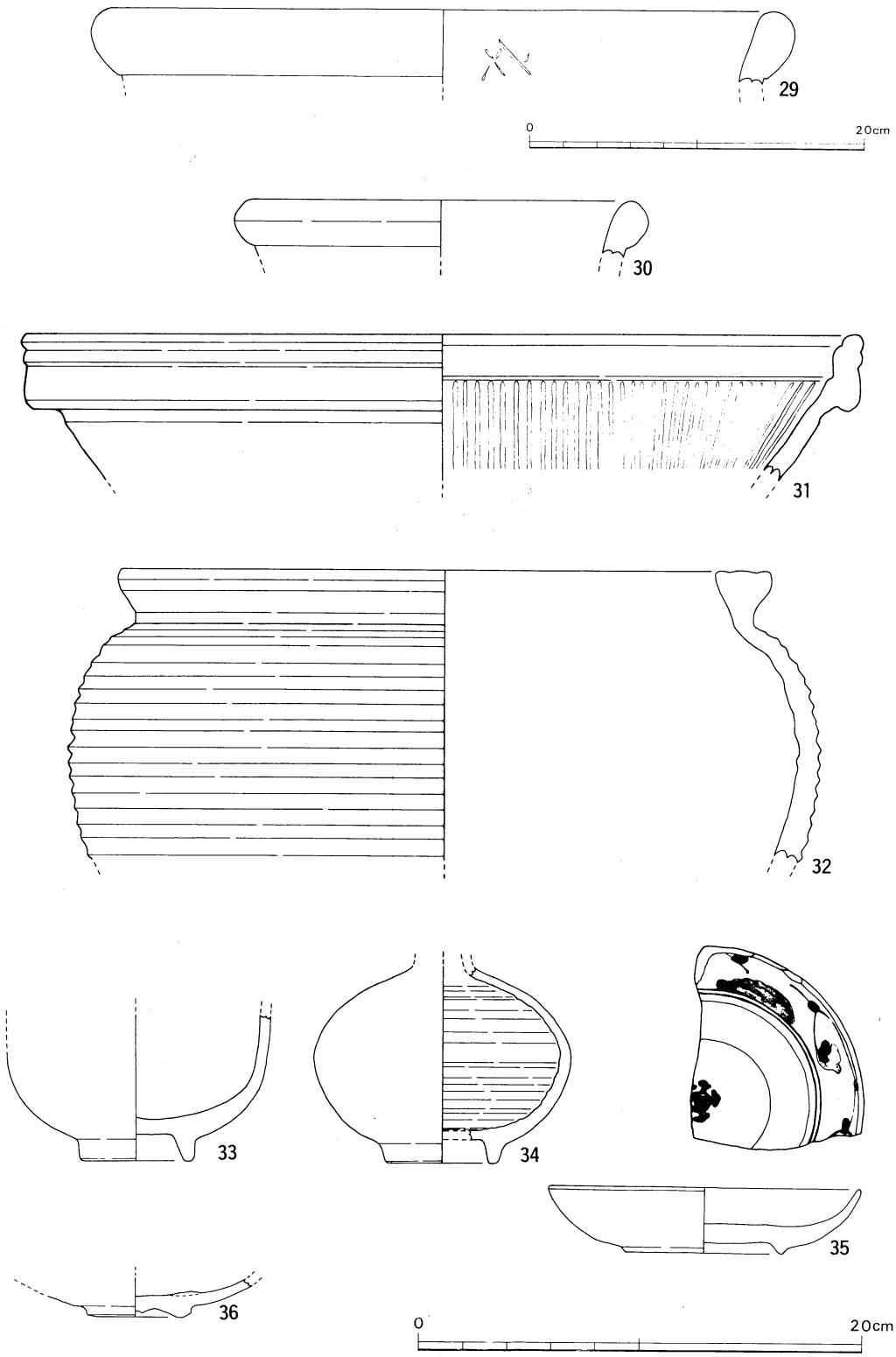
第191図　S D 6～12・14～16



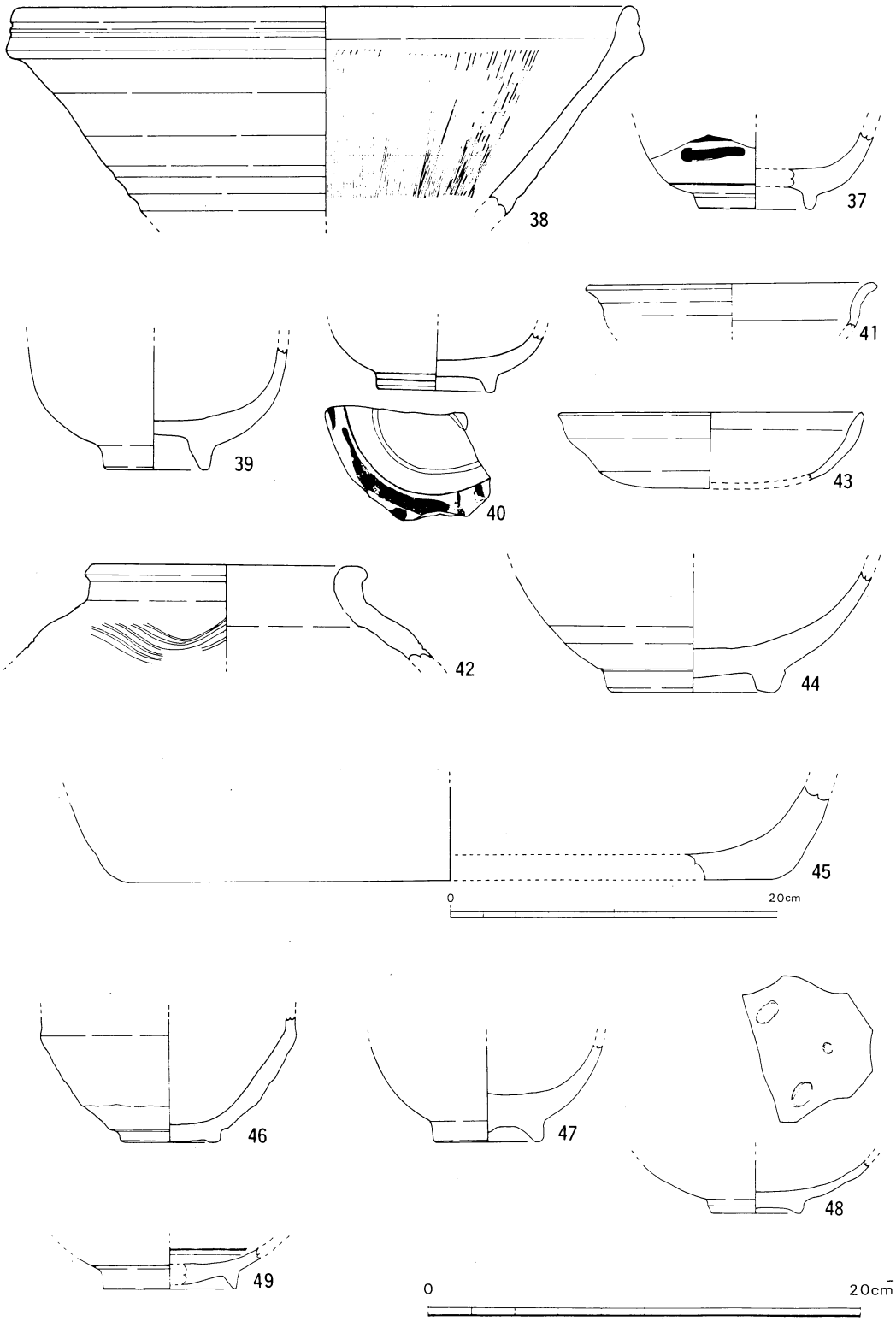
第192図　第Ⅲ層　出土遺物



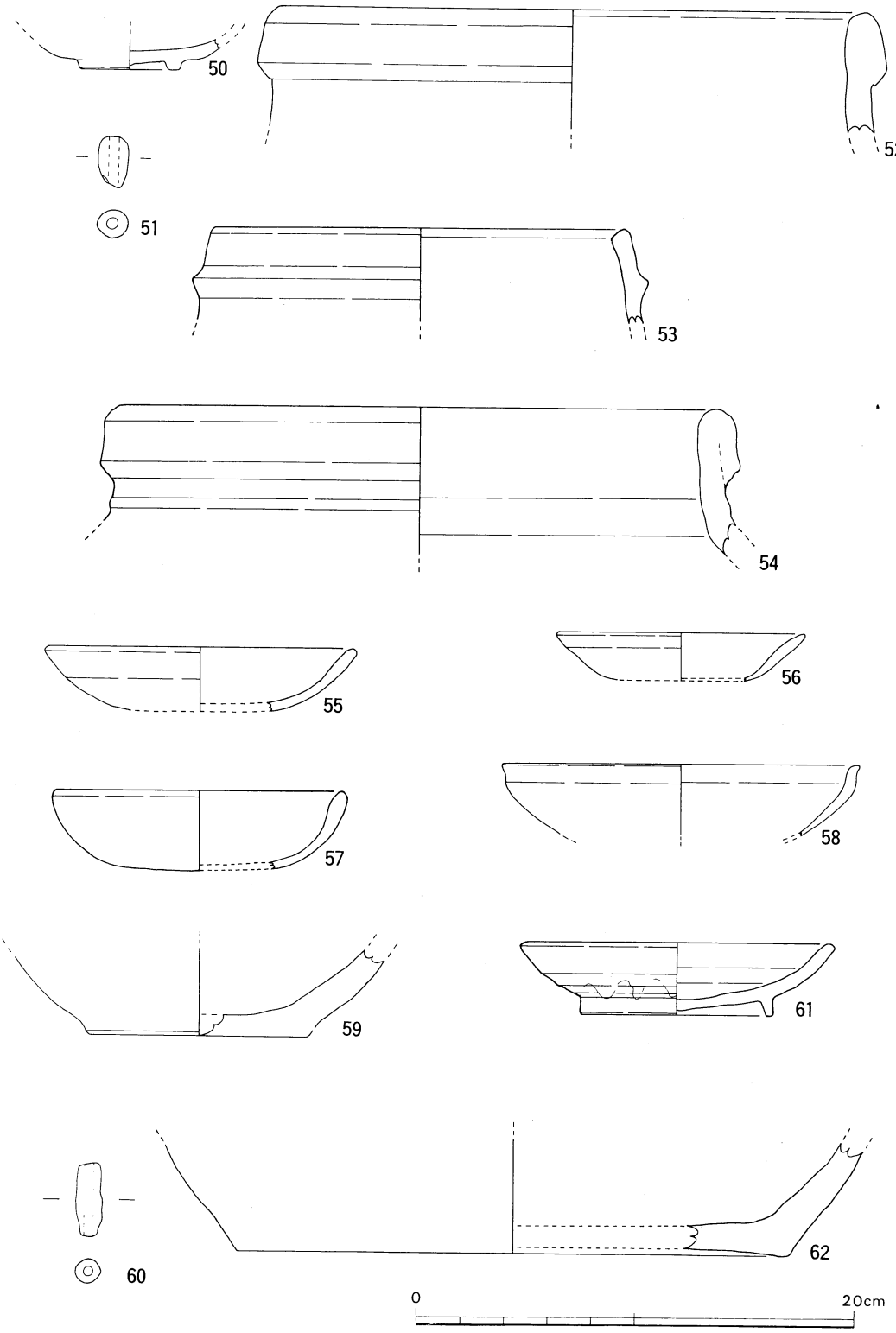
第193図　ＳＢ４・８、ＳＫ１・３・４ 出土遺物



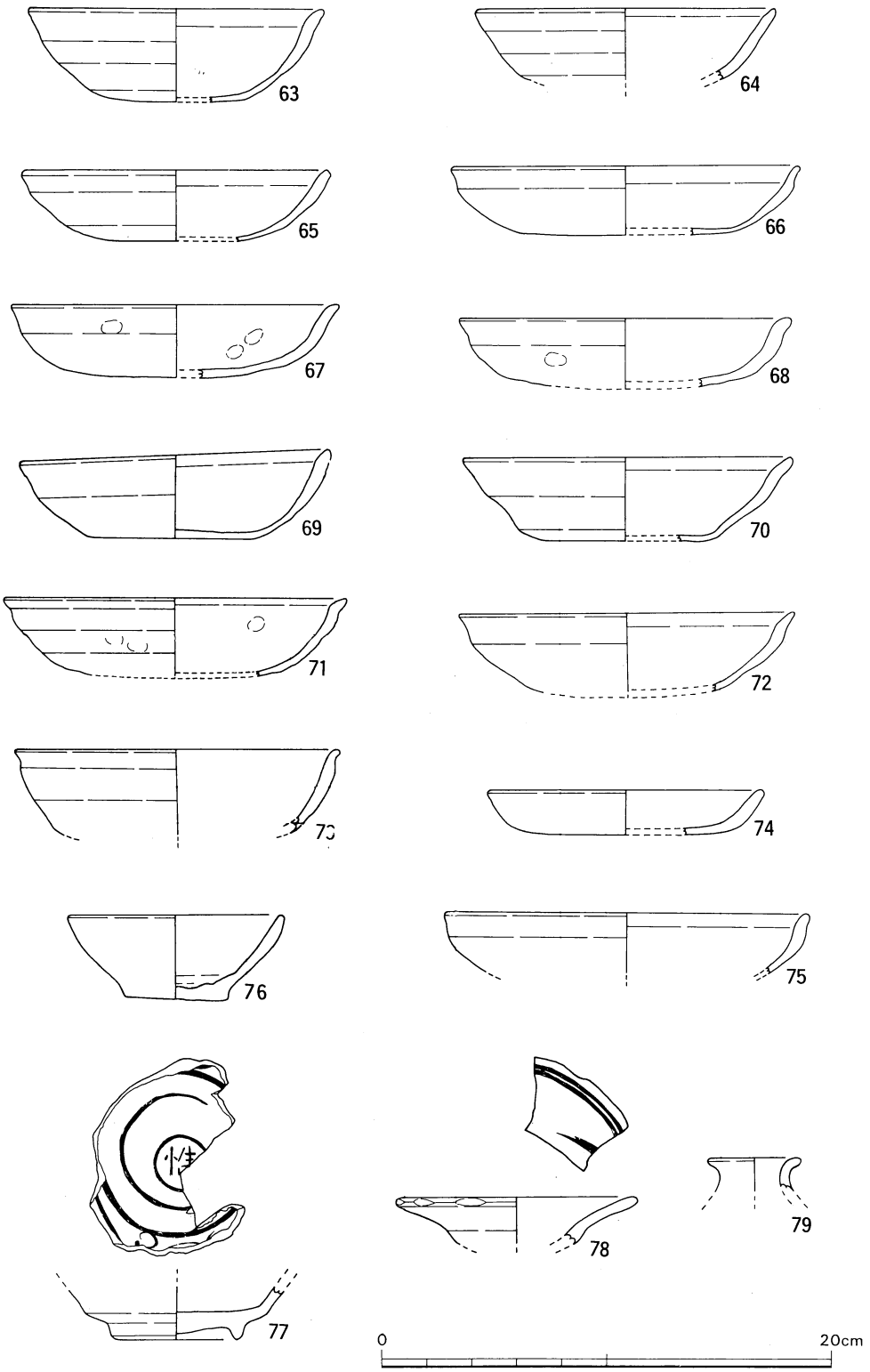
第194図　ＳＫ11・22・23 出土遺物



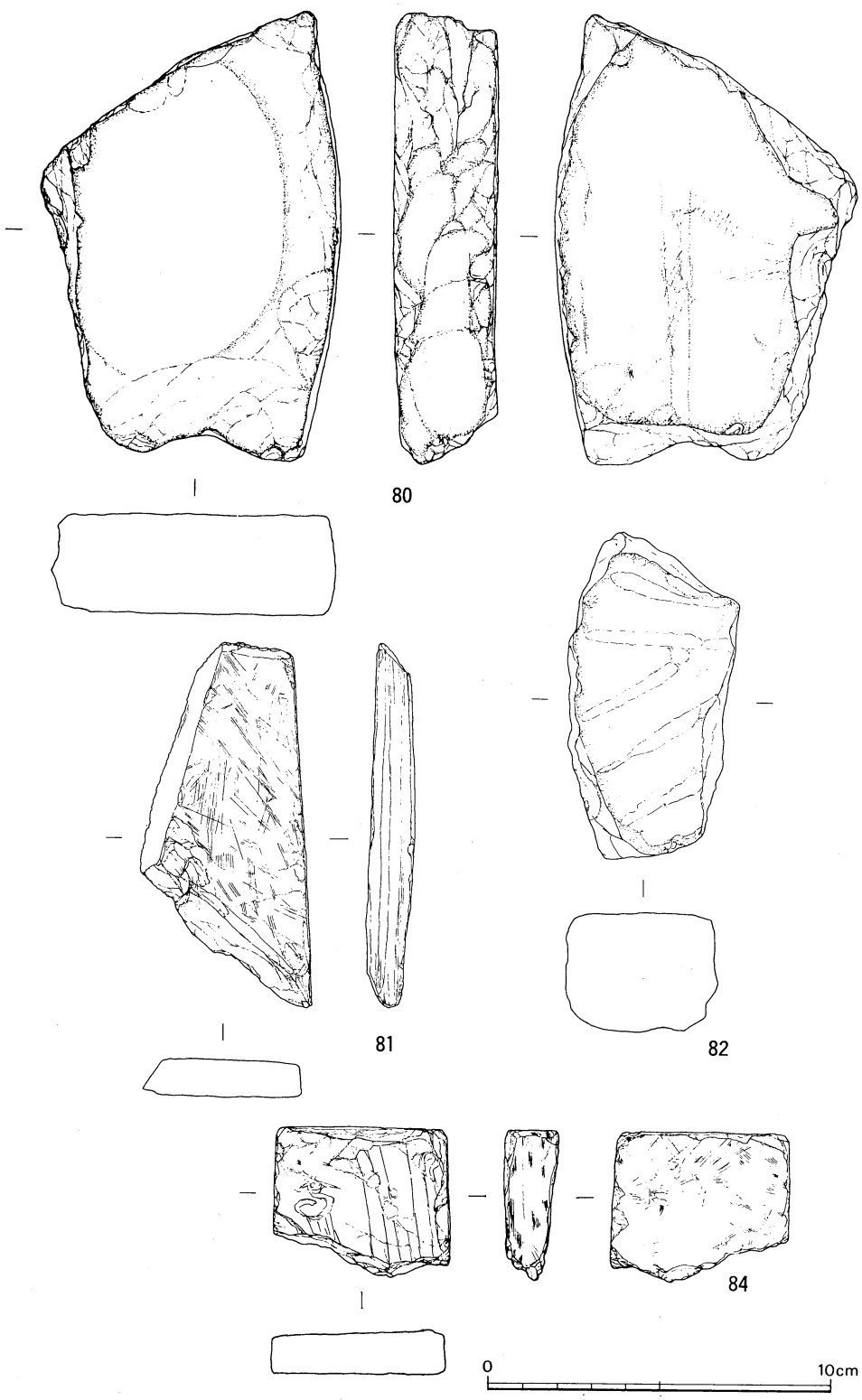
第195図　ＳＫ26～28・31・38 出土遺物



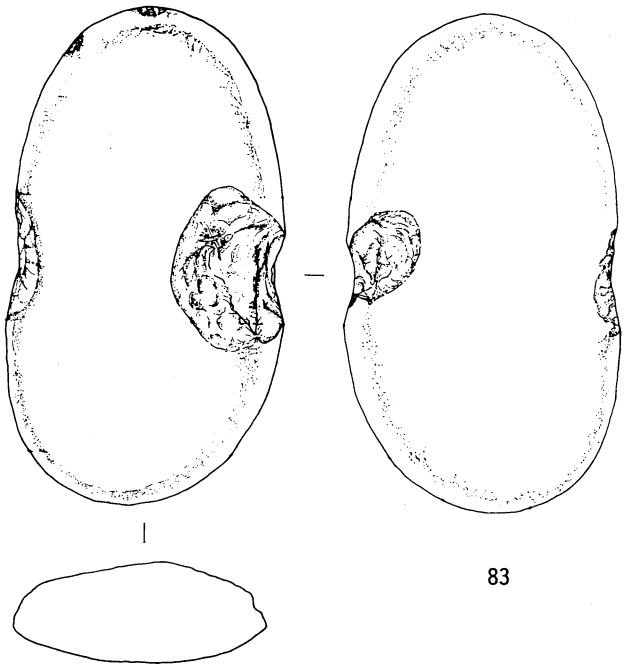
第196図　ＳＫ41・44、ＳＤ１・４・６・７・９ 出土遺物

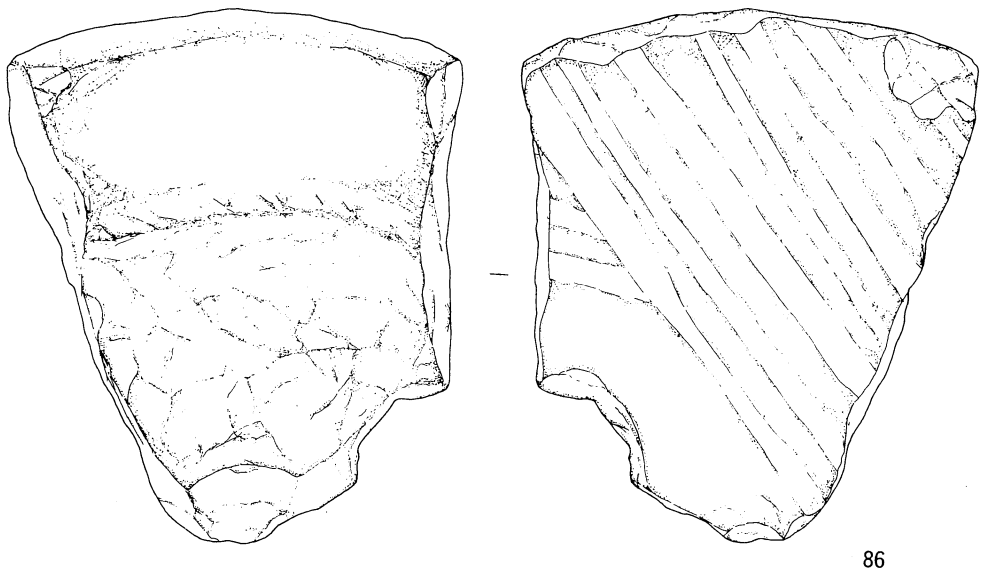


第197図　ＳＤ14・15、Ｐ１～４ 出土遺物

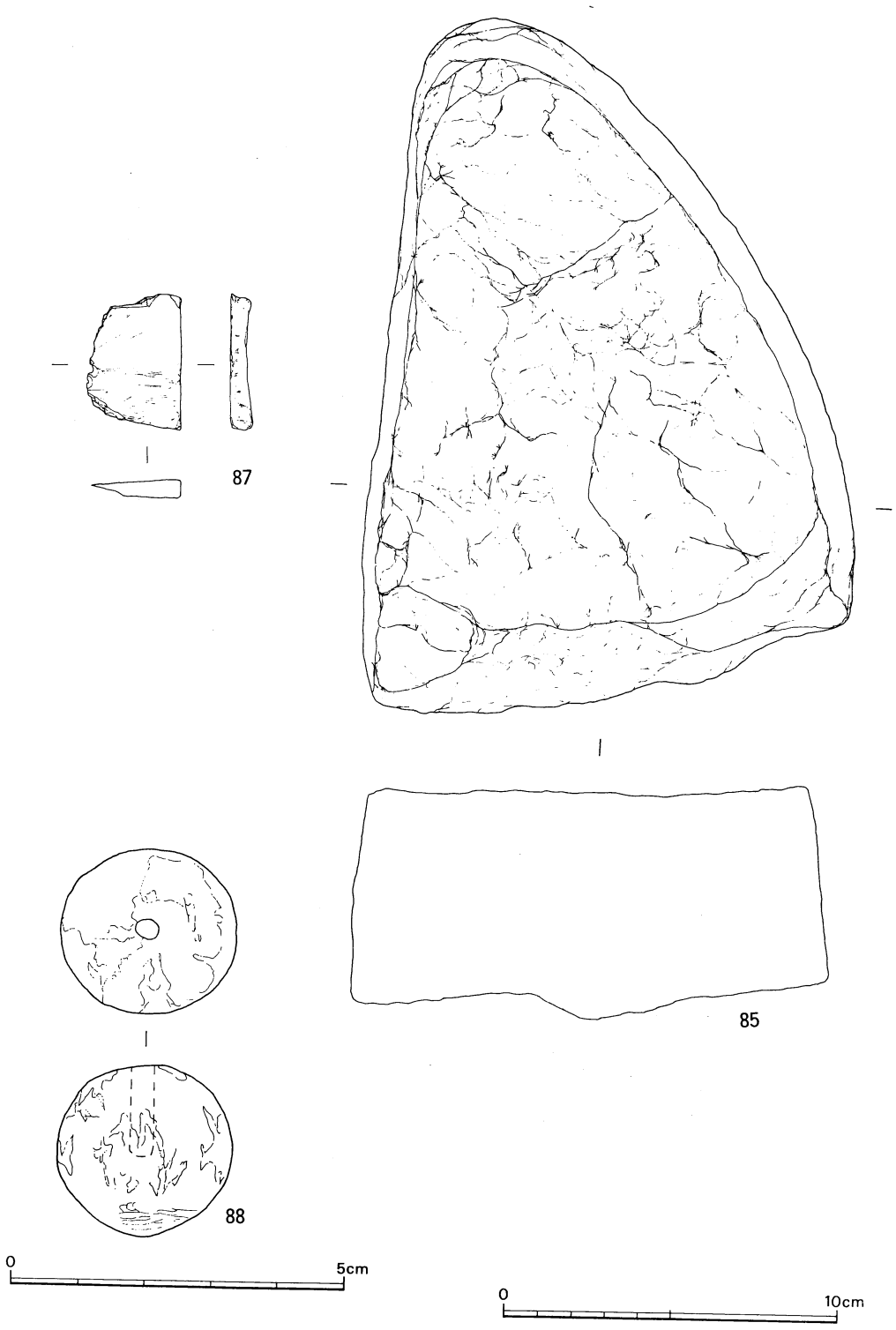


第198図　ＳＫ６・22・24・26 出土遺物

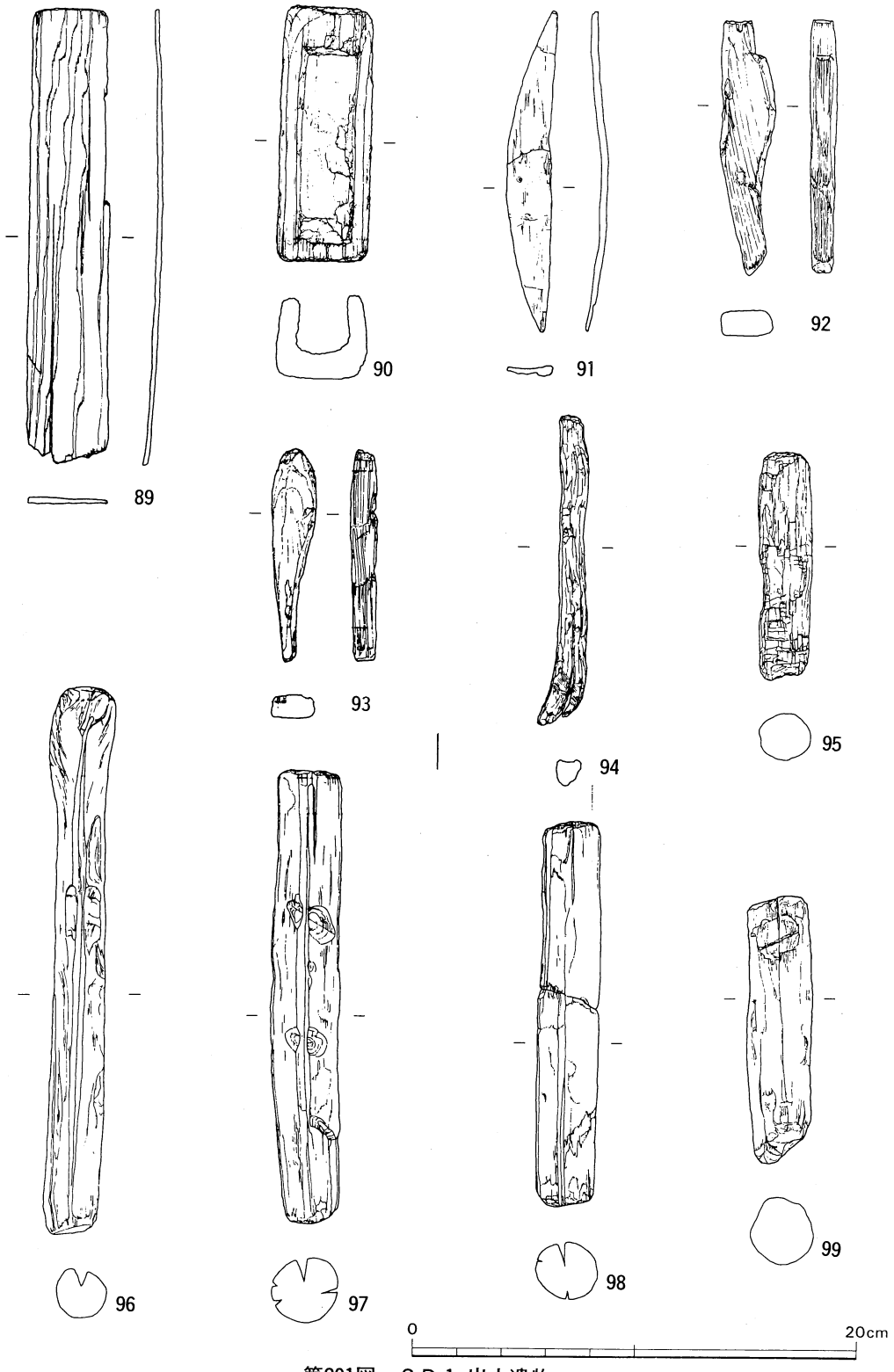




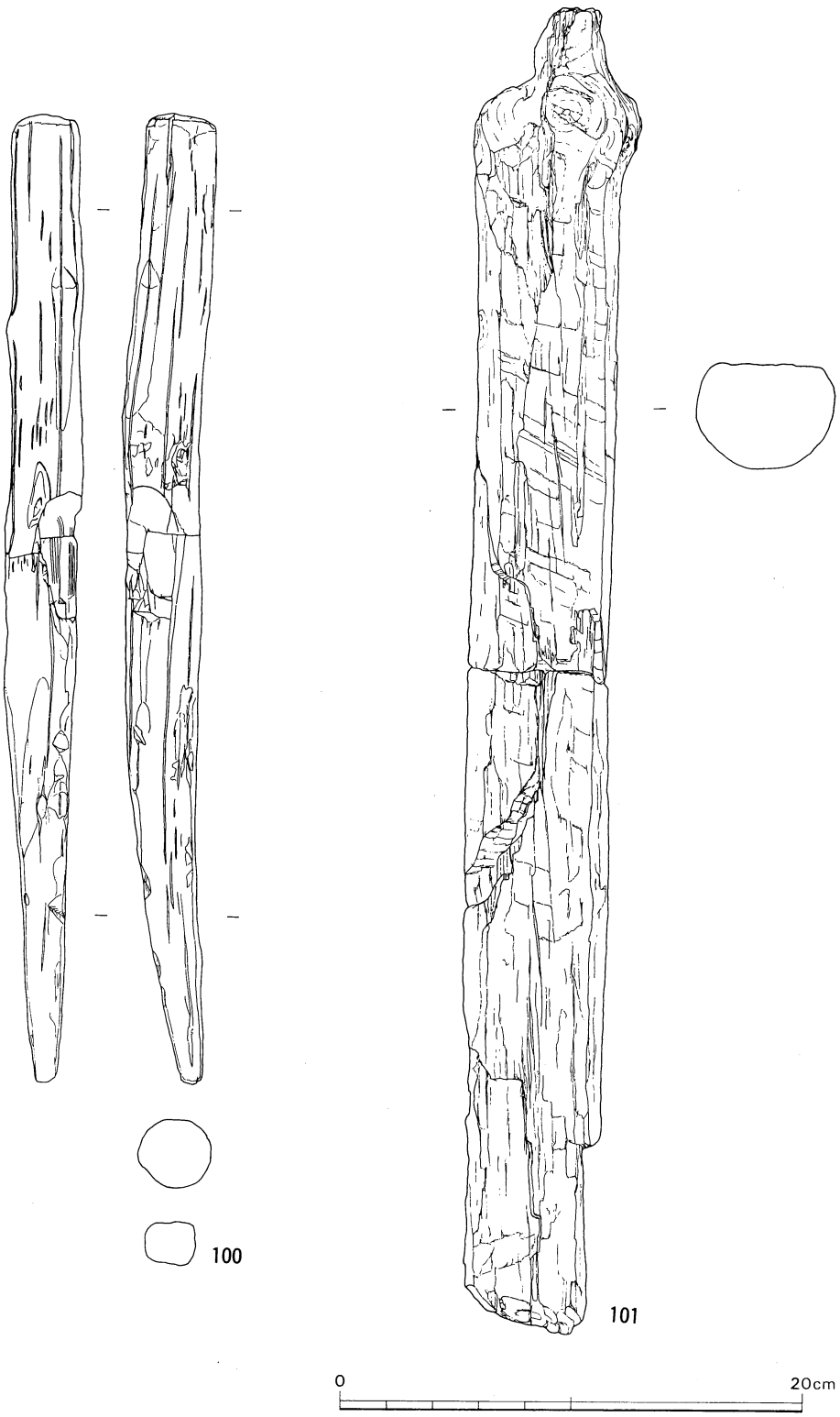
第199図　ＳＫ24・28 出土遺物



第200図　ＳＫ27・28・34 出土遺物



第201図　ＳＤ１ 出土遺物



第202図　ＳＤ１ 出土遺物

6. 中～近世小結

6．中～近世小結

はじめに

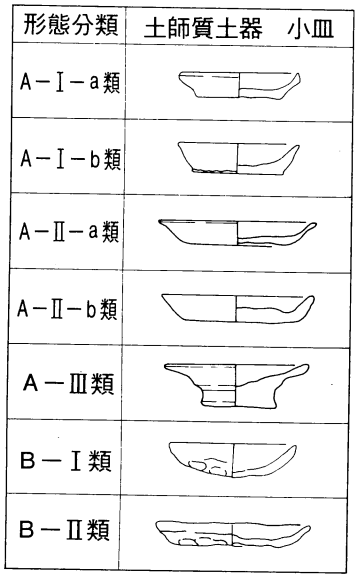
田村遺跡群において検出された主な中近世遺構は、掘立柱建物址、土坑、溝及び井戸等である。これらは、分布密度に大小はあるものの、Loc. 1～48の調査区の大半において検出されている。

掘立柱建物には、溝に囲まれた区画内にあるものとそうでないものとがあり、また、溝に囲まれた屋敷の中にも井戸を有するものと有さないものとがある。土坑も多数検出されているが、中世墓あるいは近世墓の他は性格が明瞭でないものが多い。出土遺物も、検出遺構の数に比例して絶対量が非常に多く、その時期も13世紀から18世紀までの長期にわたっている。

中近世編の小結としては、これらの全遺構、遺物を俯瞰して論述すべきではあるが、これに関しては、各調査区毎のまとめを参照して頂くことにして、本項では、溝に囲まれた屋敷址を中心に、まず、その出土遺物について触れ、続いて同遺構に関する資料の集計を行い、かつ、『長宗我部地検帳』[註1]の記載事項との関連も追求することによって、小結に代えたい。

1．出土遺物

田村遺跡群の中近世の調査において、14～17世紀初頭に至る掘立柱屋敷址を検出した。それに伴って、各遺構から多量の遺物が出土した。ここでは、土師質土器、瓦質土器の形態分類を行い、伴せて遺構から伴出している国内産陶器、輸入陶磁器類との関係をも検討していきたい。また、土師質土器、瓦質土器が、この期間にどのような変遷をしているかという点に注目し、田村遺跡群における中世土器の編年試案を考えることにする。



第203図　土師質小皿分類表
（S＝1/4）

(1) 形態分類

土師質土器

器種として、杯、皿、小杯、小皿、鍋、釜、鉢、椀がある。釜、鉢、椀、小杯を除き各器種ごとに分類を行う。[註2][註3]

a）小皿

A類は、ロクロ成形で、器高1.0～1.5cm前後、口径6～8cmを測る。口径及び口縁部の形態によって分類する。

A－Ⅰ類：口径6㎝前後で、体部が直線的に外上方に立ち上がるもの。さらに口縁部の形態によって細分する。

A－Ⅰ－a類：口縁端部が面取りされるもの。

A－Ⅰ－b類：口縁部は直線的にそのまま引き上げられるもの。

A－Ⅱ類：口径7～8㎝前後を測る。さらに口縁部の形態によって細分する。

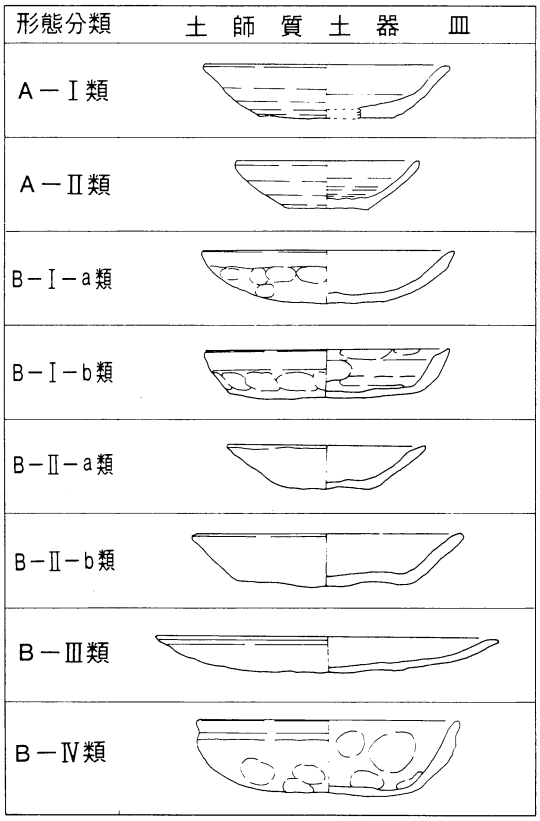
A－Ⅱ－a類：口縁部が外反するもの。

A－Ⅱ－b類：口縁部は外反せず、そのまま直線的に引き上げられるもの。

A－Ⅲ類：比較的高い高台を有するもの。

B類は、ロクロ未使用で手づくねにより成形され、口径6～8㎝を測る。口径及び形態によって分類する。

B－Ⅰ類：口径6～7㎝前後で器高1.5～2.0㎝を測る。体部は内湾気味に立ち上がる。



第204図　土師質土器皿分類表（S＝$\frac{1}{4}$）

B－Ⅱ類：口径8㎝前後で、器高1㎝を測る。体部は直線的に立ち上がる。

b）皿

A類は、ロクロ成形で器高3㎝以内、口径8㎝以上のものである。以下口径及び口縁部の形態によって分類を行う。

A－Ⅰ類：口径13㎝前後で、口縁部が外反するもの。

A－Ⅱ類：口径10㎝前後で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部に至るもの。

B類は、ロクロ未使用で、器高3㎝以内、口径8㎝以上のものである。以下口径、胎土及び形態によって分類する。

B－Ⅰ類：口径12～13㎝で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデのため外反する。さらに胎土によって細分する。

B－Ⅰ－a類：胎土が浅黄橙色を呈する。

B－Ⅰ－b類：胎土が灰褐色を呈する。

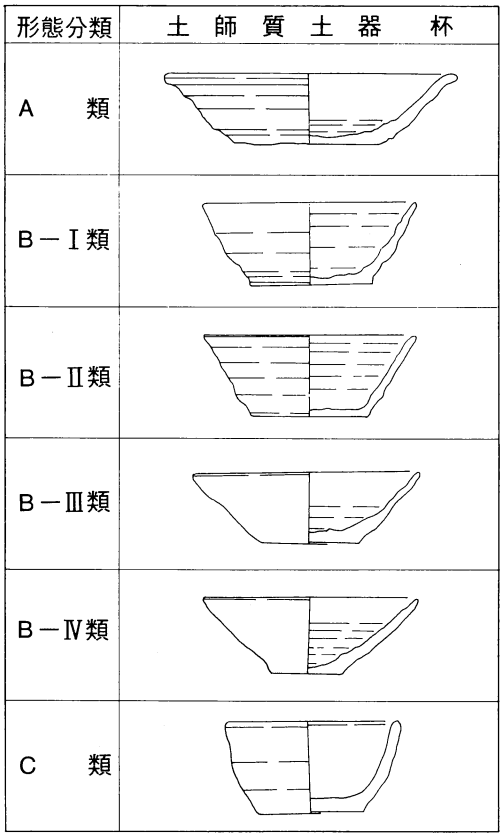
Ｂ－Ⅱ類：体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外反する。白色系のもので、さらに口径によって細分を行う。

Ｂ－Ⅱ－ａ類：口径が10cm前後のもの。

Ｂ－Ⅱ－ｂ類：口径が15cm前後のもの。

Ｂ－Ⅲ類：口径18cmで、口縁部は大きく内湾気味に開き、口縁部はヨコナデにより外反する。白色系のものである。

Ｂ－Ⅳ類：口径14cm前後で、器高４cmを測る。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外反する。



第205図　土師質土器杯分類表（S＝$\frac{1}{4}$）

ｃ）杯

ロクロ成形で、器高３cm以上、口径８cm以上のものである。以下口径及び口縁部、底部の形態的な特徴で分類を行う。

Ａ類：口径13cm以上で、口縁部が外反するもの。

Ｂ類：口径10～12cm前後で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。さらにこの中で、底部の形態的特徴により細分を行う。

Ｂ－Ⅰ類：底部の器壁が厚く台状の底部を有するもの。

Ｂ－Ⅱ類：Ｂ－Ⅰ類と同形態であるが、器壁が薄く平底なもの。

Ｂ－Ⅲ類：平底で、口径と底径の比率が２：１になるもの。

Ｂ－Ⅳ類：平底で、口径と底径の比率が３：１になるもの。

Ｃ類：口径９cm前後で、体部から内湾して外上方に立ち上がり、口縁部に至るもの。

ｄ）鍋

鍋は、鍔の有無で大きく分類を行い、その中でさらに形態、手法の特徴で細分した。

Ａ類：口縁部下に鍔を有し、胴部に最大径をもつ。口縁部は内傾し、端部は面取りを行う。

Ｂ類：口縁部下に鍔を有さないもので、形態、手法の特徴により細分を行う。

Ｂ－Ⅰ類：肩部は内傾し、口縁部はやや肥厚して外反する。

Ｂ－Ⅱ類：胴部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。

Ｂ－Ⅲ類：胴部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。Ｂ－Ⅱ類に比べ器高が浅い。

Ｂ－Ⅳ類：胴部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し端部は面をなす。

Ｂ－Ⅴ類：胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は外側からヨコナデが施され内傾する。

Ｂ－Ⅵ類：口縁部は内傾し、胴部外面に斜格子の叩きが施される。

瓦質土器

瓦質土器の中で、多量に出土している鍋の分類を行うことにする。大きく鍔の有無で分類し、さらに形態的な特徴によって細分する。

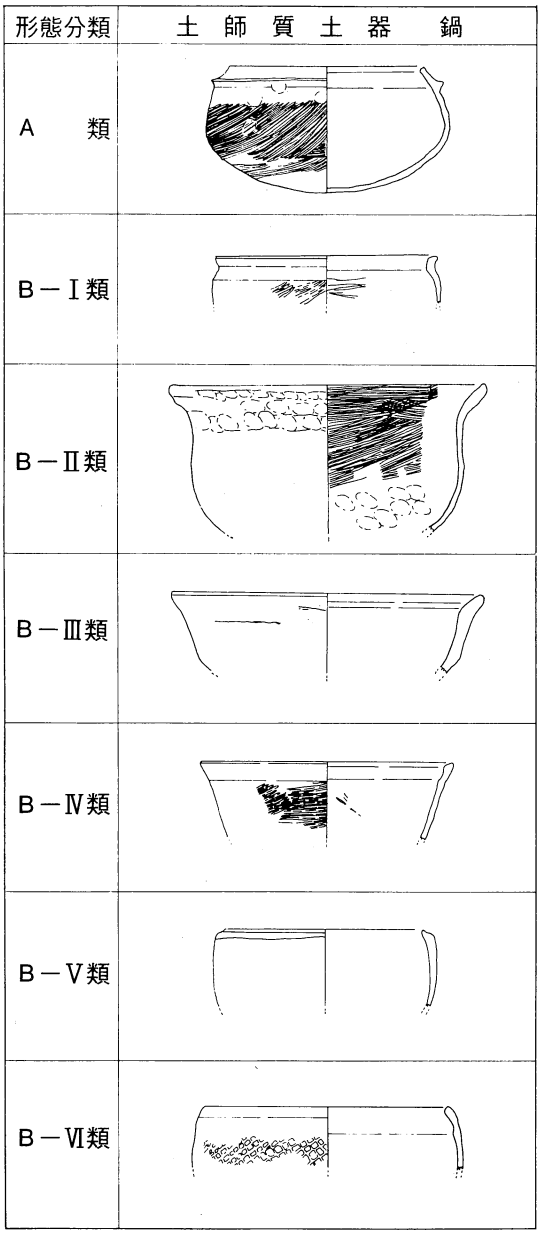
Ａ類：口縁部下に鍔を有するもので、胴部から脚が付く。胴部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は内傾する。

Ｂ類：口縁部下に鍔を有さないもの。形態的な特徴により細分する。

Ｂ－Ⅰ類：球形の胴部を有し、頸部で屈曲し口縁部は外傾する。

Ｂ－Ⅱ類：胴部から内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反気味になる。

Ｂ－Ⅲ類：胴部から内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。

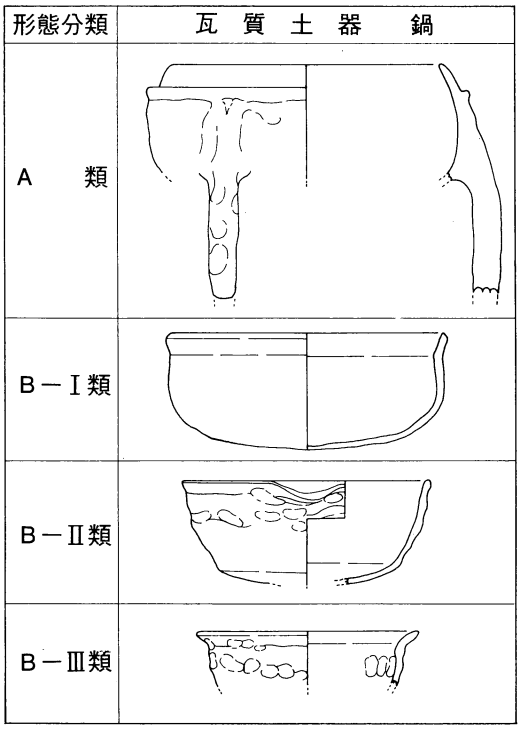


第206図　土師質土器鍋分類表（Ｓ＝$\frac{1}{8}$）

以上４類に分類を行ったが、Ｂ－Ⅰ類においては、口縁部の形態が上方に立ち上がるものをさらに細分できる可能性があるがここでは大きくＢ－Ⅰ類の範疇で捉えていくことにする。

(2) 遺物の出土状況と共伴関係について

田村遺跡群出土の土師質土器、瓦質土器と国内産陶器、輸入陶磁器の共伴関係について、各調査区を概観し出土状況の良好な遺構を抽出してみたい。なお、土師質土器、瓦質土器については前述した分類に従って述べることにし、輸入陶磁器は横田・森田編年を使用し、国内産陶器は、備前・間壁[註4]編年、常滑・赤羽編年、瀬戸・井上[註5]編年を使用して説明していく。[註6][註7]



第207図 瓦質土器分類表（S＝1/6）

Loc. 1では、包含層出土の遺物が多く、P4のみで土師質土器小皿と瓦器椀が共伴している。小皿は、A－Ⅱ－b類で瓦器椀は底部破片で明確でないが13世紀後半のものと考えられる。Loc. 4では、溝と井戸出土の遺物があるが、その中で屋敷址を囲む溝のSD1・3から多量に出土している。SD1では、瓦質土器の鍋でB－Ⅰ類が多い。土師質土器は、細片が多く不明な点が多いが、皿の中で口径が広く器高がやや深い点などからB－Ⅳ類の範疇に入ると考えられる。国産陶器は、常滑焼が出土しており Ⅲ期のものである。輸入陶磁器では、龍泉窯系の青磁でⅠ－4、Ⅰ－5類が出土している。白磁はⅣ類である。これら輸入陶磁器類は、12～13世紀中葉に編年されているもので、他の遺物と比較すると古く位置づけられ、伝世された可能性がある。SD3では、SD1同様土師質土器の皿はB－Ⅳ類があり、瓦質土器はB－Ⅰ類が多くを占めている。国産の陶器は少なく、備前焼の擂鉢が出土しているのみで、Ⅲ期からⅣ期にかけてのものである。輸入陶磁器は、古いものと新しいものが混在している。その中で特に注目されるものは、高麗青磁で12～13世紀頃生産された梅瓶が出土している。Loc. 6は、良好な溝に囲まれた屋敷址を検出した調査区である。この屋敷址を囲む溝からの出土遺物が多い。土師質土器は少なく、皿はB－Ⅳ類で、鍋はB－Ⅰ類が存在する。瓦質土器が多量に出土しており、鍋でB－Ⅰ類が多く占める。その中で若干A類が存在している点が注目される。国産陶器類は、Ⅳ期初頭の備前焼擂鉢や、伝世品と考えられるが、瀬戸の八床窯期の製品で瓶子の口縁部破片が出土している。その他、14世紀に生産されたと考えられる魚住焼の捏鉢が出土している。Loc. 7では、良好な遺構は少ないが、溝のSD2から土

師質土器で皿のＢ－Ⅳ類と、備前焼の擂鉢でⅣ期に編年されるものが共伴している。

Loc. 13では、ＳＤ１の出土遺物に共伴関係をみることができる。土師質土器は、杯がＣ類、鍋はＢ－Ⅲ、Ｂ－Ⅴ、Ｂ－Ⅵ類が存在する。備前焼はⅤ期の擂鉢、青磁は稜花皿や線描き細蓮弁文の碗、染付は口縁部で外反する碗が出土している。このＳＤ１は16世紀に位置付けることができる。Loc. 14では、土坑、ピットに良好な共伴関係をみることができる。土坑のＳＫ31からは平安時代後期と考えられる良好な土師器が出土している。ピット群ではＰ33で、土師質土器小皿のＡ－Ⅱ－ｂ、Ａ－Ⅲ類、Ｐ34で、小皿のＡ－Ⅲ類と皿のＡ－Ⅰ類が共伴している。Ｐ35では、土師質土器小皿のＡ－Ⅱ－ａ、Ａ－Ⅱ－ｂ、Ａ－Ⅲ類と、杯でＢ－Ⅰ、Ａ類が存在する。Loc. 15では、ＳＤ１の遺構を抽出することができる。ＳＤ１は東西に流れる単独の溝であり、若干古代の遺物も混入しているが、良好な土師質土器の杯と小皿が出土している。杯は、口縁部が外反するＡ類で、小皿はＡ－Ⅱ－ｂ類が存在する。13世紀に生産されたと考えられる瓦器椀と共伴している点が注目される。Loc. 19では、Ｌ字状に屋敷を囲むＳＤ10をみることにする。ＳＤ10では、土師質土器で皿のＢ－Ⅰ－ａ類、鍋はＢ－Ⅴ類が存在する。輸入陶磁器は、高台アーチ状を呈する白磁の皿、幅広の蓮弁文の碗や細蓮弁文の碗が出土している。15～16世紀に位置付けできるものである。

Loc. 21では、土坑、溝、井戸に良好な資料が存在する。ＳＫ60では、土師質土器で皿のＢ－Ⅰ－ａ類と杯のＢ－Ⅲ類が共伴している。ＳＫ76でも同様なことがいえる。ＳＥ３では、土師質土器杯のＢ－Ⅰ、Ｂ－Ⅱ類と備前焼Ⅳ～Ⅴ期にかけての擂鉢、甕が共伴している。ＳＤ４・５・９もＳＥ３と同様であるが、さらに16世紀代の青磁、染付類が伴っている。Loc. 25のＳＤ１では、土師質土器の皿でＢ－Ⅰ－ａ類が存在し、鍋は鍔を有するＡ類が多い。また、瓦質土器の擂鉢と共に鍋のＢ－Ⅰ類が共伴している。備前焼をみるとⅣ期のものがほとんどで、輸入陶磁器の青磁は、15世紀のものが多い。これらの出土状況からＳＤ１は、15世紀代に機能したと考えられる。

Loc. 31Ａは、良好な溝に囲まれた屋敷を検出した調査区である。屋敷を囲む溝としては、出土遺物は少ないが、その中でも土師質土器の杯と瓦質土器の鍋が共伴している。杯はＢ－Ⅱ類、鍋はＡ類とＢ－Ⅰ類が存在し、Ａ類がその中でも多くを占めている。その他は、14世紀に生産されたと考えられる魚住焼の捏鉢が出土している。屋敷内のＳＥ１からの出土遺物は、瓦質土器の鍋Ａ類とＢ－Ⅱ類が存在し、常滑焼でⅢ期の大甕が共に出土している。これらのことから、Loc. 31Ａの屋敷は、14～15世紀初頭に機能したとみることができる。Loc. 31Ｂも屋敷址を検出した調査区であるが、Loc. 31Ａと比べると小規模である。屋敷を囲むＳＤ３からの遺物をみていくとＳＤ３では、土師質土器の皿、杯、備前焼、輸入陶磁器が出土している。土師質土器の皿はＡ－Ⅱ類、杯はＣ類である。備前焼はⅤ期の擂鉢である。輸入陶磁器は、白磁の端反りの形態を有する皿である。その他、唐津焼の皿も出土している。これらの遺物から時期を16世紀後半におくことができる。Loc. 39Ｂでは、ＳＤ６・７から主に遺物が出土している。ＳＤ６を

みると、土師質土器の皿がB－Ⅰ－a類、杯がB－Ⅲ類である。さらに鍋はA類が大半を占めている。これに備前焼Ⅳ期の擂鉢が共伴している。Loc.25のＳＤ１と同様な出土状況を示している。

Loc.40では、ＳＤ１から土師質土器でB－Ⅲ類の杯と、鍋でB－Ⅱ、B－Ⅴ類が出土し、備前焼はⅤ期、輸入陶磁器では染付が出土している。Loc.42は、田村城館内に位置する調査区である。他の調査区に比べ、中世の遺物が多量に出土している。土坑及び溝から良好な一括資料を得ることができた。土坑ではＳＫ96があげられる。ＳＫ96は、一括して土器が廃棄されており、共伴関係をさぐる上で良好な遺構である。このＳＫ96の詳細は後述することにする。溝では、ＳＤ２・７の遺物をみることにする。ＳＤ２においては、土師質土器の皿類が多く出土し、ＳＤ７は反対に杯類が多い。両溝とも皿はB－Ⅰ－a類が出土し変化はないが、杯類は、ＳＤ２がB－Ⅲ類、ＳＤ７がB－Ⅳ類と分類することができる。しかし、その他の遺物の構成が変わらないことから、ほぼ15世紀後半～16世紀にかけて杯と皿を分けて一括廃棄したものと考えられる。ここでは杯、皿と同様に小杯が多く出土している。ＳＤ３では、量的に少ないが、土師質土器皿でB－Ⅳ類と備前焼Ⅳ期初頭の擂鉢が出土している。ＳＤ２・７に比べるとやや古くなると考えられる。Loc.43で注目される遺物は、田村城館の外堀から共伴して出土した土師質土器皿類と御札である。土師質土器は皿と小皿が存在し、皿はB－Ⅰ－b類で、小皿はB－Ⅰ類である。共伴した御札は、大永年間の紀年銘を有しており、時期を明確におさえることができた。

(3) Loc.42、ＳＫ96の出土遺物について

遺物の出土状況と共伴関係について概観してきたが、遺物は、各調査区とも屋敷址を囲む溝と土坑から出土しているものが多い。その中で、Loc.42のＳＫ96からは、土師質土器が一括して多量に出土しており、一時期に廃棄されたものと考えられる。ここでは、ＳＫ96から出土した遺物について説明を加え、若干の考察を行うことにする。

ＳＫ96は、田村城館内でLoc.42の南東部に位置する。出土遺物は、床面直上及び埋土中より多量の土師質土器が重なりあった状況で出土した。器種をみると、皿、小皿、杯、小杯が認められる。前述した形態分類に従うと、皿はB－Ⅰ－a、B－Ⅱ－a、B－Ⅱ－b類、杯がB－Ⅲ類、小皿がB－Ⅰ類である。土坑内出土の土師質土器の個体数を割り出してみる。個体数の計算は、口縁部計測法を使用し行った。本遺構の出土品で分類・計測の対象としえた口縁部破片数は、931片である。完形品に換算[註8]すると123個体分で、小杯が19個、杯が15個、皿の中でB－Ⅰ－a類が86個、B－Ⅱ－b類が３個である。図示でき得たものと合計すれば、小杯が36個、杯が47個、皿の中でB－Ⅰ－a類が117個、B－Ⅱ－a類が４個、B－Ⅱ－b類が13個である。総計217個体分が一括廃棄されていることになる。この中で特徴として大きく捉えることができる褐色系、白色系の遺物をみてみると、杯類はすべて褐色系で、皿はB－Ⅰ－a類が

褐色系で、Ｂ－Ⅱ－ａ、Ｂ－Ⅱ－ｂ類は白色系を呈している。白色系の皿は、17個体分出土していることになる。これらの白色系の土師質土器の皿をみるとロクロは未使用であるが、非常に丁寧な作りである。褐色系の皿類と比べると成形段階において技術的な差を見いだすことができる。高知県内では、芳原城から同類のものが出土している。これらは、「白カワラケ」と呼ばれているものであり、畿内からの搬入品と考えることができる。[註9] 本土坑から出土した土師質土器類は、白カワラケ以外にも芳原城出土のものと同一の形態を有するものが多い。これらのことから、一括廃棄された時期は、芳原城が機能した時期とほぼ同一と考えてよい。本土坑から共伴して出土した輸入陶磁器の青磁・碗も、芳原城出土の青磁と同類である。芳原城では、明応２年という紀年銘を有する護符が共伴して出土していることから、15世紀終末から16世紀初頭に機能した時期をおくことができる。次にこの時期の田村における細川氏の動行をみてみたい。文亀元年から永世年間における田村では、①文亀元年（1501年）１月、細川勝益が田村庄に桂昌寺を建てる。②文亀二年（1502年）6月４日、細川勝益没す。③永世四年（1507年）６月、管領細川政元が謀殺されたため、細川一族上京する。以上の大きな歴史的背景がある。土坑が217個体分の土師質土器を一括廃棄されたという性格を持っていることと、前述した細川氏の動行とを一致させることは、時期尚早と考えるが、田村城館内に位置しているＳＤ２・７で、ＳＫ96出土の土師質土器と同形態のものが多量に廃棄されていることを考えあわせると興味深い点である。今後田村城館内での広い範囲の調査を期待するところである。以上のことから、ＳＫ96出土の土師質土器類は、時期を大きく捉えても15世紀後半～16世紀前半に位置付けることができる。

(4) 編年試案について

今回の調査で検出した遺構の中で、特に国産陶器類と共伴して出土した土師質土器、瓦質土器を中心に、その変遷を考えていきたい。以下４期に区分して概要を説明していく。

Ⅰ期（13世紀）

Ⅰ期として考えられる遺構は、Loc. １のＰ４、Loc. 15のＳＤ１、Loc. 14のＰ33～35である。瓦質土器類は出土しておらず、土師質土器の小皿、皿、杯類を位置付けることができる。小皿はＡ－Ⅱ－ａ、Ａ－Ⅱ－ｂ、Ａ－Ⅲ類、皿はＡ－Ⅰ類、杯はＡ類である。Loc. １のＰ４、Loc. 15のＳＤ１で、13世紀と考えられる瓦器・碗と共伴しており、また土佐国衙跡[註10]のＳＤ17でも同様な器種構成で出土している。

Ⅱ期（14～15世紀初頭）

Ⅱ期として考えられる代表的な遺構は、Loc. ４のＳＤ１・３、Loc. ６のＳＤ１、Loc. 31ＡのＳＤ１、ＳＥ１がある。この期で特徴的なことは、瓦質土器の鍋が多量に出土していることである。土師質土器の鍋は若干Ｂ－Ⅰ類が存在するのみである。土師質土器の皿でＢ－Ⅳ類も出土しているが、Loc. 42のＳＤ３の出土状況を考えるとⅡ～Ⅲ期にかけてのものと考えられる。

杯類は、Ｂ－Ⅱ類が大半を占めており、Ⅱ期に位置付けられる。瓦質土器の鍋は、Loc. 6でＢ－Ⅰ類が多く、Loc. 31Ａではａ類が多い。共伴関係から、Loc. 6の溝がLoc. 31Ａの溝に比べやや後出すると考えられる。

Ⅲ期（15世紀前半～16世紀前半）

Ⅲ期は、田村城館に居城した守護代細川氏の最盛期から衰退期にかけての時期である。細川氏が上京した永世四年を含め文亀～大永年間までは16世紀前半に入るものである。このⅢ期は、数多く遺構を取り上げることができる。その中で良好な一括資料としては、Loc. 42のＳＫ96がある。土師質土器の皿は、Ｂ－Ⅱ－ａ、Ｂ－Ⅰ－ａ、Ｂ－Ⅱ－ｂ類、杯はＢ－Ⅲ類、小皿はＢ－Ⅰ類である。また、Loc. 42のＳＤ７から出土している土師質土器杯Ｂ－Ⅳ類や、Loc. 43で田村城館の外堀から大永年間の紀年銘がある御札と共伴関係にある皿のＢ－Ⅰ－ｂ類、小皿Ｂ－Ⅰ類も含まれる。土師質土器の鍋は、Ａ類が大半を占めており、15世紀を境にして鍋は瓦質土器から土師質土器へ大きく主流が移るのではないかと考えられる。

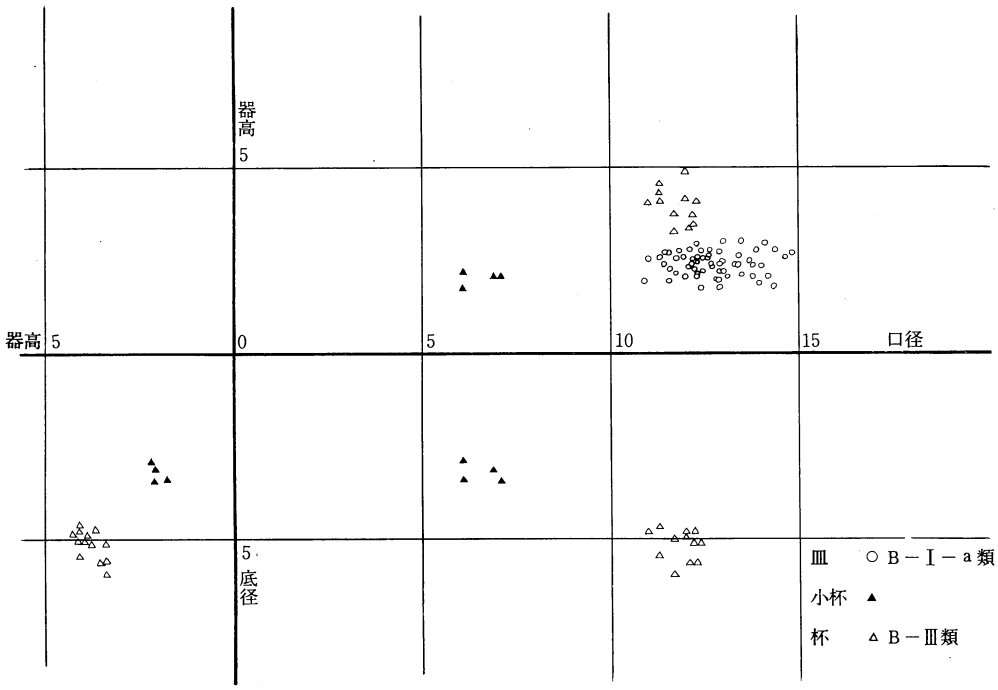
Ⅳ期（16世紀前半～16世紀後半）

Ⅳ期は、細川氏によって支配され統制されていた守護領国体制が終焉し、土佐において戦国時代の突入による国人諸豪族の台頭をみる時期から、長宗我部氏により土佐国内が統一された時期である。このⅣ期に位置付ける遺構としては、Loc. 31ＢのＳＤ３、Loc. 39のＳＥ１、ＳＫ111をあげることができる。土師質土器の皿はＡ－Ⅱ類、杯はＣ類が主流を占める。鍋はＢ－Ⅴ、Ｂ－Ⅵ類が出現している。土師質土器皿、杯類は主にⅣ期でも後半に位置付けできるものと考えられる。

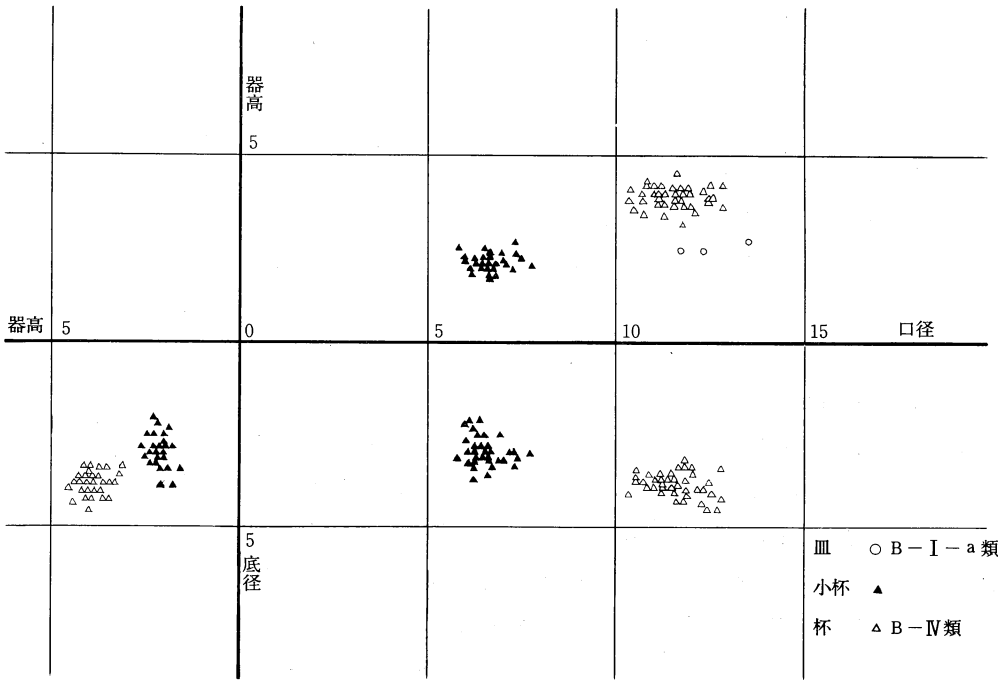
以上、簡単に４期区分した概要を述べてきたが、土師質土器、瓦質土器はその形態的特徴によって、時間的変遷の大略を摑むことができた。土師質土器の杯は、すべてロクロ成形であり、口縁部、体部、底部の特徴をみると、13世紀のものは、口縁部が外反し、14・15世紀になると体部から直線的に外上方へ立ち上がり口縁部に至るものになる。その中でやや古く位置付けられるものは、台状の底部を有するものであり、次に台状の底部が消滅し、平底に変わり、さらに口径に対して底径が狭くなるという変化がみられる。16世紀後半になると、器壁が厚くコップ状の形態を有するものに変化する。体部から口縁部にかけて内湾気味に外上方に立ち上がる特徴がある。土師質土器皿で、13世紀にみられるものは杯と同様にロクロ成形で口縁部が外反する特徴を有する。14世紀に位置でき得る良好な資料は抽出することができなかった。15～16世紀前半にかけては、ロクロ未使用で、口縁部をヨコナデし、やや外反させたものである。その中でやや古く位置付けられるものは、大振りの皿で、口径が大きく器高がやや高いものである。15世紀後半になると畿内からの搬入品もらみられるようになる。16世紀後半になると、ロクロ成形のものが再度出現し、小振りで体部から内湾気味に外上方に立ち上がる形態をもつ皿等がある。小皿では、13世紀は口縁部を外反させるものや、高台付小皿が主流を占める。分類した中で、Ａ－Ⅰ－ａ、Ａ－Ⅰ－ｂ、Ｂ－Ⅱ類は不明な点が多く明確でないが、14～15世紀に

は位置付けることが可能と考えられる。15世紀後半から16世紀にかけては、手づくねによる小皿が主流を占めてくる。これに伴うものとして小杯が存在するが、これはA－Ⅰ－a、A－Ⅰ－b類の小皿から変化してきたものと考えられる。土師質土器の鍋は、15～16世紀に盛行したものと考えられる。鍔を有するものから、そうでないものに変化してくるものと考えられる。その中でB－Ⅰ、B－Ⅳ類は不明で、明確に位置付けることができない。瓦質土器の鍋は、14世紀頃に鍔を有するものが盛行し、その後B－Ⅰ類の鍋に変化してくるものと考えられる。15世紀後半になると瓦質土器から土師質土器に大きく主流が変わってくる。器種の構成として現段階で捉えられるものは、Ⅰ期には土師質土器の小皿、皿、杯、椀が存在し、Ⅱ期では椀、皿が数少なく、杯、小皿、瓦質土器鍋、擂鉢が主流で、Ⅲ・Ⅳ期では小皿、皿、杯、鍋があり、新しく小杯、釜、鉢の器種が出現してくる。

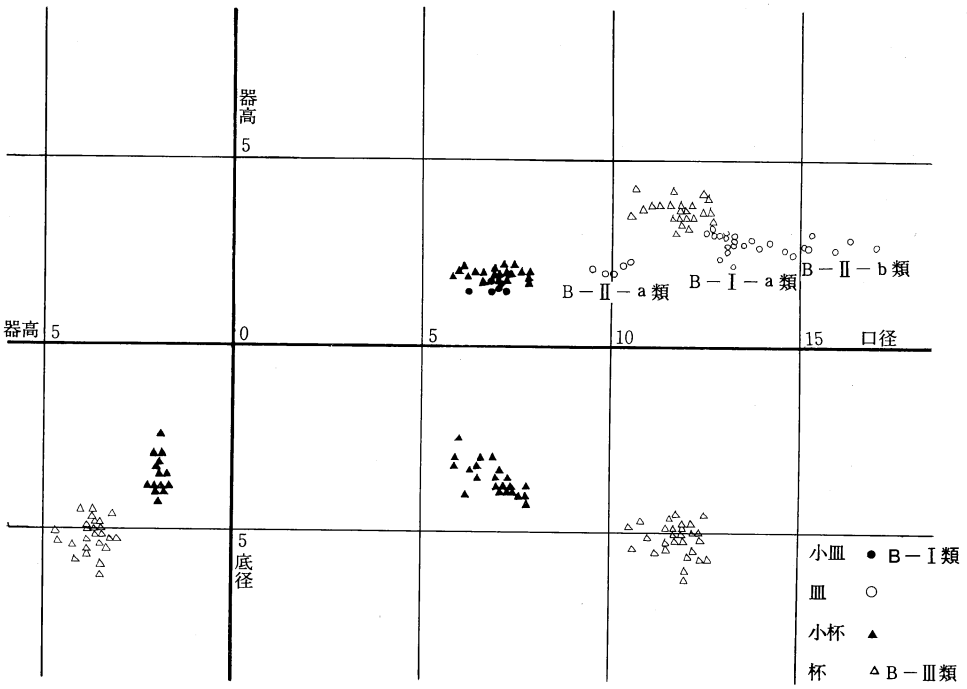
以上、中世の土器について形態分類及び編年試案の説明を加えてきた。しかし、今回の報告では、種々の問題から充分な検討を加えることができなかった。また、この試みは、県内では初めての試みでもあり、今後の研究によっては、再検討しなければならない点や、訂正する点が多くあることを承知頂きたい。



第29表　Loc. 42　ＳＤ２出土土師質土器法量　　単位cm



第30表　Loc. 42　ＳＤ７出土土師質土器法量　　単位cm



第31表　Loc. 42　ＳＫ96出土土師質土器法量　　単位cm

2．遺構

田村遺跡群において検出された中世遺構の中の圧巻は、溝に囲まれた屋敷址群である。これらの遺構は、溝による区画が歴然としたものから若干不明瞭なものまで合わせて計31区画ほど確認された。時期的にみても、14世紀代に成立したものから、17世紀代に廃絶したものまであり、かなり大きな時間的幅をもっている。

ここでは、まず、各調査区毎に紹介されたところの屋敷址に関する集計資料を提示し、次に、同遺構について、『長宗我部地検帳』の記載事項との照合を試み、最後に、若干の考察を加えてみたい。

(1) ＳＨ１～31の概略

本項では、各調査区において検出された「溝に囲まれた屋敷址」に対して、便宜上、ＳＨの略号を付して説明することにしたい。ＳＨ番号は、原則として西北部の調査区より順に表記したが、各Loc.番号とＳＨ番号との関連は第32表の通りである。(例えば、ＳＨ１とはLoc.34で確認されたところの溝に囲まれた屋敷址を指す。) なお、同表において、各ＳＨの概略を記してあるので、第209～219図の略図と合わせて参照頂きたい。

また、各ＳＨを構成していたと判断される掘立柱建物址は、重複しているものを含めて総計378棟に及ぶが、これらを単位面積別に集計したのが第33表である。なお、柱穴が密集して検出された地点等では、建物址の決定方法にも難があり、この表にどれだけの資料的価値があるか疑問ではあるが、大略を把握する上での参考にはなり得ると考える。

(2) 『長宗我部地検帳』の記載事項とＳＨ

『長宗我部地検帳』は、周知の如く、土佐の中・近世史研究上の一等史料である。そのうち天正16年（1589年）の「香美郡上田村地検帳」と「香美郡下田村庄地検帳」とに、当田村地区一帯を対象とした検地状況が記されている。

ところで、当地区においては、幸いにも天正年間の地名呼称が「かなり正確に踏襲され現在にいたっている」[註11]ため、現在の小字名から容易に各調査区の天正年間の状況を類推することができる。よって、本項では、各ＳＨ毎に『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』と略す）の記載事項との比較対照を試みてみたい。なお、各ＳＨの全体的な位置関係と小字名とを併記したのが第208図である。

ＳＨ１

ＳＨ１は小字横手の南東部に位置するが、「ヨコテ」について『地検帳』には次のように記されている。

第32表　SH 1 ～31の概略

SH	Loc.	所在地（小字）	存続時期 世紀	敷地面積 ㎡	屋敷を囲む溝の南北軸方向	溝併行の建物数 棟	付属施設			備考
							細分する溝	井戸（位置）	屋敷墓（位置）	
1	34	横手	15～17初頭	1,488	N－20°－E	11	4	SE1（南東部）		
2	33	横手前	15～16	1,197	N－18°－E	21	1	SE1（南東部）	SK40（南西部）	
3	31A	コキカ内	14～15初頭	1,360	N－16°－E	17	1	SE1（南部）	SK28（南東部）	区画明瞭。
4	31B	〃	16～17初頭	1,189	N－12°－E	6	1			南西部は調査区外。
5	30	柿の木	14～15初頭	1,217	N－11°－E	14	1			東部は調査区外。
6	39A	寺の前	16～17初頭	382	N－18°－E	2	0			北西部は調査区外。区画不明瞭。
7	〃	〃	〃	687	N－17°－E	8	0		SK2～5（北西部）	北部は調査区外。区画不明瞭。
8	〃	〃	〃	1,180	〃	11	0	SE1（南東部）		北部は調査区外。
9	〃	〃	〃	1,728	N－20°－E	12	0		SK18（南東部）	区画不明瞭。
10	39B	〃	16	1,920	〃	33	2	SE1（南東部）		区画明瞭。北辺の溝は堀状を呈す。
11	39C	〃	15～16	1,640	N－22°－E	6	3	SE2（南寄り）		
12	〃	〃	15～17初頭	1,056	N－20°－E	7	7	SE1（南東部）		
13	40	桑の本	16	1,872	〃	37	0			SD1の南辺が曲北して屋敷を細分している。
14	〃	〃	〃	640	〃	12	0			
15	21	正吉	〃	690	N－15°－E	15	0	SE2（南東部）		北東部は調査区外。
16	〃	〃	〃	1,296	〃	29	0	SE3（南部）		
17	20	〃	15～16後半	1,232	N－20°－E	13	1	SE1（南東部）	SK17（東部）	
18	19	〃	16	377	N－18°－E	7	0			西部は調査区外。
19	〃	〃	〃	324	N－20°－E	7	0			
20	〃	〃	〃	391	〃	7	0			
21	〃	〃	〃	323	〃	8	0			
22	18	スエン坊	15～16	672	N－22°－E	6	0	SE1（南東部）		
23	〃	〃	〃	312	〃	6	0			
24	4	下窪田	14～15初頭	462	N－15°－E	6	0	SE1（南部）		
25	〃	〃	〃	640	N－22°－E	9	1			
26	25	ワカサカ内	15	1,111	N－21°－E	7	1	SE1（南東部）		西部は調査区外。
27	〃	〃	〃	1,758	〃	4	0	SE2（南東部）		
28	13	東松木	15～16	1,268	N－20°－E	19	3	SE1（中央東寄り）	SK2（北西部）	
29	14	フクナカ	〃	1,330	N－18°－E	15	0		SK32～34（北部）	
30	6	フクタ	14～15初頭	698	N－19°－E	10	0	SE1（南東部）	SK1・2（北西部）	
31	10	ソネ	16	346	N－4°－E	13	0			南西部は調査区外。

（注）① 敷地面積は、溝に囲まれた区画内の面積を指す。また、溝が調査区外へのびる場合は、確認部のみの面積を記している。

② 溝併行の建物数は、重複関係にあるものも、それぞれ1棟として算出している。

第33表　掘立柱建物址の面積別棟数

各SBの面積 / SH	0～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30～35	35～40	40～45	45～50	50～55	55～60	60～65	65～70	70～75	75～80 (㎡)	計(棟)	備考
1	2	3	4		1	1											11	東側にも建物群あり。
2	2	4	6	4	2		2				1						21	西側にも建物群あり。
3	1	5	2	2	2	3		1		1							17	
4		2	2					1		1							6	南西部は調査区外。
5	1	3	5	2	1	2											14	東部は調査区外。
6	2																2	北西部は調査区外。
7		5			3												8	北部は調査区外。
8	1	1	5	1	2			1									11	北部は調査区外。
9		3	5	1	1	1	1										12	
10		4	8	10	6		1	1	2							1	33	
11		1	1	1	1	2											6	
12		3	1	2		1											7	
13		4	3	8	4	6	9	3									37	
14		1	1	1	2	1	2	2		1					1		12	
15		2	4	4	2	3											15	北東部は調査区外。
16	2	7	5	5	3	4		3									29	
17	2	4	2	1	3			1									13	
18		3	2			1				1							7	西部は調査区外。
19	1	2	2	1			1										7	
20				4		1				1	1						7	
21		2	3	2	1												8	
22	2	3	1														6	
23		5		1													6	
24		2	2		1	1											6	
25		2	1	5							1						9	
26	2	2	1	1	1												7	西部は調査区外。
27				1	2									1			4	東側にも建物群あり。
28	1	8	4	4	1	1											19	
29	4	5	2	1	1		1	1									15	
30	1	1		2		2	1	2	1								10	
31			1	3	3	2	1	1	2								13	南西部は調査区外。 北側にも建物群あり。
計(棟)	24	87	73	67	43	32	19	17	5	5	3	0	0	1	1	1	378	

(注)　① 0～5は0㎡以上5㎡未満を意味する。
② 重複関係にある掘立柱建物址もそれぞれ1棟として扱った。

ヨコテ道ソく本五反　　同（上田村）
一丶四反拾三代五分　中　　桂昌寺分

同し東本二反
一丶壱反四十八代二分　中　衛市門原二郎左

同
永野四良兵衛給

ヨコテ　　同　森本神兵衛名
一丶四十代　中出ヤシキ代　　香宗御分
神兵衛る

同し北　　同　朝倉衆
一丶廿代　中出ヤシキ四代　　藤崎三良左衛門給
喜兵衛る

同し東　　同
一丶拾五代　中出ヤシキ三代四分　　池添源五良給
喜兵衛る

ヨコテ　　上田村　浜口四良兵衛名
一丶四十三代三分　中ヤシキ　　香宗御分
四良兵る

同し南　　同　法蔵新左衛門名
一丶四十九代　中ヤシキ　　同し

ＳＨ１は、15世紀から17世紀初頭にかけて存続したものと判断されており、天正年間の５つの「中ヤシキ」のうちのいずれかと関連があるものと考えられる。ＳＨ１の位置及び面積からして、特に末尾の屋敷との結び付きが濃厚である。

ＳＨ２

ＳＨ２は小字横手前の北東部に位置するが、「ヨコテノ前」について『地検帳』には次のように記されているだけである。

ヨコテノ前本壱丁　　同（上田村）
一丶九反卅三代　上　　桂昌寺分

ＳＨ２は、15世紀から16世紀前半にかけて存続したものと判断されている。よって、当地点は、天正年間には水田化してしまい、９反余に及ぶ土地が「桂昌寺分」となったものである。なお、桂昌寺（現・細勝寺）は、文亀元年（1501年）に守護代細川勝益によって建立された日蓮宗寺院であり、守護代館の南西部に位置する。

ＳＨ３～５

ＳＨ３は、小字コキカ内の北東に位置し、ＳＨ４はその南側に位置する。また、ＳＨ５は小字柿の木の東部に位置している。「コヽキカ内」及び「カキノ木」について『地検帳』には西から東へ向かって次のように記されている。

コヽキカ内本七反卅代　同(上田村)正次名
一ヽ七段拾弐代　中　同　し(香宗御分)

土ゐノ西　同　同し
一ヽ四十代　中ヤシキ　同　し
四良兵衛ゐ

土ゐヤシキ　同　同し
一ヽ四十五代　中ヤシキ　同　し
森本与介ゐ

カキノ木　同　本人支孫衛門分
一ヽ壱反四十弐代五分半　中　森　本　右　馬　進　給

同し東　同　同し
一ヽ壱反拾六代　中　同　与　介　給

同し北　同　同し
一ヽ廿八代二分　下ヤシキ　同　し　給

同し東
一ヽ廿七代　下ヤシキ　伊都多　シメノホテン 正月六日マトテン　同　同し
同　し　給

ＳＨ３・５は、14世紀から15世紀初頭にかけてのものと考えられており、ことにＳＨ３は区画が明瞭であり、大規模である。また、ＳＨ４は16世紀から17世紀初頭にかけて存続したものと判断されている。したがって、ＳＨ４は、「土ゐの西」あるいは「土ゐヤシキ」のいずれかの「中ヤシキ」と関連をもつものと考えられ、位置からすると後者の可能性が強い。また、この「土ゐ」の呼称はおそらくＳＨ３の遺構から生じたものと推察される。註12

ＳＨ６～12

ＳＨ６～12はすべて小字寺の前に所在している。すなわち、北部にＳＨ６～８、中央部にＳＨ９・10、南部にＳＨ11・12が、それぞれ東南に並んでおり、当地区全域がＳＨで占められている。但し、ＳＨ６・７・９は、溝による区画がさほど明確ではない。

「寺ノ前」について、『地検帳』には、

寺ノ前
一、廿弐代 下畠

上田村
入 交 彦 作 給

同し
一、廿七代 下ヤシキ

同
同 し
孫四良ゐ

同し
一、壱反五代三分 中ヤシキ

同
同 し
主ゐ

同し
一、壱反八代一分半 中ヤシキ

同
同 し

同し西
一、卅七代二分 下畠

同
同 し 給

同し北
一、廿七代壱分半 中ヤシキ

同
同 し 給

同し
一、廿四代 中ヤシキ

同
同 し 給
孫左衛門ゐ

とあり、天正年間には４つの「中ヤシキ」と１つの「下ヤシキ」が存在したことを物語っている。

ところで、ＳＨ６～10およびＳＨ12は、存続時期の下限が16世紀後半から17世紀初頭とされており、これらが上記の「ヤシキ」群と関連をもつものと考えられる。とりわけ、ＳＨ10は、中央に最大規模の掘立柱建物址（ＳＢ39）を有し、堀とも呼ぶべき壮大な溝を北面に伴っており、「主ゐ」と記された「中ヤシキ」とのつながりが想定される。

ＳＨ13・14

ＳＨ13は小字桑の本の東寄りに位置しており、ＳＨ14は更にその北東に所在している。

「桑ノ本」について『地検帳』には次のように記されている。

桑ノ本
一、壱反 上出六代

同(上田村)
伊 勢 領
池添源五良扣

同し
一、壱反 上出壱代二分

同 正次名
香 宗 御 分

同し西
一、四十六代三分 上

同 九良左衛門名
同 し

一 桑ノ本
一、井六代 中ヤシキ

同 伊勢領 道衛ゐ
池添源五良扣

一 同し西
一、壱反八代 内中ヤ四代シキ 東く付ト有伊勢領ト有

同 弘瀬九ヤス衆兵衛給

一 同し本壱町
一、八反井代 上

同 伊勢領
池添源五良扣

SH13・14は、ともに16世紀のものと判断されており、これらが上記の2つの「中ヤシキ」と関連をもつものと考えられる。位置及び面積からして、SH13が「ヤス衆」、SH14が「道衛ゐ」とそれぞれ結び付く可能性が強い。

SH15〜21

SH15〜21はすべて小字正吉に所在している。すなわち、北部にSH15・16、中央部にSH17があり、南部にはSH18〜21が東西に並んでいる。うち、SH18〜21は、いずれも敷地面積が300㎡代であり、他のSHに比して小規模である。

「正ヨシ」について、『地検帳』には、

一 正ヨシヤシキ
一、壱反 中出七代ヤシキ

同(上田村)番匠 野村孫進給

一 同しノ前
一、四十九代 中

同 一良衛門ゐ
同 し 給

一 同し北
一、廿九代 中ヤシキ

同 同 し 主ゐ

一 同し南
一、拾六代 下ヤシキ

同 同 し 三良五良ゐ

一 同し前道かけて
一、四十四代二分 中

同 同 し

一 正吉ヤシキ外小田共ニ
一、四十八代 中出五代ヤシキ

同 祐乗坊分 の村三良左衛門ゐ

同し前
一、卅五代 中

同
同　し　分

同し西
一、卅代 出五代 中畠

同　森重名
香宗御分

同し
一、拾弐代三分 中

同　久重名
同　し

同し北外小田共二
一、四十五代 上ヤシキ

同　本吉松監物分
豊永弥九良給

同し西土ゐ
一、廿五代四分 中ヤシキ

同　本矢の分
岡林甚衛門給

同し成願寺ヤシキ
一、廿壱代 中ヤシキ

同　番匠
野村孫進給

同し南
一、卅八代三分半 中ヤシキ　井領田

上田村　井奉行
弘瀬七良兵衛給

同し
一、拾三代 中畠

同　久重名
香宗御分

同し南
一、拾六代 下

同　同し
同　し

とあり、1つの「上ヤシキ」と6つの「中ヤシキ」及び1つの「下ヤシキ」が、天正年間に存在していたことを伝えている。

ところで、ＳＨ15～21は、存続時期の下限が16世紀後半とされており、当然上記の「ヤシキ」群との関連が想定される。とすれば、これらの「ヤシキ」は、天正検地施行から時を置かずして廃絶したものと考えられよう。

ＳＨ22～25

ＳＨ22・23は、小字スエン坊の北部にあり、ＳＨ24・25は小字下窪田の南東部に位置している。前者の存続時期は、15～16世紀、後者のそれは14～15世紀初頭と判断されている。

「スエン坊」及び「下クホタ」について、『検地帳』には、

スエン坊本四反
一、三反廿代二分 上 神田上番御ケハイテン
内卅二代四分中畠

一同し東	同　同し　内田喜三良給
一、壱反　内出十六代中畠	同　し
一同し本二反	同　九良左衛門名
一、四十九代五分半　上	同　し
一同し	同　浜口四良兵衛名
一、四十五代一分　上	同　し
一同し本二反	同　田中市介給
一、四十八代　上	同　し
一同し東本二反	同　清永名
一、四十八代　上	同　し
一同し本二反	同　神兵衛名
一、壱反四十七代二分　上	同　し
一同し東	同　小工孫九良名
一、三反　上二代二分	同　し
同し道ソへ	同　藤右衛門名
一、四十六代四分　上	同　し
下クホタ	同
一、六段拾八代　上	入　交　彦　作　給

上田村　本入交孫衛門分
香宗御分
小工三良左衛門扣

とあり、天正年間には当地点は完全に水田化されている。

SH26・27

SH26は小字ワカサカ内の南西部にあり、SH27はその東に位置している。「ワカサカ内」について『検地帳』には次のように記されている。

ワカサカ内	同(下田村)健助名
一、壱反卅七代三分　下	同　し(弘岡分)
一同し東	同　サンテン分
一、五反　上出六代　浜田三良衛門員地	同　し

同し東
一、弐反四十七代半 上　　同　　留重名
細川源左衛門買地　　同　　し
千文太扣

同し　　同　　同し
一、三十代 中ヤシキ　　同　　し
同し

ＳＨ26・27は、ともに15世紀代の遺構と判断されており、天正期にはすでに水田下に埋没していたものと考えられる。なお、『地検帳』記載の「中ヤシキ」については、詳細が不明である。但し、ＳＨ26を切っている掘立柱建物址（ＳＢ１）がLoc. 25の西端で検出されており、同遺構が「中ヤシキ」と何らかの関連を有する可能性がある。

ＳＨ28・29

ＳＨ28は小字東松木の南東部に位置し、ＳＨ29は小字フクナカの南西部に所在する。両ＳＨは、属する小字は異にするものの、東西に隣接している。

「東松木」及び「フクナカ」について、『地検帳』には次のように記されている。

東松木　　同(下田村)　井上名
一、壱反卅七代五分 上　　同　　し(弘岡分)

同し東　　同　　新左衛門名
一、弐反 上出二分　　同　　し

同し東　　同　　熊谷伊豆分
一、弐反 上出一代二分　　同　　し

同し東　　同　　松木藤五良給
一、四反 上出四代半　　同　　し

同し東　　同　　五良大夫名
一、壱反十代 上出一代三分　　同　　し

同し東　　同　　田ノ内善助給
一、廿六代五分 上　　同　　し

同し東　　同　　福留名
一、四拾六代 上　　同　　し

同し東　　同　　正木新大夫給
一、壱反廿二代 上　　同　　し

フクナカ 一、四反卅四代 上	同 同　中島久兵衛給 し
同し東 一、弐反卅代 上出四十三代	同 同　左馬助名 し
同し東 一、弐反卅代 上出十一代一分	同 同　藤崎孫衛門給 し

ＳＨ28・29は、共に15世紀から16世紀にかけて存続したものと判断されており、当地点は天正年間にはすでに水田化を終えている。

ＳＨ30

ＳＨ30は小字フクタの北東部に位置するが、「フクタ」について『地検帳』には次のように記されている。

フクタ 一、弐反十代 上出中二代五分半	同(下田村)藤崎孫右衛門給 同　し(弘岡分)
同し西 一、壱反四十一代四分 上	同 同　福留名 し
同し西本五反 一、四反廿代 上	同 同　国分寺分 し
同し西 一、弐反 上出七代	同 同　サンテン分 し
同し西 一、弐反十代 上出十六代	同 同　北村右衛門給 し
同し西 一、弐反四十八代 上	同 同　五良大夫名 し
同しにし 一、壱反廿代 上出八代三分半	同 同　福留名 し

ＳＨ30は、14世紀から15世紀初頭にかけて存続したものと判断されている。したがって、天正年間には当地点は完全に水田化しており、長宗我部家臣の給地あるいは「国分寺分」及び旧名主層の「名」となっている。

SH31

SH31は小字ソネの南部に位置するが、「ソネ」について、『地検帳』には、

ソネ 一ヶ十七代 下ヤシキ	同(下田村)田村新七良給 同　　し(弘岡分)
同し東 一ヶ十代四分 下ヤシキ	下田村　中間半衛門給 同　　し
ソネ 一ヶ十三代四分 下ヤシキ	下田村　福留久兵衛給 弘　岡　分
同し北 一ヶ弐十代 下ヤシキ	同　　五良大夫名 同　　し
同し東 一ヶ拾八代三分 下ヤシキ	同　　正末新大夫給 同　　し
同し北 一ヶ中四代 下ヤシキ	同　　田ノ内善兵衛給 同　　し

とあり、6つの「下ヤシキ」が存在していたことを伝えている。

SH31は、16世紀代のものと考えられており、上記の「下ヤシキ」のうち、いずれかに関連をもつものと考えられる。なお、『地検帳』の記載に比して、SHの数が少ないのは、「下ヤシキ」が溝を伴っていなかったことによるものと推量され、実際、SH31の北側には多数の掘立柱建物址群が検出されている。

(3) まとめ

ここで、今一度第32表に立ち返り、前節での分析を踏まえながら「溝に囲まれた屋敷」について若干の考察を加えてみたい。

同表によれば、SHは、その存続時期を基準にすると下記の6群に分類できる。

A 群……14世紀～15世紀初頭（SH 3 ・ 5 ・24・25・30の5屋敷）

B_1群……15世紀（SH26・27の2屋敷）

B_2群……15世紀～16世紀（SH 2 ・11・17・22・23・28・29の7屋敷）

B_3群……15世紀～17世紀初頭（SH 1 ・12の2屋敷）

C_1群……16世紀（SH10・13～16・18～21・31の10屋敷）

C_2群……16世紀～17世紀初頭（SH 4 ・ 6 ～ 9 の5屋敷）

A群は、守護代細川氏の土佐入部（1380年頃）以前から存在していたと考えられるものであり、いずれも応仁・文明の大乱勃発（1467年）以前に完全に消滅している。これらの屋敷の規

模は、ＳＨ３・５が1,200㎡余の面積を有する他は、すべて700㎡未満となっている。溝による区画は、ＳＨ３及びＳＨ30では歴然としているが[註13]、ＳＨ５では不明瞭である。

B_1・B_2・B_3群は、ともに守護代細川氏の隆盛期に成立している。しかし、B_1・B_2群（但し、ＳＨ17を除く）は、長宗我部検地施行（1589年）以前に消滅しており、15世紀に成立した屋敷のうち検地段階まで存続したものは３例（ＳＨ１・12・17）のみである。これらの屋敷群の規模は、Ａ群に比してそれぞれ増大しており、B_1群及びB_3群はいずれも敷地面積1,000㎡以上を誇り、B_2群もＳＨ22・23の他は、すべて1,100㎡以上に及んでいる。また、溝による区画も総じて明瞭である[註14]。

C_1・C_2両群は、ともに16世紀代に盛行したと判断されるものであり、いずれも『地検帳』記載の「ヤシキ」との関連が想定され得る屋敷群である。C_1群は検地施行から時を置かずして廃絶したものと考えられ、C_2群も近世初期には消滅している。C_1・C_2両群の各屋敷の規模は、敷地面積1,100㎡以上が６（うち、1,700㎡以上が３）、600㎡代が３、300㎡代が６というように段階的な差異が顕著となっている。C_1・C_2両群の中には調査区外まで延びる可能性を有する屋敷址が含まれており、単純な一般論で論述する事は避けねばならないが、屋敷の規模に画然とした「格差」が認められるようになることは否定できない。また、この時期は田村遺跡群における「溝に囲まれた屋敷」の最終段階にあたると考えられ、C_2群消滅以降の時期に属する同類の遺構は皆無である。その故か、C_1・C_2両群の中には、溝による区画に規格性を欠くものが多くなっている。

ところで、以上６群の屋敷群には、それぞれ幾つかの共通点あるいは類似点が見い出せる。

第一に、各屋敷の存続期間がおおむね100年間前後であることが指摘される（但し、B_3群は例外である）。仮に、掘立柱建物の耐用年数を約30年とすれば、同一区画内においては２～３度の建て替えが行われたものと考えられる。したがって、一区面内に一時期に併存した建物は、主屋及びそれに従属する家屋等（厨・納屋・厩等）数棟であったと判断され、大規模な屋敷には下人小屋的な建物も包括されていた可能性もある[註15]。なお、約100年間という数字は、建物の腐朽等の自然的条件によってのみ規定されるのではないことは、B_3群の存在からも明らかである。

第二に、屋敷を囲む溝は、その規模に差異は認められるものの、南北軸方向は14世紀代に機能したものから17世紀代のものまで類似した数値を示しており、区画内の建物の方向もこれにほぼ平行である。これは、溝による区画が古代の条里制に強く規定されてなされたことによるものと判断される。ところで、敷地内を更に細分する形の溝も12例程検出されている。ここで注目される点は、このような細分溝は、C_1・C_2群の中では１例ずつしか認められず、他はすべて14・15世紀代に成立した屋敷に伴っているという事実である。仮に、この細分溝が屋敷内の居住者を区分するために設けられたものと考えることが許されるならば、中世の小農民階級の自立との関連を想定することも可能である。

第三には、井戸及び屋敷墓の存在が挙げられる。まず、井戸は、31区画のうち16区画の屋敷において検出された。16基のうち15基までが石組の井戸と判断されており、井戸底部には木製井筒が固定されている場合が多かった。井戸を所有している屋敷は、概して大規模な屋敷が多く、敷地面積1,000㎡未満のものはわずかに3例である。井戸は、大半が敷地内南東部に構築されており、北部や西部に位置するものは皆無であった。また、屋敷墓と判断される遺構は8例程検出されているが、同遺構の大半は上部や埋土中に集石を伴っており、屋敷を囲む溝のコーナー部内側に隣接して位置するという特徴がみられる。

以上、第32表を中心にして、「溝に囲まれた屋敷址」の概要を紹介してきた訳であるが、最後に、A群からC_2群に至る各屋敷群の消長の背景について付言してみたい。

A群は、田村遺跡群において確認された屋敷群の中では、時期的に最も古く位置付けられ、南北朝内乱期の前半には既に成立していたものと考えられる。言わば、「生成期」の溝に囲まれた屋敷群[註16]であるが、これらは、14世紀後半には守護代細川氏の田村城館入城という事態に直面しながらも、なお15世紀初頭まで存続している。このことからも、A群の住人は在地の名主層と判断して大過ないと考えられ、その消滅にも細川氏退転との繋がりは認められない。

B_1・B_2・B_3群は、ともに細川氏の勢力拡張期に成立しており、その成立には細川氏[註17]との関連も考えられる。故に、これらの屋敷の所有者としては、在地名主層以外の有力者（細川氏家臣）をも、その範疇に入れて考える必要があろう。しかし、屋敷の廃絶が細川氏の土佐退去（1507年）と時期的に一致するのはB_1群のみであり、B_2群（SH17を除く）は長宗我部氏隆盛に反比例するように衰滅しており、B_3群は近世初頭[註18]まで存続している。

C_1・C_2両群は、B_2群とは逆に、戦国時代における長宗我部氏の台頭に併行して成立している。『地検帳』の記載によれば、「ヤシキ」の住人として、同氏の給人が旧名主や農民に混って登場してくる。先に指摘した各屋敷間の規模上の「格差」は、この段階における在地名主層の階層分化の進展度を反映している可能性もある。そして、C_1群は長宗我部氏衰亡期に消滅し、C_2群も山内氏の土佐入国直後から廃絶の道を辿っている。

その後、「溝に囲まれた屋敷址」は、完全に水田下に没し、田村は山内藩政下の一近世村落としての道を歩むのである。田村において、溝に囲まれた屋敷は、南北朝内乱期に生成し、戦国時代に隆盛し、そして幕藩体制確立期に消滅した。同遺構は、中世動乱期が派生せしめた歴史的副産物であったとも考えられる。

註1　高知県立図書館編　『長宗我部地検帳』（香長郡上・下）　1962

註2　高台付椀も存在するが、良好な資料を得ることができなかったので今回の分類では除外することにした。

註3　各器種の口径、器高は、すべて明確に割り切れるものではない。

註4　横田賢次郎、森田勉　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

註5　間壁忠彦　「備前」『世界陶磁全集』3　1980

註6　赤羽一郎　「常滑」『世界陶磁全集』3　1980

註7　井上喜久男　「瀬戸編年図表」『世界陶磁全集』3　1980

註8　宇野隆夫　「第4章遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ―白河北殿北辺の調査―1981年と同じ方法で行った。

註9　高知県教育委員会　『芳原城址』　1984

註10　高知県教育委員会　『土佐国衛跡発掘調査報告書』第4集　1983

註11　高知県教育委員会　『田村遺跡群―高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要―』6頁　1981

註12　コキカ内の南の小字は正次（まさつぐ）であるが、当地点は、『地検帳』では「正次土ゐノ前」と記されている。また、コキカ内の中央には「正次様」と呼ばれる神母（「いげ」＝伊毛・稲毛とも記す。稲作を守る水の神を祀る小祠。）が存在している。

註13　但し、ＳＨ3は2つのＳＨが複合したような形状を呈している。

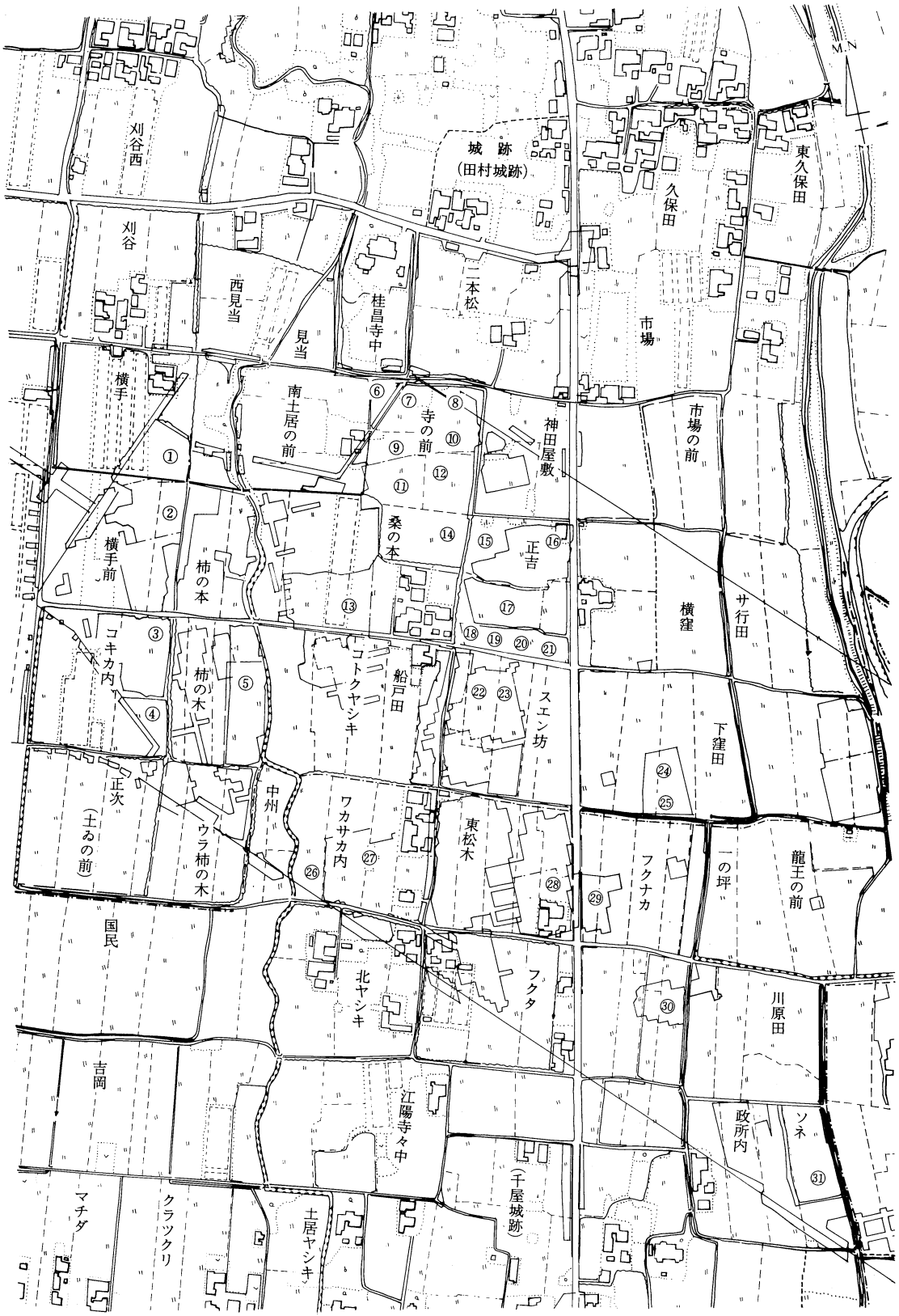
註14　ＳＨ22・23はともに小規模ではあるが、両者は東西に連なる形状を呈している。

註15　第33表によれば、各掘立柱建物の単位面積も5㎡未満のものから70㎡を超えるものまであり、差異が著しい。その中で、35㎡以上の面積を有する建物が33棟確認されているが、これらの大半は主屋と目されるものである。

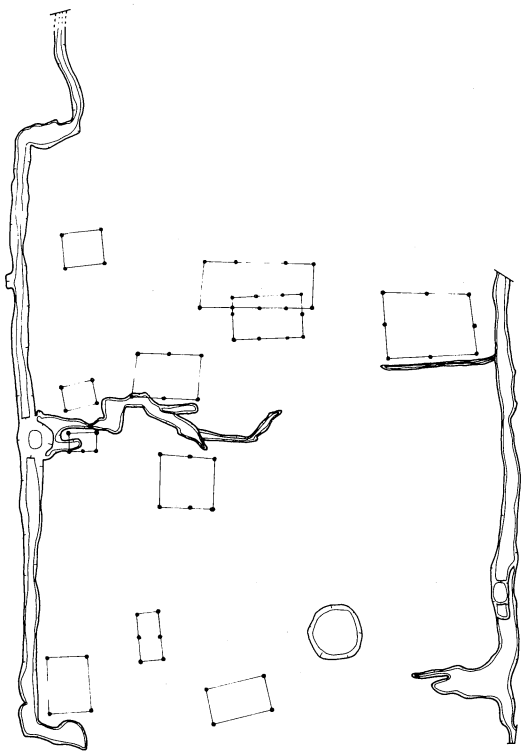
註16　土佐においても、建武3年（1335）以来、南朝方と北朝方の争乱が激化し、香長平野一帯も戦場となった。特に、同年4月の岩村城の戦は有名である。なお、上田村の土豪入交氏も、当初南朝方として参戦しており、南朝方敗北後は細川氏の支配下に入っている。（南国市教育委員会　『南国市史』上巻　1979）

註17　細川氏が土佐から離れて上京するのは永正4年（1507）であり、Ａ群の廃絶時期とは隔りがある。

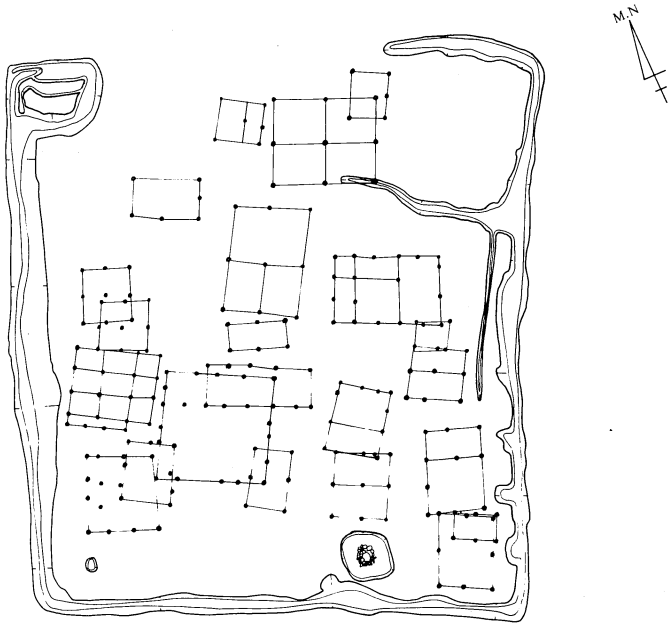
註18　屋敷の居住者にとって（少なくとも在地名主層にとっては）、細川氏退去がさほど衝撃的な事態ではなく、以後の土佐戦国時代に如何に対処するかが、より急迫した課題であったとも推定できる。



第208図　ＳＨ分布図　　Ｓ＝1：5000



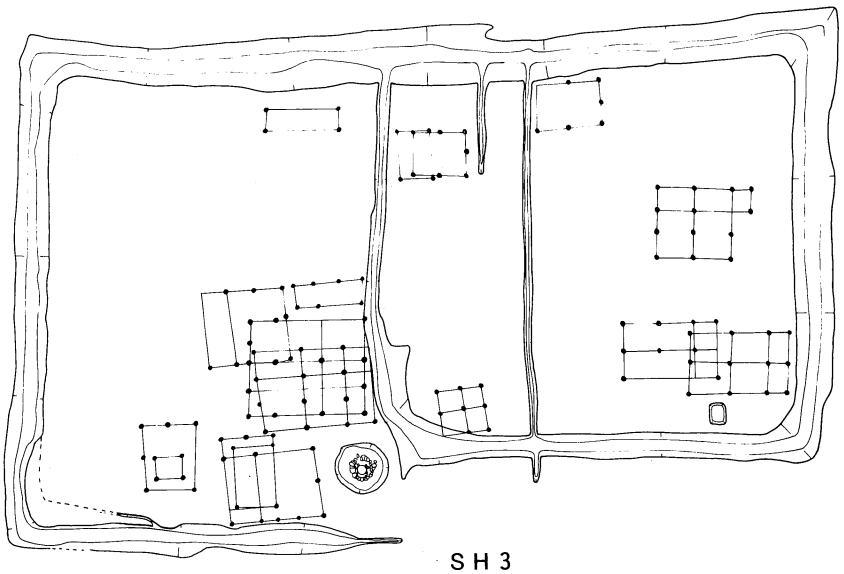
SH1



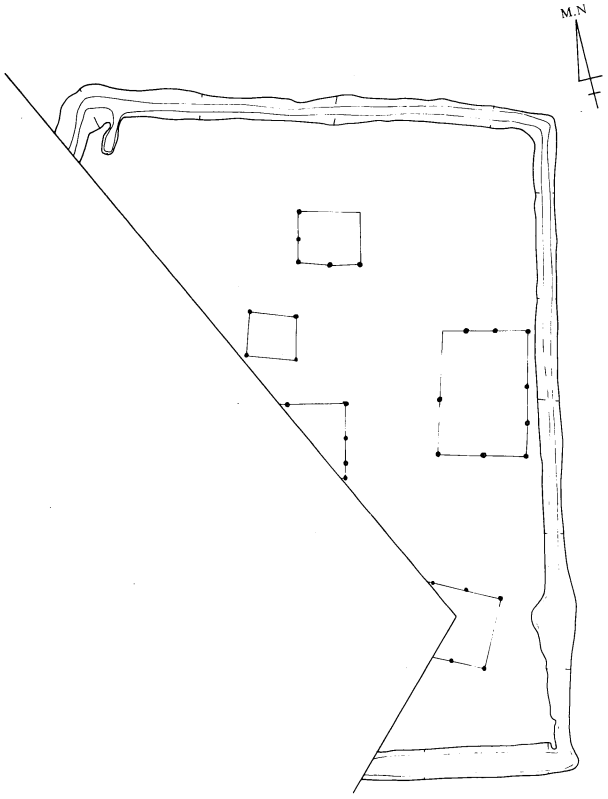
SH2

1：500

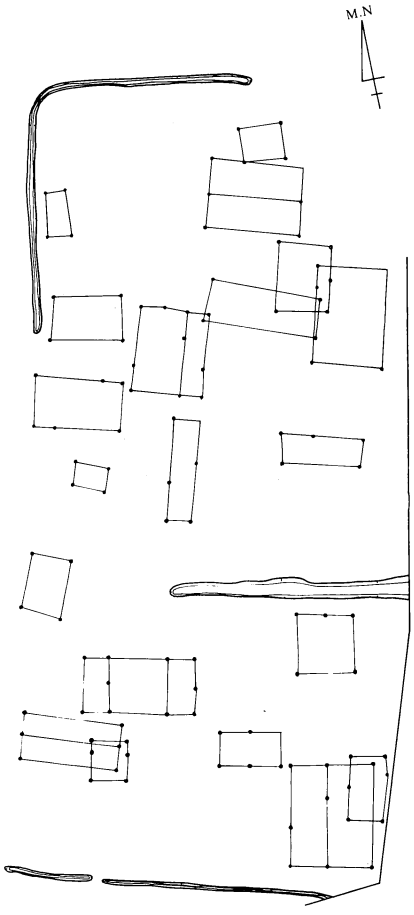
第209図　SH1・2



SH3



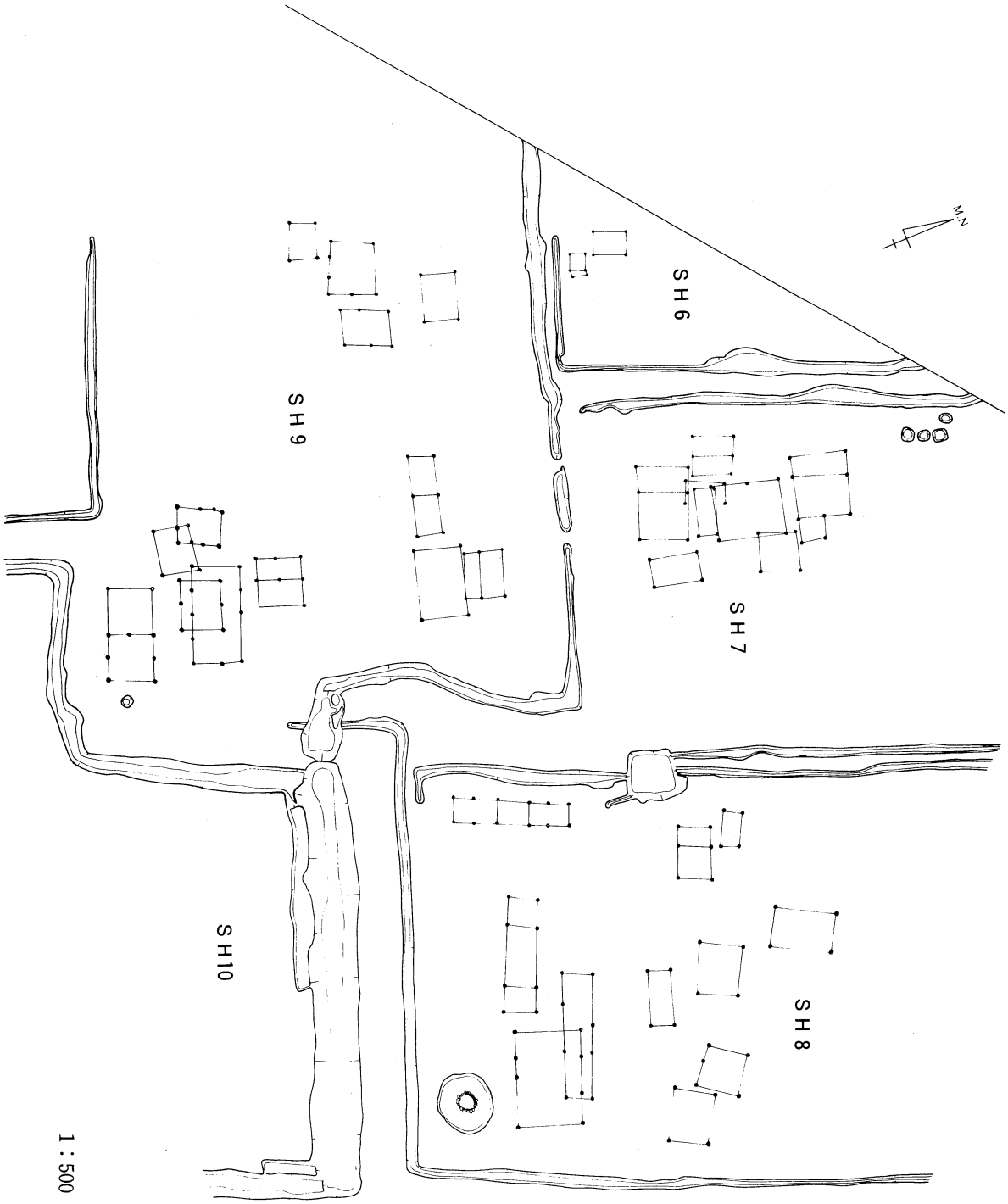
SH4



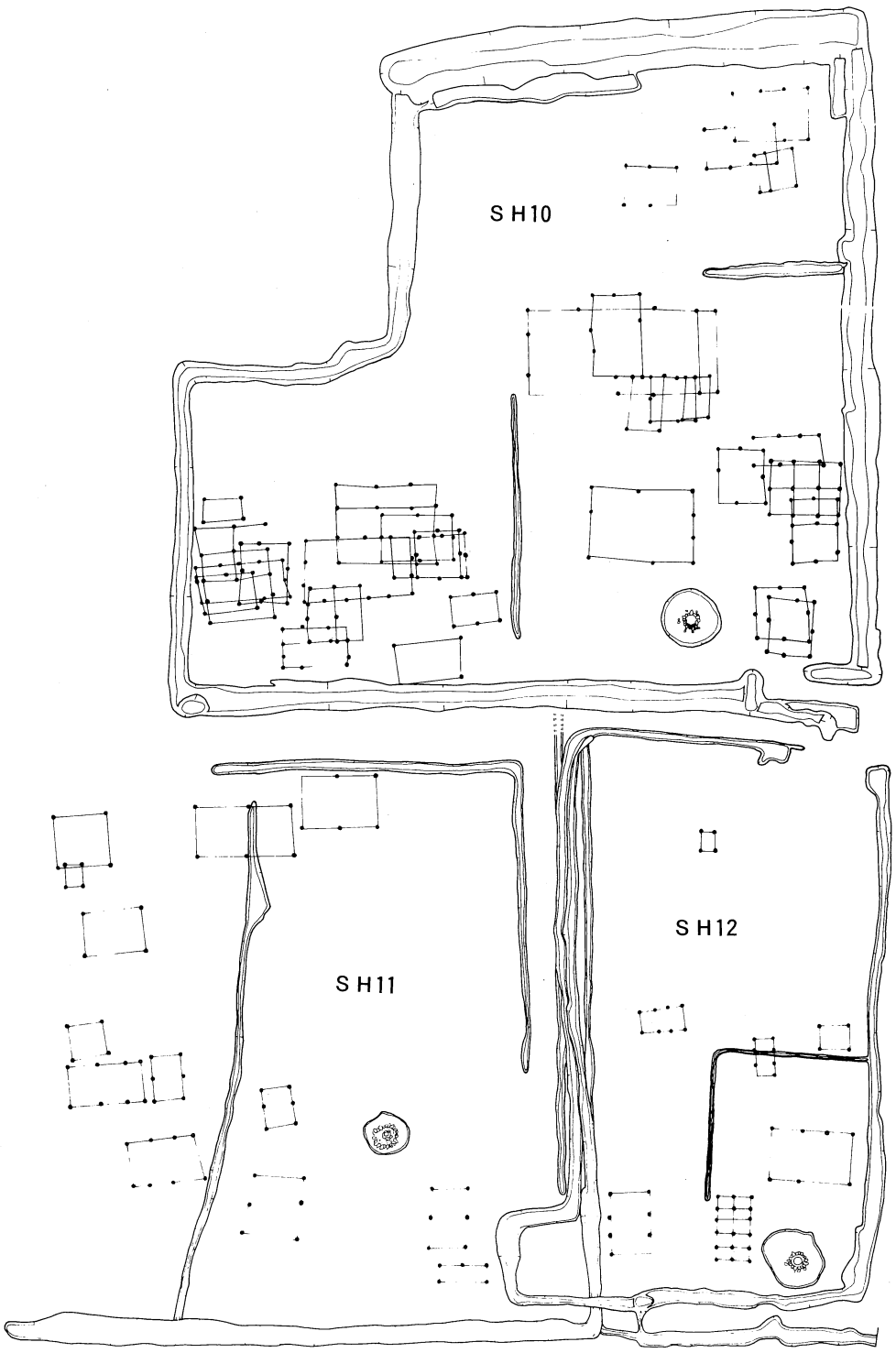
SH5

1：500

第210図　SH3～5



第211図　ＳＨ６～９

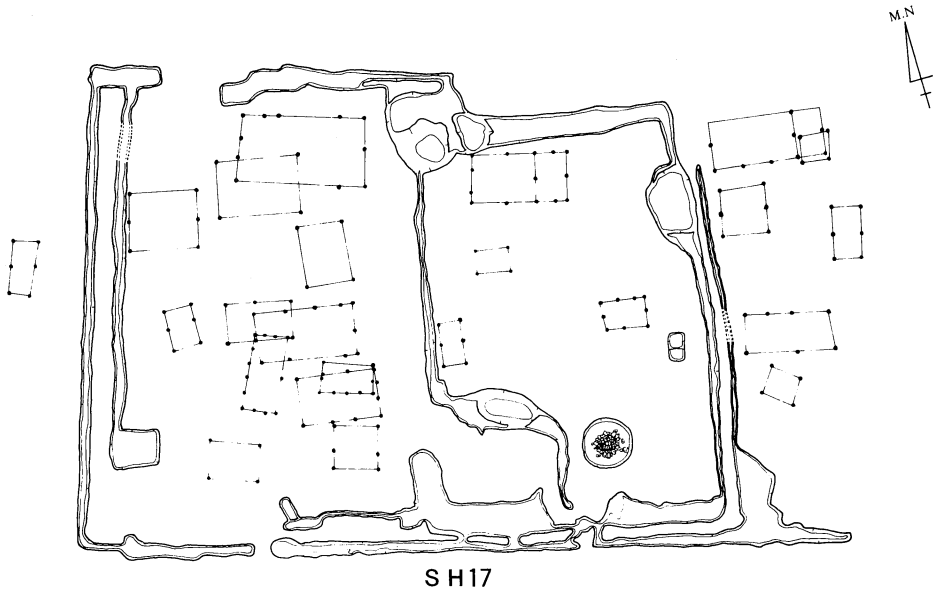


1：500

第212図　S H10～12

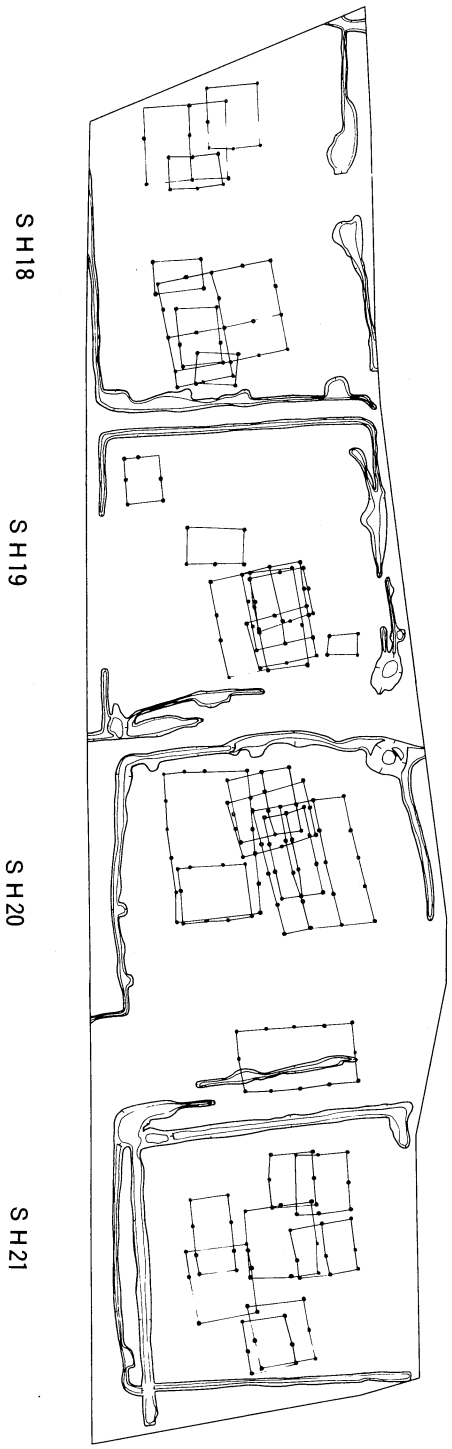
1：500

第213図　S H13・14

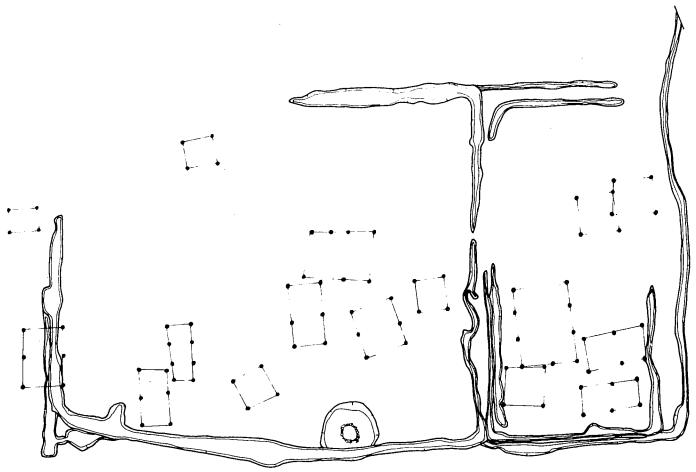


1：500

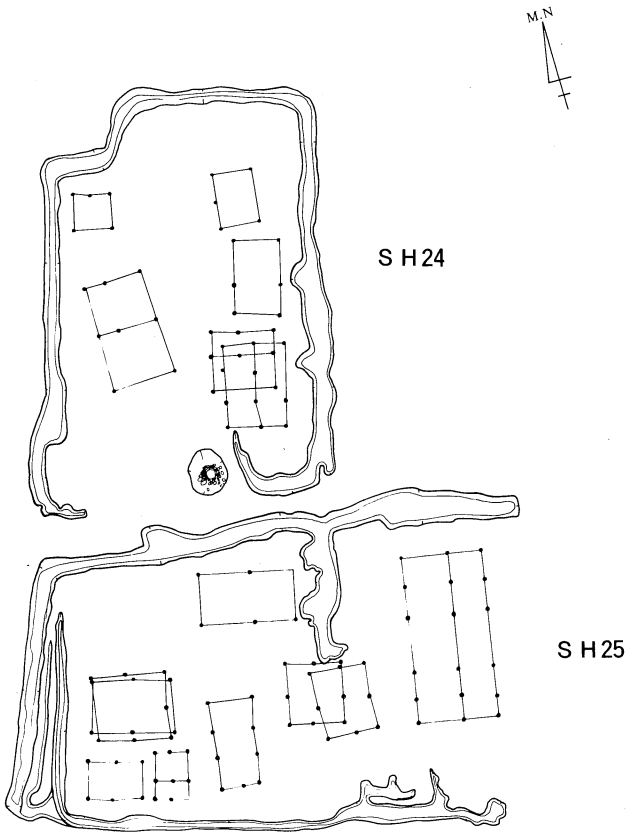
第214図　SH15～17



第215図　S H 18～21



S H22　　S H23

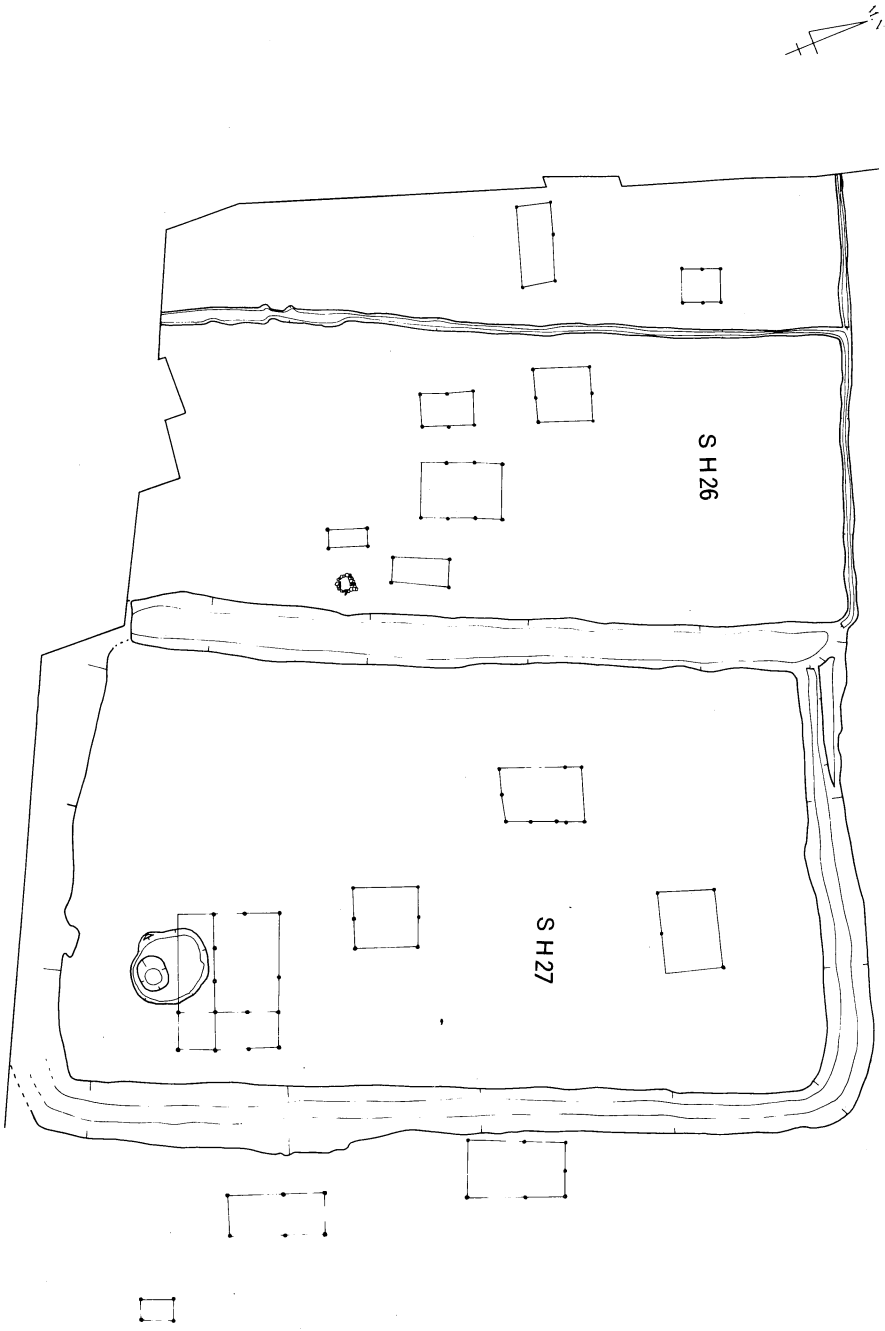


S H24

S H25

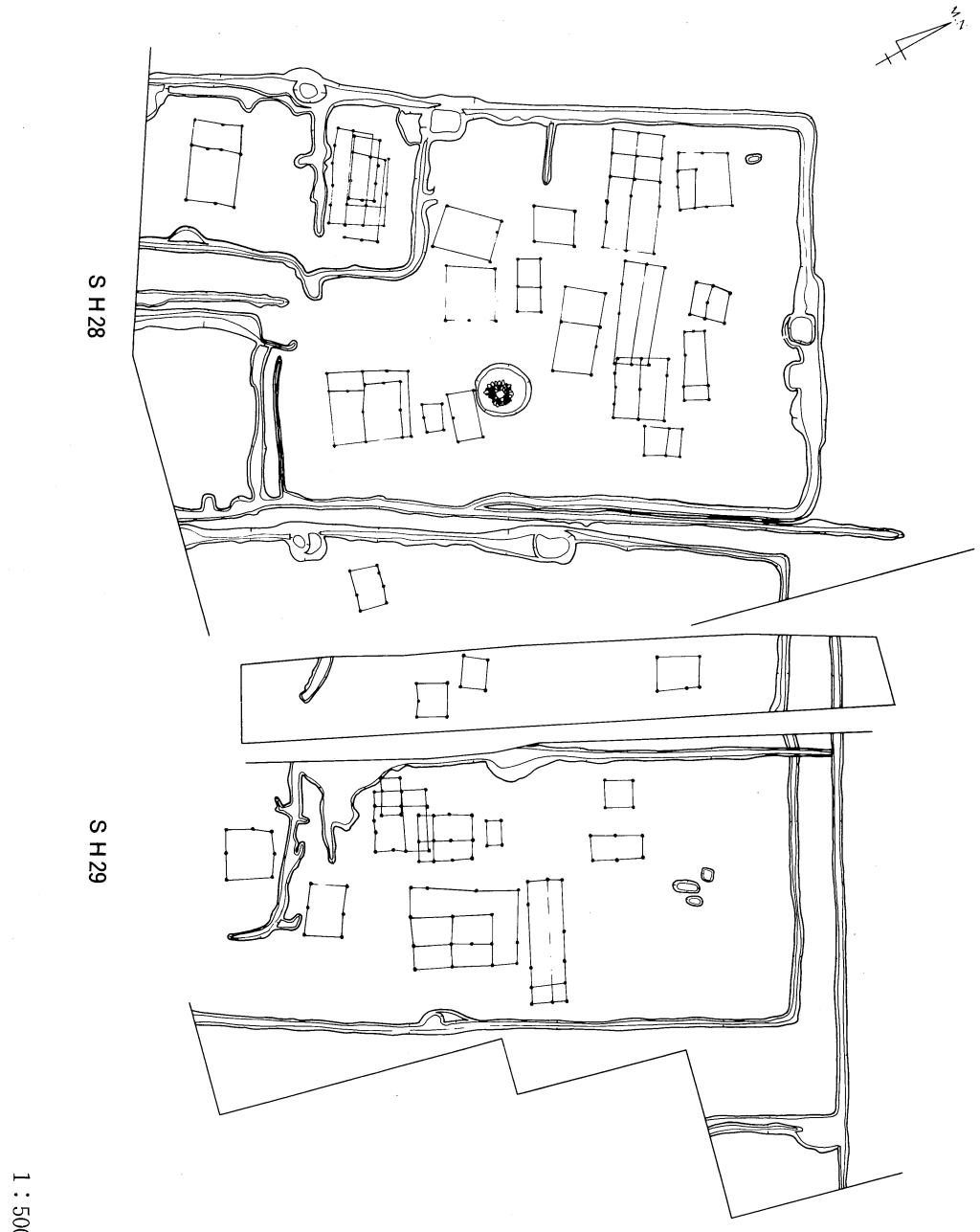
1：500

第216図　S H 22～25

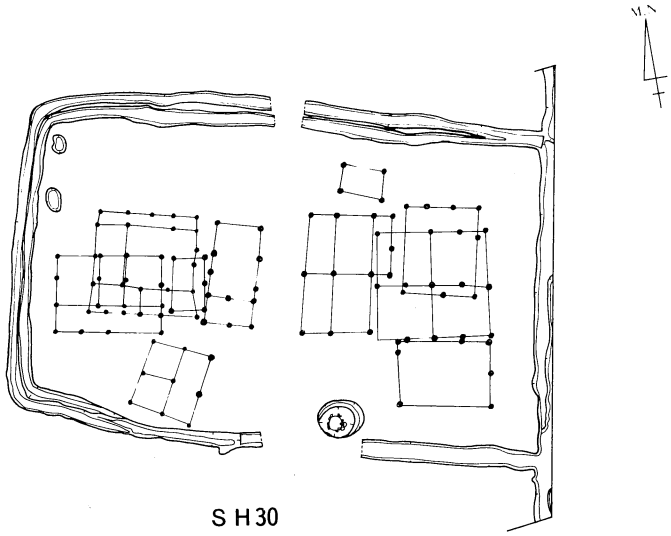


1 : 500

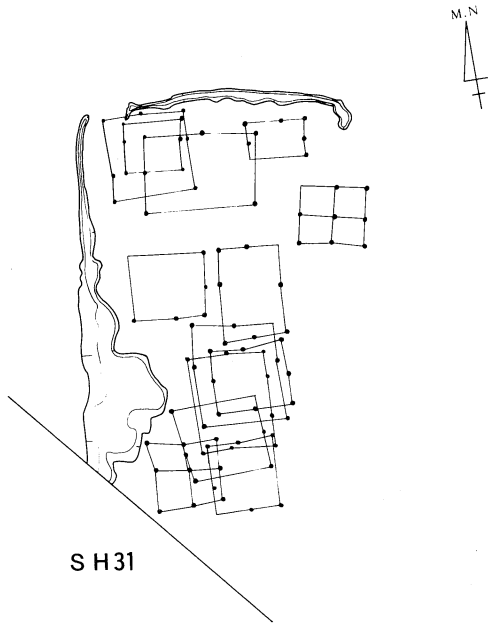
第217図　S H 26・27



第218図　S H28・29



S H30



S H31

1：500

第219図　S H30・31

7. 総括Ⅱ

総　括　Ⅱ

―古墳時代～近世―

田村遺跡群における古墳時代の遺構発見数は余りにも少ない。これをみても、田村遺跡群では弥生後期後半以降母村的集落が崩壊した事を示している。発見された古墳時代の主要な遺構は、Loc. 12のＳＴ１、Loc. 10ＢのＳＴ１、そしてＳＫ５程度である。これらの遺構の他にこの時代の遺物が散発的に田村遺跡群内から発見されているが、その発見状況から推してこの時代にいくばくかの人々は住んだであろうが、その数は弥生時代の人々の数に比すれば寥々たるものであったと考えざるを得ない。Loc. 12のＳＴ１出土の土器は、型式的にヒビノキⅡ式土器とヒビノキⅢ式土器の間に位置付けられる早い段階の土師器群である。ただ１部にヒビノキⅡ式土器とみられるものが存するが、大半はそれに次ぐ土器型式群とみて誤りない。

田村遺跡群における条里制に関連する遺構等については、先に報告書が刊行されている。それによれば「数詞坪名に関しては新たに、いくつかの坪名を確認し、それがこれまで想定[註1]されていた条里境界線上にあてはまること、また中世城館は細川氏、千屋氏ともにこの線を踏襲して築造した可能性が強いこと」などが判明している。しかし条里に関連する地下の埋蔵遺構や遺物は検出する事は出来なかった。

次にLoc. 39で発見された８世紀後半～９世紀前半の掘立柱建物址14棟は重要である。他にLoc. 30Ｂ等にも６棟の同期の掘立柱建物址が発見されているが、Loc. 39のものは集中して存在し、併せて多様な建物群から構成されていることから、これらは特殊な建物址群と考えなければならない。この建物址群に対して郡衙址との声も聞かれたが、古代田村郷の所属する香美郡下には土佐山田町岩次に方２町の「大領」「田倉」「三宅田」「厩ノ尻」等の如き地名を残す香美郡衙跡が存する。一方田村遺跡群の地には土佐最古の寄進地系荘園の存在が文献面で明白であり、年代的[註2]にも合致するのでLoc. 39の古代掘立柱建物群を庄所址と推定した。田村荘に関する史料として、『続遍照発揮性靈集補闕抄』巻８に収められている空海の弟子真体の願文がある。この願文によると田村荘は久満荘（現高知市久万）などと共に天長３年（826）に和気氏の氏寺[註3]である神護寺に寄進されている。真体は和気清麻呂の子か孫といわれ、その縁によって神護寺領となったとみてよい。天長３年に和気氏が神護寺に荘園を寄進したのは、その所領を守るためで、これによって田村荘は寄進地系荘園となったとみてよい。横川末吉氏は、この田村荘について次の如く述べておられる。「香美郡田村郷は室町時代に土佐の中心となる。しかし地形上は物部川平野の末端である。この地域まで開発が進展したことは重要である。かくて９世紀はじめ史料の上にも土佐に荘園があらわれる。おそらく実際的にもこの前後ではなかろうかと思われる。」この横川氏の考え方に立てば田村荘は寄進地系荘園になる前に和気氏によって開発され、墾[註4]田地系荘園として成立したものであろう。そしてその年代は道鏡事件がすべて片づいた宝亀元年（770）以降と筆者はみる。

Loc. 39から集中して発掘された14棟の掘立柱建物址は、出土の須恵器等から推してその年代は8世紀後半から9世紀前半とみられている。しかもこれらの建物址は富山県じょうべのま遺跡、石川県横江遺跡の庄所遺跡にみる如く、南北棟の主屋を中心に脇屋がその両側に配列し、さらに脇屋に接して総柱とみられる倉まで存する。[註5][註6]このような掘立柱建物址群は静岡県御子ケ谷遺跡や栃木県梅曽遺跡で明確になった郡衙の建物址群と比較すると、その配置や規模において異なり、[註7]荘園関係の庄所遺跡とみる方がより適正であり、[註8]田村荘を語る文献とも合致する。ただ発掘の結果は、これらの建物址群の年代が先述したように8世紀後半から9世紀前半にかけてのものであり、天長3年に寄進された年代と合致しない。しかしこの建物址群を、神護寺に寄進以前の和気氏の墾田地系荘園段階における庄所と解釈すれば、自らこの不合理は解決できる。なお神護寺に寄進された後は、この庄所は廃され新しい所に造られたと考える。この田村荘が平安中・後期にどのようになったかは文献史の面でも不明であるが、今回の発掘でもLoc. 32から1棟の10世紀～11世紀の掘立柱建物址が発見されているに過ぎない。

田村遺跡群における中世および近世初頭の遺構として、最も代表的なものは古代と同様に掘立柱建物址群であろう。この掘立柱建物址群は、(1)13世紀～14世紀段階の掘立柱建物址群、(2)14世紀から17世紀初頭までの溝に囲まれた掘立柱建物址群、(3)14世紀から17世紀初頭までの溝に囲まれない掘立柱建物址群に3大別する事が出来る。

(1)の13世紀～14世紀段階の掘立柱建物址群は、(2)や(3)の掘立柱建物址群と比較するとその検出例は少ない。13世紀の掘立柱建物址として、Loc. 5、Loc. 28から検出されたものがある。Loc. 28の掘立柱建物址のうち、ＳＢ3～5は1つの纏まりのある建物址―屋敷として把握出来得るものである。うち、ＳＢ5は3×3間の主屋、ＳＢ4・ＳＢ3はそれに従属する建物とみてよかろう。これに対し、Loc. 5からはより小規模な2棟構成の掘立柱建物址が検出されている。これらは当時のやや裕富な農民の家屋と考えてよい。

14世紀段階になると、(2)タイプの溝に囲まれた掘立柱建物址群が検出されるが、一方で溝に囲まれない大掛かりな建物址群の1例がある。Loc. 1の掘立柱建物址群で、主屋として2×3間、そして2棟の3×2間の倉、さらに2棟の脇屋を持ち、そのうえに4箇所にわたって板塀で囲う。しかも倉以外の3棟の建物址はすべて東西棟である所をみると、これは農家とは考え難く小形の庄所の1部と考えてよいのではなかろうか。田村荘は13世紀段階では皇室御領であり、14世紀に入って三池氏、そして後に摂津氏の所領となっている。

溝に囲まれた屋敷群は、それも特に14世紀～15世紀前半のものは、在地の名主層のものである事を中世の「まとめ」で述べた。また、15世紀～17世紀初頭までのものは、在地の名主層の屋敷の他に細川氏家臣団のもの、下って長宗我部氏の給人層のものもこの中に入っている。特に在地の名主層の屋敷については、血縁家族を含み被官百姓、家内下人も同一屋敷に居住する事があった事、また名主の散在屋敷―被官百姓の小屋（田屋）も存在したと考えねばならない。さらに『洛中洛外屏風』[註9]を通してみる名主の屋敷は、奥まった所に名主の生活の場の主屋があ

り、屋敷の入口内に接して被官百姓の住居が存する。この点を考慮して、Loc. 31AのSH3の屋敷を検討すると、井戸の北側に在って重複する3×3間のSB9・SB11・SB12は主屋とみられるが、3回の建て替えの在った事も知る事が出来る。井戸の東側で溝の切れているのは、これはあくまで裏木戸であり、北の溝に橋梁を掛けた部分が表門であろう。さらにSH3における1×2間のSB1、2×2間のSB7は、以上の点で表門に近い所に存した建物とみて被官百姓の住居とすべきであろうか。このように名主と同一屋敷内に住む被官百姓に対し、先述した名主の散在屋敷に住む被官百姓もある。この散在屋敷はカリヤと呼ばれる事が多く、田屋と同一語である。発掘調査で確認された名主屋敷と散在屋敷の在り方を示すものとして、Loc. 25のSH26を挙げる事が出来る。この溝に囲まれた屋敷は1井戸を持ち、全く重複していない主屋SB6（1×3間）を持ち、それに従属する建物3棟（1×2間・1×1間）を主屋の周辺に配置し、併せて門屋とも称される被官百姓の建物（2×1間）1棟を持っている。そして、この屋敷を囲むSD2の西側に鍛冶に従事する被官層の建物2棟（1×4間・1×2間）が溝の外に存在する。主屋とその周囲の建物、そして門屋は溝に囲まれた名主屋敷内にあり、この溝の囲いの外にある鍛冶関係の建物は名主の持つ散在屋敷の1つであろう。

溝に囲まれた屋敷群は、荘園制の変質・解体期に生まれた名主層を主体とする屋敷群であると筆者は考える。ただこのような屋敷を形成するには、名主層の力だけでなく当時の言葉で惣百姓と言われるように弱小農民層の力もその背景に大きく存したであろう。溝に囲まれた屋敷群の存続期間は、14世紀から17世紀初頭に及ぶが、その間に細川氏による守護領国制の展開、そして戦国動乱期および長宗我部氏の支配と検地という政治的変革をも経験する。しかし、この溝に囲まれた屋敷群は1部にそれらの影響を受けながらも、名主層としての存続をみるのであるが、最終的にこれらの屋敷群を消滅させたのは近世幕藩体制である。慶長5年（1600）に土佐に入国した山内一豊は、長宗我部の実施した兵農分離に伴う農村の再編成に努めているが、その一環として田村では浜田甚左衛門を井奉行に任命し、さらに「田地等無不作」ように命じている。この政策は農民の田地付けを進行させるもので、いわばこれによって田村が近世村落へ変貌[註11]していくのである。この事象を示す一資料が、Loc. 39CのSH12の井戸から検出されている。それは慶長11年（1606）の紀年銘を持つ水供養の祈祷札である。SH12を廃棄し、井戸を埋めるに際して井戸の水神を供養した祈祷札であり、SH12の廃棄の年代を知る事が出来る。なお、この屋敷を囲むSD24の1部は、屋敷消滅後も溝として活用されたらしく17世紀前半の唐津系皿が検出されている。

田村遺跡群における近世関係の主要な遺構は近世墓である。近世墓が多く検出されたのは、Loc. 12・13・23・32・39A・39Cである。特に、Loc. 13・39Aにみられる近世墓群は出土の伊万里焼から17世紀後半に遡るものであり、方形座棺、円形座棺、それに寝棺が少し混在する。しかし、田村遺跡群で検出された近世墓群の大半は、伊万里Ⅲ期の碗が出土し17世紀末～18世紀代のものとみられる。これは農民層の生活の向上と相待って、このような近世墓群の出現と

なる事を考えなければならない。注目さるべき近世墓群を紹介すると、まずLoc. 13の6基からなる座棺墓群を挙げねばならない。6基の座棺は一辺が1.2～1.5mの方形のもの3基、それに対し径0.4～0.8mの円形のもの3基からなり、前者は成人男子用、後者は女・子供用のものとみられる。また先述したLoc. 39Aの如く、17世紀後半では座棺墓が多く、寝棺墓が少し混在する近世墓群に対し、18世紀代とみられる近世墓群Loc. 39Cには寝棺墓が多くなる。Loc. 39Cにおける近世墓群は1部に座棺墓も存在するが、その大半を占めるのは寝棺墓である。この寝棺墓で遺骨の残存するものをみると、その葬法は仰臥伸展葬と横臥屈肢葬とが存する事が判る。またこれらの多くは北枕をとり、顔面を西に向けているものが半数以上を数える。SK27からは犬の土製品が出土し、子供の座棺墓とみられる。またSK211の近世墓からは、安永10年（1781）の墨書紀年銘の位牌が出土している。[註12]

近世墓群からは碗類の他に煙管、櫛、塗椀、寛永銭、紅猪口等が検出されている。Loc. 39CのSK219は西向きの横臥屈肢の寝棺墓であるが、伊万里碗と土師質土器皿が人骨の東側に副葬されていたが、数少ない近世における土師質土器小皿の副葬例である。なお座棺墓上には、20cm大の自然石を20個程度置いているが、副葬品はこの自然石の下、座棺の上から検出される例が多い。また田村遺跡群の近世墓群はその性格として、寺院の周辺に集中するタイプでなく、田の畦の広い部分とか、田の周辺の藪とかに形成されたらしく、時に縦列の形で群を形成し、ある場合は藪の形である鍵形に墓群を形成する事もある。なお、発掘調査の以前において墓標が欠失し、また除去されたための墓標とその下部の土坑ないしは木棺の相関関係が追求出来なかったのは残念な事である。

以上の近世墓群に先行する中世墓群も、田村遺跡群から検出されている。中世の溝に囲まれた屋敷の中で、やや大形の部類に属するものに屋敷墓が存在する。これは1基または数基にとどまり、しかも火葬墓が原則のようである。なかには瀬戸瓶子を蔵骨器としているものもある。この屋敷墓の他に、15世紀中葉～後半の火葬墓も検出されている。Loc. 7のSK1・2は、1.5×1.2m大の土坑であり、集石下に白磁と火葬骨片が検出されている。また、Loc. 39BのSK14は高さ67cm、口径43cm備前大甕を使った屈葬甕棺墓で、土師質土器を副葬する。Loc. 23のSK4～7・9～11・13は中世の土坑墓とみる。SK4を例にとると1.3×0.8mの方形の土坑に遺骸を葬る。ただ遺骸は残っていないが屈葬をとるものと思われる。埋土中に拳大の河原石が検出されているが、本来はこれらは墓上に置かれていたと思われる。土坑の掘り方からみて、土坑墓というより木棺墓であった可能性を筆者は強く感じる。この墓群は16世紀代とみられる。これにやや先行する同種のものが、土佐市市野々から検出されている。[註13]

註1　鈴木省一・井本葉子「高知空港拡張区周辺条里遺構分布調査」『田村遺跡群』— 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財調査概要 —　高知県教育委員会　1981

註２　岡本健児「土佐神道考古学５」『土佐史談』156　土佐史談会　1981

註３　山本大「荘園の成立」『高知県史』古代・中世編　高知県　1971

註４　横川末吉『高知市史』上巻　高知市史編纂委員会　1958

註５　舟崎久雄「高瀬遺跡とじょうべのま遺跡」『考古学ジャーナル』241　ニュー・サイエンス社　1985

註６　吉岡康暢「加賀の初期荘園と横江荘遺跡」『考古学ジャーナル』241　ニュー・サイエンス社　1985

註７　『藤枝市埋蔵文化財発掘調査概報』昭和52年度　藤枝市教育委員会　1978

註８　大川清他『栃木県小川町邦須官衙跡第四次緊急発掘調査報告書』　小川町教育委員会　1976

註９　岡見正雄・佐竹昭広『標注洛中洛外屏風上杉本』　岩波書店　1983

註10　伊藤鄭爾「室町時代の農家」『中世住居史』　東京大学出版会　1958

註11　山本大「兵農分離による近世村落の成立」『南国市史』下巻　南国市史編纂委員会　1982

註12　岡本桂典「土佐・吹越墓」『考古学ジャーナル』182　ニュー・サイエンス社　1980

註13　岡本健児「中世の考古学」『土佐市史』土佐市　1978

8. 人骨鑑定

(1) 南国市田村遺跡群B地区出土の近世人骨について

国立科学博物館　人類研究部
山口　敏

埋葬姿勢

田村遺跡群B地区Loc. 21、土坑SK 44で発見された江戸時代人骨は、出土状態の記録写真および実測図によれば、股関節と膝関節を強く折り曲げ、大腿と下腿を上半身の長軸と平行させて、うつぶせの姿勢（俯臥屈葬位）で埋葬されたものである。

保存状態

上顎骨、下顎骨、および左の上腕骨、大腿骨、脛骨の各骨幹部はある程度保存されているが、他の骨は保存状態がわるく、多かれ少なかれ細片化している。

年齢・性

歯の萌出状態および咬耗の程度から判断して、年齢は壮年ないし熟年の範囲と考えられる。又前頭骨における眉弓の発達程度、下顎骨前部の形態等から判断して、性別は男性と推定される。

頭蓋

脳頭蓋では前頭鱗と左右の側頭骨の小片が若干保存されている。眉弓の隆起が明瞭に認められ、眼窩上孔が左右両側に存在する。

顔面骨格では左右の上顎骨の歯槽部と下顎骨の体部が保存されている。梨状口の下縁は鋭い稜をなさず、鈍である。上顎骨歯槽突起の高さは低く、歯槽性突顎の傾向がみられる。下顎体は低く厚い。オトガイ孔の位置での下顎体高は29㎜、同厚は14㎜である。オトガイ高も低いが、歯槽縁がわずかに破損しているため、計測はできない。前下顎幅は53㎜である。オトガイ孔は左右とも単一。下顎隆起の形成はない。

歯

保存状態は次のとおりである。

MMMPPCII	IICPPMMM
＊MMPPC／／	／／／PPMMM

斜線箇所の下顎の全切歯と左犬歯は保存不良で歯冠が失われている。又＊印で示した下顎右第3大臼歯は先天的欠如である。

咬合の形式は鋏状である。咬耗は切歯から第２大臼歯までがすべて第２度。第３大臼歯だけが第１度である。

上顎の３歯（左右の第１大臼歯と左の第１小臼歯）はう蝕のため歯冠がほとんど失われている。

上肢骨

上腕骨では左の骨幹の中央部、約16㎝長の破片が保存されている。三角筋粗面はよく発達しているが、骨幹の径はあまり大きくない。骨幹中央付近での最大径、最小径はそれぞれ23.5㎜、17㎜で、横断示数は72.3。中央周は69㎜である。

前腕骨では左橈骨の近位半が保存されているが、表面に破損部分が多く、計測はできない。

下肢骨

大腿骨では左の骨幹下部、長さ約16㎝の破片が比較的よく保存されているが、中央部では表面に破損があり、骨幹径の計測はできない。粗線は比較的細く、骨幹の柱状性も強くない。

脛骨では左の骨幹中央部、約13㎝長の破片が保存されている。中央部の横断面形は内側縁の長い不等辺三角形（ヘルデリチカの２型）を呈し、中央最大径は30㎜、同横径はマルチン法で23㎜、バロワ法で21㎜である。中央横断示数はいずれにしても広型の範囲に入る。

まとめ

田村遺跡群Ｂ地区の土坑SK 44において俯臥屈葬の状態で発見された、壮～熟年男性の一江戸時代人骨について記載した。

本人骨にみられた歯槽性突顎、低顔形、鋏状咬合、う蝕、大腿骨の非柱状性、脛骨の非扁平性などの特徴は、近世日本人骨格について従来知られている一般的特徴とよく合致する。

(2) 田村遺跡群出土骨の所見

高知医科大学　第一解剖学教室
山　本　恵　三

これらの資料は田村遺跡において発掘されたもので、当時人骨と推定されていた10点と獣骨と判定されていた32点である。これらの資料のうち、人骨と判定しうるものは前者のうちNo 6の資料である。

1．人骨と推定されていた資料（No 1 ～No10）

資料No 6

長さ約５cmの管状骨の破片と不整形の破片を含み、両者は接合できるので同一の骨の破片である。

骨片はどちらも黒褐色に着色し、欠失部が多い。前者は浅く凹んだ面と、横に軽く凸な面にはさまれたやや鋭い稜を示し、稜はやや斜めに走る。骨片は軽い彎曲を示している。後者は不整形の骨片で欠失部が多いが、表面の骨質が残存する部分は浅く凹んだ面と、それに接する鋭い稜を示し、前者に接合すると、この面と稜は前者のもつ浅く凹んだ面とそれに接する稜につながる。

これらの形態的特徴、すなわち面と稜の形や走行などの特徴は人体の尺骨上端部の外側部の面や稜の形態的特徴に酷似し、又骨片自体の彎曲は尺骨の骨体上部のそれと極めて類似している。

これらの骨片は両方ともに人骨であり、右尺骨上端部にある橈骨切痕の直上から遠位へ約6.5cmまでの回外筋稜を含む部分に同定することができる。しかし尺骨の極一部の骨片にすぎず、欠失部も多いため、性別等については判断し難い。

資料No 1 ～No 5 、No10

これらの資料のうち、No 3 ～No 5 については腐蝕、変形、破損等のため形態の保存が極めて悪く、小骨片が大部分であるため、形態的に確定的な判断は下し難い。No 3 は骨片２個を含むが腐蝕が著明で、表面の骨質も失われ海綿質のみの状態である。No 4 はすべて管状骨の破片と推定されるが、表面の骨質は欠失多く、亀裂を生じている。No 5 は扁平骨と管状骨の破片と思われるが表面の保存が極めて悪い。したがって、これらの資料は判定のポイントとなる骨表面の状態や各種構造物を観察し難く、同定も困難である。

No 1 、No 2 、No10の資料は白色を呈し、硬い。No 1 は扁平骨の破片４点、骨状骨破片４点その他細骨片８点を含む。No 2 はすべて小骨片で大部分は管状骨破片を推定される。No10は管状骨破片３点、扁平骨破片１点を含み、他は細骨片である。これらの資料は比較的保存は良いが、

亀裂（No２）もみられ、小骨片ばかりであるため同定は困難である。

資料No７～No９

これらの資料は原形が良く保存されている。すべて管状骨で表面は暗褐色に着色しているが、骨端部は完全に形成されており、骨端線もみられず、完成された骨である。No７は長さ約18cmの管状骨で骨端の一部に欠失がある。No８は長さ約16cmと17cmの管状骨２本でいずれも骨端部に一部欠失があるが形態の保存は良い。No９は長さ約20cmと18cmの管状骨２本で形態保存は良いが、骨端の一部に欠失がある。

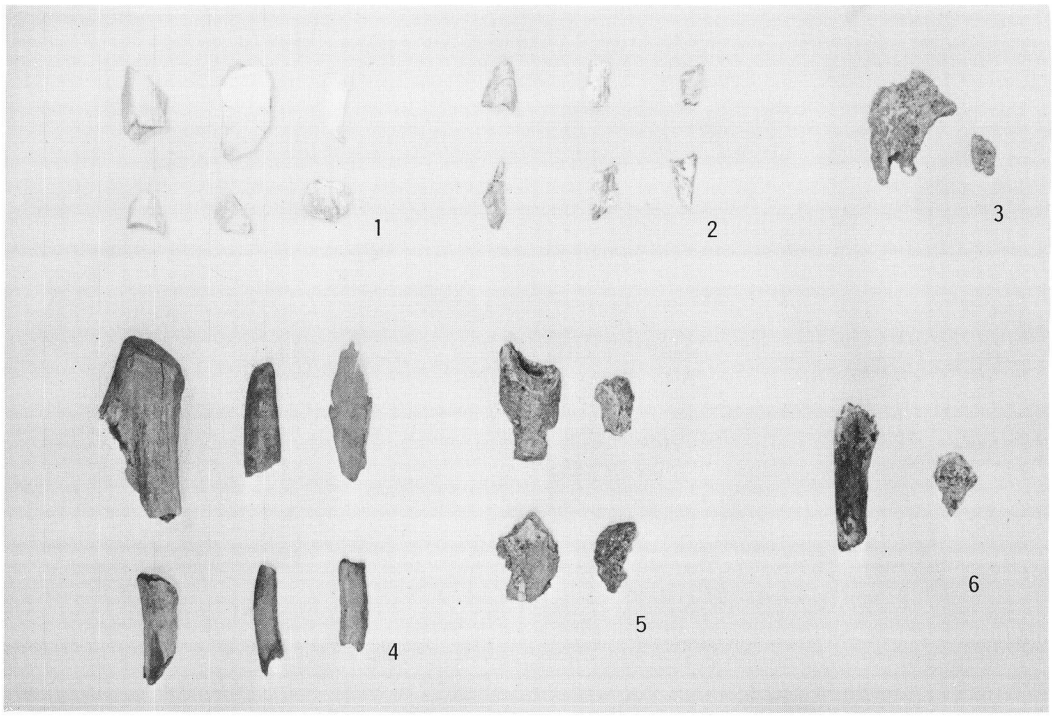
これらの資料はいずれも完成された骨であり、長さ、太さ、骨端部の骨頭や関節面の形態的特徴、又骨幹部の彎曲の特徴は人骨のそれらとは異った点が著しく、人骨ではなく、いわゆる四足獣の体肢の骨である。

２．獣骨と判定されていた資料（No11～No42）

これらの資料の殆んどはいわゆる骨ではなく獣類の歯牙と推定される。その大部分は草食獣の歯牙と推定されるが、極一部に肉食獣の歯冠のエナメル質と推定されるもの（No34）も含まれている。歯牙と推定される資料以外に四足獣の右扁甲骨（No35）、肉食又は雑食獣の下顎骨右側半（No38）、四足獣の体肢骨の一部（No38とNo13）と推定されるものが含まれている。

第34表　出土骨一覧表

番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
1	Loc.４　SD１	15	Loc.７　第Ⅳ層	29	Loc.29　SD２
2	Loc.10　第Ⅲ層	16	〃　〃	30	Loc.31　SD６
3	Loc.21　SD９	17	Loc.10　SD８	31	〃　SD３
4	Loc.25　SE１	18	〃　〃	32	〃　〃
5	〃　SD１	19	Loc.12　第Ⅱ層	33	〃　第Ⅲ層
6	Loc.39B　SK18	20	Loc.19　SD３	34	Loc.34　〃
7	〃　SD７	21	Loc.21　SE３	35	Loc.39　SD７
8	〃　〃	22	〃　SD５	36	Loc.40　SK88
9	〃　〃	23	Loc.24　第Ⅲ層	37	Loc.41　SD２
10	Loc.４　第Ⅲ層	24	〃　SP１	38	Loc.43　SD１
11	〃　〃	25	〃　SD２	39	Loc.44　SD２
12	〃　〃	26	〃　〃	40	〃　第Ⅰ層
13	〃　〃	27	〃　〃	41	Loc.45　ST６
14	Loc.７　第Ⅳ層	28	Loc.25　SD１	42	Loc.４　SD３



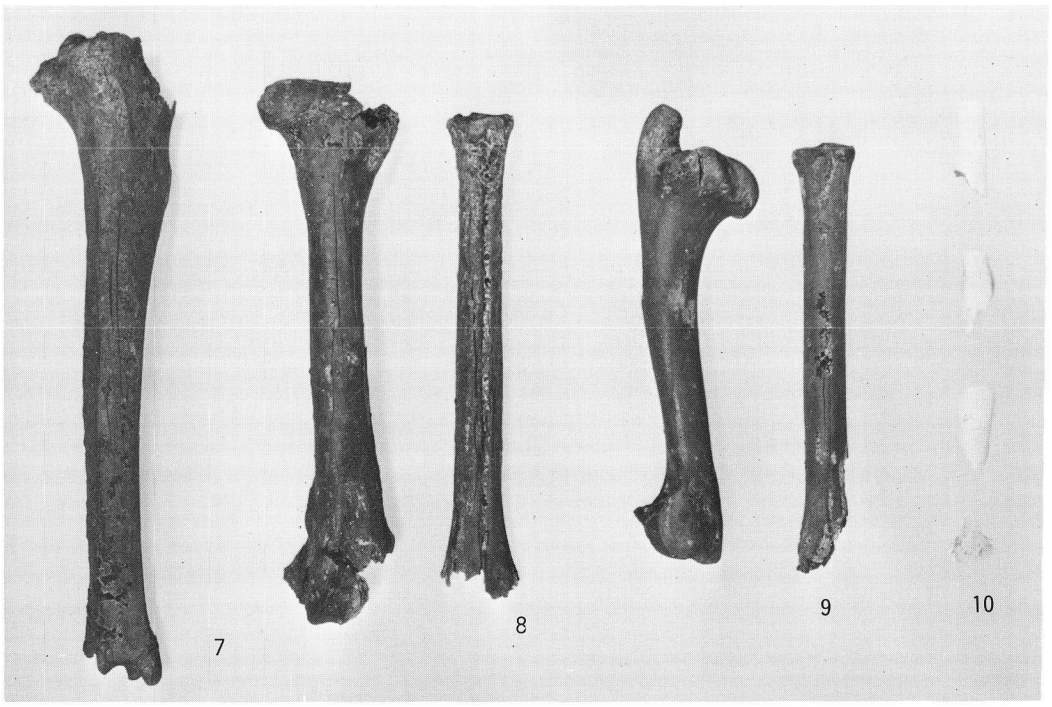
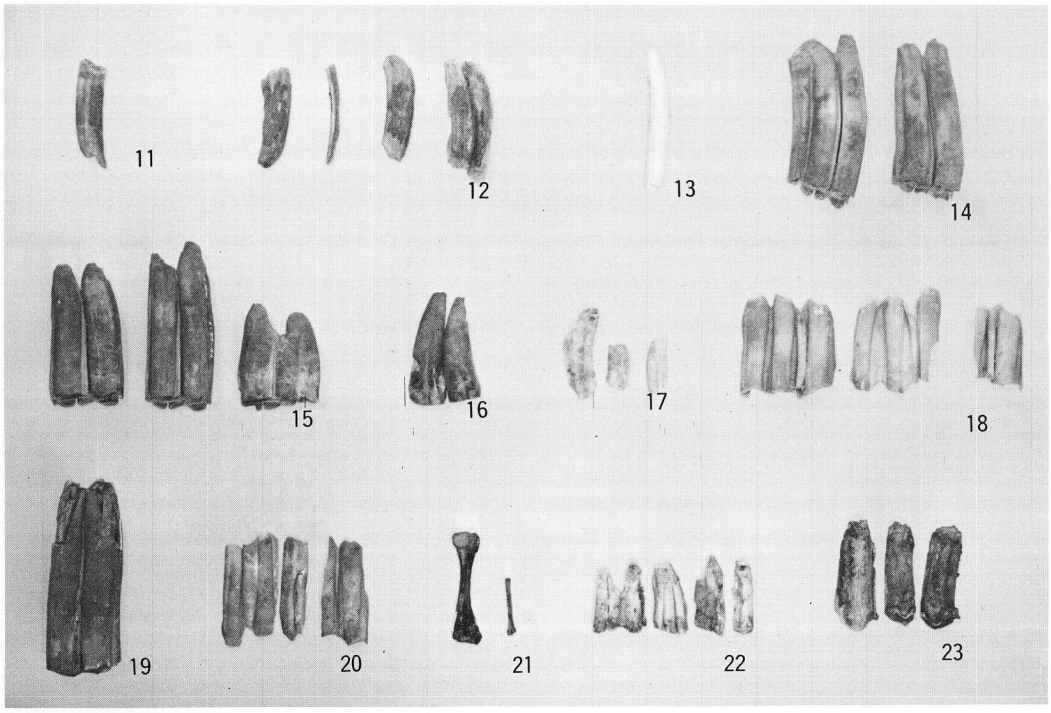


写真１　No１～10


11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

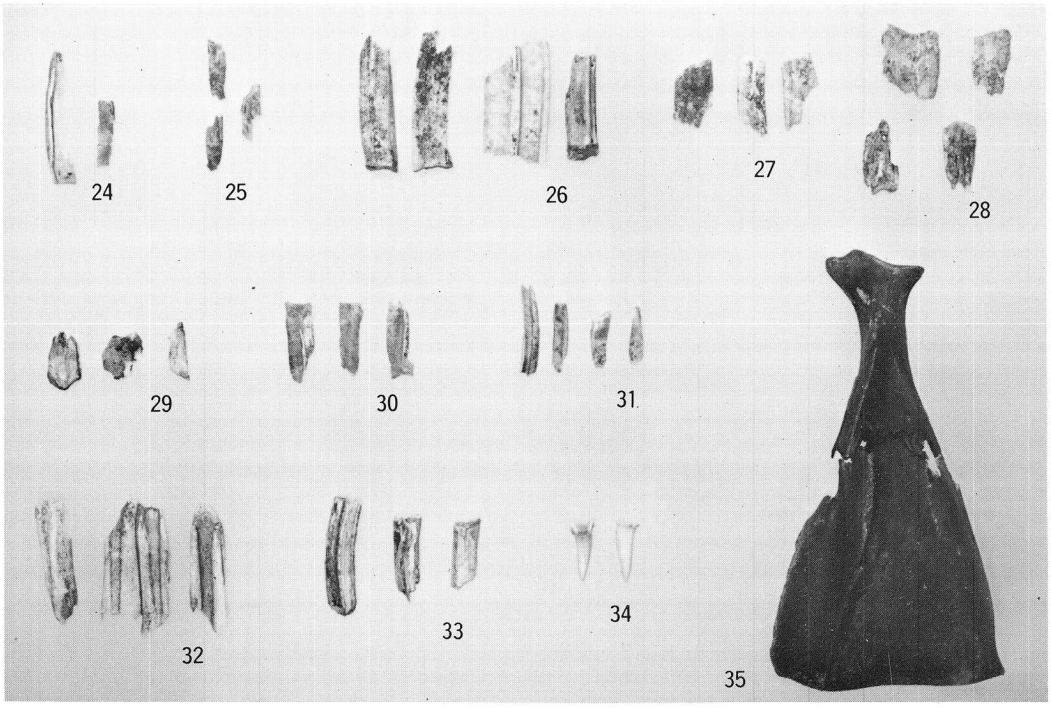

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

写真２　No11～35